財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第542集

笠　松　遺　跡
天良七堂遺跡
上　根　遺　跡

（主）太田大間々線関連事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

群馬県太田土木事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡
（主）太田大間々線関連事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
二〇一二
群馬県太田土木事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

笠　松　遺　跡
天良七堂遺跡
上　根　遺　跡

（主）太田大間々線関連事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

群馬県太田土木事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

主要地方道太田大間々線バイパスは、市街地及び周辺地域における交通渋滞の緩和を目的に計画され、太田市から桐生市大間々町を結ぶバイパス道路として建設工事が進められています。

太田市では、これまでに数多くの埋蔵文化財の発掘調査によって、重要な発見が相次いでおります。そのなかでも天良七堂遺跡は「上野国新田郡庁跡」として国指定史跡とされ、継続的な発掘調査の成果が公表されることで、古代史を中心とした太田市周辺の歴史的重要性が大きく解明されつつあります。

主要地方道太田大間々線バイパス地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、平成21年度から平成23年度にわたり継続的に実施され、予想にたがわぬ重要な発見がありました。

とりわけ新田郡庁に関わる施設と考えられる大型掘立柱建物や区画溝などは、郡庁の周辺を含む全体像復元に欠かせない歴史的証拠を提示できたと考えています。

発掘調査から本書の刊行に至るまでに、群馬県太田土木事務所、群馬県教育委員会、太田市教育委員会、太田市史跡上野国新田郡庁跡調査・整備専門委員会および地元の関係者の皆様には、多大なるご指導とご協力を賜りました。ここに心より感謝を申し上げるとともに、本書が地域史解明の資料として、また郷土史を学ぶ教材として広く活用されることを願い、序といたします。

平成24年３月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理　事　長　　須　田　栄　一

例　言

1．本書は、平成20年度主要地方道太田大間々線バイパス地方道路交付金事業、平成21年度主要地方道太田大間々線地域活力基盤創造交付金事業及び平成23年度主要地方道太田大間々線鳥山工区社会資本総合整備(活力創出基盤整備)事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査による、笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡の発掘調査報告書である。

2．笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡は、群馬県太田市寺井町408-1、408-2、409、410、411、412、413、414-1、414-2、415、440、589-3番地、新田小金井町1107、1108-1、1108-5、1446-1、1450-1、1451-1、1452-1、1452-6、1453-1、1453-4、1453-5、1453-6、1454-1、1455-1、1457-1、1496-1、1497-1、1498-1、1499-1、1500-1、1501-1、1503-1、1520-1、1526-1、1528-1、1529-1、1530-1、1533-1、1534-1番地に所在する。

3．事業主体者は、群馬県東部県民局太田土木事務所である。

4．調査主体は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。

5．調査期間は以下のとおりである。

平成21年度調査
履行期間　平成21年４月１日～９月30日　調査期間　平成21年４月１日～７月31日　調査面積　9,126㎡
平成22年度調査
履行期間　平成22年７月１日～ 11月30日　調査期間　平成22年７月１日～９月30日　調査面積　4,023㎡
平成23年度調査
履行期間　平成23年10月１日～ 12月31日　調査期間　平成23年10月１日～ 10月31日　調査面積　1,181㎡

6．調査体制は以下のとおりである。

平成21年度　調査担当　巾隆之(専門員(主任))　長谷川博幸(調査研究員)
遺跡掘削請負工事　須賀工業株式会社　地上測量及び空中写真撮影　株式会社シン技術コンサル
平成22年度　調査担当　井川達雄(上席専門員)　長谷川博幸(調査研究員)(平成22年７月１日～８月31日)
遺跡掘削請負工事　須賀工業株式会社　地上測量及び空中写真撮影　株式会社シン技術コンサル
平成23年度　調査担当　関晴彦(上席専門員)
遺跡掘削請負工事　株式会社シン技術コンサル　地上測量　アコン測量設計株式会社

7．整理事業の期間・体制は次のとおりである。

履行期間　平成23年９月１日～平成24年３月31日　整理期間　平成23年９月１日～平成24年３月31日
整理担当　長谷川博幸(調査研究員)

8．本書作成関係者

編集　長谷川博幸
本文執筆　宮下寛(主任調査研究員)　長谷川博幸(調査研究員)　第６章１節は神谷佳明が執筆した。
デジタル編集　齊田智彦(主任調査研究員)　遺構写真　発掘調査担当者　遺物写真　佐藤元彦(補佐(総括))
保存処理　関邦一(補佐)
遺物観察・観察表執筆
縄文土器　橋本淳(主任調査研究員)　縄文時代の石器とその他石製品　岩崎泰一(上席専門員)
土師器、須恵器、金属製品　神谷佳明(上席専門員)　陶磁器　大西雅広(上席専門員)

9．発掘調査および報告書の作成にあたり群馬県東部県民局太田土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、群馬県太田市教育委員会、太田市史跡上野国新田郡庁跡調査・整備専門委員会のご指導とご助言を得た。

10．発掘調査の記録資料と出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

凡　例

1．本文中に使用した方位は、総て世界測地系国家座標(国家座標第Ⅸ系)を用いた。調査区はＸ=36065 ～ 36450、 Ｙ=－44895 ～－45420の範囲に収まり、真北との偏差は、遺跡南東隅部で0°　17′ 46.31″である。遺構図中に表記した座標値は国家座標値の下３桁のみを表記した。

2．遺構平面図や遺構断面図に示した数値は標高であり、単位はメートルである。

3．遺構平面図、遺物実測図の縮尺は各図にそれぞれ示した。遺物写真の縮率は原則1/3とし、それ以外のものは明記した。

4．平成21年度笠松遺跡調査は､調査区を便宜上Ａ区からＦ区と区割りし行った。整理作業において､新田町(現太田市)遺跡分布地図では、Ａ区からＤ区までが天良七堂遺跡、Ｅ区、Ｆ区が笠松遺跡となることが判明した。本報告書では、それを受け、笠松遺跡Ａ区からＤ区を天良七堂遺跡１区から４区、笠松遺跡Ｅ区からＦ区を笠松遺跡１区から２区と変更した。

5．本書の図版に使用したスクリーントーンは、次のことを示す。

遺構図

撹乱　　灰面　　礫層範囲

遺物図

自然釉　　粘土　　羽口滓化

6．遺構の主軸方位･走向は、平面プランの中央を主軸とした。表記は北を基準とし、東に傾いた場合Ｎ-○°-Ｅとした。遺構の面積は上端を計測し、計測はプラニメーターで３回行いその平均値を採用した。土坑・ピット計測表の計測値はｍ単位で表した。(　)は残存値を表した。

7．掘立柱建物の柱間寸法は、柱筋に沿った柱穴心々間をメートル法計測した。

8．遺構土層注記および土器・陶磁器類の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』2005年度版を用いた。

9．遺物観察表の(　)は残存値であり、口径・底径・高さ・長さ・幅・厚さについて小数第１位までを㎝単位で、重量は電磁式はかり等を使用してｇ単位で記した。陶磁器の色調は、割れ口により判断した。

10．本書で掲載した土器(土師器・須恵器)の遺物観察表での表現は以下のとおりである。

土師器及び須恵器観察表の胎土・焼成・色調の項目のうち細砂粒と粗砂粒は径２㎜ほどで区別した。

成・整形の特徴の項目にあるハケ目(本数)は１㎝当たりの数であり埴輪は２㎝である。

計測値について口:口径、底：底径、高：器高、台：高台径、摘：摘み径を示す。

非掲載遺物の記載で｢大破片｣は大型器種の破片、｢小破片｣は小型器種の破片を示している。

11．本書で掲載した石器・石製品の図版上での表現は以下のとおりである。

石斧刃部側の摩耗痕については縦位定規線で､着柄部と想定される部分の摩耗痕については横位定規線で図示した。

磨石等礫石器類に用いた縦位・横位定規線は摩耗範囲を示し、その他の斜位定規線は線条痕の走行を示す。

石皿については、使用部の摩耗および再生状態(再敲打)を表現するため、必要に応じて拓本を使用した。

台石については、打痕・摩耗痕を含む礫面の状態を表現するため、必要に応じて拓本を使用した。

12．本書で使用した降下テフラ等の呼称については、以下のように表記した。

浅間Ａ軽石(天明３(1783)年降下)：As-A　　浅間Ｂ軽石(天仁元(1108)年降下)：As-B

榛名二ッ岳渋川テフラ(６世紀初頭降下)：Hr-FA

13．本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。

国土地理院　地勢図1:200,000「宇都宮」(平成18年４月１日発行)

国土地理院　地形図1:25,000「上野境」(平成22年12月１日発行)

群馬県　地形分類図1:50,000「深谷」(平成３年)

太田市　1:2,500地形図(平成18年８月測図)

目　次

序
例言
凡例
挿図目次
表目次
写真図版目次

第１章　調査に至る経緯と経過……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の経過……2
　第３節　整理作業の経過……3
　第４節　調査の方法……3
　　1　調査区の設定……3
　　2　調査の方法……3
　第５節　基本土層……6
第２章　地理的および歴史的環境……7
　第１節　遺跡の位置と周辺の地形……7
　第２節　周辺の遺跡……8
第３章　笠松遺跡……13
　第１節　笠松遺跡の概要……13
　第２節　１区の調査成果……13
　　1　古墳時代以降の遺構と遺物……13
　　（1）竪穴住居……13
　　（2）掘立柱建物……19
　　（3）柵列……35
　　（4）基壇状遺構……36
　　（5）土坑・ピット……38
　　（6）粘土採掘坑……48
　　（7）井戸……52
　　（8）溝……53
　　2　遺構外の遺物……62
　第３節　２区の調査成果……63
　　1　奈良・平安時代以降の遺構と遺物……63
　　（1）土坑・ピット……63
　　（2）溝……64
　　2　遺構外の遺物……65
第４章　天良七堂遺跡……68
　第１節　天良七堂遺跡の概要……68
　第２節　１区の調査成果……68
　　1　縄文時代の遺構と遺物……68
　　（1）竪穴住居……70
　　（2）土坑・ピット……70
　　2　古墳時代以降の遺構と遺物……72
　　（1）竪穴住居……72
　　（2）竪穴状遺構……94
　　（3）掘立柱建物……96
　　（4）柵列……101
　　（5）土坑・ピット……103
　　（6）溝……108
　　（7）鍛冶遺構……112
　　3　遺構外の遺物……113
　第３節　２区の調査成果……114
　　1　古墳時代以降の遺構と遺物……114
　　（1）竪穴住居……114
　　（2）掘立柱建物……116
　　（3）土坑・ピット……116
　　（4）溝・谷地……117
　　2　遺構外の遺物……122
　第４節　３区の調査成果……123
　　1　古墳時代以降の遺構と遺物……123
　　（1）竪穴住居……123
　　（2）掘立柱建物……125
　　（3）土坑・ピット……127
　　（4）井戸……132
　　（5）溝・谷地……132
　　2　遺構外の遺物……142
　第５節　４区の調査成果……143
　　1　古墳時代以降の遺構と遺物……143
　　（1）土坑・ピット……143
　　（2）溝……146

2　遺構外の遺物 151
第5章　上根遺跡 154
第1節　上根遺跡の概要 154
第2節　1区の調査成果 154
1　古代以降の遺構と遺物 154
(1)溝 154
2　遺構外の遺物 157
第3節　2区の調査成果 157
1　古代以降の遺構と遺物 157
(1)竪穴状遺構 157
(2)土坑・ピット 158
(3)溝 160
2　遺構外の遺物 164
第4節　3区の調査成果 164
1　縄文時代の遺構と遺物 164
(1)土坑 164
2　古墳時代以降の遺構と遺物 164
(1)竪穴住居 166
(2)掘立柱建物・橋 169
(3)土坑・ピット 170
(4)井戸 170
(5)溝 171
3　遺構外の遺物 177
第5節　4区の調査成果 177
1　縄文時代の遺構と遺物 177
(1)土坑 178
2　古墳時代以降の遺構と遺物 178
(1)竪穴住居 178
(2)土坑・ピット 182
3　遺構外の遺物 189
第6節　5区の調査成果 190
1　古墳時代以降の遺構と遺物 190
(1)竪穴住居 190
(2)掘立柱建物 192
(3)土坑・ピット 192
(4)井戸 195
(5)溝・谷地 195
2　遺構外の遺物 197
第7節　6区の調査成果 199
1　中近世の遺構と遺物 199
(1)土坑・ピット 199
(2)溝 199
2　遺構外の遺物 200
第6章　発掘調査の成果とまとめ 202
第1節　天良七堂・笠松遺跡出土の酸化焔焼成による須恵器について 202
第2節　笠松遺跡、天良七堂遺跡、上根遺跡における発掘調査の成果と課題 209
出土遺物観察表 215
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡　遺跡位置図（国土地理院１：200,000　地勢図「宇都宮」）……1
第２図　笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡　遺跡位置図「この地図の作成にあたっては、太田市長の了承を得て、同市発行の2,500分の1の地形図を使用し複製したものである。」……4
第３図　笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡　基本土層……6
第４図　笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡　周辺の地形区分図（能登編図1981『アーバンクボタ』19より作成）……7
第５図　笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡　周辺の遺跡（１：25,000）10
第６図　笠松遺跡　１区北側全体図……14
第７図　笠松遺跡　１区南側全体図……15
第８図　１区１号竪穴住居と出土遺物……16
第９図　１区２号竪穴住居……17
第10図　１区４号竪穴住居と出土遺物……18
第11図　１区１号掘立柱建物……22
第12図　１区１号掘立柱建物土層断面図と出土遺物……23
第13図　１区２号掘立柱建物……24
第14図　１区３号掘立柱建物……24
第15図　１区４号掘立柱建物……25
第16図　１区５号掘立柱建物……26
第17図　１区６号掘立柱建物……27
第18図　１区７号掘立柱建物……28
第19図　１区８号掘立柱建物……29
第20図　１区８号掘立柱建物土層断面図……30
第21図　１区９号掘立柱建物……30
第22図　１区９号掘立柱建物土層断面図……31
第23図　１区11号掘立柱建物……32
第24図　１区12号掘立柱建物……33
第25図　１区14号掘立柱建物……34
第26図　１区15号掘立柱建物……34
第27図　１区15号掘立柱建物柱穴土層断面図……35
第28図　１区１号柵列……35
第29図　１区３号柵列……36
第30図　１区１号基壇状遺構掘り方と断面図……37
第31図　１区２・３・４・８号土坑……42
第32図　１区９・11・12・13・15・18・21号土坑……43
第33図　１区23号土坑と８・11・13号土坑の出土遺物、１・２・３・27・33・56・69・77・78・80・81・97号ピット……44
第34図　１区98・99・111・112・133・134・154・160・165・167・168・173・174・212～215・218・225号ピット……45
第35図　１区219・220・221・223・231・233・236・240～244・247・250号ピット……46
第36図　１区251・260～264号ピットと154号ピットの出土遺物……47
第37図　１区１号粘土採掘坑と出土遺物……49
第38図　１区２・３号粘土採掘坑と２号粘土採掘坑の出土遺物……50
第39図　１区３号粘土採掘坑の出土遺物と４号粘土採掘坑……51
第40図　１区５号粘土採掘坑……52
第41図　１区１号井戸と出土遺物……52
第42図　１区１・９号溝……55
第43図　１区１・６号溝……56
第44図　１区２～５号溝……57
第45図　１区７・８・10号溝……58
第46図　１区10号溝の断面図と11号溝……59
第47図　１区12～15号溝……60
第48図　１区１～４・10号溝の出土遺物……61
第49図　１区10号溝の出土遺物……62
第50図　１区遺構外の出土遺物……62
第51図　笠松遺跡　２区全体図……63
第52図　２区１・５・６号土坑と１・３・４号ピット……64
第53図　２区１・２・３号溝と１号溝の出土遺物……65
第54図　１区７号竪穴住居……68
第55図　１区７号竪穴住居の出土遺物……68
第56図　天良七堂遺跡　１区全体図……69
第57図　１区１・11・18・19号土坑……70
第58図　１区20・24号土坑、80・92・94・115・117号ピットと11・19号土坑、80号ピットの出土遺物……71
第59図　１区１号竪穴住居の出土遺物……72
第60図　１区１号竪穴住居……73
第61図　１区１号竪穴住居掘り方……74
第62図　１区２号竪穴住居……75
第63図　１区２号竪穴住居の出土遺物……76
第64図　１区３号竪穴住居……77
第65図　１区３号竪穴住居の出土遺物……78
第66図　１区４号竪穴住居……79
第67図　１区４号竪穴住居掘り方と出土遺物……80
第68図　１区５号竪穴住居……81
第69図　１区５号竪穴住居竈と出土遺物……82
第70図　１区６号竪穴住居……83
第71図　１区８号竪穴住居……84
第72図　１区８号竪穴住居竈と出土遺物……85
第73図　１区９号竪穴住居……86
第74図　１区９号竪穴住居掘り方と出土遺物……87
第75図　１区10・11号竪穴住居……88
第76図　１区10・11号竪穴住居と10号竪穴住居の出土遺物……89
第77図　１区11号竪穴住居と出土遺物……90
第78図　１区12号竪穴住居……91
第79図　１区12号竪穴住居掘り方と出土遺物……92
第80図　１区13号竪穴住居と出土遺物……93
第81図　１区１号竪穴状遺構と出土遺物……94
第82図　１区２号竪穴状遺構……94
第83図　１区２号竪穴状遺構と出土遺物……95
第84図　１区３号竪穴状遺構……95
第85図　１区３号竪穴状遺構の出土遺物……96
第86図　１区１号掘立柱建物と出土遺物……97
第87図　１区２号掘立柱建物……98
第88図　１区３号掘立柱建物……99
第89図　１区４号掘立柱建物……100
第90図　１区５号掘立柱建物……101
第91図　１区１号柵列……102
第92図　１区２・３号柵列……104
第93図　１区３・４・６～９・29・31号土坑と３・７・29号土坑の出土遺物……105
第94図　１区１・６・10・20・32・33・34・39・43・57・64・68・83・107・108・110号ピット……107
第95図　１区111・127号ピットと110号ピットの出土遺物……108
第96図　１区１・２・７号溝……109
第97図　１区３・４号溝……110
第98図　１区５・６・８号溝と５・６号溝の出土遺物……111
第99図　１区９号溝……112
第100図　１区１号鍛冶遺構……112
第101図　１区１号鍛冶遺構の出土遺物……112
第102図　１区遺構外の出土遺物……113
第103図　天良七堂遺跡　２区全体図……114
第104図　２区１号竪穴住居と出土遺物……115
第105図　２区１号掘立柱建物……115
第106図　２区１～４号土坑……116
第107図　２区１・３・４・６・８・10・11号ピット……117
第108図　２区１・２号溝と１号溝の出土遺物……118
第109図　２区３～９号溝……119
第110図　２区10・11・12号溝……120
第111図　２区１号谷地……121
第112図　２区遺構外の出土遺物……122
第113図　天良七堂遺跡　３区全体図……123
第114図　３区１号竪穴住居と出土遺物……124

第115図　３区２号竪穴住居……………………………………………125
第116図　３区３号竪穴住居と出土遺物………………………………126
第117図　３区４号竪穴住居……………………………………………126
第118図　３区４号竪穴住居と出土遺物………………………………127
第119図　３区１号掘立柱建物…………………………………………128
第120図　３区４〜７号土坑……………………………………………129
第121図　３区８・９・12〜15・22・24号土坑と７・９号土坑の出土遺物
……………………………………………………………………………130
第122図　３区８・26〜29・31・33・34号ピット……………………131
第123図　３区36号ピットと31号ピットの出土遺物…………………132
第124図　３区１号井戸と出土遺物……………………………………132
第125図　３区１・14・15号溝と１号溝の出土遺物…………………133
第126図　３区２・３・24号溝…………………………………………134
第127図　３区２号溝の出土遺物………………………………………135
第128図　３区８・10号溝の出土遺物…………………………………136
第129図　３区４〜13号溝………………………………………………137
第130図　３区16号溝……………………………………………………138
第131図　３区16号溝の出土遺物………………………………………139
第132図　３区17・18号溝と17号溝の出土遺物………………………140
第133図　３区19〜22号溝………………………………………………141
第134図　３区23号溝と１号谷地………………………………………142
第135図　３区遺構外の出土遺物………………………………………143
第136図　天良七堂遺跡　４区全体図…………………………………143
第137図　４区１・４・５・７号土坑…………………………………144
第138図　４区９・10・12号土坑………………………………………145
第139図　４区10・20・23・24・27・29・30・35・36・43・44・65号ピット…146
第140図　４区24号ピットの出土遺物…………………………………146
第141図　４区１・２・３号溝…………………………………………147
第142図　４区４・８号溝………………………………………………148
第143図　４区４・８号溝の出土遺物…………………………………149
第144図　４区５・７号溝………………………………………………149
第145図　４区６号溝と出土遺物………………………………………150
第146図　４区９・10号溝………………………………………………150
第147図　４区11号溝……………………………………………………151
第148図　４区遺構外の出土遺物………………………………………151
第149図　上根遺跡　１区全体図………………………………………154
第150図　１区１号溝……………………………………………………155
第151図　１区２〜５号溝と５号溝の出土遺物………………………156
第152図　１区６号溝と出土遺物………………………………………157
第153図　１区遺構外の出土遺物………………………………………157
第154図　上根遺跡　２区全体図………………………………………158
第155図　２区１〜４号竪穴状遺構と１・３号竪穴状遺構の出土遺物…159
第156図　２区１・２号土坑……………………………………………159
第157図　２区１・２号土坑の出土遺物………………………………160
第158図　２区１・２号溝と１号溝の出土遺物………………………161
第159図　２区１・２号溝の出土遺物…………………………………162
第160図　２区３号溝と出土遺物………………………………………162
第161図　２区４号溝と出土遺物………………………………………163
第162図　２区５号溝……………………………………………………164
第163図　２区遺構外の出土遺物………………………………………164
第164図　上根遺跡　３区全体図………………………………………165
第165図　３区６・７号土坑と出土遺物………………………………165
第166図　３区１号竪穴住居……………………………………………167
第167図　３区１号竪穴住居と出土遺物………………………………168
第168図　３区２号竪穴住居……………………………………………168
第169図　３区３号竪穴住居と出土遺物………………………………169
第170図　３区１号掘立柱建物…………………………………………170
第171図　３区１号橋……………………………………………………170
第172図　３区１〜５号土坑……………………………………………171
第173図　３区１号井戸…………………………………………………171
第174図　３区１号溝……………………………………………………172
第175図　３区２・３・４・８号溝と２・３号溝の出土遺物………174
第176図　３区５・６・７号溝と出土遺物……………………………175
第177図　３区９〜12号溝と10号溝の出土遺物………………………176
第178図　３区遺構外の出土遺物………………………………………177
第179図　上根遺跡　４区全体図………………………………………177
第180図　４区３・４号土坑と出土遺物………………………………178
第181図　４区１号竪穴住居と出土遺物………………………………179
第182図　４区２号竪穴住居……………………………………………180
第183図　４区２号竪穴住居の出土遺物………………………………181
第184図　４区３号竪穴住居……………………………………………181
第185図　４区４・５号竪穴住居………………………………………183
第186図　４区４号竪穴住居竈と４・５号竪穴住居掘り方ないし構築以前
の土坑群遺物出土状況……………………………………………184
第187図　４区４号竪穴住居の出土遺物(１)…………………………185
第188図　４区４号竪穴住居の出土遺物(２)…………………………186
第189図　４区４・５号竪穴住居の出土遺物と４・５号竪穴住居掘り方な
いし構築以前の土坑群……………………………………………187
第190図　４区１号土坑と出土遺物……………………………………188
第191図　４区２号土坑と出土遺物……………………………………188
第192図　４区15・17号ピットと15号ピットの出土遺物……………189
第193図　４区遺構外の出土遺物(１)…………………………………189
第194図　４区遺構外の出土遺物(２)…………………………………190
第195図　上根遺跡　５・６区全体図…………………………………191
第196図　５区１号竪穴住居と出土遺物………………………………191
第197図　５区１号掘立柱建物…………………………………………192
第198図　５区２・３・５号土坑………………………………………193
第199図　５区６〜10・12・13・14・15・21号土坑・30・39号ピットと
15号土坑の出土遺物………………………………………………194
第200図　５区１・２号井戸と２号井戸の出土遺物…………………195
第201図　５区２・３・４号溝…………………………………………196
第202図　５区３・４号溝の出土遺物…………………………………197
第203図　５区遺構外の出土遺物(１)…………………………………198
第204図　５区遺構外の出土遺物(２)…………………………………199
第205図　６区１・２・３号土坑………………………………………200
第206図　６区１号溝……………………………………………………200
第207図　天良七堂・笠松遺跡出土の酸化焔焼成による須恵器(S=1/3)
……………………………………………………………………………203
第208図　群馬県内での酸化焔焼成による須恵器出土例その１(S=1/3)
……………………………………………………………………………206
第209図　群馬県内での酸化焔焼成による須恵器出土例その２(S=1/3)
……………………………………………………………………………207
第210図　群馬県内での酸化焔焼成による須恵器出土例その３(S=1/3)
……………………………………………………………………………208
第211図　笠松遺跡及び周辺遺跡位置図「この地図の作成にあたっては、太田市長の了承を得て、同市発行の2,500分の1の地形図を使用し複製したものである。」……210
第212図　笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡及び周辺遺跡位置図「この地図の作成にあたっては、太田市長の了承を得て、同市発行の2,500分の1の地形図を使用し複製したものである。」……212

表　目　次

第１表　遺跡名、遺構名、遺構番号変更一覧表 ……… 5
第２表　笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡周辺遺跡一覧表 ……… 11
第３表　笠松遺跡１区１Ａ号掘立柱建物計測表 ……… 23
第４表　笠松遺跡１区１Ｂ号掘立柱建物計測表 ……… 23
第５表　笠松遺跡１区２号掘立柱建物計測表 ……… 24
第６表　笠松遺跡１区３号掘立柱建物計測表 ……… 25
第７表　笠松遺跡１区４号掘立柱建物計測表 ……… 25
第８表　笠松遺跡１区５号掘立柱建物計測表 ……… 26
第９表　笠松遺跡１区６号掘立柱建物計測表 ……… 27
第10表　笠松遺跡１区７号掘立柱建物計測表 ……… 28
第11表　笠松遺跡１区８号掘立柱建物計測表 ……… 30
第12表　笠松遺跡１区９号掘立柱建物計測表 ……… 31
第13表　笠松遺跡１区11号掘立柱建物計測表 ……… 32
第14表　笠松遺跡１区12号掘立柱建物計測表 ……… 33
第15表　笠松遺跡１区14号掘立柱建物計測表 ……… 34
第16表　笠松遺跡１区15号掘立柱建物計測表 ……… 35
第17表　笠松遺跡１区１号柵列計測表 ……… 35
第18表　笠松遺跡１区３号柵列計測表 ……… 36
第19表　笠松遺跡土坑・ピット計測表 ……… 66
第20表　天良七堂遺跡１区１号掘立柱建物計測表 ……… 97
第21表　天良七堂遺跡１区２号掘立柱建物計測表 ……… 98
第22表　天良七堂遺跡１区３号掘立柱建物計測表 ……… 99
第23表　天良七堂遺跡１区４号掘立柱建物計測表 ……… 100
第24表　天良七堂遺跡１区５号掘立柱建物計測表 ……… 101
第25表　天良七堂遺跡１区1号柵列計測表 ……… 102
第26表　天良七堂遺跡１区２号柵列計測表 ……… 104
第27表　天良七堂遺跡１区３号柵列計測表 ……… 104
第28表　天良七堂遺跡２区１号掘立柱建物計測表 ……… 115
第29表　天良七堂遺跡３区１号掘立柱建物計測表 ……… 128
第30表　天良七堂遺跡土坑・ピット計測表 ……… 152
第31表　上根遺跡３区１号掘立柱建物計測表 ……… 170
第32表　上根遺跡３区１号橋計測表 ……… 170
第33表　上根遺跡５区１号掘立柱建物計測表 ……… 192
第34表　上根遺跡土坑・ピット計測表 ……… 201
第35表　酸化焔焼成による須恵器の出土遺構と年代 ……… 202
第36表　笠松遺跡出土遺物観察表 ……… 215
第37表　天良七堂遺跡出土遺物観察表 ……… 215
第38表　上根遺跡出土遺物観察表 ……… 218

写 真 図 版 目 次

PL. 1	1	１区北側全景(南西から)
笠松遺跡	2	１区南側全景(東から)
PL. 2	1	１区１号竪穴住居全景(西から)
笠松遺跡	2	１区１号竪穴住居遺物出土状態(南から)
	3	１区１号竪穴住居貯蔵穴遺物出土状態(西から)
	4	１区１号竪穴住居掘り方全景(南西から)
	5	２号竪穴住居全景(南から)
	6	２号竪穴住居掘り方全景(南から)
	7	４号竪穴住居遺物出土状態(西から)
	8	４号竪穴住居竈遺物出土状態(西から)
PL. 3	1	１区１号掘立柱建物全景(西から)
笠松遺跡	2	１区１号掘立柱建物柱穴検出状況(南から)
	3	１区２・３号掘立柱建物全景(西から)
	4	１区３号掘立柱建物全景(東から)
	5	１区４号掘立柱建物全景(北から)
PL. 4	1	１区５号掘立柱建物全景(北から)
笠松遺跡	2	１区６号掘立柱建物全景(西から)
	3	１区７号掘立柱建物全景(西から)
	4	１区８・９号掘立柱建物と１号柵列全景(南から)
	5	１区11号掘立柱建物全景(南から)
	6	１区12号掘立柱建物と１号基壇状遺構全景(東から)
	7	１区１号柵列全景(南から)
	8	１区１号基壇状遺構全景(南から)
PL. 5	1	１区１号基壇状遺構掘り方全景(南から)
笠松遺跡	2	１区11号土坑全景(西から)
	3	１区12号土坑全景(東から)
	4	１区18号土坑全景(東から)
	5	１区154号ピット遺物出土状態(南から)
	6	１区１号粘土採掘坑全景(西から)
	7	１区１号粘土採掘坑遺物出土状態(東から)
	8	１区１号粘土採掘坑遺物出土状態(南から)
	9	１区２号粘土採掘坑全景(東から)
	10	１区３号粘土採掘坑全景(南から)
	11	１区３・５号粘土採掘坑全景(北から)
	12	１区４号粘土採掘坑全景(西から)
	13	１区１号井戸全景(南東から)
	14	１区１号溝遺物出土状態(南東から)
	15	１区２号溝全景(南から)
PL. 6	1	１区２～５号溝全景(西から)
笠松遺跡	2	１区６号溝全景(北から)
	3	１区７号溝全景(北から)
	4	１区８号溝全景(南から)
	5	１区９号溝全景(南西から)
	6	１区10号溝遺物出土状態(西から)
	7	１区13・14・15号溝全景(西から)
	8	１区14号溝全景(西から)
	9	１区15号溝全景(北から)
	10	２区１号土坑全景(南から)
	11	２区５号土坑全景(南東から)
	12	２区６号土坑全景(西から)
	13	２区１号溝全景(北西から)
	14	２区１号溝全景(南から)
	15	２区２・３号溝全景(北から)
PL. 7	1	１区全景(南東から)
天良七堂遺跡	2	１区全景(東から)
PL. 8	1	１区７号竪穴住居全景(東から)
天良七堂遺跡	2	１区11号土坑遺物出土状態(西から)
	3	１区18号土坑全景(南から)
	4	１区19号土坑全景(西から)
	5	１区１号竪穴住居全景(西から)
	6	１区１号竪穴住居炉全景(南から)
	7	１区１号竪穴住居遺物貯蔵穴遺物出土状態(南から)
	8	１区１号竪穴住居掘り方全景(西から)
PL. 9	1	１区２号竪穴住居全景(北から)
天良七堂遺跡	2	１区２号竪穴住居炉全景(南から)
	3	１区２号竪穴住居掘り方全景(北から)
	4	１区３号竪穴住居全景(東から)
	5	１区３号竪穴住居貯蔵穴遺物出土状態(東から)
	6	１区４号竪穴住居全景(西から)
	7	１区４号竪穴住居炉断面(西から)
	8	１区４号竪穴住居ピット列全景(北から)
PL.10	1	１区４号竪穴住居掘り方全景(南から)
天良七堂遺跡	2	１区５号竪穴住居全景(北東から)
	3	１区５号竪穴住居竈全景(北東から)
	4	１区５号竪穴住居１号貯蔵穴全景(北西から)
	5	１区５号竪穴住居２号貯蔵穴全景(北西から)
	6	１区６号竪穴住居全景(北西から)
	7	１区８号竪穴住居掘り方全景(南から)
	8	１区８号竪穴住居竈全景(西から)
PL.11	1	１区８号竪穴住居１号床下土坑全景(西から)
天良七堂遺跡	2	１区９号竪穴住居全景(北西から)
	3	１区９号竪穴住居竈全景(西から)
	4	１区９号竪穴住居貯蔵穴全景(北西から)
	5	１区９号竪穴住居１号床下土坑全景(北西から)
	6	１区９号竪穴住居掘り方全景(北西から)
	7	１区10号竪穴住居全景(西から)
	8	１区10号竪穴住居竈全景(西から)
PL.12	1	１区10号竪穴住居竈掘り方全景(西から)
天良七堂遺跡	2	１区11号竪穴住居全景(北西から)
	3	１区11号竪穴住居竈全景(南西から)
	4	１区11号竪穴住居１号土坑全景(西から)
	5	１区11号竪穴住居掘り方掘削痕(西から)
	6	１区11号竪穴住居掘り方全景(西から)
	7	１区12号竪穴住居遺物出土状態(北から)
	8	１区12号竪穴住居１号土坑全景(南から)
PL.13	1	１区12号竪穴住居全景(西から)
天良七堂遺跡	2	１区13号竪穴住居竈全景(北から)
	3	１区１号掘立柱建物全景(南から)
	4	１区２号掘立柱建物全景(北から)
	5	１区３号掘立柱建物全景(北から)
	6	１区４号掘立柱建物全景(東から)
	7	１区１・２号柵列全景(西から)
	8	１区３号柵列全景(北から)

PL.14 天良七堂遺跡
1 １区１号竪穴状遺構遺物出土状態(南東から)
2 １区２号竪穴状遺構遺物出土状態(南から)
3 １区３号竪穴状遺構全景(南から)
4 １区３号土坑全景(南から)
5 １区９号土坑全景(西から)
6 １区80号ピット遺物出土状態(南から)
7 １区110号ピット遺物出土状態(北から)
8 １区１・２号溝全景(南から)
9 １区３号溝、1号掘立柱建物、1・2号柵列全景(西から)
10 １区４・５号溝全景(西から)
11 １区６号溝全景(南東から)
12 １区７号溝全景(南西から)
13 １区８号溝全景(南東から)
14 １区１号９号溝全景(北から)
15 １区１号鍛冶遺構遺物出土状態(南西から)

PL.15 天良七堂遺跡
1 ２区調査区西全景(東から)
2 ２区調査区東全景(西から)

PL.16 天良七堂遺跡
1 ２区１号竪穴住居遺物出土状態(北から)
2 ２区１号竪穴住居全景(東から)
3 ２区１号掘立柱建物全景(東から)
4 ２区１号土坑全景(南から)
5 ２区２号土坑全景(南から)
6 ２区３・４号溝全景(南から)
7 ２区９号溝全景(西から)
8 ２区調査区北側全景(北西から)

PL.17 天良七堂遺跡
1 ３区調査区全景(北西から)
2 ３区調査区全景(北から)右側のくぼ地は谷地

PL.18 天良七堂遺跡
1 ３区１・２号竪穴住居全景(北から)
2 ３区３号竪穴住居全景(北から)
3 ３区３号竪穴住居ピット検出状況(北から)
4 ３区４号竪穴住居全景(東から)
5 ３区１号掘立柱建物全景(南から)
6 ３区４号土坑全景(南西から)
7 ３区７号土坑全景(南から)
8 ３区９号土坑全景(西から)

PL.19 天良七堂遺跡
1 ３区14号土坑全景(北から)
2 ３区１号井戸全景(南東から)
3 ３区１号溝全景(南から)
4 ３区２号溝全景(北東から)
5 ３区３号溝全景(北から)
6 ３区４～８号溝全景(西から)
7 ３区８・９号溝全景(南東から)
8 ３区11・12・13号溝全景(南東から)
9 ３区14・15号溝全景(南から)
10 ３区16号溝遺物出土状態(東から)
11 ３区17号溝全景(南から)
12 ３区18号溝全景(東から)
13 ３区19号溝全景(南から)
14 ３区19 ～ 22号溝全景(南から)
15 ３区23号溝全景(東から)

PL.20 天良七堂遺跡
1 ４区調査区全景(南から)
2 ４区４・５・９号土坑全景(南から)
3 ４区７号土坑全景(南から)
4 ４区10号土坑全景(南東から)
5 ４区12号土坑全景(南から)

PL.21 天良七堂遺跡
1 ４区１・２・３号溝全景(南西から)
2 ４区４・５号溝全景(東から)
3 ４区４・５号溝全景(南から)
4 ４区４号溝堰状遺構出土状態(東から)
5 ４区４号溝堰状遺構出土状態(南から)
6 ４区６号溝全景(南西から)
7 ４区９・10号溝全景(南東から)
8 ４区11号溝全景(東から)

PL.22 上根遺跡
1 １区調査区全景(北西から)
2 1区１号溝全景(南から)
3 1区２号溝全景(西から)
4 1区３・４号溝全景(西から)
5 1区５号溝全景(南から)

PL.23 上根遺跡
1 ２区調査区全景(西から)
2 ２区１号竪穴状遺構全景(南から)
3 ２区２～４号竪穴状遺構全景(南から)
4 ２区１号土坑全景(北から)
5 ２区２号土坑全景(北から)
6 ２区１・２号溝全景(東から)
7 ２区３号溝全景(南から)
8 ２区４号溝全景(南から)
9 ２区５溝断面(西から)
10 ２区東壁断面(西から)
11 ３区６号土坑全景(北から)
12 ３区７号土坑全景(北から)

PL.24 上根遺跡
1 ３区１号竪穴住居全景遺物出土状態(北東から)
2 ３区１号竪穴住居炉全景(東から)
3 ３区１号竪穴住居貯蔵穴遺物出土状態(南東から)
4 ３区１号竪穴住居遺物出土状態(東から)
5 ３区１号竪穴住居掘り方全景(北東から)
6 ３区２号竪穴住居全景(北から)
7 ３区２号竪穴住居炉全景(東から)
8 ３区２号竪穴住居掘り方全景(北から)

PL.25 上根遺跡
1 ３区３号竪穴住居全景(南から)
2 ３区１号土坑全景(北から)
3 ３区１号井戸全景(北から)
4 ３区１～４・８号溝全景(東から)
5 ３区５号溝全景(南から)
6 ３区６・７・９号溝全景(北西から)
7 ３区７・９～ 11号溝全景(南から)
8 ３区12号溝全景(南から)

PL.26 上根遺跡
1 ４区４号土坑全景(東から)
2 ４区１号竪穴住居遺物出土状態(南から)
3 ４区１号竪穴住居全景(南から)
4 ４区１～３号竪穴住居遺物出土状態(南から)
5 ４区１号竪穴住居床下土坑断面(東から)
6 ４区１～３号竪穴住居掘り方全景(南から)
7 ４区２号竪穴住居遺物出土状態(南から)
8 ４区２号竪穴住居貯蔵穴全景(南から)

PL.27 上根遺跡
1 ４区２号竪穴住居掘り方全景(南から)
2 ４区３号竪穴住居遺物出土状態(南から)
3 ４区４号竪穴住居遺物出土状態(南から)
4 ４区４号竪穴住居竈遺物出土状態(南から)
5 ４区４号竪穴住居掘り方と遺物出土状態(南から)
6 ４区４号竪穴住居掘り方と遺物出土状態(南から)
7 ４区４号竪穴住居竈掘り方全景(南から)
8 ４区４号竪穴住居掘り方全景(南から)

PL.28 上根遺跡
1 ４区５号竪穴住居遺物出土状態(東から)
2 ４区５号竪穴住居と土坑群遺物出土状態(南から)
3 ４区５号竪穴住居と土坑群遺物出土状態(東から)
4 ４区５号竪穴住居と土坑群遺物出土状態(西から)
5 ４区１号土坑全景(南から)
6 ４区２号土坑全景(南から)
7 ４区旧石器時代調査坑断面(東から)
8 ４区調査区全景と旧石器時代の調査状況(東から)

PL.29 上根遺跡
1 ５区１号竪穴住居全景(南から)
2 ５区１号竪穴住居竈全景(北西から)
3 ５区１号竪穴住居竈掘り方全景(北西から)
4 ５区１号竪穴住居遺物出土状態(東から)
5 ５区１号掘立柱建物全景(東から)
6 ５区10号土坑全景(南から)
7 ５区12号土坑全景(北から)
8 ５区２号井戸全景(南西から)

PL.30 上根遺跡
1 ５区調査区全景・１号谷地全景(北西から)
2 ５区21号土坑遺物出土状態(北から)
3 ５区遺物出土状態(北から)
4 ５区３号溝全景(南から)
5 ５区３号溝北側全景(南から)
6 ５区３・４号溝全景(北から)
7 ６区調査区全景(南から)
8 ６区１・２・３号土坑と１号溝全景(西から)
9 ６区３号土坑全景(北西から)
10 ６区１号溝全景(南西から)
11 ５・６区調査区全景(北西から)
12 上根遺跡６区から北側の周辺風景(南から)

PL.31 笠松遺跡　１区1・4号竪穴住居、11号土坑、154号ピット、３号粘土採掘坑、１・10号溝、遺構外の出土遺物
PL.32 天良七堂遺跡　１区１・２・３号竪穴住居、11号土坑の出土遺物
PL.33 天良七堂遺跡　１区３・４・５号竪穴住居の出土遺物
PL.34 天良七堂遺跡　１区５・８・９・11・12・13号竪穴住居、１号竪穴遺構の出土遺物
PL.35 天良七堂遺跡　１区1・2・3号竪穴遺構、１号掘立柱建物、３・７号土坑、１号鍛冶遺構、遺構外の出土遺物
PL.36 天良七堂遺跡　３区31号ピット、１号井戸、1・8・16号溝、遺構外と４区４・６・８号溝、遺構外の出土遺物
PL.37 上根遺跡　１区５号溝、遺構外と２区１号竪穴状遺構、1・２号土坑、１号溝の出土遺物
PL.38 上根遺跡　２区2・4号溝、遺構外と３区１号竪穴住居、6・７号土坑の出土遺物
PL.39 上根遺跡　３区３号竪穴住居、６・10号溝、遺構外と４区１号竪穴住居、３・４号土坑の出土遺物
PL.40 上根遺跡　４区２・４号竪穴住居の出土遺物
PL.41 上根遺跡　４区４号竪穴住居の出土遺物
PL.42 上根遺跡　４区１号土坑、15号ピット、遺構外の出土遺物
PL.43 上根遺跡　４区遺構外と５区３・4号溝、遺構外の出土遺物
PL.44 上根遺跡　５区遺構外の出土遺物

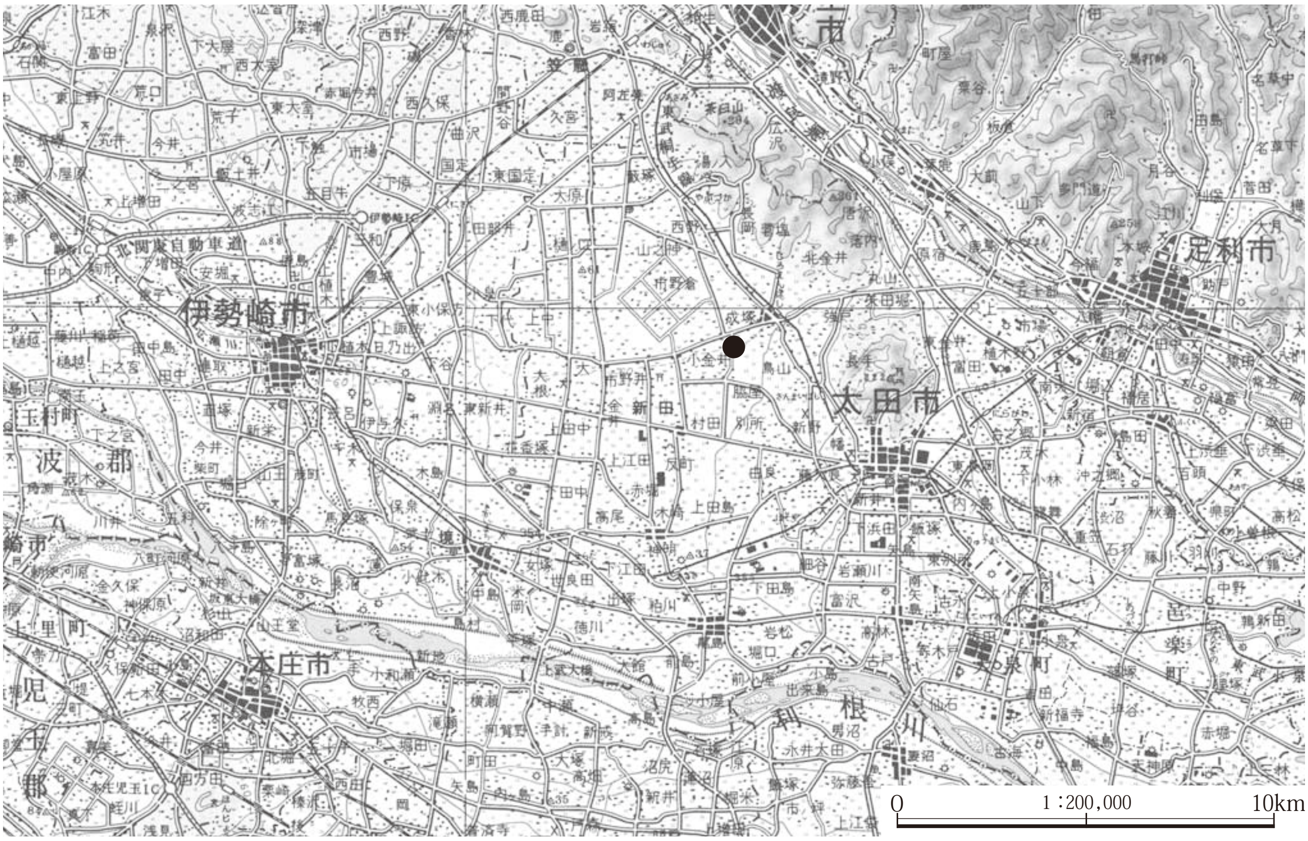
第1章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

太田大間々線バイパスは、太田市西部の交通渋滞を緩和するために太田市西本町と同市鳥山を結ぶ道路として計画された。

笠松遺跡、天良七堂遺跡は平成20年度主要地方道太田大間々線バイパス地方道路交付金事業に伴い、平成20年６月25日～ 27日に群馬県教育委員会文化財保護課により試掘確認調査が太田市新田小金井町地内で実施され古墳時代の竪穴住居、古代から近世の溝、土坑等が確認された。平成21年３月18日群馬県教育委員会文化財保護課の調整を経て、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下当事業団と略す）が発掘調査事業を受託することとなった。平成21年３月31日群馬県東部県民局太田土木事務所長と当事業団理事長との間で、平成20年度主要地方道太田大間々線バイパス地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査委託契約の締結が行われ、調査期間を平成21年４月１日～平成21年５月31日として調査が実施されることとなった。更に当初の調査対象地外に遺跡範囲が広がることが判明したため当初契約期間に発掘調査を終了することが困難となり平成21年５月26日に東部県民局太田土木事務所との協議を経て調査面積を4,904㎡増加し、調査期間を平成21年４月１日～平成21年７月31日に延長する変更契約を締結した。

上根遺跡は平成21年度主要地方道太田大間々線地域活力基盤創造交付金事業に伴い平成21年10月５日～７日、10月９日に群馬県教育委員会文化財保護課により試掘確認調査が太田市寺井町地内で実施された。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地である推定東山道駅路牛堀・矢ノ原ルートがあるとされ、試掘確認調査の結果、溝の可能性がある落ち込みが確認された。群馬県教育委員会文化財保護課の調整を経て平成21年度主要地方道太田大間々線地域活力基盤創造交付金事業に伴う発掘調査として当事業団が受託することとなり、平成22年３月31日付けで東部県民局太田土木事務所長との間で同事業委託契約が締



第１図　笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡　遺跡位置図（国土地理院１：200,000　地勢図「宇都宮」）

結された。

平成23年度の上根遺跡の発掘調査については、平成23年度主要地方道太田大間々線社会資本総合整備（活力創出基盤整備）事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査として群馬県教育委員会文化財保護課の調整を経て当事業団が受託することとなり、平成23年９月１日東部県民局太田土木事務所長と当事業団理事長との間で、平成23年度主要地方道太田大間々線社会資本総合整備（活力創出基盤整備）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査委託契約が締結された。調査期間は平成23年10月１日から平成23年10月31日である。

第２節　調査の経過

笠松遺跡、天良七堂遺跡は、平成20年度主要地方道太田大間々線バイパス地方道路交付金事業に伴い、平成21年４月１日から平成21年７月31日まで４ヵ月間の発掘調査が実施された。笠松遺跡、天良七堂遺跡の調査区総面積は9,126㎡である。調査対象地の東には国指定史跡「上野国新田郡庁跡」があり、北側には推定東山道下新田ルートがあるとされ、古代に関する遺構の検出が想定された。主要地方道足利・伊勢崎線に接する笠松遺跡からは掘立柱建物群、基壇状遺構、溝などの遺構群が確認され、平成21年７月23日の新聞報道において遺跡の内容や現地説明会の開催について紹介された。平成21年７月25日に東部県民局太田土木事務所、群馬県教育委員会、太田市教育委員会の協力により現地説明会を実施し、一般見学者180名が来場した。

上根遺跡は平成22年度及び平成23年度に発掘調査が行われた。平成22年度は、平成21年度主要地方道太田大間々線地域活力基盤創造交付金事業にとして、平成22年７月１日～平成22年９月30日までの３ヵ月間で発掘調査が実施された。平成23年度は、平成23年度主要地方道太田大間々線鳥山工区社会資本総合整備（活力創出基盤整備）事業にとして平成23年10月１日～平成23年10月31日の１ヵ月間で発掘調査が行われた。

旧石器時代の調査については、笠松遺跡１区に旧石器調査坑（２×４ｍ）を設定して確認調査を実施した。ローム漸移層以下の黄色粘質土層、淡黄色粘質土の上部ローム層を対象とした。約１ｍ下層の灰黄色粘質土下位から扇状地礫堆積層となる。天良七堂遺跡では１・４区に旧石器調査坑を設定し、黄褐色～灰黄褐色粘質土の上部ローム層以下、下層は褐灰色砂質土、シルト層であり最下部層から湧水があった。２・３区は大規模な谷地が検出され、掘削により著しい湧水が予測されるため実施していない。上根遺跡では、縄文時代の遺構、遺物が検出された３区において旧石器時代の調査を実施した。１・２区は低地となり基本土層Ⅶ層から湧水となるため下層に遺構がないと判断し調査していない。３区で灰黄色土から黒褐色砂層による上部ローム層となり下層に砂礫層が認められた。旧石器時代の調査では、いずれも当該時期の遺物は出土しなかった。旧石器時代の調査地点については第３図を参照されたい。

発掘調査日誌抄録

発掘調査日誌から主な記録を抜粋した。本節では第１表のとおり変更後の遺跡名及び調査区名で呼称している。

平成21年度（2009年）笠松遺跡・天良七堂遺跡

４．６　天良七堂遺跡１区表土掘削開始

４．21　天良七堂遺跡１区竪穴住居、溝、天良七堂遺跡２区溝調査、笠松遺跡２区表土掘削

４．24　天良七堂遺跡１区全景撮影、竪穴住居、溝、天良七堂遺跡２区溝、土坑調査、天良七堂遺跡４区遺構確認、笠松遺跡２区溝調査

５．７　天良七堂遺跡１区柵列調査、天良七堂遺跡４区遺構確認、笠松遺跡１区表土掘削

５．12　天良七堂遺跡１区竪穴住居、旧石器時代調査、天良七堂遺跡４区及び笠松遺跡１区遺構確認、笠松遺跡２区埋め戻し終了

５．28　笠松遺跡１区南側竪穴住居、土坑、溝調査、１区北側表土掘削、竪穴住居、掘立柱建物調査

６．３　天良七堂遺跡３区溝、井戸、笠松遺跡１区掘立柱建物調査、１区南側埋め戻し終了

６．４　笠松遺跡１区北側表土掘削開始

６．15　笠松遺跡１区１号掘立柱建物調査

６．23　天良七堂遺跡１区竪穴住居、天良七堂遺跡３区溝、笠松遺跡１区ピット、溝調査

６．26　天良七堂遺跡１区竪穴住居、太田市史跡上野国新田郡庁調査・整備専門委員20名来跡

７．６　天良七堂遺跡１・３区、笠松遺跡１区全景撮影

７．14　天良七堂遺跡１区竪穴住居、鍛冶遺構、掘立柱建物、天良七堂遺跡２区竪穴住居、溝調査、西側表土掘削終了、天良七堂遺跡３区埋め戻し終了、笠松遺跡１区基壇状遺構、竪穴状遺構調査
７．25　現地説明会10:00 ～ 15:00、来場者180名
７．31　天良七堂遺跡２区､笠松遺跡１区北側全景撮影、現場撤収作業
平成22年度(2010年)上根遺跡
７．８　重機による表土掘削
７．９　１・２区重機による表土掘削終了
７．23　１区第１面写真撮影
７．28　１区２面調査開始、２区溝調査、太田市史跡上野国新田郡庁調査・整備専門委員13名来跡
７．30　１区２面調査、２区溝調査、県文化財審議委員会４名ほか来跡
８．11　１・２区空中写真撮影、２区溝、土坑、竪穴状遺構調査
８．23　２区スロープ部分、溝調査、３区表土掘削開始、４区竪穴住居調査
９．13　３・４区空中写真撮影
９．30　３・４区埋め戻し終了
平成23年度(2011年)上根遺跡
10．４　重機による表土掘削開始
10．11　６区全景撮影、５区重機による掘削開始
10．13　５区溝、土坑調査
10．14　６区埋め戻し終了、５区表土掘削終了、土坑、掘立柱建物、溝調査
10．19　５区全景撮影、１号竪穴住居竈検出
10．21　５区測量終了、現場撤収作業
10．27　５区埋め戻し終了

第３節　整理作業の経過

笠松遺跡、天良七堂遺跡、上根遺跡の整理作業は、平成23年９月１日～平成24年３月31日に実施された。出土した土器・石器・金属製品・木製品などの遺物の接合・復元、保存処理を施し、遺物実測・観察記録、遺物写真撮影、報告書用原図作成などを行った。遺構図は修正、編集を行ったのち、デジタルデータへの変換とレイアウト作業を行った。遺構写真は報告書掲載写真の選別と写真図版レイアウトを作成し、デジタル図版を作成した。なお、整理業務を実施するにあたって、調査担当者及び各時代遺物の分類、記載について事業団職員の協力を得ている。整理作業終了により平成24年３月に報告書発行に至った。出土遺物、図面、写真等の記録資料は群馬県埋蔵文化財調査センターに収納した。なお、整理作業において遺跡名、調査区名、遺構番号等の変更が生じたので第１表に掲げてある。ただし、これに伴う遺物注記については書き換えを行っていない。

第４節　調査の方法

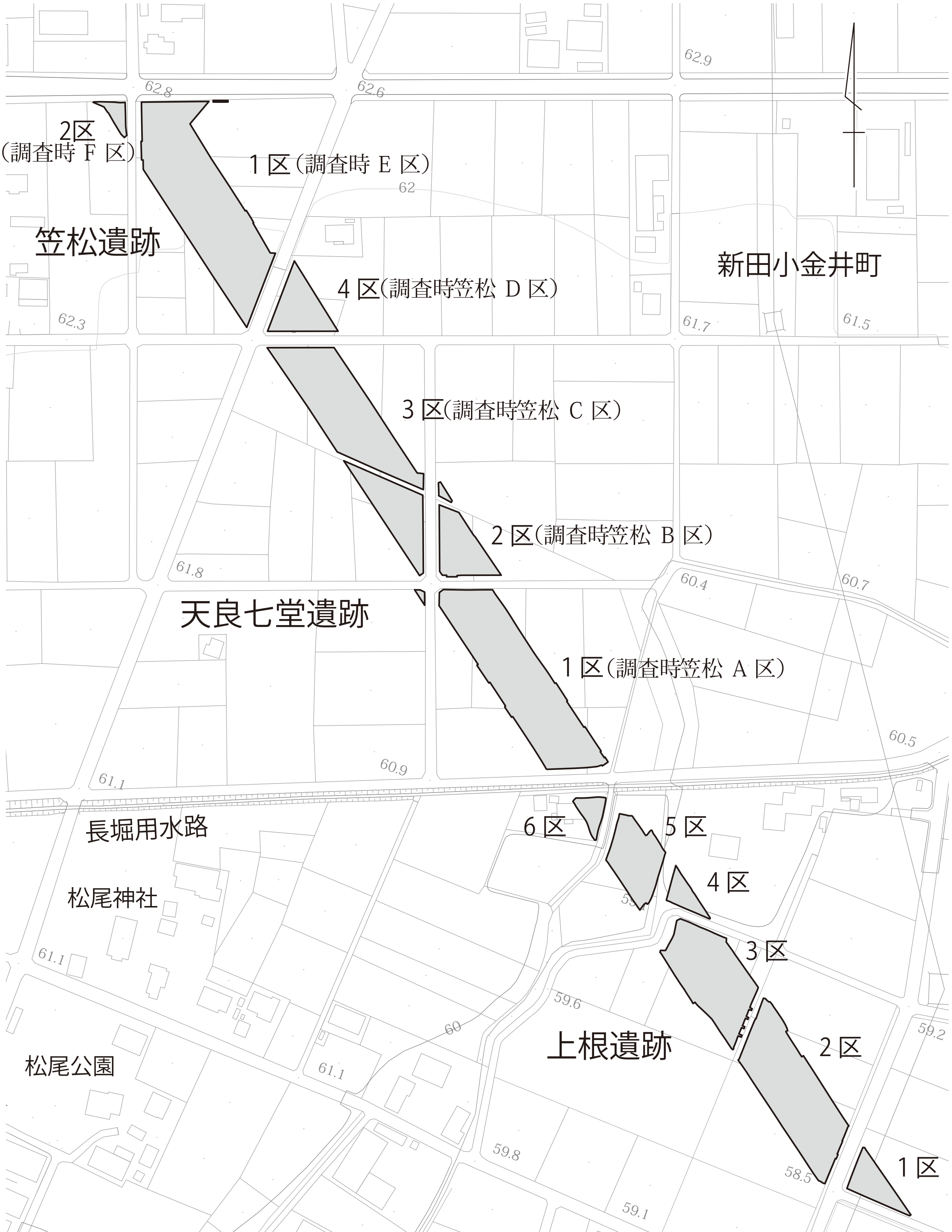
１　調査区の設定

笠松遺跡、天良七堂遺跡、上根遺跡の調査区の設定については、道路や用水路などを調査区境界として便宜的に分け、笠松遺跡及び天良七堂遺跡の発掘調査では笠松遺跡Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ区、上根遺跡は１・２・３・４・５・６区と呼称した。整理作業により笠松遺跡Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区を天良七堂遺跡１・２・３・４区に、笠松遺跡Ｅ・Ｆ区を笠松遺跡１・２区に遺跡名及び調査区名を変更した。平成21年度の笠松遺跡、天良七堂遺跡、平成22、23年度の上根遺跡における遺構測量については世界測地系国家座標第Ⅸ系を用いた。笠松遺跡及び天良七堂遺跡の基準点は国家座標第Ⅸ系Ｘ＝36,434.814、Ｙ＝－45,397.570であり、上根遺跡の基準点は、国家座標Ⅸ系Ｘ＝36,148.896、Ｙ＝－45,052.475である。

２　調査の方法

発掘調査では、細かく分割した調査区ごとに掘削重機などを使用した表土掘削、残土運搬、埋め戻しを行い、現場作業員の手作業によって遺構検出と精査を行った。低地にかかる上根遺跡では調査区に排水側溝を設けて発掘調査を行った。

出土遺物については、遺構地点別取り上げ及び調査区一括取り上げを適宜行った。笠松遺跡、天良七堂遺跡の出土遺物は、笠松遺跡Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ区と注記した。遺構断面測量は直実測を行い、遺構平面測量はデジタル平板測量による。遺構写真はデジタルカメラと６×７版モノクロカメラを併用し、発掘調査担当者が地上



第２図　笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡　遺跡位置図「この地図の作成にあたっては、太田市長の了承を得て、同市発行の2,500分の１の地形図を使用し複製したものである。」

第１表　遺跡名、遺構名、遺構番号変更一覧表

変更前	変更後
笠松遺跡A区	天良七堂遺跡1区
笠松遺跡B区	天良七堂遺跡2区
笠松遺跡C区	天良七堂遺跡3区
笠松遺跡D区	天良七堂遺跡4区
笠松遺跡E区	笠松遺跡1区
笠松遺跡F区	笠松遺跡2区
笠松遺跡E区南34号ピット	笠松遺跡1区14号掘立P2
笠松遺跡E区南96ピット	笠松遺跡1区15号掘立P5
笠松遺跡E区南100号ピット	笠松遺跡1区15号掘立P7
笠松遺跡E区南102号ピット	笠松遺跡1区15号掘立P6
笠松遺跡E区南106号ピット	笠松遺跡1区15号掘立P4
笠松遺跡E区南116号ピット	笠松遺跡1区14号掘立P3
笠松遺跡E区南118号ピット	笠松遺跡1区3号柵列P3
笠松遺跡E区南120号ピット	笠松遺跡1区15号掘立P1
笠松遺跡E区南122号ピット	笠松遺跡1区3号柵列P4
笠松遺跡E区南123号ピット	笠松遺跡1区15号掘立P3
笠松遺跡E区南127号ピット	笠松遺跡1区14号掘立P4・15号掘立P2
笠松遺跡E区南135号ピット	笠松遺跡1区3号柵列P2
笠松遺跡E区南138号ピット	笠松遺跡1区3号柵列P1
笠松遺跡E区南161号ピット	笠松遺跡1区14号掘立P1
笠松遺跡E区南166号ピット	笠松遺跡1区14号掘立P5
笠松遺跡E区北1号ピット	笠松遺跡1区172号ピット
笠松遺跡E区北2号ピット	笠松遺跡1区173号ピット
笠松遺跡E区北3号ピット	笠松遺跡1区174号ピット
笠松遺跡E区北4号ピット	笠松遺跡1区175号ピット
笠松遺跡E区北5号ピット	笠松遺跡1区176号ピット
笠松遺跡E区北6号ピット	笠松遺跡1区177号ピット
笠松遺跡E区北7号ピット	笠松遺跡1区178号ピット
笠松遺跡E区北8号ピット	笠松遺跡1区179号ピット
笠松遺跡E区北9号ピット	笠松遺跡1区180号ピット
笠松遺跡E区北10号ピット	笠松遺跡1区181号ピット
笠松遺跡E区北11号ピット	笠松遺跡1区182号ピット
笠松遺跡E区北12号ピット	笠松遺跡1区183号ピット
笠松遺跡E区北13号ピット	笠松遺跡1区6号掘立P7
笠松遺跡E区北14号ピット	笠松遺跡1区184号ピット
笠松遺跡E区北15号ピット	笠松遺跡1区185号ピット
笠松遺跡E区北16号ピット	笠松遺跡1区186号ピット
笠松遺跡E区北17号ピット	笠松遺跡1区187号ピット
笠松遺跡E区北18号ピット	笠松遺跡1区188号ピット
笠松遺跡E区北19号ピット	笠松遺跡1区189号ピット
笠松遺跡E区北20号ピット	笠松遺跡1区190号ピット
笠松遺跡E区北21号ピット	笠松遺跡1区191号ピット
笠松遺跡E区北22号ピット	笠松遺跡1区192号ピット
笠松遺跡E区北23号ピット	笠松遺跡1区193号ピット
笠松遺跡E区北24号ピット	笠松遺跡1区194号ピット
笠松遺跡E区北25号ピット	笠松遺跡1区195号ピット
笠松遺跡E区北26号ピット	笠松遺跡1区196号ピット
笠松遺跡E区北27号ピット	笠松遺跡1区197号ピット
笠松遺跡E区北28号ピット	笠松遺跡1区198号ピット
笠松遺跡E区北29号ピット	笠松遺跡1区199号ピット
笠松遺跡E区北30号ピット	笠松遺跡1区200号ピット
笠松遺跡E区北31号ピット	笠松遺跡1区201号ピット
笠松遺跡E区北32号ピット	笠松遺跡1区202号ピット
笠松遺跡E区北33号ピット	笠松遺跡1区203号ピット
笠松遺跡E区北34号ピット	笠松遺跡1区204号ピット
笠松遺跡E区北35号ピット	笠松遺跡1区205号ピット
笠松遺跡E区北36号ピット	笠松遺跡1区206号ピット
笠松遺跡E区北37号ピット	笠松遺跡1区207号ピット
笠松遺跡E区北38号ピット	笠松遺跡1区208号ピット
笠松遺跡E区北39号ピット	笠松遺跡1区209号ピット
笠松遺跡E区北40号ピット	笠松遺跡1区210号ピット
笠松遺跡E区北41号ピット	笠松遺跡1区3号掘立P3
笠松遺跡E区北42号ピット	笠松遺跡1区211号ピット
笠松遺跡E区北43号ピット	笠松遺跡1区212号ピット
笠松遺跡E区北44号ピット	笠松遺跡1区213号ピット
笠松遺跡E区北45号ピット	笠松遺跡1区214号ピット
笠松遺跡E区北46号ピット	笠松遺跡1区215号ピット
笠松遺跡E区北47号ピット	笠松遺跡1E区216号ピット
笠松遺跡E区北48号ピット	笠松遺跡1区217号ピット
笠松遺跡E区北49号ピット	笠松遺跡1区218号ピット
笠松遺跡E区北50号ピット	笠松遺跡1区219号ピット
笠松遺跡E区北51号ピット	笠松遺跡1区4号掘立P1
笠松遺跡E区北52号ピット	笠松遺跡1区4号掘立P2
笠松遺跡E区北53号ピット	笠松遺跡1区4号掘立P3
笠松遺跡E区北54号ピット	笠松遺跡1区4号掘立P4
笠松遺跡E区北55号ピット	笠松遺跡1区5号掘立P1
笠松遺跡E区北56号ピット	笠松遺跡1区5号掘立P2
笠松遺跡E区北57号ピット	笠松遺跡1区5号掘立P3
笠松遺跡E区北58号ピット	笠松遺跡1区5号掘立P4
笠松遺跡E区北59号ピット	笠松遺跡1区5号掘立P5
笠松遺跡E区北60号ピット	笠松遺跡1区220号ピット
笠松遺跡E区北61号ピット	笠松遺跡1区221号ピット
笠松遺跡E区北62号ピット	笠松遺跡1区222号ピット
笠松遺跡E区北63号ピット	笠松遺跡1区5号掘立P6
笠松遺跡E区北64号ピット	笠松遺跡1区5号掘立P7
笠松遺跡E区北65号ピット	笠松遺跡1区5号掘立P8
笠松遺跡E区北66号ピット	笠松遺跡1区223号ピット
笠松遺跡E区北67号ピット	笠松遺跡1区6号掘立P1

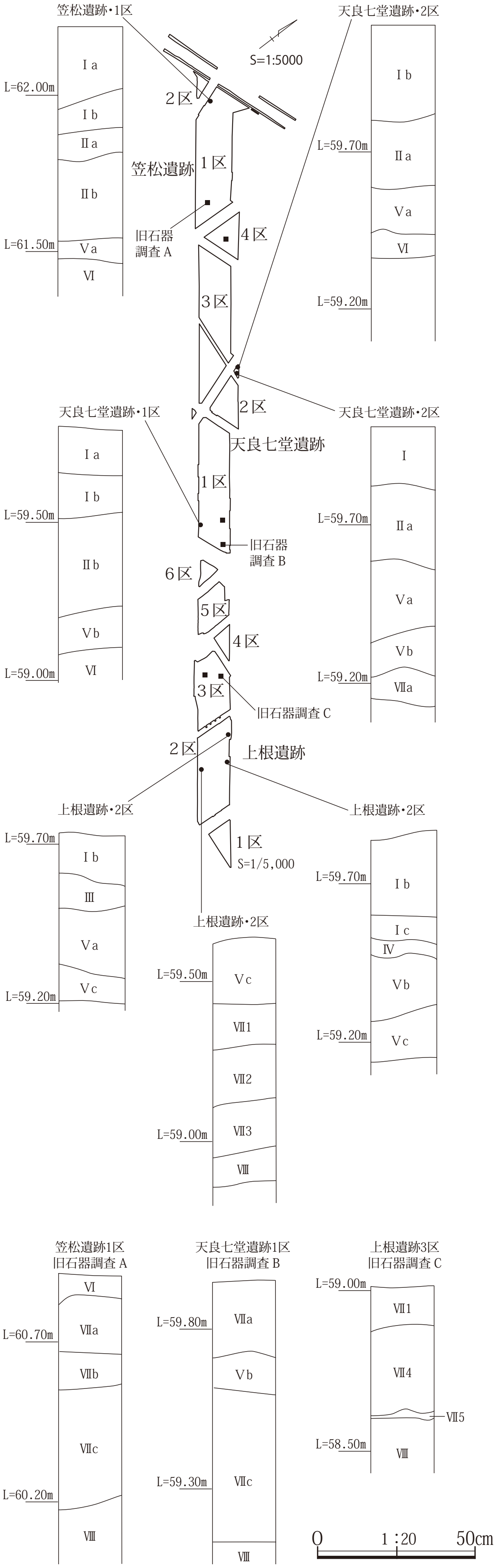
変更前	変更後
笠松遺跡E区北68号ピット	笠松遺跡1区6号掘立P2
笠松遺跡E区北69号ピット	笠松遺跡1区6号掘立P3
笠松遺跡E区北70号ピット	笠松遺跡1区6号掘立P4
笠松遺跡E区北71号ピット	笠松遺跡1区6号掘立P5
笠松遺跡E区北72号ピット	笠松遺跡1区6号掘立P6
笠松遺跡E区北73号ピット	笠松遺跡1区7号掘立P1
笠松遺跡E区北74号ピット	笠松遺跡1区7号掘立P2
笠松遺跡E区北75号ピット	笠松遺跡1区7号掘立P4
笠松遺跡E区北76号ピット	笠松遺跡1区7号掘立P5
笠松遺跡E区北77号ピット	笠松遺跡1区7号掘立P7
笠松遺跡E区北78号ピット	笠松遺跡1区7号掘立P8
笠松遺跡E区北79号ピット	欠番
笠松遺跡E区北80号ピット	笠松遺跡1区224号ピット
笠松遺跡E区北81号ピット	笠松遺跡1区225号ピット
笠松遺跡E区北82号ピット	笠松遺跡1区11号掘立P2
笠松遺跡E区北83号ピット	笠松遺跡1区11号掘立P1
笠松遺跡E区北84号ピット	笠松遺跡1区11号掘立P3
笠松遺跡E区北85号ピット	笠松遺跡1区11号掘立P4
笠松遺跡E区北86号ピット	笠松遺跡1区11号掘立P5
笠松遺跡E区北87号ピット	笠松遺跡1区226号ピット
笠松遺跡E区北88号ピット	笠松遺跡1区227号ピット
笠松遺跡E区北89号ピット	笠松遺跡1区228号ピット
笠松遺跡E区北90号ピット	笠松遺跡1区229号ピット
笠松遺跡E区北91号ピット	笠松遺跡1区230号ピット
笠松遺跡E区北92号ピット	笠松遺跡1区231号ピット
笠松遺跡E区北93号ピット	笠松遺跡1区1号柵列P1
笠松遺跡E区北94号ピット	笠松遺跡1区232号ピット
笠松遺跡E区北95号ピット	笠松遺跡1区1号柵列P2
笠松遺跡E区北96号ピット	笠松遺跡1区1号柵列P3
笠松遺跡E区北97号ピット	笠松遺跡1区1号柵列P4
笠松遺跡E区北98号ピット	笠松遺跡1区9号掘立P1･2、261号ピット
笠松遺跡E区北99号ピット	笠松遺跡1区9号掘立P3
笠松遺跡E区北100号ピット	笠松遺跡1区9号掘立P4
笠松遺跡E区北101号ピット	笠松遺跡1区9号掘立P5、6、262号ピット
笠松遺跡E区北102号ピット	笠松遺跡E区8号掘立P1
笠松遺跡E区北103号ピット	笠松遺跡1区8号掘立P2・9号掘立P7・10、264号ピット
笠松遺跡E区北104号ピット	笠松遺跡1区8号掘立P3
笠松遺跡E区北105号ピット	笠松遺跡1区9号掘立P11
笠松遺跡E区北106号ピット	笠松遺跡1区8号掘立P5
笠松遺跡E区北107号ピット	笠松遺跡1区9号掘立P8･9、263号ピット
笠松遺跡E区北108号ピット	笠松遺跡1区8号掘立P4
笠松遺跡E区北109号ピット	笠松遺跡1区233号ピット
笠松遺跡E区北110号ピット	笠松遺跡1区8号掘立P6
笠松遺跡E区北111号ピット	笠松遺跡1区8号掘立P7
笠松遺跡E区北112号ピット	笠松遺跡1区8号掘立P8
笠松遺跡E区北113号ピット	笠松遺跡1区234号ピット
笠松遺跡E区北114号ピット	笠松遺跡1区235号ピット
笠松遺跡E区北115号ピット	笠松遺跡1区3号掘立P10
笠松遺跡E区北116号ピット	笠松遺跡1区236号ピット
笠松遺跡E区北117号ピット	笠松遺跡1区237号ピット
笠松遺跡E区北118号ピット	笠松遺跡1区238号ピット
笠松遺跡E区北119号ピット	笠松遺跡1区2号掘立P1
笠松遺跡E区北120号ピット	笠松遺跡1区2号掘立P2
笠松遺跡E区北121号ピット	笠松遺跡1区2号掘立P3
笠松遺跡E区北122号ピット	笠松遺跡1区3号掘立P1
笠松遺跡E区北123号ピット	笠松遺跡1区3号掘立P2
笠松遺跡E区北124号ピット	笠松遺跡1区3号掘立P4
笠松遺跡E区北125号ピット	笠松遺跡1区3号掘立P5
笠松遺跡E区北126号ピット	笠松遺跡1区3号掘立P7
笠松遺跡E区北127号ピット	笠松遺跡1区3号掘立P8
笠松遺跡E区北128号ピット	笠松遺跡1区3号掘立P11
笠松遺跡E区北129号ピット	笠松遺跡1区3号掘立P12
笠松遺跡E区北130号ピット	笠松遺跡1区239号ピット
笠松遺跡E区北131号ピット	笠松遺跡1区240号ピット
笠松遺跡E区北132号ピット	笠松遺跡1区241号ピット
笠松遺跡E区北133号ピット	笠松遺跡1区42号ピット
笠松遺跡E区北134号ピット	笠松遺跡1区243号ピット
笠松遺跡E区北135号ピット	笠松遺跡1区244号ピット
笠松遺跡E区北136号ピット	笠松遺跡1区12号掘立P1
笠松遺跡E区北137号ピット	笠松遺跡1区12号掘立P2
笠松遺跡E区北138号ピット	笠松遺跡1区3号掘立P13
笠松遺跡E区北139号ピット	笠松遺跡1区3号掘立P9
笠松遺跡E区北140号ピット	笠松遺跡1区3号掘立P6
笠松遺跡E区北141号ピット	笠松遺跡1区12号掘立P5
笠松遺跡E区北142号ピット	笠松遺跡1区12号掘立P6
笠松遺跡E区北143号ピット	笠松遺跡1区245号ピット
笠松遺跡E区北144号ピット	笠松遺跡1区246号ピット
笠松遺跡E区北145号ピット	笠松遺跡1区12号掘立P9
笠松遺跡E区北146号ピット	笠松遺跡1区12号掘立P10
笠松遺跡E区北147号ピット	笠松遺跡1区247号ピット
笠松遺跡E区北148号ピット	欠番
笠松遺跡E区北149号ピット	笠松遺跡1区12号掘立P3
笠松遺跡E区北150号ピット	笠松遺跡1区12号掘立P4
笠松遺跡E区北151号ピット	笠松遺跡1区248号ピット
笠松遺跡E区北152号ピット	笠松遺跡1区12号掘立P7

変更前	変更後
笠松遺跡E区北153号ピット	笠松遺跡1区12号掘立P8
笠松遺跡E区北154号ピット	笠松遺跡1区12号掘立P11
笠松遺跡E区北155号ピット	笠松遺跡1区12号掘立P12
笠松遺跡E区北156号ピット	笠松遺跡1区249号ピット
笠松遺跡E区北157号ピット	笠松遺跡1区250号ピット
笠松遺跡E区北158号ピット	笠松遺跡1区251号ピット
笠松遺跡E区北159号ピット	笠松遺跡1区252号ピット
笠松遺跡E区北160号ピット	笠松遺跡1区253号ピット
笠松遺跡E区北161号ピット	笠松遺跡1区254号ピット
笠松遺跡E区北162号ピット	笠松遺跡1区255号ピット
笠松遺跡E区北163号ピット	笠松遺跡1区256号ピット
笠松遺跡E区北164号ピット	笠松遺跡1区257号ピット
笠松遺跡E区北165号ピット	笠松遺跡1区258号ピット
笠松遺跡E区北166号ピット	笠松遺跡1区259号ピット
笠松遺跡E区北167号ピット	笠松遺跡1区260号ピット
笠松遺跡E区北168号ピット	欠番
笠松遺跡E区1号掘立柱建物P1	笠松遺跡1区1号掘立柱建物P1・17
笠松遺跡E区1号掘立柱建物P2	笠松遺跡1区1号掘立柱建物P2・18
笠松遺跡E区1号掘立柱建物P3	笠松遺跡1区1号掘立柱建物P3・19
笠松遺跡E区1号掘立柱建物P4	笠松遺跡1区1号掘立柱建物P4・20
笠松遺跡E区1号掘立柱建物P5	笠松遺跡1区1号掘立柱建物P5・21
笠松遺跡E区1号掘立柱建物P6	笠松遺跡1区1号掘立柱建物P6・22
笠松遺跡E区1号掘立柱建物P7	笠松遺跡1区1号掘立柱建物P7・23
笠松遺跡E区1号掘立柱建物P8	笠松遺跡1区1号掘立柱建物P8・24
笠松遺跡E区1号掘立柱建物P9	笠松遺跡1区1号掘立柱建物P9・25
笠松遺跡E区1号掘立柱建物P10	笠松遺跡1区1号掘立柱建物P10・26
笠松遺跡E区1号掘立柱建物P11	笠松遺跡1区1号掘立柱建物P11・27
笠松遺跡E区1号掘立柱建物P12	笠松遺跡1区1号掘立柱建物P12・28
笠松遺跡E区1号掘立柱建物P13	笠松遺跡1区1号掘立柱建物P13・29
笠松遺跡E区1号掘立柱建物P14	笠松遺跡1区1号掘立柱建物P14・30
笠松遺跡E区1号掘立柱建物P15	笠松遺跡1区1号掘立柱建物P15・31
笠松遺跡E区1号掘立柱建物P16	笠松遺跡1区1号掘立柱建物P16・32
笠松遺跡E区10号掘立柱建物	欠番
笠松遺跡E区13号掘立柱建物	欠番
笠松遺跡E区2号柵列	笠松遺跡1区3号掘立柱建物
笠松遺跡E区南63号ピット	欠番
笠松遺跡E区南64号ピット	欠番
笠松遺跡E区南68号ピット	欠番
笠松遺跡E区1号竪穴状遺構	笠松遺跡1区1号粘土採掘坑
笠松遺跡E区3号竪穴住居	笠松遺跡1区2号粘土採掘坑
笠松遺跡E区1号土坑	笠松遺跡1区19号土坑
笠松遺跡E区2号土坑	笠松遺跡1区20号土坑
笠松遺跡E区3号土坑	笠松遺跡1区3号粘土採掘坑
笠松遺跡E区4号土坑	笠松遺跡1区21号土坑
笠松遺跡E区5号土坑	笠松遺跡1区22号土坑
笠松遺跡E区6号土坑	笠松遺跡1区23号土坑
笠松遺跡A区59号ピット	天良七堂遺跡1区2号柵列P5
笠松遺跡A区2号竪穴状遺構1号土坑	天良七堂遺跡1区30号土坑
笠松遺跡A区2号竪穴状遺構2号ピット	天良七堂遺跡1区132号ピット
笠松遺跡A区2号竪穴状遺構2号土坑、3号ピット	天良七堂遺跡1区31号土坑
笠松遺跡A区西1号溝	天良七堂遺跡1区9号溝
笠松遺跡A区1号竪穴住居P5	天良七堂遺跡3号柵列P5
笠松遺跡A区1号竪穴住居P6	天良七堂遺跡3号柵列P8
笠松遺跡A区1号竪穴住居P10	欠番
笠松遺跡A区1号竪穴住居P11	欠番
笠松遺跡A区1号竪穴住居P18	欠番
笠松遺跡A区1号竪穴住居P19	欠番
上根遺跡3区5号ピット	上根遺跡1号掘立柱建物P6
上根遺跡3区9号ピット	上根遺跡1号掘立柱建物P1
上根遺跡3区12号ピット	上根遺跡1号掘立柱建物P2
上根遺跡3区14号ピット	上根遺跡1号掘立柱建物P3
上根遺跡3区15号ピット	上根遺跡1号掘立柱建物P4
上根遺跡3区27号ピット	上根遺跡3区1号橋P5
上根遺跡3区31号ピット	上根遺跡3区1号橋P1
上根遺跡3区32号ピット	上根遺跡3区1号橋P6
上根遺跡3区33ピット	上根遺跡3区1号橋P3
上根遺跡3区34号ピット	上根遺跡3区1号橋P2
上根遺跡4区4号竪穴住居1号土坑	欠番
上根遺跡4区4号竪穴住居2号土坑	欠番
上根遺跡4区4号竪穴住居3号土坑	欠番
上根遺跡5区16号土坑	上根遺跡5区1号井戸
上根遺跡5区19号土坑	上根遺跡5区2号井戸
上根遺跡5区17号土坑	欠番
上根遺跡5区18号土坑	欠番
上根遺跡5区20号土坑	欠番
上根遺跡5区3号ピット	上根遺跡5区1号掘立柱建物P2
上根遺跡5区8号ピット	上根遺跡5区1号掘立柱建物P1
上根遺跡5区11号ピット	上根遺跡5区1号掘立柱建物P9
上根遺跡5区12号ピット	上根遺跡5区1号掘立柱建物P8
上根遺跡5区13号ピット	上根遺跡5区1号掘立柱建物P7
上根遺跡5区14号ピット	上根遺跡5区1号掘立柱建物P3
上根遺跡5区17号ピット	上根遺跡5区1号掘立柱建物P4
上根遺跡5区23号ピット	上根遺跡5区1号掘立柱建物P6
上根遺跡5区27号ピット	上根遺跡5区1号掘立柱建物P5
上根遺跡5区1号溝	欠番

撮影及び高所作業車等を使用して写真撮影を行った。上根遺跡１区～４区では測量委託業者による空中写真撮影を実施した。

第５節　基本土層

笠松遺跡、天良七堂遺跡、上根遺跡の基本土層は以下のとおりである。上根遺跡は、圃場整備により表土下層の第Ⅱ層は削平され、２区において第Ⅲ層As-B混土層及び第Ⅳ層As-B堆積層が認められる。各層位の主な時代は、第Ⅱ層から第Ⅲ層は中世から近世に相当し、第Ⅳ層As-B堆積層から第Ⅴ層は古墳時代から奈良・平安時代、第Ⅵ層は縄文時代に相当する。第Ⅶ層より下層については旧石器時代の調査での土層記録を基にして以下のとおり基本土層を設定した。第Ⅵ層ローム漸移層から下層の礫を多量に含む第Ⅷ層との間にある上部ローム層とみられる第Ⅶ層は北部の笠松遺跡及び天良七堂遺跡と低地に位置する上根遺跡では湧水等の影響で堆積状況に違いが認められるが類似する地層として枝番号で分類している。



●　基本土層地点
■　旧石器調査地点
笠松遺跡、天良七堂遺跡、上根遺跡

Ⅰａ層	黒褐色土(7.5YR3/2)現表土　客土
Ⅰｂ層	黒褐色土(7.5YR2/2)耕作土
Ⅰｃ層	灰褐色土(10YR4/2)水田耕作土
Ⅱａ層	黒褐色土(10YR3/2)砂質
Ⅱｂ層	黒褐色土(10YR3/2)砂質　褐色土塊を斑状に含む
Ⅲ層	暗褐色土(10YR3/3) As-B混土層
Ⅳ層	暗褐色土(10YR3/3) As-B堆積層
Ⅴａ層	黒褐色土(10YR3/2)ローム塊少量含む　粘性締まりあり
Ⅴｂ層	黒褐色土(10YR3/1)砂質　ローム塊を僅かに含む
Ⅴｃ層	黒褐色土(10YR3/1)灰白色シルト質土を斑に含む
Ⅵ層	黄褐色土(10YR5/6)ローム漸移層　黒色土塊を含む
Ⅶａ層	浅黄色粘質土(2.5Y7/4)シルト質土　黒褐色土粒を含む
Ⅶｂ層	明黄褐色粘質土(2.5Y6/6)粗粒　Ⅶａより粘性あり
Ⅶｃ層	淡黄色粘質土(2.5Y8/3)シルト質土　細粒　粘性強い
Ⅶ1層	黒褐色粘質土(10YR3/１)灰白色シルト質土塊を斑に含む
Ⅶ2層	灰白色砂(7.5YR8/1)細粒砂　火山灰質
Ⅶ3層	灰黄色土(2.5Y7/3)シルト質土　黒褐色土小塊を含む
Ⅶ4層	にぶい黄褐色土(10YR4/3)砂粒とⅦ3層の混土　白色粒１％黄色～黄白色軽石１％以下
Ⅶ5層	黒褐色砂(2.5Y3/1)下層から礫を多量に含む
Ⅷ層	灰黄色粘質土(2.5Y7/2)礫を多量に含む

第３図　笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡　基本土層

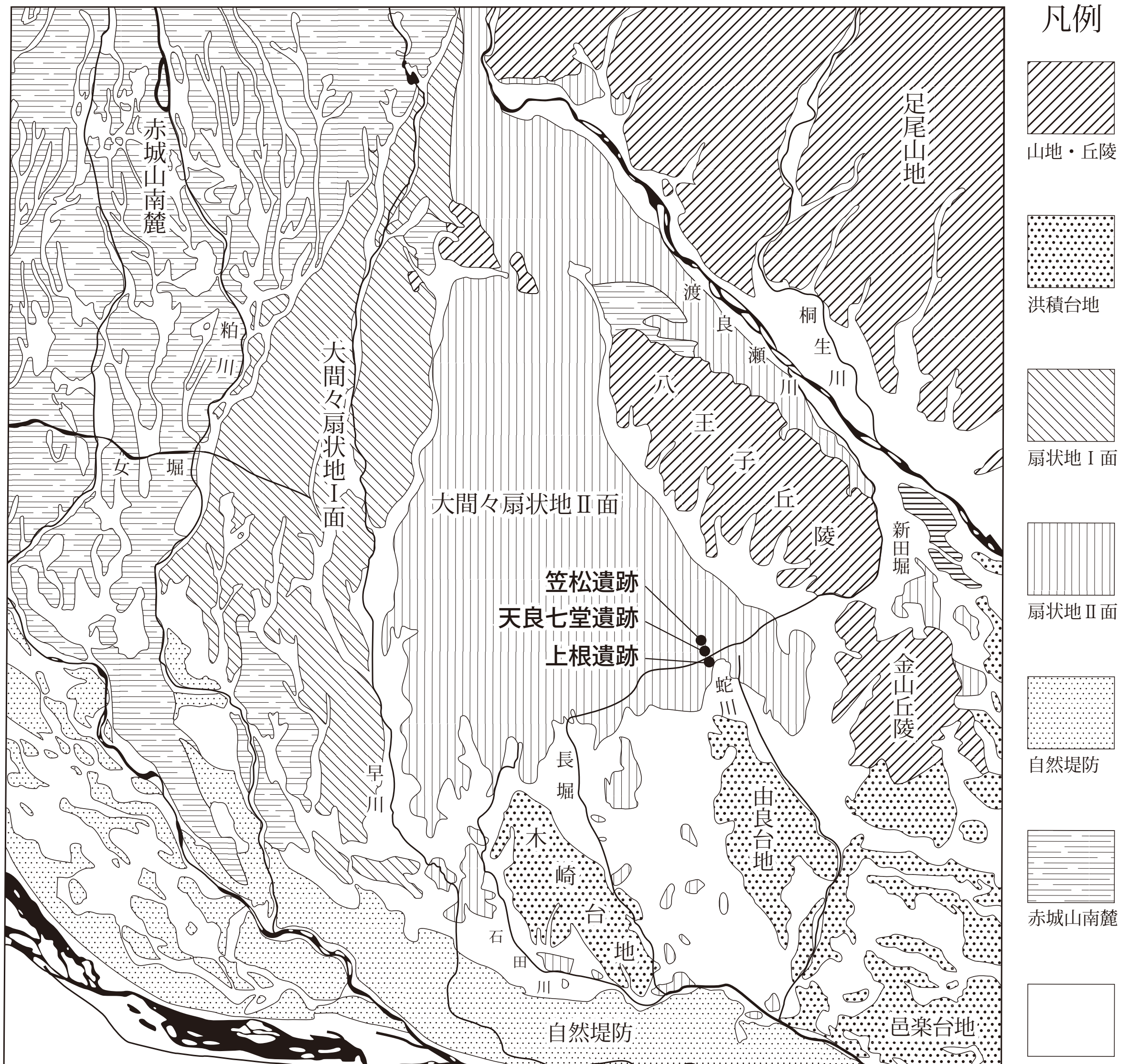
第２章　地理的および歴史的環境

第１節　遺跡の位置と周辺の地形

笠松遺跡、天良七堂遺跡は、群馬県太田市新田小金井町、上根遺跡は群馬県太田市寺井町に所在する。

関東地方の北西部となる群馬県において太田市は県南東部に位置する。太田市は、伊勢崎市、みどり市、桐生市、邑楽郡大泉町、邑楽郡邑楽町のほか、東部を流れる渡良瀬川をほぼ挟んで栃木県足利市、南部を流れる利根川を挟んで埼玉県熊谷市や深谷市などの自治体と隣接している。太田市は明治時代以降、周辺町村と度重なる編入や合併を行って現在に至っている。近年では平成17年(2005年)３月28日に太田市、新田郡新田町、尾島町、薮塚本町の１市３町と合併し現在の太田市に至る。

太田市街地となる東武鉄道桐生線太田駅より北西約６㎞、治良門橋駅から南西約1.2㎞に位置する。笠松遺跡に接する主要地方道足利伊勢崎線は東西方向に走行し、主要地方道太田大間々線(現道)のほか国道17号上武道路や国道50号桐生バイパスなどと合流するなどアクセス道として利便性が高い道路である。また平成23年3月に全面開通した北関東自動車道の太田薮塚インターチェン



第４図　笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡　周辺の地形区分図（能登編図 1981『アーバンクボタ』19 より作成）

ジ、太田桐生インターチェンジの開設により主要な交通網が発達する地域である。太田市城西町には大規模な住宅団地である城西の杜が造られるなど開発が進められている。

本遺跡は太田市のほぼ中央部に位置する。標高はおよそ62～58mであり、一見平坦地に見えるが、北側から南側へ緩やかに傾斜して下る地形である。この地形は、群馬県の中央部から東側に聳える赤城山(標高1,827.6m)東側の大間々扇状地に起因する。扇状地は河川が山地から平地に移る所などに見られる堆積平野であり、山側の谷口を頂点とした扇状となるものである。大間々扇状地は、第四紀洪積世後期に渡良瀬川によって形成された地形である。群馬県みどり市大間々町を扇頂とし、太田市北西部から伊勢崎市に至る標高50m～55mの線を扇端とする、南北およそ18㎞、東西幅およそ13㎞の大規模な扇状地である。現在の行政区分で言うと、桐生市、太田市、伊勢崎市、みどり市などの地域を占め、関東地方の中でも特に規模が大きい。大間々扇状地は形成時期が異なる５つの形成面から構成されている。その中でも主体となるのが、古期に形成された大間々扇状地第Ⅰ面(桐原面)、新期に形成された大間々扇状地第Ⅱ面(藪塚面)という二つの面である。古期には、渡良瀬川によって洪積台地が浸食され桐原面を形成した。そののちに藪塚面が形成された。残された洪積台地が木崎台地や由良台地である。本遺跡周辺では、扇状地端部に見られる湧水地が多く存在しており、古くから灌漑用として利用されてきた。

本遺跡の東方には八王子丘陵及び金山丘陵がある。八王子丘陵は北西から南東方向に延びる分離丘陵である。金山丘陵は八王子丘陵の南東に位置する分離丘陵である。八王子丘陵と金山丘陵はごく低い鞍部を境にして離れているが、かつては一続きだったと考えられている。どちらも以前は足尾山地と一続きであり、足尾山地の延端部であったものに断層が生じ谷となり、大間々扇状地を形成した渡良瀬川が流路を東に変えたことにより、現在の独立した丘陵になったとされる。

本遺跡の南側には、沖積世に形成された沖積低地が広がっている。沖積低地も元々扇状地として形成された。扇状地では火山灰が降下し、ローム層として堆積したが、低地では火山灰がローム層として堆積しなかったと考えられる。

第２節　周辺の遺跡

本遺跡周辺地域では、旧石器時代以降の各時代の遺跡があることが知られている。以下に時代ごとに概観する。

旧石器時代

本遺跡周辺における旧石器時代の遺跡は少ない。八王子丘陵周辺の成塚住宅団地遺跡群群(24)では、尖頭器などが出土している。同じく西長岡宿遺跡(30)ではサイドスクレイパーなどが出土している。

縄文時代

縄文時代全般を通して、八王子丘陵や金山丘陵周辺から遺跡がみつかっている。

成塚住宅団地遺跡群で草創期の柳葉形尖頭器が出土している。早期では西長岡宿遺跡で撚糸文土器、押型文土器が出土している。中期では成塚住宅団地遺跡群から中期後半の竪穴住居が14軒検出されている。後期では、西長岡宿遺跡で竪穴住居７棟、配石遺構200基が検出されている。本遺跡(天良七堂遺跡(２))からは後期の竪穴住居が検出されている。

弥生時代

太田市域の弥生時代遺跡は、丘陵及び沖積地内の低台地においてわずかに検出されている。これは、広大な沖積低地を開拓する術を持っていなかったからであると考えられる。本遺跡周辺では、八王子丘陵に接する大間々扇状地の台地上にある西野原遺跡(32)から中期後半から後期の竪穴住居が７軒検出されている。

古墳時代

太田市域における前期古墳時代の墳墓の特徴として、古墳と周溝墓が挙げられる。前期古墳の特徴として、丘陵端部の傾斜を利用し、古墳を築いている。全長55mを測る前方後円墳である寺山古墳は、金山丘陵北西に所在する。八王子丘陵の南端部にある成塚向山古墳群(27)で調査された成塚向山古墳群１号墳は、４世紀に築造された方墳である。周溝墓は、成塚住宅団地遺跡群にて８基が明らかにされている。古墳時代になると、弥生時代には未開であった沖積低地を開発するようになり、集落の姿も判明するようになる。集落は沖積低地内の低台地やその周辺に形成されていたようである。前期の集落遺跡としては石田川遺跡が有名であるが、本遺跡周辺では中屋敷・中村田遺跡(23)などがある。

中期になると、市域では沖積地内の微高地に古墳が築かれるようになる。東日本最大の前方後円墳である太田天神山古墳が築かれたのはこの時期である。本遺跡周辺では、前方後円墳の鶴山古墳(14)、帆立貝式古墳の亀山古墳(39)などが築かれている。中期の遺跡は、沖積低地内の低台地やその周辺地域など、前期集落の立地と同じ場合が多い。前沖遺跡、新田東部遺跡群、堂原遺跡などが挙げられる。

後期になると、八王子丘陵や金山丘陵において埴輪生産や須恵器生産が始まる。埴輪窯としては、八王子丘陵周辺では駒形神社埴輪窯跡や成塚住宅団地遺跡群が、金山丘陵周辺では金井口埴輪窯跡などが知られている。

後期の集落は大間々扇状地端部の台地や八王子丘陵・金山丘陵、高林台地などに分布する傾向がある。成塚住宅団地遺跡群や堂原遺跡などである。

後期から終末期にかけて、人々は八王子丘陵や金山丘陵及び沖積低地内の微高地に群集墳を築いている。本遺跡周辺では、上強戸古墳群、大鷲梅穴古墳群、貧乏塚古墳群等が挙げられる。また、後期には、本遺跡の北約１kmに墳丘長74mの前方後円墳である二ツ山古墳１号墳、(36)、墳丘長45mの前方後円墳である二ツ山古墳２号墳(37)が築造される。この古墳の被葬者がのちの当地の発展の基礎を作ったと考えられる。

奈良・平安時代

本遺跡周辺は古代には新田郡に属していたが、この地域には重要な遺跡が集中し、郡の中心部をなしていたことが分かっている。

天良七堂遺跡は昭和30（1955)年に群馬大学によって総柱の礎石建物が発掘調査されて以来、周辺で多くの建物跡が確認されていることから、新田郡衙であろうと推定されてきたが、平成19（2007)年に太田市教育委員会によって郡庁跡（５)が確認され、新田郡衙であることが確定した。翌平成20年には国史跡に指定され、現在太田市教育委員会による確認調査が継続して行われている。郡庁跡は１辺約90ｍと全国最大規模であり、四方を長大な掘立柱建物で囲み、中央に正殿と前殿が建てられている。周辺には数多くの倉庫が建ち並び、それらがさらに溝で囲まれ、南側に推定東山道駅路の下新田ルート（９）が通過している。本遺跡はその西側近くに位置しているため関連施設の存在が考えられ、実際北側隣接地では平成４・５年に旧新田町教育委員会によって掘立柱建物が確認されている（４・笠松遺跡)。天良七堂遺跡の北東には７世紀後半に創建された寺井廃寺(12)があり、中心部の調査はされていないものの、大規模な寺院であったと考えられている。本遺跡の西側には基壇をもつ２棟の瓦葺き総柱建物が調査されている入谷遺跡（８)、唐三彩陶枕が出土した境ヶ谷戸遺跡(17)がある。また、東山道駅路と推定されている２本の古代道路跡、下新田ルート（９）と牛堀・矢ノ原ルート(10)が東西に通過し、さらに近年新野脇屋遺跡群(38)で東山道武蔵路と思われる古代道路跡(11)が確認され、それが本遺跡の西側で牛堀・矢ノ原ルートと合流すると見られている。このように本遺跡の周辺は古代新田郡を理解する上で重要な遺跡が集中する地域である。

周辺では上野井遺跡(16)の調査によって奈良時代の竪穴住居が検出された。村田・本郷遺跡(20)では昭和59・61年の調査によって掘立柱建物や竪穴住居が検出され、中溝遺跡(19)では昭和61・62年の調査で掘立柱建物や竪穴住居のほか９～10世紀の瓦片が出土した。赤城南遺跡(22)では昭和50年の調査によって竪穴住居、掘立柱建物などが調査された。上強戸遺跡群(25)では７世紀代の水田が検出されている。大鷲遺跡(26)、成塚遺跡群(28)、島谷戸遺跡(31)からはAs-Bで埋没した水田が検出されている。西野原遺跡、峯山遺跡では大規模な製鉄遺構が調査されている。この時代には古墳時代金山丘陵周辺で始まった須恵器生産が引き続き行われていた。須恵器生産以外にも、鉄生産が行われていた。八王子丘陵では西野原遺跡、峰山遺跡など、金山丘陵では菅ノ沢遺跡、高太郎Ⅲ遺跡などで鉄生産遺構が検出されている。

中近世

平安時代後半になり、全国で私領開発が進み、荘園が成立するようになった。当地では、保元二年(1157年)源義重(新田義重)によって新田荘が形成された。鎌倉時代末期には元弘三年(1333年)新田義貞をはじめとする新田一族が新田荘の生品神社(18)に参集し鎌倉に向けて挙兵したとされている。石橋地蔵久保遺跡(13)では中世から近世の溝などが検出されている。

第５図　笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡　周辺の遺跡（1：25000）

第２表　笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	概　要	文　献	時　代
1	笠松遺跡	本報告書	「群埋文年報29」2010	古墳・奈良・平安・中世・近世
2	天良七堂遺跡	本報告書	「群埋文年報29」2010	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世
3	上根遺跡	本報告書	「群埋文年報30」2011	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世
4	笠松遺跡	古墳時代から平安時代の竪穴住居、掘立柱建物、土坑、溝などが調査された。	「新田町誌」、新田町教委　第21集「天良七堂遺跡・笠松遺跡」1999	古墳・奈良・近世
5	天良七堂遺跡	平成20年国指定史跡「上野国新田郡庁跡」西側正倉域では礎石建物、掘立柱建物、竪穴住居、溝などの遺構、新田郡庁跡からは礎石建物、掘立柱建物、石敷き遺構、道路状遺構などが調査された。	「新田町誌」、新田町教委 第19集「新田町内遺跡Ⅰ」1999、第21集「天良七堂遺跡・笠松遺跡」1999、第24集「新田町内遺跡Ⅱ」2000、第26集「新田町内遺跡Ⅲ」2001、太田市教委「埋蔵文化財調査年報3」1993、第37集「天良七堂遺跡Ⅱ」2004、「太田市内遺跡4」2009、「太田市内遺跡5」2010、「天良七堂遺跡2」2010	奈良・平安
6	上根遺跡	推定東山道駅路の側溝や古墳時代の住居などが調査されている。新田町調査分。	新田町教委「新田町内遺跡Ⅰ」1999、第24集「新田町内遺跡Ⅱ」2000、第36集「新田町内遺跡Ⅵ」2004	縄文・古墳
7	堀廻遺跡	奈良・平安時代の掘立柱建物、溝、中近世も溝、井戸が調査された。	「群埋文年報30」2011	奈良・平安・中世
8	入谷遺跡	古代の礎石建物、掘立柱建物、大溝のほか7世紀の瓦などが検出されている。	新田町教委 第3冊「入谷遺跡」1981、第6冊「入谷遺跡Ⅱ」1981、第8冊「入谷遺跡Ⅲ」1987、第31集「入谷遺跡Ⅳ」2002	古墳・奈良
9	推定東山道駅路（下新田ルート）	北側と南側の側溝および道路硬化面が検出され、路面幅約11mの道路状遺構が調査された。	新田町教委 第35集「藤塚遺跡・下新田ルート・推定東山道駅路」2004、第38集「新田町内遺跡Ⅶ」2005	古代
10	推定東山道駅路（牛堀・矢ノ原ルート）	高崎市東部～太田市北西部で確認されている古代道路跡。路面幅約12m。	新田町教委 第24集「新田町内遺跡Ⅱ」2000、第35集「藤塚遺跡・下新田ルート・推定東山道駅路」2004、第36集「新田町内遺跡Ⅵ」2004、第38集「新田町内遺跡Ⅶ」2005　太田市教委「太田市内遺跡5」2010	古代
11	推定東山道駅路武蔵路	新野脇屋遺跡群では南東から北西にかけて延長640m、心々距離9.0m~13.7mの幅を持つ道路状遺構が調査された。	太田市教委「新野脇屋遺跡群発掘調査報告書」2010	奈良・平安
12	寺井廃寺	古代寺院跡。竪穴住居、土坑、溝などが調査され、古代の瓦が出土した。	太田市教委「埋蔵文化財発掘調査年報1」1991、「太田市内遺跡6」2011（太田市教委）	奈良・平安
13	石橋地蔵久保遺跡	古墳時代から奈良・平安時代の集落跡などが調査された。	群埋文第425集「石橋地蔵久保遺跡」2007	古墳・奈良・平安
14	鶴山古墳	5世紀後半の前方後円墳、県史跡指定(昭和26年)	太田市教委「埋蔵文化財調査年報」平成3年	古墳
15	牛堀・矢ノ原ルート・久保田畑遺跡	東山道駅路(牛堀・矢ノ原ルート）1箇所、竪穴住居9軒が調査された。	太田市教委「太田市内遺跡　5」2010	古墳
16	上野井遺跡	古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居、掘立柱建物、井戸、道路状遺構などが調査された。	新田町教委「新田町誌」、第13集「境ヶ谷戸遺跡・原宿遺跡・上野井Ⅱ遺跡」1994、第19集「新田町内遺跡Ⅰ」1999、第24集「新田町内遺跡Ⅱ」2000年、第29集「新田町内遺跡Ⅳ」2002、第38集「新田町内遺跡Ⅶ」2005、第39集「上野井遺跡」2005	古墳・奈良・平安・中近世
17	境ヶ谷戸遺跡	奈良・平安時代の竪穴住居、土坑、溝などが調査され、平成6年度の調査では唐三彩陶枕が出土した。	新田町教委 第13集「境ヶ谷戸遺跡・原宿遺跡・上野井遺跡Ⅱ」1994、「新田町内遺跡Ⅰ」1999、第29集「新田町内遺跡Ⅳ」2002	奈良・平安・近世
18	生品神社	史跡新田荘遺跡の一部。国指定史跡「新田義貞挙兵伝説地」	「新田町誌」	奈良・平安
19	中溝遺跡	古墳時代から平安時代の竪穴住居、掘立柱建物、中近世の方形館跡、掘立柱建物、溝、井戸、墓坑などが調査された。	「新田町誌」、新田町教委 第11集「新田東部遺跡群」1993	古墳・奈良・平安
20	村田・本郷遺跡	古墳時代の集落跡、2008年の調査では住居跡2軒、土坑9基、館堀4か所が検出された。	「新田町誌」、新田町教委第11集「新田東部遺跡群」1993、「新田町内遺跡Ⅰ」1999 、太田市教委「太田市内遺跡3」2008	
21	中屋敷東遺跡	古墳時代、奈良・平安時代の竪穴住居、溝、円形周溝などが調査された。	第11集「新田東部遺跡群」1993（新田町教委）	古墳・奈良・平安
22	赤城南遺跡	古墳時代の竪穴住居、平安時代の竪穴住居や掘立柱建物、近世の溝などが調査された。	新田町教委「新田町誌」、第4冊「市野井赤城南遺跡」1984、第36集「新田町内遺跡Ⅵ」2004、第38集「新田町内遺跡Ⅶ」2005	古墳・奈良・平安・近世
23	中屋敷・中村田遺跡	古墳時代前期から後期の竪穴住居、掘立柱建物、方形周溝墓、土坑、奈良・平安時代の竪穴住居、掘立柱建物、溝、土坑、中世の館跡、溝、堀、井戸などが調査された。	新田町教委「中屋敷・中村田遺跡」1997	古墳・奈良・平安・中世
24	成塚住宅団地遺跡群	縄文時代中期後半、弥生時代後期、奈良・平安時代の集落、周溝墓、古墳群などが調査された。	群馬県企業局、太田市教委「成塚住宅団地Ⅰ」1990、「成塚住宅団地Ⅱ」1990、「成塚住宅団地Ⅲ」1992	縄文・古墳・奈良・平安

番号	遺 跡 名	概 要	文 献	時 代
25	上強戸遺跡群	古墳時代後期から平安時代後期の水田跡、中世居館跡、鍛冶工房などが調査された。	群埋文第443集「上強戸遺跡群」2008、群埋文第453集「上強戸遺跡群(1)」2009、群埋文第507集「上強戸遺跡群(2)」2010	古墳・奈良・平安・中世
26	大鷲遺跡	古墳時代の竪穴状遺構や土坑、溝、井戸、奈良・平安時代の掘立柱建物、水田、中近世の掘立柱建物や溝などが調査された。	群埋文第456集「大鷲遺跡」2008	古墳・奈良・平安・中世・近世
27	成塚向山古墳群	古墳時代前期の住居、古墳時代前期の1号墳、古墳時代後期の2号墳が調査された。	太田市教委「市内遺跡ⅩⅥ」2000、群埋文第426集「成塚向山古墳群遺跡」2008	弥生・古墳
28	成塚遺跡群	古墳前期の土坑や溝。浅間B軽石で埋没した水田やそれに伴う溝や温め状遺構が調査された。	群埋文第501集「成塚遺跡群」2010	古墳・奈良・平安・中世・近世
29	菅塩遺跡群	縄文時代早期後半から前期前半及び晩期後半の遺物が出土。古墳時代の竪穴住居や土坑、中近世の水田や畑などが調査された。	群埋文第451集「菅塩遺跡群」2008	古墳・奈良・平安・中世・近世
30	西長岡宿遺跡	縄文時代後期の竪穴住居、配石遺構、古墳時代の竪穴住居、平安時代の竪穴住居、井戸、中近世の土坑、井戸などが調査された。	群埋文第490集「西長岡宿遺跡(1)」2010、群埋文第504集「西長岡宿遺跡(2)」2010	縄文・古墳・平安・中世・近世
31	島谷戸遺跡	浅間B軽石で埋没した水田や排水用と考えられる溝が調査された。	群埋文第456集「西野原遺跡(3)(4)島谷戸遺跡」2008	平安・中世・近世
32	西野原遺跡	縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時の集落、古代、奈良・平安時代製鉄・鍛冶遺構などが調査された。	群埋文第387集「西野原遺跡(1)(2)」2006、群埋文第447集「西野原遺跡(3)(4)島谷戸遺跡」2008、群埋文第456集「西野原遺跡(5)(7)島谷戸遺跡」2009	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
33	菅塩西両台遺跡	中世前半の鍛冶関連遺物を含む溝や中世から近世の土坑、井戸、土塁、溝、道路などが調査された。	群埋文第209集「西長岡南遺跡・菅塩西両台遺跡・成塚石橋遺跡Ⅲ」1966	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世
34	西長岡南遺跡	古墳時代の竪穴住居、土坑、古墳、中近世以降の溝、近世以降の土坑や道路などが調査された。	群埋文第209集「西長岡南遺跡・須賀塩西両台遺跡・成塚永昌寺遺跡・成塚石橋遺跡Ⅲ」1996、群埋文第228集「西長岡南遺跡Ⅱ・Ⅲ」1997	古墳・中近世
35	西長岡横塚古墳群	昭和60年度の調査において第28号墳主体部より小型の家型石棺が出土した。	太田市教委「西長岡横塚古墳群発掘調査概報」1986、「市内遺跡」1994	古墳
36	二ツ山古墳一号墳	6世紀後半～7世紀初頭の前方後円墳、昭和23年県指定史跡。	「新田町誌」	古墳
37	二ツ山古墳二号墳	6世紀後半～7世紀初頭の前方後円墳、平成11年に2号墳の周溝が調査された。昭和59年県指定史跡。	新田町教委 第26集「新田町内遺跡Ⅲ」2001	古墳
38	新野脇屋遺跡群	古墳、古墳時代から奈良平安時代にかけての住居、東山道武蔵路などが調査された。	太田市教委「新野脇屋遺跡群発掘調査報告書」2010	古墳・奈良・平安
39	亀山古墳	全長約58m、墳丘径30m余りを測る、5世紀末に築造される。帆立貝式古墳の形状をとどめている。	太田市「太田市史」1996	古墳

参考文献
『新田町誌第一巻通史編』1990　新田町
『新田町誌第二巻資料編』1990　新田町
『太田市史』1996　太田市
『歴史の道調査報告書(東山道)』1979　群馬県教育委員会
『上毛古墳綜覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第５号
『アーバンクボタ19』 1981　久保田鉄工株式会社
Ｐ54図－１赤城山南麓周辺の地形と中世荘園の分布より引用、一部加筆
『天良七堂遺跡、笠松遺跡』1999　新田町文化財調査報告書第21集
『藤塚遺跡・下新田ルート、推定東山道駅路』2004　新田町文化財調査報告書第35集
『高林三入遺跡・八反田遺跡』 2005　群埋文第357集
『新田町内遺跡Ⅵ』2004　新田町文化財調査報告書第36集
『天良七堂遺跡Ⅱ』2004　新田町文化財調査報告書第37集
『天良七堂遺跡２』2010　太田市教育委員会
『石橋地蔵久保遺跡』2007　群埋文第425集
『新野脇屋遺跡群発掘調査報告書』2010　太田市教育委員会
『新田郡衙と東山道駅路予稿集』2011　太田市教育委員会

第３章　笠松遺跡

第１節　笠松遺跡の概要

１・２区では、古墳時代～奈良・平安時代の竪穴住居、奈良・平安時代～中近世の掘立柱建物、基壇状遺構、粘土採掘坑、柵列、土坑、ピット、井戸、溝が検出された。

１区の遺構分布状況は、北側及び南側に集中し中央部は遺構の検出が少ない(第６・７図参照)。調査面標高は61.60～60.60mで南側が１mほど低く傾斜する。平成４・５年度の太田市教育委員会(旧新田町教育委員会)の発掘調査で、１・２区の北側隣接地で連続する掘立柱建物や溝などが検出されている。

第２節　１区の調査成果

１区の発掘調査では、ローム漸移層(基本土層第Ⅵ層)及びローム面を遺構確認面として、古墳時代から中近世に至る遺構が検出された。

１　古墳時代以降の遺構と遺物

検出された遺構は、竪穴住居３軒、掘立柱建物13棟、柵列２条、基壇状遺構１基、土坑23基、ピット261基、粘土採掘坑５基、井戸１基、溝15条である。以下のとおり遺構ごとに記す。

(1)竪穴住居

１区から検出された竪穴住居は３軒であり、調査区外に出るものや他の遺構と重複するため、部分的な調査となったものもある。時代別にみると７世紀から８世紀前半に属する。竪穴住居は発掘調査による番号順に掲載した。なお、３号竪穴住居は整理段階で住居としての確証がないと判断したため２号粘土採掘坑に変更した。

１号竪穴住居(第８図　PL.２・31)

位置　X＝392～395、Y＝－326～329

形状・規模　平面は長方形。規模は長軸長3.13m、短軸長2.44m、壁高約5㎝、床面積は6.97㎡。

主軸方向　N－32°－W

重複　南西壁が１号溝に切られ、壁上端は消失しているが床面下の貯蔵穴は残存する。

埋没土　下層にローム粒・塊、黒褐色土が堆積。自然埋没か人為的かは不明。

床面　北側から南側にかけて緩やかに下る。使用による硬化面は不明瞭である。掘り方は黄褐色ローム塊及び暗褐色土を含む黒褐色土により床面を構築する。

竈　南壁中央部からやや東寄りに付設される。燃焼部底面は根攪乱を受けて残存状態は不良である。規模は焚口幅38㎝、燃焼部奥行き34㎝である。径60㎝の焼土範囲内から構築材の一部と思われる25㎝大の礫が出土する。掘り方埋土は10㎝ほどの掘り込みに、黒色土とロームを混在させる人為的埋土で、燃焼部床面を整えている。

貯蔵穴　南西隅から検出された。平面形状は不定形であり東側は不明瞭である。埋土上層からは多くの土器片など集中して出土するが、底部からの出土は見られない。埋没土は黒褐色土を主体とする自然堆積と考えられる。

柱穴　床面調査、掘り方調査でも検出できなかった。

他の施設　掘り方調査によって住居南西隅からピット１基(Ｐ１)が検出された。平面形は円形で、長径42㎝、短径39㎝、深さ21㎝である。断面に柱痕は認められず、検出位置からも柱穴とは考え難い。

掘り方　床下のローム面を５～15㎝の深さで掘り込む。著しい凹凸面だが床下施設は認められない。

遺物出土状態　第８図１・３は床面直上、同図５は貯蔵穴の埋土からの出土であり住居に伴うと考えられる。同図２・４は掘り方からの出土である。非掲載遺物は土師器大破片403.3ｇ、土師器小破片14.2ｇ、須恵器大破片13.3ｇである。

所見　出土遺物から時期は７世紀前半と考えられる。

２号竪穴住居(第９図　PL.12)

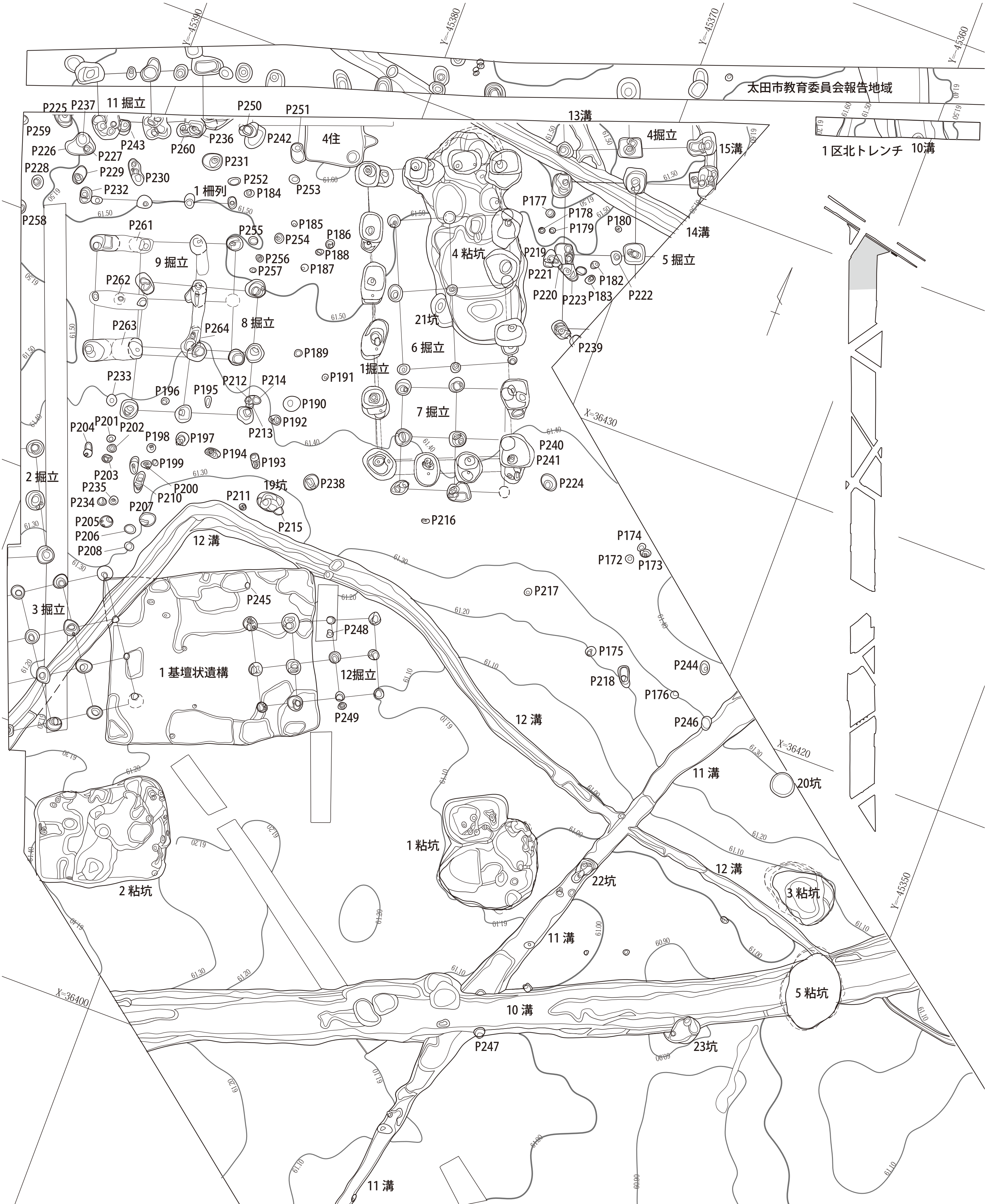
位置　X＝398～401、Y＝－329～333

形状・規模　調査区北東境で検出され、南西部で1号溝と重複するため、全体の形状や規模は不明である。検出部規模は3.45m、壁高10～21㎝である。

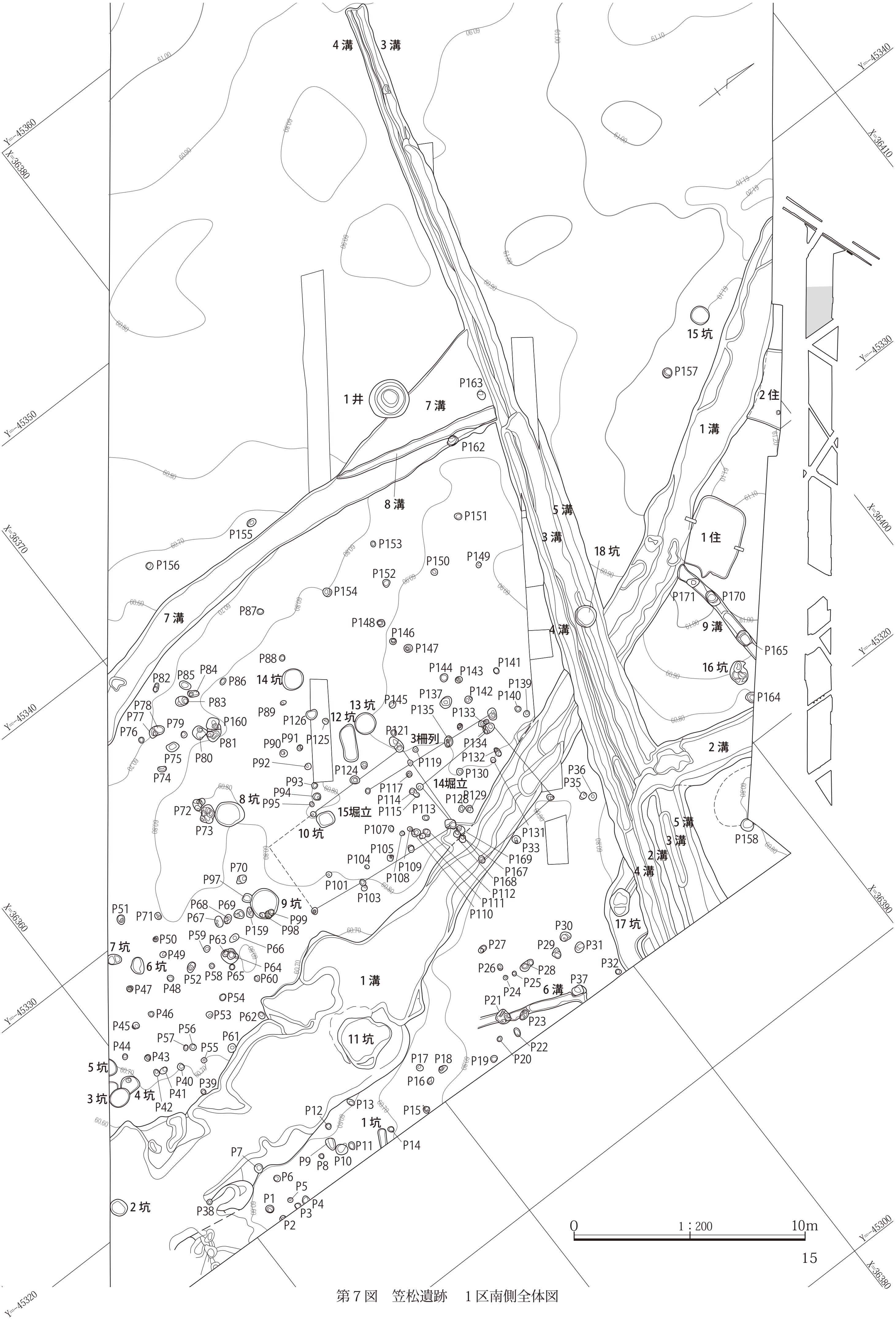
主軸方向　北西－南東と推定される。

重複　１号溝に南西半部を切られる。

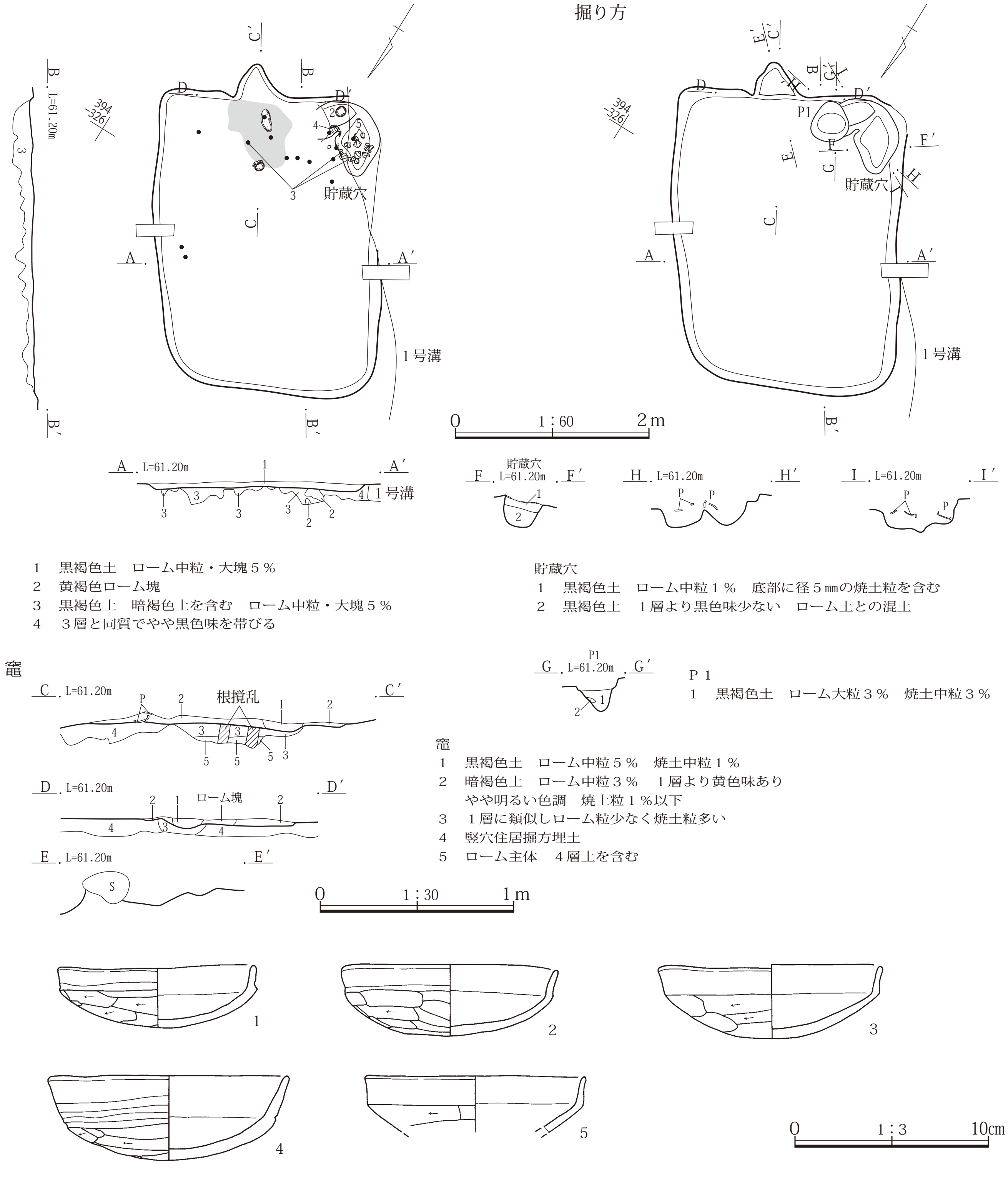
埋没土　ローム塊を含む黒褐色土を主体とする土で埋没する。埋没土中にローム塊や焼土粒・塊が混入し、レン



第６図　笠松遺跡　１区北側全体図



第７図　笠松遺跡　１区南側全体図



第８図　１区１号竪穴住居と出土遺物

ズ状堆積が認められないことから人為的による埋没の可能性がある。

床面　南東壁周辺でやや高くなるが、全体的に凹凸は少なくほぼ平坦である。使用による硬化面は不明瞭であるが、東寄りの１号ピット周辺でやや締まる。

貯蔵穴・柱穴　床面精査では検出できなかった。

他の施設　床下土坑２基、ピット２基が検出された。１号土坑の平面形状は隅丸長方形で、規模は長軸70㎝、短軸61㎝、深さ18㎝。２号土坑の平面形状は不整円形で、規模は長径96㎝、短径93㎝、深さ20㎝である。Ｐ１の平面形状は長方形で、規模は長辺20㎝、短辺15㎝、深さ７㎝である。Ｐ２の平面形状は不整円形で、規模は長径28

cm、短径27cm、深さ38cmである。１号床下土坑は位置と形状から貯蔵穴の可能性がある。

床下の状態　５～10cmの深さで大小の凹凸が著しいローム面となる。１号溝との重複部分に２号竪穴住居掘り方が残存し、床下から２基の土坑が検出された。掘り方埋土はローム塊を多量に含む人為的埋土である。また１号溝重複部分に沿って幅17～46cm、深さ４～５cmの溝状の掘り込みが認められたが、壁溝との確認はできなかった。

遺物出土状態　非掲載遺物は土師器大破片64.5ｇである。

所見　床面直上からの遺物がないため時期は明確にはできないが、重複する１号溝（８世紀後半代）や住居埋没土下層出土遺物から６世紀から７世紀と考えられる。

４号竪穴住居（第10図　PL.２・31）

位置　Ｘ＝435～438、Ｙ＝－381～384

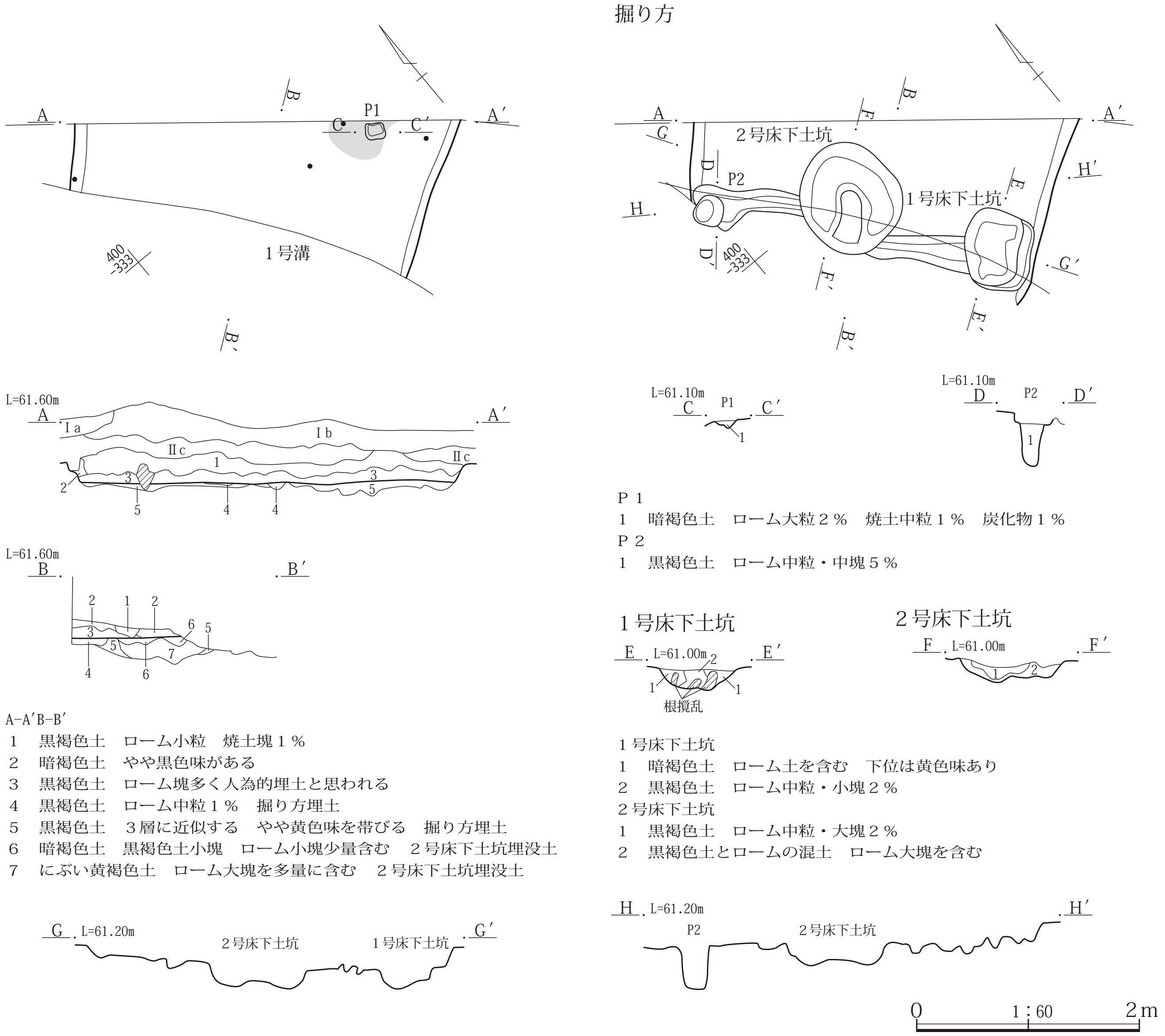
形状・規模　北側は調査区外のため不明。平面形状は長方形と考えられる。規模は東西長2.44ｍ、壁高７～13cmである。

主軸方向　Ｎ－72°－Ｅ

重複　なし。

埋没土　炭化物や焼土大塊、ローム塊などを多量に混入するため人為的な埋没と考えられる。

床面　ほぼ水平であり、硬化面は不明瞭である。地山を床としており掘り方はない。



第９図　１区２号竪穴住居

竃　東壁に付設される。主軸方向は住居主軸と同じ。規模は焚口幅50㎝、燃焼部奥行き50㎝である。燃焼部床面住居床よりやや高く、ほぼ平坦である。焚口から貯蔵穴周辺に構築材と考えられる礫が散乱する。

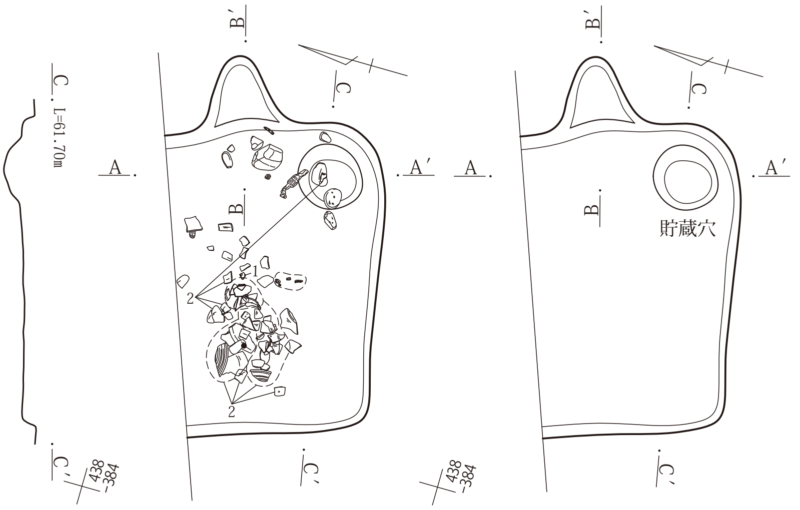
貯蔵穴　南東隅に位置し、平面形状は円形で、規模は長径52㎝、短径51㎝、深さ28㎝である。埋没は自然堆積と考えられる。

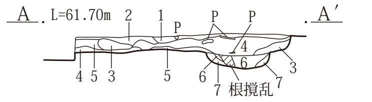
柱穴・周溝　床面精査でも検出できなかった。

遺物出土状態　竃に対面する西半分の床面から甕片が散乱し（第10図２）、埋没土からは杯蓋片（同図１）や鉄製品（同図３・４）が出土した。非掲載遺物は土師器大破片3.5ｇ、土師器小破片17.6ｇ、須恵器大破片71.4ｇ、須恵器小破片0.6ｇが出土する。

所見　床面及び埋没土に炭化物片及び焼土塊が多く焼失住居の可能性がある。時期は出土遺物から８世紀前半と考えられる。

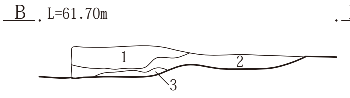
遺物出土状況





1　黒色土　焼土等を含まず　色調は淡い
2　黒色土　焼土粒と焼土塊少量含む
3　赤褐色土　焼土大塊多量に含む　炭化物を含む
4　黒褐色土　褐色土を斑状に含む　焼土小塊少量含む
5　黒褐色土　ローム塊　褐色塊を含む
6　黒褐色土　暗褐色土を含む　やや締まる　貯蔵穴埋土
7　暗褐色土　褐色土を含む　やや締まる　貯蔵穴埋土

0　1：60　2ｍ

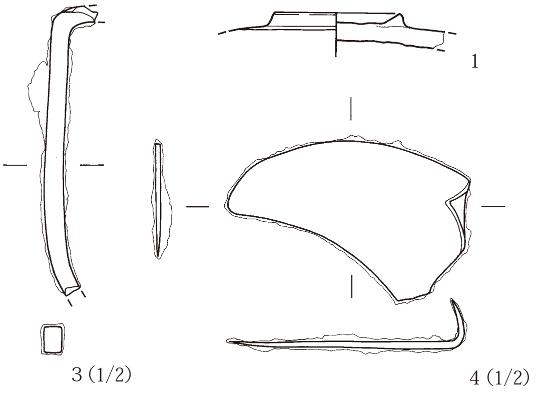


竃
1　黒色土　焼土粒・大塊少量含む
2　黒褐色土　淡い色調の黒色土　焼土粒を極少量含む
3　黒褐色土　ローム塊を含む　色調は黄色味が強い

0　1：30　1ｍ

2（1/6）

0　1：6　20㎝



0　1：3　10㎝

第10図　１区４号竪穴住居と出土遺物

（２）掘立柱建物

１区からは13棟の掘立柱建物が見つかっている。建物の時期は、出土遺物が少ないために特定できないものが多いが、14・15号掘立柱建物は中近世、その他の建物は古代に属すると考えられる。古代の建物群の性格については第６章第２節に記述した。

１号掘立柱建物（第11・12図　PL．３）

ほぼ同一位置での建て替えが認められるので、新しいものをA、古いものをBと呼び分けることにする。

位置　X＝424 ～ 439　Y＝－370 ～ 381

重複　北東部に４号粘土採掘坑が重複し、本建物が新しい。６号・７号掘立柱建物の東辺の柱穴と、本建物の東辺とは重複するが、新旧関係を確認できなかった。

主軸方向　AはN－23゜－W、BはN－25゜－W

規模・形態　A・Bともに桁行５間、梁行３間の、いわゆる側柱建物である。Aの柱穴はP１～16である。掘り方は一辺88 ～ 164㎝の方形か長方形で、柱痕から復元できる柱径は30 ～ 35㎝である。建物規模は桁行12.15m（東辺と西辺の平均）で40.5尺、梁行5.42m（北辺と南辺の平均）で18尺に復元でき、面積は65.43㎡である。柱間寸法は第３表のとおりであるが、特に桁行の柱間寸法にばらつきがある。梁行は、それぞれ東側２間の柱間は5.7尺でほぼ等しいが、西側の柱間はやや広くなっている。Bの柱穴はAに破壊されているものが多いが、11基を確認できた。掘り方は一辺74 ～ 143㎝程度の方形ないし長方形と推定される。柱痕が認められるものは少ないが、柱径は30㎝と推定される。建物規模は桁行12.71m（東辺と西辺の平均）で42.4尺、梁行4.99m（北辺と南辺の平均）で16.6尺に復元できるが、北辺はやや狭くなっている。面積は67.48㎡である。柱間寸法は不明なところもあるが、第４表のとおりであり、これもばらつきが大きい。

出土遺物　P16の柱痕から須恵器瓶が出土している。

所見　今回の調査区では最大規模の建物である。柱痕から出土した須恵器瓶は８世紀末～９世紀のものであり、建物の規模や柱穴の形状も合わせ考えると、その前後の時期のものと考えられる。

２号掘立柱建物（第13図　PL．３）

位置　X＝416 ～ 421、Y＝－387 ～ 390

規模・形態　調査できたのは一直線に並ぶピット３基のみであり、これを東辺として西の調査区外に延びていく建物と思われる。柱穴の掘り方は径70 ～ 85㎝の円形である。３基とも柱痕が残り、それによって計測すると東辺の長さは4.47m（14.9尺）、柱間は北から2.13m（7.1尺）、2.34m（7.8尺）なので、本来７尺＋８尺＝15尺を意識した設計なのではないだろうか。

出土遺物　なし。

所見　全体規模や形状は不明であり、遺物もないので時期は特定できない。

３号掘立柱建物（第14図　PL．３）

位置　X＝409 ～ 416、Y＝－383 ～ 389

重複　東側に１号基壇状遺構が重複し本建物が新しく、中央には12号溝が重複し本建物が古い。

主軸方向　N－57°－E

規模・形態　西側が調査区外となるため、全形は不明であるが、南辺で３間分を確認しており、南北３間、東西３間かそれ以上の総柱建物である。ただし、東辺の柱穴は北端のものを除いて小さく、柱筋もややずれているところがあり、そのためこれは廂のような施設であり、その西側の部分が建物本体であると思われる。柱穴の掘り方は径55 ～ 73㎝の円形ないし楕円形であるが、東辺のP６・９・13は0.23 ～ 0.31mと小さい。断面や掘り方底面の柱の当たりからみて、各柱の直径は20㎝前後である。建物の規模は、廂と思われる東辺で5.16m、建物本体の東辺のP２～P12では5.59m、南辺は東端のP13を除き、P10 ～ P12で3.62mである。柱間は、各柱筋が歪んでいるため、部分によりかなり差があり一定していないが、本体東辺のP２～P12で見ると、北から1.89m＋1.71m＋1.99mとなり、中央間が狭い。本体東辺と廂との幅は1.80 ～ 1.84mでほぼ一定し、６尺を意識しているようである。

出土遺物　なし。

所見　東側に廂状の施設をもつ総柱の掘立柱建物である。出土遺物はなく、時期は特定できない。

４号掘立柱建物（第15図　PL．３）

位置　X＝439 ～ 442、Y＝－368 ～ 374

重複　西に14号溝、東に15号溝が重複し、本建物が古い。

主軸方向　南辺の方位はN－68゜－E。

規模・形態　柱穴はP１～４の４基見つかり、東端（P３・4）は２基が重複している。断面形を見るとP１・２・４が類似しているが、柱間から考えてP１～３の３基が組み合うものと思われ、それを南辺として北側の調査区外に延びる建物であろう。ただし、東側も調査区境が近

いので、こちら側にも延びる可能性があり、南辺が２間だとは断定できない。Ｐ４は建て替えか、あるいは別の掘立柱建物のものである可能性が考えられるが、この付近は調査区が狭いので、組み合う柱穴は見つかっていない。柱穴はＰ１は円形、Ｐ２は方形、Ｐ３・４も方形と推定され、いずれにも柱痕が見られる。規模は長さ5.47ｍ、柱間は西から2.70＋2.77ｍであり、いずれも９尺を意識したものであろう。

出土遺物　なし。

所見　南辺しか調査できなかった。南側の５号掘立柱建物に長さ・方位が類似しているので、同様な建物である可能性があるが、距離が近いので同時存在とは考えられない。主要地方道足利・伊勢崎線歩道拡幅工事に伴う旧新田町教育委員会による発掘調査によって検出されたピットには、本建物の柱穴と考えられるものがある（第６図）。出土遺物はないが、建物方位が１号掘立柱建物に近似するので、時期も近接していると思われる。

５号掘立柱建物（第16図　PL．４）

位置　Ｘ＝432 ～ 441、Ｙ＝－367 ～ 373

重複　14号溝、219 ～ 221・223号ピットが重複し、本建物が古い。

主軸方向　西辺の方位はＮ－19゜－Ｗ。

規模・形態　調査区内では２間×２間の総柱建物であるが、東側は調査区外となるので、東にさらに延びている可能性もある。柱穴はＰ１～８の８基があり、歪みはあるもののいずれも方形ないし長方形である。そのうち北東部（Ｐ３・４）と南西隅（Ｐ７・８）は２基重複し、建て替えあるいは別の建物の重複が考えられるが、形態や柱間から考えてＰ４・７と他の４基とで１棟の建物と判断した。北辺は5.63ｍで、柱間は西から2.92ｍ＋2.71ｍであり、やや端数があるが、10尺＋９尺＝19尺を意識したものと思われる。西辺は6.26ｍで、柱間は北から2.86ｍ＋3.40ｍであり、これもやや誤差があるが、完数値をとると10尺＋11尺であると思われる。

出土遺物　なし。

所見　いずれの辺も柱間が９～ 11尺と、非常に広い建物である。出土遺物はないが、１号掘立柱建物と建物方位が近似するので、近い時期のものと考えられる。

６号掘立柱建物（第17図　PL．４）

位置　Ｘ＝429 ～ 437、Ｙ＝－372 ～ 379

重複　東辺の北側２本の柱穴が1号掘立柱建物柱穴Ｐ５・６が重複するはずであるが、調査時に把握できず、新旧関係は不明である。北東側には４号粘土採掘坑が重複し、本建物が新しい。

主軸方向　Ｎ－23゜－Ｗ

規模・形態　桁行・梁行２間の南北棟の総柱建物である。柱穴は北東の２基を除く７基が発見され、掘り方は径33 ～ 72㎝の円形である。Ｐ７を除く６基には柱痕が認められ、復元できる柱の径は10 ～ 15㎝である。桁行は6.18ｍで、西辺の柱間は北から2.98ｍ＋3.20ｍであり、10尺＋10.6尺と非常に広い。梁行は南辺で4.54ｍで、柱間は西から2.15ｍ＋2.39ｍであり、7.2尺＋８尺である。面積は28.38㎡である。

出土遺物　なし。

所見　出土遺物がなく、時期は特定できない。重複するはずの１号掘立柱建物とは新旧関係が把握できなかったが、方位が一致するので近い時期が考えられ、さらに、柱穴の形状からみて、この建物が新しい可能性が強いものと思われる。

７号掘立柱建物（第18図　PL．４）

位置　Ｘ＝424 ～ 430、Ｙ＝－370 ～ 377

重複　東辺の柱穴Ｐ３・Ｐ６は１号掘立柱建物柱穴Ｐ８・９の掘り方底面で確認できたものであり、新旧関係は確認できなかった。

主軸方向　東西方向を計測してＮ－74°－Ｅ

規模・形態　ほぼ正方形の、２間×２間の総柱建物で、南東隅の柱穴は確認できなかった。Ｐ８は攪乱で上面を壊されているが、他の７基は径47 ～ 78㎝のやや歪んだ円形である。柱痕は５基で確認でき、それから復元すると柱径は10 ～ 20㎝である。規模は中央で計測して南北4.26ｍ、柱間は北から2.08ｍ＋2.18ｍ、東西4.29ｍ、柱間は西から2.24ｍ＋2.05ｍであり、面積は18.32㎡である。

出土遺物　なし。

所見　出土遺物がなく時期は特定できない。重複するはずの１号掘立柱建物とは新旧関係が把握できなかったが、柱穴の形状からみて本建物が新しい可能性が強いものと思われる。８号掘立柱建物とは方向が一致する。

８号掘立柱建物（第19・20図　PL．４）

位置　Ｘ＝423 ～ 430、Ｙ＝－382 ～ 388

重複　９号掘立柱建物、263号ピットより本建物が新しく、264号ピットより古い。

主軸方向　Ｎ－16°－Ｗ

規模・形態　２間×２間の南北棟であり、周辺の建物から考えて総柱建物と推定されるが、中央部を264号ピットに破壊されているため、断定できない。南辺がやや歪み、また、各辺の中央の柱穴の位置も不揃いである。各柱穴は径61～95㎝の円形ないし楕円形である。規模は東辺5.09m、西辺5.22m、北辺4.84m、南辺4.82mで、面積は24.73㎡である。柱間は不揃いで、計測値は第11表参照。

出土遺物　なし。

所見　出土遺物がなく時期は特定できない。７号掘立柱建物とは方向がほぼ一致する。

９号掘立柱建物(第21・22図　PL．４)

位置　X＝425～431、Y＝－383～391

重複　８号掘立柱建物と261～264号ピットと重複し、本建物が古い。

主軸方向　N－70°－E

規模・形態　桁行３間、梁行２間の東西棟の総柱建物である。南西の８本の柱穴は２本ずつの布掘りになっている。その他の柱穴は径63～83㎝の円形であり、東辺中央の柱穴は確認できなかった。桁行は5.70mで、柱間はやや不揃いだが、平均すると西から1.87m＋2.30m＋1.52mであり、完数尺だとすると６尺＋８尺＋５尺を意識していると思われる。梁行は4.67～4.73mで、柱間は平均すると北から2.36m＋2.34mであり、いずれも８尺に少し欠ける長さとなる。面積は26.72mである。

出土遺物　なし。

所見　出土遺物がなく時期は特定できない。北側にある１号柵列とは方向が一致し関連施設の可能性がある。

11号掘立柱建物(第23図　PL．４)

位置　X＝433～436、Y＝－387～391

重複　236・243号ピットと重複し、236号が古いが、243号とは新旧不明である。

主軸方向　不明。

規模・形態　重複のある３基のピットを確認できた。北に隣接した旧新田町教育委員会の調査区でも３基のピットが並んでいるのが確認されているので(２号掘立柱建物と呼ばれている)、それと組み合い、その南辺をなすものと考えられる。本書では、断面で確認できたものをＰ１～５と名付けて報告するが、実際にはそれ以上の重複があり、数回の建て替えが想定できる。しかし、調査区内ではそれがどのように組み合うかまでは把握できず、規模、主軸方向などは確定できない。現状では、東西２間、南北１間以上の総柱建物であるということ以外は不明である。

出土遺物　なし。

所見　出土遺物がなく時期は特定できない。

12号掘立柱建物(第24図　PL．４)

位置　X＝413～419、Y＝－373～379

重複　１号基壇状遺構と重複する。版築土を切っていることから、本建物が新しい。

主軸方向　N－64°－E

規模・形態　桁行３間、梁行２間の東西棟の総柱建物である。柱穴は径33～82㎝の円形で、不揃いな配置であり、全形も歪んでいる。規模は桁行北辺で5.05m、南辺で4.92m、梁行東辺で3.16m、西辺で3.46mであり、面積は16.43㎡である。柱間の計測値は第14表参照。

出土遺物　なし。

所見　調査当時は桁行２間梁行１間の隣接する２棟の掘立柱建物と考えたが、柱穴埋没土が類似することから整理作業によって桁行３間、梁行２間の総柱建物とした。出土遺物がないので時期は特定できない。

14号掘立柱建物(第25図)

位置　X＝377～381、Y＝－323～327

重複　15号掘立柱建物より古い。１号溝との新旧関係は不明である。

主軸方向　N－３°－W

規模・形態　南北4.00～4.06m、東西4.08～4.10mのほぼ正方形の建物で、南北１間、東西２間の側柱建物と想定される。北辺中間の柱穴は１号溝に破壊されたらしい。

出土遺物　なし。

所見　規模や形状から時期は中近世と考えられる。

15号掘立柱建物(第26・27図)

位置　X＝325～332、Y＝－325～329

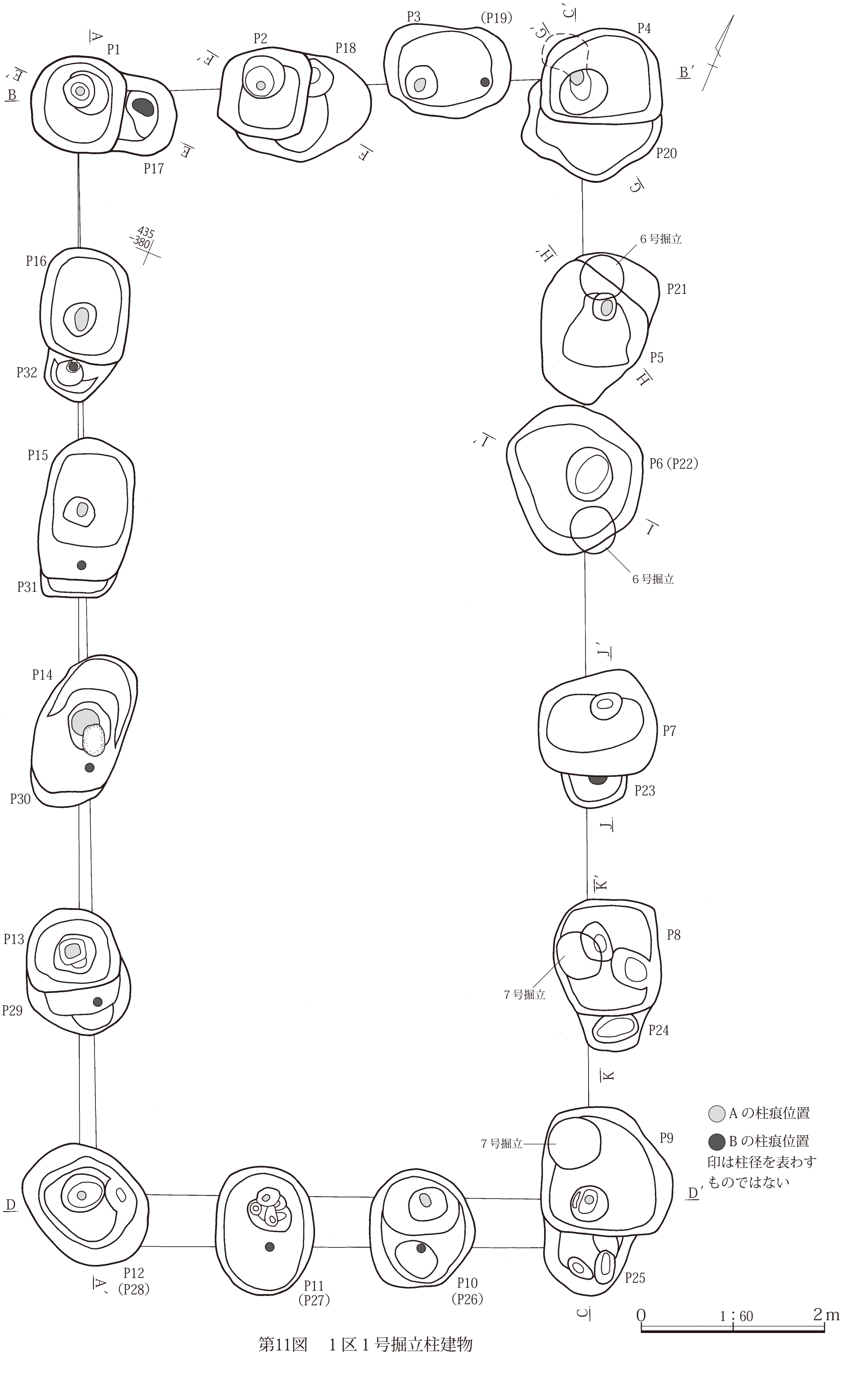
重複　14号掘立柱建物より新しい。

主軸方向　N－３°－E

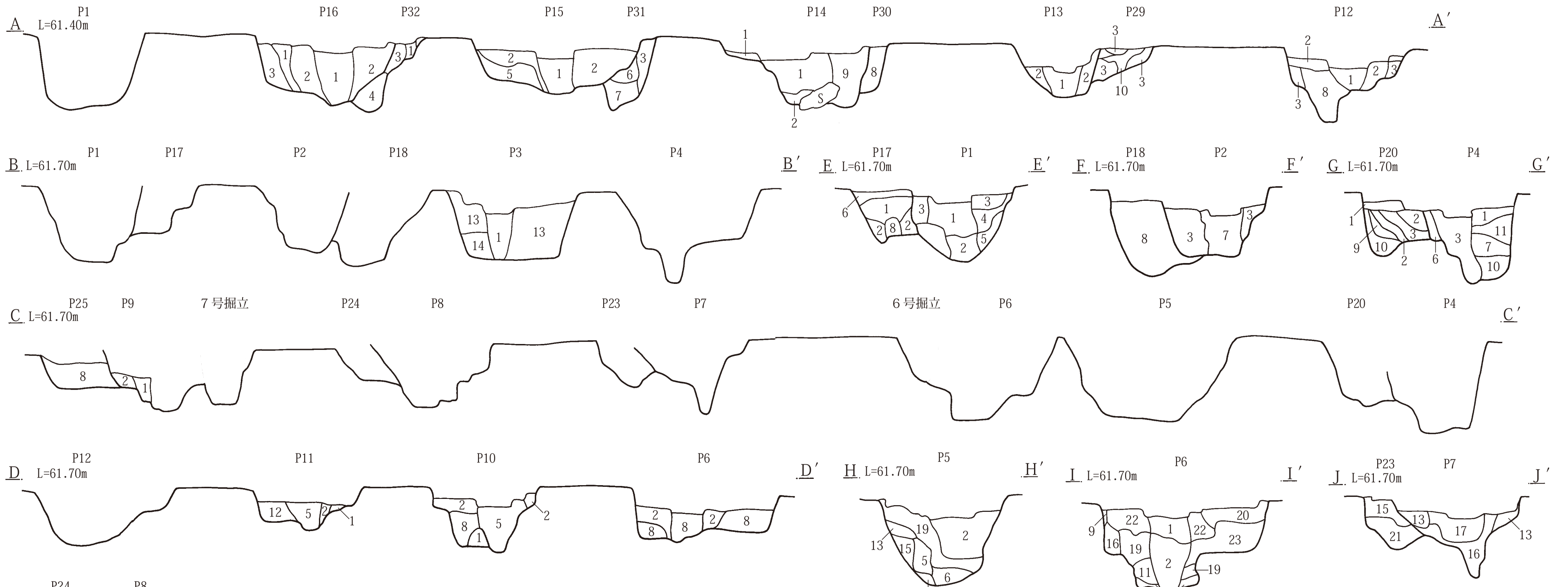
規模・形態　桁行３間、梁行１間の南北棟の側柱建物である。東辺7.04m、北辺4.40mで、南西隅の柱穴が確認されていないため西辺、南辺は不明であるが、北辺に比べ南辺が短く、全体として台形に近い外形である。

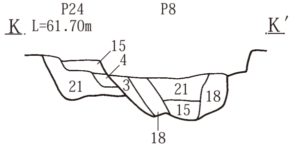
出土遺物　Ｐ６から須恵器片57ｇが出土しているが、混入と考えられる。

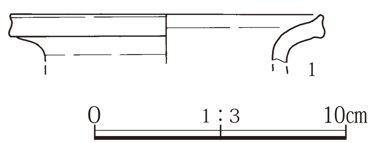
所見　規模や形状から時期は中近世と考えられる。



第11図　１区１号掘立柱建物







１区１号掘立柱建物
1　褐色土
2　褐色土と黄褐色土塊の混土
3　黒褐色土と黄褐色土塊の混土
4　黄褐色土　暗褐色土塊を含む。
5　褐色土　黄褐色土大塊多量に含む
6　暗褐色土
7　暗褐色土　黄褐色土粒・黒褐色土をわずかに含む
8　暗褐色土と黄褐色土塊の混土
9　褐色土　黄褐色土塊を含む
10　黄褐色土　褐色土をわずかに含む
11　黒褐色土
12　黒褐色土　黄褐色土粒を含む
13　黄褐色土　ローム塊多量に含む
14　黄褐色土　ローム小塊多量に含む
15　黒褐色土　ローム小塊少量含む
16　黒褐色土　ローム小塊を含む
17　暗褐色土　ローム小塊・褐色土大塊を含む
18　黒褐色土　ローム大塊ごく多量に含む
19　黒褐色土　ローム小・大塊を含む
20　黒褐色土　ローム大塊・褐色土塊を含む
21　黒褐色土　ローム大塊多量に含む
22　黄褐色土　黒色土を含む
23　暗褐色土と黒褐色土の混土

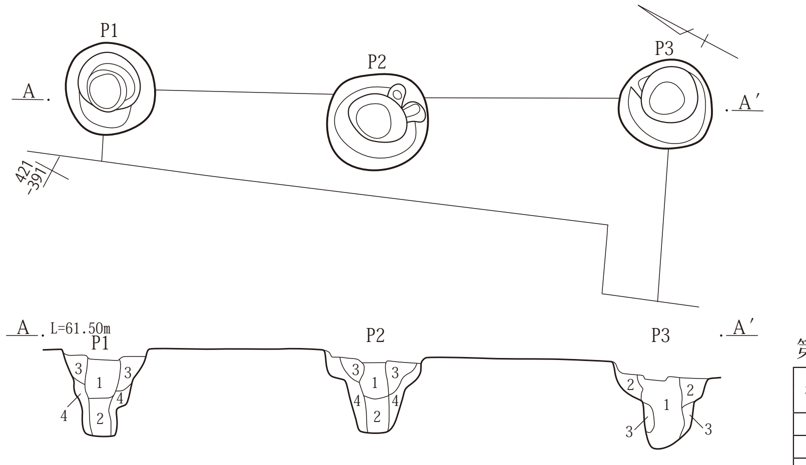
第３表　笠松遺跡１区１Ａ号掘立柱建物計測表

柱穴NO.	規模(cm)			形状	面積65.429㎡
	長径	短径	深さ		柱間の寸法(m)
P 1	106	102	73	隅丸方形	P1-P2 1.94
P 2	98	92	87	方形	P2-P3 1.72
P 3	136	98	97	長方形	P3-P4 1.72
P 4	128	104	94	方形	P4-P5 2.46
P 5	162	118	89	方形	P5-P6 1.91
P 6	154	144	82	楕円形	P6-P7 2.50
P 7	128	110	82	方形	P7-P8 2.60
P 8	128	116	61	方形	P8-P9 2.77
P 9	141	128	62	方形	P9-P10 1.72
P 10	128	114	61	円形	P10-P11 1.71
P 11	140	104	64	楕円形	P11-P12 2.03
P 12	146	110	72	楕円形	P12-P13 2.70
P 13	94	88	57	長方形	P13-P14 2.50
P 14	164	94	66	楕円形	P14-P15 2.28
P 15	154	99	58	長方形	P15-P16 2.11
P 16	121	96	74	長方形	P16-P1 2.46

第４表　笠松遺跡１区１Ｂ号掘立柱建物計測表

柱穴NO.	規模(cm)			形状	面積65.429㎡
	長径	短径	深さ		柱間の寸法(m)
P 17	56+α	85		楕円形	P17-P18 1.87
P 18	68+α	110		楕円形	P18-P19 1.84
P 19	－	－		－	P19-P20 1.00
P 20	143	63+α		楕円形	P21-P22 2.48
P 21	－	－		－	P21-P22 1.93
P 22	－	－		－	P22-P23 3.26
P 23	38+α	68		楕円形	P23-P24 1.85
P 24	－	－		楕円形	P24-P25 3.26
P 25	65+α	92		楕円形	P25-P26 1.74
P 26	－	－		－	P26-P27 1.65
P 27	－	－		－	P27-P28 1.87
P 28	－	－		－	P28-P29 2.68
P 29	49+α	94		楕円形	P29-P30 2.53
P 30	－	－		－	P30-P31 2.20
P 31	－	－		長方形	P31-P32 2.19
P 32	46+α	74		長方形	P32-P17 3.02

第12図　１区１号掘立柱建物土層断面図と出土遺物



P１
1　黒色土　ローム小塊少量含む　柱痕
2　黒色土　ローム塊多量に含む　柱痕
3　黒褐色土　ローム中塊　斑状の褐色土塊少量含む
4　黒褐色土　ローム大塊多量に含む

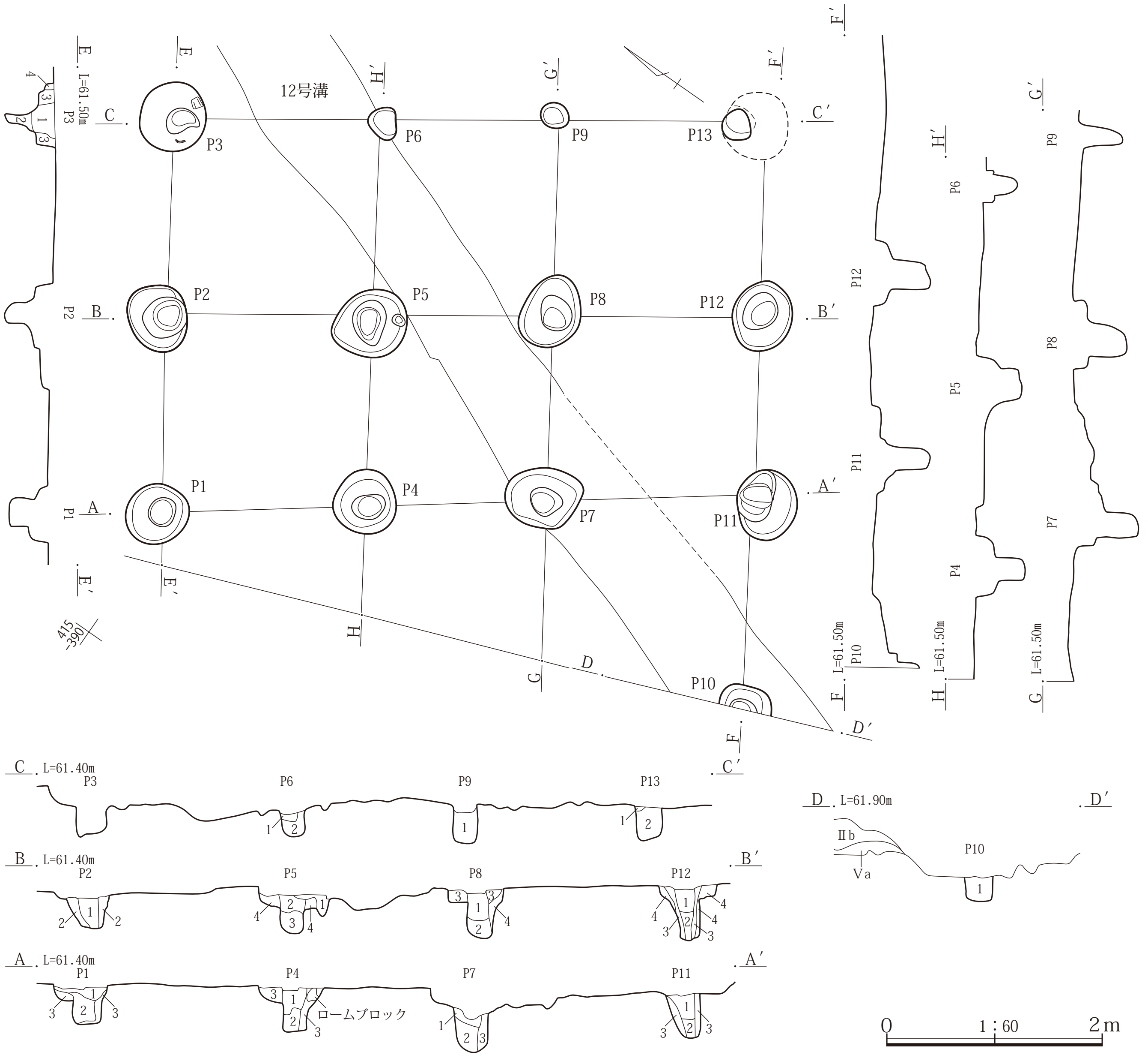
P２
1　黒色土　ローム小塊少量含む　柱痕
2　黒褐色土　ローム小塊多量に含む　締まりなし　柱痕
3　黒褐色土　淡い色調　褐色土塊を斑状に含む
4　黒褐色土　ローム大塊多量に含む　色調も明るい

P３
1　黒色土　ローム小塊少量含む　柱痕
2　黒褐色土　ローム大塊多量に含む　色調は明るい
3　黒褐色土　ローム小粒多量に含む　黄色味が強い

第５表　笠松遺跡１区２号掘立柱建物計測表

柱穴NO.	規　模(cm)			形状	
	長径	短径	深さ		柱間の寸法(m)
P１	73	70	68	円形	P1-P2 2.13
P２	85	75	65	円形	P2-P3 2.34
P３	75	70	68	円形	―

第13図　１区２号掘立柱建物



第14図　１区３号掘立柱建物

１区３号掘立柱建物土層注記

Ｐ１
1　黒褐色土　ローム小塊少量含む
2　黒褐色土　ローム小～大塊少量含む
3　黒褐色土　ローム塊多量に含む

Ｐ２
1　黒色土　均一土　柱痕
2　黒褐色土　ローム小塊少量含む

Ｐ３
1　黒褐色土　粘性ややあり締まり弱い　柱痕
2　黒褐色土　１層に類似　粘性あり　柱痕
3　暗褐色土　黄褐色土小塊微量含む　粘性締まりややあり
4　暗褐色土　２層より締まりあり

Ｐ４
1　黒褐色土　ローム粒少量含む　淡い色調　柱痕
2　黒色土　色調は１層より黒い　柱痕
3　黒褐色土　ローム塊多量に含む

Ｐ５
1　黒褐色土　ローム塊なし
2　黒色土　１層より黒い色調の均一土　柱痕
3　黒色土　ローム塊と褐色塊を含む　２層より明るい色調　柱痕
4　黒褐色土　ローム大塊を含む

Ｐ６
1　黒褐色土　ローム小粒１％
2　黒褐色土　ローム小粒・大塊３％

Ｐ７
1　黒褐色土　ローム小塊少量含む
2　黒褐色土　ローム小塊多量に含む　ローム大塊少量含む
3　黒褐色土　ローム塊多量に含む

Ｐ８
1　黒褐色土　ローム粒少量含む　淡い色調の黒色土　柱痕
2　黒色土　１層より色調は黒い　柱痕
3　黒色土　ローム大塊と斑状の褐色土を含む
4　黒褐色土　ローム塊多量に含む

Ｐ９
1　黒褐色土　ローム小粒・小塊１％　やや締まる

Ｐ10
1　黒色土　ローム大塊を含む

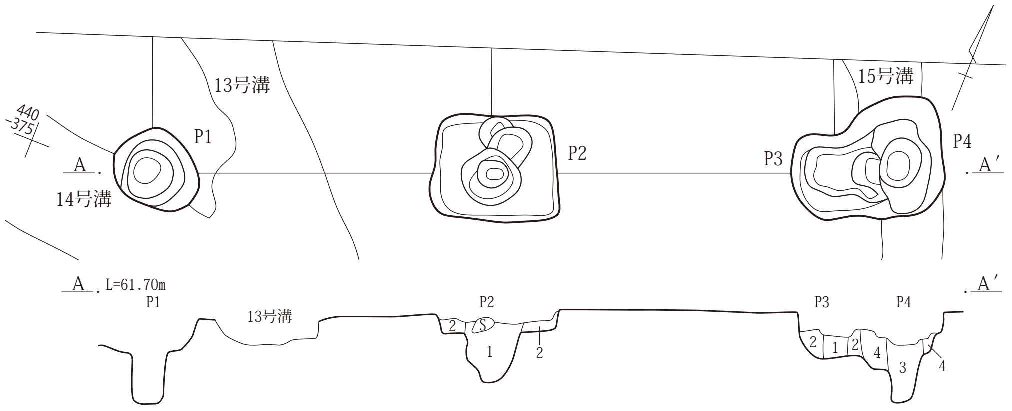
Ｐ11
1　黒褐色土　小粒のローム粒少量含む　淡い色調　柱痕
2　黒色土　１層より色調は黒い　柱痕
3　黒褐色土　多量のローム塊を含む

Ｐ12
1　黒褐色土　ローム粒少量含む　淡い色調の黒色土　柱痕
2　黒色土　１層より色調黒い　柱痕
3　黒色土　ローム小塊と斑状の褐色土を含む
4　黒褐色土　ローム塊多量に含む

Ｐ13
1　黒褐色土　緻密２層の黒褐色土を含む
2　黒褐色土　１層より黒色味あり　褐色土中粒１％

第６表　笠松遺跡１区３号掘立柱建物計測表

柱穴NO.	規　模(cm)			形状	
	長径	短径	深さ		柱間の寸法(m)
Ｐ１	58	55	37	円形	P1-P2 1.83 P1-P4 1.93
Ｐ２	63	55	33	円形	P2-P3 1.84 P2-P5 1.89
Ｐ３	64	62	45	円形	P3-P6 1.86
Ｐ４	60	59	45	円形	P4-P5 1.75 P4-P7 1.65
Ｐ５	72	63	42	円形	P5-P6 1.84 P5-P8 1.71
Ｐ６	31	25	32	円形	P6-P9 1.61
Ｐ７	73	57	59	楕円形	P7-P8 1.72 P7-P11 1.94
Ｐ８	69	55	50	楕円形	P8-P9 18.3　P8-P12 1.99
Ｐ９	28	23	39	円形	P9-P13 1.69
Ｐ10	50	22	33	－	P10-P11 1.98
Ｐ11	65	55	52	楕円形	P11-P12 1.64
Ｐ12	65	56	53	楕円形	P12-P13 1.80
Ｐ13	29	27	29	円形	－



１区４号掘立柱建物土層注記

Ｐ２
1　暗褐色土　粘性ややあり締まり弱い　柱抜き取り痕か
2　黄褐色土　粘性あり締まりややあり

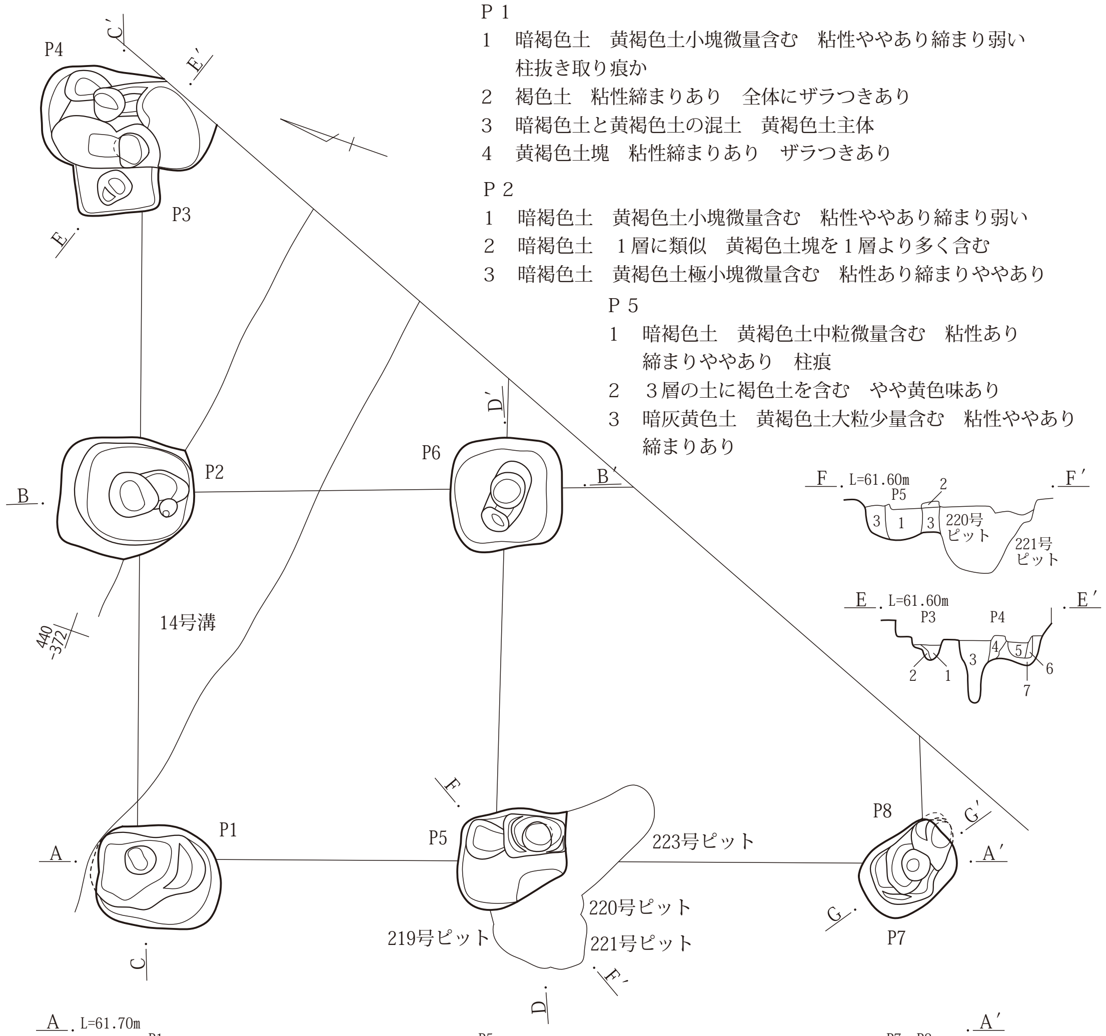
Ｐ３、Ｐ４
1　暗褐色土　下層で黄褐色土を含む　柱痕
2　灰黄色土　上層で暗褐色土を含む
3　暗褐色土と黄褐色土の混土　黄褐色土小粒を含む　柱痕
4　暗褐色土　黄褐色土塊を含む

第７表　笠松遺跡１区４号掘立柱建物計測表

柱穴NO.	規　模(cm)			形状	
	長径	短径	深さ		柱間の寸法(m)
Ｐ１	70	60	65	楕円形	P1-P2 2.70
Ｐ２	102	84	60	方形	P2-P3 2.77
Ｐ３	70	(47)	38	方形か	
Ｐ４	95	77	72	方形か	

0　1：60　2ｍ

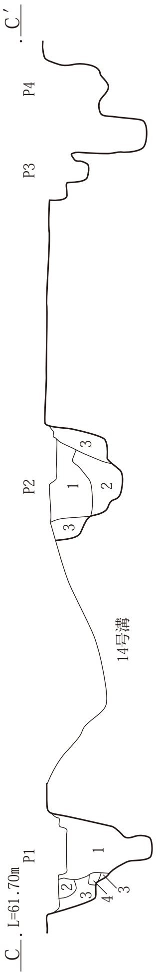
第15図　１区４号掘立柱建物

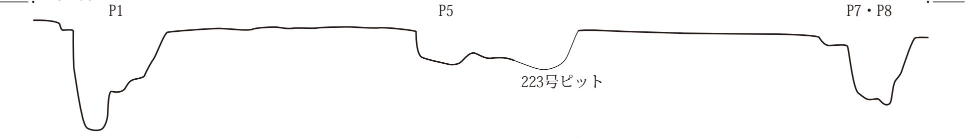


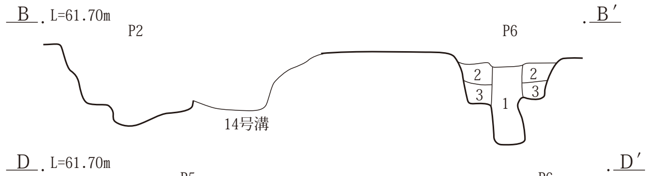
Ｐ１
1　暗褐色土　黄褐色土小塊微量含む　粘性ややあり締まり弱い
　柱抜き取り痕か
2　褐色土　粘性締まりあり　全体にザラつきあり
3　暗褐色土と黄褐色土の混土　黄褐色土主体
4　黄褐色土塊　粘性締まりあり　ザラつきあり

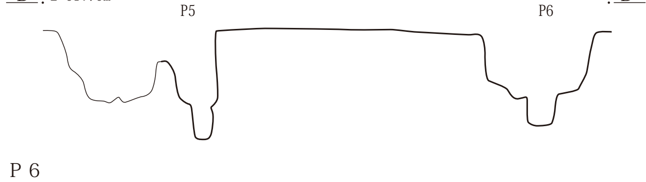
Ｐ２
1　暗褐色土　黄褐色土小塊微量含む　粘性ややあり締まり弱い
2　暗褐色土　１層に類似　黄褐色土塊を１層より多く含む
3　暗褐色土　黄褐色土極小塊微量含む　粘性あり締まりややあり

Ｐ５
1　暗褐色土　黄褐色土中粒微量含む　粘性あり
　締まりややあり　柱痕
2　３層の土に褐色土を含む　やや黄色味あり
3　暗灰黄色土　黄褐色土大粒少量含む　粘性ややあり
　締まりあり



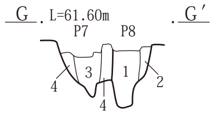






Ｐ３，Ｐ４
1　暗褐色土と黄褐色土の混土　粘性締まりあり
2　黄褐色土　粘性締まりあり
3　暗褐色土　黄褐色土小塊微量含む　粘性ややあり締まり弱い　柱痕
4　黄褐色土と暗褐色土の混土　　黄褐色土中に暗褐色土を含む
5　黒褐色土　暗褐色土を疎らに含む　粘性ややあり締まり弱い
6　黄褐色土塊　黄褐色土が塊状に堆積する
7　黒褐色土と黄褐色土小塊の混土

Ｐ６
1　暗褐色土　黄褐色土中粒微量含む　粘性ややあり締まり弱い　柱痕
2　暗褐色土　黄褐色土中塊微量　粘性締まりややあり
3　暗褐色土　黄褐色土極小塊微量含む　２層より締まりあり

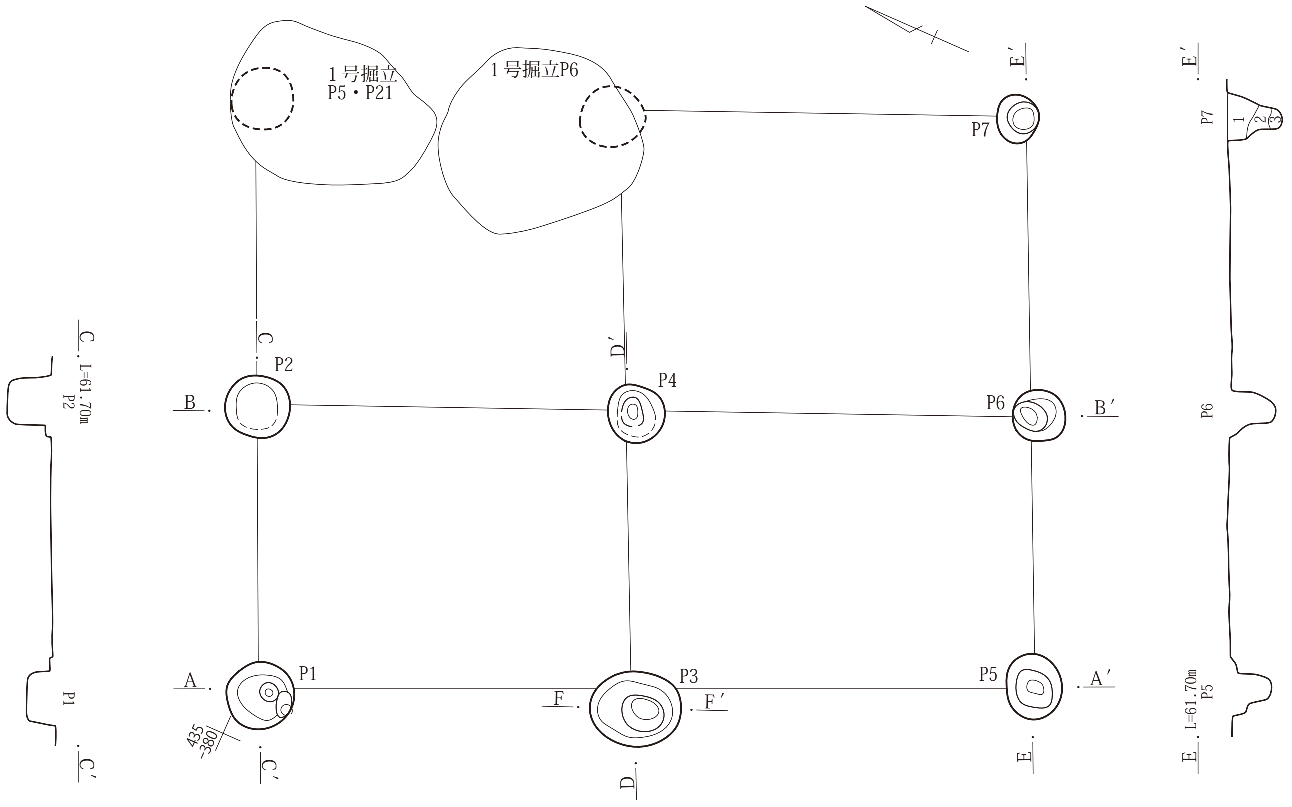


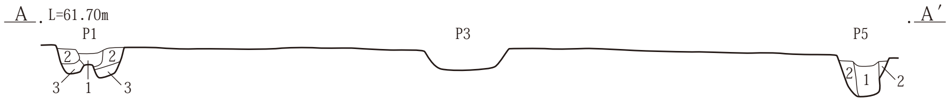
Ｐ７、Ｐ８
1　暗褐色土　粘性締まりややあり
　色調やや明るい　柱痕
2　褐色土　粘性締まりややあり
3　暗褐色土　黄褐色土中粒微量含む
　粘性締まりややあり　柱痕
4　暗褐色土　粘性あり締まりややあり
　３層より色調明るい

第８表　笠松遺跡１区５号掘立柱建物計測表

柱穴NO.	規　模(cm)			形状	
	長径	短径	深さ		柱間の寸法(m)
Ｐ１	100	83	83	方形	P1-P2 2.92 P1-P5 2.86
Ｐ２	107	95	67	方形	P1-P4 2.71 P2-P6 2.96
Ｐ３	66	(37)	34	方形か	
Ｐ４	139	77	53	長方形	
Ｐ５	(87)	(75)	88	方形	P5-P6 2.97 P5-P7 3.40
Ｐ６	90	89	74	隅丸方形	
Ｐ７	60	(45)	49	方形か	
Ｐ８	55	(33)	56	方形か	

第16図　１区５号掘立柱建物

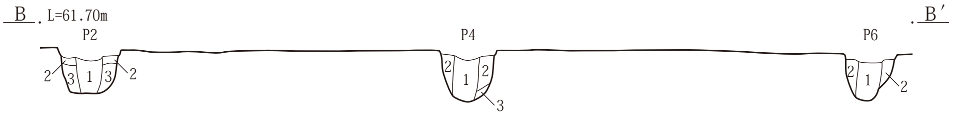




P１
1　黒褐色土　ローム小塊多量に含む　柱痕
2　黒褐色土　ローム塊多量に含む　１層より明るい色調
3　黄褐色土　ローム塊多量に含む

P５
1　暗褐色土　ローム小塊　黒色土塊少量含む　柱痕
2　黒褐色土　ローム塊の量が多い

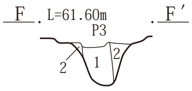
P７
1　褐色土　粘性ややあり締まり弱い
2　暗褐色土　粘性ややあり締まり弱い
3　暗褐色土　２層に類似　粘性強い



P２
1　暗褐色土　ローム小塊　黒色土塊少量含む　柱痕
2　暗褐色土　１層より明るい色調
3　黒褐色土　淡い色調の黒色土でローム小塊多量に含む

P４
1　暗褐色土　ローム小塊少量　黒色土塊少量含む　柱痕
2　黒褐色土　淡い色調の黒色土　ローム小塊多量に含む
3　黒色土　黒味の強い黒色土でローム塊を含む

P６
1　暗褐色土　Ｐ２の１層より黄色味が強い　柱痕
2　黒褐色土　淡い色調の黒色土　ローム小塊多量に含む

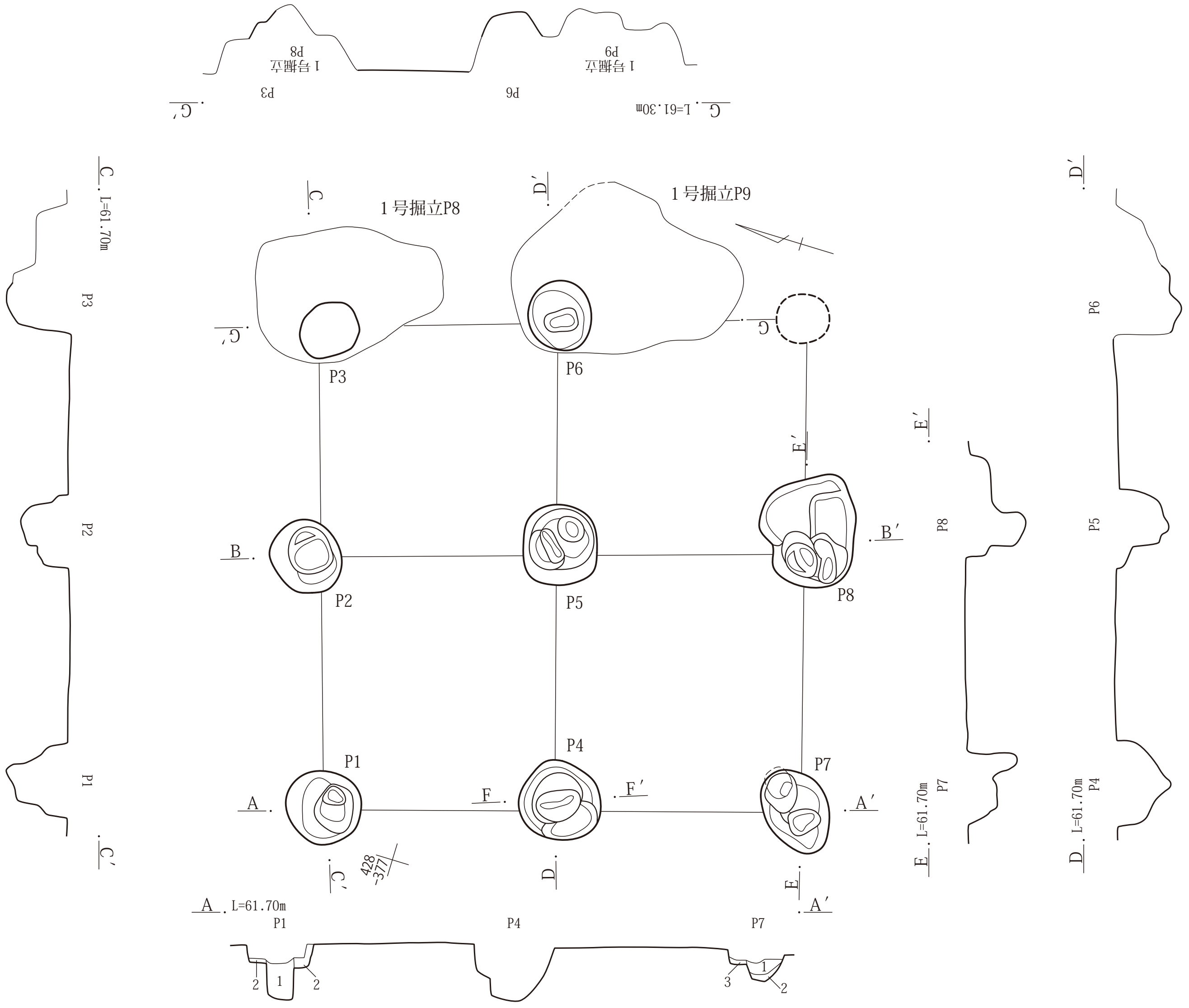


P３
1　褐色土　ローム小塊少量　黒色土塊少量含む　柱痕
2　黒褐色土　淡い色調の黒色土　ローム小塊多量に含む

第９表　笠松遺跡１区６号掘立柱建物計測表

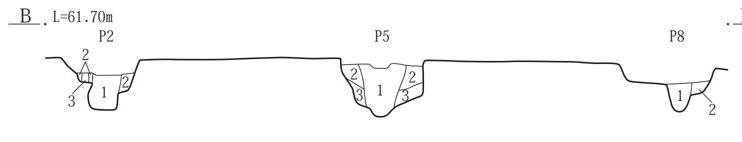
柱穴NO.	規　模(cm)			形状	面積28.38㎡
	長径	短径	深さ		柱間の寸法(m)
P１	55	54	25	円形	P1-P2 2.27 P1-P3 2.98
P２	52	49	37	円形	P2-P4 2.94
P３	72	60	38	円形	P3-P4 2.21 P3-P5 3.20
P４	48	45	43	円形	P4-P6 3.24
P５	52	44	34	円形	P5-P6 2.15
P６	44	43	37	円形	P6-P7 2.39
P７	39	33	44	円形	

第17図　１区６号掘立柱建物



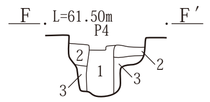
P１
1　黒褐色土　黄褐色土中粒少量含む　粘性ややあり締まり弱い　柱痕
2　黒褐色土と黄褐色土の混土

P７
1　黒褐色土　黄褐色土小粒少量含む　粘性ややあり締まり弱い
2　黒褐色土と黄褐色土の混土
3　暗褐色土と黄褐色土の混土　粘性やや弱く締まりあり



P２
1　黒褐色土　黄褐色土中粒少量含む　粘性ややあり締まり弱い　柱痕
2　黒褐色土　粘性ややあり締まりあり
3　黄褐色土塊　締まりあり粘性やや弱い

P５
1　黒褐色土　黄褐色土中粒少量含む　粘性ややあり締まり弱い　柱痕
2　黄褐色土と黒褐色土の混土
3　暗褐色土と黄褐色土の混土　粘性やや弱く締まりあり



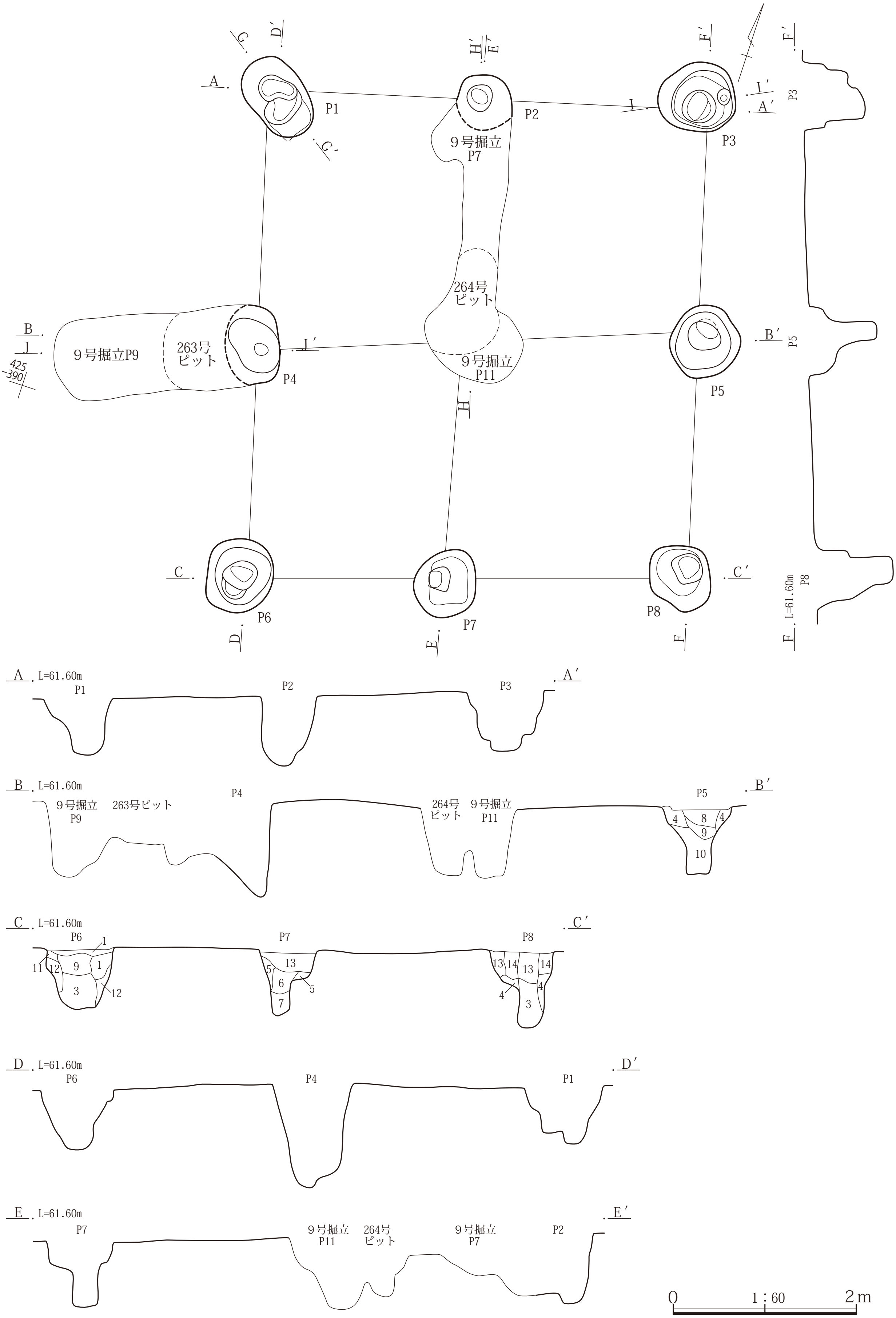
P４
1　黒褐色土　黄褐色土中粒少量含む
　粘性ややあり締まり弱い　柱痕
2　黒褐色土　粘性ややあり締まりあり
3　黒褐色土と黄褐色土の混土

第10表　笠松遺跡１区７号掘立柱建物計測表

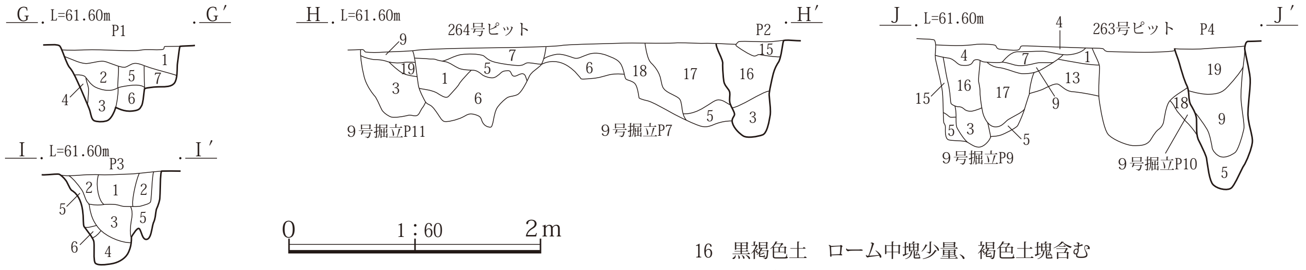
柱穴NO.	規　模(cm)			形状	面積18.32㎡
	長径	短径	深さ		柱間の寸法(m)
P１	68	63	54	円形	P1-P2 2.23 P1-P4 2.04
P２	67	59	39	円形	P2-P3 2.03 P2-P5 2.08
P３	53	47	56	円形	P3-P6 2.10
P４	73	68	50	円形	P4-P5 2.24 P4-P7 2.15
P５	70	65	48	円形	P5-P6 2.05 P5-P8 2.18
P６	62	56	58	円形	
P７	78	57	46	楕円形	P7-P8 2.25
P８	74	(46)	53	円形	

0　1：60　2m

第18図　１区７号掘立柱建物



第19図　１区８号掘立柱建物

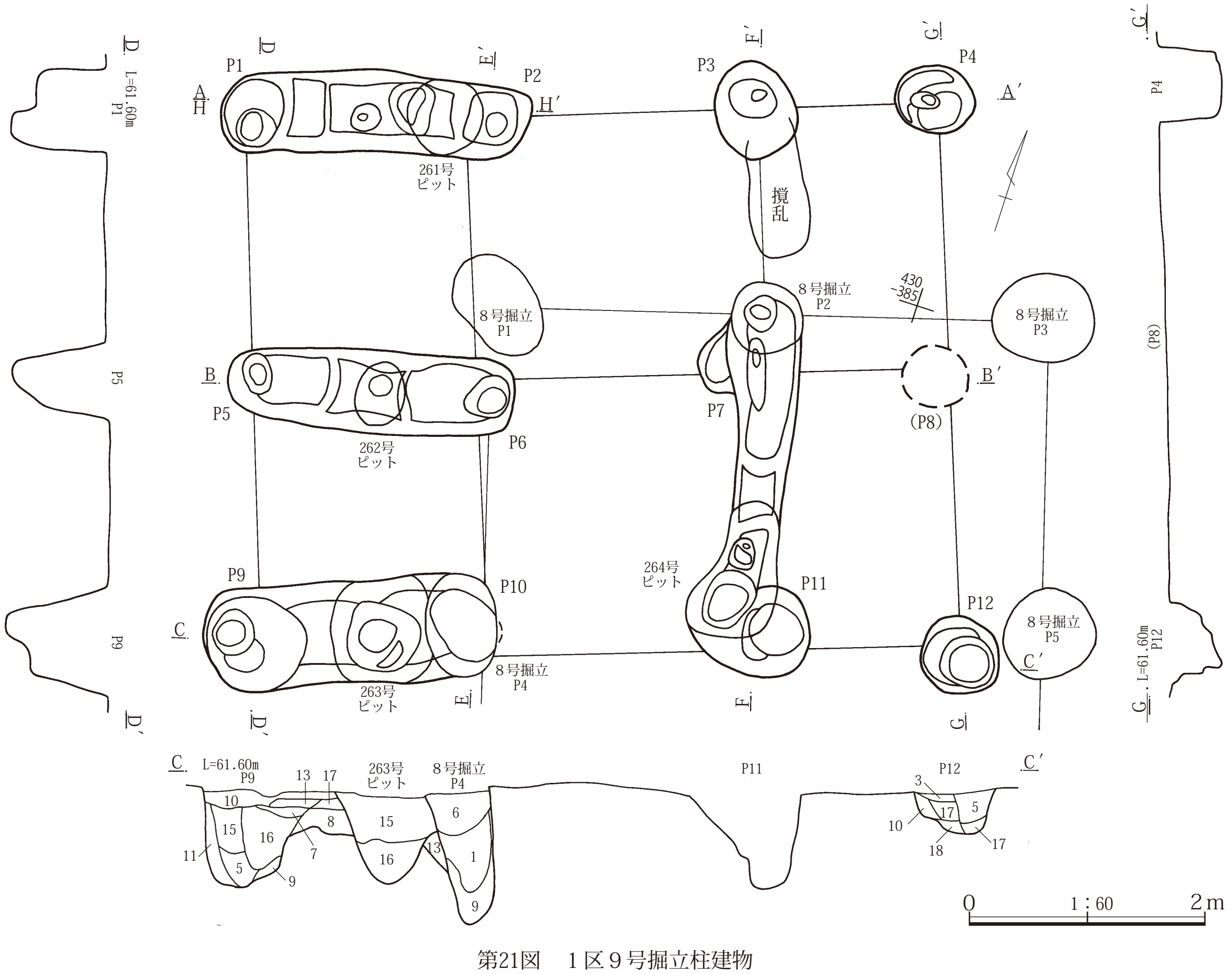


８号掘立柱建物
1　黒褐色土　ローム塊少量含む
2　黒褐色土　ローム大塊少量含む
3　黒褐色土　均質
4　黒褐色土　ローム小塊多量に含む
5　黒褐色土　ローム塊多量に含む
6　黒褐色土　ローム塊僅かに含む
7　黒褐色土　ローム小塊やや多量に含む
8　黒褐色土　ローム粒・小塊含む
9　黒褐色土　ローム小塊少量含む
10　にぶい黄褐色土　ローム粒・塊多量に含む
11　褐灰色土　ローム中塊含む
12　黄灰色土　ローム塊やや多量に含む
13　黒褐色土　褐色土塊含む
14　黒褐色土　ローム粒少量含む
15　褐色土　ローム塊含む
16　黒褐色土　ローム中塊少量、褐色土塊含む
17　黒褐色土　ローム大塊多量に含む
18　黒褐色土　ローム塊ごく多量に含む
19　黒褐色土　ローム大塊含む

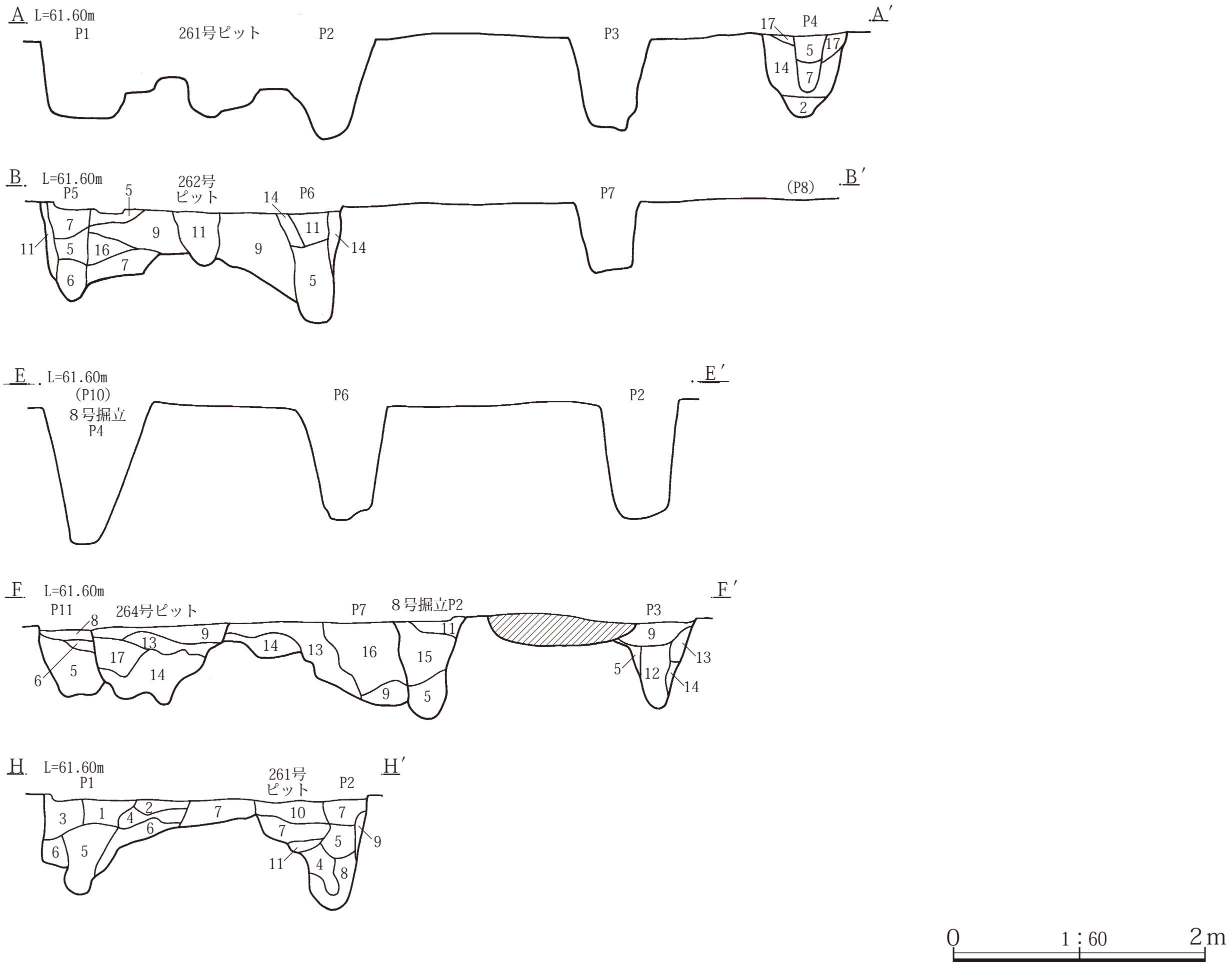
第11表　笠松遺跡１区８号掘立柱建物計測表

柱穴NO.	規　模(cm)			形状	面積24.73㎡
	長径	短径	深さ		柱間の寸法(m)
P 1	95	61	61	楕円形	P1-P2 2.35 P 1 -P4 2.86
P 2	(60)	(60)	76	円形	P2-P3 2.49
P 3	86	77	70	円形	P3-P5 2.52
P 4	87	(60)	115	楕円形	P4-P6 2.46
P 5	82	74	72	円形	P5-P8 2.58
P 6	83	72	68	楕円形	P6-P7 2.12
P 7	79	68	71	楕円形	P7-P8 2.70
P 8	78	68	85	楕円形	

第20図　１区８号掘立柱建物土層断面図



第21図　１区９号掘立柱建物

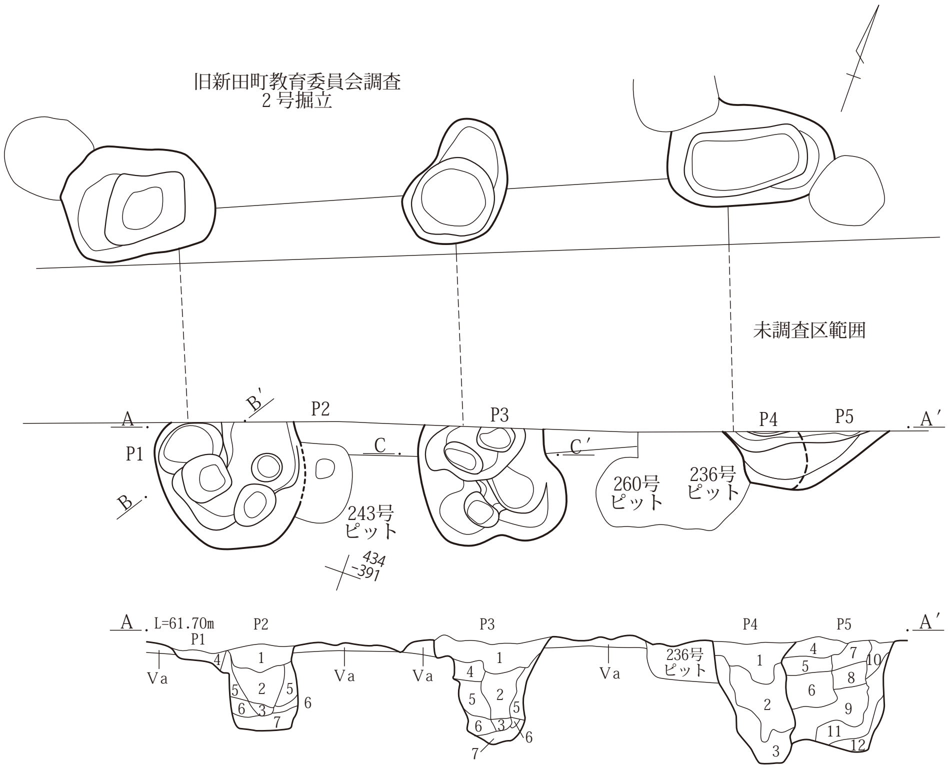


9号掘立柱建物
1　黒褐色土　ローム小塊含む
2　黒褐色土　ローム粒含む
3　黄色土　黒褐色土塊含む
4　黄色土　ローム塊含む
5　黒褐色土
6　黒褐色土　ローム大塊含む
7　黒褐色土　ローム塊少量含む
8　褐色土
9　黒褐色土　ローム塊多量に含む
10　黒褐色土　ローム小塊多量に含む
11　褐色土　ローム塊少量含む
12　黒褐色土　ローム塊やや多量に含む
13　黒褐色土　ローム塊ごく多量に含む
14　黒褐色土　ローム小塊僅かに含む
15　黒褐色土　ローム中塊少量、褐色土塊含む
16　黒褐色土　17層より黒くローム塊の量は少ない
17　黄褐色土　ローム塊とローム粒少量含む
18　にぶい黄褐色土　ローム小塊多量に含む

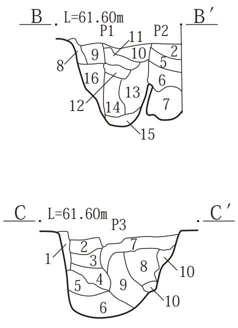
第12表　笠松遺跡１区９号掘立柱建物計測表

柱穴NO.	規　模(cm)			形状	面積26.72㎡
	長径	短径	深さ		柱間の寸法(m)
P 1	263	68	81	長方形	P1-P2 1.80 P1-P5 2.37
P 2			91		P2-P3 2.19　P2-P6 2.37
P 3	(83)	68	70	楕円形	P3-P4　1.48　P3-P7 2.34
P 4	70	63	65	円形	P4-P12　4.73
P 5	243	70	80	長方形	P5-P6 1.87　P5-P8 2.30
P 6			90		P6-P7 2.30　P6-P9 2.34
P 7	(313)	(63)	67	長方形	P7-P11 2.37
P 10			80		P11－P12 1.56
P 8	248	89	85	長方形	P 9-P10　1.72
P 9			－		P10-P11 2.42
P 11	70	64	45	円形	

第22図　１区９号掘立柱建物土層断面図



Ｐ１、Ｐ２
1　暗褐色土　明るい色調　１～５㎝大のローム塊少量含む
2　黄褐色土　ローム大塊多量に含む　色調は黄色が強い
3　黒色土　黒味の強い黒色土　ローム塊少量含む
4　黄褐色土　Ⅲ層と近似　ローム塊を含まない
5　黒褐色土　２層より黒い色調　ローム塊少量含む
6　黒色土　３層に近似　ローム塊多量に含む
7　黄色土　ローム塊主体　黒色土塊を含む
8　黒褐色土　ローム塊を含む　やや明るい
9　黒色土　均一土　淡い色調
10　黒褐色土　ローム中塊を含む
11　黒褐色土　ローム小塊少量含む　２層より明るい色調
12　黒褐色土　ローム塊を僅かに含む
13　黒褐色土　ローム大塊多量に含む　明るい色調
14　黒褐色土　6層に近似　ローム塊少量含む
15　黒褐色土　ローム塊６、７層より少ない
16　黒褐色土　ローム小塊・中塊２％含む



Ｐ４、Ｐ５
1　黒褐色土　褐色土を斑状に含む　ローム塊少量含む
2　黒褐色土　ローム小塊を１層より多く含む
3　黒褐色土　ローム小塊多量に含む
4　暗褐色土　全体に黄色が強い　ローム大塊多量に含む
5　黒褐色土　１、２層より明るい色調　３層に近似する
6　黒褐色土　５層より明るい色調　ローム大塊少量含む
7　黒褐色土　５層に近似　ローム塊少量含む
8　黒色土　６、７層より黒味を増す
9　黒褐色土　ローム大塊多量に含む
10　黒褐色土　７層に近似　ローム塊を含まない
11　黒褐色土　10層に近似　やや黒味を増す
12　黒褐色土　ローム塊多量に含む

Ｐ３A-A′
1　黒褐色土　少量のローム塊と黒色土塊を含む
2　黒色土　１層より黒味を増す　ローム小塊を１層より多く含む
3　黒色土　２層より黒味を増す　ローム塊少量含む
4　暗褐色土　ローム小塊多量に含む
5　黒色土　色調は２層と同一　２層よりローム小塊多量に含む
6　黒色土　５層に近似　ローム大塊を含む
7　黄褐色土　ローム塊主体　黒色土塊を含む

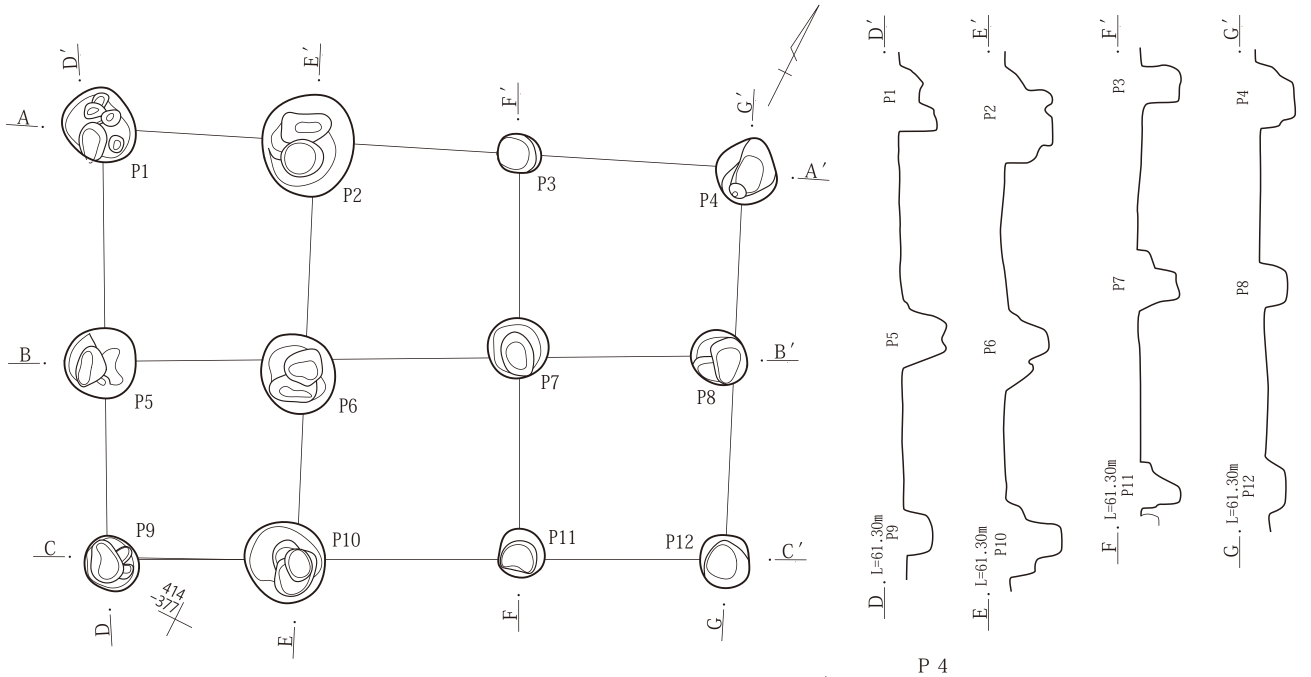
Ｐ３C-C′
1　黒褐色土　ローム塊少量含む　明るい色調
2　黒褐色土　ローム塊を１層より多く含む
3　黒色土　ローム粒を僅かに含む　１、２層より黒い
4　黒色土　３層に近似　ローム塊の量は多い
5　黒色土　４層より黒くローム塊も僅かに多い
6　黒褐色土　ローム大塊多量に含む
7　黒褐色土　２層より明るい色調
8　黒色土　ローム塊を含まない均一土
9　黒褐色土　８層を基調にローム大塊を含む
10　黒褐色土　ローム中塊を含む　壁の崩落土

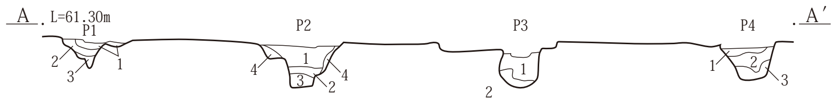
第13表　笠松遺跡１区11号掘立柱建物計測表

柱穴NO.	規　模(cm)			形状	
	長径	短径	深さ		柱間の寸法(m)
Ｐ１	115	(100)	67	不明	P1-P3 2.02
Ｐ２			68	不明	
Ｐ３	(100)	102	80	不明	P3-P4 2.15
Ｐ４	(65)	(45)	96	不明	
Ｐ５	(78)	(46)	88	不明	

0　1：60　２m

第23図　１区11号掘立柱建物





P４
1　黒色土　粘性締まりなし
2　黒褐色土　ローム塊多量に含む
3　黒色土　ローム塊少量含む

P１
1　黒色土　ローム中塊を含む
2　暗褐色土　やや明るい色調で褐色を呈する
3　黒褐色土　ローム塊と褐色土塊を含む

P２
1　黒色土　ローム中塊を含む
2　暗褐色土　やや明るい色調で褐色を呈する
3　にぶい黄褐色土　ローム塊多量に含む
4　黒褐色土　褐色土を基調にローム塊を含む

P３
1　黒色土　ローム塊を含まない
2　黒褐色土　ローム塊多量に含む

P８
1　黒色土　ローム塊少量褐色土を斑状に含む
2　黒褐色土　ローム塊多量に含む

P５
1　黒色土　ローム小塊少量含む　柱痕
2　黒褐色土　褐色土を下位及び上位に含む
3　黒色土　ローム中粒・小塊を含む
4　褐色土　ローム土主体　黒色土少量含む

P６
1　にぶい黄褐色土　黒色土　ローム塊多量に含む
2　黒褐色土　明るい色調の褐色土にローム中塊少量含む

P７
1　黒色土　粘性締まりなし　柱痕
2　黒褐色土　ローム塊多量に含む　柱痕
3　黒色土　ローム塊少量含む　柱痕
4　暗褐色土　黒褐色土中粒・中塊５％　やや締まる
5　褐色土主体　暗褐色土を含む　やや締まる

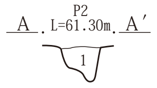
第14表　笠松遺跡１区12号掘立柱建物計測表

柱穴NO.	規　模(cm)			形状	面積16.43㎡
	長径	短径	深さ		柱間の寸法(m)
P１	62	53	30	円形	P1-P2 1.59 P1-P5 1.93
P２	82	73	36	円形	P2-P3 1.74 P2-P6 1.79
P３	36	33	32	円形	P3-P4 1.72 P3-P7 1.66
P４	54	47	30	円形	P4-P8 1.54
P５	57	56	36	円形	P5-P6 1.53 P5-P9 1.53
P６	66	59	34	円形	P6-P7 1.78 P6-P10 1.57
P７	48	48	33	円形	P7-P8 1.67 P7-P11 1.59
P８	47	42	18	円形	P8-P12 1.62
P９	45	43	21	円形	P9-P10 1.48
P10	67	63	42	円形	P10-P11 1.80
P11	39	38	31	円形	P11-P12 1.64
P12	42	39	16	円形	

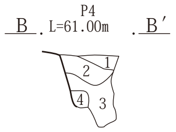
P９
1　黒色土　ローム塊を含まない黒色土
2　暗褐色土　ローム小塊少量含む　均一土で明るい色調
P10
1　暗褐色土　褐色土ローム大塊を含む　ローム小塊少量含む
2　にぶい黄褐色土　２～10cm大のローム塊多量に含む
3　暗褐色土　明るい色調の褐色土
P11
1　黒色土　ローム小塊少量含む
2　黒褐色土　淡い色調の黒色土
P12
1　黒色土　ローム小塊少量含む
2　黒褐色土　ローム小塊少量含む

0　1：60　2ｍ

第24図　１区12号掘立柱建物



Ｐ２
1　暗褐色土　ローム中粒・小塊５％

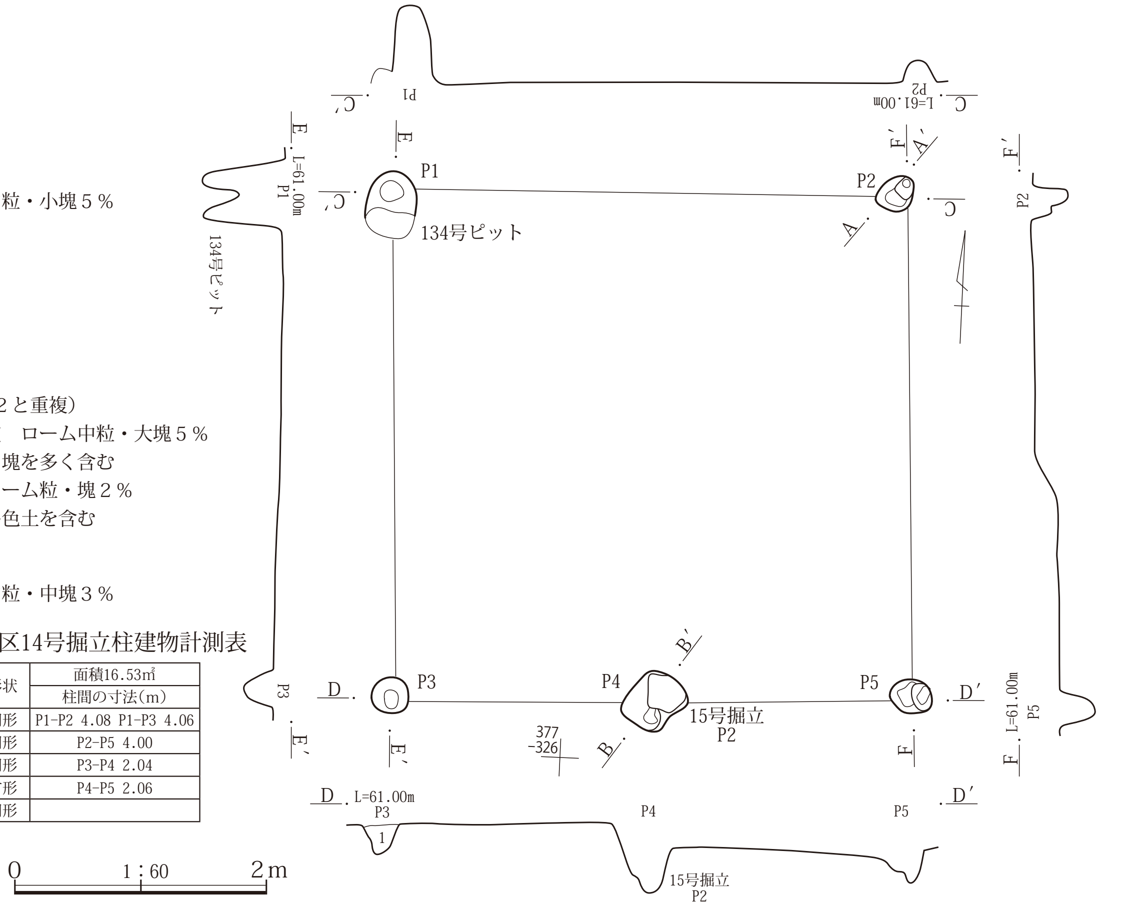


Ｐ４（15号掘立柱建物Ｐ２と重複）
1　黒褐色土　やや砂質　ローム中粒・大塊５％
2　１層よりローム粒・塊を多く含む
3　１層に類似する　ローム粒・塊２％
4　ローム土主体　黒褐色土を含む

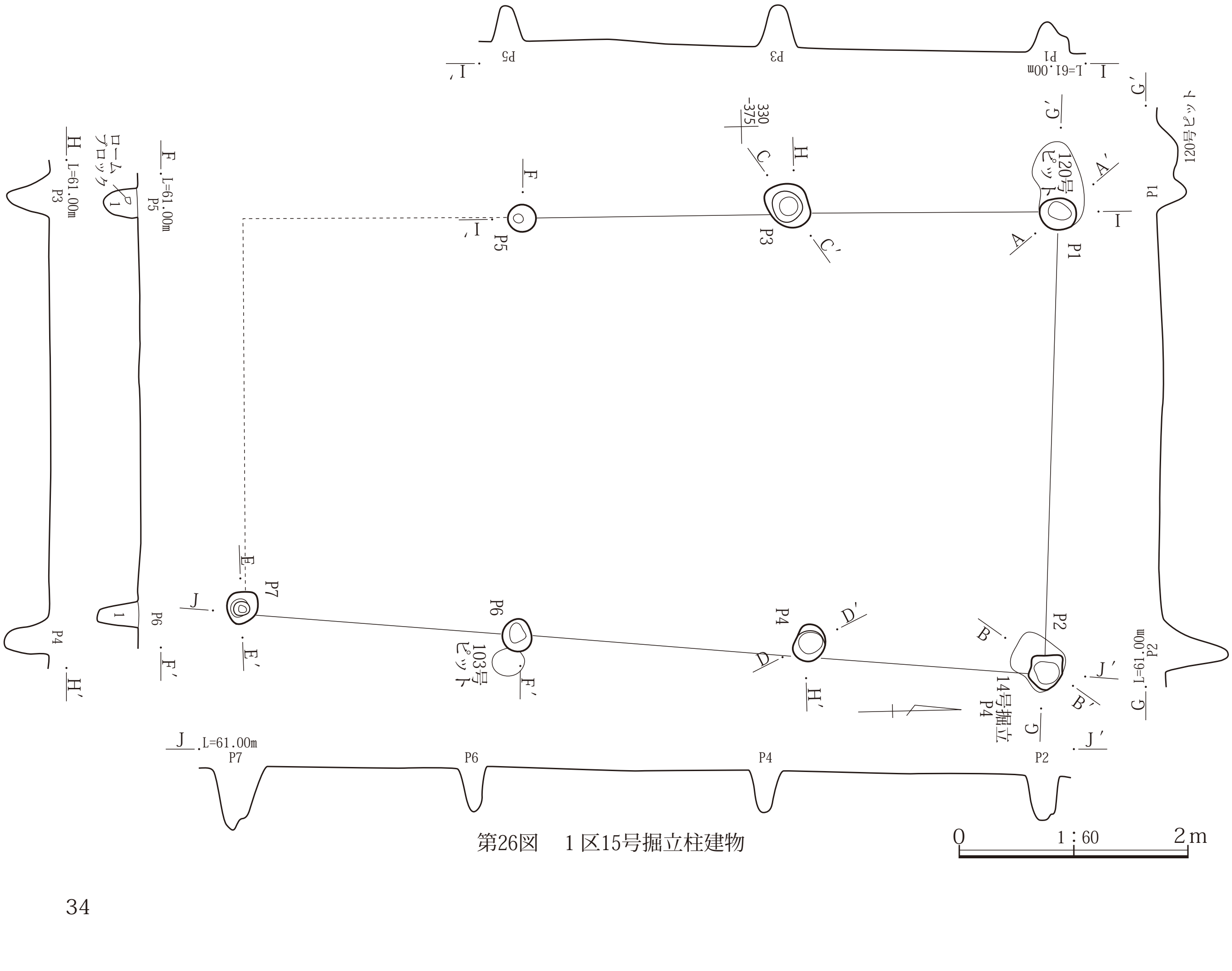
Ｐ３
1　暗褐色土　ローム中粒・中塊３％

第15表　笠松遺跡１区14号掘立柱建物計測表

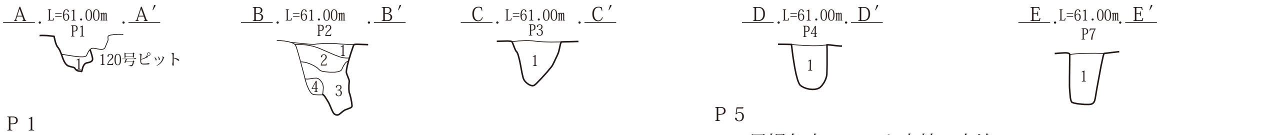
柱穴NO.	規模(cm)			形状	面積16.53㎡
	長径	短径	深さ		柱間の寸法(m)
Ｐ１	(39)	39	66	円形	P1-P2 4.08 P1-P3 4.06
Ｐ２	31	27	29	円形	P2-P5 4.00
Ｐ３	29	28	23	円形	P3-P4 2.04
Ｐ４	47	38	40	方形	P4-P5 2.06
Ｐ５	35	28	28	円形	



第25図　１区14号掘立柱建物



第26図　１区15号掘立柱建物



Ｐ１
１　暗褐色土　ローム小粒・中塊５％
Ｐ２(14号掘立柱建物Ｐ４と重複)
１　黒褐色土　やや砂質　ローム中粒・大塊５％
２　１層よりローム粒・塊を多く含む
３　１層に類似する　ローム粒・塊２％
４　ローム土主体　黒褐色土を含む
Ｐ３
１　暗褐色土　ローム中粒・大塊５％
Ｐ４
１　黒褐色土　やや砂質　ローム中粒・大塊１％
Ｐ７
１　暗褐色土　ローム中粒・大塊５％　黄色味帯びる

Ｐ５
１　黒褐色土　ローム中粒・大塊３％
Ｐ６
１　黒褐色土　やや砂質　ローム中粒・小塊３％

第16表　笠松遺跡１区15号掘立柱建物計測表

柱穴NO.	規　模(cm)			形状	面積26.55㎡
	長径	短径	深さ		柱間の寸法(m)
Ｐ１	32	28	26	円形	P1-P2 4.04 P1-P3 2.32
Ｐ２	38	30	56	円形	P2-P4 2.10
Ｐ３	44	37	37	楕円形	P3-P4 3.88 P3-P5 2.39
Ｐ４	33	26	39	楕円形	P4-P6 2.50
Ｐ５	24	24	30	円形	P5-P6 3.75
Ｐ６	28	26	36	円形	P6-P7 2.44
Ｐ７	30	27	40	円形	

0　1：60　2ｍ

第27図　１区15号掘立柱建物柱穴土層断面図

(３)柵列

１区で調査した柵列は２条である。これらはピットが直線状に並ぶものの、建物として把握できなかったので、柵列としたものである。調査時に(Ｅ区)２号柵列としたものは、整理作業の結果、３号掘立柱建物の一部と判断したので、欠番とした。

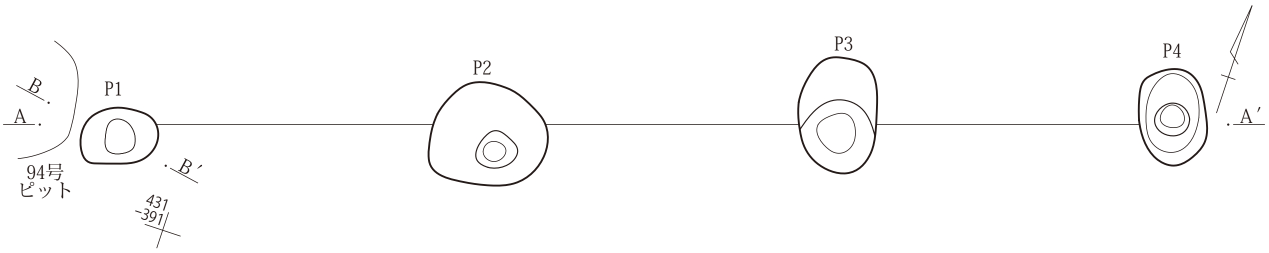
１号柵列(第28図　PL．４)

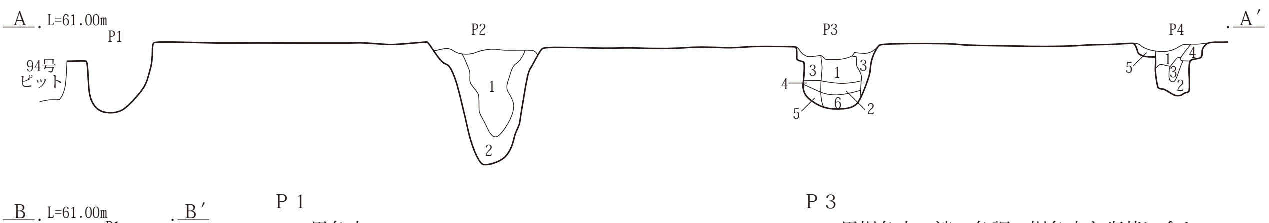
位置　Ｘ＝431 ～ 433、Ｙ＝－385 ～ 391

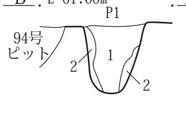
主軸方向　Ｎ－71゜－Ｅ

規模・形態　長さは5.59ｍである。柱穴は径30 ～ 62㎝の楕円形で、柱間は西から1.98ｍ＋1.83ｍ＋1.78ｍであり、西ほど長いが、本来６尺等間を意図していたのではないだろうか。

出土遺物　なし。







Ｐ１
１　黒色土
２　黒色土　１層と色調は同一　ローム塊少量含む

Ｐ２
１　黒色土　ローム塊を含まない均一土
２　黒褐色土　ローム大塊少量含む　色調は明るい

Ｐ３
１　黒褐色土　淡い色調　褐色土を斑状に含む
２　黒褐色土　１層に近似　黒味は強い
３　黒褐色土　１層にローム塊を含む　褐色味が強い
４　黒色土　黒味の強い黒色土
５　明黄褐色土　ローム塊
６　黒褐色土　均一土　明るい色調
Ｐ４
１　黒褐色土　明るい色調の黒色土　均一土
２　黒褐色土　均一土　淡い色調
３　褐色土　ローム塊少量含む
４　褐灰色土　褐色土を多量に含む
５　褐灰色土　褐色土を含む

第17表　笠松遺跡１区１号柵列計測表

柱穴NO.	規　模(cm)			形状	
	長径	短径	深さ		柱間の寸法(m)
Ｐ１	42	30	36	楕円形	P1-P2 1.98
Ｐ２	62	54	64	楕円形	P2-P3 1.83
Ｐ３	62	40	33	楕円形	P3-P4 1.78
Ｐ４	50	35	27	楕円形	

0　1：40　1ｍ

第28図　１区１号柵列

所見　出土遺物がないので時期は特定できない。南にある９号掘立柱建物とは柱筋が揃わないが、方位が近いので関連が考えられる。

３号柵列（第29図）

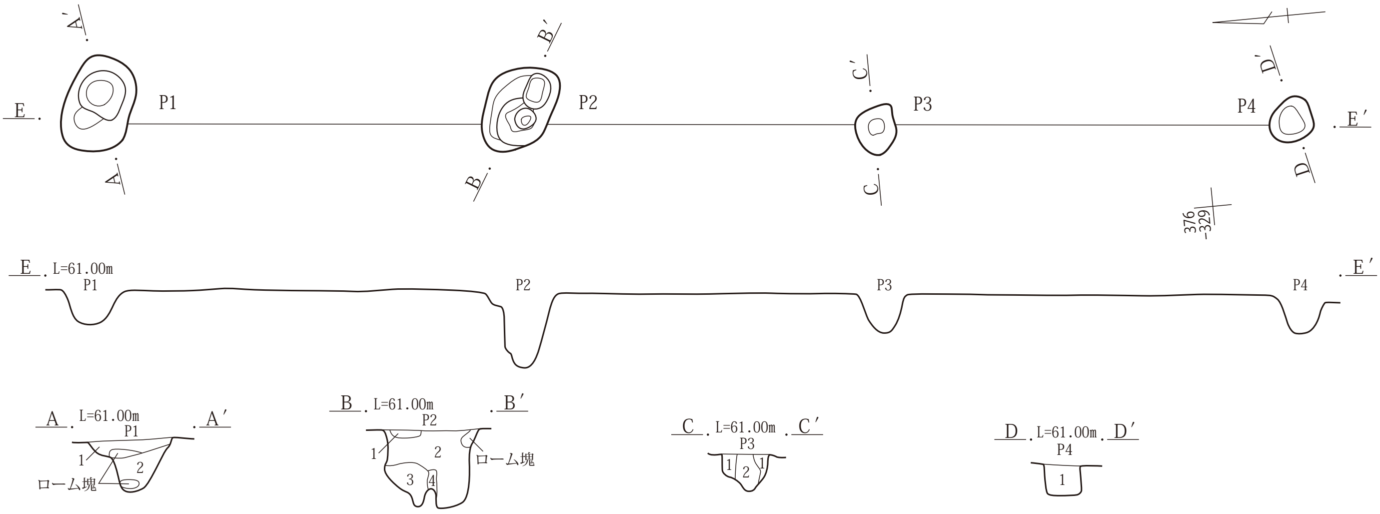
位置　X＝375 ～ 382、Y＝－327 ～ 328

主軸方向　N－5゜－E

規模・形態　長さは6.38mである。柱穴は小さく、径20 ～ 52㎝の円形ないし楕円形で、柱間は北から2.30m＋1.86m＋2.22mであり、中央が狭い。

出土遺物　なし。

所見　出土遺物がないので時期は特定できない。14号掘立柱建物に隣接するが、方向は揃わないので関連は不明である。

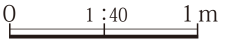


Ｐ１
1　暗褐色土　やや砂質　ローム粒１％以下
2　２号ピットの１層と同質　ローム粒・塊５％

Ｐ２
1　黒褐色土　やや砂質　ローム中粒10％
2　黒褐色土　やや砂質　ローム中粒・大塊３％
3　２層よりローム中粒・中塊やや多く含む
4　ローム土と黒褐色土の混土

Ｐ３
1　暗褐色土　ローム中粒・中塊10％
2　１層よりローム粒・塊少ない

Ｐ４
1　暗褐色土　ローム中粒５％



第18表　笠松遺跡１区３号柵列計測表

柱穴NO.	規模(cm)			形状	
	長径	短径	深さ		柱間の寸法(m)
Ｐ１	52	36	16	楕円形	P1-P2 2.30
Ｐ２	47	34	40	楕円形	P2-P3 1.86
Ｐ３	26	20	20	楕円形	P3-P4 2.22
Ｐ４	25	24	19	円形	

第29図　１区３号柵列

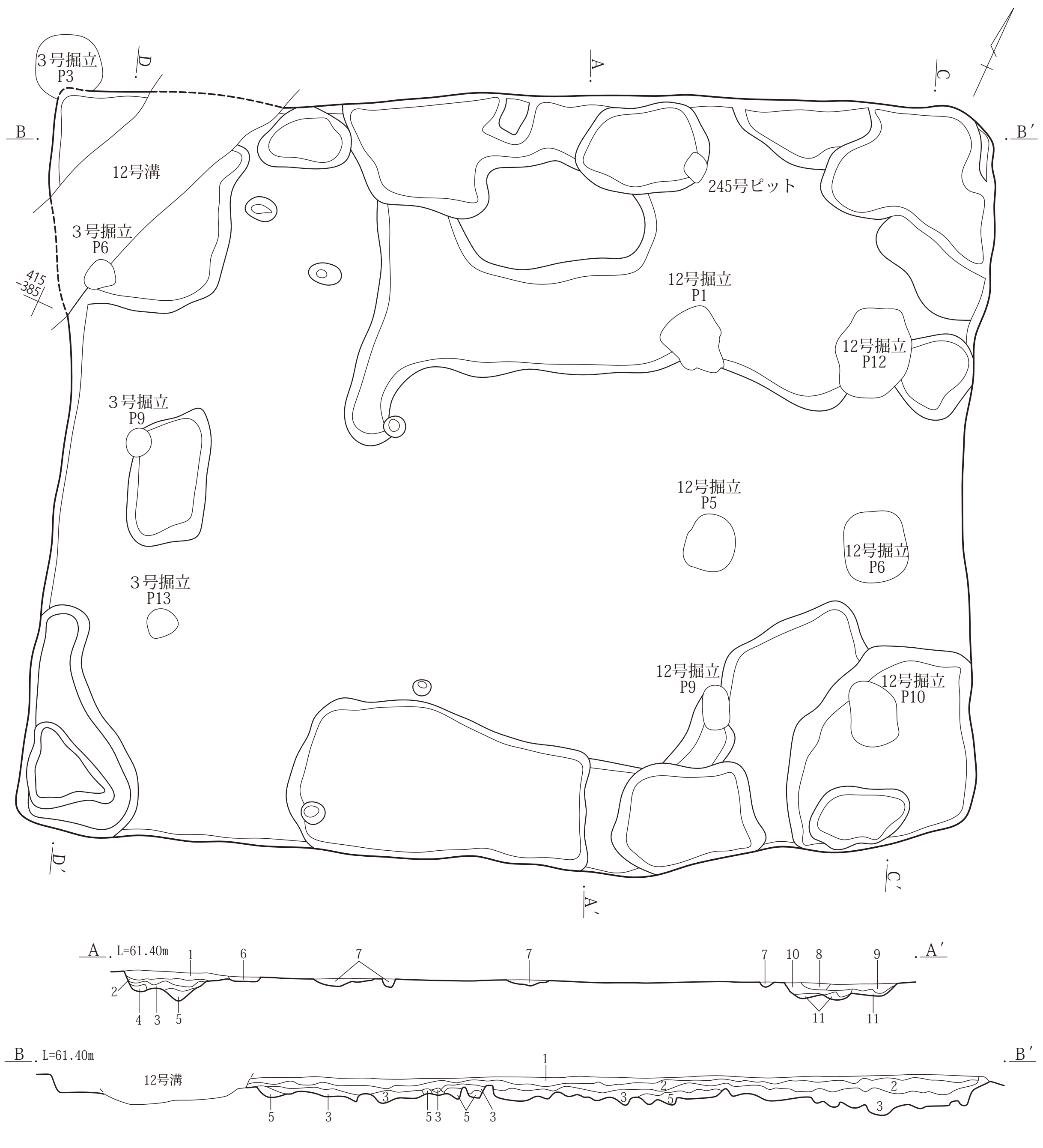
（４）基壇状遺構

１区北部の掘立柱建物群の南限地点に１基検出された。

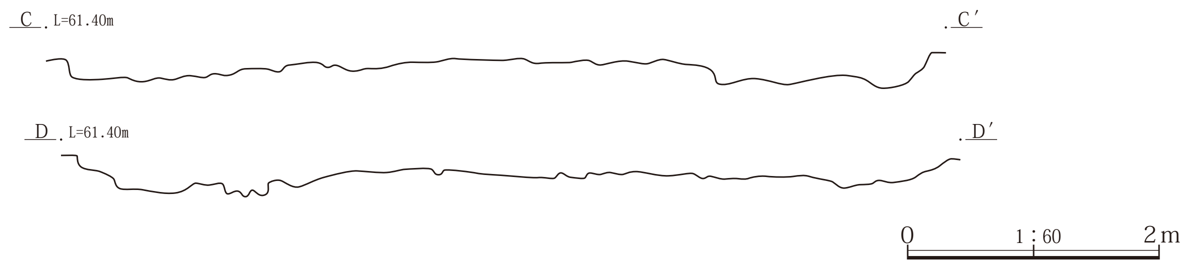
１号基壇状遺構（第30図　PL．４・５）

X＝410 ～ 420、Y＝－375 ～ 385にある。方形の掘り込みの内部が硬く締まり、それが基壇の掘り込み地業と類似している形状であるため、「基壇状遺構」と名付けたものである。３号・12号掘立柱建物、12号溝と重複し、本遺構が古い。形態はやや歪んだ長方形で、規模は中央付近で計測して長さ8.34m、幅7.10m、面積は60.20㎡であり、建物の基壇とすると非常に小規模である。主軸方向はN－67゜－Eである。上面を後世の撹乱によって削平されているため、現状では底面近くのごくわずかな部分が残っているものと考えられ、中央付近から東辺中央にかけては地山が現れてしまっており、礎石据え付けの痕跡等は全く認めらない。掘り方底面までは深いところでも36㎝しか残っていないが、内部の土は硬く締まっている。北部（B－B′セクション）では５～ 10㎝の厚さで３層に分けることができるが、各層は水平ではなく凹凸があり、整った版築ではない。遺物が出土しないので時期は特定できないが、主軸方位は１号掘立柱建物と直交しており、近い時期のものであると考えられる。

南東約６ｍに８世紀代の遺物を出土する１号粘土採掘坑があり、版築土の採掘に関連する可能性がある。



1　黒褐色土とローム塊の混土　ローム中塊を含む　粘性あり締まり強い
2　黒褐色土とローム塊の混土　ローム大塊を含む　粘性あり締まり強い
3　暗褐色土とローム塊の混土　ローム小塊を含む　粘性あり締まり強い
4　暗褐色土　ローム塊より小さな黄褐色土小粒を含む　粘性あり締まり強い
5　黒褐色土とローム塊の混土　ローム塊の割合多い　粘性あり締まり強い
6　褐色土　黄褐色土中粒を含む　粘性あり締まり強い
7　褐色土　６層に類似　黄褐色土粒の混土　粘性あり締まり強い
8　褐色土とローム塊の混土　ローム塊大を含む　粘性あり締まり強い
9　暗褐色土とローム塊の混土　ローム大塊を含む　粘性あり締まり強い
10　黒褐色土とローム塊の混土　ローム大塊を含む　粘性あり締まり強い
11　黄褐色土と黒褐色土の混土　粘性あり締まり強い



第30図　１区１号基壇状遺構掘り方と断面図

（５）土坑・ピット

１区から検出された土坑は23基、ピットは261基であり調査区南側及び北側に集中する。ほとんどの遺構が共伴する出土遺物がなく詳細な時期判定をすることはできない。このため埋没土を基本土層と対比させて時期を判定した。また、埋没状況については人為的な様相が認められるものについては文中に記した。記述がないものについては自然埋没土と考えている。遺構番号については調査時南側と北側それぞれで符番していたが、整理段階で通し番号に変更した(5頁第1表参照)。以下には遺物が伴うものや形状や埋没土に一定の特徴が認められるものについて取り上げる。なお、各遺構の形状や計測値等については第19表の計測表を参照されたい。

２号土坑(第31図)

ロ－ム粒・塊及び炭化物を僅かに含む黒褐色砂質土で埋没する。出土遺物はなく､時期の確定はできなかった。

３号土坑(第31図)

人為的埋土が堆積し、４号土坑を切る。円形で底面は平坦。出土遺物はなく、時期は確定できない。

４号土坑(第31図)

ローム粒・塊を含む人為的埋土が堆積する。３号土坑と重複し、３号土坑より古い。残存状態が良好でなく底面のみの検出である。４号土坑より古いが埋没土に大きな時期差は見られず、時期の確定はできなかった。

８号土坑(第31・33図)

ローム粒･白色軽石を僅かに含む黒褐色土で埋没する。底面は僅かな凹凸が見られ壁は斜めに立ち上がる。遺物は中世の常滑陶器甕(第33図１)が出土している。非掲載遺物は土師器片６ｇである。出土遺物から時期は中世に遡りうる。

９号土坑(第32図)

97・98・99号ピットと重複する。97号ピットに切られるが、98・99号ピットとの新旧関係は不明。整った円形で底面は平坦であり壁は斜めに立ち上がる。出土遺物はない。埋没土の類似から８号土坑と同時期の可能性がある。

11号土坑(第32･33図)

平面は不定形で断面形状は浅い台形。西壁は中位から下位にかけて抉れる。埋没土中に大きさの異なる自然礫を多量に混入し、これらは埋没段階で投棄されたものと考えられる。深さ約1.8mで底面は湧水層となっているため井戸の可能性がある。遺物は中世皿(第33図11坑－１)、羽釜(同図11坑－２)が出土している。非掲載遺物は土師器大破片142.6ｇ、土師器小破片164.4ｇ、須恵器小破片142.4ｇである。出土遺物から時期は中世に遡りうる。

12号土坑(第32図　PL．５)

平面形状は長方形を呈する。底面は平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。埋没土はローム粒・塊を含む黒褐色砂質土である。２層中はローム塊を多く混入し人為的埋没土の様相が窺える。非掲載遺物は土師器小片が出土している。時期は平安時代以前の可能性がある。

13号土坑(第32・33図)

平面形状は円形を呈する。埋没土は12号土坑と同質である。底面付近はローム塊を多く混入し、人為的埋没土の様相が窺える。遺物は埋没土から中近世の皿(第33図)が出土している。非掲載遺物は土師器大破片10.4ｇ、須恵器大破片10.7ｇである。出土遺物から時期は平安時代以前の可能性がある。

15号土坑(第32図)

黄褐色土、ローム粒を僅かに含む暗黒褐色土で埋没する。埋没土が8号土坑と類似するため時期は中世まで遡る可能性がある。

18号土坑(第32図　PL．３)

３・５号溝と重複し、これらに切られる。底面はほぼ平坦面であり壁は垂直に立ち上がる。全体にローム塊を多く含んでおり、人為的埋没土と考えられる。出土遺物はない。時期は不明である。

21号土坑(第32図)

埋没土の確認状況から東半を４号粘土採掘坑に切られる。底面は平坦であり壁は斜めに立ち上がる。埋没土

はローム塊を含む人為的埋土と思われる。出土遺物はない。8世紀から9世紀代と考えられる４号粘土採掘坑に切られているため時期は奈良･平安時代以前と考えられる。

23号土坑（第33図）

10号溝に切られる。このため北半部は遺失し底面の一部が残存する。埋没土はローム塊を多量に含むことから人為的埋没の様相が窺える。10号溝との新旧関係から奈良時代以前と考えられる。

１号ピット（第33図）

底面は平坦であり壁は斜めに立ち上がる。埋没土は黄褐色土やローム粒・塊を含む暗褐色砂質土である。出土遺物はなく、時期の確定はできなかった。

２号ピット（第33図）

埋没土はローム粒・塊を含む暗褐色土である。形状から柱穴の可能性も考えられたが、周辺に相関する柱穴は見られない。出土遺物はなく、時期の確定はできなかった。

３号ピット（第33図）

埋没土はローム粒・塊を多量に含む。形状から柱穴の可能性がある。出土遺物はなく、時期の確定はできなかった。

27号ピット（第33図）

埋没土は自然堆積か。断面は柱穴形状だが、出土遺物はなく、時期の確定はできなかった。

33号ピット（第33図）

埋没土はローム粒・塊を多量に含む。硬く締まった２層の状況から柱穴の抜き取り穴の可能性もある。周辺には対応する柱穴は見られない。出土遺物はなく、時期の確定はできない。

56号ピット（第33図）

断面形から柱穴の可能性がある。対応する柱穴は認められない。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物はなく、時期の確定はできなかった。

69号ピット（第33図）

埋没土はローム粒を少量含む黒褐色土である。遺物は羽釜小片が１点出土しており、時期は平安時代以降である。

77号ピット（第33図）

78号ピットに切られている。埋没土はローム粒・塊を含む暗褐色砂質土である。出土遺物はない。時期は不明。

78号ピット（第33図）

77号ピットを切っているが、埋没土の違いは僅かで、時期差はあまりないものと考えられる。出土遺物はない。時期は不明。

80号ピット（第33図）

81号ピットを切る。埋没土はローム粒・塊を含む人為的埋土である。出土遺物はなく、時期の確定はできなかった。

81号ピット（第33図）

160号ピットを切り、80号ピットに切られるが、埋没土は80号ピットに類似しており、時期差は見られないものと思われる。出土遺物はなく、時期の確定はできなかった。

97号ピット（第33図）

９号土坑を切っている。埋没土はローム粒を少量含む暗褐色土である。出土遺物はないが、中世と推定される９号土坑を切っているので、中世以降と考えられる。

98号ピット（第34図）

９号土坑底面で検出されたが、新旧関係は確認できなかった。埋没土はローム粒を少量含む黒褐色土である。出土遺物はなく、時期は確定できない。

99号ピット（第34図）

９号土坑底面で検出されたが、新旧関係は確認できなかった。埋没土はローム粒・塊を含む黒褐色土である。出土遺物はなく時期の確定はできない。

111号ピット（第34図）

112号ピットを切っている。埋没土はローム粒・塊を含む黒褐色土である。出土遺物はなく時期の確定はできない。

112号ピット（第34図）

111号ピットに切られる。出土遺物はなく、時期の確定はできない。

133号ピット（第34図）

134号ピット、14号掘立柱建物の柱穴Ｐ１と重複し、これらに切られる。本来、14号掘立柱建物の柱穴に伴った可能性がある。出土遺物はないが、14号掘立柱建物との重複関係から中近世以前と考えられる。

134号ピット（第34図）

133号ピットを切り、14号掘立柱建物の１号ピットに切られる。埋没土はローム粒・塊を少量含む黒褐色土である。出土遺物はないが、14号掘立柱建物との重複関係から中近世以前と考えられる。

154号ピット（第34・36図　PL．5）

埋没土はローム粒・塊を少量含む黒褐色土である。埋没土中から砥石(第36図１)が出土している。この砥石は天良七堂遺跡３区31号ピットから出土した砥石と接合したが、天良七堂遺跡３区31号ピット出土砥石では使用面に使用減りが認められる。遺物から時期を確定することはできないが、埋没土でも時期限定はむずかしい。

160号ピット（第34図）

81号ピットに切られている。埋没土はローム粒を少量含む暗褐色砂質土である。出土遺物はなく、時期の確定はできなかった。

165号ピット（第34図）

9号溝に切られている。埋没土はローム粒を少量含む暗褐色土である。出土遺物はなく、時期の確定はできなかった。

167号ピット（第34図）

１号溝に切られる。出土遺物はないが、遺構の新旧関係から８世紀以前の可能性がある。

168号ピット（第34図）

169号ピットを切っている。埋没土はローム粒を少量含む黒褐色土である。出土遺物はなく、時期の確定はできなかった。

173号ピット（第34図）

174号ピットに切られている。埋没土はローム粒を少量含む暗褐色土である。出土遺物はないが、174号ピットとの重複関係から古代以前と考えられる。

174号ピット（第34図）

173号ピットを切っている。埋没土は基本土層のⅤ層に対応する。出土遺物はないが、埋没土から古代以前の遺構である可能性がある。

212号ピット（第34図）

213・214号ピットに切られる。埋没土は基本土層のⅤ層に対応する。出土遺物はないが、埋没土から古代以前の遺構である可能性がある。

213号ピット（第34図）

214号ピットに切られ、212号ピットを切っている。埋没土は黄褐色粒を僅かに含む暗褐色土である。出土遺物はなく、時期の確定はできなかった。

214号ピット（第34図）

212・213号ピットを切っている。埋没土は粘性を帯びた暗褐色土である。出土遺物はなく、時期の確定はできなかった。

215号ピット（第34図）

19号土坑に切られている。埋没土は粘性を帯びた黒褐色土である。出土遺物はなく、時期の確定はできない。

218号ピット（第34図）

埋没土は黄褐色土粒・塊を含む暗褐色土と黄褐色土の混土であり、北西側で新しいピットと重複している可能

性がある。出土遺物はく、時期の限定はできなかった。

219号ピット（第35図）

220・221号ピットと５号掘立柱建物Ｐ５に切られる。出土遺物はないが、５号掘立柱建物に切られていることから古代以前と考えられる。

220号ピット（第35図）

221号ピットに切られ、219号ピット、５号掘立柱建物Ｐ５を切っている。埋没土は締まりの弱い暗褐色土である。５号掘立柱建物Ｐ５を切っていることから時期は古代以降である。

221号ピット（第35図）

219・220号ピットと重複し、これらを切る。埋没土はを帯びた暗褐色砂質土である。出土遺物はないが、埋没土と219・220号ピットとの重複から、時期は古代以降と考えられる。

225号ピット（第34図）

北側半分は調査区外のため全容は不明である。埋没土層から柱の抜き取り穴の可能性がある。出土遺物はなく、時期の限定はむずかしい。

231号ピット（第35図）

楕円形の掘り方を有する柱穴で、１・２層は形状から柱抜き取り痕の可能性がある。出土遺物はなく、埋没土からも時期は限定できない。

233号ピット（第35図）

１・２層は形状から柱痕の可能性がある。出土遺物はなく、埋没土からも時期は限定できない。

236号ピット（第35図）

260号ピットを切り、11号掘立柱建物Ｐ４に切られている。埋没土はローム塊を少量含む暗褐色土である。北側でピットと重複している可能性がある。出土遺物はなく、時期は不明である。

240号ピット（第35図）

１号掘立柱建物柱穴Ｐ９、241号ピットとの重複関係は不明である。埋没土は、白色軽石及び褐色土を僅かに含む基本土層Ｖ層に相当する。出土遺物はないが、埋没土から時期は時期は古代と考えられる。

241号ピット（第35図）

１号掘立柱建物柱穴Ｐ９、240号ピットとの新旧関係は不明である。埋没土は黄褐色土を含む暗褐色土である。出土遺物はなく、時期は古代と考えられる。

242号ピット（第35図）

250号ピットに切られている。埋没土はローム塊を多量に含む黄褐色土と黒褐色土である。出土遺物はなく、時期の限定はできない。

243号ピット（第35図）

11号掘立柱建物柱穴Ｐ２と重複するが新旧関係は不明である。埋没土はローム粒と塊を含む黄褐色土及び黒色土であり、１層は柱痕の可能性がある。出土遺物はなく、埋没土からも時期は限定できない。

244号ピット（第35図）

ほぼ垂直に深く掘り込まれた形状から、柱穴の可能性がある。埋没土は白色軽石及び褐色土粒を含む基本土層Ｖ層に相当する。出土遺物はないが、埋没土から時期は古代以前の可能性がある。

247号ピット（第35図）

８世紀後半と考えられる10号溝に切られている。埋没土は粘性を帯びた黒褐色土（基本土層Ｖ層）である。出土遺物はないが、10号溝より古いので、８世紀後半以前と考えられる。

250号ピット（第35図）

242号ピットを切っている。埋没土はローム塊を少量含むが人為的堆積かどうかは判断できない。出土遺物はなく、時期は不明である。

251号ピット（第36図）

北側が南側より一段深く掘り込まれている。埋没土にローム塊を多く含むことから、人為的な埋没の可能性が高い。出土遺物はないが、重複関係から８世紀後半以降と考えられる。

260号ピット（第36図）

236号ピットに切られている。１・２層は形状から柱痕の可能性がある。出土遺物はないが、埋没土から時期は確定できなかった。

261号ピット（第36図）

９号掘立柱建物柱穴Ｐ２を切っている。埋没土はローム塊を含む黒色土で、人為的埋没土と考えられる。出土遺物はないが、９号掘立柱建物との重複関係から、古代の遺構である。

262号ピット（第36図）

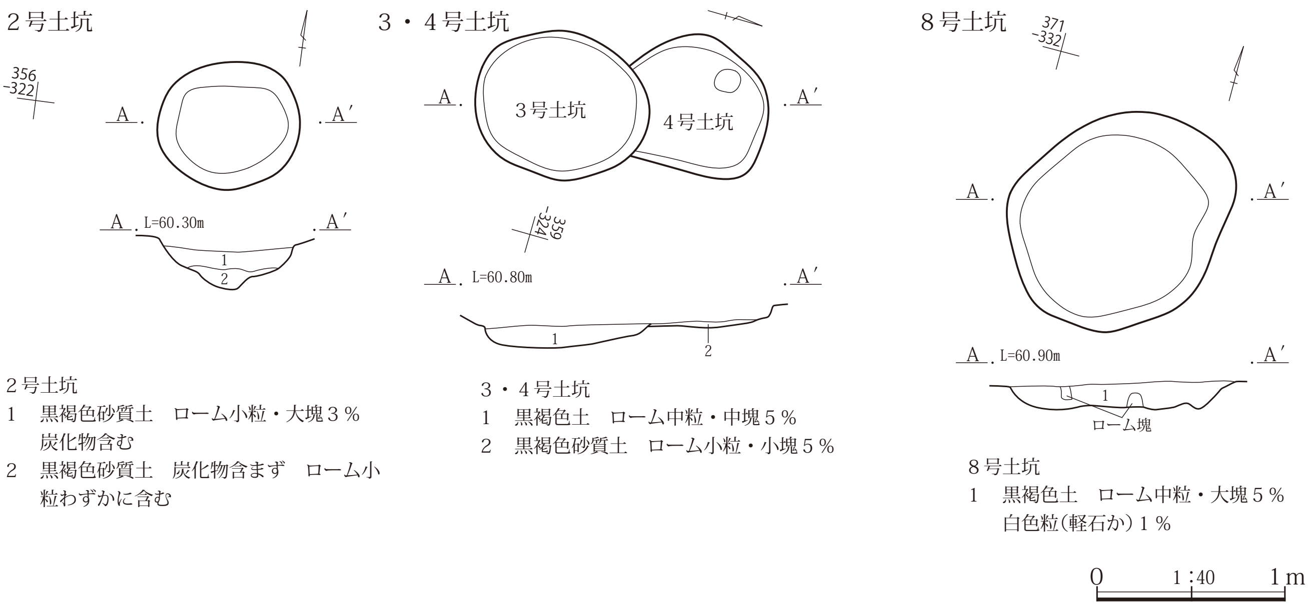
９号掘立柱建物の布掘り部埋土を切っている。埋没土はローム塊を少量含む褐色土である。出土遺物はないが、埋没土と９号掘立柱建物との重複から、古代の遺構である。

263号ピット（第36図）

９号掘立柱建物柱穴Ｐ８・９の布掘りを切り、８号掘立柱建物柱穴Ｐ４に切られている。９号掘立柱建物の布堀内で検出されており、掘立柱建物の柱穴になる可能性もあるが対応する柱穴が確定できない。埋没土はローム塊を含む黒褐色土及び黄褐色土で、出土遺物はないが、８・９号掘立柱建物との重複から古代の遺構である。

264号ピット（第36図）

９号掘立柱建物柱穴Ｐ11を切る。埋没土はローム塊を含む黒褐色土で人為的堆積と考えられる。検出位置は9号掘立柱建物の布掘り内でありＰ11より新しい柱穴の可能性もある。出土遺物はないが、９号掘立柱建物との重複から古代の遺構である。



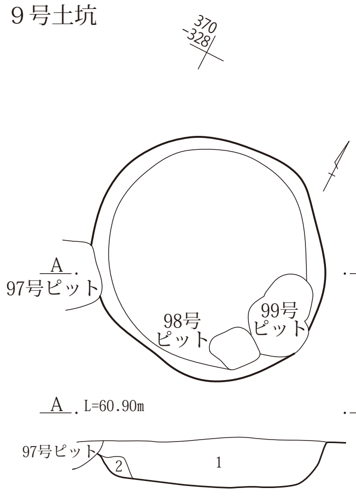
２号土坑
1　黒褐色砂質土　ローム小粒・大塊３％
　炭化物含む
2　黒褐色砂質土　炭化物含まず　ローム小
　粒わずかに含む

３・４号土坑
1　黒褐色土　ローム中粒・中塊５％
2　黒褐色砂質土　ローム小粒・小塊５％

８号土坑
1　黒褐色土　ローム中粒・大塊５％
　白色粒（軽石か）１％

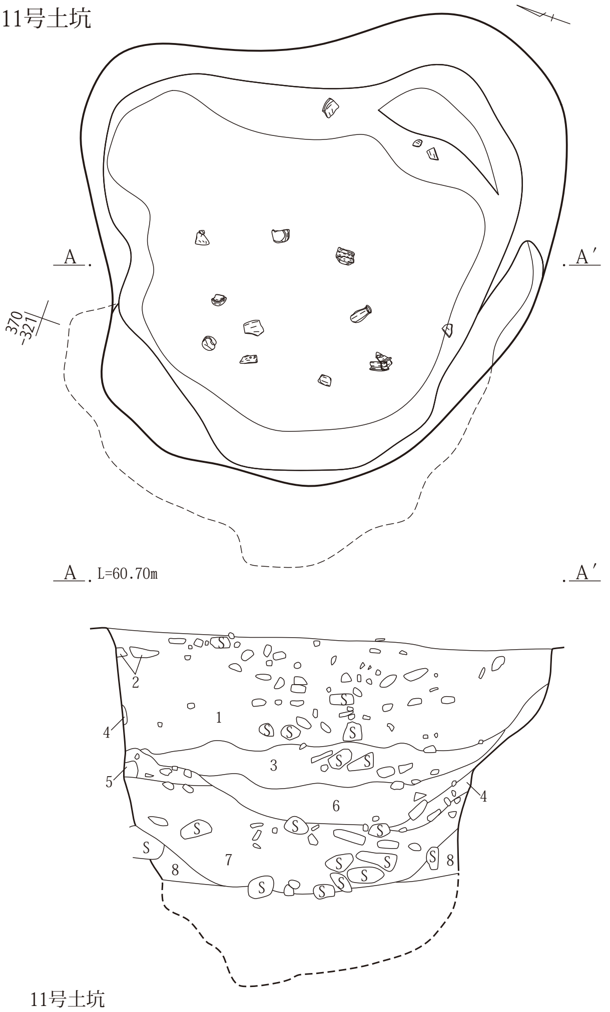
第31図　１区２・３・４・８号土坑

９号土坑



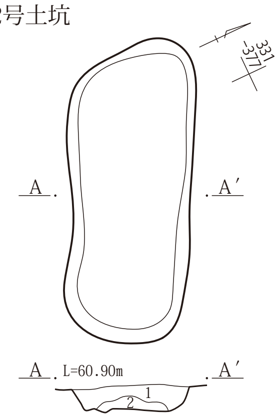
９号土坑
1　黒褐色土　ローム小粒・小塊５％
2　１層土にローム中粒15％含む

11号土坑



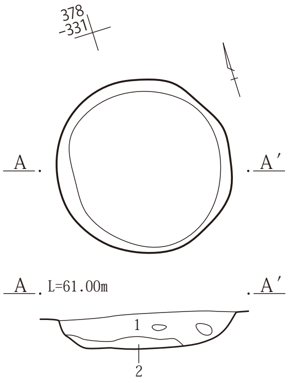
11号土坑
1　暗褐色土　下層部は締まり強い　全体に砂質で粘性締まりややあり
2　黄褐色ローム塊
3　暗褐色土　１層に類似　締まりあり
4　黄褐色土　粘性ややあり締まりあり
5　黄褐色土塊
6　暗褐色土　３層に類似　締まりあり、砂質
7　暗褐色土　６層に類似　ローム小粒・小塊３％、３～15㎝の礫を含む
8　砂層　暗褐色土を含む　２～７㎝の礫を含む　湧水あり

12号土坑



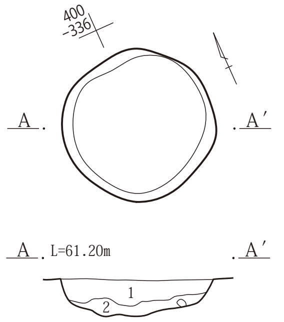
12号土坑
1　黒褐色砂質土　ローム中粒・小塊５％
2　黒褐色砂質土、１層よりローム多い

13号土坑



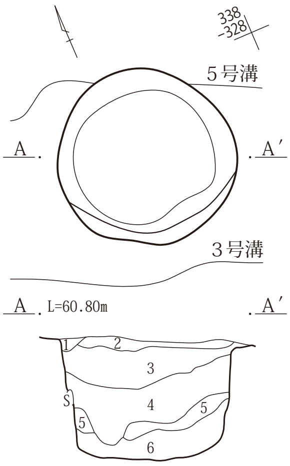
13号土坑
1　黒褐色砂質土　ローム中粒・大塊３％含む
2　黒褐色砂質土　１層よりロームやや多い

15号土坑

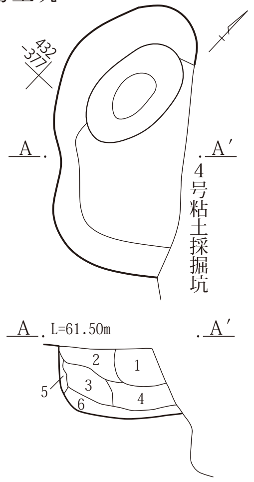


15号土坑
1　暗褐色土　緻密　黄褐色土中粒１％含む
2　暗褐色土　ローム中粒・大塊２％含む

18号土坑



21号土坑



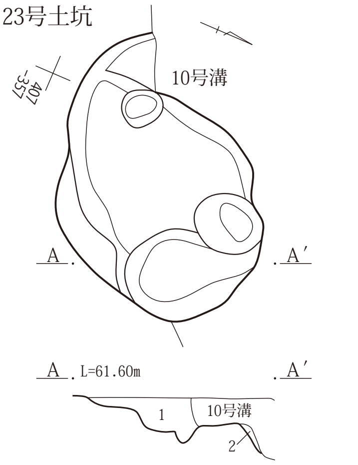
18号土坑
1　黄褐色粘質土　ローム塊
2　暗褐色土　粘性締まりややあり
3　暗褐色土　２層に類似　黄褐色土粒・塊を含む
4　暗褐色土と黄褐色土の混土　暗褐色土主体　締まりなし
5　暗褐色土と黄褐色土の混土　４層より全体的に色調暗い
6　黒褐色土　黄褐色土塊を含む　粘性締まりあり

21号土坑
1　暗褐色土　明るい色調　ローム塊などなし
2　黒褐色土　１層より黒味を増す　褐色土塊を斑状に含む
3　黒色土　ローム大塊少量含む
4　黒色土　ローム塊を含まない均一土
5　黄色土　壁崩落土でローム主体　黒色土塊少量含む
6　黒褐色土　ローム中塊少量含む

0　1：40　1ｍ

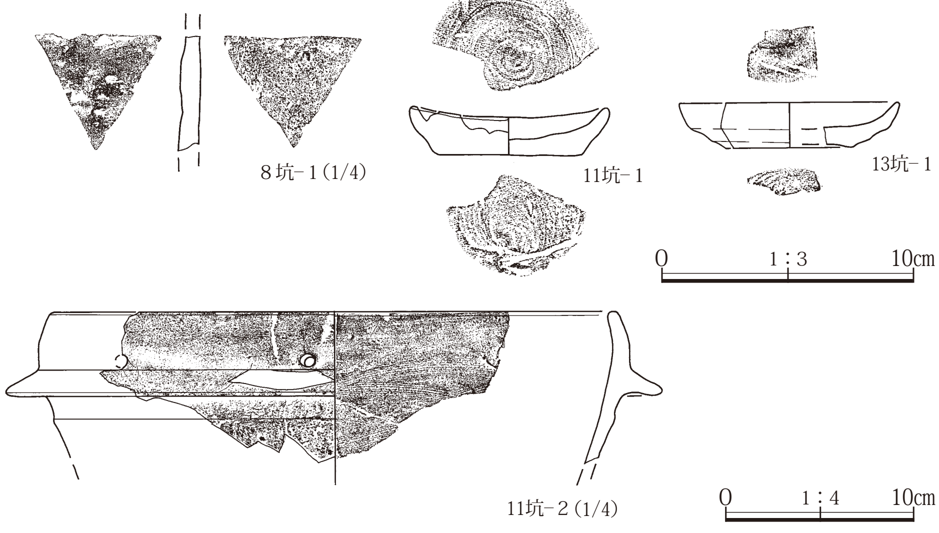
第32図　１区９・11・12・13・15・18・21号土坑

23号土坑

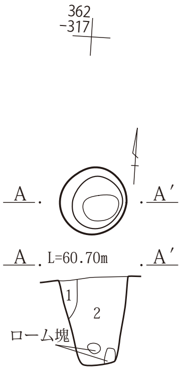


23号土坑
1　暗褐色土　10cm大のローム塊を含む
　　粘性締まりあり
2　暗褐色土　黄褐色土小塊多量に含む

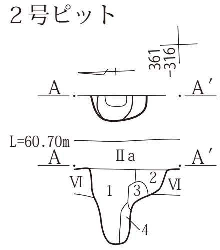
土坑出土遺物



１号ピット

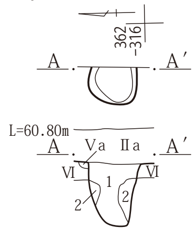


２号ピット



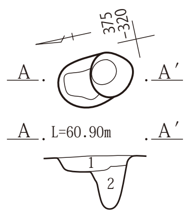
２号ピット
1　暗褐色土　ローム小粒・大塊１％
2　暗褐色土　ローム土少量含む
3　ローム主体　暗褐色土を含む
4　２層に類似

３号ピット

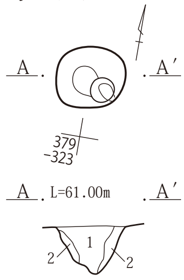


３号ピット
1　暗褐色土　ローム小粒・小塊10％
2　ローム土と暗褐色土の混土　ローム
　　小粒・小塊を含む

27号ピット



33号ピット

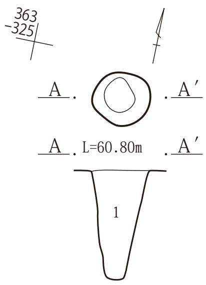


27号ピット
1　暗褐色土　ローム中粒１％　やや砂質
2　黒褐色砂質土　ローム小粒１％　柱痕か

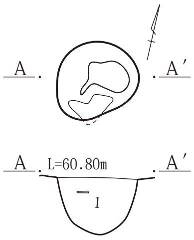
１号ピット
1　暗褐色砂質土　黄褐色土中粒・中塊10％
2　１層と同質　ローム中粒・大塊３％

33号ピット
1　暗褐色土　ローム大塊10％
2　ローム主体　暗褐色土を含む　固く締まる

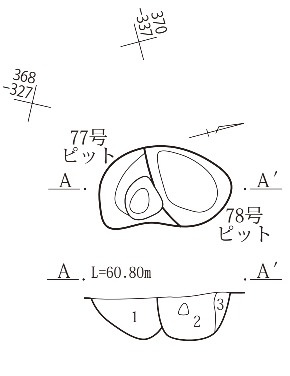
56号ピット



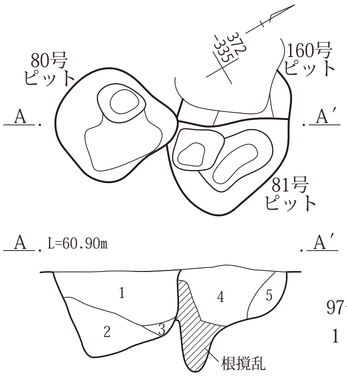
69号ピット



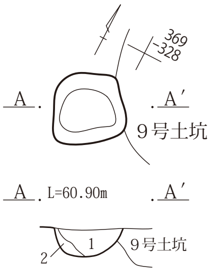
77・78号ピット



80・81号ピット



97号ピット



56号ピット
1　暗褐色砂質土　ローム中粒・小塊３％　柱痕か

69号ピット
1　暗褐色砂質土　ローム中粒・大塊３％含む

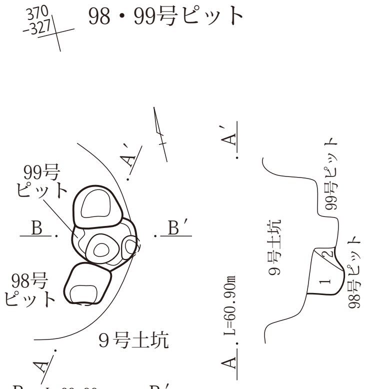
77・78号ピット
1　暗褐色砂質土　ローム小粒・小塊10％
2　黒褐色砂質土　ローム中粒・小塊１％
3　ローム土主体　黒褐色砂質土を含む

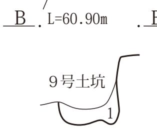
80・81号ピット
1　暗褐色砂質土　ローム中粒・小塊５％含む
2　暗褐色土　ローム粒・中塊25％含む
3　ローム土主体　暗褐色土を含む
4　暗褐色土　ローム小粒・大塊３％
5　暗褐色土　ローム小粒・大塊10％

97号ピット
1　暗褐色土　ローム中粒・
　　大塊５％
2　１層よりローム中粒少量
　　含む

第33図　１区23号土坑と８・11・13号土坑の出土遺物、１・２・３・27・33・56・69・77・78・80・81・97号ピット

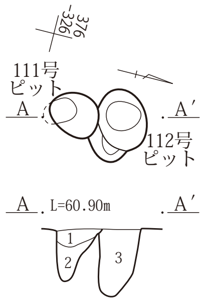
98・99号ピット





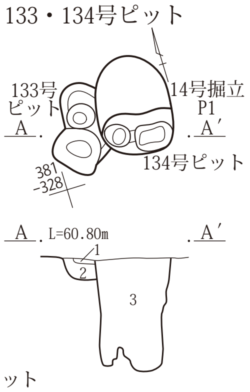
98号ピットA-A′
1　黒褐色土　ローム中粒・小塊２％
2　１層よりローム中塊多量に含む
99号ピットB-B′
1　黒褐色土　ローム中粒５％

111・112号ピット



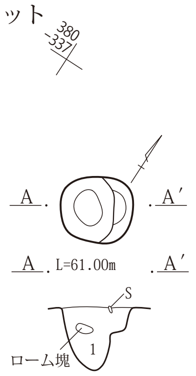
111・112号ピット
1　黒褐色土　ローム中粒・中塊10％
2　１層よりローム粒・塊が少ない
3　黒褐色土　ローム中粒３％

133・134号ピット



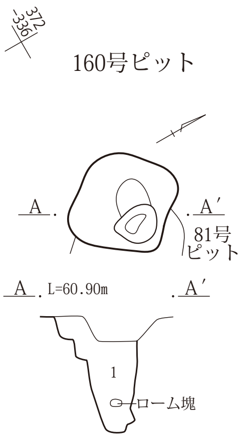
133・134号ピット
1　暗褐色土　ローム中粒１％　やや砂質
2　暗褐色土　ローム中粒・小塊３％
3　黒褐色土　ローム中粒・中塊３％

154号ピット



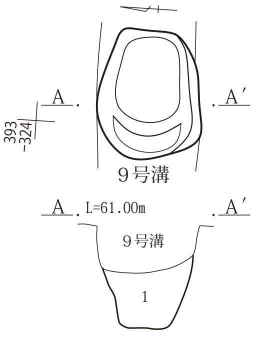
154号ピット
1　黒褐色土　ローム中粒・大塊２％

160号ピット



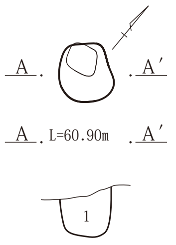
160号ピット
1　暗褐色砂質土　ローム中粒・中塊５％含む

165号ピット



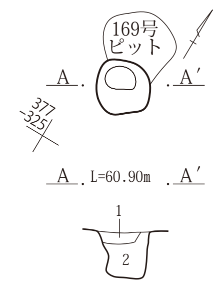
165号ピット
1　暗褐色土　ローム小粒・大塊15％

167号ピット



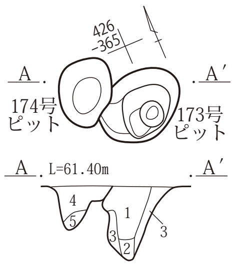
167号ピット
1　黒褐色土　ローム中粒５％

168号ピット



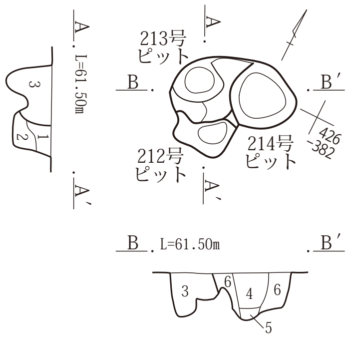
168号ピット
1　黒褐色土　ローム中粒・小塊10％
2　黒褐色土　ローム中粒５％

173・174号ピット

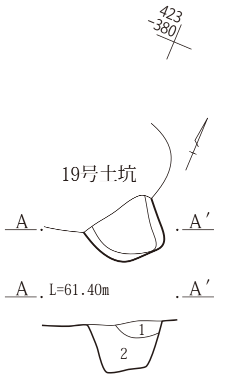


173・174号ピット
1　黒褐色土　粘性あり締まる　やや色調明るい
2　黒褐色土と暗褐色土の混土
3　にぶい黄褐色土　粘性締まりややあり
4　暗褐色土　粘性締まりややあり
5　暗褐色土と黄褐色土の混土

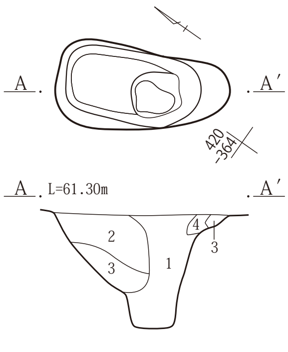
212・213・214号ピット



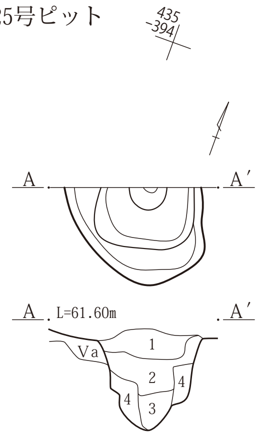
215号ピット



218号ピット



225号ピット



212・213・214号ピット
1　暗褐色土　粘性あり　212号ピット埋土
2　褐色土　粘性ややあり締まる　212号ピット埋土
3　暗褐色土　下層部に黄褐色土中粒微量含む　213号ピット埋土
4　暗褐色土　粘性あり締まり弱い　214号ピット埋土
5　暗褐色土と黄褐色土の混土　214号ピット埋土
6　暗褐色土　締まりある　214号ピット埋土

215号ピット
1　暗褐色土　粘性締まりややあり
2　黒褐色土　１層に類似　暗褐色土が塊状に堆積

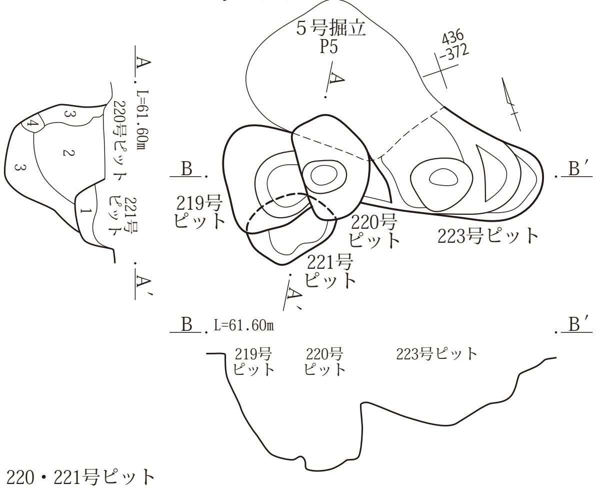
218号ピット
1　暗褐色土　黄褐色土中粒少量　粘性締まりややあり
2　暗褐色土と黄褐色土の混土
3　黄褐色土と暗褐色土の混土　黄褐色土主体　黄褐色土は粘性締まりあり
4　暗褐色土　粘性ややあり締まりあり

225号ピット
1　黒褐色土　ローム小塊少量含む
2　黒褐色土　ローム小粒・小塊を含む　１層より明るい色調
3　黒褐色土　ローム小粒　１層より黒味を増す
4　黒褐色土　１～４層中最もローム粒・塊を含む

0　1：40　1ｍ

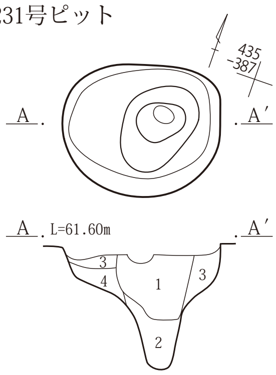
第34図　１区98・99・111・112・133・134・154・160・165・167・168・173・174・212～215・218・225号ピット

219・220・221・223号ピット



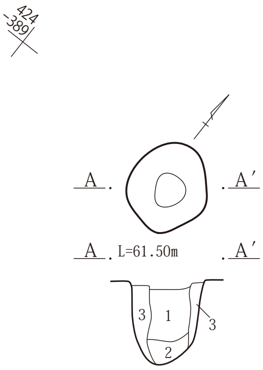
220・221号ピット
1　暗褐色砂質土　粘性ややあり締まり弱い　221号ピット埋土
2　暗褐色土　黄褐色土大塊をやや多く含む　220号ピット埋土
3　暗褐色土　220号ピット埋土
4　黄褐色土塊

231号ピット



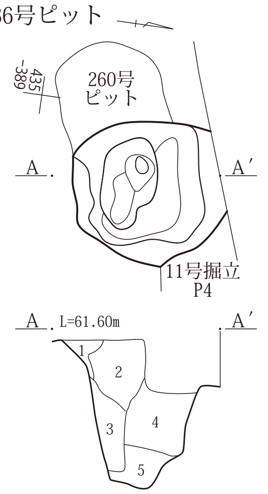
231号ピット
1　黒色土　均一
2　黒褐色土　１層より淡い色調　ローム塊少量含む
3　黒色土　１層と近似　ローム塊少量含む
4　黒褐色土　１～５㎝大のローム塊多量に含む

233号ピット

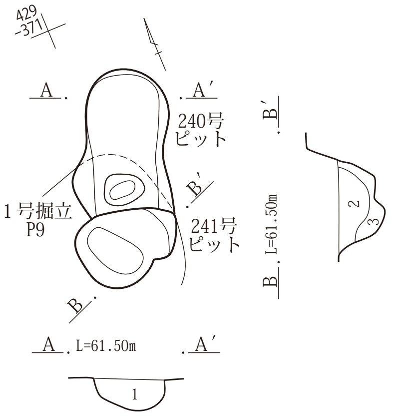


233号ピット
1　黒褐色土　黄褐色土小粒１％以下　やや締まる
2　黒褐色土　１層よりやや黒色味を帯びる
3　黒褐色土　１層より黄色味あり　ローム中粒・小塊５％　やや締まる

236号ピット



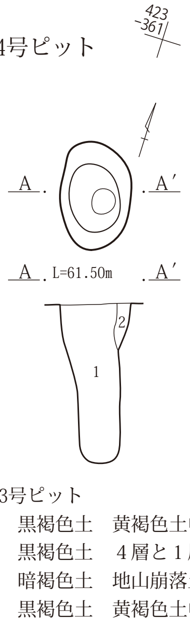
240・241号ピット



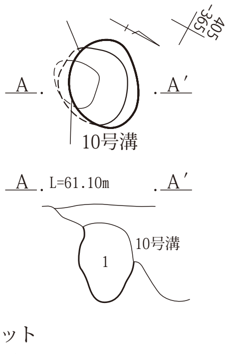
236号ピット
1　褐色土
2　暗褐色土　１層より黒い　ローム小塊少量含む
3　暗褐色土　２層に近似　黒味を増す　ローム中塊を含む
4　黒褐色土　１～７㎝大のローム塊多量に含む人為的埋土
5　黒色土

240号・241号ピット
1　黒褐色土　灰褐色を帯びる　褐色土中粒１％
　白色軽石１％以下
2　暗褐色土　粘性ややあり締まりあり
3　暗褐色土と黄褐色土の混土

244号ピット

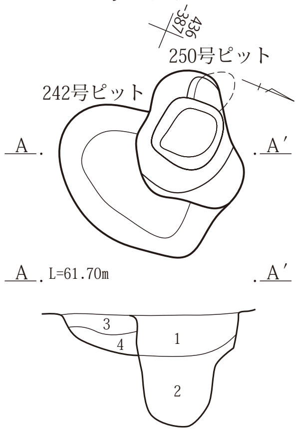


247号ピット

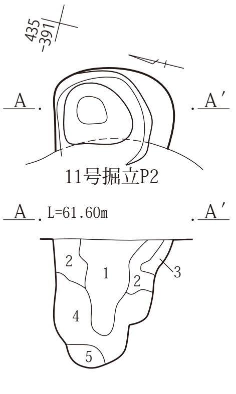


247号ピット
1　黒褐色土　粘性あり締まり強い

242・250号ピット



243号ピット



243号ピット
1　黒褐色土　黄褐色土中粒・白色軽石１％以下　やや締まる　柱痕か
2　黒褐色土　４層と１層の混土　ハードロームの中粒・小塊１％含む
3　暗褐色土　地山崩落土か
4　黒褐色土　黄褐色土中粒・大塊１％含む
5　全体的にローム土を含む　黄色味帯びる

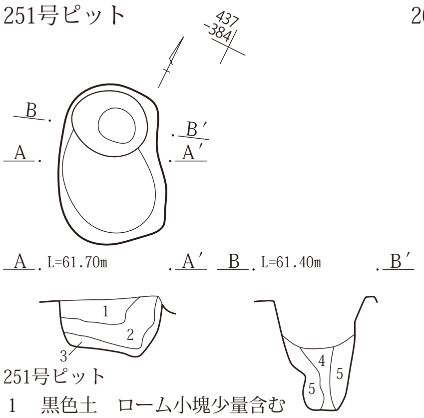
244号ピット
1　黒褐色土　白色軽石１％　下位はやや粘性あり　褐色土中粒を少量含む
2　黒褐色土　１層より緻密でやや締まり弱い

242・250号ピット
1　黒褐色土　ローム中塊少量　褐色土を斑状に含む　250号ピット埋土
2　黒色土　３～10㎝大のローム塊少量含む　250号ピット埋土
3　黄褐色土　１～５㎝大のローム塊多量に含む　242号ピット埋土
4　黒褐色土　１、２層より黒い色調の黒色土　242号ピット埋土

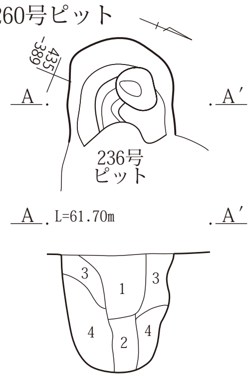
0　1：40　1ｍ

第35図　１区219・220・221・223・231・233・236・240～244・247・250号ピット

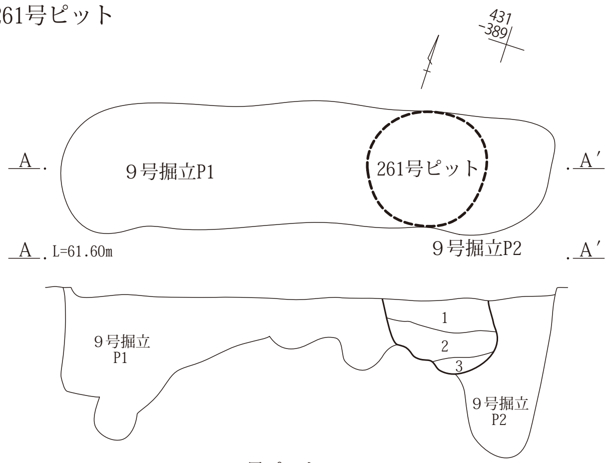
251号ピット



260号ピット



261号ピット

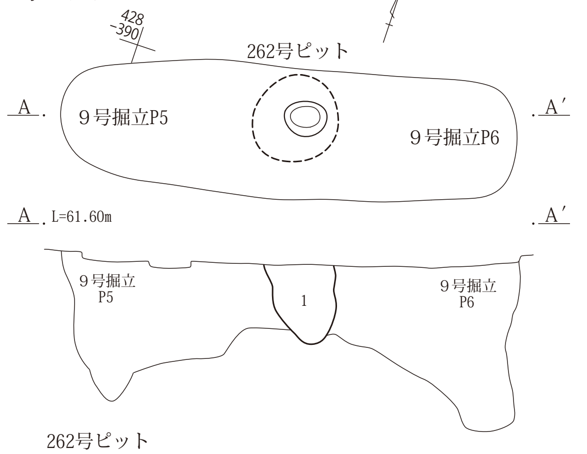


251号ピット
1　黒色土　ローム小塊少量含む
2　黒褐色土　１層より明るい色調　ローム塊を含まない
3　黒褐色土　ローム塊多量に含む
4　黒色土　ローム塊を含まない均一土
5　黒色土　ローム小塊を含む

260号ピット
1　黒色土　ローム小塊・中塊を僅かに含む
2　黒色土　ローム塊を含まない均一の黒色土
3　黒褐色土　１～５㎝大のローム塊多量に含む　色調も明るくなる
4　黒褐色土　１、２層より明るい色調

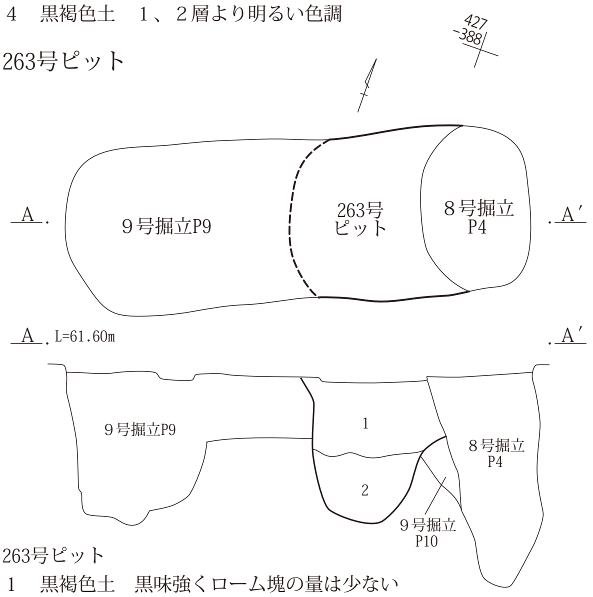
261号ピット
1　黒色土　１～３㎝大のローム塊多量に含む
2　黒色土　ローム塊少量含む
3　褐色土　ローム塊少量含む

262号ピット



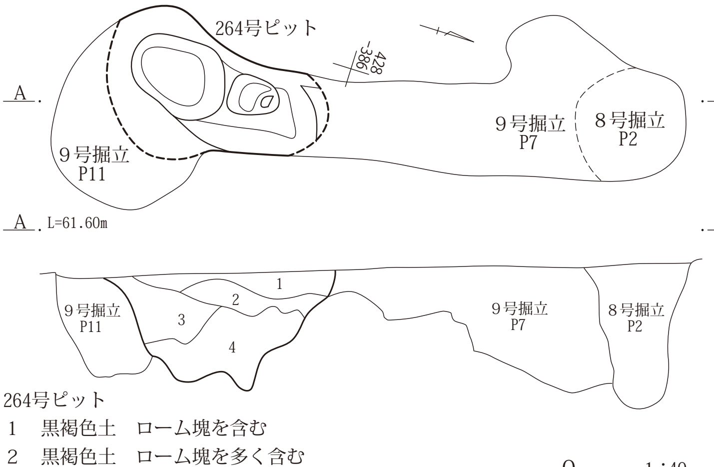
262号ピット
1　褐色土　ローム塊少量含む

263号ピット



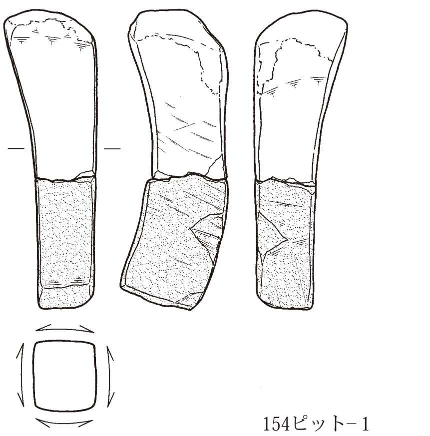
263号ピット
1　黒褐色土　黒味強くローム塊の量は少ない
2　黄褐色土　ローム塊とローム粒少量含む

264号ピット



264号ピット
1　黒褐色土　ローム塊を含む
2　黒褐色土　ローム塊を多く含む
3　黒褐色土　褐色土塊　ローム塊少量含む
4　黒褐色土　２層よりローム塊の量を多く含む

0　1:40　1ｍ



154ピット－1

天良七堂遺跡３区31号ピット
出土の砥石(トーン)と接合

0　1:3　10㎝

第36図　１区251・260～264号ピットと154号ピットの出土遺物

（6）粘土採掘坑

１区から検出された粘土採掘坑は５基である。いずれも上部ローム層を掘り抜き、ローム以外の土で人為的に埋め戻した痕跡が認められることから粘土採掘坑と判断した。１号竪穴状遺構は１号粘土採掘坑、３号竪穴住居は２号粘土採掘坑、１区北側から検出された３号土坑は３号粘土採掘坑に変更した。

１号粘土採掘坑(第37図　PL．5）

位置　X＝409 ～ 414、Y＝－364 ～ 369

重複　なし。　**主軸方向**　N－28°－W

形状・規模　平面形状は不整円形と方形の結合したもので、規模は長軸長4.79m、短軸長4.09m、深さ87㎝である。２基の粘土採掘坑の重複が想定され、埋没土から南側の不整円形部が古いと思われる。

埋没土　暗褐色土及び黒褐色土と淡黄褐色粘質土の混土や黄褐色土大塊などが混在する人為的埋没土である。

出土遺物　埋没土中から杯と皿各1点(第37図１・２)と古代の瓦1点(同図３)が出土した。磨石(同図４)は混入と思われる。非掲載遺物は土師器大破片3.6ｇ、土師器小破片31.1ｇ、須恵器大破片22.6ｇ、須恵器小破片2.9ｇである。

所見　地山の基本土層Ⅶb･c層を採掘したと考えられ、１号基壇状遺構に隣接していることから、地業に必要な土取を行った可能性がある。出土遺物から時期は８世紀前半と考えられる。

２号粘土採掘坑(第38図　PL．5）

位置　X＝404 ～ 409、Y＝－379 ～ 384

重複　なし。　**主軸方向**　N－66°－E

形状･規模　平面形状は長方形を呈し､規模は長軸長5.57m、短軸長4.04m、深さ76㎝である。

埋没土　上層はローム粒や白色軽石を僅かに含み、下層はローム粒・塊を含む人為的埋没土と考えられる。

出土遺物　埋没土から須恵器甕の破片が１点(第38図１)出土した。非掲載遺物は土師器大破片59.5ｇ、土師器小破片29.2ｇ、須恵器小破片6.2ｇである。

所見　当初３号住居として精査した。形状から廃棄した竪穴住居を利用して粘土採掘をした可能性がある。出土遺物から時期は古代と考えられる。

３号粘土採掘坑(第38・39図　PL．5・31)

位置　X＝413 ～ 415、Y＝－352 ～ 355

重複　なし。　**主軸方向**　N－70°－W

形状・規模　平面形状は不定形を呈し、規模は長径2.67m、短径1.75m、深さ1.57mである。西壁側は斜め下方に掘り込まれている。

埋没土　上層から中層にかけて小・大礫を多量に混入する人為的埋没土である。

出土遺物　埋没土中から小型の皿２点(第39図１・２)と甕(同図３)が出土した。非掲載遺物は土師器大破片147.8ｇが出土する。時期は小型の皿の存在から11世紀代と考えられる。

４号粘土採掘坑(第39図　PL．5）

位置　X＝431 ～ 439、Y＝－372 ～ 379

重複　４号粘土採掘坑埋没土を１・６号掘立柱建物柱穴Ｐ３が切る。

主軸方向　N－33°－W

形状･規模　平面形状は不整円形の連なる楕円形を呈し、規模は長径9.52m、短径3.25m、深さ1.20mである。ほぼ平坦な底面をなし､北壁はオーバーハングし､中央ピットは深さ1.5mを測る。基本土層Ⅶｂ・ｃ層を採掘したことがわかる。

埋没土　下層は多量のローム土を含む人為的埋没土であり、南側から北側へ埋め戻しながら掘削している。

出土遺物　なし。

所見　南側から４単位で順次採掘し、北端が最終段階である。１・６号掘立柱建物との重複から時期は８世紀代以前と考えられる。

５号粘土採掘坑(第40図　PL．5）

位置　X＝409 ～ 412、Y＝－351 ～ 353

重複　10号溝を切っている可能性が高い。

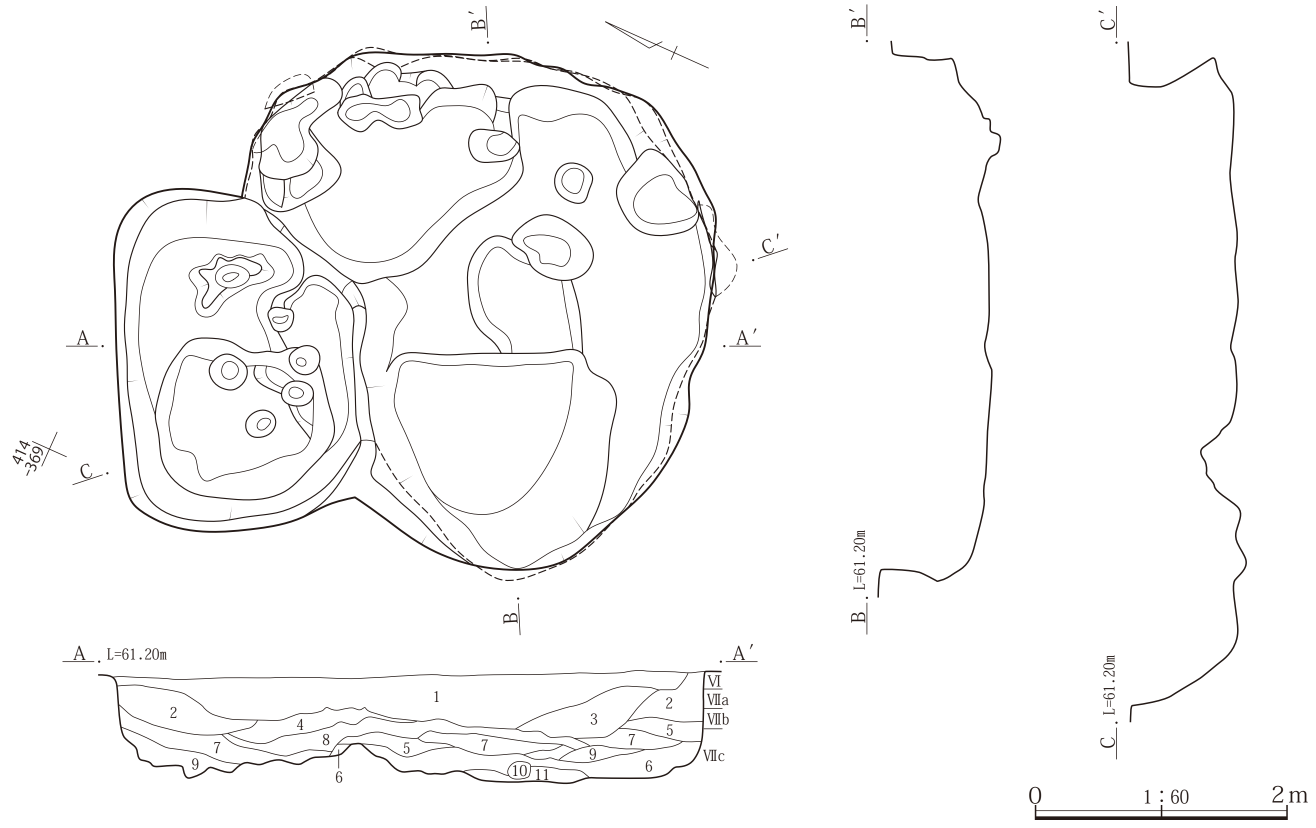
主軸方向　N－７°－W

形状・規模　平面形状は不整楕円形を呈し、規模は長径3.20m、短径2.23m、湧水により底部まで掘削できず深さ0.58m以上である。壁面はオーバーハングし、袋状の断面形状を呈する。

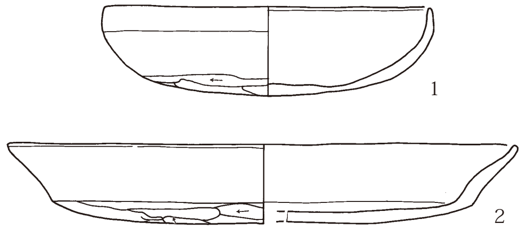
埋没土　10号溝との重複で削平されているため判然としない。

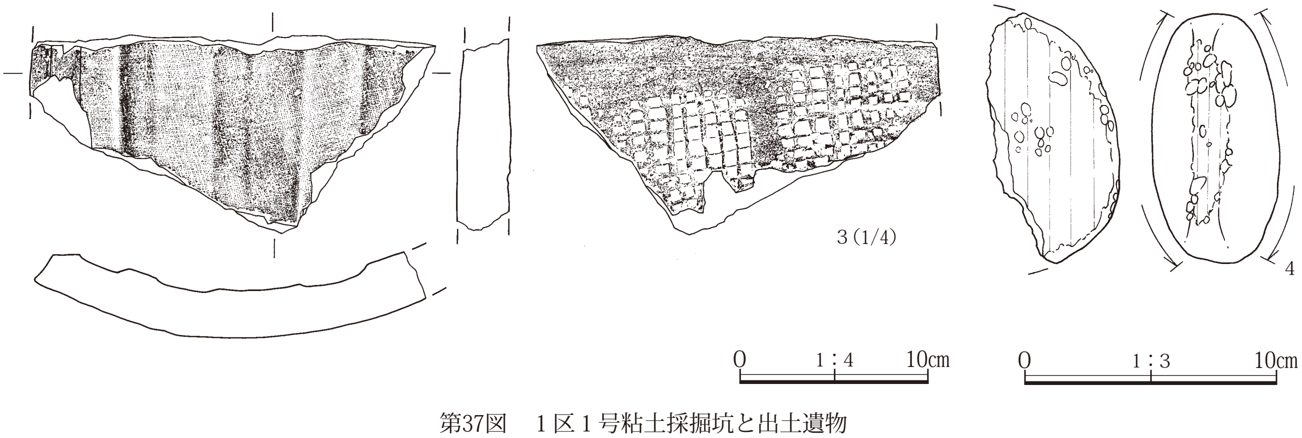
遺物　なし。

所見　10号溝との重複から時期は古代以降と考えられる。



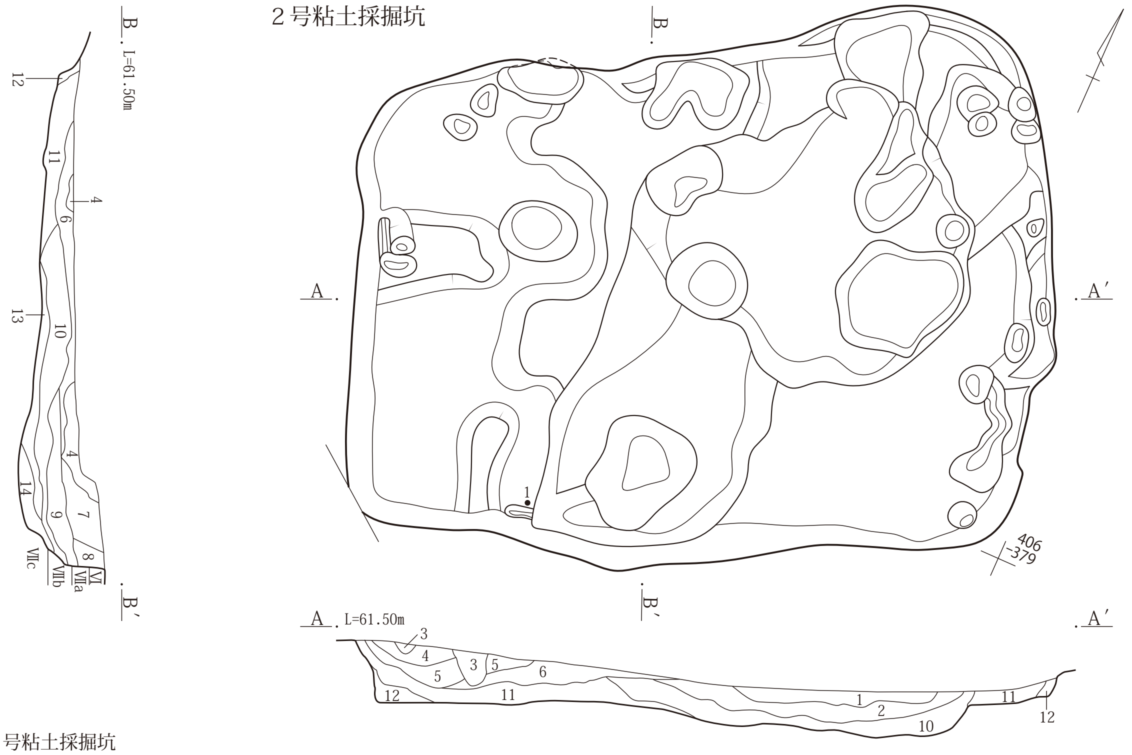
１号粘土採掘坑
1　暗褐色土　白色軽石粒少量含む　粘性やや弱く締まりあり
2　暗褐色土　１層より色調明るい　粘性ややあり締まりあり
3　黒褐色土　白色軽石粒少量含む　粘性やや弱く締まりあり
4　淡黄色粘質土　黒褐色土少量含む　締まり強い
5　黄褐色粘質土　黄色味が増す
6　黄褐色粘質土　黒褐色を含む
7　黒褐色土　黄褐色土小塊微量含む　粘性ややあり締まりあり
8　黒褐色土と淡黄橙色土の混土　締まり強い
9　黒褐色土　粘性締まりあり
10　明黄褐色土塊
11　黒褐色土　黄褐色土が縞状に堆積する　粘性あり締まり強い



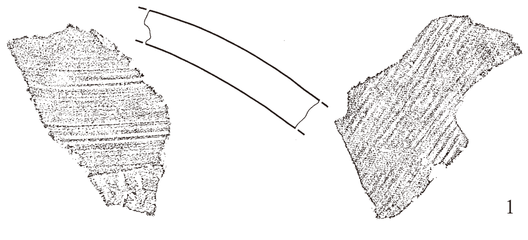


第37図　１区１号粘土採掘坑と出土遺物

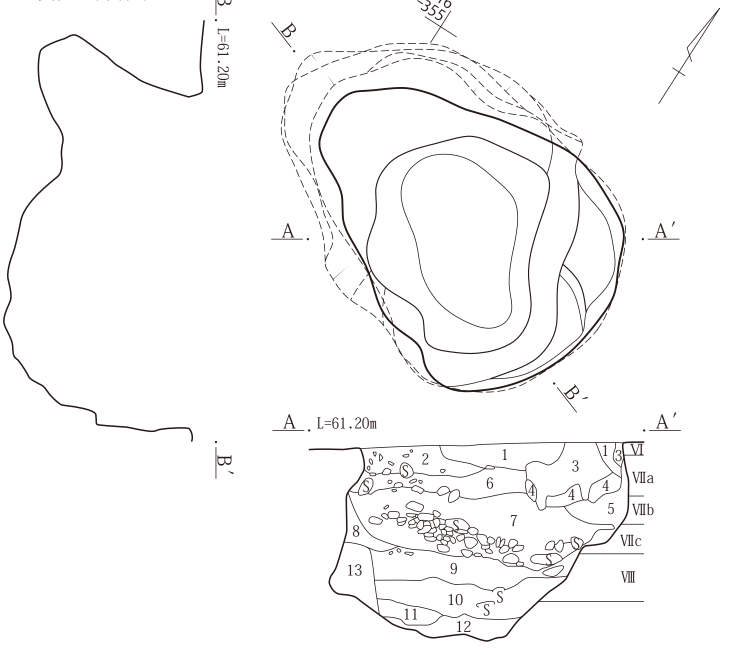
２号粘土採掘坑



２号粘土採掘坑
1　黒褐色土　ローム中粒・小塊２％、６世紀代榛名山起源パミスを少量含む
2　黒褐色土　ローム中粒と６世紀代榛名山起源パミスを少量含む
3　黒褐色砂質土　撹乱土
4　黒褐色土　白色軽石１％含む
5　黒褐色土　より黒色味のある黒褐色土、ローム小粒３％、白色軽石１％以下を含む
6　黒褐色土　やや固く締まる　ローム中粒・小塊１％　白色軽石(FA軽石か)２％
7　暗褐色土　全体的にやや締まる　またローム中粒・小塊５％　黒褐色土中塊３％
8　黒褐色土　ローム中粒２％　やや締まる
9　黒褐色土　白色軽石１％以下含む
10　黒褐色土　白色軽石１％以下で、やや締まる
11　黒褐色土　ローム中粒・大塊７％、白色軽石１％以下で、やや締まる
12　黒褐色土とローム土の混土
13　黒色土　ローム中粒１％ほど含む
14　黒褐色土　ローム中粒・大塊を10％含む　人為的埋土



３号粘土採掘坑

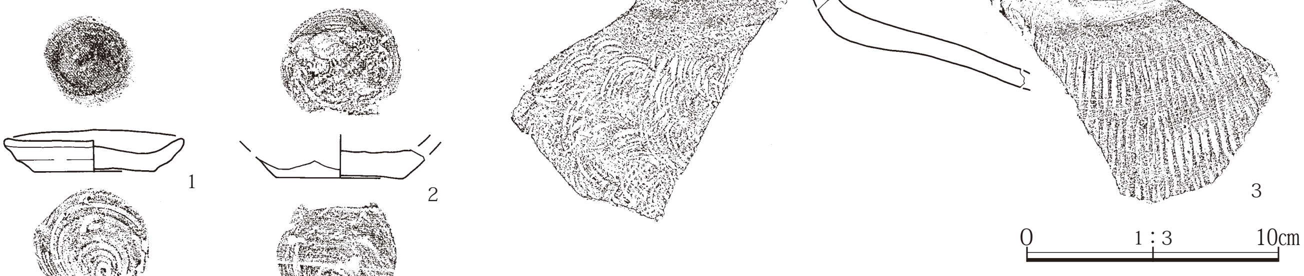


３号粘土採掘坑
1　暗褐色土　白色軽石粒を含む　粘性弱い締まりあり
2　暗褐色土　１層に類似　２㎝以下の小礫を含む
3　褐色土　粘性ややあり締まりあり
4　黄褐色土　粘性ややあり締まり強い　全体にザラつきあり
5　灰黄褐色粘質土　黒色土小塊を含む　粘性締まり強い
6　暗褐色土　黄褐色土小粒微量含む　粘性弱くやや締まる
7　黒褐色土　粘性ややあり締まりあり
8　黒褐色土　黄褐色土粒少量含む
9　黄灰色土　粘性あり締まりややあり　全体にザラつきあり
10　暗褐色土　粘性締まりあり　全体にザラつきあり
11　黒褐色土　粘性締まりあり　全体にザラつきあり
12　黄灰色土　黄褐色土粒少量含む
13　褐灰色土　黄褐色土粒・大塊多量に含む

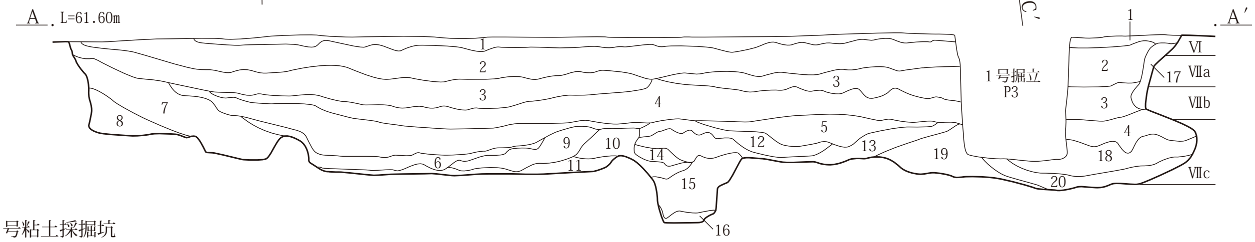
0　1：60　2ｍ

第38図　１区２・３号粘土採掘坑と２号粘土採掘坑の出土遺物

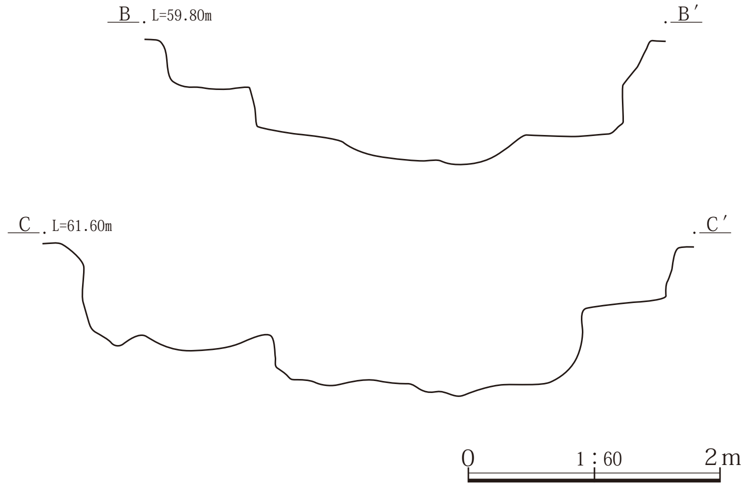
３号粘土採掘坑出土遺物



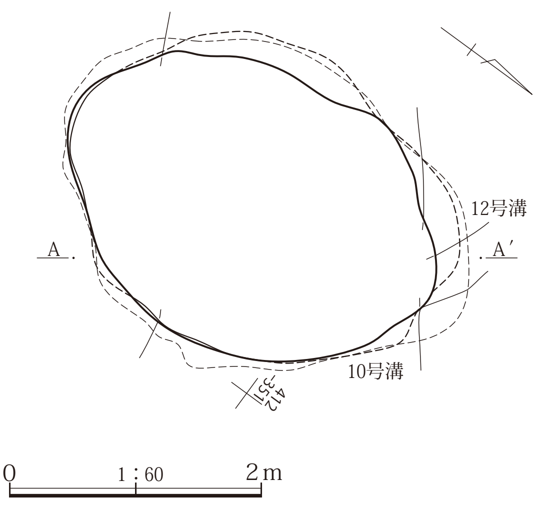
４号粘土採掘坑

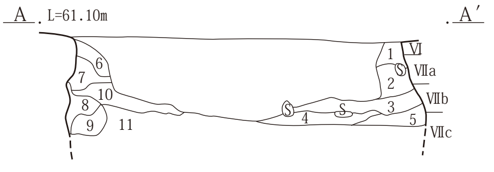


４号粘土採掘坑
1　褐色土　色調はやや黒色　粘性締まりなし
2　黒褐色土　褐色土塊を含む　ローム塊少量含む
3　暗褐色土　褐色土塊を斑状に含む　ローム塊多量に含む
4　黒褐色土　色調は黒色　ローム塊少量含む
5　黒褐色土　ローム小塊少量　大塊多量に含む
6　黒色土　均一　ローム小塊少量含む
7　黒褐色土　ローム大塊を含む　色調は明るい
8　黒褐色土　ローム小　大塊を含む
9　黄褐色土　黒褐色土を含む　ローム大塊多量に含む
10　黒色土　褐色土塊　ローム塊少量含む
11　黒褐色土
12　黒褐色土　ローム大塊少量含む　粘性締まり強い
13　黒褐色土　ローム大塊多量に含む
14　灰黄褐色土　ローム大塊主体
15　褐色土　黒褐色土塊を含む　ローム大塊多量に含む
16　にぶい黄褐色土　黒褐色土塊を含む　ローム大塊主体
17　褐色土　ローム塊を含む
18　黒褐色土　ローム小塊　褐色土塊を含む
19　暗褐色土　黒褐色土塊を含む　ローム塊多量に含む
20　黒褐色土　ローム塊と黒色土塊が互層で堆積



第39図　１区３号粘土採掘坑の出土遺物と４号粘土採掘坑





1　褐色土　ローム小塊を含む
2　黒褐色土　５～15㎝大のローム塊多量に含む
3　青灰砂層　As-Bではない青灰色砂　山砂か
4　黒褐色土　ローム小塊と黒色土塊13層の砂の混土
5　黒褐色土　３～５㎝大のローム塊を含む
6　暗褐色土　ローム小塊を含む　明るい色調
7　黒褐色土　５～８㎝大のローム塊を含む
8　黄色土　ローム塊
9　黒褐色土　黒色土とローム塊の混土
10　黒色土　褐色土塊を斑状に含む
11　黒色土　ローム塊少量含む

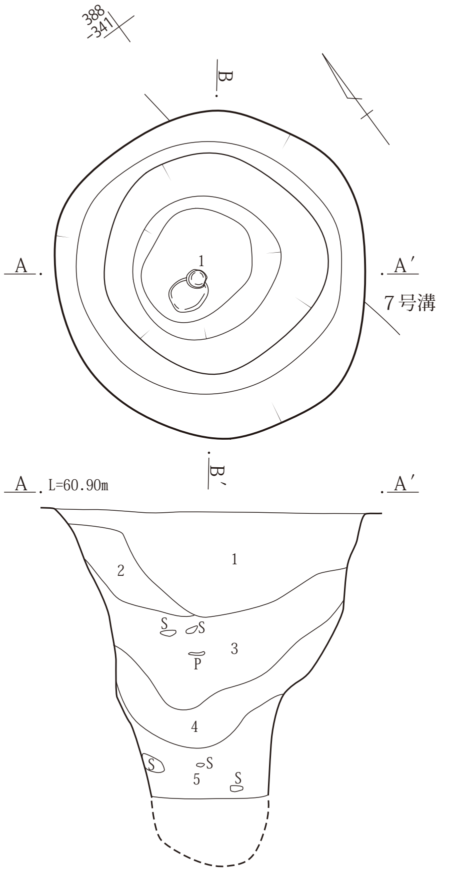
第40図　１区５号粘土採掘坑

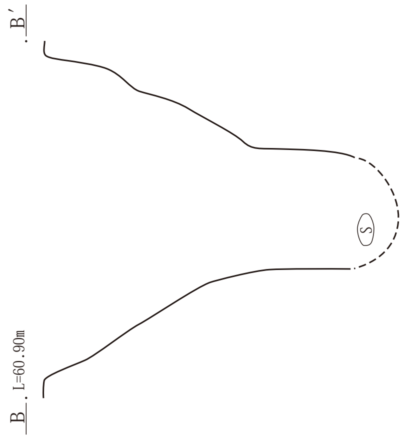
（7）井戸

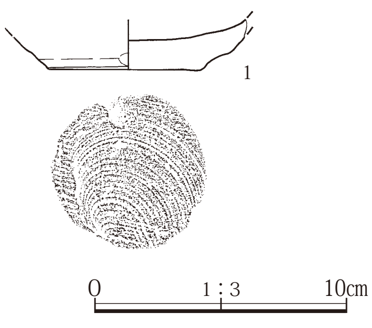
１区から検出された井戸は、１区南側に位置する１基だけである。

１号井戸（第41図　PL. 5）

X＝385～387、Y＝－340～342に位置する。７号溝と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形状は不整円形を呈し、長径1.72m、短径1.64m、湧水のため掘削できなかったため深さは不明瞭だが、ボーリングによって底面の深さを推定した。断面形は漏斗状を呈し、素掘りの井戸であった可能性が高い。埋没土中には大小礫を含み、埋没状況は自然埋没と考えられる。遺物は埋没土中から須恵器杯底部１点（第41図１）が出土した。非掲載遺物は土師器小破片112.5ｇ、須恵器大破片150.3ｇが出土する。遺構確認面から約1.5m下の灰色粘質土層が湧水層であった可能性が高い。出土遺物から時期は10世紀代と考えられる。







1　黒褐色土　黄褐色土小粒微量含む　粘性ややあり締まりあり
2　暗褐色土　粘性ややあり締まりあり　ややザラつきあり　色調は１層より明るい
3　黒褐色土　１層に類似　締まりあり
4　暗褐色土　黄褐色土小粒少量含む　粘性締まりあり　ザラつきあり　色調やや明るい
5　暗褐色土　４層に類似　粘性締まりあり　色調は４層より明るい

0　1：40　1ｍ

第41図　１区１号井戸と出土遺物

（８）溝

１区から検出された溝は15条である。１・10号溝は埋没土と出土遺物から８世紀後半代、２～５号溝は東方へ給排水する水路と考えられる。

１号溝（第42・43・48図　PL.5・31）

Ｘ＝353～405、Ｙ＝－316～337に位置する。１・２号竪穴住居、３・４・５・９号溝、２・11号土坑、７・38・61・167号ピットと重複する。１号竪穴住居・２号竪穴住居を１号溝が切る。３・４・５号溝に切られ、９号溝との関係は不明。埋没土の確認状況から北西から緩やかに南に向きを変えて走行し、底面標高は北西端60.92m、南端60.29m、比高0.63m、勾配は1.16％とほぼ平坦である。北西側及び南側は調査区外となるため長さは54.46m以上、上面幅1.36～6.34m、深さ24～39㎝である。下層はローム塊、礫などを含み、上層は暗褐色土による自然堆積と考えられ、水流の痕跡を示す砂層等は認められない。埋没土から双耳杯（第48図１）、甕（同図２）、底面から甕同（図３）が出土しており、遺構に伴うと考えられる。非掲載遺物は土師器大破片23.9ｇ、土師器小破片33.1ｇ須恵器大破片5,695.1ｇである。底面付近から出土した中世の陶器甕（同図４）は混入と考えられる。遺構重複関係と出土遺物から時期は８世紀後半代と考えられる。

２号溝（第44・48図　PL．５・６）

Ｘ＝381～390、Ｙ＝－315～321に位置する。３・４・５号溝と重複する。３号溝に切られる。４・５号溝との切り合いは確認できなかった。南北から東西方向に屈曲する部分を検出した。断面は椀形。底面標高は北端60.27m、東端60.25m、南北部は平坦で東端のみやや浅い。屈曲部を含めた総延長は12.25m、幅2.22m、深さは最深で50㎝を測る。走行から３～５溝に合流する南北溝だろう。埋没は自然堆積と考えられ、底面付近に水成堆積層が認められる。埋没土から江戸時代の陶器碗（第48図１）が出土し遺構に伴うと考えられる。非掲載遺物は須恵器大破片20ｇである。出土遺物から時期は近世と考えられる。

３号溝（第44・48図　PL．６）

Ｘ＝383～396、Ｙ＝－316～355に位置する。１・２・４・５号溝、18号土坑と重複する。２・４・５号溝埋没土を３号溝が切る。18号土坑は３号溝に切られて検出された。西から東に走行し、底面標高は西端60.83m、東端60.44m、比高39㎝である。勾配は1.02％と、ほとんど傾斜はみられない。長さは42.00m、上面幅0.40～1.52m、深さは最深でを53㎝を測る。埋没土の状況から自然堆積と考えられるが、水流の痕跡を示す証拠は認められなかった。埋没土から近世の陶器瓶（第48図１）のほか磁器１点、土師器大破片77.7ｇ、須恵器大破片105.8ｇが出土している。出土した遺物及び埋没土から時期は近世と考えられる。

４号溝（第44・48図　PL．６）

Ｘ＝380～395、Ｙ＝－315～355に位置する。１・２・３・８号溝と重複する。４号溝が１号溝に切られ、３号溝を切る。２・７・８号溝との関係は不明だが、７・８号溝は支脈溝の可能性あり。西から東に走行し、底面標高は西端60.84m、東端60.26m、比高58㎝である。勾配は0.98％であり、ほとんど傾斜していない。検出された長さは42.40m、上面幅は最大で94㎝、深さは最深49㎝を測る。埋没は自然堆積と考えられ、埋没土に水流の痕跡は認められなかった。常滑陶器甕（第48図１）が出土し遺構に伴うと考えられる。非掲載遺物は土師器大破片41.3ｇ、須恵器大破片23.2ｇである。時期は中世～近世と考えておきたい。

５号溝（第44図　PL．６）

Ｘ＝384～391、Ｙ＝－315～336に位置する。１・２・３号溝、18号土坑と重複する。１号溝を切り、３号溝に切られる。18号土坑は5号溝に切られている。２号溝との新旧関係は不明。標高は西端60.73m、東端60.42m、比高31㎝で緩やかな傾斜をみせる。検出された長さは16.20m、上面幅1.28～2.00m、深さは最深で33㎝である。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられ、底部に水成堆積層が認められる。出土遺物はなく３号溝と同様近世に属すると考えられる。

６号溝（第43図　PL．６）

Ｘ＝373～377、Ｙ＝－315～317に位置する。21・

23・37号ピットと重複し、新旧関係は確認できなかった。北北東から南南西に走向し、底面標高は南南西60.80m、北北東60.77ｍで、高低差はほとんど見られない。北端部で東方に屈曲する可能性がうかがえるが、調査区外で確認できない。検出された長さは4.54m、上面幅28～51㎝、最大深さ12㎝である。埋没土はローム塊の多い人為的堆積と考えられる。出土遺物はなく埋没土からも時期は限定できない。

７号溝（第45図　PL．６）

Ｘ＝367～391、Ｙ＝－337～341に位置する。４・８号溝、１号井戸と重複し、埋没土の確認状況から８号溝に切られる。１号井戸との新旧関係は不明。北から南に走行し、底面標高は北端60.81m、南端60.49m、比高32㎝で、南に向かってわずかに傾斜しているが、埋没土に水流の痕跡は確認できない。長さは24.02m以上、上面幅は北端で4.22m、南端で0.94m、深さは最大深24㎝を測る。４号溝重複部分は扇状に幅が広がる。埋没土はわずかで自然堆積と思われる。出土遺物はなく埋没土からも時期限定はできなかった。

８号溝（第45図　PL．６）

Ｘ＝382～390、Ｙ＝－337～340に位置する。４・７号溝と重複し、7号溝を切る。４号溝から分岐する支流の可能性がある。北から南に走り、底面標高は南西端60.76m、北東端60.71m、比高５㎝で南へ若干の傾斜を示す。検出された長さは7.48m、上面幅18～66㎝、深さ４～11㎝である。埋没は自然堆積と考えられる。出土遺物はなく埋没土からも時期限定はできなかった。

９号溝（第42図　PL．６）

Ｘ＝391～392、Ｙ＝－322～328に位置する。１号溝・165号ピットと重複し、165号ピットを切る。１号溝から分岐する支流溝の可能性がある。底面標高は西端60.89m、東端60.79m、比高10㎝で、高低差は僅かである。検出部長さは5.18m、上面幅46～52㎝、深さ13～26㎝を測る。埋没土から水流の痕跡は認められなかった。出土遺物はなく埋没土からも時期限定はできなかった。

10号溝（第45・46・48・49図　PL．６・31）

Ｘ＝399～446、Ｙ＝－346～379に位置する。23号土坑、247号ピット、11・12号溝、５号粘土採掘坑と重複する。埋没土の確認状況から23号土坑を切り11・12号溝に切られる。247号ピットは10号溝に切られるピットである。10号溝が５号粘土採掘坑埋没土を切る。底面標高は南西端60.55m、北東端60.47ｍで、比高８㎝とほとんど平坦である。断面は台形状で土層断面から埋没後の掘り直しが認められる。１区北トレンチ調査で検出された南北に走行する溝も断面形状と堆積土の類似から10号溝の一部と考えられる。この北トレンチで検出された溝と連続すると考えた場合、東西走向10号溝が調査区東外側で北北西に屈折し、直線的に延びて連続したと認定できる。10号溝の検出された長さは32.5m、上面幅は最大で2.70m、底面幅は1.10～1.50m、深さは最大深74㎝を測る。埋没土はAs-B層に覆われ、中層下はレンズ状の堆積が認められ自然埋没と考えられる。埋没土から杯蓋、盤、杯、甕が出土し、底面付近からも杯、甕が出土しいずれも８世紀後半～９世紀代である。埴輪片は混入と考えられる。非掲載遺物は土師器小破片3.9ｇ、須恵器大破片279.1ｇ、須恵器小破片11.4ｇである。時期は埋没土や出土遺物から８世紀後半～９世紀代と考えられる。

11号溝（第46図）

Ｘ＝392～420、Ｙ＝－358～369に位置する。22号土坑、246号ピット、10・12号溝と重複する。10号溝を切り、12号溝に切られる。埋没土の確認状況から11号溝より22号土坑が古く、246号ピットが新しい。北東から南西に走向し、底面標高は北東端61.22m、南西端60.92m、比高30㎝、勾配は0.91％である。北端及び南西端より調査区外となる。検出部長さは32.8m、上面幅25～73㎝、深さ３～15㎝を測る。As-B混土を含む黒褐色砂質土による自然埋没と考えられるが、水流の痕跡は確認できなかった。出土遺物はなく、埋没土から中世と考えられる。

12号溝（第47図）

Ｘ＝408～421、Ｙ＝－345～387に位置する。３号掘立柱建物Ｐ５・Ｐ６・Ｐ７・P10号、１号基壇状遺構・10・11号溝と重複する。１号基壇状遺構・10号溝・11号溝より新しいことは確認できるが、３号掘立柱建物の柱

穴との関係は確認できなかった。南から北に延びて、ほぼ直角に折れ東方に向きを変えて走る。標高は南西端61.05m、北東端60.98m、この間の比高７㎝で目立った傾斜はない。底面標高は屈曲部が最も低い。長さは南北部分が12m、東西部が38.4mを図る。上面幅は東西部東半が狭く0.18m、屈曲部では1.10mを測る。検出面からの最大深さは34㎝である。砂質土ブロックによる埋没で、流水痕認められない。南部の形状から掘り直しの重複の可能性が高い。出土遺物はなく遺構重複関係から時期は中世以降と考えられる。

13号溝（第47図　PL．６）

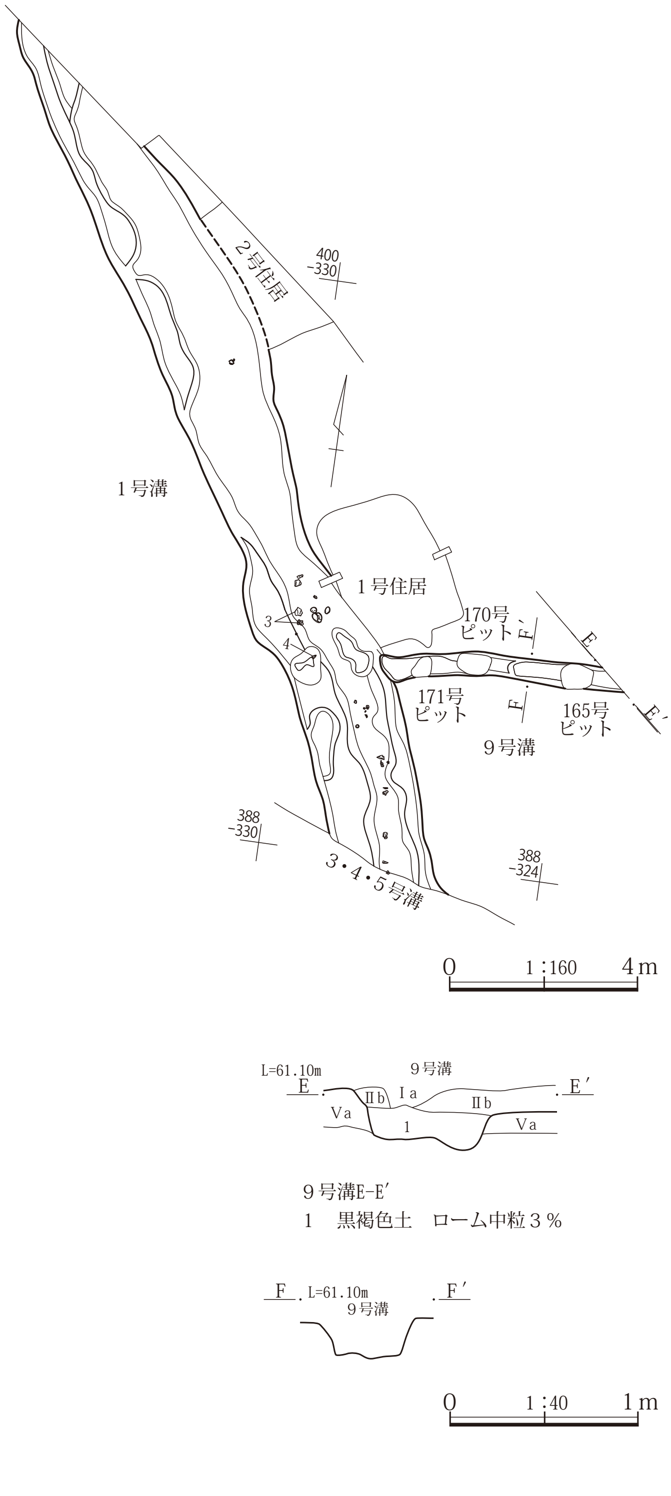
Ｘ＝439 ～ 441、Ｙ＝－372 ～ 374に位置する。14号溝と重複し新旧関係は確認できなかった。北西から南東方向に走り、底面標高は北西端61.31m、南端61.29mで、比高２㎝とほぼ平坦である。検出した規模は長さ2.12m、上面幅0.52 ～ 1.00m、深さ18 ～ 20㎝である。自然堆積による埋没と考えられるが、水流の痕跡は認められない。出土遺物はなく、埋没土及び遺構新旧関係からも時期は決めがたい。

14号溝（第47図　PL．６）

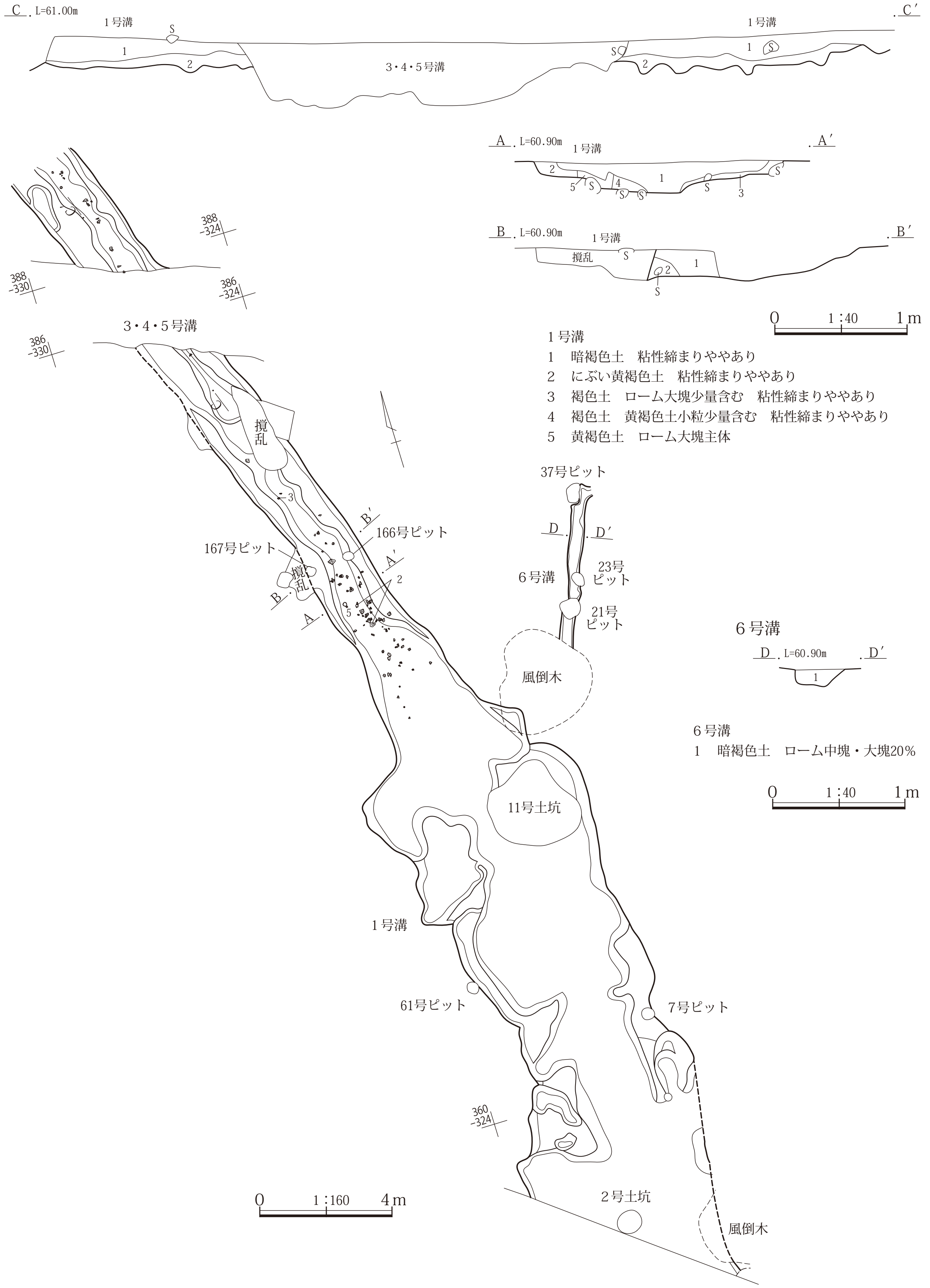
Ｘ＝438 ～ 440、Ｙ＝－368 ～ 377に位置する。13号溝、４号掘立柱建物及び５号掘立柱建物の柱穴と重複し、本溝が新しい。東西方向に走る整った断面薬研状の溝で、長さ9.60m、上面幅0.70 ～ 1.14m、深さ44 ～ 48㎝を測る。底面標高は西端61.09m、東端61.03m、比高は６㎝で、ほぼ平坦といってよい。水流の痕跡は認められなかったが、東方向へ流れる傾斜である。埋没土はレンズ状の堆積状況が認められ自然埋没と考えられる。出土遺物はなく埋没土から時期は古代以降と考えられる。

15号溝（第47図　PL．６）

Ｘ＝440 ～ 443、Ｙ＝－367 ～ 369に位置する。４号掘立柱建物と５号掘立柱建物の柱穴と重複する。埋没土の確認状況から４号掘立柱建物Ｐ４、５号掘立柱建物Ｐ４の上面を15号溝が切る。やや傾いて南北に走る。長さは2.65m以上、上面幅48 ～ 66㎝、深さ10 ～ 18㎝である。底面標高は南南東61.44m、北北西61.41m、比高は３㎝でほぼ平坦。水流の痕跡は確認できない。出土遺物はなくＶa層に覆われた埋没土から時期は奈良・平安時代と考えられる。

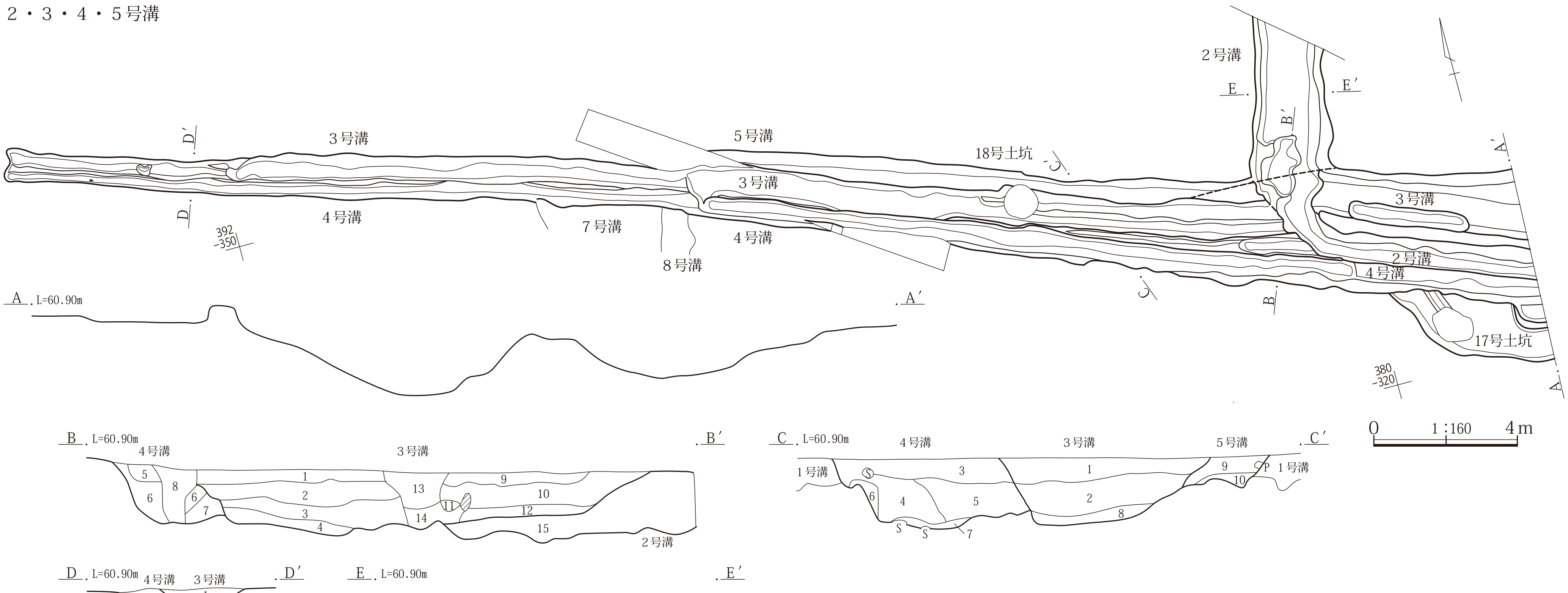


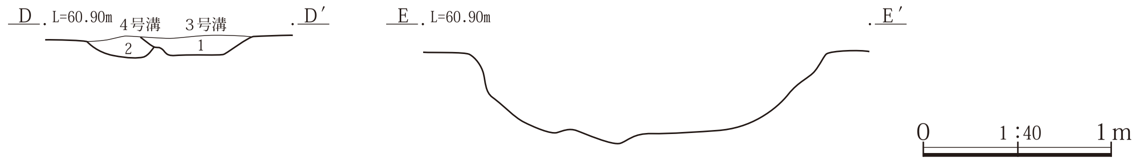
第42図　１区１・９号溝


C L=61.00m
C′
1号溝
3・4・5号溝
A L=60.90m
A′
B L=60.90m
B′
攪乱
0 1:40 1m
1号溝
1　暗褐色土　粘性締まりややあり
2　にぶい黄褐色土　粘性締まりややあり
3　褐色土　ローム大塊少量含む　粘性締まりややあり
4　褐色土　黄褐色土小粒少量含む　粘性締まりややあり
5　黄褐色土　ローム大塊主体
37号ピット
D
D′
6号溝
23号ピット
21号ピット
166号ピット
167号ピット
風倒木
11号土坑
6号溝
D L=60.90m
D′
6号溝
1　暗褐色土　ローム中塊・大塊20％
0 1:40 1m
61号ピット
7号ピット
2号土坑
0 1:160 4m

第43図　１区１・６号溝

2・3・4・5号溝





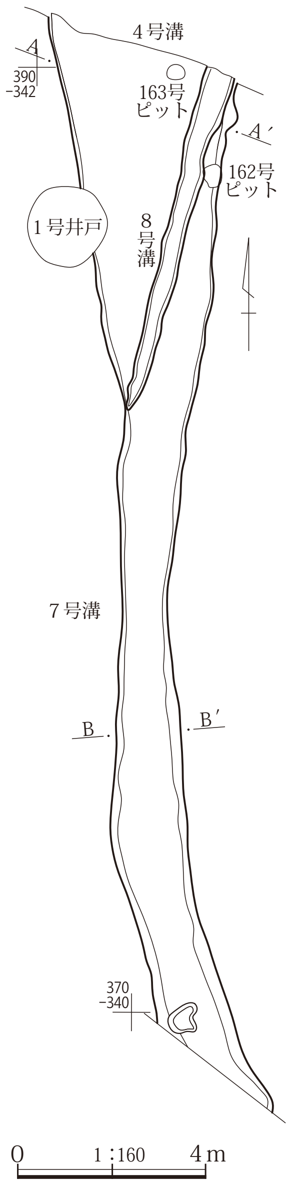
3・4号溝D-D′
1　暗褐色土　褐色土中粒1％　締まりあり
2　黒褐色土　ローム小粒・大塊2％　締まりあり

3～5号溝C-C′
1　暗褐色土　黄褐色土小粒少量含む　粘性締まりややあり　3号溝埋没土
2　暗褐色土と黄褐色土の混土　黄褐色土塊を含む　粘性あり　3号溝埋没土
3　暗褐色土　黄褐色極小粒微量含む　粘性締まりややあり　4号溝埋没土
4　暗褐色土　　黄褐色土小粒少量含む　3層より粘性締まりあり　4号溝埋没土
5　暗褐色土　黄褐色土小粒微量含む　粘性締まりややあり　1層より締まる　4号溝埋没土
6　暗褐色土　20cm大のローム塊　0.5cm以下の小礫含む　5層より粘性あり　4号溝埋没土
7　暗褐色土　暗褐色小粒微量含む　5層より粘性あり　4号溝埋没土
8　黄褐色土　暗褐色土と地山の混土　3号溝埋没土
9　暗褐色土　6、7層より粘性締まりあり　5号溝埋没土
10　暗褐色土と黄褐色土の混土　暗褐色土を多く含む　5号溝埋没土

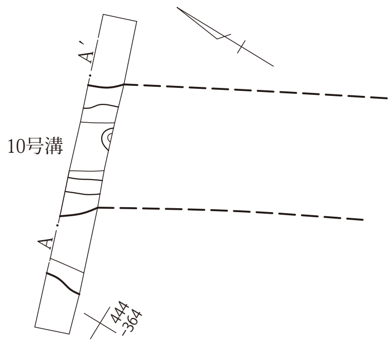
2～4号溝B-B′
1　暗褐色土　黄褐色極小粒微量含む　粘性締まりややあり
2　暗褐色土　黄褐色土小粒少量含む　3層より粘性締まりあり
3　暗褐色土と黄褐色土の混土　A-A′10層に類似する　全体に色調明るい
4　暗褐色土と黄褐色土の混土　3層に類似　締まりあり
5　暗褐色土　黄褐色土小粒微量含む　粘性締まりややあり　1層より締まる
6　暗褐色土と黄褐色土の混土　A-A′6層に類似
7　暗褐色土と黄褐色土の混土　6層より黄褐色土を多く含む　0.5cm以下の小礫微量含む
8　暗褐色土と黄褐色土の混土　4号溝より新しい落ち込みの埋没土か
9　暗褐色土　粘性弱く締まりややあり　全体にザラつきあり
10　暗褐色土　9層に類似　締まりあり
11　褐色土　黄褐色土中粒少量含む
12　褐色土　11層より色調やや暗い　ローム塊を含む　締まりあり
13　暗褐色土　粘性ややあり締まりあり　色調やや明るい
14　暗褐色土　13層に類似　ローム塊を含む
15　暗褐色土　下層部にローム塊を含む　粘性締まりあり　2号溝埋没土

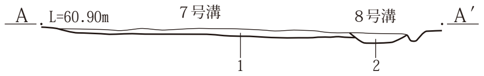
第44図　1区2～5号溝

7・8号溝

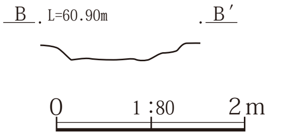


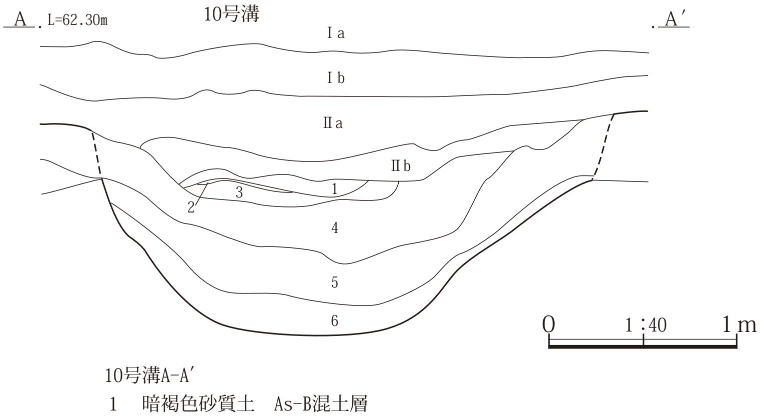
1号北トレンチ
10号溝（南北部分）





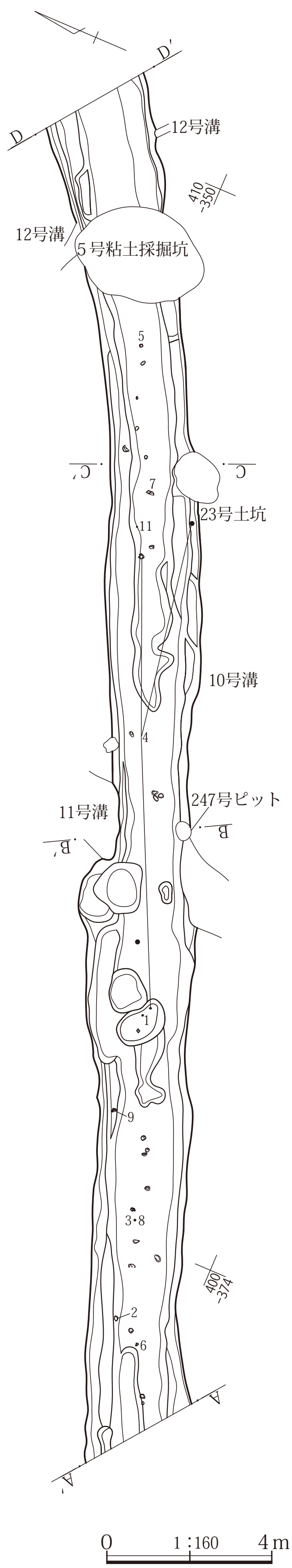
7・8号溝
1　褐色土　ローム小塊少量含む　粘性締まりややあり　7号溝埋没土
2　暗褐色土　粘性あり締まりややあり　8号溝埋没土





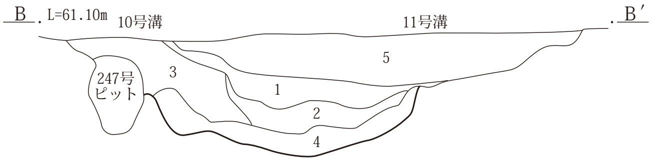
10号溝A-A′
1　暗褐色砂質土　As-B混土層
2　As-B
3　黒褐色土　黄褐色土塊微量含む　As-B下黒褐色土
4　暗褐色土　粘性締まりややあり
5　暗黄褐色土　粘性締まりあり
6　黄褐色土　粘性非常に強く締まりあり

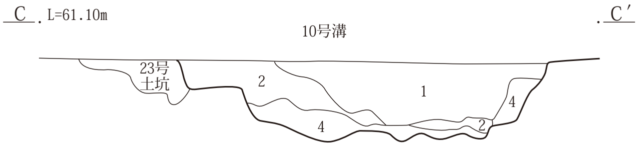
10号溝（東西部分）

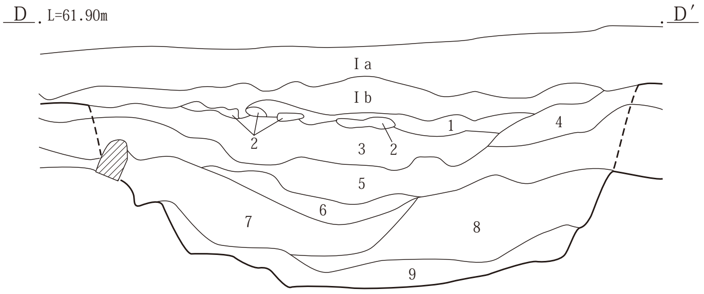


第45図　1区7・8・10号溝

10号溝



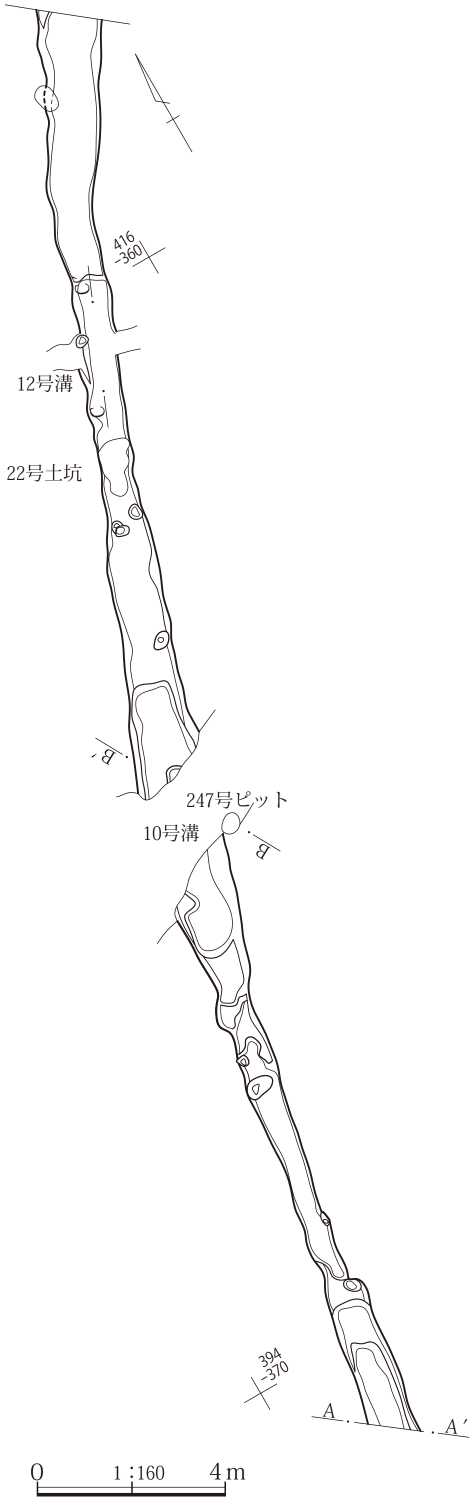




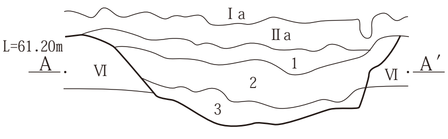
10号溝B-B′ C-C′
1　黒褐色土　黄褐色土小粒・含む　粘性締まりややあり　色調やや明るい
2　暗褐色土　黄褐色土中粒含む　粘性ややあり締まりあり
3　褐色土　２層に類似し、色調明るい
4　暗褐色土と黄褐色土塊の混土　暗褐色土主体　粘性強く締まりあり
5　暗褐色土　As-B含み粘性と締まりあり(11号溝)

10号溝D-D′
1　As-B混土
2　As-B　部分的に小豆色の灰層がみられる
3　黒褐色土　黄褐色土塊微量含む
4　暗褐色土　粘性締まりややあり
5　暗褐色土と黒褐色土の混土　粘性弱い　締まりあり
6　暗褐色土とローム塊の混土
7　黒褐色土　黄褐色土小粒含む　粘性締まりややあり
8　暗褐色土　黄褐色土中粒含む　粘性締まりややあり
9　暗褐色土と黄褐色土の混土　粘性強い

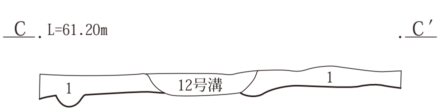
11号溝



11号溝



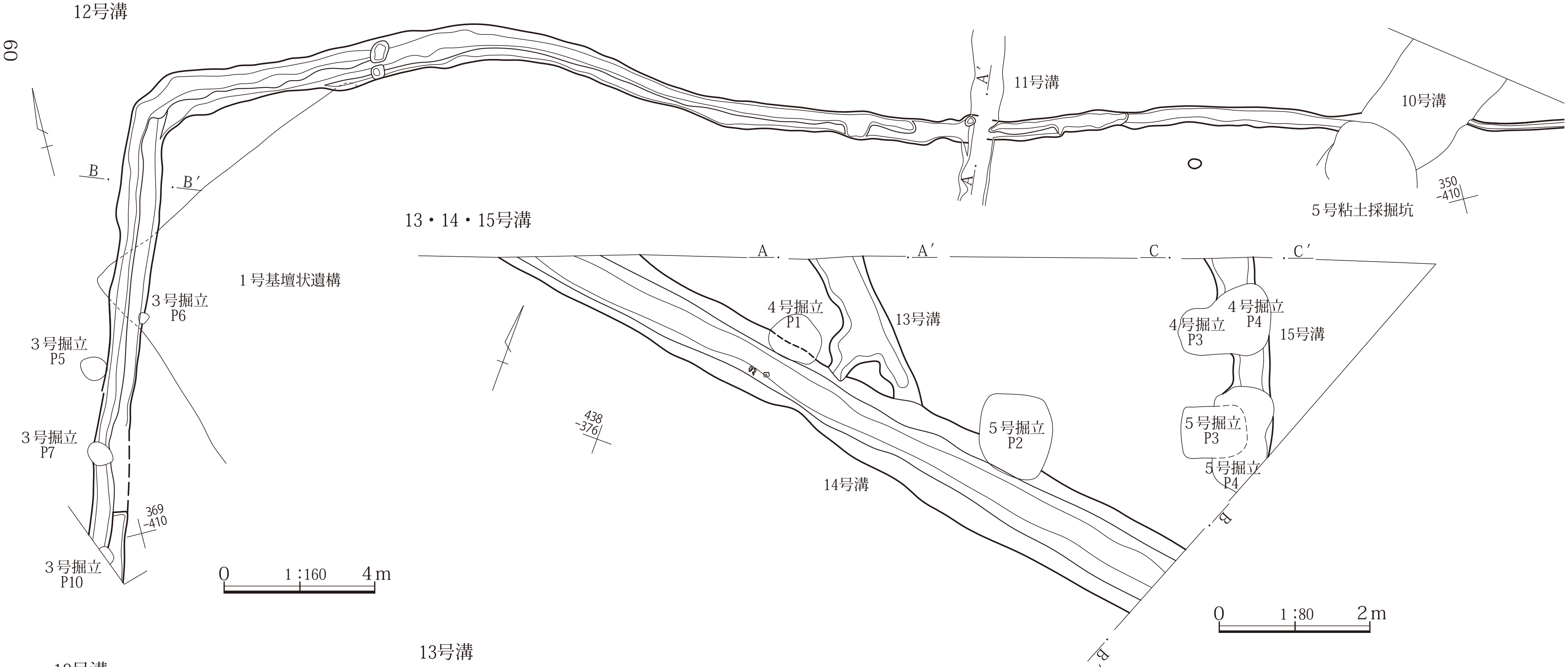
11号溝A-A′
1　黒褐色土　やや暗色味あり
2　黒褐色土　１層よりやや黒色味あり　ローム中粒１％以下　やや砂質でやや締まる
3　黒褐色土　２層と同じ色調　ローム中粒・大塊５％　やや砂質で締まり粘性あり

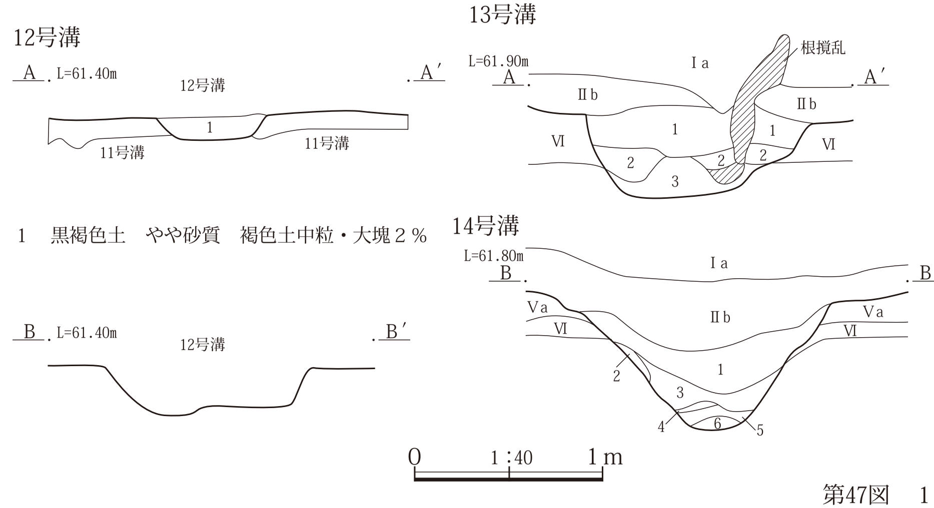


11号溝C-C′
1　黒褐色土　やや砂質　褐色土中粒・大塊３％

0　1：40　1ｍ

第46図　１区10号溝の断面図と11号溝

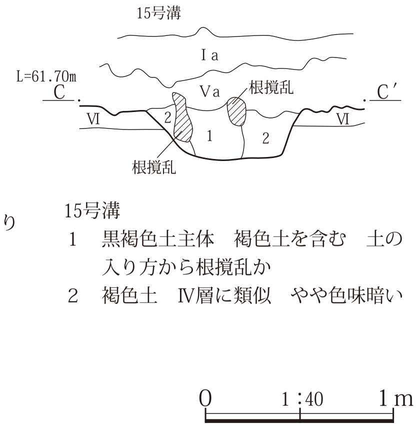




1　黒褐色土　やや砂質　褐色土中粒・大塊２％

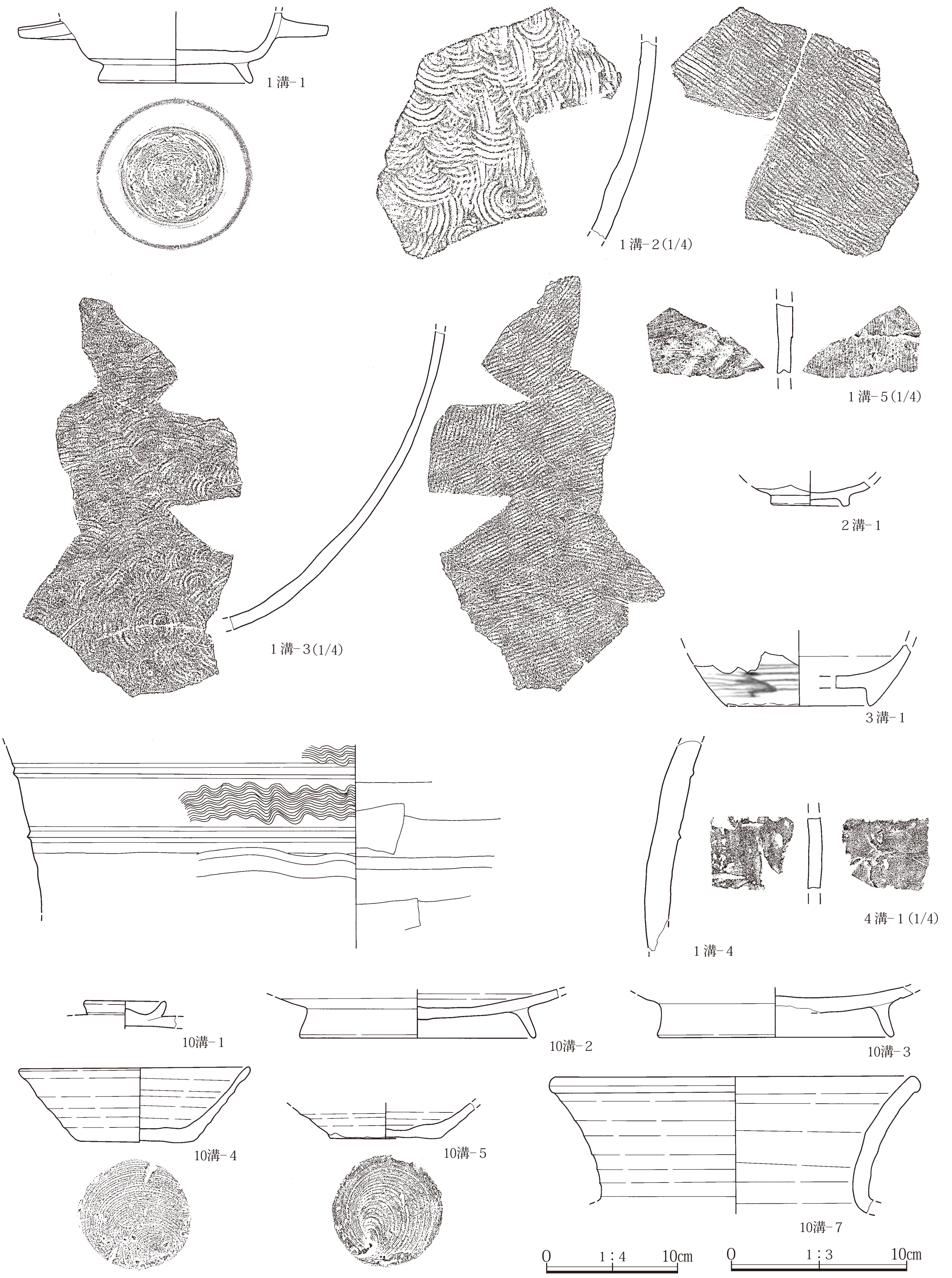
13号溝
1　暗褐色土　粘性あり締まりややあり
2　暗褐色土　５層に類似　５層より締まりあり
3　にぶい黄褐色土　粘性ややあり締まりあり

14号溝
1　黒褐色土　黄褐色土小粒含む　粘性ややあり締まりあり
2　黄褐色土　粘性弱く締まり強い
3　黒褐色土　黄褐色土中粒・含む　締まりあり
4　黄褐色土塊
5　黒褐色土　ローム小塊を含む　粘性締まりあり
6　黒褐色土と黄褐色土の混土

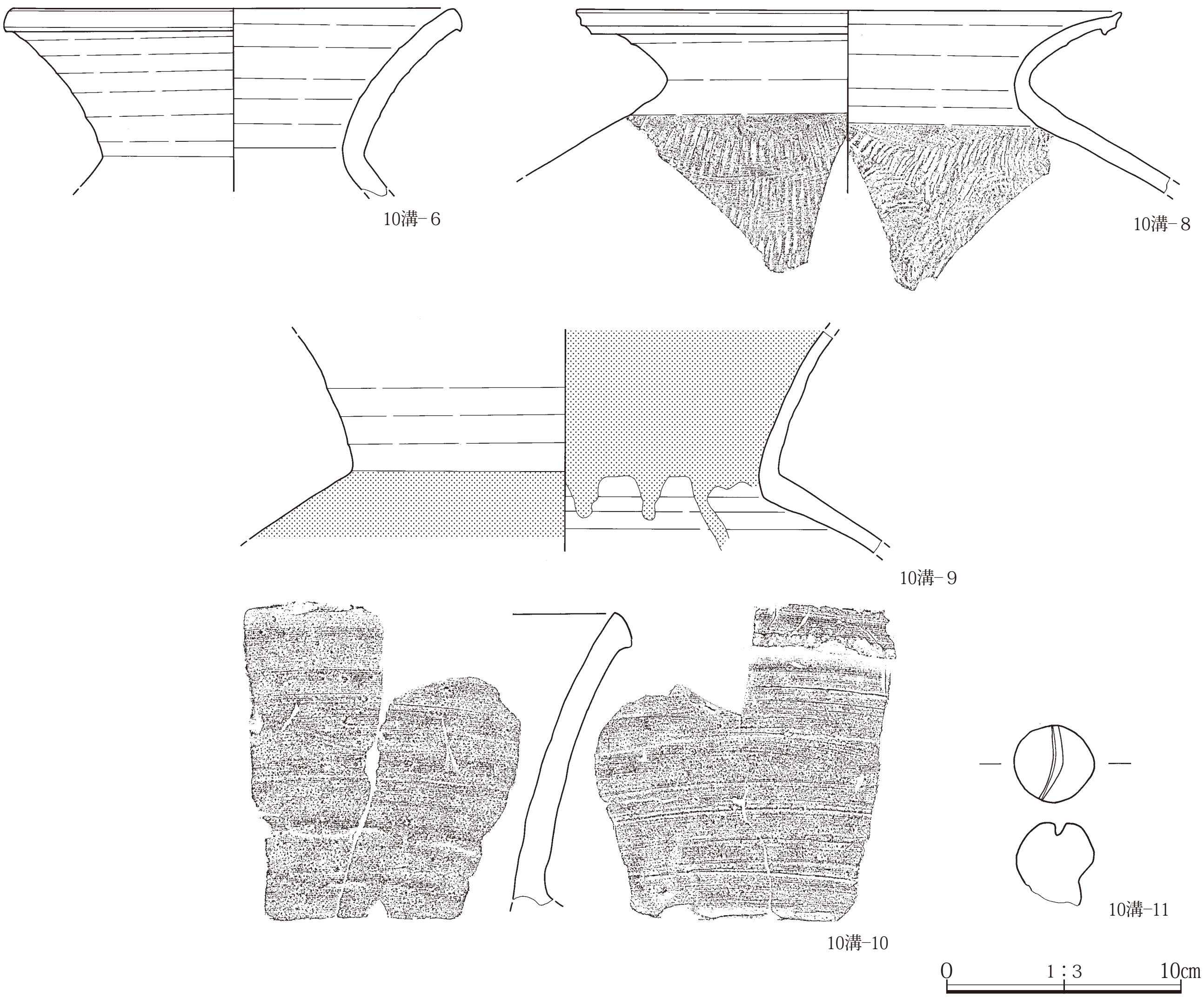


15号溝
1　黒褐色土主体　褐色土を含む　土の入り方から根撹乱か
2　褐色土　Ⅳ層に類似　やや色味暗い

第47図　１区12～15号溝



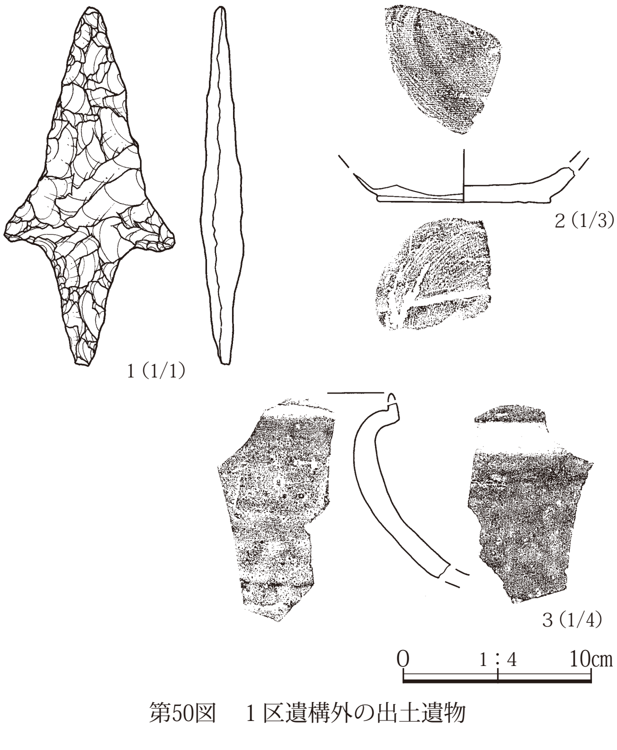
第48図　１区１～４・10号溝の出土遺物



第49図　１区10号溝の出土遺物

２　遺構外の遺物

１区からは、縄文時代以降の遺物が遺構外から出土しており、縄文時代では有茎尖頭器（１）や加工痕のある剥片が出土している。古墳時代から奈良・平安時代の非掲載遺物の総重量は土師器大破片101.3ｇ、土師器小破片27.0ｇ、須恵器大破片560ｇ、須恵器小破片130.0ｇにすぎない。中世から近世に帰属する遺構外遺物は、13世紀の陶器甕（３）や中世以降の皿（２）が出土する。非掲載遺物は中世の国産陶器５点、近世では国産磁器１点、国産施釉陶器４点、国産陶器１点、時期不詳の瓦１点が出土している。



第50図　１区遺構外の出土遺物

第３節　２区の調査成果

笠松遺跡２区は道路を挟み1区の西側に位置する。標準土層Ⅵ層上面を遺構確認面とした。同一面での遺構確認調査によって奈良・平安時代から中近世に至る土坑、ピット、溝が検出された。

１　奈良・平安時代以降の遺構と遺物

検出遺構は土坑６基、ピット５基、溝３条に上る。ほぼ三角形の調査の中央部から西側にかけて溝が検出され、東側に土坑やピットが分布する。いずれも埋土の特徴から古代～近世に属すると推定されるが限定できない。

（1）土坑・ピット

１区から検出された土坑は６基、ピットは５基である。遺物の出土したものや柱痕等の特徴が認められる土坑、ピットを取り上げて記載し、これ以外の全ての土坑、ピットを含めて第19表に計測値を掲げた。

１号土坑（第52図PL．６）

平面楕円、断面椀形で1号溝北西岸80㎝で検出。壁際はローム土を含む人為的埋没土が堆積する。出土遺物はなく、時期は不明。

５号土坑（第52図PL．６）

堆積状況から人為的埋没土の可能性あり。出土遺物はなく、埋没土からも時期限定はできない。

６号土坑（第52図PL．６）

平面長方形で、底部付近のみ検出した。底面は僅かな窪みが認められるがほぼ平坦面であり壁はやや垂直に立ち上がる。ローム塊を含む人為的埋没土と考えられる。出土遺物はなく、埋没土からも時期は限定できない。

１号ピット（第52図）

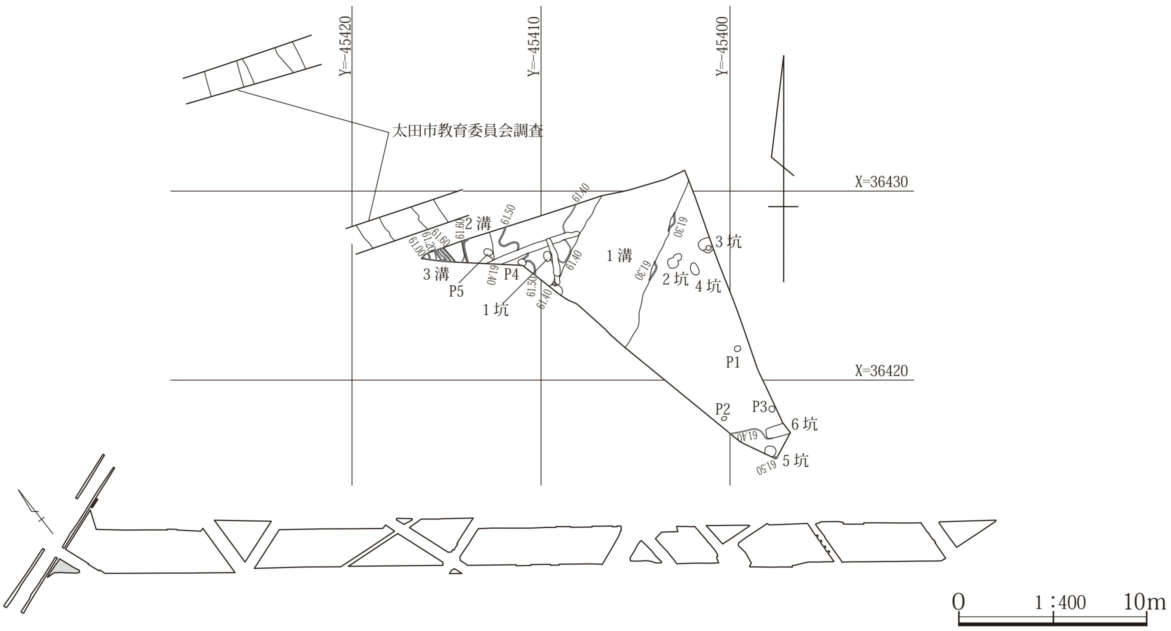
平面不整円形、断面椀形。埋没土は砂質土による自然堆積と考えられる。出土遺物はなく、時期は限定できない。

３号ピット（第52図）

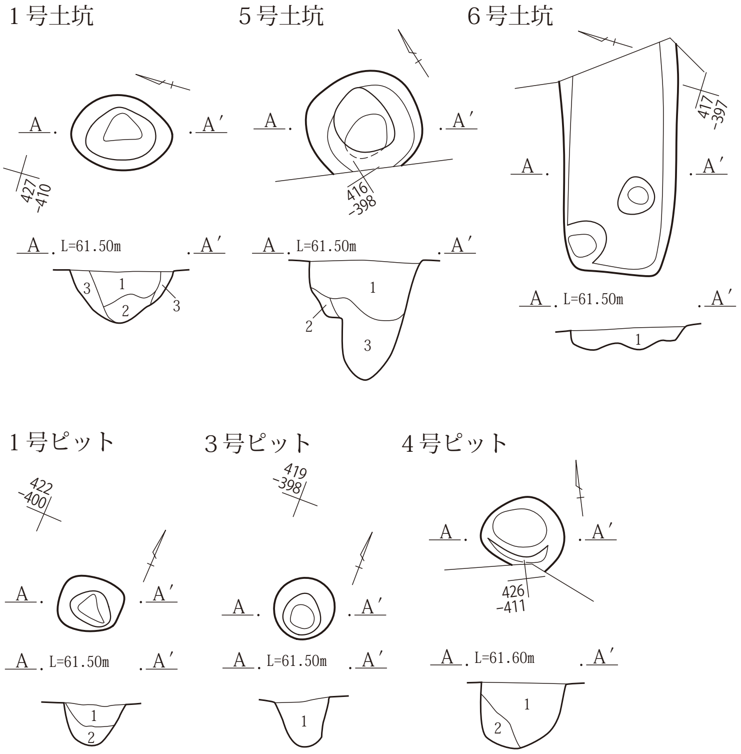
平面円形で、断面円錐形。埋没土は砂質土による自然堆積と考えられる。出土遺物はなく、埋没土からも時期は限定できない。

４号ピット（第52図）

平面不整円形で、断面は深い椀形。ローム粒を多量に含む人為的埋没土と考えられる。出土遺物はなく、埋没土からも時期は限定できない。



第51図　笠松遺跡　２区全体図



1号土坑
1　黒褐色砂質土　ローム土10%　粘性ややあり締まり強い
2　暗褐色砂質土　ローム大塊10%
3　暗褐色砂質土　ローム土40%

5号土坑
1　黒色砂質土　ローム粒を少量含む　粘性ややあり締まり強い
2　褐色砂質土　ローム土10%
3　暗褐色砂質土　ローム土10%

6号土坑
1　暗褐色砂質土　ローム大塊10%

1号ピット
1　黒褐色砂質土　粘性ややあり　締まり弱い
2　黄褐色砂質土　ローム土20%　粘性締まり強い

3号ピット
1　黒褐色砂質土　ローム中粒５%　粘性ややあり締まり強い

4号ピット
1　暗褐色砂質土　ローム中粒５%　粘性ややあり締まり弱い
2　褐色砂質土　ローム土20%　粘性ややあり　締まり弱い

0　1：40　1ｍ

第52図　２区１・５・６号土坑と１・３・４号ピット

（２）溝

２区から検出された溝は３条である。

１号溝（第53図　PL．６）

Ｘ＝421 ～ 431、Ｙ＝－402 ～ 409に位置する。重複する遺構はない。北から南に走向し、底面標高は北端60.02m、南端59.98m、比高４㎝である。高低差は僅かであるが水流は南から北に流れていたと想定される。検出した規模は長さ9.62m、上面幅3.86 ～ 5.12m、最大深さ1.84mである。埋没状況から２度掘り直されたと思われる。第一段階は礫層まで掘り込まれたあと２～ 10層によって埋没する。第二段階は13 ～ 17層であり、ローム塊や川原石を含む自然堆積と考えられ、底部に水成堆積が認められる。最終段階で川原石を多量に含む１層によって埋没したと考えられる。埋没土から江戸時代の皿（第53図１）、焙烙（同図２）が出土する。非掲載遺物は古代瓦１点のほか須恵器大破片257.8ｇ、須恵器小破片86.6ｇが出土する。埋没土及び出土遺物から時期は中世から近世と考えられる。

２号溝（第53図　PL．６）

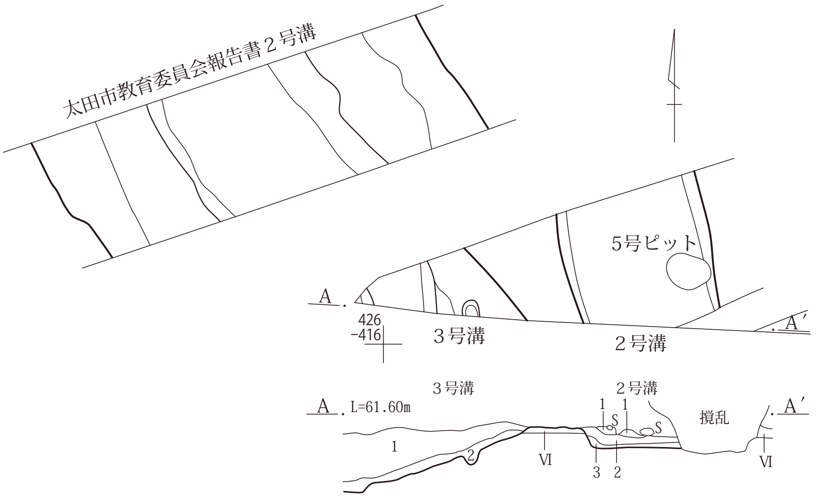
Ｘ＝426、Ｙ＝－412 ～ 414に位置する。重複する遺構はない。北から南に走向し、底面標高は北端61.51m、南端61.45m、比高６㎝である。高低差は僅かである。調査区外となるため長さは1.52mしか検出されず、上面幅1.42 ～ 1.60m、深さ22㎝を測る。埋没は自然堆積と考えられる。水流の痕跡は認められない。出土遺物はないが、埋没土が1号溝に近似することから時期は中世から近世と考えておく。

３号溝（第53図　PL．６）

Ｘ＝426、Ｙ＝－414 ～ 416に位置する。重複する遺構はない。調査区西端に位置するため溝東側縁辺部のみの検出であり、溝ではなく土坑状の遺構である可能性もある。長さは1.00m以上、上面幅1.30m以上、深さ70㎝である。ローム塊を含む締まりのない褐色土で人為的に埋められていると思われる。水流の痕跡は認められない。太田市教育委員会（旧新田町教育員会）による主要地方道足利・伊勢崎線歩道拡幅工事に伴う発掘調査で検出された２号溝と連続する位置にあるが、土層が異なり、同一の溝とは思えない。出土遺物はなく、ここでは時期限定の根拠は得られなかったが、埋土に締まりがないことから、新しい時期のものであることが考えられ、この遺構によって２号溝が破壊されている可能性が強い。

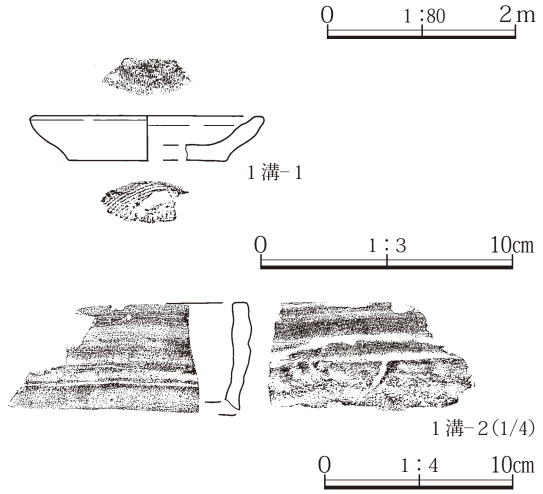
１号溝

２・３号溝



２号溝
1　黒色土　２層より色調黒い　粘性締まりなし
2　褐色土　１層より全体に明るい色調　粘性締まりなし
3　褐色土　１～３㎝大の褐色土塊を含む　粘性締まりなし

３号溝
1　褐色土　ローム塊少量含む　粘性締まりなし
2　褐色土　ローム塊多量に含む　粘性締まりなし



１号溝
1　黒色土　砂質　１～30㎝大の河原石多量に含む　粘性締まりなし
2　黒褐色土　２～３㎝大のローム塊を含む　締まり粘性なし
3　黒色土　色調やや灰色　１～５㎝大の河原石を含む　粘性締まりあり
4　黒色土　ローム塊を含む
5　褐色土　砂質土　締まりややあり
6　褐色土　５層に近似　色調は明るい　少量の礫を含む
7　褐色土　６層に近似　色調やや黒い
8　褐色土　ローム塊多量に含む
9　褐色土　黒色土とローム塊を多量に含む
10　黄褐色土　ローム塊主体　黒色土塊を含む　壁の崩落土
11　黒色土　表土に類似　粘性締まりなし
12　黒褐色土　ローム小塊多量に含む
13　黒色土　３層に近似　３層より灰色がかる
14　褐色砂質土　ローム小塊多量に含む　色調明るい
15　黒色土　13層に近似　やや明るい色調
16　褐色土　14層に近似　砂質
17　黒色土　色調は灰色がかる　粘性ややあり

第53図　２区１・２・３号溝と１号溝の出土遺物

２　遺構外の遺物

２区からは、中世から近世に帰属する遺物が出土する。非掲載遺物であるが、中世の国産焼締陶器１点、近世の焙烙１点、時期不詳瓦１点が出土している。

第19表　笠松遺跡土坑・ピット計測表

土坑

区No	位置	形状	主軸方位	規模(m)長/短/深
1区1	366-316	長方形	N-65°-W	(1.66)/0.70/0.37
2	355-320	円形	-	0.75/0.67/0.22
3	358-324	円形	-	0.93/0.78/0.16
4	359-324	不定形	-	(0.77)/0.73/0.11
5	359-325	不定形	-	0.75/(0.37)/0.10
6	361-329	不定形	N-30°-E	0.60/0.45/0.19
7	362-328	不定形	N-55°-W	0.72/0.57/0.12
8	369-330	不定形	N-14°-E	1.22/1.10/0.14
9	368-326	円形	-	1.53/1.22/0.20
10	373-329	隅丸方形	N-16°-E	0.77/0.63/0.32
11	367-318	不定形	N-33°-W	2.60/2.33/0.42
12	375-329	不定形	N-58°-W	1.63/0.63/0.14
13	376-330	円形	-	0.94/0.92/0.19
14	375-333	円形	-	0.98/0.91/0.19
15	399-335	円形	-	0.80/0.78/0.20
16	390-322	不定形	N-52°-W	1.00/0.75/0.57
17	380-317	不定形	N-57°-W	1.19/0.86/0.39
18	337-328	円形	-	0.95/0.93/0.62
19	421-379	不定形	N-80°-E	1.13/0.77/0.41
20	418-356	円形	-	1.02/1.02/0.24
21	431-375	不定形	N-43°-W	1.43/0.70/0.45
22	410-362	不定形	N-23°-E	1.21/0.60/0.33
23	407-356	不定形	N-46°-E	1.5/(1.04)/0.34
2区1	426-409	楕円形	N-16°-W	0.53/0.40/0.26
2	425-402	不定形	N-40°-E	0.92/0.59/0.37
3	426-400	不定形	N-65°-E	(0.52)/(0.38)/0.41
4	425-401	楕円形	N-18°-W	0.65/0.41/0.64
5	415-397	不定形	N-7°-W	0.61/0.57/0.63
6	416-396	不定形	N-75°-E	1.27/0.63/0.11

ピット

区No	位置	形状	主軸方位	規模(m)長/短/深
1区1	360-316	円形	-	0.36/0.34/0.46
2	361-316	不定形	-	(0.30)/(0.13)/0.40
3	362-316	不定形	-	(0.26)/(0.20)/0.32
4	363-316	不定形	-	(0.33)/(0.25)/0.11
5	361-316	円形	-	0.21/0.21/0.23
6	362-317	円形	-	0.30/0.28/0.41
7	361-318	円形	-	0.37/0.36/0.38
8	364-317	隅丸方形	-	0.21/0.21/0.22
9	364-317	不定形	N-70°-W	0.54/0.40/0.37
10	364-316	楕円形	N-35°-E	0.52/0.45/0.43
11	365-316	不定形	N-68°-W	0.36/0.26/0.14
12	365-318	円形	-	0.28/0.25/0.16
13	366-318	楕円形	N-70°-E	0.35/0.23/0.21
14	367-316	円形	-	0.28/0.23/0.22
15	368-316	円形	-	0.30/0.25/0.35
16	369-316	円形	-	0.35/0.25/0.23
17	369-317	円形	-	0.30/0.27/0.36
18	370-317	不定形	-	0.40/0.25/0.44
19	372-315	円形	-	0.30/0.27/0.32
20	374-316	円形	-	0.25/0.21/0.19
21	373-316	不定形	N-18°-E	0.64/0.60/0.21
22	374-316	楕円形	N-84°-W	0.40/0.26/0.25
23	374-316	不定形	N-27°-W	0.47/0.31/0.20
24	375-318	円形	-	0.20/0.19/0.20
25	375-318	円形	-	0.20/0.20/0.12
26	375-318	円形	-	0.30/0.22/0.27
27	375-320	不定形	N-12°-W	0.40/0.26/0.28
28	376-318	不定形	N-2°-W	0.65/0.28/0.42
29	377-317	不定形	N-63°-W	0.47/0.35/0.39
30	378-318	不定形	N-30°-E	0.47/0.30/0.30
31	378-317	楕円形	N-22°-W	0.48/0.35/0.35
32	379-315	円形	-	0.26/0.23/0.17
33	379-322	円形	-	0.36/0.32/0.25
35	382-322	不定形	N-4°-W	0.35/0.22/0.24
36	382-321	不定形	N-8°-W	0.35/0.31/0.20
37	377-315	不定形	N-16°-E	0.58/0.35/0.43
38	359-319	円形	-	0.24/0.22/0.18
39	361-322	円形	-	0.24/0.21/0.20
40	361-323	隅丸方形	N-72°-E	0.28/0.25/0.41
41	361-324	不定形	N-20°-E	0.35/0.25/0.45
42	360-324	不定形	N-73°-W	0.30/0.23/0.21
43	360-325	円形	-	0.29/0.27/0.33
44	360-325	円形	-	0.25/0.23/0.21
45	361-326	不定形	N-19°-E	0.31/0.27/0.29
46	362-326	円形	-	0.24/0.24/0.19
47	362-328	円形	-	0.30/0.27/0.24
48	363-327	円形	-	0.29/0.26/0.19
49	364-328	円形	-	0.28/0.27/0.28
50	364-329	円形	-	0.24/0.22/0.10
51	363-330	不定形	N-79°-W	0.41/0.33/0.15
52	364-327	楕円形	N-27°-W	0.47/0.31/0.27
53	364-325	隅丸方形	N-8°-E	0.28/0.27/0.18
54	364-325	円形	-	0.22/0.20/0.24
55	362-323	隅丸方形	N-5°-E	0.32/0.27/0.20
56	362-324	円形	-	0.30/0.28/0.58
57	362-324	円形	-	0.25/0.20/0.15
58	365-326	隅丸方形	N-84°-E	0.23/0.21/0.19
59	365-327	円形	-	0.30/0.25/0.15
60	366-325	隅丸方形	N-44°-W	0.25/0.23/0.27
61	363-323	不定形	N-31°-W	0.39/0.33/0.36
62	365-323	円形	-	0.31/0.27/0.55
65	366-326	円形	-	0.26/0.24/0.16
66	366-326	楕円形	-	0.46/0.27/0.34
67	366-327	楕円形	N-73°-W	0.48/0.35/0.35
69	367-327	円形	-	0.44/0.40/0.31
70	368-328	不定形	N-2°-W	0.49/0.36/0.42
71	364-329	円形	-	0.31/0.26/0.25
72	369-331	不定形	N-14°-W	0.60/0.42/0.28
73	369-331	不定形	N-41°-W	0.79/0.54/0.46
74	368-334	楕円形	N-30°-E	0.37/0.22/0.16
75	369-335	楕円形	-	0.50/0.38/0.27
76	369-336	円形	-	0.24/0.23/0.10
77	369-336	不定形	N-83°-W	(0.40)/(0.30)/0.20
78	369-335	不定形	N-33°-W	0.50/0.35/0.25
79	370-335	円形	-	0.30/0.26/0.23
80	371-334	不定形	N-30°-E	0.65/0.61/0.45
81	371-334	不定形	N-30°-W	(0.83)/(0.60)/0.55
82	370-337	楕円形	N-32°-W	0.38/0.20/0.24
83	371-336	楕円形	N-28°-E	0.56/0.42/0.41
84	371-336	楕円形	N-27°-E	0.48/0.26/0.29
85	371-336	楕円形	N-55°-E	0.55/0.34/0.16
86	373-336	楕円形	N-34°-W	0.31/0.22/0.14
87	376-337	円形	-	0.29/0.24/0.14
88	376-335	円形	-	0.27/0.24/0.20
89	374-333	楕円形	N-4°-E	0.29/0.20/0.18
90	373-331	円形	-	0.34/0.33/0.42
91	374-331	円形	-	0.26/0.25/0.16
92	374-330	円形	-	0.30/0.26/0.25
93	373-330	円形	-	0.27/0.25/0.12
94	373-329	不定形	N-12°-E	0.35/0.34/0.40
95	373-329	円形	-	0.22/0.21/0.19
97	368-327	隅丸方形	N-29°-W	0.39/0.37/0.14
98	368-327	不定形	N-37°-W	0.22/0.20/0.19
99	368-326	不定形	-	0.46/0.32/0.14
101	371-326	円形	-	0.25/0.25/0.30
103	372-325	不定形	-	0.28/0.23/0.17
104	373-325	円形	-	0.20/0.18/0.19
105	374-325	隅丸方形	N-47°-E	0.25/0.23/0.41
107	375-326	円形	-	0.28/0.23/0.23
108	375-326	不定形	-	0.22/0.18/0.18
109	375-326	円形	-	0.20/0.19/0.26
110	375-325	円形	-	0.38/0.33/0.35
111	376-325	円形	-	0.27/0.23/0.28
112	376-325	不定形	N-70°-E	0.33/0.26/0.35
113	376-326	楕円形	N-31°-E	0.29/0.21/0.18
114	376-327	楕円形	N-33°-W	0.27/0.20/0.31
115	376-327	不定形	N-62°-E	(0.27)/0.21/0.15

区No	位置	形状	主軸方位	規模(m)長/短/深
117	377-327	隅丸方形	-	0.25/0.23/0.18
119	378-328	円形	-	0.24/0.23/0.16
121	377-329	円形	-	0.27/0.26/0.29
124	375-329	不定形	N-59°-W	0.30/0.26/0.21
125	375-331	円形	-	0.27/0.26/0.15
126	375-332	不定形	N-20°-E	0.50/0.40/0.14
128	378-325	隅丸方形	N-30°-W	0.28/0.21/0.34
129	378-325	楕円形	N-78°-W	0.32/0.25/0.29
130	379-326	円形	-	0.30/0.27/0.21
131	380-326	円形	-	0.22/0.20/0.34
132	380-326	楕円形	N-87°-W	0.43/0.22/0.36
133	381-327	不定形	N-6°-E	0.49/(0.21)/0.12
134	381-327	不定形	N-73°-W	0.37/0.21/0.55
136	380-328	円形	-	0.27/0.23/0.23
137	380-329	楕円形	N-14°-W	0.55/0.44/0.36
139	382-326	円形	-	0.28/0.26/.28
140	382-327	円形	-	0.27/0.26/0.18
141	382-329	円形	-	0.27/0.24/0.11
142	381-328	楕円形	N-8°-W	0.33/0.29/0.14
143	381-329	円形	-	0.30/0.29/0.19
144	380-330	円形	-	0.35/0.34/0.16
145	378-330	円形	-	0.32/0.30/0.26
146	380-332	円形	-	0.37/0.34/0.34
147	380-332	円形	-	0.28/0.27/0.29
148	380-333	隅丸方形	N-20°-E	0.31/0.31/0.24
149	385-333	円形	-	0.23/0.20/0.16
150	383-334	円形	-	0.30/0.30/0.16
151	385-335	円形	-	0.34/0.30/0.29
152	381-335	円形	-	0.34/0.30/0.28
153	382-336	円形	-	0.26/0.22/0.14
154	379-336	円形	-	0.38/0.35/0.33
155	378-340	楕円形	N-64°-E	0.43/0.30/0.23
156	373-341	円形	-	0.31/0.31/0.12
157	396-334	円形	-	0.44/0.41/0.17
158	387-317	不定形	N-58°-E	0.55/0.51/0.31
159	368-327	不定形	N-73°-W	0.48/0.27/0.35
160	371-334	隅丸方形	N-40°-W	0.50/0.48/0.62
162	387-338	楕円形	N-3°-W	0.47/0.38/0.36
163	389-338	円形	-	0.38/0.32/0.24
164	390-321	不定形	N-38°-W	0.48/(0.36)/0.29
165	392-323	楕円形	N-88°-E	0.68/0.55/0.30
167	377-324	楕円形	N-50°-E	0.31/0.28/0.27
168	375-324	円形	-	0.28/0.28/0.25
169	377-324	不定形	N-58°-E	0.39/0.38/0.31
170	392-325	隅丸長方形	-	0.70/0.43/0.53
171	391-326	不定形	N-40°-E	0.53/0.39/0.60
172	425-365	円形	-	0.36/0.33/0.27
173	425-364	楕円形	N-64°-E	0.45/0.35/0.40
174	425-365	楕円形	N-30°-E	0.38/0.28/0.23
175	420-365	円形	-	0.44/0.40/0.39
176	420-361	円形	-	0.34/0.32/0.37
177	437-373	円形	-	0.36/0.33/0.18
178	436-373	円形	-	0.27/0.26/0.24
179	436-373	円形	-	0.25/0.25/0.26
180	437-370	円形	-	0.26/0.24/0.34
181	435-371	楕円形	N-78°-E	0.46/0.34/0.22
182	435-371	楕円形	N-33°-E	0.36/0.29/0.17
183	435-370	楕円形	N-39°-E	0.42/0.32/0.40
184	433-385	楕円形	N-60°-E	0.40/0.33/0.62
185	433-383	円形	-	0.25/0.22/0.26
186	432-381	円形	-	0.39/0.36/0.27
187	431-382	円形	-	0.31/0.31/0.22
188	432-381	円形	-	0.34/0.26/0.36
189	428-381	円形	-	0.32/0.30/0.25
190	426-380	円形	-	0.72/0.62/0.45
191	427-379	円形	-	0.28/0.26/0.36
192	425-381	楕円形	N-80°-E	0.52/0.40/0.35
193	423-381	隅丸長方形	N-29°-W	0.65/0.33/0.28
194	423-382	楕円形	N-80°-W	0.67/0.38/0.25
195	424-384	不定形	N-19°-W	0.48/0.25/0.15
196	424-385	円形	-	0.33/0.31/0.40
197	423-384	円形	-	0.55/0.54/0.43

区No	位置	形状	主軸方位	規模(m)長/短/深
198	422-385	円形	-	0.38/0.36/0.41
199	421-385	円形	-	0.26/0.25/0.22
200	421-385	不定形	N-78°-E	0.42/0.32/0.33
201	422-387	円形	-	0.36/0.30/0.34
202	421-387	円形	-	0.39/0.34/0.28
203	421-387	円形	-	0.40/0.34/0.25
204	421-387	不定形	N-25°-W	0.60/0.28/0.28
205	418-386	円形	-	0.55/0.49/0.18
206	418-385	円形	-	0.47/0.38/0.18
207	419-384	円形	-	0.68/0.58/0.17
208	418-384	円形	-	0.39/0.36/0.23
209	421-385	不定形	N-11°-W	0.73/0.35/0.20
210	420-385	不定形	N-2°-W	0.91/0.39/0.25
211	421-381	円形	-	0.27/0.27/0.26
212	425-382	不定形	-	0.33/(0.19)/0.20
213	425-382	不定形	-	(0.33)/(0.31)/0.24
214	425-382	不定形	-	(0.35)/(0.35)/0.25
215	421-379	不定形	N-41°-E	0.39/(0.27)/0.27
216	423-373	不定形	N-70°-E	0.32/0.16/0.22
217	422-368	円形	-	0.31/0.29/0.26
218	420-363	楕円形	N-35°-W	0.93/0.41/0.61
219	435-372	不定形	-	0.56/(0.40)/0.56
220	435-372	不定形	N-11°-E	(0.65)/0.36/0.51
221	435-372	不定形	-	0.45/(0.18)/0.18
222	436-370	楕円形	N-57°-E	0.56/0.42/0.43
223	435-371	楕円形	N-71°-W	0.84/0.53/0.36
224	426-369	楕円形	N-76°-W	0.75/0.58/0.39
225	433-393	不定形	N-45°-E	0.63/(0.55)/0.53
226	433-392	不定形	N-55°-E	1.18/0.71/0.10
227	433-392	不定形	N-43°-E	0.43/0.40/0.33
228	431-393	円形	-	0.57/0.49/0.44
229	431-392	楕円形	N-7°-E	0.77/0.51/0.41
230	432-389	不定形	N-39°-W	1.13/0.45/0.33
231	434-387	楕円形	N-71°-E	0.83/0.69/0.65
232	431-391	楕円形	N-15°-W	0.66/0.48/0.29
233	423-388	円形	-	0.46/0.42/0.45
234	419-386	円形	-	0.37/0.33/0.18
235	419-386	円形	-	0.38/0.37/0.17
236	435-388	不定形	N-67°-E	(0.77)/(0.76)/0.79
237	433-392	不定形	N-50°-W	0.58/0.56/0.28
238	423-378	円形	-	0.62/0.62/0.29
239	432-370	不定形	-	0.52/(0.30)/0.56
240	427-370	不定形	N-25°-E	0.94/0.41/0.17
241	427-370	不定形	N-27°-W	0.41/0.33/0.25
242	435-386	不定形	N-10°-E	0.92/(0.66)/0.22
243	434-391	不定形	N-14°-W	0.62/(0.37)/0.68
244	421-360	楕円形	N-20°-W	0.57/0.38/0.85
245	418-379	隅丸方形	-	0.23/0.20/0.14
246	419-360	楕円形	-	0.58/0.39/0.36
247	404-364	楕円形	N-52°-E	0.47/0.36/0.42
248	417-375	不定形	N-20°-W	0.31/0.24/0.18
249	415-374	円形	-	0.34/0.30/0.21
250	436-386	不定形	N-46°-E	0.76/0.51/0.60
251	435-383	楕円形	N-30°-E	0.84/0.54/0.31
252	433-386	楕円形	N-61°-E	0.52/0.33/0.27
253	434-383	楕円形	N-72°-E	0.43/0.37/0.24
254	432-383	円形	-	0.44/0.39/0.34
255	431-384	円形	-	0.39/0.34/0.17
256	431-384	楕円形	N-72°-W	0.32/0.28/0.24
257	430-384	円形	-	0.26/0.20/0.17
258	429-394	不定形	N-19°-W	0.56/(0.18)/0.34
259	433-395	不定形	N-18°-W	0.36/(0.17)/0.40
260	435-388	不定形	N-22°-W	(0.76)/(0.45)/0.62
261	430-388	不定形	N-72°-E	(0.62)/(0.56)/0.39
262	427-387	不定形	N-71°-E	(0.45)/(0.37)/0.42
263	425-388	不定形	N-71°-E	(0.83)/(0.75)/0.76
264	426-385	不定形	N-17°-W	(1.15)/(0.57)/0.63
２区１	422-400	円形	-	0.34/0.30/0.21
2	418-401	楕円形	N-55°-E	0.26/0.21/0.14
3	419-398	円形	-	0.32/0.32/0.25
4	426-411	円形	-	0.44/0.38/0.36
5	427-413	楕円形	N-77°-E	0.48/0.36/0.24

第４章　天良七堂遺跡

第１節　天良七堂遺跡の概要

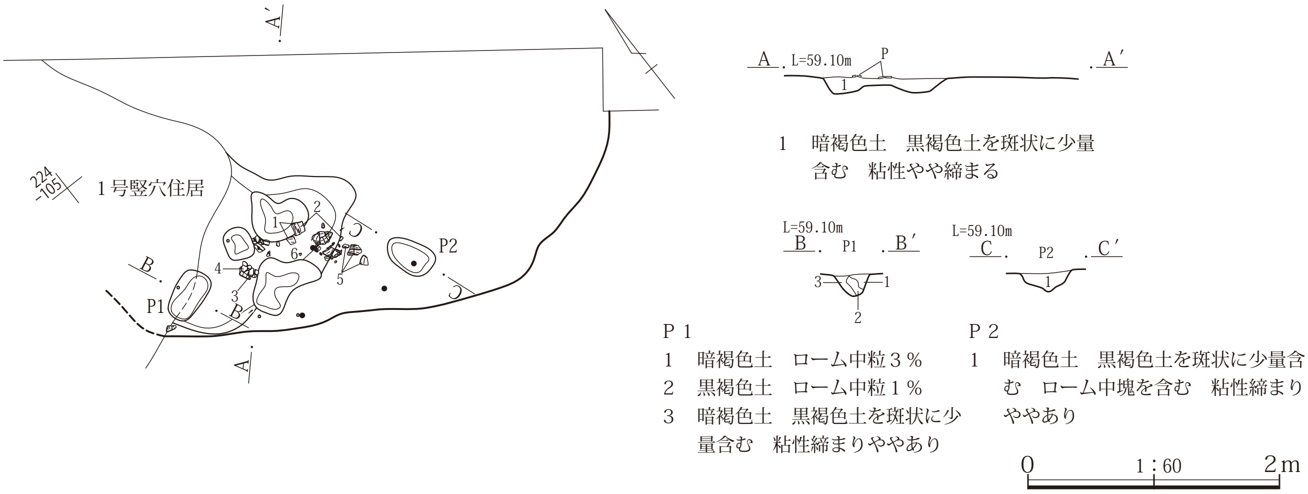
１区～４区では縄文時代～奈良・平安時代の竪穴住居・竪穴状遺構、縄文時代～近世の掘立柱建物・土坑・ピット・柵列・井戸・溝・鍛冶遺構・谷地が検出された。１区ではおもに竪穴住居が集中し、２・３区は谷地縁辺部から重複する溝が検出されている。１・４区では旧石器時代の試掘調査を行ったが遺構の検出及び人的遺物の出土はみられなかった。

第２節　１区の調査成果

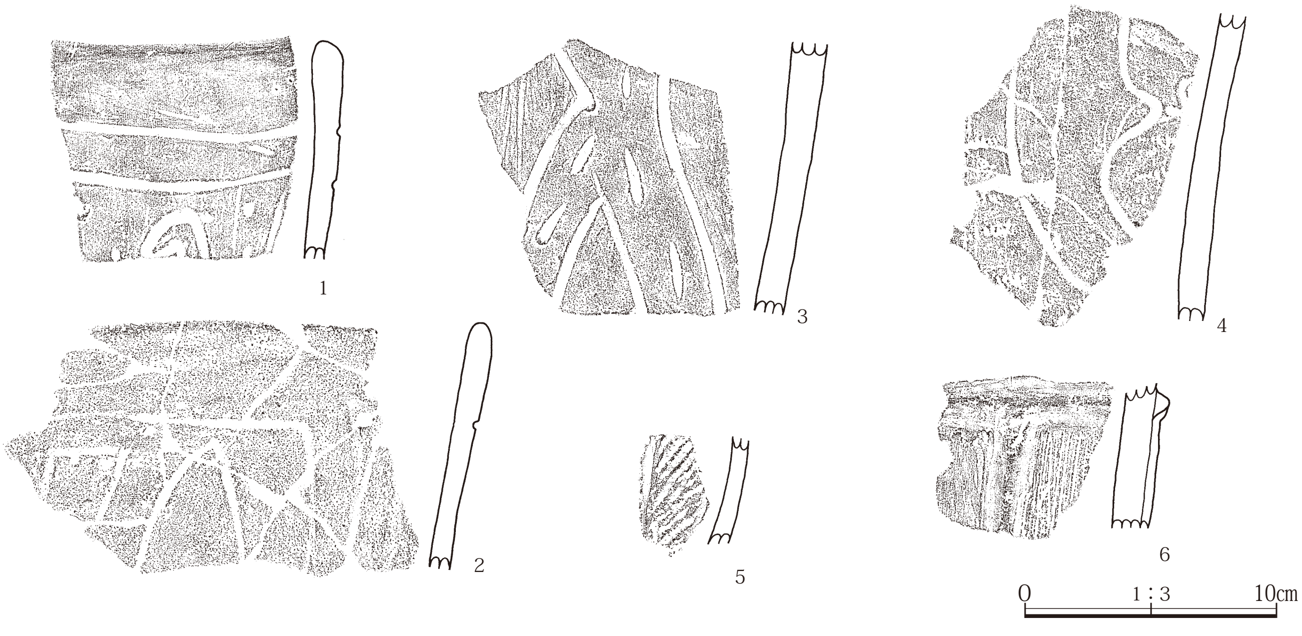
１区の調査区は道路を挟み北部及び西部に分かれる。発掘調査ではローム漸移層（基本土層第Ⅵ層）及びローム面を遺構確認面として、縄文時代から近世に至る遺構を検出した。以下、時代別に記載する。

１　縄文時代の遺構と遺物

検出された遺構は、竪穴住居１軒、土坑６基、ピット



第54図　１区７号竪穴住居



第55図　１区７号竪穴住居の出土遺物

第56図　天良七堂遺跡　１区全体図

５基である。縄文時代の遺構は１区のみに認められた。遺物は土器および石器で、土器の時期は早期から後期である。以下のとおり遺構ごとに記す。

（1）竪穴住居

１区から検出された竪穴住居は、後期初頭に属する１軒のみである。調査区外や他の遺構と重複するため部分的な調査となった。

７号竪穴住居（第54･55図　PL．８）

位置　X＝221 ～ 224、Y＝−101 ～ 105

形状・規模　１号竪穴住居との重複及び北側が調査区外となるため不明である。検出部の規模は4.45m、壁高１cmほどである。

重複　古墳時代に属する１号竪穴住居に切られる。

埋没土　後世に削平され残存状態は不良である。

床面　床面は削平のため不明瞭である。

炉・周溝　床面精査で検出できなかった。

柱穴　南西壁際から２基が検出された。平面形状は楕円形で、Ｐ１は長径42cm・短径25cm・深さ21cm、Ｐ２は長径40cm・短径25cm・深さ15cmを測る。

その他の施設　南西壁際の遺物が出土する範囲に深さ５～ 10cmの土坑状の掘り込みがある。

遺物出土状態　称名寺式の土器片が床面直上から出土した。

所見　出土遺物から時期は縄文時代後期初頭と考えられる。

（2）土坑・ピット

１区から検出された縄文時代の土坑は６基、ピット５基で、出土遺物や埋没土から中期～後期に属すると考えられる。11号土坑、92・94号ピットは７号竪穴住居が検出された調査区南側に位置する。遺構の埋没状況は人為的な様相が認められるものについては文中に記した。記述がないものについては自然埋没土と考えている。

１号土坑（第57図）

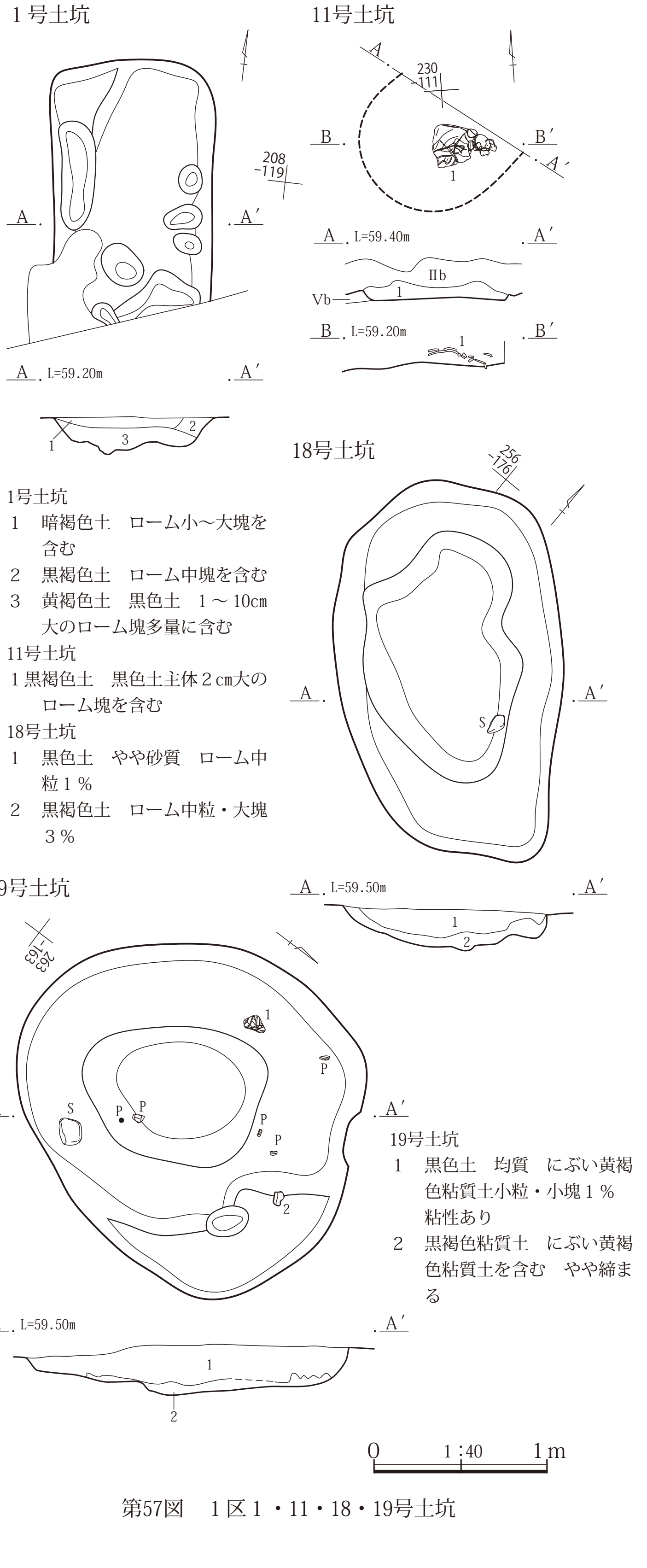
ローム大塊を多量に含む暗褐色土や黒褐色土で埋没する。

11号土坑（第57図　PL．８・32）

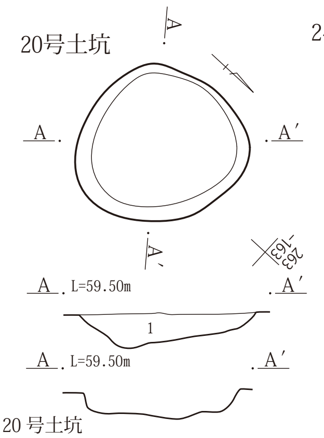
ローム塊を含む黒褐色土で埋没する。称名寺式の深鉢（第58図11坑１）は10m離れた７号竪穴住居の出土遺物と接合した。出土遺物から時期は縄文時代後期初頭と考えられる。

18号土坑（第57図　PL．８）

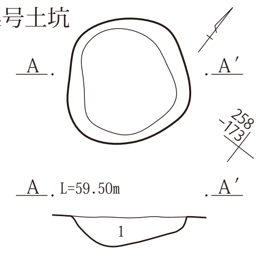
遺物の出土はない。埋没土の状況から縄文時代の遺構と推定されるが、細別時期は不明である。



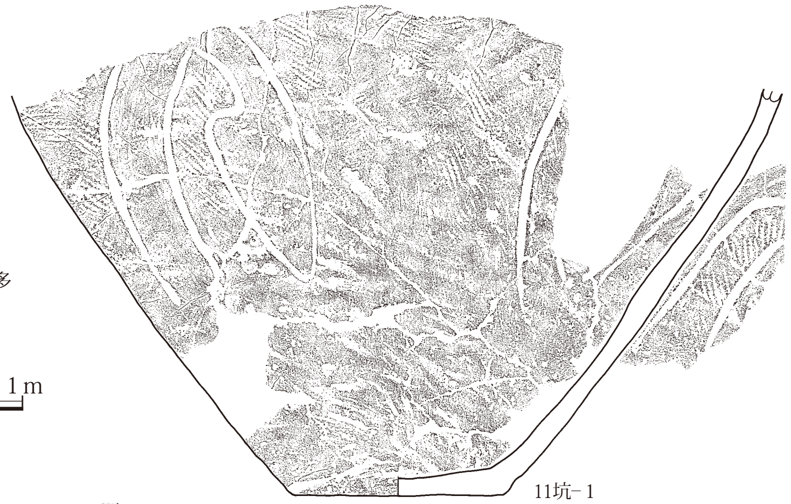
第57図　１区１・11・18・19号土坑

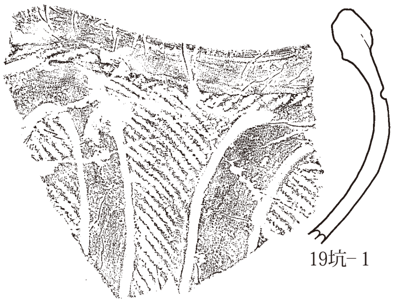


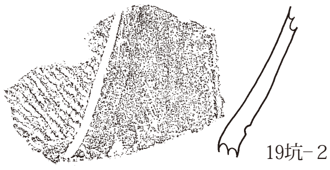
20 号土坑
1　黒色土　にぶい黄褐色粘質土粒・小塊１％　暗褐色土を含む　粘性あり



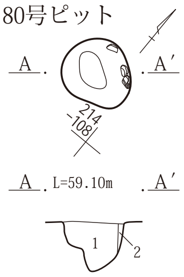
24号土坑
1　黒色土　灰黄色土粒を多量に含む


11坑－１

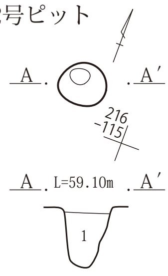

19坑－１


19坑－２

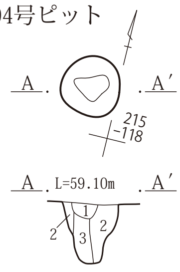
19坑－３



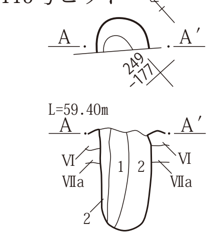
80号ピット
1　黒色土　ローム中粒を含む　やや締まる
2　ローム主体　黒褐色土を含む



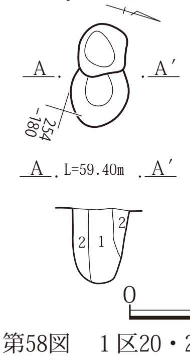
92号ピット
1　黒色土　ローム中粒を含む



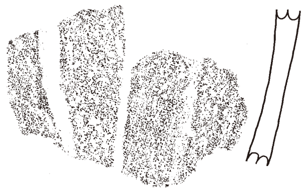
94号ピット
1　ローム主体　黒色土を含む　粘性ややあり
2　黒色土　ローム小粒・小塊を含む
3　黒褐色土　ローム中粒・小塊を含む　やや締まる



115号ピット
1　黒色土　ハードローム中粒１％　やや締まる　柱痕か
2　黒色土　褐色粘質土小塊を含む　１層より黄色味あり



117号ピット
1　黒褐色土　やや砂質　褐色粘質土中粒・小塊１％　やや締まる
2　１層に類似　褐色粘質土中粒・小塊５％　固く締まる


80ピット－１

第58図　１区20・24号土坑、80・92・94・115・117号ピットと11・19号土坑、80号ピットの出土遺物

19号土坑(第57図　PL．8)

レンズ状の堆積が認められず人為的な埋没の可能性がある。埋没土から加曽利Ｅ４式(第58図19坑−１～３)が出土した。出土遺物から時期は縄文時代中期後半と考えられる。

20号土坑(第58図)

埋没は自然堆積か人為堆積か不明。埋没土が19号土坑に類似するため時期は縄文時代と考えられる。

24号土坑(第58図)

底面から開口部にかけて壁は斜めに立ち上がる。埋没は自然堆積か人為か不明。埋没土の状況から縄文時代の遺構と推定されるが、細別時期は不明である。

80号ピット(第58図)

西壁の中段に段差を設けている。ローム粒を含む黒色土で埋没する。第58図80ピット−１が埋没土中から出土した。出土遺物から時期は縄文時代後期と考えられる。

92号ピット(第58図)

底面から開口部にかけて壁は斜めに立ち上がる。埋没土の状況から縄文時代の遺構と推定されるが、細別時期は不明である。

94号ピット(第58図)

１・３層は柱痕とみられ、形状から古代以降の可能性もある。

115号ピット（第58図）

北半部のみの検出である。人為的な埋没土で充填した可能性がある。１層は柱痕とみられ形状から古代以降の可能性もある。

117号ピット（第58図）

平面形状から２基のピットが重複する可能性がある。１層は柱痕とみられ、形状から古代以降の可能性もある。

２　古墳時代以降の遺構と遺物

検出された遺構は、竪穴住居12軒、掘立柱建物５棟、柵列３条、土坑26基、ピット126基、竪穴状遺構３基、溝９条、鍛冶遺構１基である。以下のとおり遺構ごとに記す。

（1）竪穴住居

１区では竪穴住居が12軒検出された。調査区外や他の遺構と重複するため部分的な調査となったものもある。時期は５世紀前半から９世紀後半であるが、遺構番号順に掲載した。

１号竪穴住居（第59～61図　PL．８・32）

位置　X＝220～229、Y＝－103～114

形状・規模　後世の削平により残存状態は不良である。平面形状は方形で、規模は長軸長8.40m、短軸長8.36m、壁高２～10cmである。

主軸方向　N－60°－E

重複　３号柵列Ｐ５・６・７と重複し、埋没土の確認状況から１号竪穴住居が古い。

埋没土　埋没状況から自然埋没と考えられる。炭化物及び焼土粒は床面直上に多く認められる。

床面　東壁から西壁面に約３～５cm緩やかに下る。中央部は周辺部より約１～２cm低く使用による硬化面は不明瞭であった。掘り方はローム塊と黒色土を含む褐色土で埋め、床面を構築していた。

炉　中央部からやや北西寄りに位置する。平面形状は不定形で、規模は長径120cm、短径52cm、深さ12cmである。焼土塊を含む黒褐色土や黄褐色土により埋没していた。

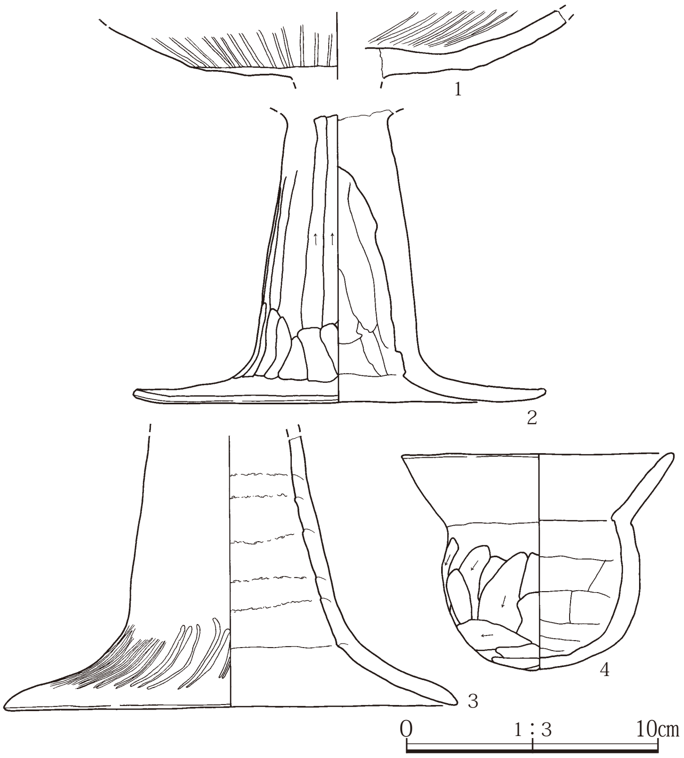
貯蔵穴　南東隅から検出され平面形状は不定形で、規模は長径105cm、短径102cm、深さ55cmである。ローム小・大塊及び焼土塊を含む黒褐色土による人為的な埋没の可能性がある。貯蔵穴底面から高杯（第59図１）が出土した。

周溝　規模は幅11～28cm、深さ約19cmであり、黒色土小塊を含む褐色土により埋没していた。

柱穴　床面調査によって３基検出され、壁際から等距離で対角線上に位置することから主柱穴と考えられる。北東隅の１基は調査区外で検出されなかった。規模は、Ｐ１（長径45cm・短径38cm・深さ86cm、楕円形）、Ｐ２（径44cm、深さ79cm、円形）、Ｐ３（長径75cm、短径53cm、深さ93cm、楕円形）である。柱穴間はＰ１～Ｐ２間が5.20m、Ｐ２～Ｐ３間が5.00mである。

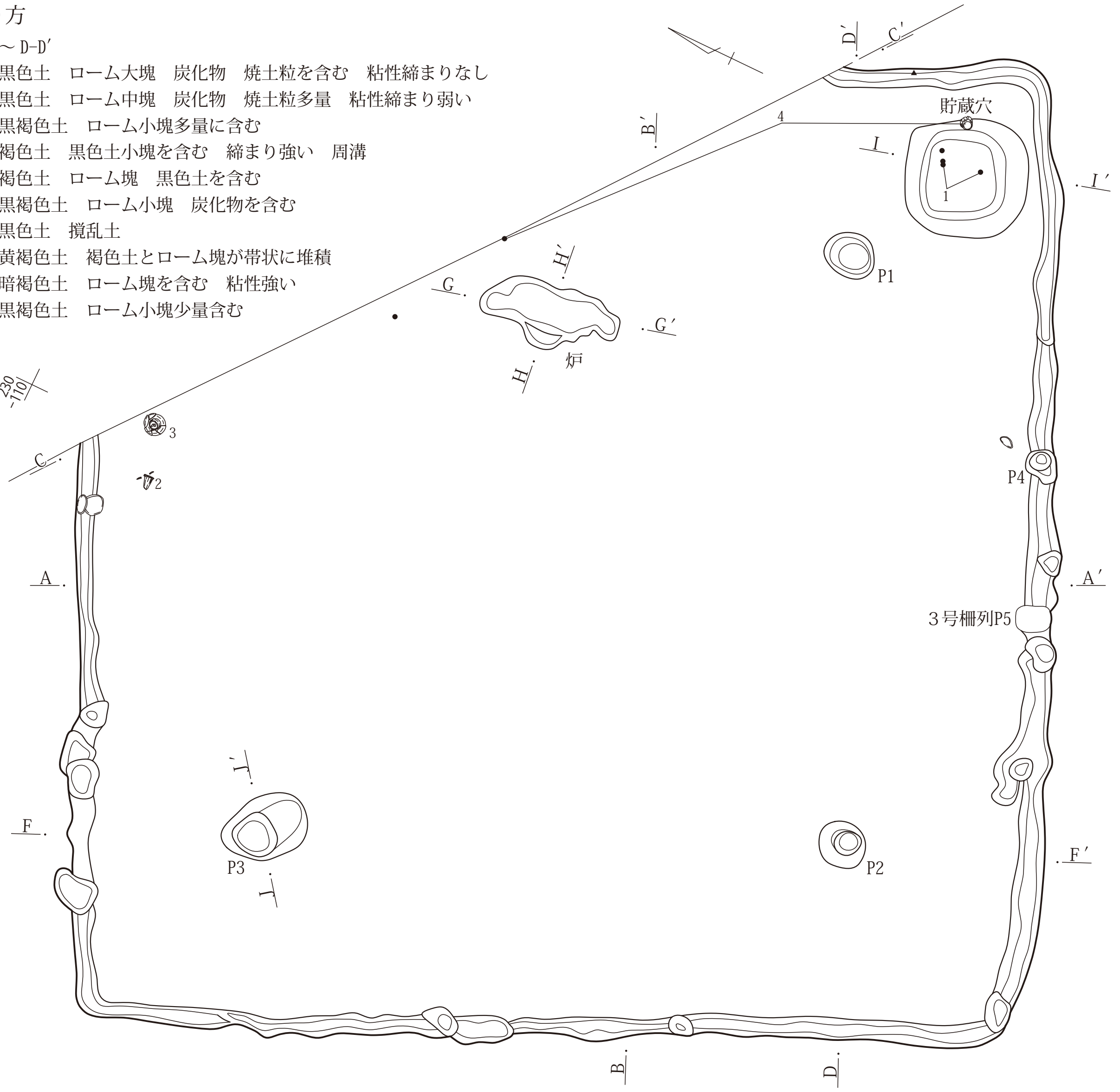
他の施設　床面精査及び掘り方調査で、11基のピットが検出された。これらは柱穴間に位置することから、屋内空間を仕切る支柱や床根太関連痕跡と考えられる。規模は、Ｐ４（径30cm、深さ23cm、円形）、Ｐ７（長径39cm、短径26cm、深さ66cm、楕円形）、Ｐ８（長径41cm、短径34cm、深さ59cm、楕円形）、Ｐ９（径40cm、深さ33cm、円形）、Ｐ12（長径59cm、短径38cm、深さ43cm、楕円形）、Ｐ13（径20cm、深さ33cm、円形）、Ｐ14（径35cm、深さ47cm、円形）、Ｐ15（径29cm、深さ40cm、円形）、Ｐ16（長径47cm、短径38cm、深さ44cm、楕円形）、Ｐ17（径23cm、深さ28cm、円形）であり、調査区外に延びるＰ20は推定径50cm、深さ44cmである。Ｐ17から北壁に長さ90cmの間仕切溝を検出。

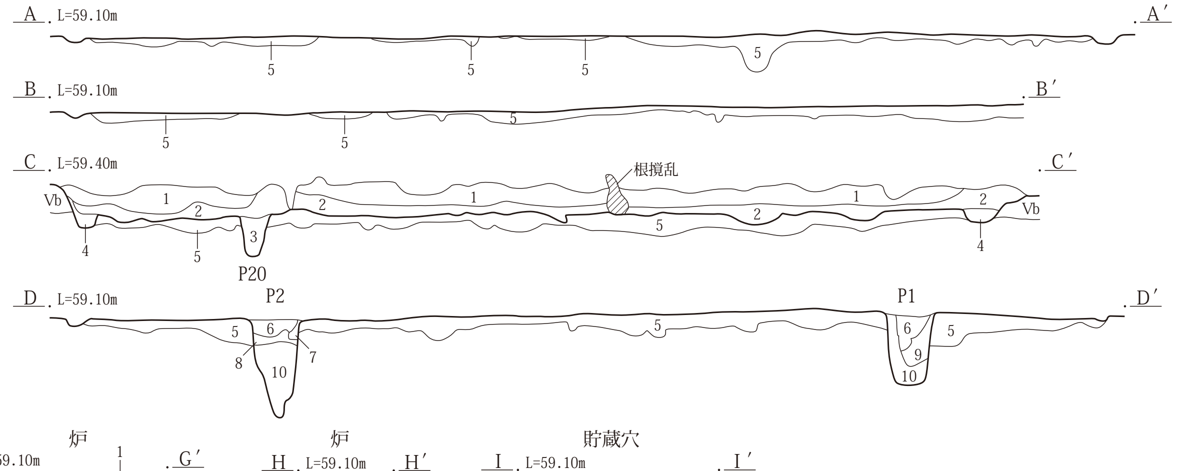
掘り方　床面からローム面まで約５～10cm掘り込まれ凹凸が著しい。床下施設は検出されなかった。

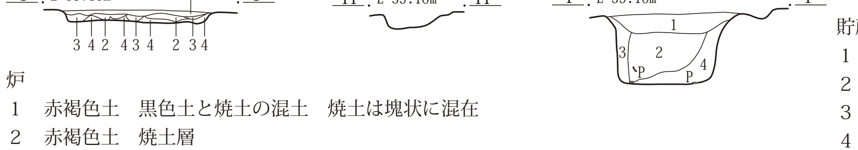


第59図　１区１号竪穴住居の出土遺物

掘り方
A-A′〜D-D′
1　黒色土　ローム大塊　炭化物　焼土粒を含む　粘性締まりなし
2　黒色土　ローム中塊　炭化物　焼土粒多量　粘性締まり弱い
3　黒褐色土　ローム小塊多量に含む
4　褐色土　黒色土小塊を含む　締まり強い　周溝
5　褐色土　ローム塊　黒色土を含む
6　黒褐色土　ローム小塊　炭化物を含む
7　黒色土　撹乱土
8　黄褐色土　褐色土とローム塊が帯状に堆積
9　暗褐色土　ローム塊を含む　粘性強い
10　黒褐色土　ローム小塊少量含む







炉
1　赤褐色土　黒色土と焼土の混土　焼土は塊状に混在
2　赤褐色土　焼土層
3　黒褐色土　焼土を僅かに含む
4　黄褐色土　ローム土と黒色土塊を含む　焼土を僅かに含む

貯蔵穴
1　黒色土　ローム小塊を僅かに含む
2　黒褐色土　ローム小塊を含む
3　黒褐色土　２層に近似　ローム中塊多量に含む
4　黒褐色土　ローム中塊　全体に２㎝大の焼土を含む

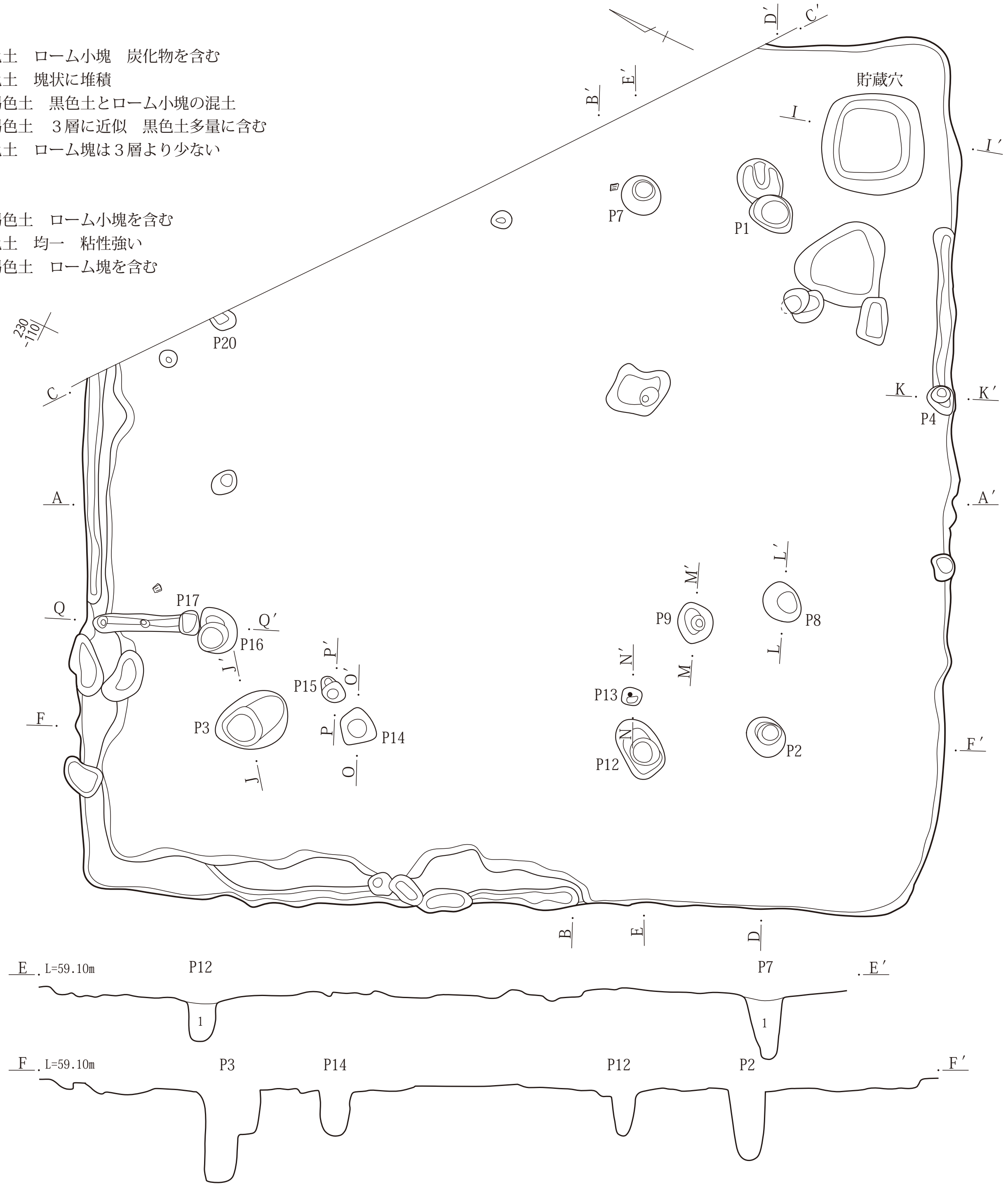
0　1：60　2ｍ

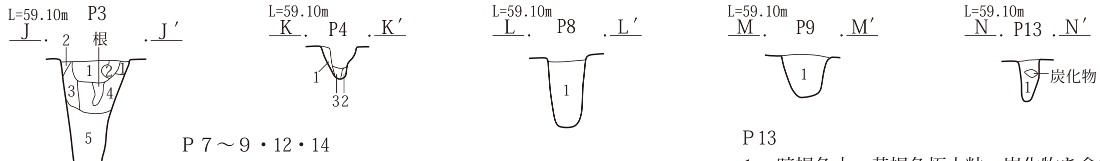
第60図　１区１号竪穴住居

掘り方

Ｐ３
1　黒色土　ローム小塊　炭化物を含む
2　褐色土　塊状に堆積
3　黒褐色土　黒色土とローム小塊の混土
4　黒褐色土　３層に近似　黒色土多量に含む
5　褐色土　ローム塊は３層より少ない

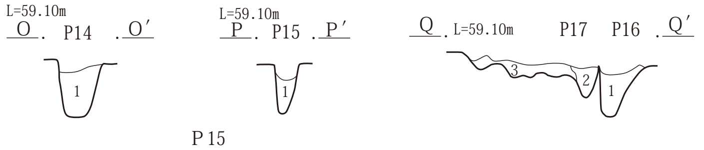
Ｐ４
1　黒褐色土　ローム小塊を含む
2　褐色土　均一　粘性強い
3　黄褐色土　ローム塊を含む





Ｐ７～９・12・14
1　暗褐色土と黄褐色土の混土　締まりあり

Ｐ13
1　暗褐色土　黄褐色極小粒　炭化物を含む　締まりあり



Ｐ16・17
1　黒褐色土　黄褐色小粒を含む
2　暗褐色土　ローム小塊　黄褐色小粒を含む
3　黒褐色土　ローム塊を含む

Ｐ15
1　暗褐色土　炭化物を含む

0　1：60　2ｍ

第61図　１区１号竪穴住居掘り方

遺物出土状態　床面の北壁際から第59図２・３、貯蔵穴から同図１・４が出土した。非掲載遺物は土師器片33ｇ。

所見　出土遺物から時期は５世紀前半と考えられる。

２号竪穴住居（第62・63図　PL．９・32）

位置　X＝206 ～ 112、Y＝－120 ～ 127

形状・規模　調査区境で検出され平面形状は方形と想定される。確認できた東壁の長さ6.36m、北壁の長さ4.5m、壁高16 ～ 23㎝である。

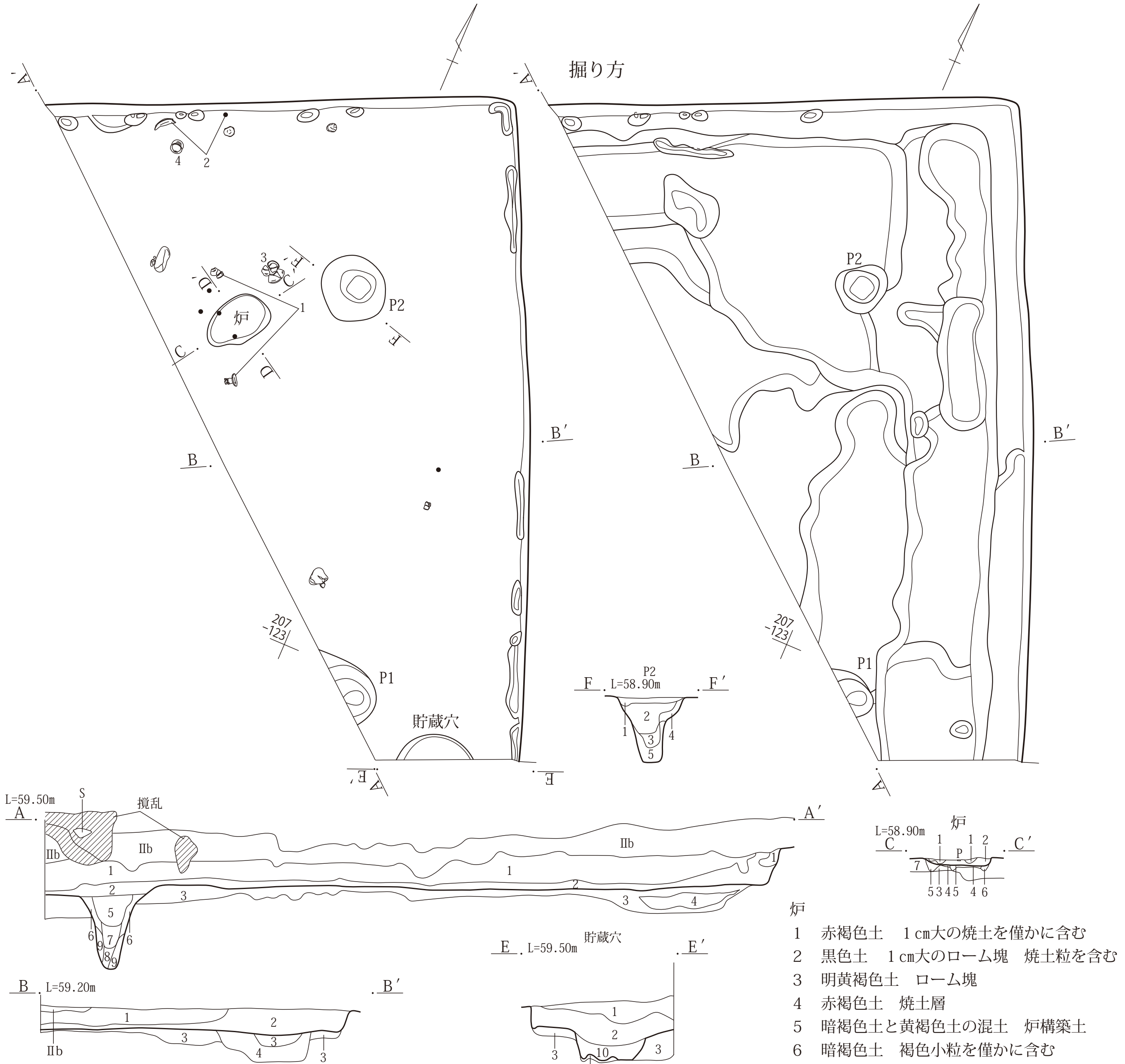
主軸方向　N－21°－W

重複　なし。

埋没土　下層にローム塊を多量に含むみ、上層は自然堆積と思われる。

床面　床面のレベル差は少なくほぼ平坦であるが、硬化面は不明瞭である。南東側の貯蔵穴周辺は下がり気味で、掘り過ぎている可能性がある。

炉　中央部からやや北西寄りに位置する。不整楕円形状



炉
1　赤褐色土　１㎝大の焼土を僅かに含む
2　黒色土　１㎝大のローム塊　焼土粒を含む
3　明黄褐色土　ローム塊
4　赤褐色土　焼土層
5　暗褐色土と黄褐色土の混土　炉構築土
6　暗褐色土　褐色小粒を僅かに含む
7　明黄色土　５㎝大の黒色ブロックを含む

A-A′・B-B′・E-E′
1　黒褐色土　２～７㎝大のローム塊多量に含む
2　明褐色土　１～５㎝大のローム塊を含む
3　明黄色土　黒色土大塊を含む
4　黒褐色土　明黄色土を含む
5　黒褐色土　２層に近似　ローム小塊少量含む
6　黒褐色土　ローム塊多量に含む
7　褐色土　粘性強い
8　褐色土　７層より色味は明るい
9　黄色土　粘質土黒色土塊を含む
10　暗褐色土　ローム塊少量含む

P２
1　明褐色土　１～５㎝大のローム塊を含む
2　黒褐色土　１～５㎝大のローム塊多量に含む
3　暗褐色土　ローム小塊を含む　粘性強い
4　黒褐色土　２層に近似　ローム塊多量に含む
5　黄色土　粘土主体　黒色土塊を含む

第62図　１区２号竪穴住居

0　1：60　2m

を呈し、長径65㎝、短径50㎝、深さ10㎝を測る。使用面に赤褐色焼土層が認められた。

貯蔵穴　南東部コーナーにあり、略円形を呈す。床面を下げ過ぎて確認できなかったが、上面は隅丸方形状を呈すると見られる。長軸73cm・深さ27cmを測る。

周溝　東壁際の一部に幅約10㎝、深さ５～７㎝の僅かな溝状の窪みが断続的に認められた。

柱穴　柱穴２基が検出された。Ｐ１は推定径80㎝、深さ78㎝、Ｐ２は長径66㎝、短径61㎝、深さ62㎝を測る。柱穴間の距離は3.92ｍを測る。

掘り方　壁際の幅30～40㎝を残し、その内側を約20㎝溝状に掘り下げている。床下施設は検出されていない。

遺物出土状態　炉周辺の床面直上から第63図１・３、壁際から同図２・４が出土する。非掲載遺物として土師器片201ｇがある。

所見　出土遺物から時期は５世紀前半と考えられる。

３号竪穴住居（第64・65図　PL．９・32・33）

位置　Ｘ＝219～225、Ｙ＝－123～129

形状・規模　平面形状は長方形で、規模は長軸長5.42ｍ、短軸長4.04ｍ、壁高２～11㎝、床面積は21.79㎡である。

主軸方向　Ｎ－50°－Ｅ

重複　1・２・７号溝と重複し、遺構確認状況から３号竪穴住居が古いと判断された。

埋没土　床面まで削平され、埋没土は不明である。

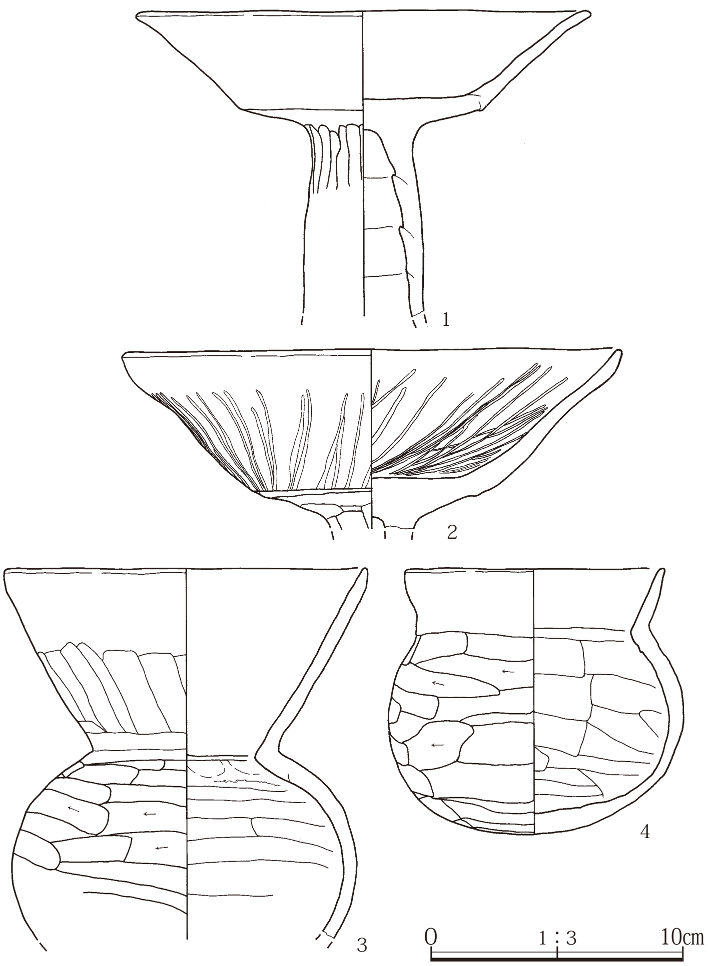
床面　床面のレベル差はなく、平坦である。床面の硬化面は確認できなかった。掘り方は全体を浅く掘り窪めており、黒褐色土により床面を構築していた。

炉　中央部から西寄りの位置で検出された。削平のため全体の規模や形状は不明である。焼土層がわずかに残存していた。平面形状は不定形で、長径37㎝、短径23㎝、深さ３㎝を測る。

貯蔵穴　南東隅に検出された。不整円形を呈し、長径83cm・短径77cm・深さ24cmを測る。埋土は人為的な埋没状態を示していた。貯蔵穴内の上層から下層にかけて第65図１～９・11が出土した。。

周溝　規壁に沿って全周し､底面は凹凸があり深さ２㎝､～８㎝を測る。

他の施設　掘り方調査段階で壁際から８基のピットが検出された。規模は、Ｐ１（長径36㎝、短径29㎝、深さ19㎝、楕円形）、Ｐ２（長径35㎝、短径18㎝、深さ14㎝、楕円形）、Ｐ３（径20㎝、深さ９㎝、円形）、Ｐ４（径20㎝、深さ17㎝、円形）、Ｐ５（径28㎝、深さ14㎝、円形）、Ｐ６（径22㎝、深さ29㎝、円形）、Ｐ７（径23㎝、深さ20㎝、円形）、Ｐ８（長径33㎝、短径26㎝、深さ19㎝、楕円形）であり、いずれも柱痕は認められなかったが、配置から柱穴となった可能性は高い。



第63図　１区２号竪穴住居の出土遺物

掘り方　床面からローム面まで約５㎝掘り込まれる。住居西間仕切り溝（2.5×1.5ｍ）が確認された。

遺物出土状態　床面の南壁際から第65図10が出土する。非掲載遺物は土師器片225ｇである。

所見　出土遺物から時期は５世紀前半と考えられる。

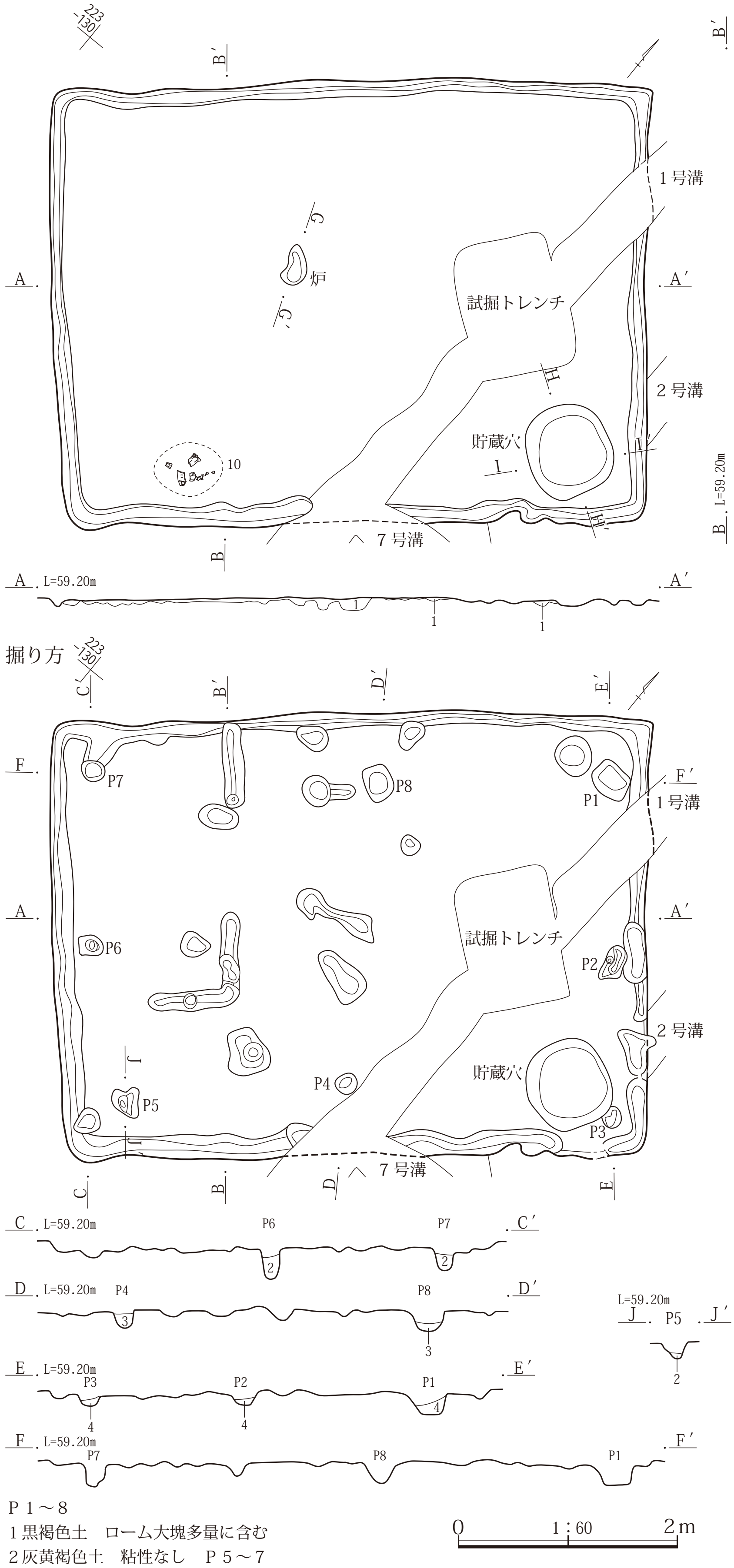
４号竪穴住居（第66・67図　PL．９・10・33）

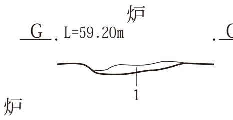
位置　Ｘ＝236～244、Ｙ＝－123～132

形状・規模　主柱穴の位置からみて一辺７ｍ程度の方形住居になると見られる。

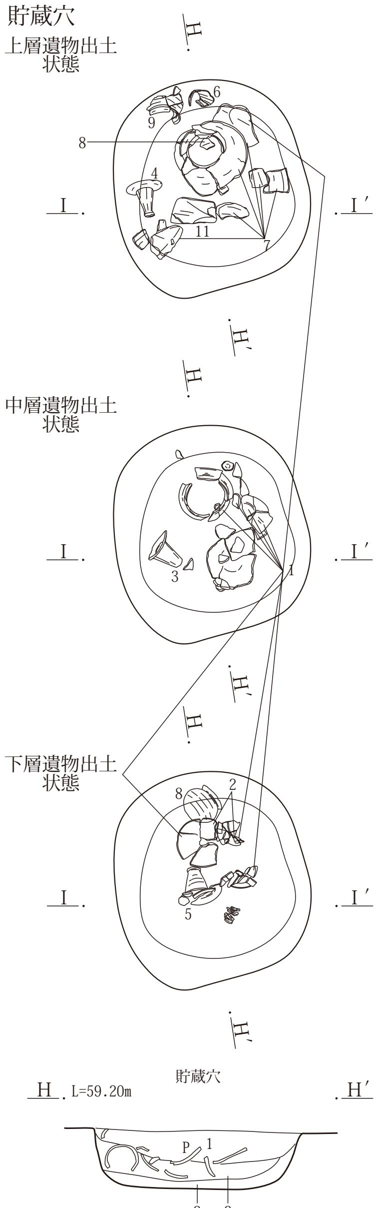
主軸方向　Ｎ－63°－Ｅ

重複　７号土坑と重複し、遺構確認状況から７号土坑が新しい。

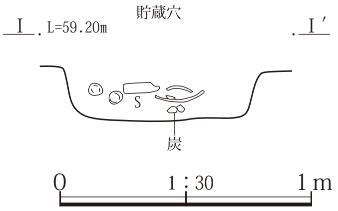




炉
1　赤褐色土　焼土塊主体

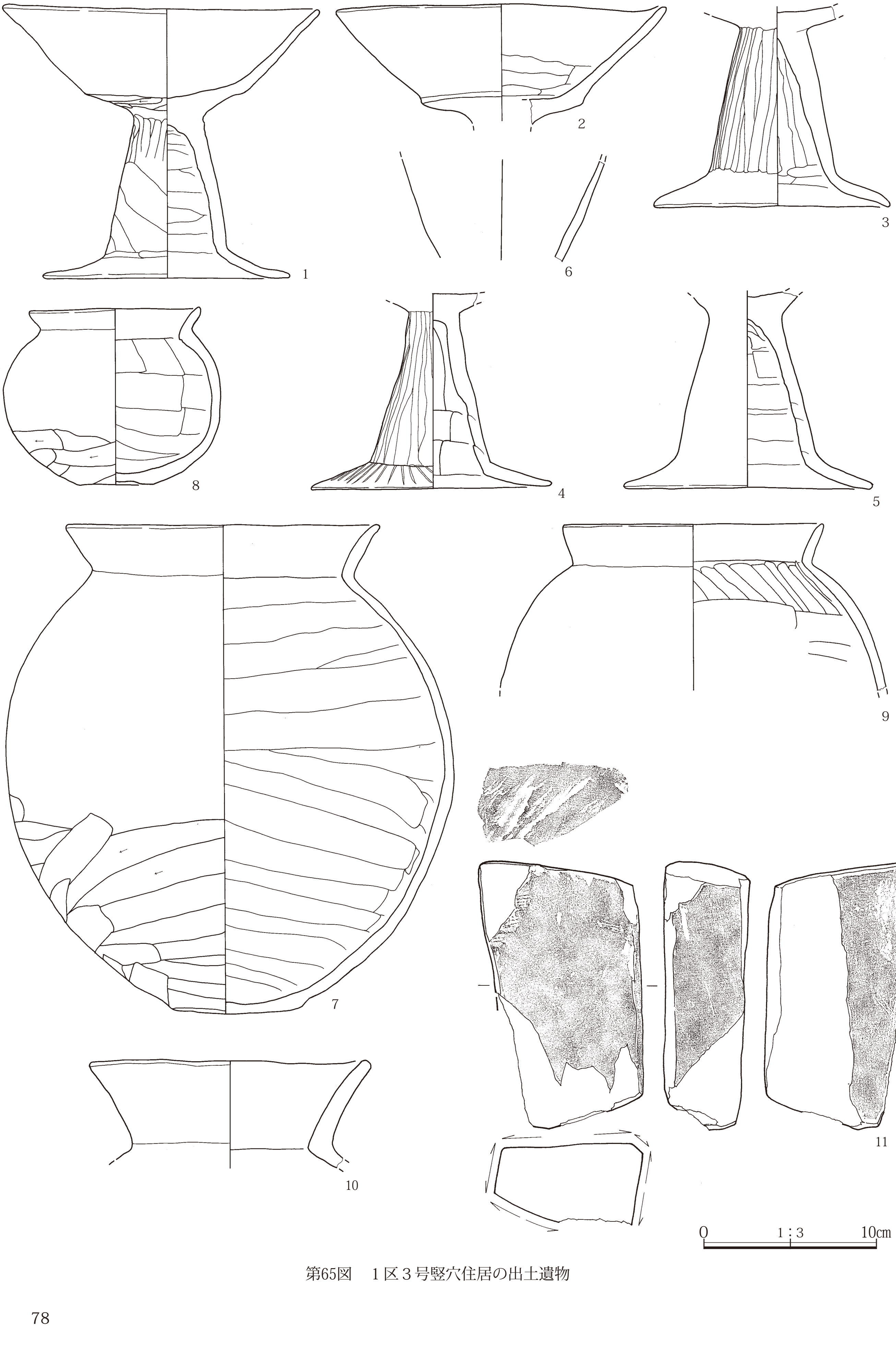


貯蔵穴
1　暗褐色土　ローム小塊を含む　炭化物を僅かに含む
2　黒褐色土　ローム小塊を僅かに含む
3　黄褐色土　ローム塊多量に含む　締まりあり



P１～８
1 黒褐色土　ローム大塊多量に含む
2 灰黄褐色土　粘性なし　P５～７
3 暗褐色土　ローム小塊を含む　P４、P８
4 黒褐色土　ローム小塊を含む　P１～３

第64図　１区３号竪穴住居



第65図　１区３号竪穴住居の出土遺物

埋没土　ローム塊を僅かに含む明黄褐色土により埋没していた。

床面　北壁から南壁にかけて３～５㎝緩やかに下る。床面の硬化面は不明瞭である。掘り方は全体を10㎝ほど掘り窪めており、暗褐色土及び黒褐色土とロームの混土により床面を構築する。

炉　調査区境で検出された。炉の概形は楕円形状を呈し、厚さ約５㎝の焼土層が確認された。

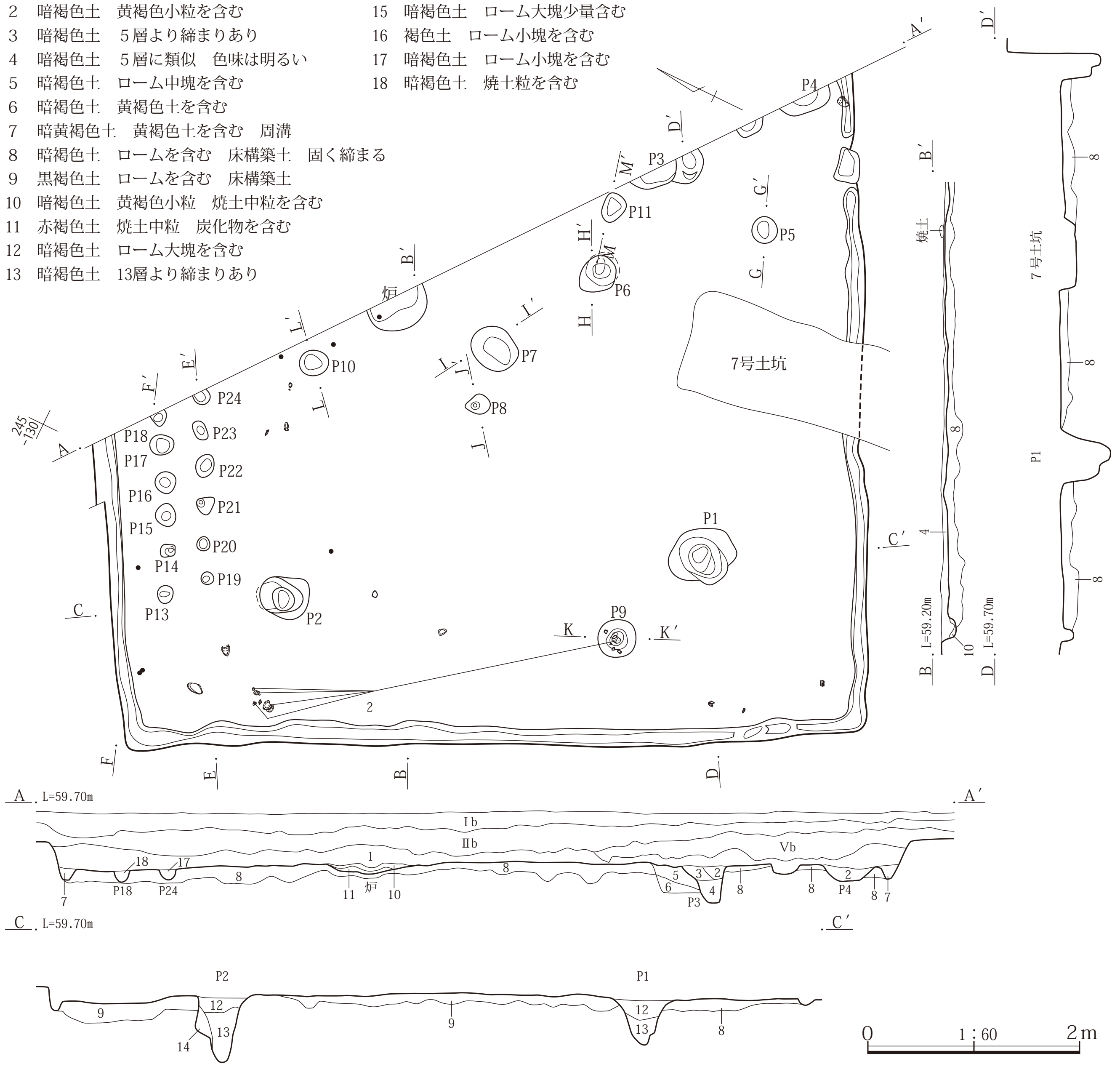
貯蔵穴　位置的にＰ４としたものが貯蔵穴に該当するものと見られる。

周溝　規模は幅10～23㎝、深さ２～14㎝である。

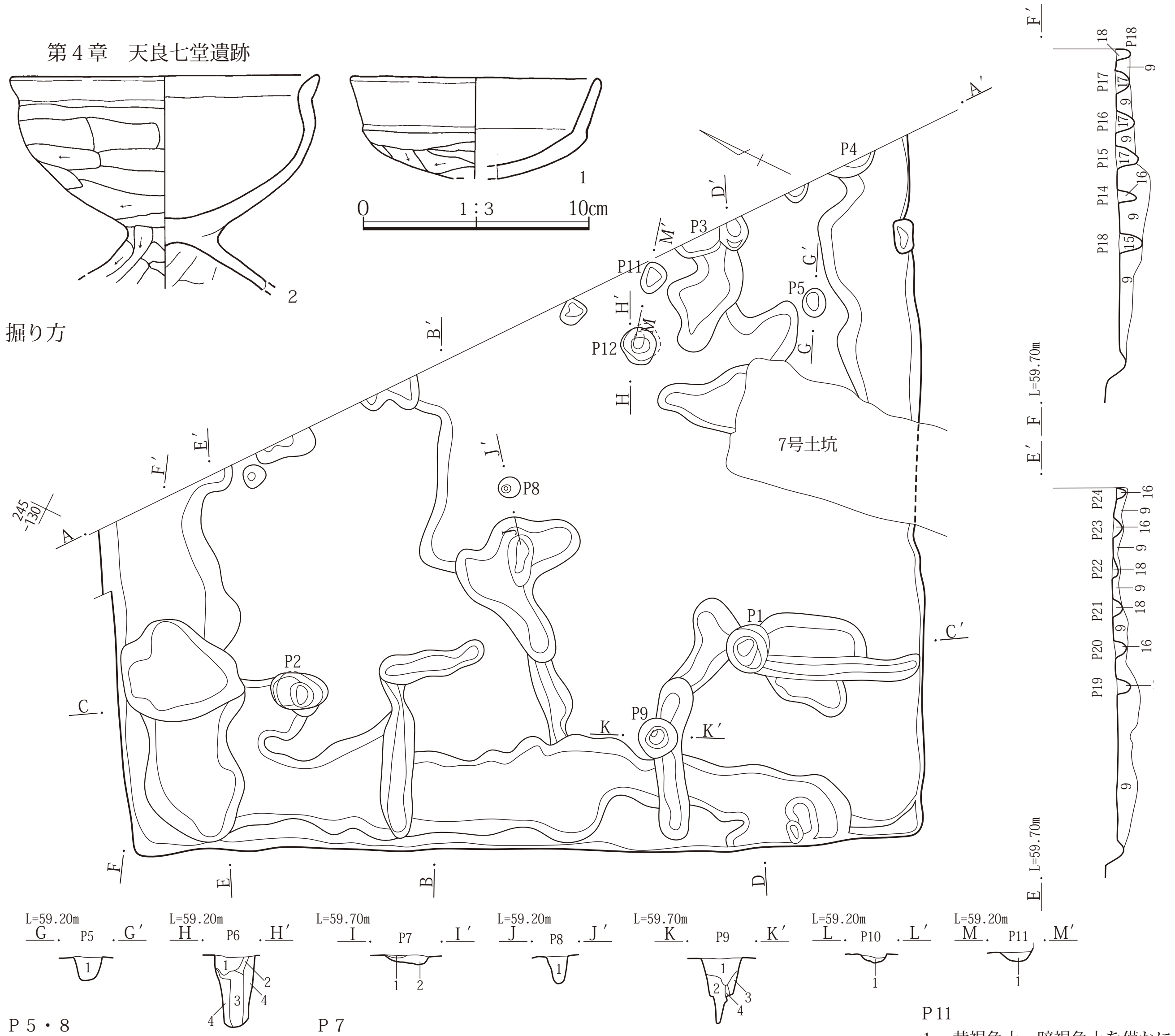
柱穴　３基が検出され、対角線上に位置することから主柱穴と考えられる。規模は、Ｐ１(径63㎝、深さ48㎝、円形)、Ｐ２(長径46㎝、短径40㎝、深さ63㎝、楕円形)、Ｐ３(推定径40㎝、深さ37㎝)である。柱穴間はＰ１～Ｐ２間が3.96ｍ、Ｐ１～Ｐ３間が3.63ｍを測る。

他の施設　北壁際に径12～23㎝深さ５～20㎝を測る小ピット12基が連続しており25㎝間隔に並んでいることから、板敷等の上部施設を支えた下部構造としての性格を想定することができる。主柱穴としたもののほかに９基のピットが検出された。規模は、Ｐ５(径25㎝、深さ21㎝、円形)、Ｐ６(長径40㎝、短径32㎝、深さ63㎝、楕

A-A′～F-F′
1　明黄褐色土　ローム中塊　黄褐色小粒を含む
2　暗褐色土　黄褐色小粒を含む
3　暗褐色土　５層より締まりあり
4　暗褐色土　５層に類似　色味は明るい
5　暗褐色土　ローム中塊を含む
6　暗褐色土　黄褐色土を含む
7　暗黄褐色土　黄褐色土を含む　周溝
8　暗褐色土　ロームを含む　床構築土　固く締まる
9　黒褐色土　ロームを含む　床構築土
10　暗褐色土　黄褐色小粒　焼土中粒を含む
11　赤褐色土　焼土中粒　炭化物を含む
12　暗褐色土　ローム大塊を含む
13　暗褐色土　13層より締まりあり
14　暗褐色土　黄褐色土を含む
15　暗褐色土　ローム大塊少量含む
16　褐色土　ローム小塊を含む
17　暗褐色土　ローム小塊を含む
18　暗褐色土　焼土粒を含む



第66図　１区４号竪穴住居



P５・８
1　暗褐色土　黄褐色小粒を含む
P６
1　黒褐色土　黄褐色小粒を含む
2　暗褐色土　ローム小塊多量に含む
3　暗灰黄褐色土　ローム小塊・粒多量に含む
4　灰色土粘質土　締まりあり

P７
1　暗褐色土　焼土粒を僅かに含む
2　褐色土　ローム小塊を含む

P９、10
1　暗褐色土　黄褐色極小粒を含む
2　黄褐色土　黒褐色土少量含む　ローム塊を含む
3　黄褐色土　ローム塊２層より少ない
4　暗褐色土　締まりあり

P11
1　黄褐色土　暗褐色土を僅かに含む　ローム塊を含む

0　1：60　2m

第67図　１区４号竪穴住居掘り方と出土遺物

円形）、Ｐ７（径45㎝、深さ７㎝、円形）、Ｐ８（径23㎝、深さ24㎝、円形）、Ｐ９（径36㎝、深さ35㎝、円形）、Ｐ10（径28㎝、深さ８㎝、円形）、Ｐ11（長径27㎝、短径21㎝、深さ９㎝、楕円形）、Ｐ12（径34㎝、深さ53㎝、円形）であり、10㎝未満の浅いものと30㎝より深いものがあり、これには中近世の柱穴とすべきものも含まれる可能性がある。

掘り方　中央部を浅く壁際を深く掘り窪めている。西壁際に長さ2.4m、幅1.5mで三等分するＬ字状の間仕切り溝２ヵ所がある。

遺物出土状態　Ｐ９から第67図１、北西壁際の床面直上及びＰ９底面付近から同図２が出土する。非掲載遺物は土師器片307ｇ、須恵器片31ｇがある。

所見　出土遺物から時期は６世紀前半と考えられる。

５号竪穴住居（第68図　PL.10・33・34）

位置　Ｘ＝236 ～ 241、Ｙ＝－158 ～ 165

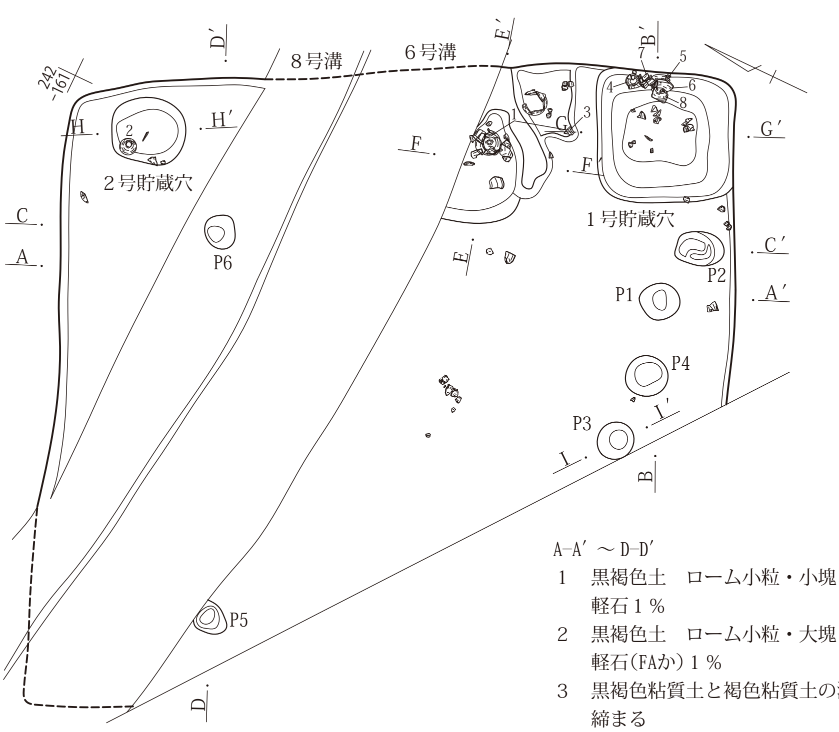
形状・規模　南西側が調査区外に延びているが、住居の形状は方形と想定される。東壁5.30m、壁高８～ 10㎝を測る。

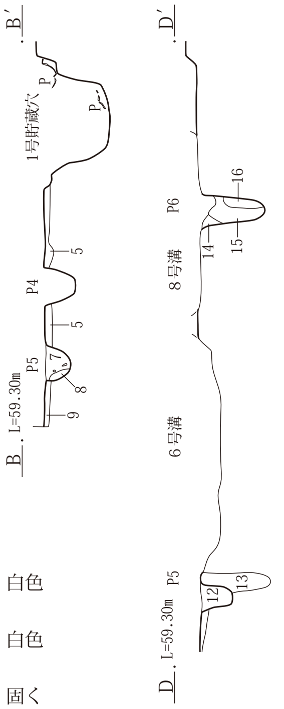
主軸方向　Ｎ－67°－Ｅ

重複　６・８号溝に切られる。

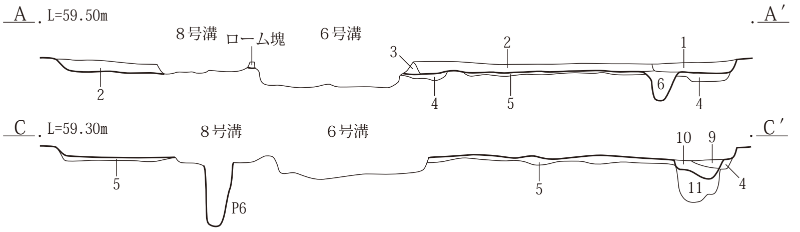
埋没土　ローム粒・塊、白色軽石を含む黒褐色土により自然堆積していた。白色軽石はHr-FA の可能性がある。

床面　床面のレベル差はなく平坦である。床面の硬化面

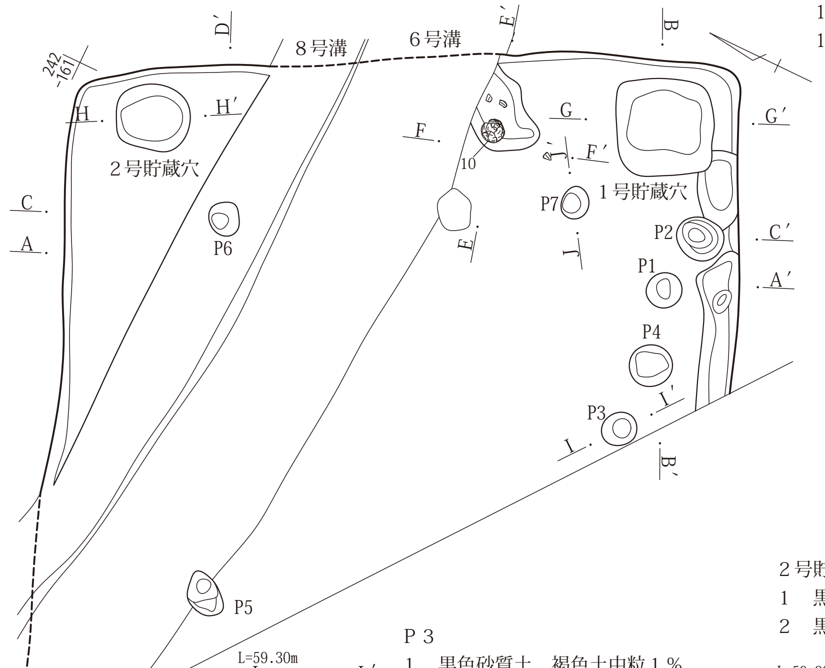


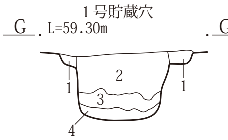


A-A′～D-D′
1　黒褐色土　ローム小粒・小塊１％　白色軽石１％
2　黒褐色土　ローム小粒・大塊３％　白色軽石(FAか)１％
3　黒褐色粘質土と褐色粘質土の混土　固く締まる
4　黒褐色土　暗褐色土中粒・中塊７％　やや締まる
5　褐色土　黒褐色土を含む　やや締まる
6　黒褐色土　ローム小粒・小塊多量に含む　遺物を含む
7　黒褐色土　にぶい黄褐色土中粒１％　焼土小粒・小塊３％
8　にぶい黄褐色土　黒褐色土少量含む　固く締まる
9　黒褐色土　焼土小粒１％
10　黒褐色土　にぶい黄褐色土　焼土小粒１％　粘性あり
11　にぶい黄褐色土　焼土小粒・小塊を含む　粘性あり
12　黒色砂質土　締まり中程度で粘性弱くやや締まる
13　黒色土　黄褐色土少量含む
14　暗褐色土　黒褐色土褐色土の混土　粘性ややあり締まる
15　黒褐色土　ローム小粒２％　締まりやや弱い
16　褐色粘質土　黒褐色土を含む　やや締まる



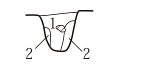
掘り方



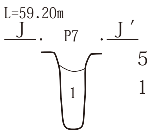


1号貯蔵穴
1　黒褐色土　やや砂質　にぶい黄褐色土中～大粒を３％
2　黒色土　ローム小粒３％　白色軽石１％
3　黒色粘質土　にぶい黄褐色粘質土中粒・中塊５％　粘性締まりややあり
4　黒褐色粘質土　にぶい黄褐色粘質土を含む　黄色味あり　粘性締まりあり

2号貯蔵穴
1　黒褐色土　褐色土中粒・中塊１％　白色粒(軽石か)１％
2　黒褐色土　ローム中粒・大塊25％　粘性やや締まる



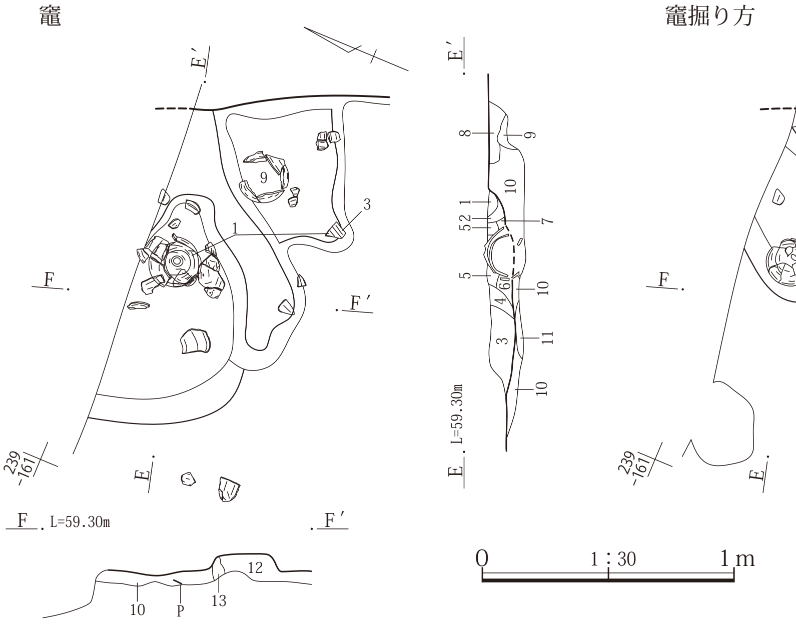
P３
1　黒色砂質土　褐色土中粒１％　柱痕　やや締まる
2　褐色土　ローム主体　黒色砂質土含む

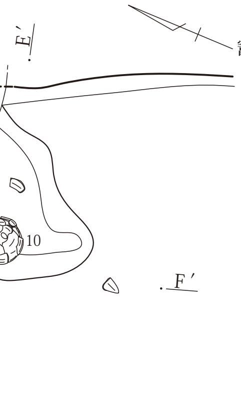


5号竪穴住居P７
1　黒褐色粘質土　褐色土を含む　やや締まる

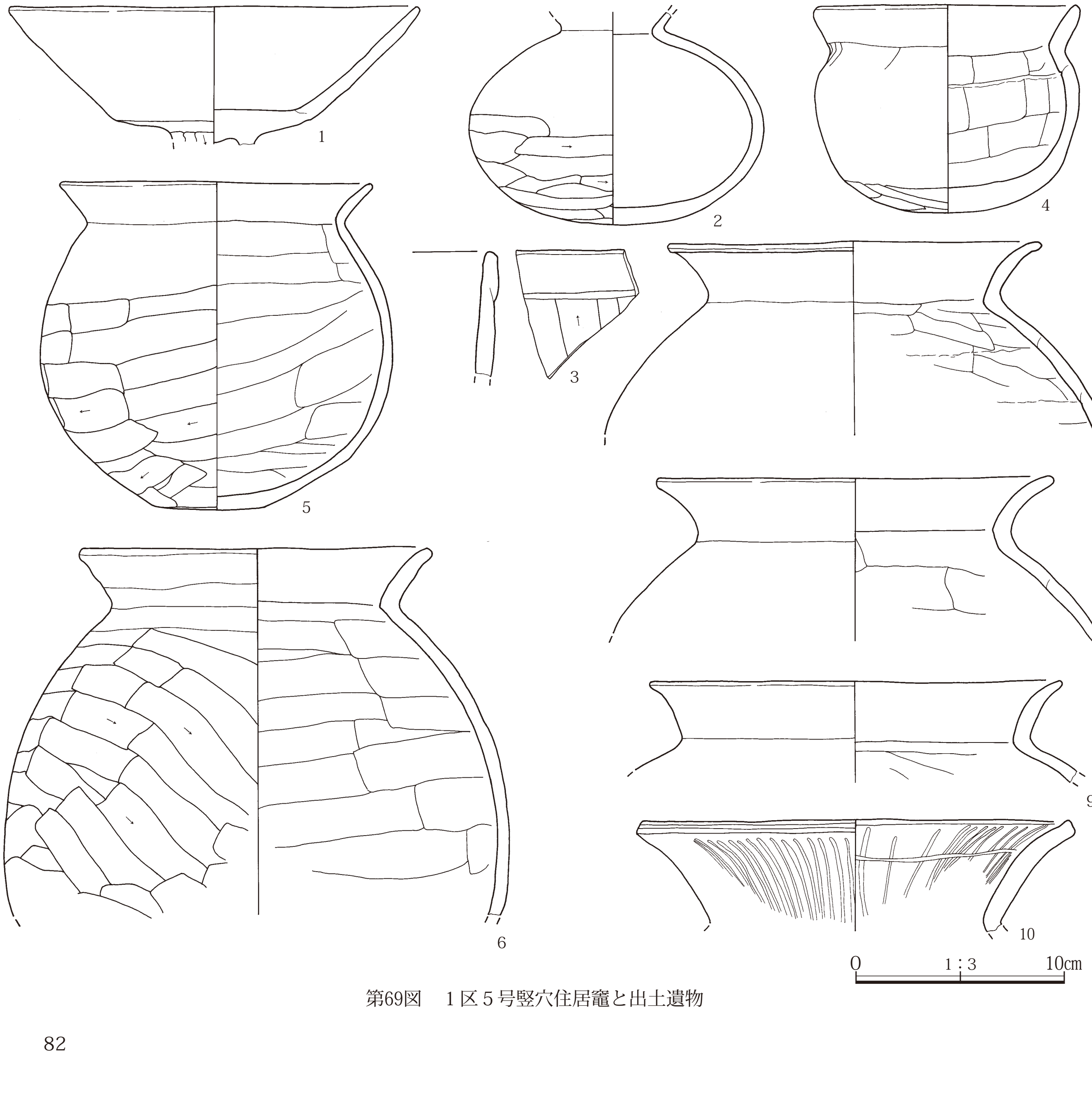
第68図　１区５号竪穴住居

0　1：60　2m





竈
1　黒褐色土　焼土中粒１％　白色軽石１％
2　暗褐色粘質土　焼土小粒１％　固く締まる
3　黒褐色土　焼土中粒１％　白色軽石１％
4　黒褐色土　やや砂質　焼土中粒１％
5　黒褐色土　焼土中１％
6　暗褐色土　褐色土中粒10％　やや締まる
7　黒褐色土　焼土粒なし
8　暗褐色土　褐色土小粒・中塊５％　焼土小粒１％　やや締まる
9　褐色土　暗褐色土　焼土小粒１％　固く締まる
10　黒褐色土　暗褐色土　焼土中粒３％
11　焼土層　固く締まる
12　黒褐色土　褐色土中塊30％　焼土中粒３％　固く締まる
13　にぶい黄色土　褐色土を含む　固く締まる



第69図　１区５号竪穴住居竈と出土遺物

は不明瞭である。掘り方は全体を浅く掘り窪めており、褐色土及び暗褐色土粒・塊を含む黒褐色土の混土により床面を構築していた。

竈　東壁中央部から１号貯蔵穴寄りに付設される。６号溝との重複のため左袖部を遺失する。確認できる焚口幅47cm、右袖61cm、焚口から燃焼部奥行125cmである。竈使用面及び掘り方から出土した第69図１・10は支脚に転用された可能性がある。

貯蔵穴　貯蔵穴２基が検出された。１号貯蔵穴は竈右側で検出された。平面形状は隅丸方形で、規模は長軸1.11ｍ、短径1.03ｍ・深さ0.51ｍを測り、底部及び開口部付近から甕類(第69図５～８)が出土した。２号貯蔵穴は竈を挟み東北隅に検出された。平面形状は不整円形で、長径59cm、短径53cm、深さ34cmを測り、埋没土はローム粒・塊を含む黒褐色土により人為的に埋まっていた。

周溝　南壁際に幅25cmで検出された。

柱穴　床面精査から検出されたＰ５・６、掘り方調査で検出されたＰ７は対角線上に位置することから主柱穴と考えられる。柱穴間はＰ５～Ｐ６間が2.92ｍ、Ｐ６～Ｐ７間が2.81ｍを測る。P5は長径37cm、短径25cm、深さ60cm、P6は長径27cm、短径24cm、深さ50cm、P7は長径26cm、短径23cm、深さ50cmである。

他の施設　４基のピットが検出されている。南壁に近く検出されたＰ１・Ｐ４は出入口の施設の可能性がある。規模はＰ１が径30cm・深さ23cm、Ｐ２が長径39cm・短径27cm・深さ16cm、Ｐ３が径30cm・深さ31cm、Ｐ４が径35cm・深さ22cmを測る。

掘り方　全体を浅く２～８cm掘り窪め､凹凸面は少ない。

遺物出土状態　床面及び竈、貯蔵穴周辺に集中する。第69図１は竈使用面から、同図４～６・８は１号貯蔵穴から、第同図10は竈掘り方、同図２は２号貯蔵穴から出土した。非掲載遺物は土師器片1,719ｇがある。

所見　出土遺物から時期は５世紀後半と考えられる。

６号竪穴住居(第70図　PL.10)

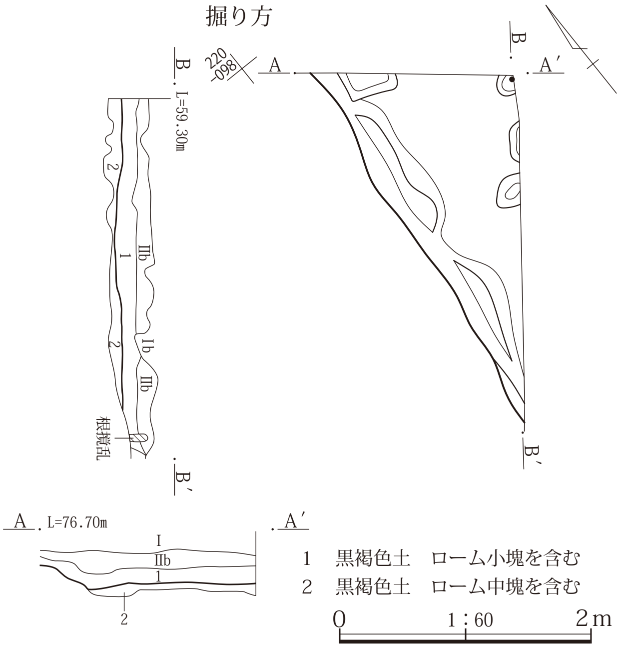
位置　Ｘ＝216 ～ 219、Ｙ＝－096 ～ 079

形状・規模　調査区境に西壁の一部が検出された。壁高９～ 11cmである。

主軸方向　不明。

重複　なし。

埋没土　埋没は黒褐色土による自然堆積と考えられる。



第70図　１区６号竪穴住居

床面　僅かな窪みがあるがほぼ平坦である。

柱穴・周溝　検出されていない。最大幅40cmで浅い凹みが壁にそって検出されている。

遺物出土状態　非掲載遺物であるが埋没土から土師器片74ｇ、須恵器片27ｇが出土した。

所見　出土遺物から時期は７世紀後半と考えられる。

８号竪穴住居(第71・72図　PL.10・11・34)

位置　Ｘ＝252 ～ 256、Ｙ＝－148 ～ 154

形状・規模　平面形状は方形で規模は長軸長5.24ｍ、短軸長5.14ｍ、壁高12 ～ 26cm、床面積は26.72㎡である。

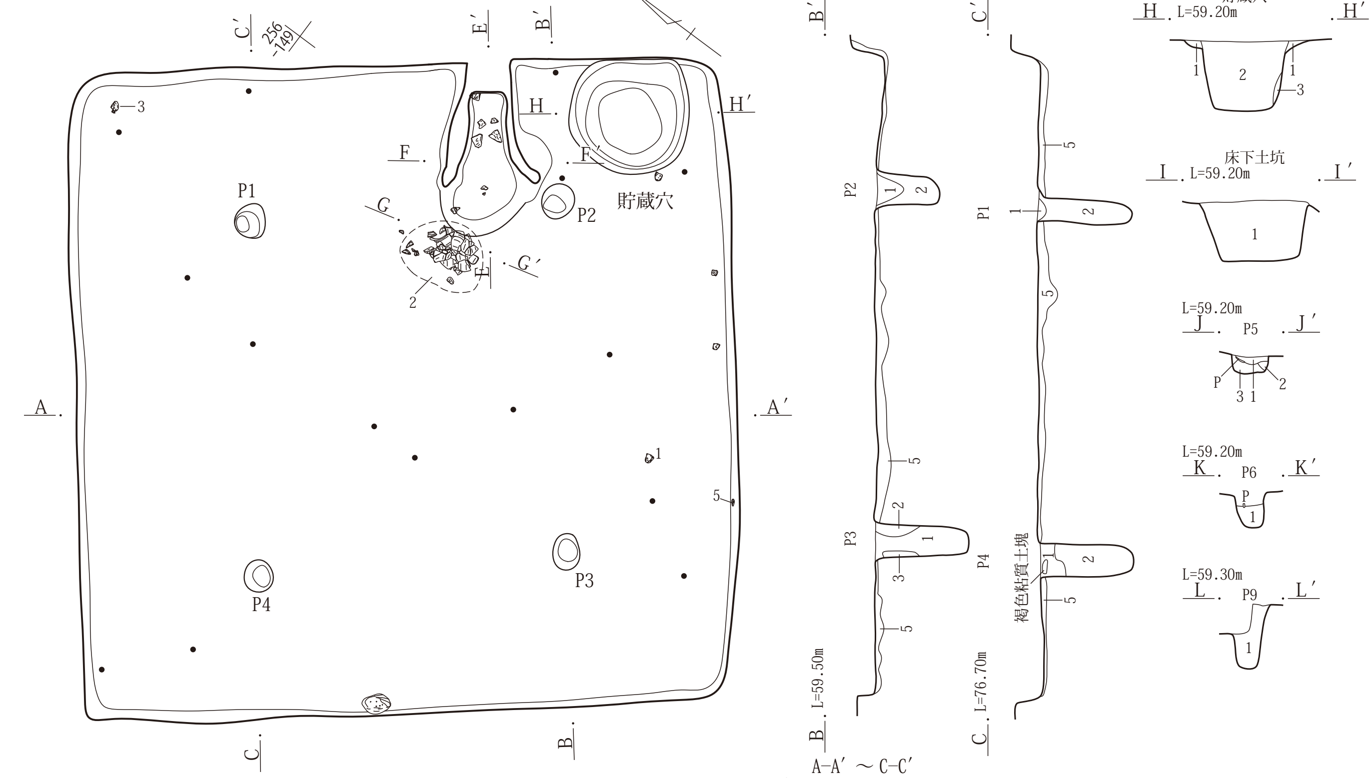
主軸方向　Ｎ－52°－Ｅ

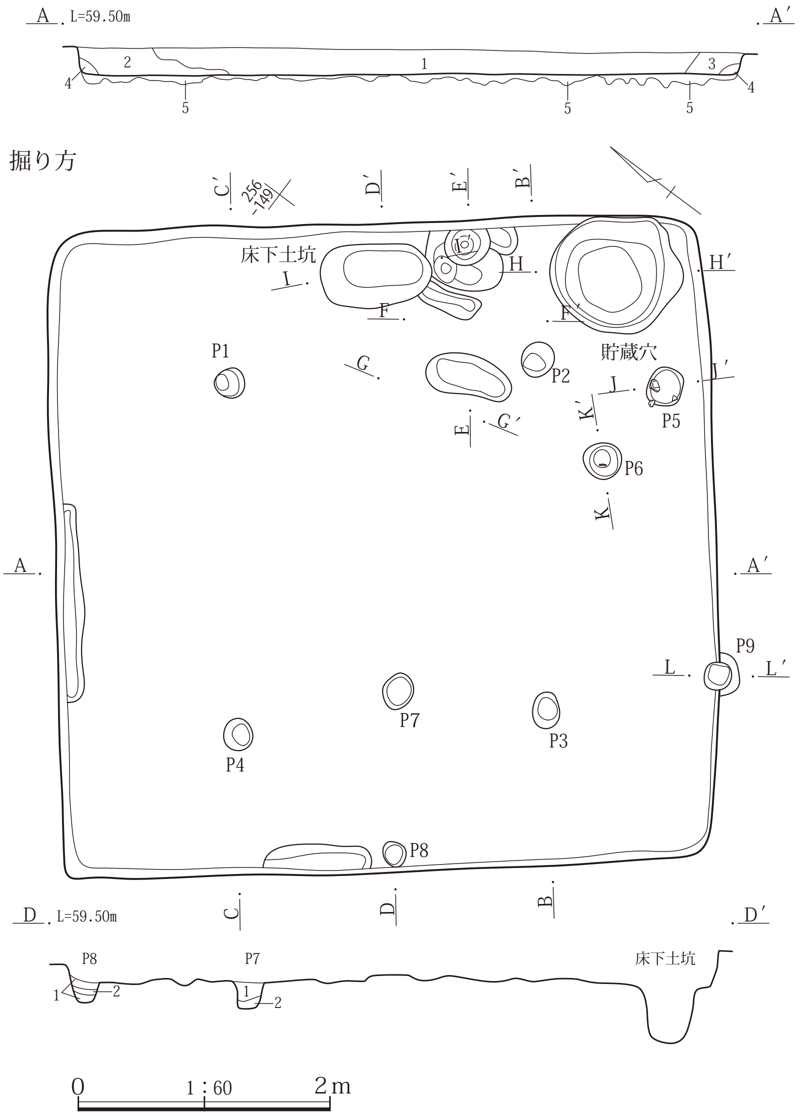
重複　なし。

埋没土　埋没はローム粒及び白色軽石を含む黒褐色土により自然堆積していた。壁面の崩落が認められる。

床面　壁際より中央部は１～２cm低い。床面の硬化面は不明瞭である。掘り方は全体を浅く掘り窪め、ローム塊を含む黒褐色土により床面を構築していた。

竈　北東辺中央からやや貯蔵穴寄りに構築されていた。竈の構築では壁面より20cmほど内側に煙道が立ち上がるような構造であるが、上部については不明である。残存状態は燃焼部の天井と両袖の焚口側は壊されていたが、両袖の燃焼部奥側は比較的良好であった。規模は全長1.45ｍ､幅0.92ｍ､燃焼部は長さ1.18ｍ､幅0.50ｍを測る。掘り方は煙道部下に土坑状の掘り込みが検出された。竈内からの遺物の出土は見られなかったが、燃焼部前から





A-A′ ～ C-C′
1　黒褐色土　褐色土中粒・大塊５％　粘性ややあり
2　黒褐色土　ローム小粒・小塊７％　粘性ややあり
3　黒褐色土　ローム大粒・大塊５％　粘性弱い
4　黒褐色土　ロームを含む
5　黒褐色土　ローム大粒・大塊10％　固く締まる

貯蔵穴
1　黒褐色土　褐色土中粒２％
2　黒褐色土　ローム中粒・大塊５％　粘性ややあり
3　暗褐色粘質土　黒褐色土を含む

１号床下土坑
1　黒褐色土　黄褐色土小粒・中塊10％　粘性ややあり

Ｐ１
1　黒褐色土　褐色土中粒２％
2　黒褐色粘質土　褐色粘質土を含む　締まり弱い

Ｐ２
1　黒褐色土　黄褐色土中粒２％　焼土小粒１％　白色軽石１％
2　黒褐色粘質土　褐色粘質土を含む　やや締まる

Ｐ３
1　黒褐色土　白色粒２％　にぶい黄褐色粘質土大塊２％
2　にぶい黄褐色土　黒褐色土を含む　固く締まる
3　にぶい黄褐色土　粘質土　締まりなし

Ｐ４
1　黒褐色土褐色粘質土中粒・大塊１％
2　にぶい黄褐色土粘質土　粘質土　水分含みやや締まる

Ｐ５
1　黒褐色土　ローム小粒３％　粘性締まりややあり
2　にぶい黄褐色土　粘質土塊
3　暗褐色土　ローム中粒・小塊２％　粘性ややあり

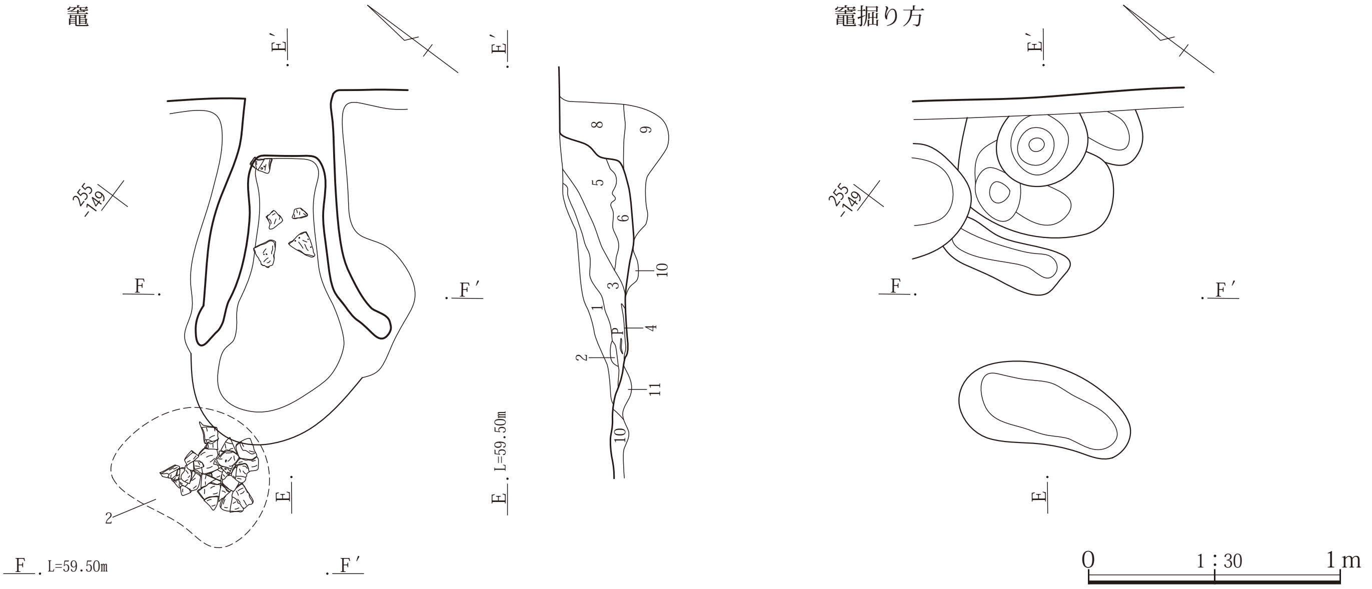
Ｐ６
1　にぶい黄褐色土　暗褐色粘質土を含む　焼土小粒１％　粘性ありやや締まる

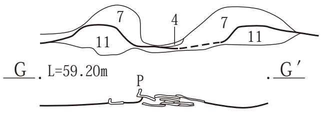
Ｐ７
1　黒色土　にぶい黄褐色粘質土中粒・中塊１％
2　にぶい黄褐色土　粘質土　黒色土を含む　粘性締まり強い

Ｐ８
1　黒色土　褐色土中粒・小塊１％
2　黒色土　１層よりローム粒を多く含む

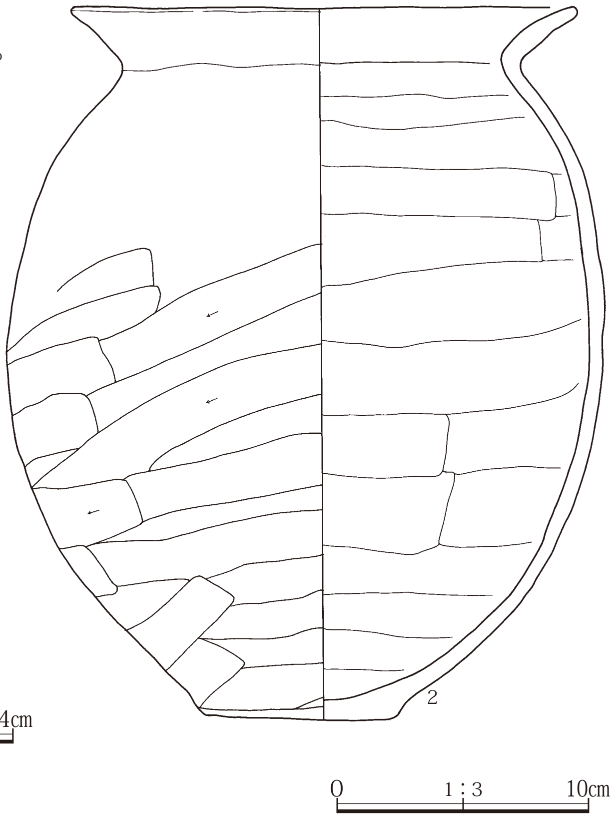
Ｐ９
1　黒褐色土　褐色土中粒・小塊２％　白色軽石１％

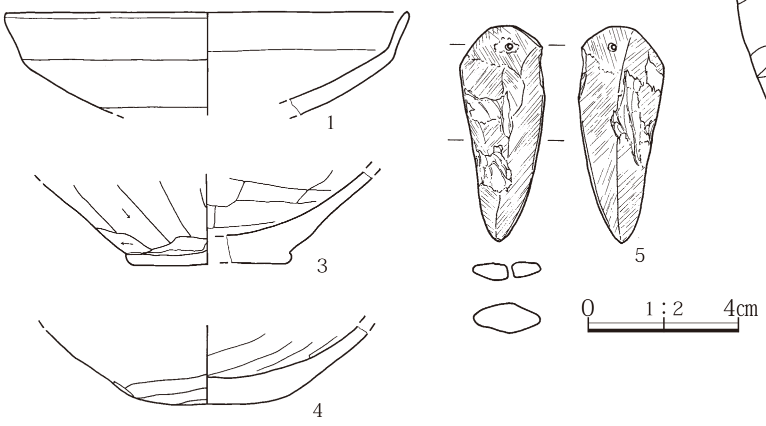
第71図　１区８号竪穴住居





竈
1　黒褐色土　褐色土中粒２％　焼土中粒２％　粘性ややあり
2　暗褐色土　焼土中粒・中塊25％　粘性あり
3　暗褐色土　ローム小粒５％　焼土中粒１％
4　明赤褐色土　焼土層
5　暗褐色粘質土　黄褐色土小粒･小塊５％　焼土中粒･中塊２％　白色軽石１％　固く締まる
6　黒褐色粘質土　ローム粒３％　焼土中粒・小塊３％　固く締まる
7　にぶい黄褐色土　ローム土中塊１％　焼土中粒・中塊３％　粘性ややあり固く締まる
8　暗褐色土　褐色土を含む
9　黒褐色土　褐色土中粒　焼土中粒１％以下　白色軽石１％　粘性ややあり
10　竪穴住居５層
11　にぶい黄褐色土　被熱部





第72図　１区８号竪穴住居j竈と出土遺物

は土師器甕(第72図２)が出土している。なお、燃焼部から煙道部にかけて径10㎝前後の礫が数個残っており、補強などに使用されたものと見られる。

貯蔵穴　南東隅から検出され、埋没土はローム粒・塊を多量に含み人為的な埋没土と考えられる。平面形状は不整円形で、規模は長径95㎝、短径92㎝、深さ58㎝を測る。開口部の浅い段は蓋を設置した痕跡の可能性がある。

周溝　掘り方の調査で、壁際に溝状の窪みが確認されたが、判然としない。

柱穴　主柱穴４基を検出した。対角線上に位置することから主柱穴と考えられる。規模は、Ｐ１(径27㎝、深さ75㎝、円形)、Ｐ２(径28㎝、深さ50㎝、円形)、Ｐ３(長径29㎝、短径22㎝、深さ74㎝、楕円形)、Ｐ４(径26㎝、深さ74㎝、円形)である。柱穴間はＰ１～Ｐ２間2.42m、

Ｐ２～Ｐ３間2.75m、Ｐ３～Ｐ４間が2.49m、Ｐ１～Ｐ４間が2.80mを測る。

他の施設　掘り方調査でピット５基が検出された。規模は、Ｐ５（径32cm、深さ９cm、円形）、Ｐ６（径31cm、深さ28cm、円形）、Ｐ７（径29cm、深さ25cm、円形）、Ｐ８（径22cm、深さ14cm、円形）、Ｐ９（径23cm、深さ26cm、円形）である。Ｐ５埋没土から第72図４が出土する。床下土坑は竈左側から検出され、平面形状は楕円形で規模は長径89cm、短径51cm、深さ49cmである。竈構築のために掘られたと考えられる。

掘り方　全体を浅く10cmほど掘り窪めている。

遺物出土状態　床面直上から土師器杯（第72図１）や剣形石製模造品（同図５）、竈焚口付近から土師器甕（第72図２）が出土した。非掲載遺物は剥片や土師器片965ｇがある。

所見　出土遺物から時期は６世紀後半と考えられる。

９号竪穴住居（第73・74図　PL.11・34）

位置　Ｘ＝251 ～ 256、Ｙ＝－156 ～ 161

形状・規模　平面形状は方形で、規模は長軸長5.06m、短軸長4.86m、壁高３～15cm、床面積は23.20㎡である。

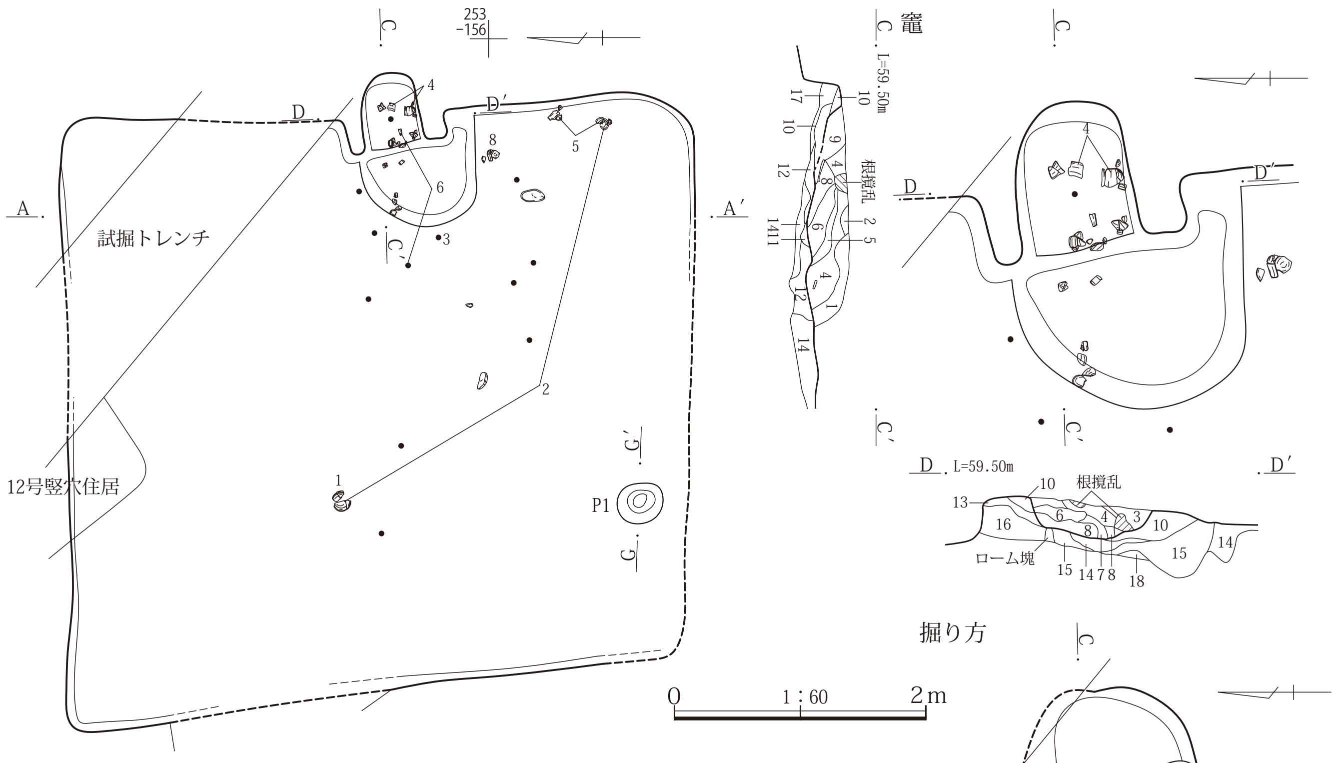
主軸方向　Ｎ－90°－Ｗ

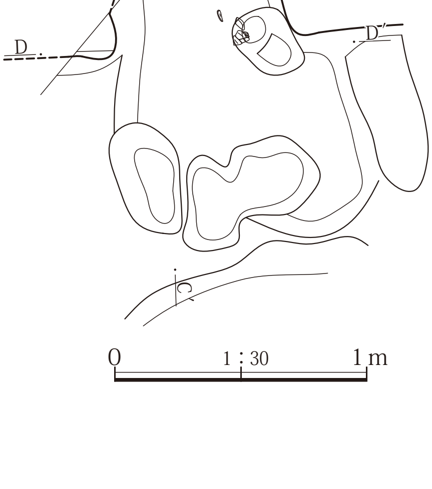
重複　12号竪穴住居と重複する。出土遺物から９号竪穴住居が新しい。

埋没土　埋没は自然堆積と考えられる。

床面　北側から南側にかけて約８cm緩やかに下る。使用による硬化面は不明瞭である。掘り方は褐色土とハードローム塊を含む黒褐色土により床面を構築する

竈　東壁中央部に付設される。規模は幅1.06m、右袖22cm、左袖29cm、焚口幅40cm、燃焼部奥行59cmである。

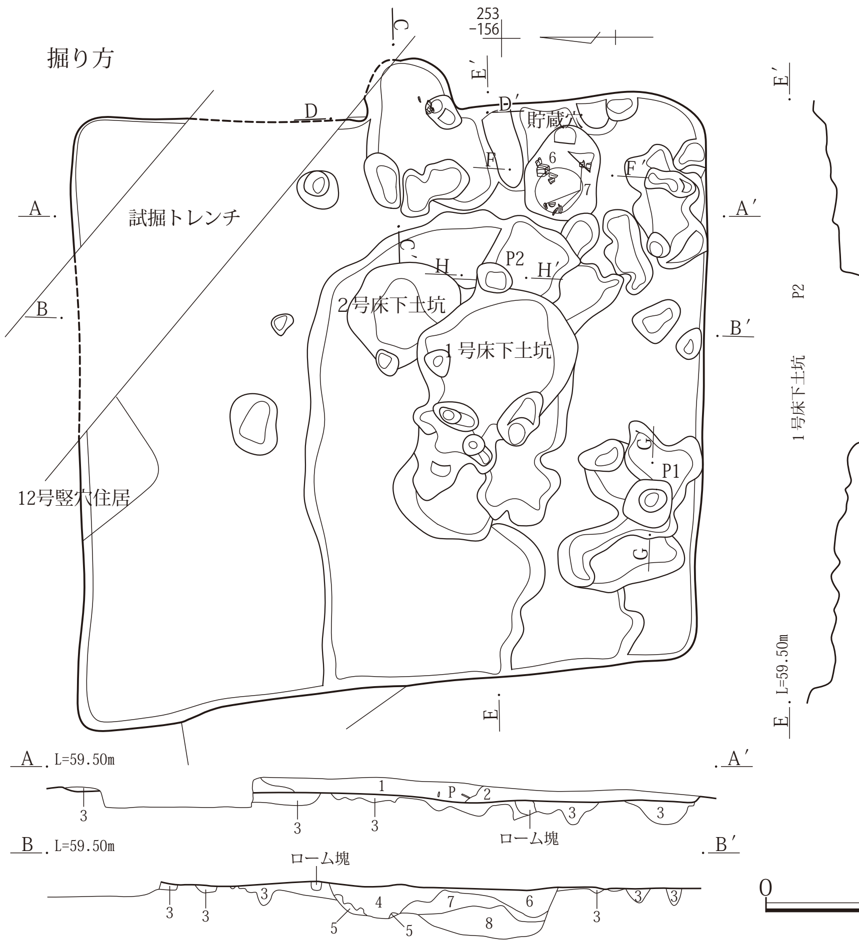




竈

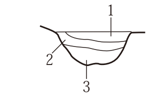
1　黒色土　砂質　固く締まる　暗褐色土小粒１％
2　黒色砂質土　焼土小粒２％
3　黒褐色土　暗褐色土　白色～黄白色軽石１％以下　焼土中粒１％
4　暗褐色土　白色～黄白色粒（軽石か）焼土小粒１％　粘性あり固く締まる
5　黒色土　焼土中粒を含む
6　黒褐色土　褐色土小粒・小塊１％　焼土中粒３％
7　暗褐色土　焼土小塊僅かに含む
8　黒褐色土　ローム中粒・小塊１％　焼土中粒１％
9　黒褐色土　ローム土焼土中粒・中塊５％
10　黒褐色土　均質　白色軽石　焼土中粒１％　緻密で固く締まる
11　黒褐色土　焼土中粒２％
12　黒褐色土　黄褐色土塊　褐色粘質土大塊10％　やや締まる
13　黒褐色土　暗褐色土　焼土中粒５％
14　褐色土　ハードローム大塊５％　締まりやや弱い
15　褐色粘質土　黒褐色土　焼土小粒１％　やや締まる
16　黒褐色土　均質　ハードローム土　白色粒１％　固く締まる
17　黒褐色土　焼土小粒１％　やや締まる
18　褐色土　粘質土塊

第73図　１区９号竪穴住居



0　1：60　2ｍ

貯蔵穴

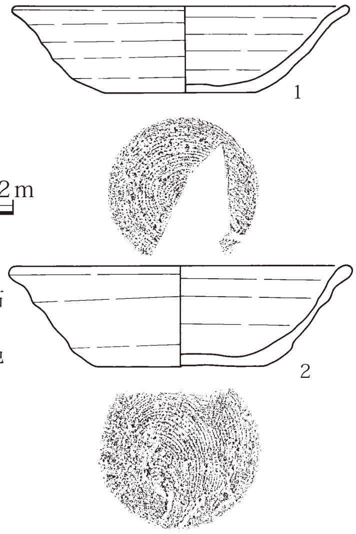


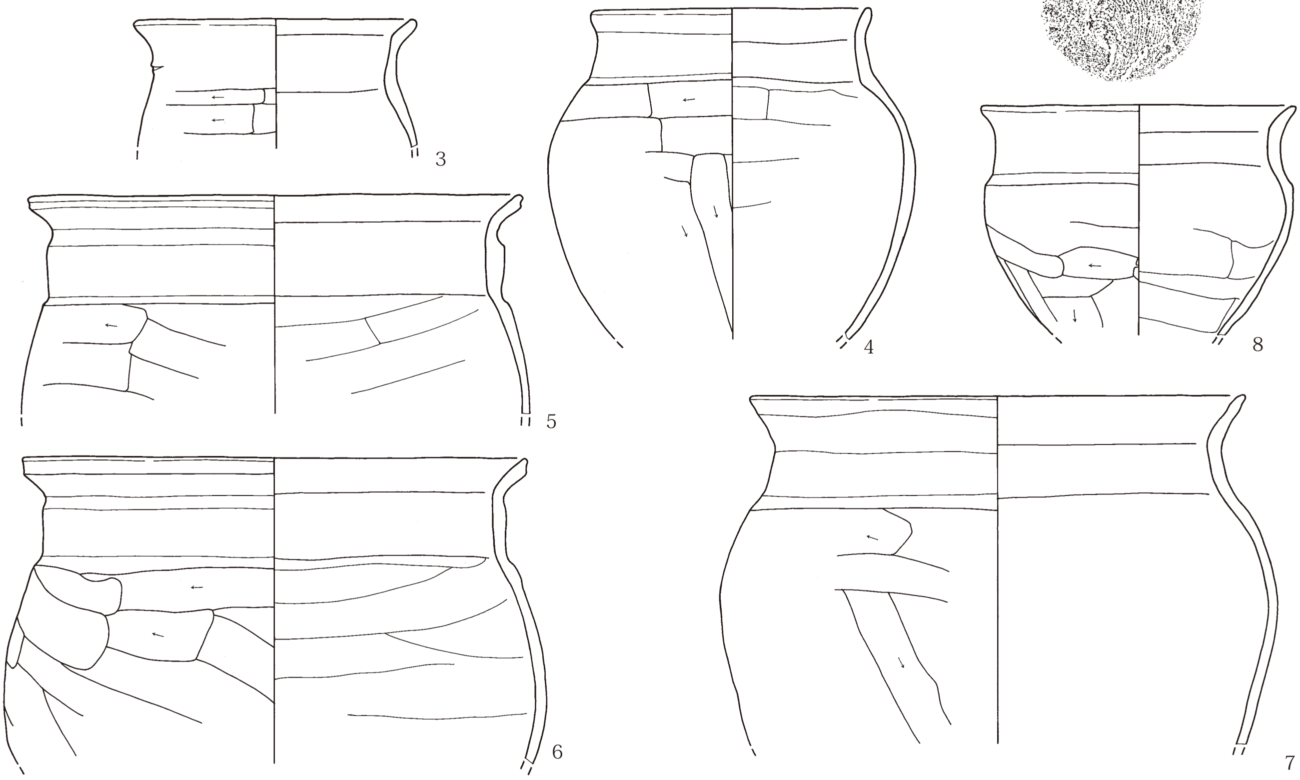
貯蔵穴
1　黒色土　褐色土大塊５％　やや締まる
2　褐色粘質土　粘質土固く締まる　褐色土中塊２％
3　黒色土　褐色土焼土中粒・中塊３％　やや締まる

Ｐ１
1　黒褐色土　褐色土中粒１％
2　黒褐色土　褐色土中粒・小塊２％　粘性あり
3　黄褐色土　ローム主体で黒褐色土を含む　粘性あり　やや締まる

Ｐ２
1　黒色粘質土　締まりやや強い
2　黒色粘質土　にぶい黄褐色粘質土塊を含む

A-A′・B-B′
1　黒色砂質土　暗褐色土小粒１％　固く締まる
2　黒褐色土　黒色砂質土　褐色土中粒・小塊１％
3　黒褐色土　褐色土　黄褐色土小～大塊10％
4　黒色土　やや砂質　ローム土中粒・小塊１％　黄褐色土大塊１％　白色軽石粒１％　やや締まる
5　にぶい黄褐色土　黒色土少量含む　固く締まる
6　黒色土　暗褐色土　ローム中粒・大塊10％　白色軽石粒１％
7　黄褐色土　ローム土　にぶい黄褐色土大塊40％　白色軽石１％　固く締まる
8　ローム土　にぶい黄褐色土中粒・大塊10％





第74図　１区９号竪穴住居掘り方と出土遺物

0　1：3　10㎝

埋没土に天井部の崩落による縞状の堆積が認められる。掘り方は焼土粒やハードローム土塊を含む黒褐色土や褐色粘質土により使用面を整える。

貯蔵穴　掘り方調査段階で竈右側から検出された。平面形状は不整円形で、規模は長径76cm、短径60cm、深さ28cmである。黒色土と褐色土の混土が縞状に認められ自然堆積と考えられる。

周溝・柱穴　床面精査、掘り方調査で検出できなかった。

他の施設　床面精査から１基、掘り方調査で１基のピットが検出された。規模は、Ｐ１(径28cm、深さ43cm、円形)、Ｐ２(長径30cm、短径23cm、深さ36cm、楕円形)である。中央部から１・２号床下土坑が検出され1号床下土坑を２号床下土坑が切る。1号床下土坑の平面形状は不定形で、規模は長径124cm、短径112cm、深さ36cmである。２号床下土坑の平面形状は不定形で、規模は長径86cm、短径70cm、深さ16cmである。竈構築のために掘られたと考えられる。

掘り方　南半部の掘り方は大小ピット状や溝状の窪みが認められ、主柱穴となるピットが含まれ可能性がある。

遺物出土状態　第74図１～３・５・７・８は床面直上から、同図４・６は竈使用面から出土する。非掲載遺物は土師器片738ｇ、須恵器小18ｇである。

所見　出土遺物から時期は９世紀第４四半期と考えられる。

10号竪穴住居(第76図　PL.11・12)

位置　Ｘ＝249 ～ 256、Ｙ＝－161 ～ 166

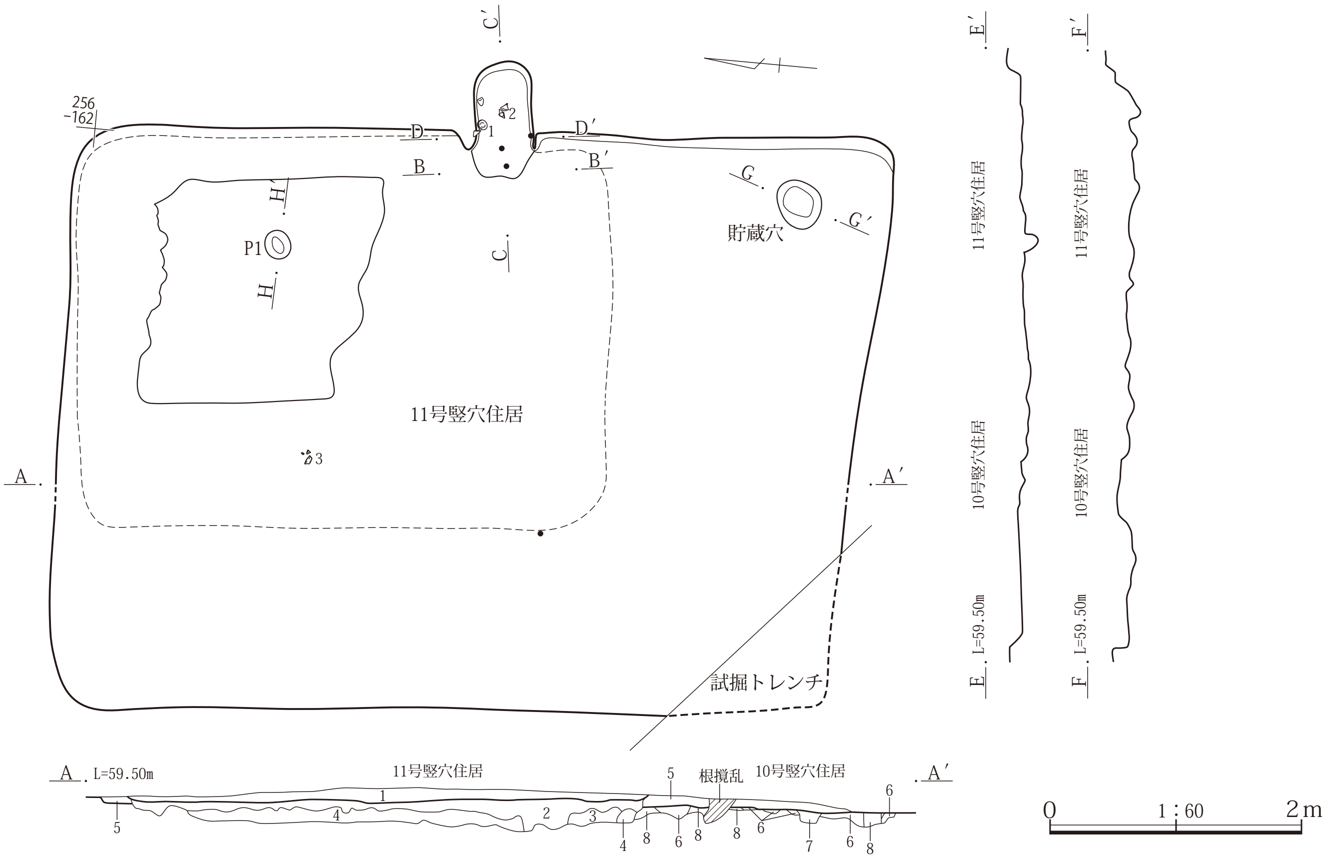
形状・規模　平面形状は隅丸長方形で、長軸長6.52m、短軸長4.64m、壁高１～ 15cm、床面積は28.80㎡である。

主軸方向　Ｎ－82°－Ｅ

重複　11号竪穴住居と重複し、検出状況から11号竪穴住居が新しい。

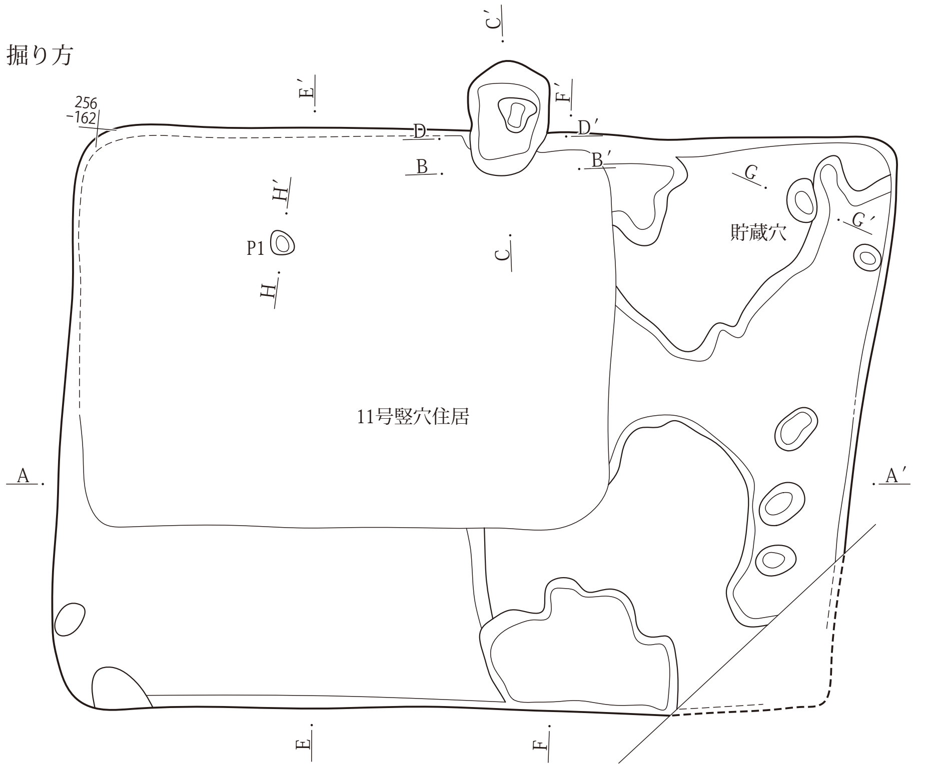
埋没土　ローム粒・塊を含む黒褐色土で埋没しており、埋没状況は判断できなかった。

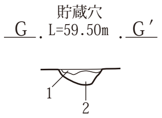
床面　南側及び西側に床面が残存した。11号竪穴住居の掘り方がなかった部分に残存したものと考えられる。床面は北側と南側では約５cmの比高があり、使用による硬



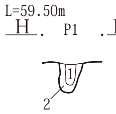
10・11号竪穴住居
1　黒色土　黒褐色土を斑状に含む　黄褐色土中粒・大塊１％　白色軽石(角閃石あり)１％
2　黒色土　ハードローム大塊多量に含む　やや締まる
3　黒色土　ハードローム中粒・大塊50％　やや締まる
4　暗褐色土　黒色土少量含む　黄褐色ローム小粒３％　粘性ややあり
5　黒褐色土　均質　ハードローム中粒・小塊１％
6　黒褐色土　ハードローム中粒・大塊10％
7　黒褐色土　ハードローム小粒・中塊５％
8　黄褐色土　ハードローム塊主体

第75図　１区10・11号竪穴住居

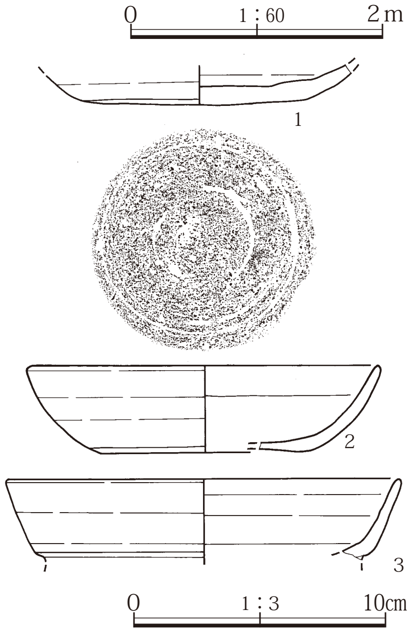


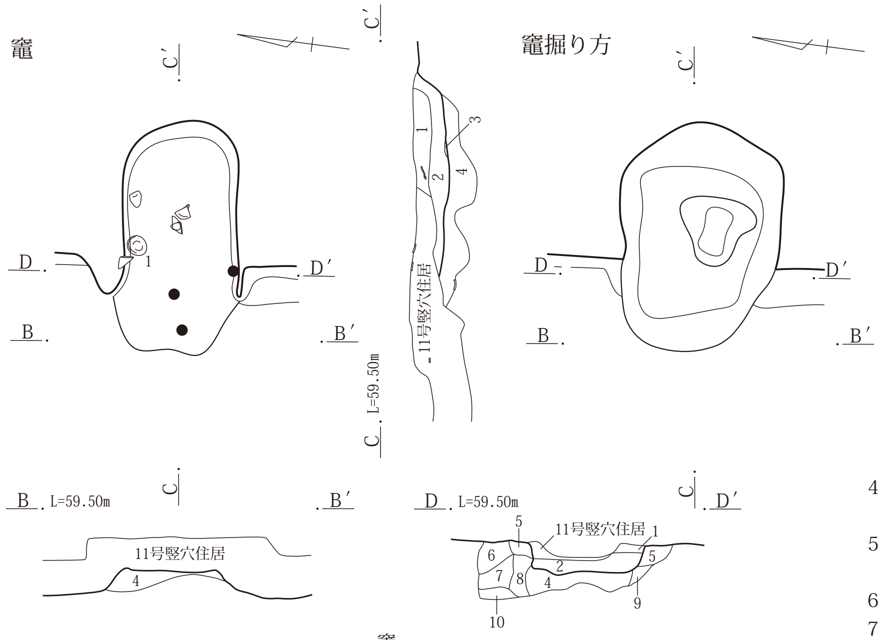


貯蔵穴
1　黒褐色土　ハードローム大塊５％
　にぶい黄褐色土少量含む
2　にぶい黄褐色土　黒褐色土含む　固
　く締まる



Ｐ１
1　黒褐色土　やや締まる
2　黒褐色土　ハードローム中粒１％
　やや黄色味あり





竈
1　黒褐色土　褐色土中粒３％　焼土中粒２％
2　黒褐色土　褐色土少量　焼土中粒１％　やや締まる
3　灰黄褐色土　灰主体層　焼土中粒２％
4　黒色土　ハードローム中粒・中塊２％　上位に焼土中粒１％
　やや締まる
5　暗褐色土　焼土中粒２％　粘性ややあり固く締まる　竈袖構築
　土
6　黒褐色土　褐色粘質土　黄褐色土中塊５％　竈袖構築土
7　褐色土　粘質土主体　黒褐色粘質土　焼小塊３％
8　黒褐色土　焼土中粒５％　固く締まる
9　黒色土　褐色土を含む
10　褐色粘質土　粘性あり固く締まる

第76図　１区10・11号竪穴住居と10号竪穴住居の出土遺物

化面は不明瞭である。

竈　東壁中央部に付設されており、11号竪穴住居竈の下部で検出した。規模は、両袖幅66cm、右袖長12cm、左袖長15cm、焚口幅47cm、燃焼部奥行71cmである。

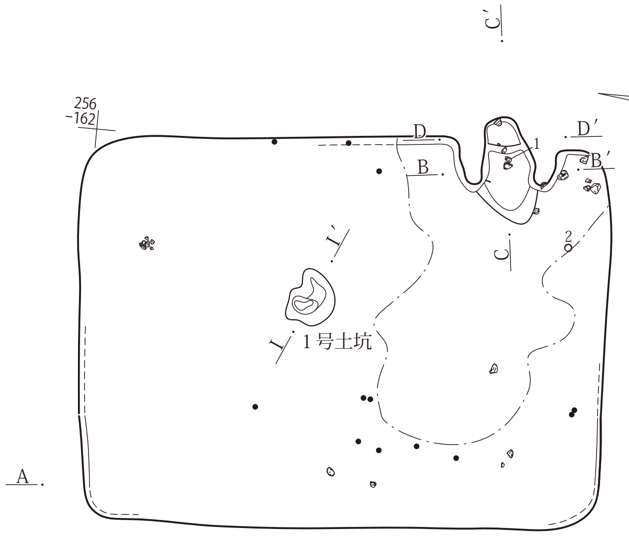
使用面に灰層が残存した。左右の袖はローム塊を含む黒褐色土と褐色粘質土で構築され、黒色土で燃焼床を固く整えていた。

貯蔵穴　南東隅に位置し、平面形状は不整円形で、規模は長径48cm、短径45cm、深さ12cmである。人為的埋没と考えられる。

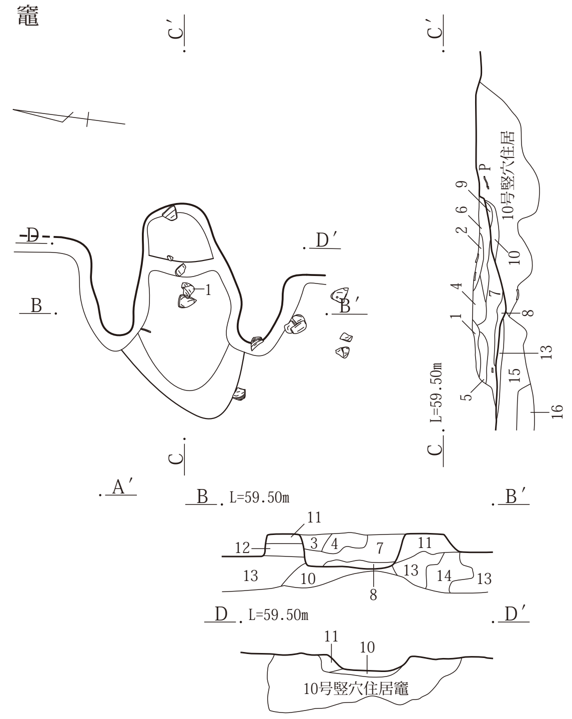
周溝　床面精査、掘り方調査でも検出できなかった。

他の施設　床面精査でＰ１基を検出した。平面形状は円形で、規模は径23cm、深さ26cmである。11号竪穴住居内で検出したが、埋没土に類似することから、10号竪穴住居のピットと判断した。

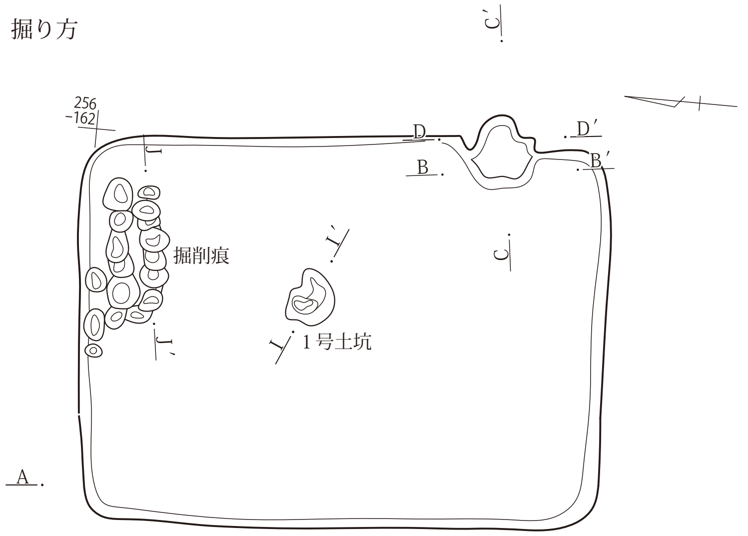
掘り方　床面全体を10 ～ 20cmほど掘り窪められていた。ピット状の窪みが認められるが、床下土坑のような施設は検出されなかった。



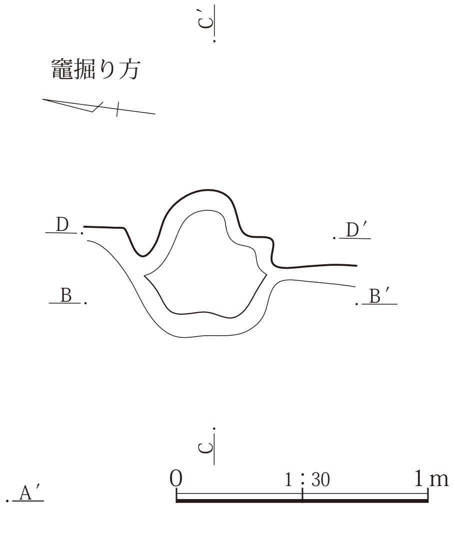
1号土坑
1　黒色土　ハードローム中粒・
大塊10％

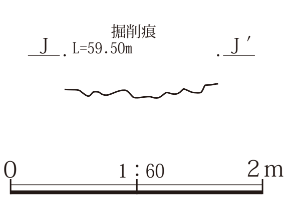


掘り方

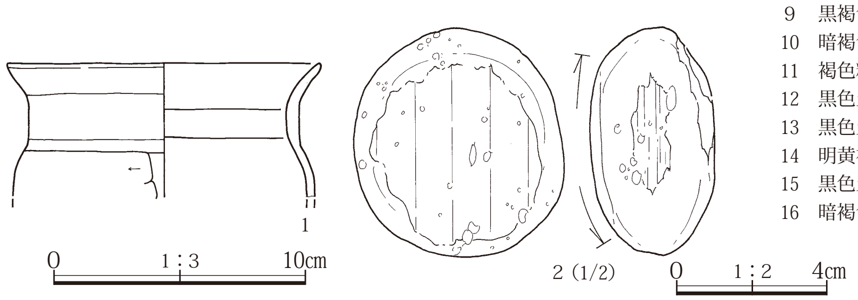


竈掘り方





11号竪穴住居竈
1　黒褐色土　白色軽石１％　焼土中粒１％　炭化物１％
2　暗褐色土黒褐色土　焼土中粒１％　粘性ややあり
3　暗褐色土　遺物を含む　やや締まる
4　黒褐色土　褐色土中粒１％　焼土中粒１％
5　暗褐色土　やや締まる
6　黒色土黒褐色土　焼土中粒２％　ローム小粒１％
7　黒褐色土　焼土中粒２％　ローム中粒３％　炭化物１％
8　黒色土　炭混土層　焼土小粒１％
9　黒褐色土　焼土中粒１％
10　暗褐色粘質土　焼土中粒１％　固く締まる
11　褐色粘質土　黄褐色土中粒２％　焼土中粒１％　竈袖構築土
12　黒色土　褐色粘質土中粒５％　焼土中粒１％　竈袖構築土
13　黒色土　褐色土中粒１％　やや締まる
14　明黄褐色土　ハードローム塊
15　黒色土　竪穴住居３層
16　暗褐色土　褐色土中粒を含む　やや暗色味帯びる



第77図　１区11号竪穴住居と出土遺物

遺物出土状態　竈使用面から須恵器杯(第76図１・２)、床面直上から高台付杯(同図３)が出土した他、土師器片159ｇが出土した。

所見　時期は、出土遺物から８世紀前半と考えられる。

11号竪穴住居(第76・77図　PL.12・34)

位置　X＝251 ～ 256、Y＝－161 ～ 165

形状・規模　平面形状は隅丸長方形で、長軸長4.10m、短軸長3.12m、壁高９～ 18㎝、床面積は12.86㎡である。

主軸方向　N－88°－E

重複　10号竪穴住居と重複し、検出状況から11号竪穴住居が新しい。北壁と東壁の一部は、10号竪穴住居の壁面とほぼ同位置となる。

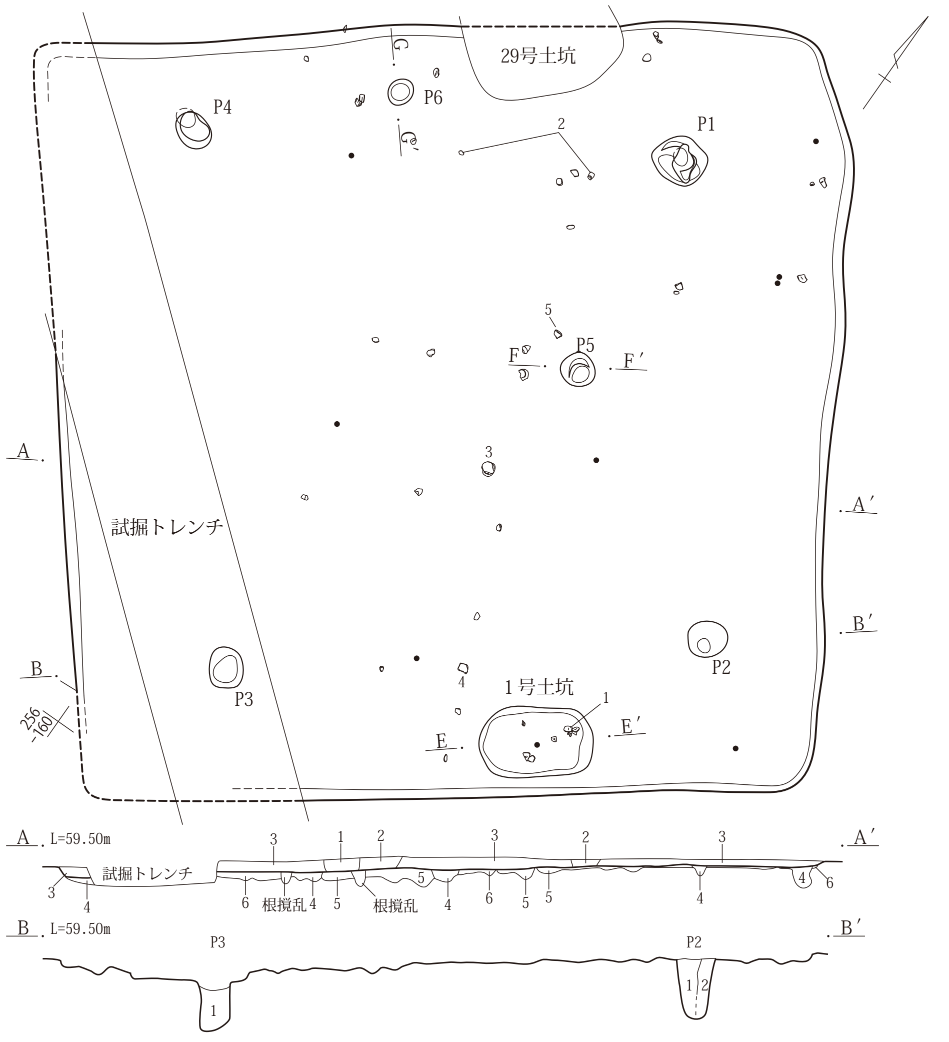
埋没土　黄褐色土粒・塊や白色軽石を含む黒色土を主体に　埋没しており、埋没状況は判然としない。

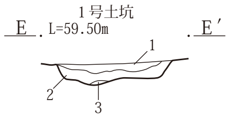
床面　竈周辺から西壁際まで、硬化面が認められた。床面は、多量のローム塊を含む黒色土で構築している。

竈　東壁の南東部に付設されている。10号竪穴住居の竈と同位置である。規模は両袖幅80㎝、右袖長29㎝、左袖長35㎝、焚口幅36㎝、燃焼部奥行60㎝である。構築時に深く掘り込まれなかったため下部に10号竪穴住居竈の使用面が残存した。

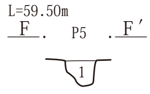
貯蔵穴・周溝　床面精査、掘り方調査でも検出できなかった。

他の施設　床面精査で１号土坑を検出した。平面形状は不定形で、規模は長径45㎝、短径40㎝、深さ20㎝である。ローム粒を含む黒色土で埋没していた。

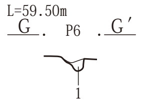




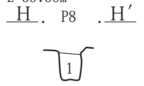
１号土坑
1　黒褐色土　白色軽石１％　焼土中粒１％
2　黒色土　白色軽石(角閃石含む)　にぶい黄褐色土中塊１％　やや締まる
3　褐色土　粘質土　黒色土少量含む　固く締まる



P５
1　黒褐色砂質土　褐色粘質土中粒１％　やや締まる



P６
1　黒褐色土　ハードローム中粒５％　焼土中粒３％



P８
1　黒褐色土　やや砂質　褐色土中粒・中塊３％　やや締まる

1　黒褐色土　褐色土中粒10％
2　黒褐色土　やや砂質　ローム中粒１％
3　黒色土　黄褐色土中粒・小塊１％　白色軽石(角閃石含む)１％
4　黒褐色土　褐色土を含む　締まる
5　黒褐色土　黄褐色土を含む　固く締まる
6　黄褐色土　黒褐色土少量含む　固く締まる

0　1：60　2m

第78図　１区12号竪穴住居

掘り方　全体に掘り窪められており、北壁付近で検出したピット状の窪みは、掘り方の掘削痕と考えられる。

遺物出土状態　竈埋没土から土師器小型甕（第77図1）が、使用痕のある礫（同図２）は壁際の床面直上から出土した。他に土師器片683ｇが出土した。

所見　時期は９世紀第３四半期と考えられる。

12号竪穴住居（第78・79図　PL.12・13・34）

位置　Ｘ＝255 〜 263、Ｙ＝－154 〜 163

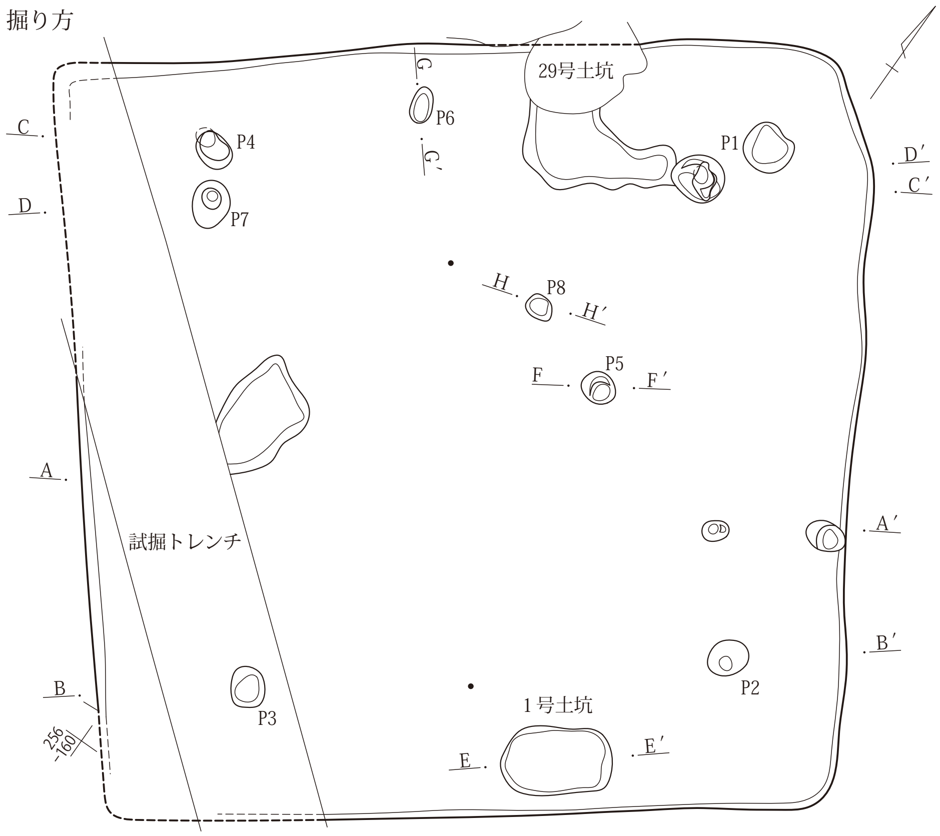
形状・規模　平面形状は方形で、規模は長軸長6.24m、短軸長6.10m、壁高３〜９㎝、床面積は37.52㎡である。

主軸方向　Ｎ－34°－Ｗ

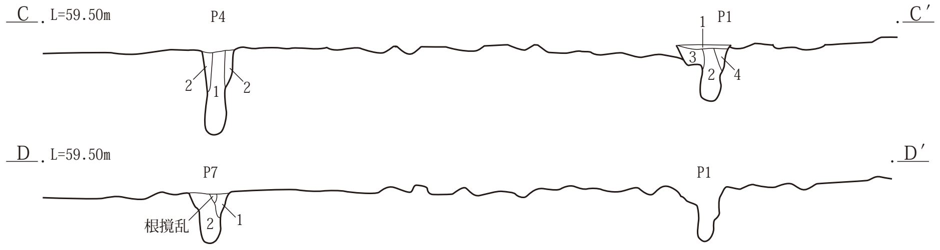
重複　９号竪穴住居、29号土坑と重複し、埋没土の確認状況などから12号竪穴住居が古い。

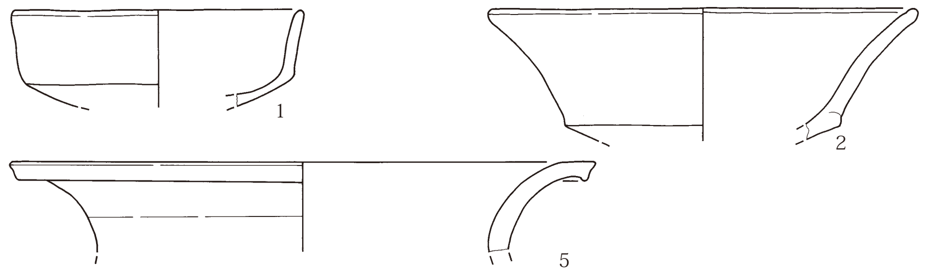
埋没土　黄褐色土粒・塊や白色軽石を含む黒色土を主体に埋没しており、自然堆積と考えられる。

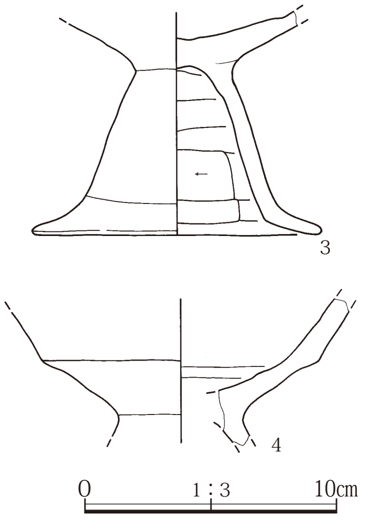
床面　壁際より中央部は２〜３㎝低く構築されており、硬化面は不明瞭である。床面は黄褐色土、褐色土、黒褐色土の混土で構築されていた。



Ｐ１
1　黒褐色土　褐色粘質土小粒１％　やや締まる
2　黒褐色土　色味やや黒い　柱痕
3　黒褐色土　褐色粘質土小粒１％を含む　固く締まる
4　にぶい黄褐色土　粘質土　黒褐色土少量含む　固く締まる
Ｐ２
1　黒褐色土　黒褐色土中粒１％
2　黒褐色土　褐色粘質土を含む
Ｐ３
1　黒色土　褐色粘質土中粒・大塊多量に含む
Ｐ４
1　黒褐色土　白色軽石１％　柱痕
2　黒褐色土　黄褐色土　褐色土を含む
Ｐ７
1　黒色土　白色軽石１％　ローム中粒・小塊５％　固く締まる
2　黒色土　褐色土小粒・小塊１％







第79図　１区12号竪穴住居掘り方と出土遺物

炉・貯蔵穴・周溝　床面精査、掘り方調査でも検出できなかった。

柱穴　床面精査によって４基検出され、対角線上に位置することから主柱穴と考えられる。規模は、Ｐ１(径41㎝、深さ45㎝、円形)、Ｐ２(径32㎝、深さ51㎝、円形)、Ｐ３(径32㎝、深さ42㎝、円形)、Ｐ４(長径32㎝、短径25㎝、深さ68㎝、楕円形)で、柱穴間はＰ１～Ｐ２間は3.85m、Ｐ２～Ｐ３間は3.82m、Ｐ３～Ｐ４間は4.40m、Ｐ１～Ｐ４間は3.90mである。

他の施設　床面精査でピット１基、掘り方調査でピット２基と土坑１基(１号土坑)を検出した。規模は、Ｐ５(径27㎝、深さ20㎝、円形)、Ｐ６(長径23㎝、短径20㎝、深さ４㎝、楕円形)、Ｐ７(径39㎝、深さ41㎝、円形)、Ｐ８(径23㎝、深さ26㎝、不整円形)である。Ｐ６の埋没土には焼土粒が認められた。1号土坑は南壁際で検出したもので、平面形状は楕円形で、規模は長径91㎝、短径57㎝、深さ18㎝である。埋没土は、２層に分層でき自然埋没と思われる。検出した位置から貯蔵穴の可能性がある。

掘り方　床面全体が５～10㎝ほど掘り窪められていた。大小の窪みがみられるが床下土坑のような施設は検出されなかった。

遺物出土状態　杯(第79図１)は１号土坑底面から、高杯(同図２～４)、甕(同図５)は床面直上から出土した。他に土師器片793ｇ、須恵器片22ｇが出土した。

所見　出土遺物から時期は６世紀代以降と考えられる。

13号竪穴住居(第80図　PL.13・34)

位置　Ｘ＝261～262、Ｙ＝−160～161

形状・規模　竈だけを検出したものであり、平面形状と規模は不明である。

主軸方向　不明。

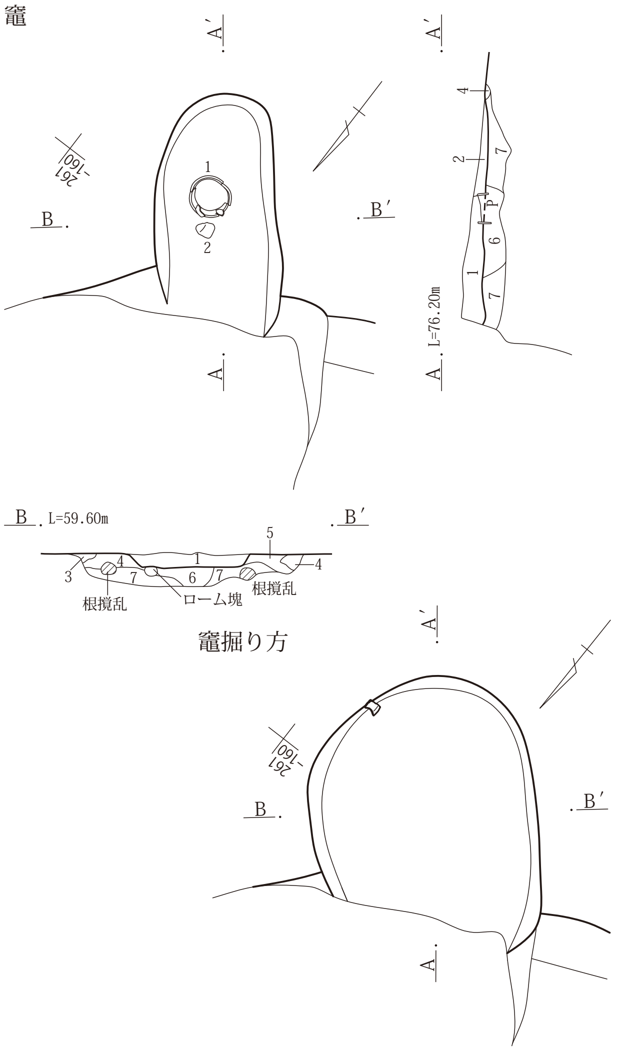
重複　12号竪穴住居と重複し、埋没土の確認状況から13号竪穴住居が新しい。

埋没土・床面　攪乱され検出できなかった。

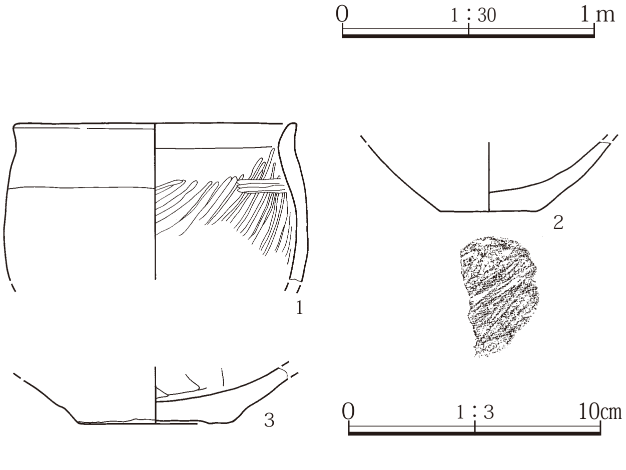
竈　規模は焚口幅40㎝、燃焼部奥行長61㎝である。褐色粘質土で竈袖部を構築していた。白色軽石や焼土粒を含む黒褐色土は天井崩落土と考えられる。使用面は褐色土と焼土粒を含む黒褐色土で構築されていた。

遺物出土状態　竈使用面から第80図１・２、埋没土から同図３が出土した他、土師器片247ｇが出土した。

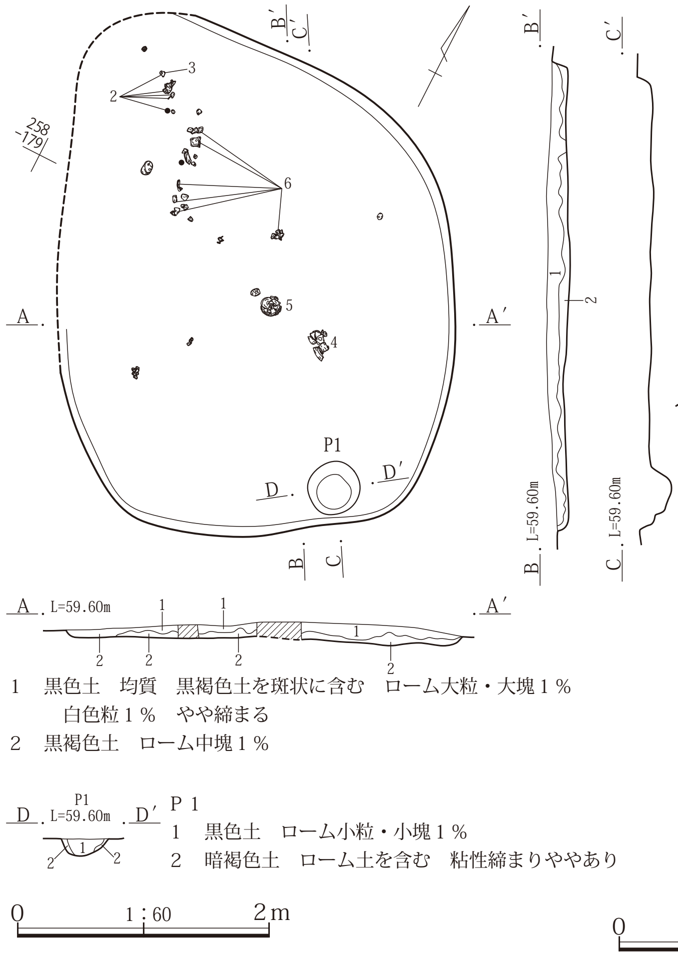
所見　出土遺物から時期は６世紀代と考えられる。

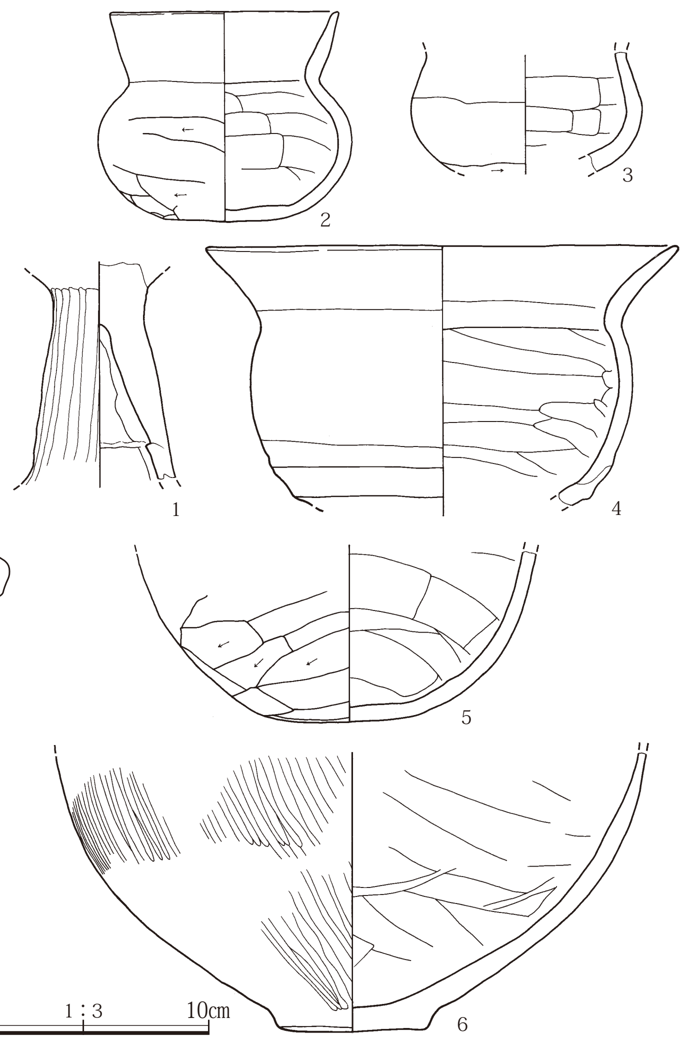


1　黒褐色土　白色軽石１％以下　焼土中粒10％
2　黒褐色土　白色粒　焼土小粒１％
3　黒褐色土　褐色土を含む
4　褐色土　粘性ややあり固く締まる　竈袖構築土
5　褐色土　黒褐色土を含む　竈袖構築土
6　黒褐色土　焼土中粒５％
7　黒色土　黄褐色土中粒１％　焼土粒１％



第80図　１区13号竪穴住居と出土遺物





第81図　１区１号竪穴状遺構と出土遺物

（2）竪穴状遺構

１区から検出された竪穴状遺構は３基である。ローム土を人為的に掘り込み、出土遺物はあるが床面及び炉や竈などの内部施設が検出されないため、竪穴状遺構とした。時期別には古墳時代１基、奈良・平安時代２基である。

１号竪穴状遺構（第81図　PL.14・34・35）

位置　X＝255 ～ 259、Y＝－175 ～ 179

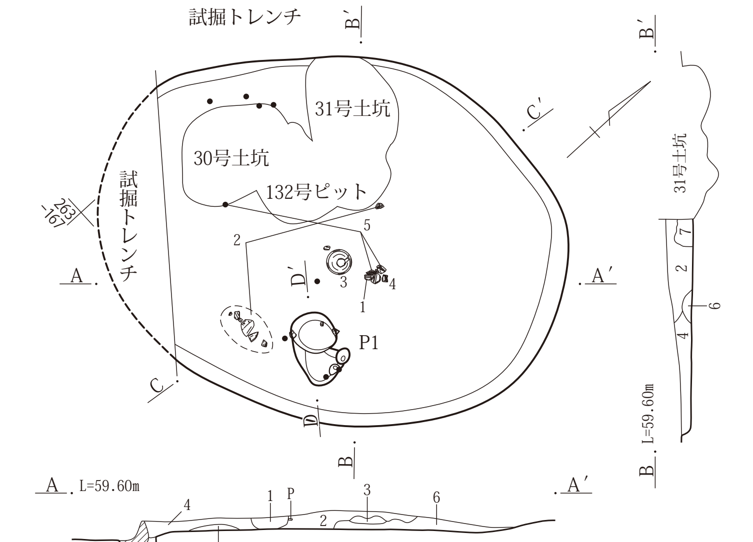
形状・規模　撹乱のため西壁の一部を遺失する。平面形状は不定形で、確認できた規模は長軸長4.13m、深さ15㎝である。

主軸方向　N－30°－W

重複　なし。

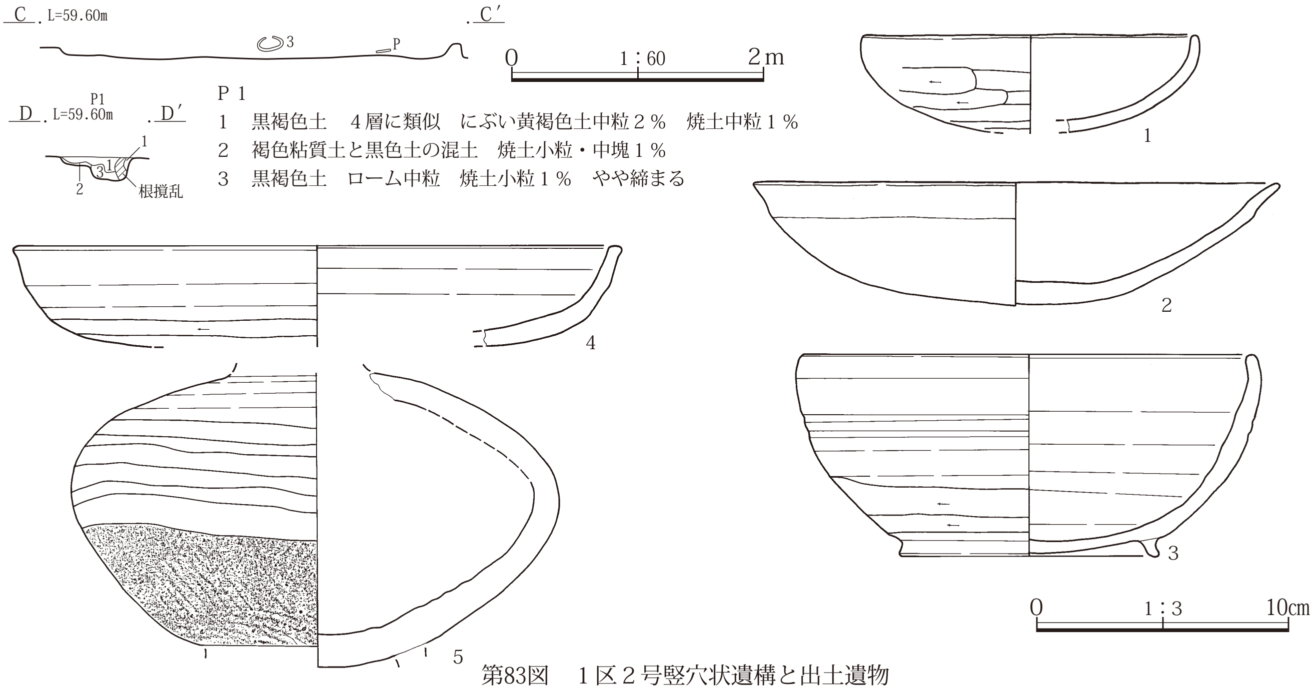
埋没土　埋没土はローム粒・塊及び白色粒を含む黒色土や黒褐色土であり、自然堆積と考えられる。

内部施設　1号ピットが南壁際から検出される。平面形状は円形で、規模は長径43㎝、短径42㎝、深さ16㎝である。埋没は自然堆積と考えられ柱痕は認められない。



1　黒褐色土　砂質　にぶい黄褐色土小粒・中塊３％　焼土中粒１％
2　黒褐色土　焼土中粒３％　炭化物　白色軽石１％　やや締まる
3　黒褐色土　ローム土を含む　色味はやや黄色
4　黒色土　ローム中粒・大塊３％　焼土中粒　白色軽石（FAか）１％
5　黒色土　４層より褐色味少ない
6　黒褐色土　暗褐色土を斑状に含む　ローム大粒・大塊５％
7　にぶい黄褐色土　黒褐色土少量含む　焼土中粒１％　粘性ややあり固く締まる
8　４層に類似　ローム中粒・小塊３％　ピット状掘り込み

第82図　１区２号竪穴状遺構



第83図　１区２号竪穴状遺構と出土遺物

遺物出土状態　底面付近から第81図２・６が出土する。非掲載遺物は土師器片624ｇである。

所見　出土遺物から時期は５世紀前半と考えられる。

２号竪穴状遺構（第82・83図　PL.14・35）

位置　X＝262 ～ 265、Y＝−163 ～ 167

形状・規模　攪乱により南西部を遺失する。平面形状は楕円形で、検出された規模は長軸長3.36m、短軸長2.94m、深さ17cmである。

主軸方向　N−55°−W

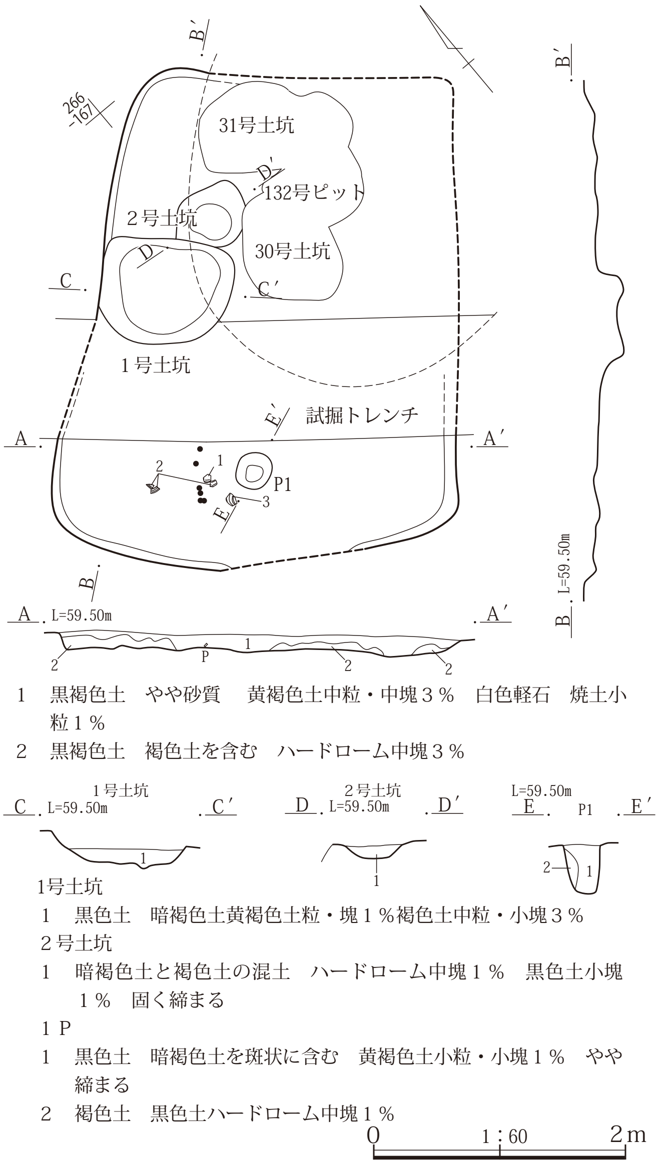
重複　３号竪穴状遺構と重複するが、土層からは新旧関係不明である。２号竪穴状遺構埋没土を30・31号土坑、132号ピットが切る。

埋没土　埋没土は焼土粒及び炭化物、白色軽石を含む黒褐色土及び黒色土であり、人為的な埋没土と考えられる。

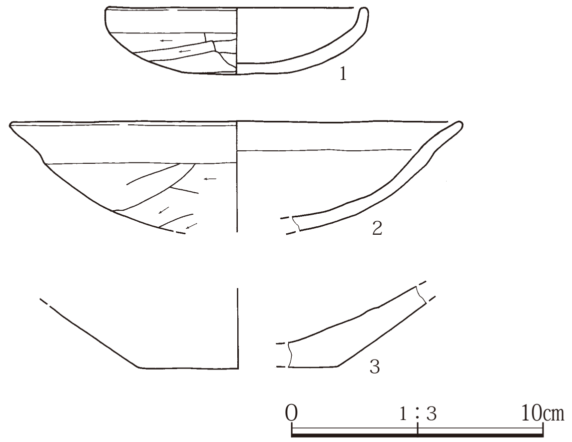
内部施設　南東部から1号ピットが検出され、平面形状は不定形で、規模は長径58cm、短径43cm、深さ18cmである。埋没土は焼土粒を含む黒色土及び黒褐色土、褐色粘質土であり、人為的埋没と考えられる。柱痕は認められない。

遺物出土状態　中央底面付近から鉢（第83図３）が出土し、同図１・２・４・５は埋没土からの出土である。非掲載遺物は土師器片162ｇ、須恵器片119ｇである。

所見　出土遺物から時期は７世紀末～８世紀初頭と考えられる。



第84図　１区３号竪穴状遺構



第85図　１区３号竪穴状遺構の出土遺物

３号竪穴状遺構（第84・85図　PL.14・35）

位置　X＝261 ～ 265、Y＝－164 ～ 169

形状・規模　攪乱及び２号竪穴状遺構との重複のため不明である。平面形状は不整隅丸長方形と想定される。検出された北西壁の長さ3.88m、南西壁の長さ3.17m、深さ15㎝である。

主軸方向　N－51°－E

重複　２号竪穴状遺構、30・31号土坑、132号ピットと重複するが、土層からは新旧関係不明である。

埋没土　埋没土は黄褐色粒・塊、焼土粒、白色軽石を含む黒褐色土であり、人為的埋没と考えられる。

内部施設　土坑２基、ピット１基が検出された。１号土坑は北西壁際から検出され、平面形状は不整隅丸方形で、規模は長径110㎝、短径84㎝、深さ24㎝である。人為的な埋没と考えられる。２号土坑の平面形状は不定形で、規模は長径54㎝、短径53㎝、深さ14㎝である。人為的な埋没と考えられる。１号ピットは北西壁際中央部から検出され、平面形状は円形で、規模は長径31㎝、短径28㎝、深さ41㎝である。人為的な埋没と考えられる。これらは重複遺構であった可能性も考えられる。

遺物出土状態　底面から第85図３、埋没土から第85図１・２が出土する。非掲載遺物は土師器片27ｇである。

所見　出土遺物から時期は８世紀第１四半期と考えられる。

（３）掘立柱建物

１区から検出された掘立柱建物は５棟である。１区北部に位置する４・５号掘立柱建物は、調査区外となるため南側のみの検出である。中央部から検出された２・３号掘立柱建物、北部から検出された４・５号掘立柱建物は同規模であり２棟が隣接した位置にある。出土遺物がほとんどなく詳細な時期を特定することができない。

１号掘立柱建物（第86図　PL.13・14・35）

位置　X＝216 ～ 224、Y＝－129 ～ 138

重複　なし。

主軸方向　N－69°－E

規模・形態　桁行４間、梁行２間の東西棟。いわゆる側柱建物で桁行6.11m、梁行5.49mである。柱穴の計測値等は第20表のとおりであるが、柱穴の規模は26 ～ 42㎝の円形及び楕円形で、柱痕は直径10 ～ 15㎝、Ｐ２・４・６・Ｐ８～ 12で確認できた。柱間は桁行が５尺等間、梁間が９尺と推定される。

出土遺物　柱穴Ｐ12底部から出土した木片（第86図１）は、加工の痕跡は認められないが柱材の可能性がある。

所見　隣接地から本遺構と主軸方向が近似する３号溝が検出される。３号溝を挟むように同じく主軸方向が類似する１・２号柵列が検出されている。南北を軸とし、調査区外でこれら柵列と直交する可能性がある３号柵列も検出されている。１号掘立柱建物と、溝及び柵列は有機的に機能している可能性も考えられる。木片以外に出土遺物はなく詳細な時期は特定できない。

２号掘立柱建物（第87図　PL.13）

位置　X＝242 ～ 247、Y＝－163 ～ 168

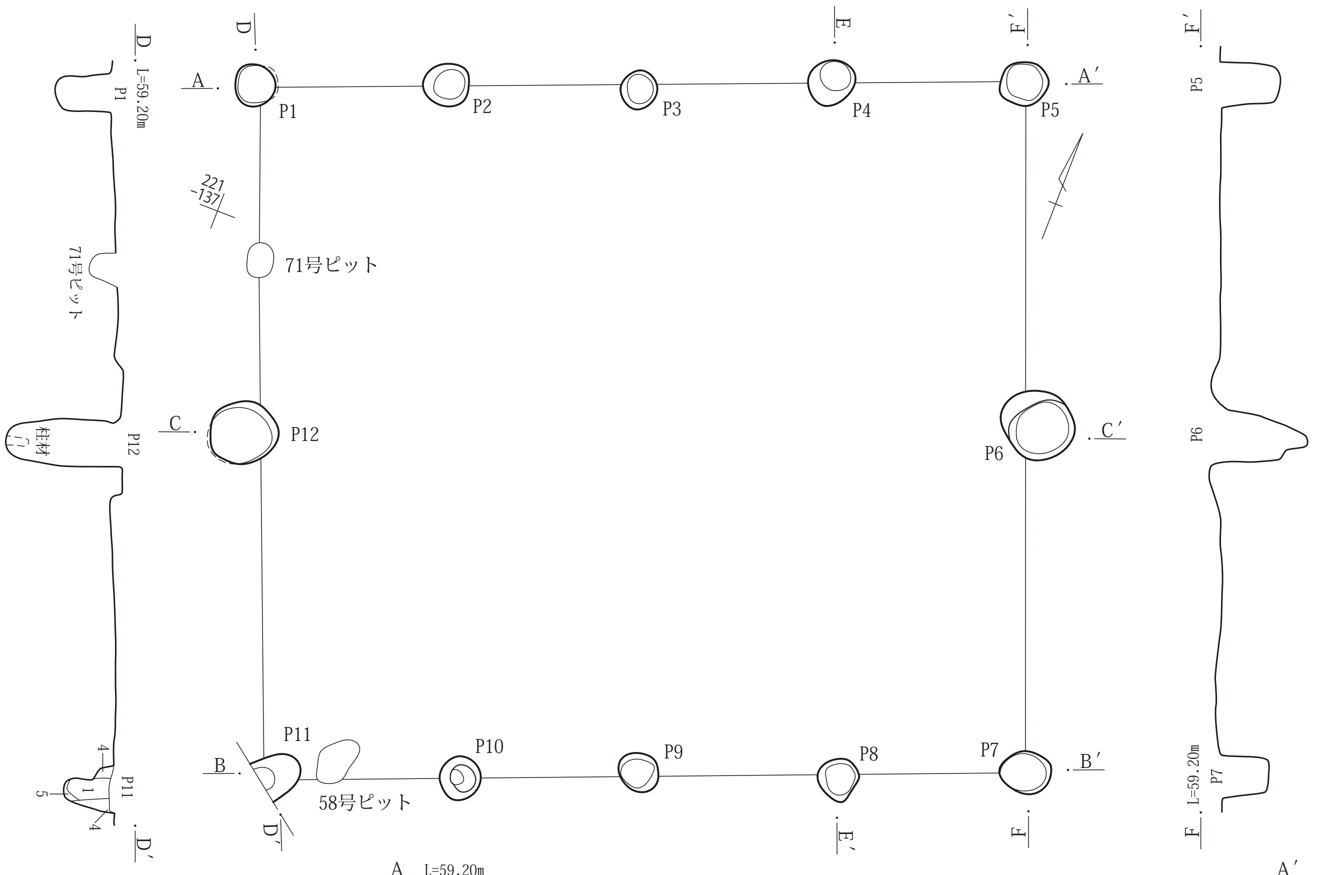
重複　なし。

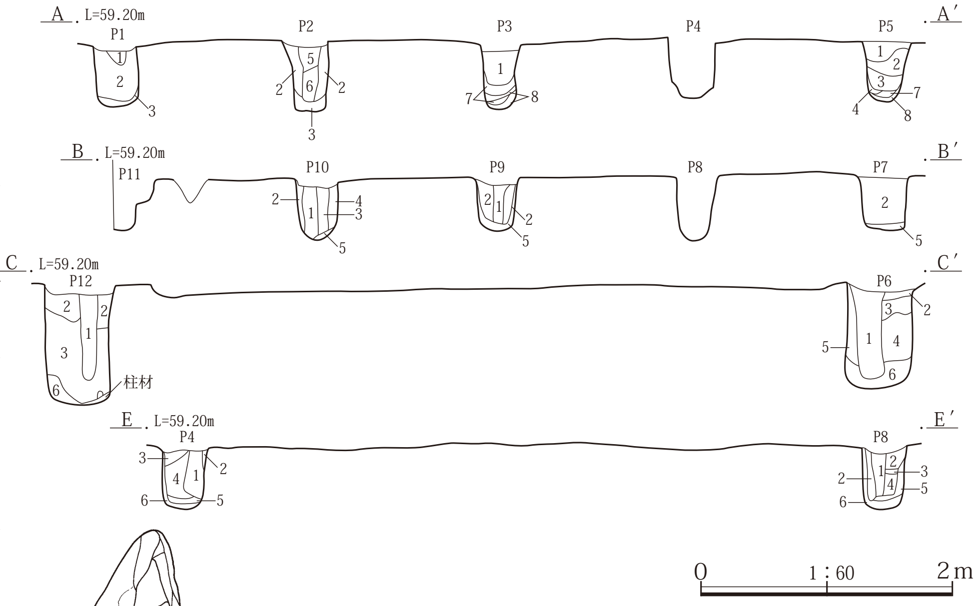
主軸方向　N－S

規模・形態　南北２間、東西２間、北辺4.68m、東辺4.58mの総柱建物である。柱穴の計測値等は第21表のとおりであるが、柱穴の規模は23 ～ 33㎝の円形で、柱痕は直径12 ～ 16㎝、すべての柱穴において確認できた。柱間は8尺を基準としたと推定され、P1の位置がやや内側に入っており、P1-P2とP1-P8の寸法が短くなっている。

出土遺物　柱穴埋没土から８世紀以前の土師器片が出土しているが、小破片のため掲載していない。

所見　東側から３号掘立柱建物が検出され、建物の規模、主軸方向、埋没土が類似する。何らかの関係性があるこ



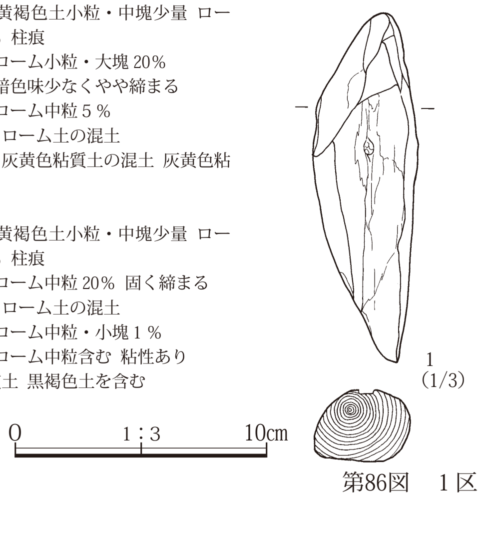


A-A'
1 黒褐色土 黄褐色土小粒・中塊少量
2 黒褐色土 ローム小塊 20％
3 灰黄色粘質土 黒褐色土を含む
4 黒褐色土 灰黄色粘質土塊 30％
5 黒褐色土 黄褐色土小粒・中塊少量 ローム小粒５％ 柱痕
6 黒褐色土 黄褐色土粒少量含む 柱痕
7 灰黄色粘質土 黒褐色土を含む
8 灰黄色粘質土 ５cm大の層状の黒褐色土含む

B-B'・D-D'
1 黒褐色土 黄褐色土小粒・中塊少量 ローム小粒５％ 柱痕
2 黒褐色土 ローム土を含む
3 黒褐色土 ローム小粒・小塊５％
4 黒褐色土 ローム中粒含む 粘性あり
5 灰黄色粘質土 黒褐色土を含む

C-C'
1 黒褐色土 黄褐色土小粒・中塊少量 ローム小粒５％ 柱痕
2 黒褐色土 ローム小粒・大塊 20％
3 黒褐色土 暗色味少なくやや締まる
4 黒褐色土 ローム中粒５％
5 黒褐色土とローム土の混土
6 黒褐色土と灰黄色粘質土の混土 灰黄色粘質土主体

E-E'
1 黒褐色土 黄褐色土小粒・中塊少量 ローム小粒５％ 柱痕
2 黒褐色土 ローム中粒 20％ 固く締まる
3 黒褐色度とローム土の混土
4 黒褐色土 ローム中粒・小塊１％
5 黒褐色土 ローム中粒含む 粘性あり
6 灰黄色粘質土 黒褐色土を含む

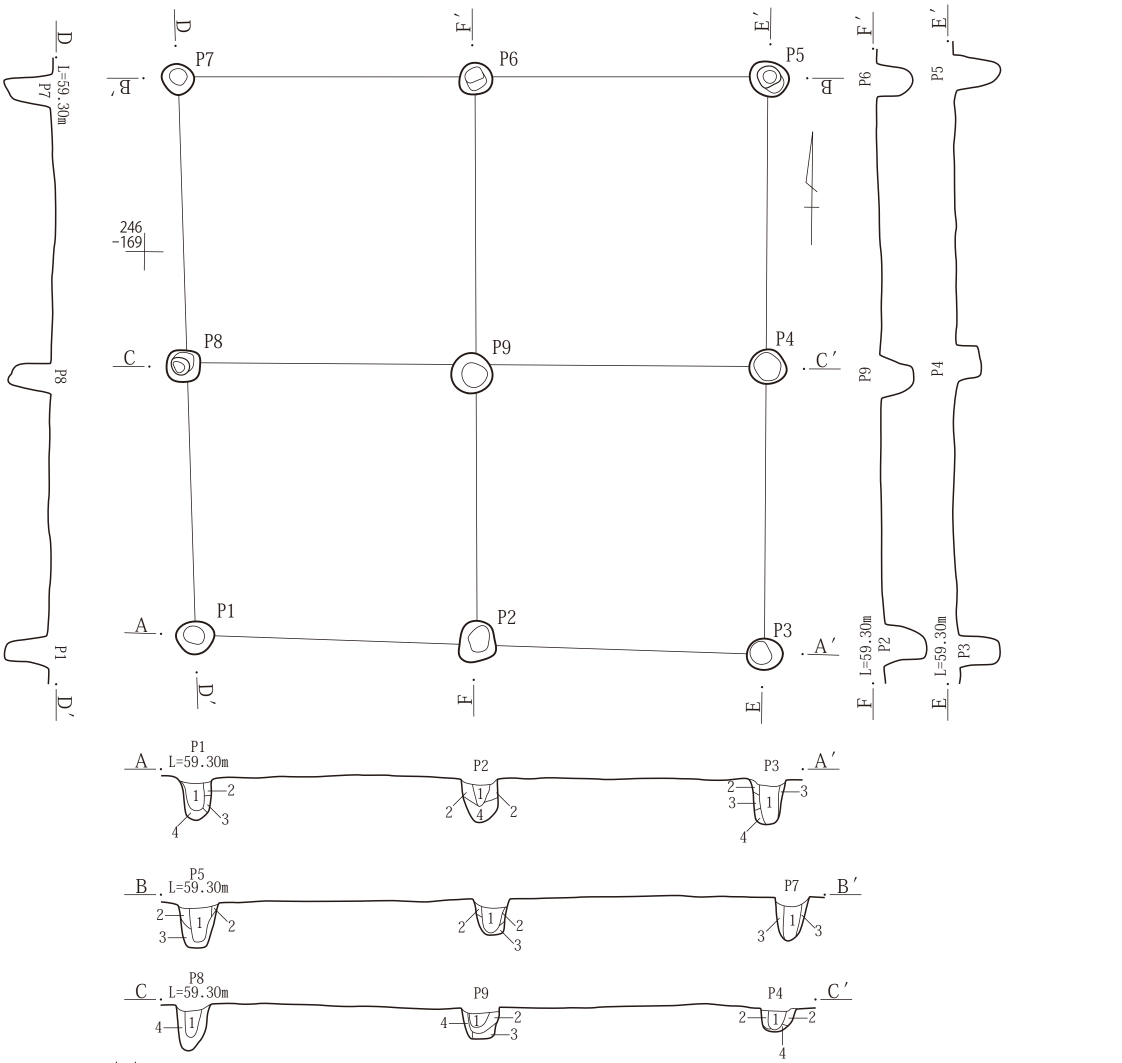


1
(1/3)

第20表　天良七堂遺跡１区１号掘立柱建物計測表

柱穴No.	規模（cm）			形状	面積33.47㎡
	長径	短径	深さ		柱間の寸法（m）
P 1	38	37	45	円形	P1-P2 1.52
P 2	36	29	50	楕円形	P2-P3 1.50
P 3	34	32	24	円形	P3-P4 1.57
P 4	42	32	44	楕円形	P4-P5 1.52
P 5	30	28	48	円形	P5-P6 2.83
P 6	33	27	75	円形	P6-P7 2.66
P 7	34	34	36	円形	P7-P8 1.48
P 8	28	26	50	円形	P8-P9 1.59
P 9	34	32	35	円形	P9-P10 1.47
P 10	28	28	40	円形	P10-P11 1.52
P 11	33	30	30	円形	P11-P12 2.72
P 12	32	30	90	円形	P12-P1 2.80

第86図　１区１号掘立柱建物と出土遺物



A-A'
1　黒色砂質土　柱痕
2　黒色土　褐色粘質土大粒３％
3　黒色土と褐色土の混土　やや締まる
4　褐色粘質土　黒色土を含む　固く締まる

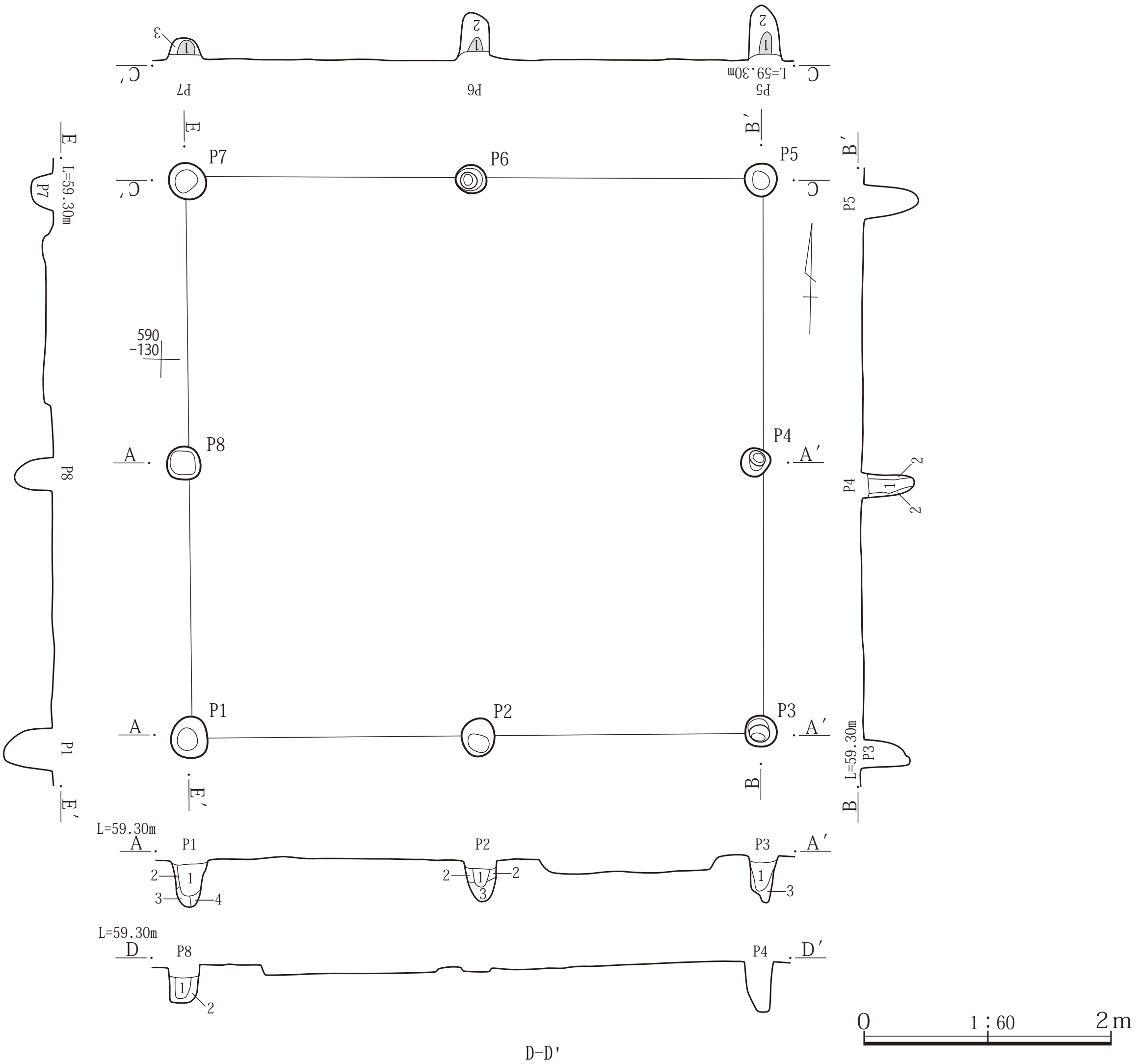
B-B'
1　黒色砂質土　柱痕
2　黒色土　褐色粘質土大粒３％
3　褐色粘質土　黒色土を含む　固く締まる

C-C'
1　黒色砂質土　柱痕
2　黒色土　褐色粘質土大粒３％
3　褐色粘質土　黒色土を少量含む　固く締まる
4　褐色粘質土　黒色土を含む　固く締まる

第87図　１区２号掘立柱建物

第 21 表　天良七堂遺跡１区２号掘立柱建物計測表

柱穴 No.	規模（cm）			形状	面積 20.90㎡
	長径	短径	深さ		柱間の寸法（m）
Ｐ１	31	26	25	円形	P1-P2 2.24
Ｐ２	33	28	30	楕円形	P2-P3 2.29 P2-P9 2.22
Ｐ３	28	25	30	円形	P3-P4 2.28
Ｐ４	30	28	17	円形	P4-P5 2.30 P4-P9 2.30
Ｐ５	32	28	37	円形	P5-P6 2.33
Ｐ６	26	25	27	円形	P6-P7 2.35 P9-P6 2.27
Ｐ７	25	23	40	円形	P7-P8 2.25
Ｐ８	27	25	28	隅丸方形	P8-P9 2.30 P8-P1 2.27
Ｐ９	33	32	26	円形	-



A-A'・B-B'
1　黒色土　やや砂質　柱痕
2　黒色土　褐色粘質土中粒５％
3　褐色粘質土　黒色土を含む　締まり強い
4　３層に類似　褐色粘質土小塊を含む
C-C'
1　黒色土　やや砂質　褐色土中粒・小塊１％　褐色粘質土中粒１％　柱痕
2　黒色土　褐色土中粒・小塊10％　やや締まる
3　褐色土　黒褐色土　褐色土小粒を含む

D-D'
1　黒色土　やや砂質　柱痕
2　黒色砂質土　褐色土中粒・中塊５％

第88図　１区３号掘立柱建物

第 22 表　天良七堂遺跡１区３号掘立柱建物計測表

柱穴 No.	規模（cm）			形状	面積 21.20㎡
	長径	短径	深さ		柱間の寸法（m）
P1	33	30	31	円形	P1-P2 2.35
P2	31	27	32	円形	P2-P3 2.30
P3	25	25	31	円形	P3-P4 2.20
P4	25	23	30	円形	P4-P5 2.28
P5	27	26	44	円形	P5-P6 2.35
P6	25	23	39	円形	P6-P7 2.32
P7	32	29	18	円形	P7-P8 2.32
P8	27	27	30	円形	P8-P1 2.24

とが考えられる。８世紀以前の出土遺物はあるが１点のみであり詳細な時期は特定できない。

３号掘立柱建物（第88図　PL.13）

位置　Ｘ＝242 ～ 247、Ｙ＝－157 ～ 161

重複　なし。

主軸方向　Ｎ－３°－Ｗ

規模・形態　南北２間、東西２間であり、北辺4.67m、東辺4.48mのいわゆる側柱建物である。建物中央部の柱穴は確認できなかった。柱穴の計測値等は第22表のとおりであるが、柱穴の規模は23 ～ 33cmの円形で、柱痕は直径12 ～ 16cm、すべての柱穴において確認できた。柱間は7.5尺を基準としているようであり各柱間が若干づつ異なる。

出土遺物　なし。

所見　２号掘立柱建物から約２m東側に位置し、建物の規模や主軸方向、埋没土が類似することから同時期の可能性がある。何らかの関係性が考えられる。出土遺物がなく詳細な時期は特定できない。

４号掘立柱建物（第89図　PL.13）

位置　Ｘ＝263 ～ 268、Ｙ＝－187 ～ 193

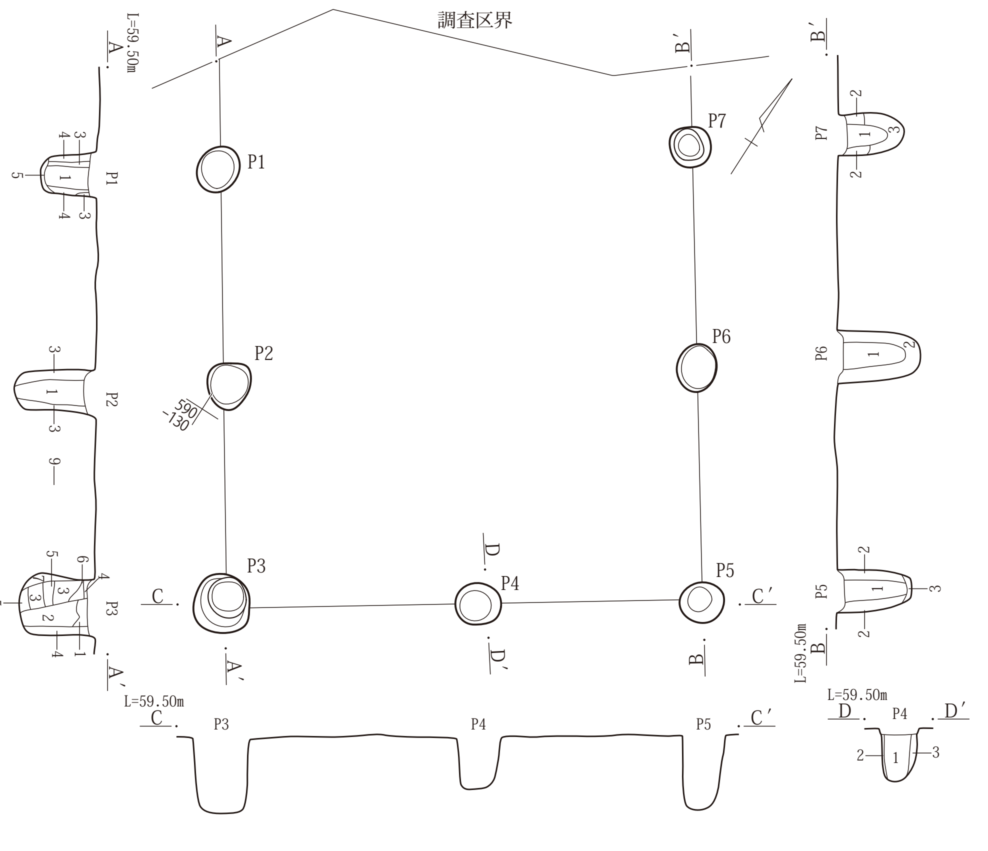
重複　なし。

主軸方向　Ｎ－33°－Ｗ

規模・形態　桁行２間以上、梁行２間のいわゆる側柱建物で調査区外に延びる建物である。柱穴の計測値等は第23表のとおりであるが、柱穴の規模は32 ～ 47cmの円形及び楕円形で、柱痕は直径17 ～ 21cmである。南辺の長さ3.81m、柱間は6尺等間を基準としたようであり、P3-P4間がやや長い。

出土遺物　なし。

所見　東側に隣接して５号掘立柱建物が検出された。主



A-A'
1　黒褐色土　白色粒１％　柱痕　粘性締まりあり
2　黒色土　白色粒１％　柱痕　粘性締まりあり
3　褐色粘質土　黒褐色土を含む　粘性締まり強い
4　黒褐色土　褐色粘質土中粒１％　粘性締まり弱い
5　褐色粘質土と黒色粘質土の混土　締まり強い
6　にぶい黄褐色土　固く締まる
7　暗褐色土　粘性締まりややあり

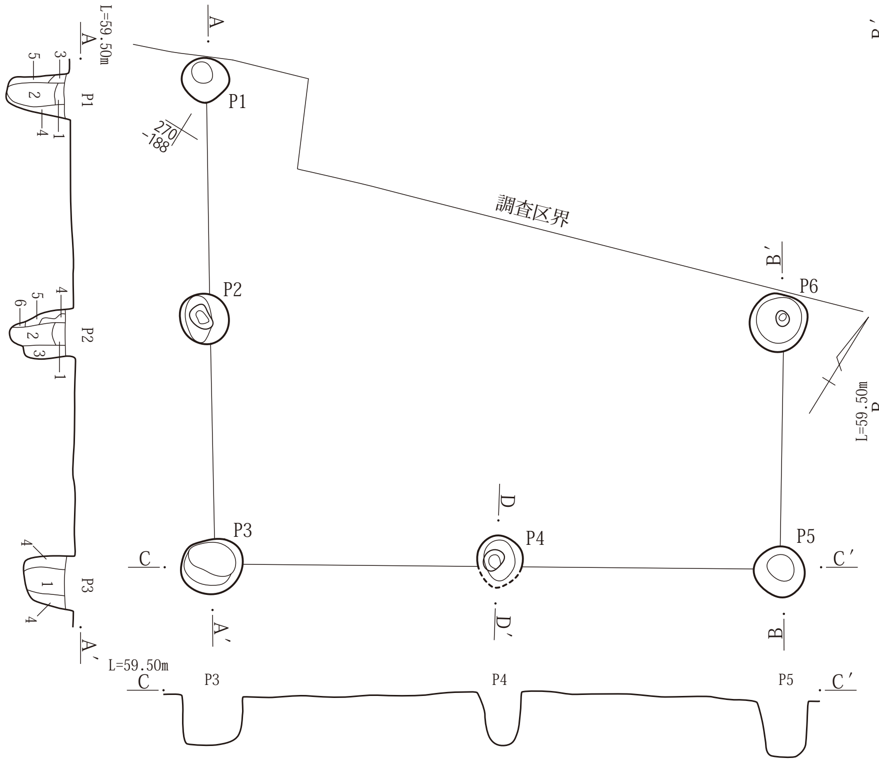
B-B'
1　黒褐色土　白色粒１％　柱痕　粘性締まりあり
2　黒褐色土　褐色粘質土中粒５％　やや締まる
3　褐色粘質土と黒褐色土の混土　固く締まる
4　黒色土　褐色粘質土小粒・小塊１％　やや締まる

D-D'
1　黒褐色土　白色粒１％　柱痕　粘性締まりあり
2　褐色粘質土　黒褐色土少量含む　固く締まる
3　黒褐色土　褐色粘質土中粒・小塊１％　粘性締まりやや弱い

第23表　天良七堂遺跡１区４号掘立柱建物計測表

柱穴No.	規模（cm）			形状	面積－㎡
	長径	短径	深さ		柱間の寸法（m）
P１	39	33	42	円形	P1-P2 1.70
P２	37	35	62	楕円形	P2-P3 1.79
P３	47	45	58	円形	P3-P4 2.04
P４	37	33	40	円形	P4-P5 1.77
P５	35	33	54	円形	P6-P7 1.84
P６	38	32	60	円形	P7-P8 1.76
P７	33	32	41	円形	―

第89図　１区４号掘立柱建物



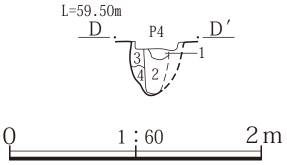
A-A'
1　黒褐色土　褐色土小粒７％　柱痕粘性締まりあり
2　黒褐色土　褐色土小粒１％　柱痕
3　褐色粘質土　黒褐色土を含む　固く締まる
4　黒褐色土　褐色土粒小粒２％　やや締まる
5　黒色土　褐色粘質土小塊５％　粘性あり締まり弱い
6　黒色土と褐色土の混土　粘性あり締まり弱い

B-B'
1　黒褐色土　褐色土小粒７％　柱痕粘性締まりあり
2　黒褐色土　褐色土小粒１％　柱痕
3　黒褐色土　締まりなし
4　黒褐色土　褐色粘質土小粒７％　粘性締まりややあり

D-D'
1　黒褐色土　褐色土小粒７％　柱痕粘性締まりあり
2　黒褐色土　褐色土小粒１％　柱痕
3　黒褐色土　褐色粘質土小粒・小塊３％　やや締まる
4　褐色粘質土　黒褐色土を含む　締まる

第24表　天良七堂遺跡１区５号掘立柱建物計測表

柱穴No.	規模（cm）			形状	面積－㎡
	長径	短径	深さ		柱間の寸法（m）
P 1	35	35	45	円形	P1-P2 1.90
P 2	42	39	45	円形	P2-P3 1.92
P 3	50	44	39	円形	P3-P4 2.37
P 4	42	37	40	円形	P4-P5 2.23
P 5	40	38	43	円形	P5-P6 1.95
P 6	46	44	50	円形	－



第90図　１区５号掘立柱建物

軸方向・規模等が類似しており、何らかの関係性があることが考えられる。出土遺物がなく詳細な時期は特定できない。

５号掘立柱建物（第90図）

位置　Ｘ＝267 ～ 271、Ｙ＝－182 ～ 188

重複　なし。

主軸方向　Ｎ－32°－Ｗ

規模・形態　桁行２間以上、梁行２間のいわゆる側柱建物で、調査区外に延びる建物である。柱穴の計測値等は第24表のとおりであるが、柱穴の規模は35 ～ 50㎝、柱痕は直径15 ～ 20㎝、すべての柱穴から確認できた。南辺の長さ4.60ｍ、柱間は西から7.9＋7.4尺でＰ３からＰ４よりＰ４からＰ５の方が短い。東辺の柱間は6.5尺、西辺の柱間は北から6.3＋6.4尺である。東辺及び西辺の柱間より南辺柱間が長い。

出土遺物　なし。

所見　西側に隣接して４号掘立柱建物が検出された。主軸方位・規模等が類似しており、何らかの関係性があることが考えられる。出土遺物がなく詳細な時期は特定できない。

（４）柵列

１区から検出された柵列は３条である。調査区南側からの検出で調査区外に延びていく。1・２号柵列はほぼ平行に走行し３号柵列と東側の調査区外で直交する可能性がある。出土遺物がほとんどなく詳細な時期を特定することができない。

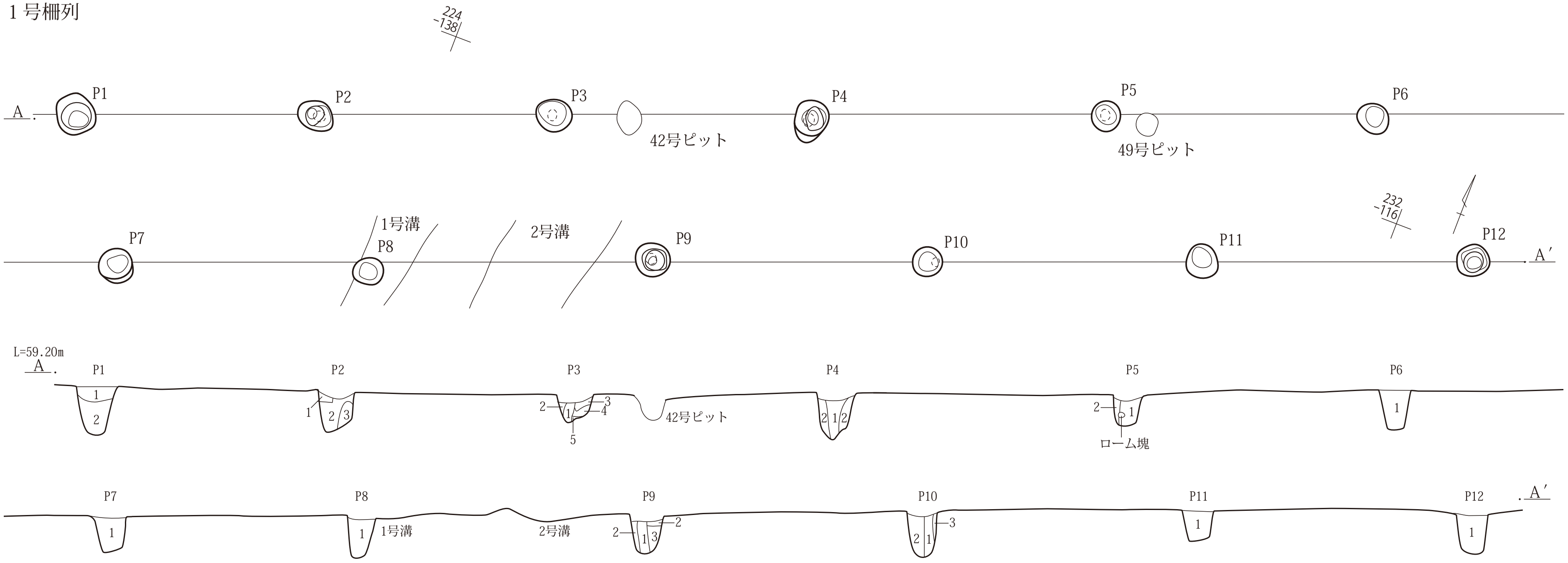
１号柵列（第91図　PL.13・14）

位置　Ｘ＝223 ～ 232、Ｙ＝－115 ～ 139

重複　1号柵列柱穴Ｐ８は１号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

規模・形態　調査区外の北東及び南西に延長すると想定される。柱穴は12基検出され、確認できた長さ27.92ｍである。柱穴の計測値等は第25表のとおりであるが、柱穴の規模は26 ～ 42㎝の円形及び楕円形で、柱痕は直径４～ 10㎝であり柱穴Ｐ３・４・９・10で確認できた。柱間は2.28 ～ 2.77ｍである。

1号柵列



P６、７、８
1　黒褐色砂質土　ローム土10%
P９
1　黒褐色砂質土　柱痕
2　黒褐色土　ローム中粒10%
3　黒褐色土　１層に類似　ローム小粒１％　締まりあり
P10
1　黒褐色砂質土　柱痕
2　ローム土と黒褐色土の混土　黄色味あり
3　黒褐色土　１層に類似　ローム小粒１％　締まりあり
P11、12
1　黒褐色砂質土

P１
1　黒褐色砂質土
2　暗褐色砂質土　ローム土30%　粘性ややあり
P２
1　暗褐色土　ローム土を含む　やや締まる
2　暗褐色砂質土　均質　やや締まる
3　黒褐色土　ローム中粒５％
P３
1　黒褐色砂質土　ローム小粒少量含む　柱痕
2　黒褐色土　ローム粒　固く締まる
3　黒褐色土　ローム小塊40%
4　黒褐色土　ローム小粒３％
5　黒褐色土とローム土の混土　黄色味あり
P４
1　黒褐色砂質土　柱痕
2　黒褐色土　１層より黒色味あり　ローム小粒・小塊５％
P５
1　黒褐色砂質土　Ｐ１の1層と同質
2　黒褐色土　ローム小粒40%

第25表　天良七堂遺跡１区１号柵列計測表

柱穴No.	規模（cm）			形状	面積－㎡
	長径	短径	深さ		柱間の寸法（m）
P 1	38	37	45	円形	P1-P2 2.44
P 2	36	29	40	楕円形	P2-P3 2.28
P 3	34	32	24	円形	P3-P4 2.46
P 4	42	32	44	楕円形	P4-P5 2.77
P 5	30	28	32	円形	P5-P6 2.57
P 6	33	27	35	円形	P6-P7 2.50
P 7	34	34	36	円形	P7-P8 2.40
P 8	28	26	40	円形	P8-P9 2.72
P 9	34	32	35	円形	P9-P10 2.60
P 10	28	28	40	円形	P10-P11 2.60
P 11	33	30	30	円形	P11-P12 2.60
P 12	32	30	36	円形	

0　1：60　2ｍ

第91図　１区１号柵列

出土遺物　柱穴の埋没土から非掲載遺物であるが土師器片、須恵器片が出土する。

所見　１号柵列から南側に隣接して１号掘立柱建物が検出され、北側には走行方向が類似する３号溝が検出されている。それぞれ主軸方位が類似しており、何らかの関係性が想定される。出土遺物が少なく詳細な時期は不明。

２号柵列(第92図　PL.13・14)

位置　X＝226 ～ 236、Y＝－120 ～ 148

重複　２号柵列柱穴Ｐ１・２は５号溝、柱穴Ｐ８は４号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

規模・形態　調査区外の北東及び南西に延長すると想定される。柱穴は12基検出され、確認できた長さ27.42mである。柱穴の計測値等は第26表のとおりであるが、規模は12 ～ 42cmの円形、楕円形、不定形となり柱痕は確認できなかった。柱間は1.80 ～ 4.60mと一定せず柱穴の通りもよくない。Ｐ10からＰ11の間は６号土坑で遺失した可能性がある。

出土遺物　なし。

所見　２号柵列の南側には走行方向が類似する３号溝、１号柵列、１号掘立柱建物が検出されている。それぞれ主軸方位が類似しており、何らかの関係性が想定される。出土遺物がなく詳細な時期は不明。

３号柵列(第92図　PL.14・35)

位置　X＝215 ～ 230、Y＝－104 ～ 110

重複　３号柵列Ｐ５・６・７・８が１号竪穴住居と重複し埋没土の確認状況から３号柵列が新しい。

規模・形状　調査区外の北西及び南東に延長すると想定される。柱穴は８基検出され、確認できた長さ16.17mである。柱間の寸法は第27表のとおりであるが、柱穴の規模は径14 ～ 30cmの楕円形及び不定形となり柱痕は確認できなかった。柱間は1.30 ～ 2.67mでＰ１からＰ２が短く、Ｐ６とＰ７は軸線に乗らない。

出土遺物　なし。

所見　柵列の形状や埋没土は２号柵列と類似する。それぞれ調査区外に延長すると、区外で直交する可能性が考えられる。出土遺物はなく詳細な時期は不明。

(５)土坑・ピット

１区から検出された土坑は土坑26基、ピット126基である。埋没土に一定の特徴が認められるものについて取り上げる。埋没状況については文中に記し、記述がないものについては自然埋没土と考える。なお、各遺構の形状や計測値については第30表の計測表を参照されたい。

３号土坑(第93図　PL.14・35)

平面形状は長方形を呈し、断面形状は浅い方形を呈する。埋没土は、褐色土粒を少量含む暗褐色土であり、人為的な埋没土と考えられる。遺物は第93図３坑‐１が出土したが混入と考えられる。時期は不明である。

４号土坑(第93図)

平面形状は楕円形を呈し、断面形状は浅い方形を呈する。４号土坑埋没土を1号溝が切る。時期は不明である。

６号土坑(第93図)

平面形状は長方形を呈し、断面形状は浅い方形を呈する。４号溝と重複するが新旧関係は不明である。非掲載遺物であるが埋没土から中世の焙烙１点が出土する。出土遺物から時期は中世以降と考えられる。

７号土坑(第93図　PL.35)

平面形状は長方形を呈し、断面形状は浅い方形を呈する。４号竪穴住居と重複し７号土坑の方が新しい。埋没土は、ローム大塊を多量に含む黒褐色土であり、人為的な埋没土と考えられる。南壁際の底面から第93図７坑‐１が出土する。非掲載遺物は土師器片82ｇ、須恵器片６ｇである。出土遺物から時期は古墳時代６世紀前半と考えられる。

８号土坑(第93図)

平面形状は方形を呈し、断面形状は浅い方形を呈する。非掲載遺物は土師器片20ｇが出土する。時期は不明である。

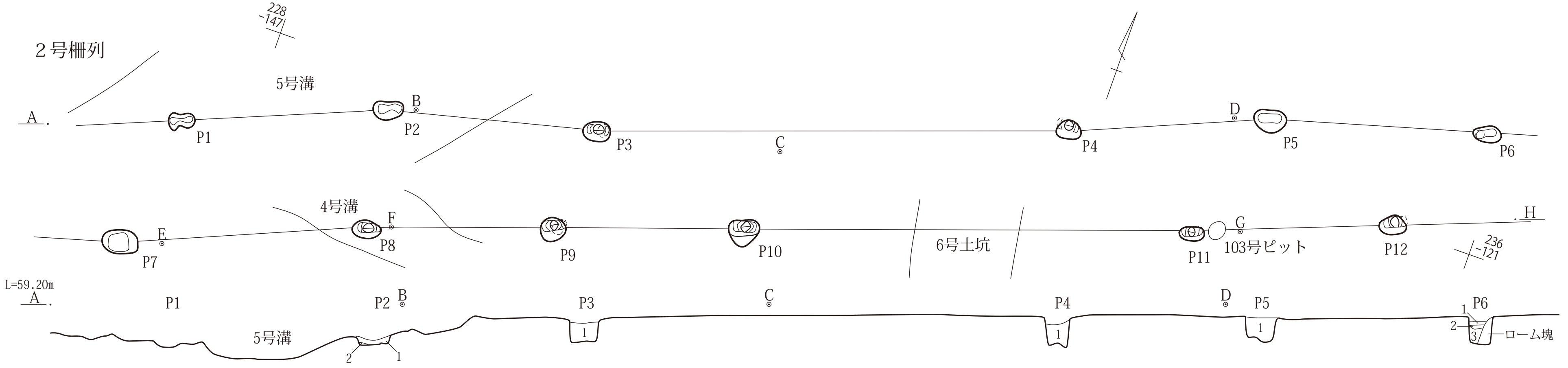
９号土坑(第93図　PL.14)

平面形状は不整長円形を呈する。６号溝と重複し、９号土坑が切る。埋没土は、ローム塊を多量に含む黒色土及び黒褐色土であり、人為的埋土と考えられる。６号溝との重複から時期は10世紀以降と考えられる。

29号土坑(第93図)

西半部を攪乱によって遺失しているため平面形状は不明である。12号竪穴住居と重複し、29号土坑が住居北壁を切る。埋没土から第93図29土‐１が出土し、非掲載遺物は土師器片40ｇである。出土遺物から時期は８世紀以降と考えられる。

２号柵列

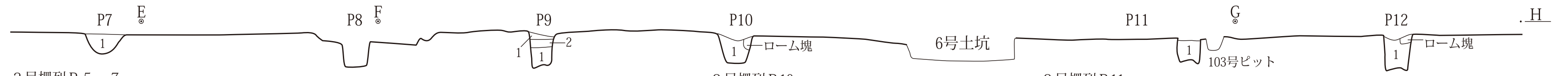


２号柵列Ｐ２
1　黒褐色砂質土　ローム小粒１％　やや締まる
2　黒褐色砂質土　橙色土塊を含む

２号柵列Ｐ３
1　黒褐色砂質土　ローム中粒１％　やや締まる

２号柵列Ｐ４
1　黒褐色砂質土　ローム小粒・大塊５％　やや締まる

２号柵列Ｐ６
1　黒褐色砂質土　やや締まる　ローム小粒１％　やや締まる　やや黄色味あり
2　黒褐色砂質土　均一
3　黒褐色砂質土　ローム小粒１％　やや締まる



２号柵列Ｐ５、７
1　黒褐色砂質土　ローム土10%　締まりややあり

２号柵列Ｐ９
1　黒褐色砂質土　ローム小粒１％　やや締まる
2　黒褐色砂質土　固く締まる

２号柵列Ｐ10
1　黒褐色砂質土　ローム小粒・大塊５％　やや締まる

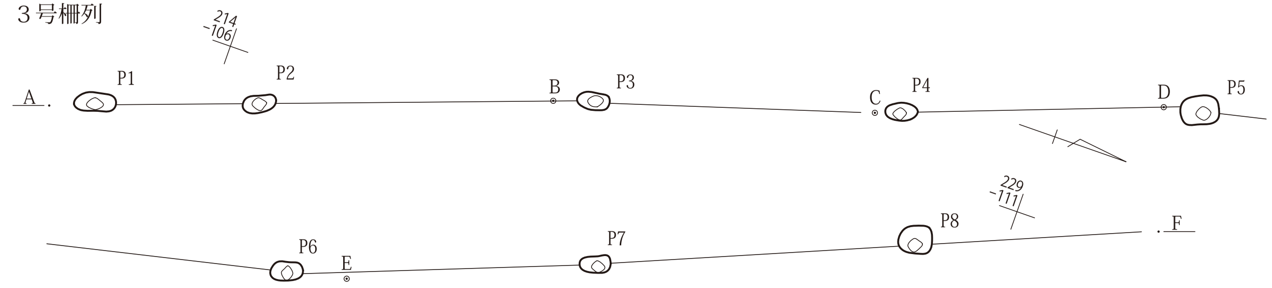
２号柵列Ｐ11
1　黒褐色砂質土　ローム小粒１％　やや締まる

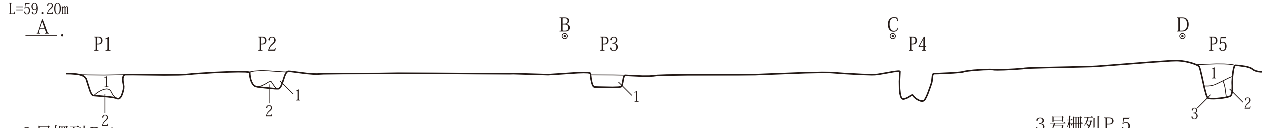
２号柵列Ｐ12
1　黒褐色砂質土　ローム小粒１％　ローム大塊５％　やや締まる

第26表　天良七堂遺跡１区２号柵列計測表

柱穴No.	規模（cm） 長径	短径	深さ	形状	面積－㎡ 柱間の寸法（m）
Ｐ１	26	12	8	不定形	P1-P2 2.02
Ｐ２	30	18	9	不定形	P2-P3 2.04
Ｐ３	27	19	26	楕円形	P3-P4 4.60
Ｐ４	25	18	32	不定形	P4-P5 1.96
Ｐ５	32	22	26	不定形	P5-P6 2.14
Ｐ６	28	17	29	楕円形	P6-P7 2.20
Ｐ７	36	24	19	楕円形	P7-P8 2.42
Ｐ８	28	18	26	楕円形	P8-P9 1.80
Ｐ９	24	24	33	円形	P9-P10 1.88
Ｐ10	30	26	30	不定形	P10-P11 4.38
Ｐ11	26	14	25	楕円形	P11-P12 1.98
Ｐ12	26	18	30	不定形	

３号柵列



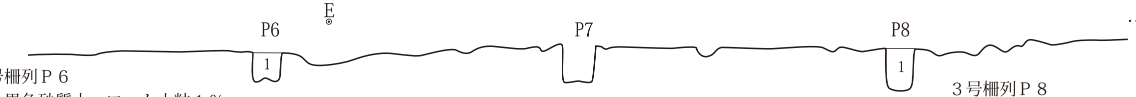


３号柵列Ｐ１
1　黒色砂質土　ローム小粒１％　粘性ややあり
2　黄褐色粘質土　赤褐色小粒１％

３号柵列Ｐ２
1　黒色砂質土　ローム小粒１％　粘性ややあり
2　黄褐色粘質土　赤褐色小粒１％

３号柵列Ｐ３
1　黒色砂質土　ローム小粒小塊１％　赤褐色土粒僅かに含む　粘性ややあり

３号柵列Ｐ５
1　黒色土　ローム小塊少量含む
2　黒色土　ローム小塊少量含む
3　黒褐色土　２～５㎝大のローム塊多量に含む



３号柵列Ｐ６
1　黒色砂質土　ローム小粒１％　粘性ややあり

３号柵列Ｐ８
1　黒褐色土　黄褐色極小粒を含む

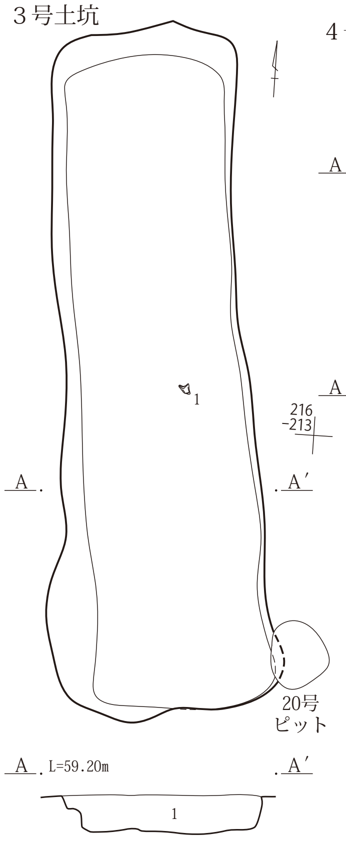
第92図　１区２・３号柵列

第27表　天良七堂遺跡１区３号柵列計測表

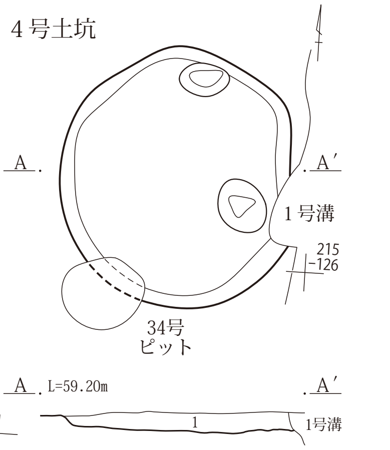
柱穴No.	規模（cm） 長径	短径	深さ	形状	面積－㎡ 柱間の寸法（m）
Ｐ１	34	15	18	不定形	P1-P2 1.30
Ｐ２	26	15	14	不定形	P2-P3 2.67
Ｐ３	28	14	11	不定形	P3-P4 2.44
Ｐ４	26	15	21	楕円形	P4-P5 2.38
Ｐ５	30	23	28	不定形	P5-P6 2.36
Ｐ６	26	16	25	不定形	P6-P7 2.45
Ｐ７	26	14	26	不定形	P7-P8 2.57
Ｐ８	27	22	32	不定形	

0　1：60　2ｍ

３号土坑



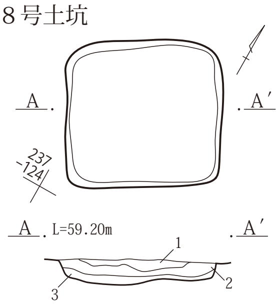
４号土坑



３号土坑
1　暗褐色土　褐色土小粒少量含む　粘性締まりややあり

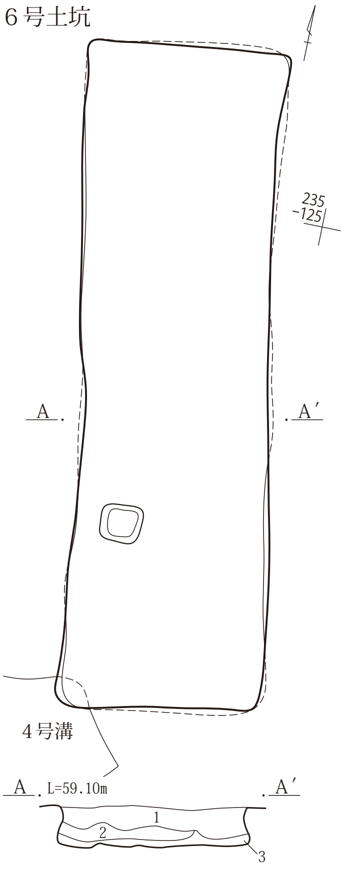
４号土坑
1　暗褐色土　褐色土小粒含む　粘性締まりややあり

８号土坑

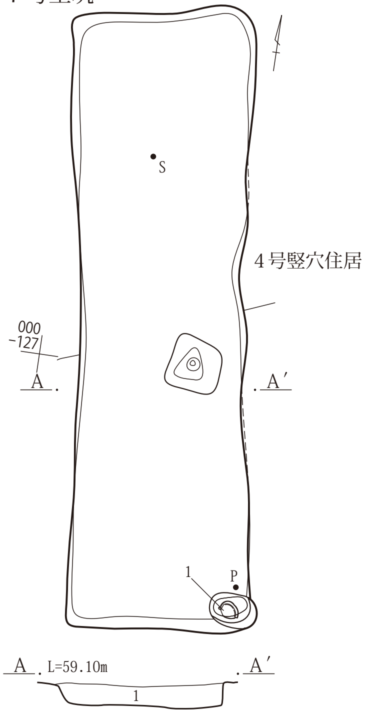


８号土坑
1　黒色土　ローム小塊少量含む
2　黒褐色土　１～３cm大のローム塊を含む
3　黒褐色土　ローム塊多量に含む　淡い色調　粘性あり

６号土坑



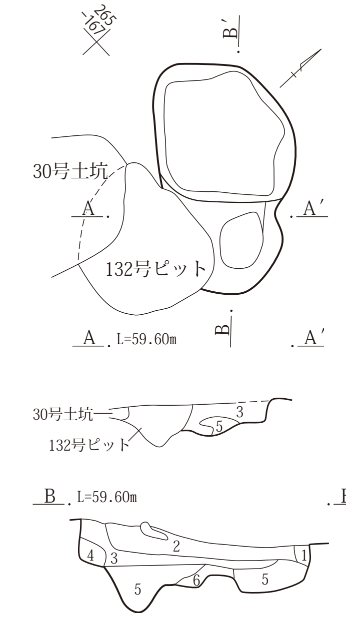
７号土坑



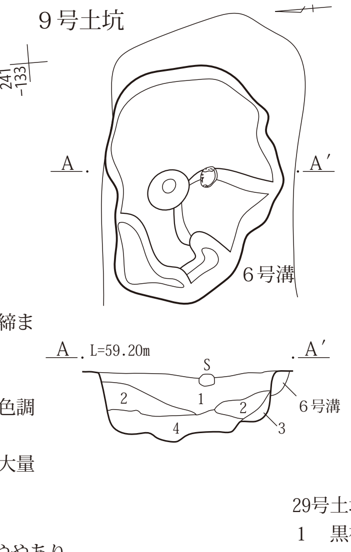
７号土坑
1　黒褐色土　２～７cm大のローム塊多量に含む　粘性締まりなし

６号土坑
1　黒褐色土　１～５cm大のローム塊多量に含む
2　黒褐色土　１cm大のローム塊と10cm大の粘土塊を含む
3　黒褐色土　粘性の強い黒褐色土　ローム小塊多量に含む

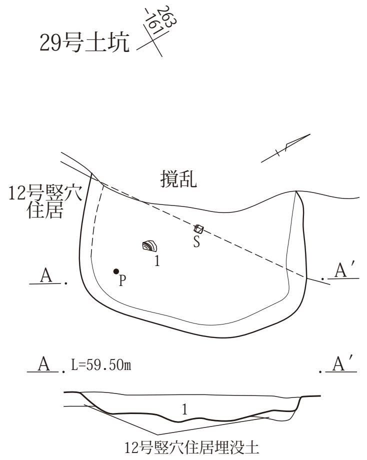
31号土坑



９号土坑



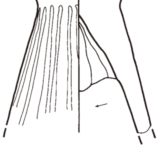
29号土坑

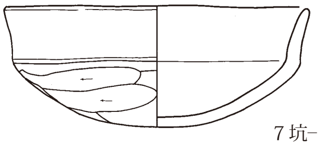


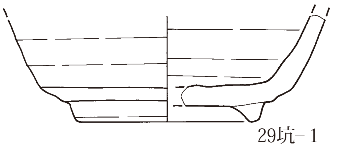
９号土坑
1　黒色土　ローム小塊少量含む　粘性締まりなし
2　黒色土　粘性締まりなし
3　黒褐色土　ローム小塊多量に含む　色調は明るい
4　黄褐色土　２～８cm大のローム塊を大量に含む

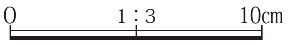
31号土坑
1　黒色土と褐色土の混土　粘性締まりややあり
2　黒色砂質土　白色軽石(角閃石含む)１％以下　焼土粒１％以下
3　黒褐色土　白色軽石　焼土粒１％
4　黒褐色土　ローム小粒２％　焼土粒１％　粘性ややあり
5　黒褐色土　３層よりやや暗色味あり　ローム小粒・小塊１％
6　黄褐色土と黒褐色土の混土

29号土坑
1　黒褐色砂質土　褐色土小粒・大塊３％　白色軽石２％以下　焼土小粒１％　固く締まる


３坑－１


７坑－１


29坑－１



第93図　１区３・４・６～９・29・31号土坑と３・７・29号土坑の出土遺物

31号土坑（第93図）

平面形状は不整長円形を呈する。２号竪穴状遺構、132号ピットと重複し31号土坑が２号竪穴状遺構を切る。31号土坑埋没土を132号ピットが切る。埋没土は焼土粒・白色軽石を含む黒色土及び黒褐色土であり、人為的な埋没土と考えられる。２号竪穴状遺構との重複から７世紀末～８世紀初頭以降と考えられる。

１号ピット（第94図）

平面形状は楕円形を呈する。埋没土は、黒褐色砂質土であり自然埋没土と考えられる。時期は不明である。

６号ピット（第94図）

平面形状は不整長円形を呈する。埋没土は黒褐色土砂質土であり、自然埋没土と考えられる。遺物は非掲載であるが土師器片が１点出土する。時期は不明である。

10号ピット（第94図）

平面形状は楕円形を呈する。埋没土は粘質土であり、自然埋没土と考えられる。非掲載遺物は土師器片が出土する。時期は不明である。

20号ピット（第94図）

平面形状は楕円形を呈する。３号土坑と重複し、20号ピット埋没土が３号土坑に切られる。埋没土はローム粒を含む黒褐色砂質土であり、人為的な埋没土と考えられる。時期は不明である。

32号ピット（第94図）

平面形状は楕円形を呈する。１号溝と重複するが、新旧関係は不明。埋没土はローム粒を含む砂質土であり、人為的な埋没が考えられる。時期は不明である。

33号ピット（第94図）

平面形状は不整長円形を呈する。１号溝と重複し33号ピットが切られる。埋没土はロームブロックを含んでおり、人為的な埋没と考えられる。時期は不明である。

34号ピット（第94図）

平面形状は不整円形を呈する。４号土坑と重複し、埋没土の確認状況から34号ピットが古い。埋没土はローム粒を少量含む黒色砂質土であり、人為的な埋没土と考えられる。時期は不明である。

39号ピット（第94図）

平面形状は楕円形を呈する。埋没土はロームブロックを含んでおり、人為的な埋没と考えられる。時期は不明である。

43号ピット（第94図）

平面形状は楕円形を呈する。埋没土は、ローム土及び焼土を含む黒褐色砂質土であり、人為的な埋没土と考えられる。非掲載遺物は土師器片77ｇである。時期は不明である。

57号ピット（第94図）

平面形状は楕円形を呈する。埋没土はロームブロックを含む黒褐色砂質土であり人為的な埋没土と考えられる。時期は不明である。

64号ピット（第94図）

平面形状は楕円形を呈するが、底部に僅かな窪みがある。埋没土はローム土を含む黒褐色砂質土、褐灰色土であり人為的な埋没土と考えられる。時期は不明である。

68号ピット（第94図）

平面形状は不整楕円形を呈する。６号溝と重複するが新旧関係は不明である。埋没土はローム土を少量含む黒褐色砂質土であり人為的な埋没土と考えられる。時期は不明である。

83号ピット（第94図）

平面形状は円形を呈する。埋没土はローム粒を含む暗褐色土とローム土の混土であり人為的な埋没土と考えられ、１層は柱痕の可能性があるが、周囲に掘立柱建物を想定する柱穴はない。時期は不明である。

107号ピット（第94図）

平面形状は不整楕円形を呈する。埋没土は褐色土粒を僅かに含む黒褐色土を主体とし、上位は白色軽石を含む黒褐色土、黒褐色及び褐色粘質土の混土であり、人為的な埋没土と考えられる。時期は不明である。

108号ピット（第94図）

平面形状は楕円形を呈する。埋没土は黒褐色土及び黒色土が縞状に堆積し、人為的な埋没土と考えられる。時期は不明である。

110号ピット（第94図　PL.14）

平面形状は楕円形を呈する。埋没土はにぶい黄褐色土粒を含む黒褐色土であり、人為的な埋没土と考えられる。１層は柱痕の可能性があるが、周囲に掘立柱建物を想定する柱穴はない。埋没土から高杯（第95図110ピット１）が出土する。出土遺物から時期は５世紀代と考えられる。

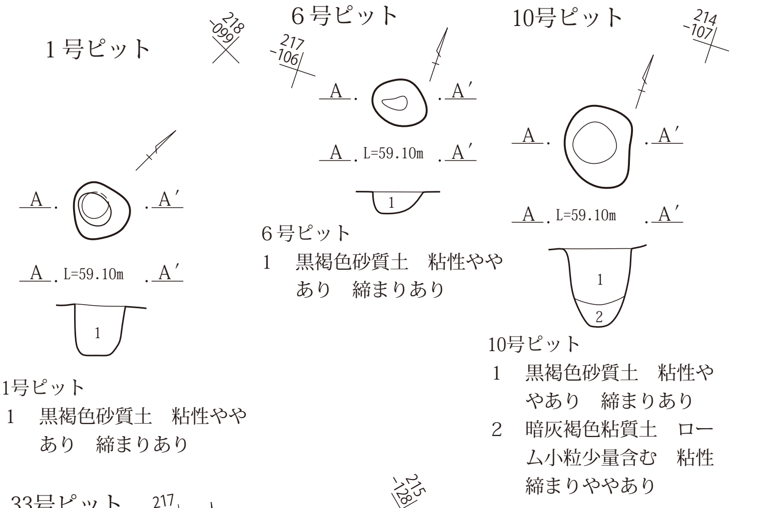
111号ピット（第95図）

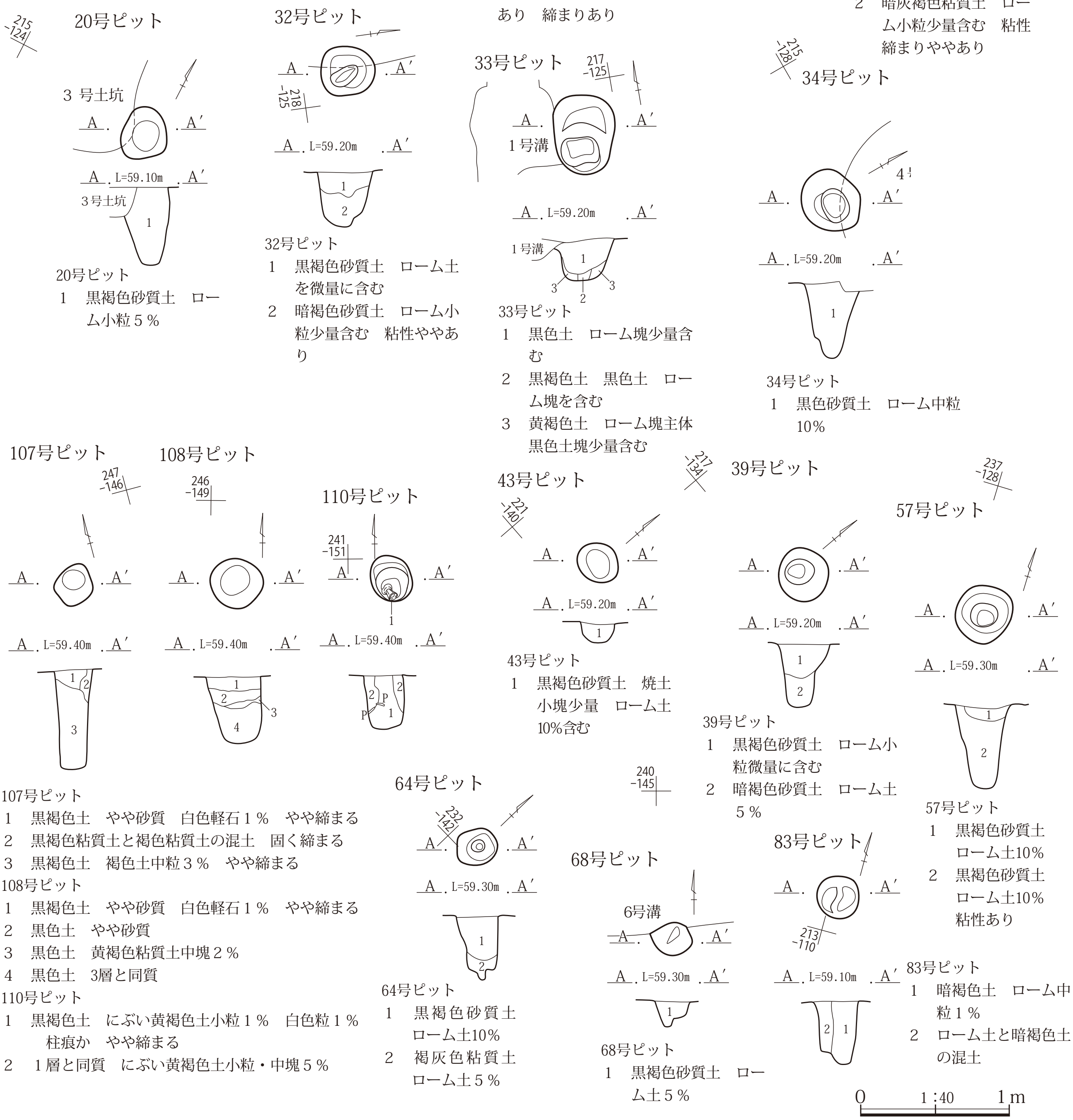
平面形状は不整楕円形を呈する。埋没土は、にぶい黄

褐色土粒や白色粒を僅かに含む黒褐色土であり、人為的埋没と考えられる。時期は不明である。

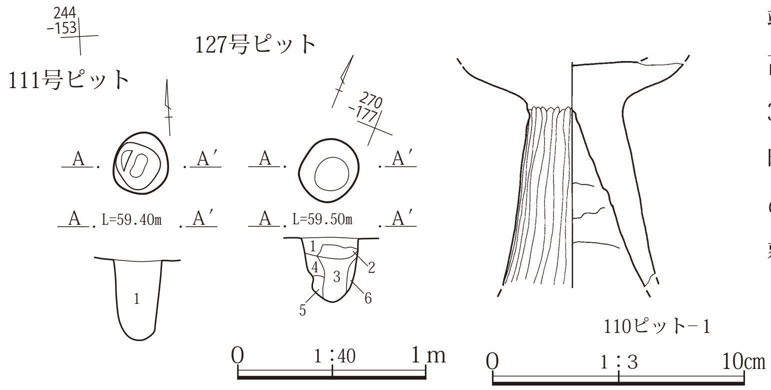
127号ピット（第95図）

平面形状は不整楕円形を呈する。埋没土は黒褐色土及び褐色粘質土であり、人為的な埋没土と考えられる。２・３層は柱痕の可能性があるが、周囲に掘立柱建物を想定する柱穴はない。時期は不明である。





第94図　１区１・６・10・20・32・33・34・39・43・57・64・68・83・107・108・110号ピット



111号ピット
1　黒褐色土　やや砂質　黄褐色土中粒・中塊２％　白色軽石１％　やや締まる
127号ピット
1　黒褐色土　やや砂質　黄褐色土中粒・小塊２％　白色軽石１％　褐色中粒１％　やや締まる
2　褐色土　粘性ややあり固く締まる
3　黒色土　白色粒１％　柱痕か　やや締まる
4　黒褐色土　褐色中粒・塊１％
5　褐色粘質土主体　黒褐色土を含む
6　褐色粘質土　粘性なし固く締まる

第95図　１区111・127号ピットと110号ピットの出土遺物

（6）溝

１区から検出された溝は９条である。溝は中央部に集中し、１・２・６・８号溝は南北及び東西方向を意識した構築である。

１号溝（第96図　PL.14）

Ｘ＝212 ～ 220、Ｙ＝－124 ～ 126に位置する。遺構確認状況から３号竪穴住居が古く、１号溝が４号土坑、33号ピットを切る。３号溝、１号柵列Ｐ８、32ピットとは新旧関係は不明。南北走行し東側80cm程に２号溝が並走する。溝底面標高は北端部で59.03m、南端部59.06mを測り比高差3cmで勾配率0.05％を測る。高低差はほとんど無いことから、通水目的の溝ではなく、区画溝の可能性がある。北側は緩やかな曲線を東側に向かい描く。発見長20.00mである。上面幅34 ～ 66cm、深さ3 ～ 9cmである。覆土は黄褐色土及び暗褐色土による自然堆積と考えられ、溝底面には水流の痕跡は認められていない。非掲載遺物には、土師器片39ｇ、中世の甕１点が出土している。時期は出土遺物及び埋没土から中世と考えられる。

２号溝（第96図　PL.14）

Ｘ＝224 ～ 220、Ｙ＝－122 ～ 124に位置する。3号竪穴住居、５号土坑、７号溝を切り、３号土坑に切られている。１号溝の北側部分に並走し東に向かい緩やかな曲線を描いている。溝底面の標高は北端部59.10m、南端部59.09mを測り比高差0.01mで勾配率0.12％である。高低差はほとんど認められない。長さ13.42m、上面幅35 ～ 84cm、深さ3 ～ 8cmである。覆土は黄褐色粒を含む暗褐色土による自然埋没と考えられる。溝底面には水流の痕跡は認められない。時期は、１号溝との走行方向と覆土の類似点から中世と考えられる。

３号溝（第97図　PL.14）

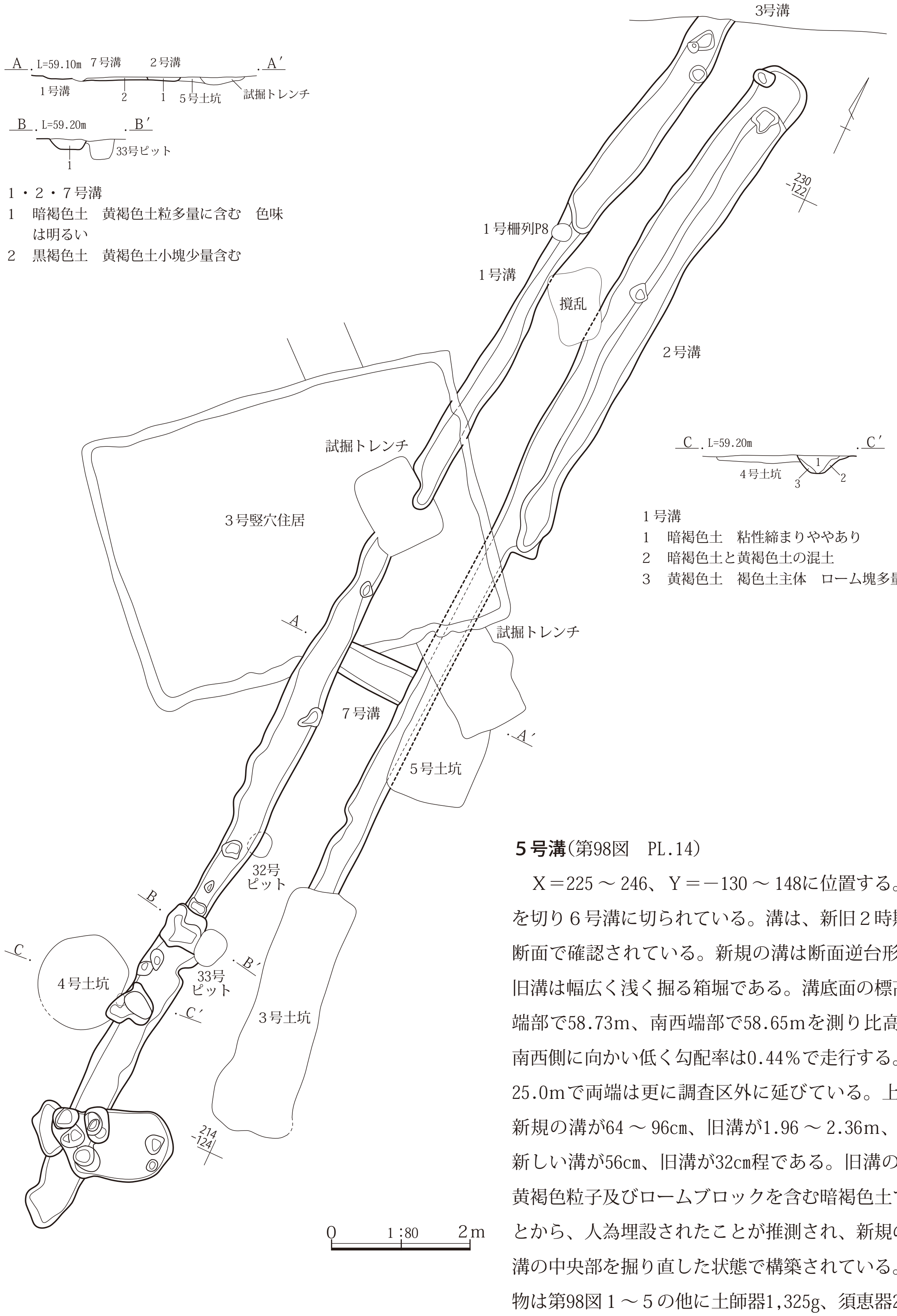
Ｘ＝224 ～ 234、Ｙ＝－117 ～ 157に位置する。５号溝に切られている。１・４号溝、32号土坑、52号ピットとの新旧関係は不明。走行は北東-南西方向に直線走行する。この走行方向は、隣接する１号柵列及び２号柵列と類似し、南側５mに位置する１号掘立柱建物の北辺にも近似している。溝底面の標高は北東端部58.15m、南西端部58.14mを測り比高差1cmで勾配率0.03％を測る。比高差はほとんど無くほぼ平坦である。覆土は溝底面直上に黄褐色粘質土の堆積が認められ、水の停滞があったことを示している。このことから、通水目的の溝ではなく、区画溝の可能性がある。

発見長31.08mで両端は更に調査区外に延びている。上面幅6 ～ 130cm、深さ92 ～ 102cmを測り１区内で最も深く掘られた溝である。覆土の上層は南西側からの堆積が顕著であることから、人為的埋設が示唆される。出土遺物は溝底面から礫、覆土内から縄文土器が出土しているだけである。

時期は、５号溝に切られることから９世紀以前であることが判断される。そして、走行方向が前述１号及び２号柵列、1号掘立柱建物北辺と類似することから、これらの遺構と関連することが推測される。

４号溝（第97図　PL.14）

Ｘ＝231 ～ 233、Ｙ＝－125 ～ 135に位置する。３号溝・２号柵列との新旧関係は不明である。走行は概ね東西走行し、３号溝の重複部分から東側では発見されていない。溝底面の標高は東端部で58.98m、西端部で59.04m、比高差６cmで勾配率0.62％を測り、東側に向けやや急な勾配を備えている。発見長9.66m、上面幅30 ～ 70cm、深さ4 ～ 11cmである。覆土は、ロームブロックを含む黒褐色土であることから、人為埋没の可能性が考慮される。また、黒褐色土はＡｓ-Ｂ軽石を含まぬ地山Ⅴa層土に対比されることから、当溝は、Ａｓ-Ｂ軽石降下以前の時期が判断される。



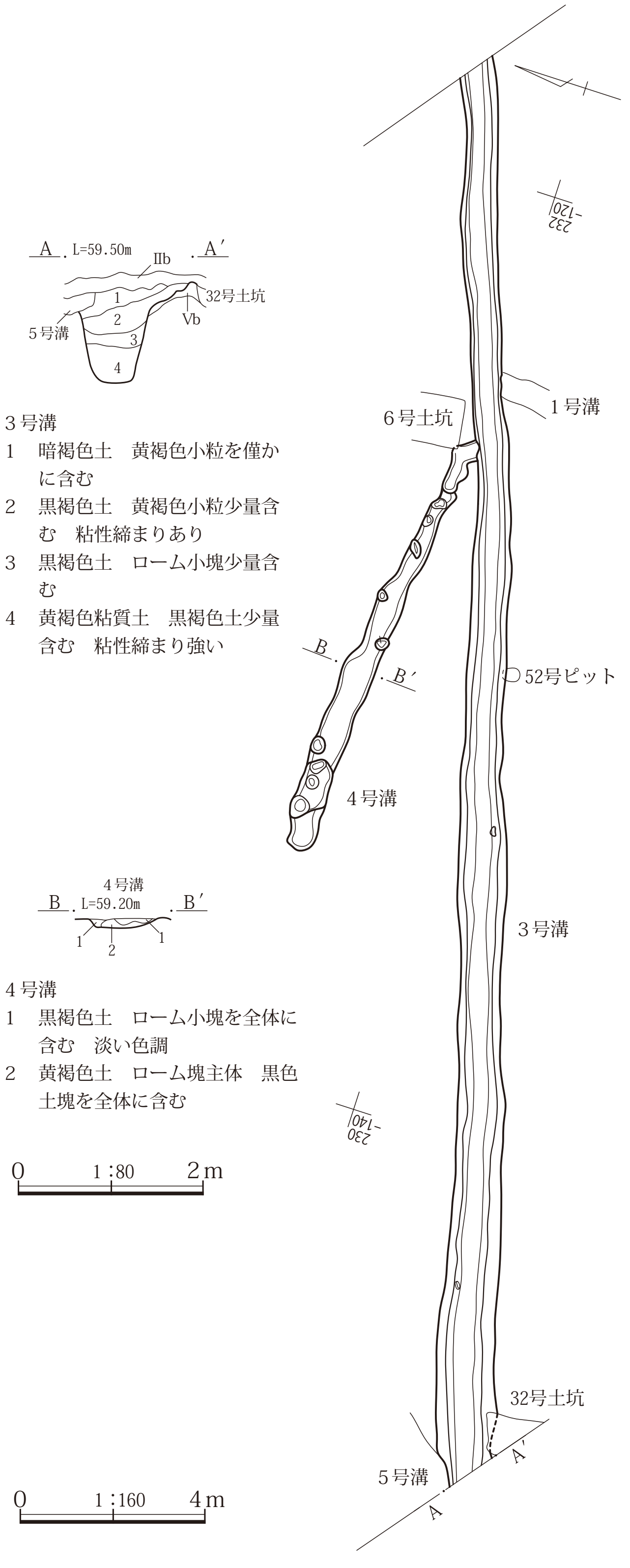
１・２・７号溝
1　暗褐色土　黄褐色土粒多量に含む　色味は明るい
2　黒褐色土　黄褐色土小塊少量含む

１号溝
1　暗褐色土　粘性締まりややあり
2　暗褐色土と黄褐色土の混土
3　黄褐色土　褐色土主体　ローム塊多量に含む

第96図　１区１・２・７号溝

５号溝（第98図　PL.14）

X＝225～246、Y＝−130～148に位置する。３号溝を切り６号溝に切られている。溝は、新旧２時期が土層断面で確認されている。新規の溝は断面逆台形を呈し、旧溝は幅広く浅く掘る箱堀である。溝底面の標高は北東端部で58.73m、南西端部で58.65mを測り比高差11㎝、南西側に向かい低く勾配率は0.44％で走行する。発見長25.0mで両端は更に調査区外に延びている。上面幅は、新規の溝が64～96㎝、旧溝が1.96～2.36m、深さは、新しい溝が56㎝、旧溝が32㎝程である。旧溝の覆土は、黄褐色粒子及びロームブロックを含む暗褐色土であることから、人為埋設されたことが推測され、新規の溝は旧溝の中央部を掘り直した状態で構築されている。出土遺物は第98図１～５の他に土師器1,325g、須恵器247gが出土している。溝の時期は出土遺物及び覆土の状態から９世紀代と考えられる。



第97図　１区３・４号溝

６号溝（第98図　PL.14）

Ｘ＝238 ～ 240、Ｙ＝－132 ～ 167に位置する。５号竪穴住居、10号土坑、５号溝を切り９号土坑に切られている。溝底面の標高は、東端部で59.03m、西端部で58.95mを測り比高差８㎝で勾配率は0.23％である。溝は東西に直線的に走行し西側は緩やかな曲線を描く。東端部は調査区内で立ち上がり、西側は更に調査区外に延びている。また、当溝には８号溝が接する状態で並走している。溝の勾配方向が西側に向かうものの、溝の東側が調査区内で立ち上がることから通水を目的とすることは否定されよう。恐らく、何らかの区画を目的とする溝と推定される。発見長34.48m、上面幅0.94 ～ 1.14m、深さ10 ～ 31㎝である。覆土は黄褐色小粒子を少量含む黒褐色でⅤa層に対比され、通水の痕跡は認められていない。埋没は自然堆積と考えられる。出土遺物は、古墳時代後期から10世紀に至る土師器片373ｇ、須恵器79ｇが出土している。時期は、出土遺物から10世紀頃と推定される。

７号溝（第96図　PL.14）

Ｘ＝207、Ｙ＝－124に位置する。３号竪穴住居を切り１・２号溝に切られる。東西走行するが発見長が短い。溝底面の標高は東西両端59.04mで比高差はない。発見長98㎝、上面幅54 ～ 56㎝、深さ1 ～ 5㎝である。覆土は、ローム土の小塊を少量含む黒褐色土で地山Ⅴa層に対比される。出土遺物はなく、３号竪穴住居、１・２号溝との新旧関係、覆土の状態から、当溝の時期は５世紀～中世と推定される。

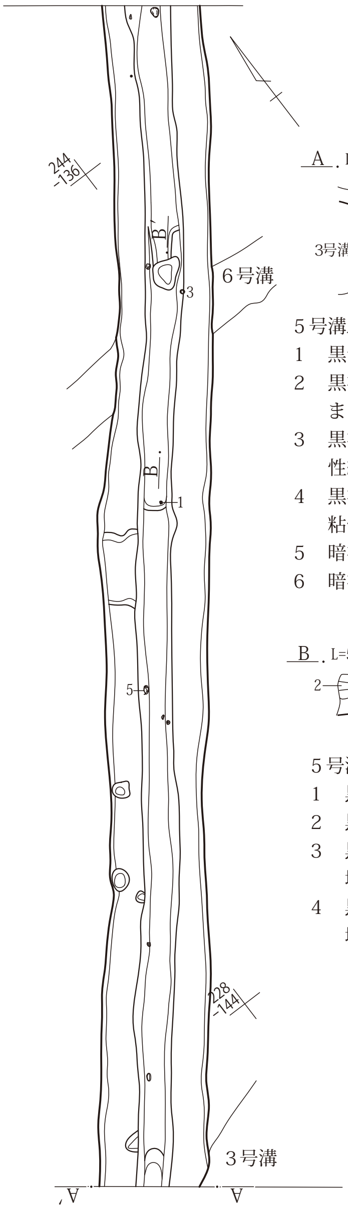
８号溝（第98図　PL.14）

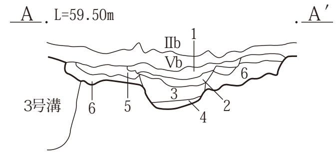
Ｘ＝239 ～ 241、Ｙ＝－145 ～ 167に位置する。５号竪穴住居、10号土坑を切る。溝底面の標高は西端部で59.13m、東端部で59.11mを測り比高差2㎝で勾配率は0.09％である。ほぼ平坦な溝底面である。溝は前述６号溝の北側で接する状態で並走している。東西に直線的に走行し西側は緩やかな曲線を描く。東端部は調査区内で立ち上がり、西側は更に調査区外に延びている。発見長22.24m、上端幅40 ～ 58㎝、深さ4 ～ 6㎝である。覆土は、黄褐色小粒子を少量含む暗褐色土でⅤa層に対比され通水の痕跡は認められていない。埋没は自然堆積と考えられる。出土遺物は、古墳時代後期から９世紀に至る土師器片193ｇ、須恵器89ｇが出土している。時期は、６号溝との状況、出土遺物から９世紀頃と推定される。

９号溝（第99図）

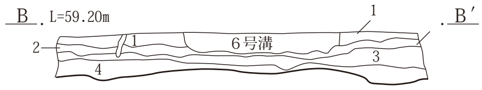
Ｘ＝260 ～ 264、Ｙ＝－201 ～ 202に位置する。部分的な露呈であり重複関係は認められていない。溝底面の標高は、北端部で59.23m、南端部で59.31m、比高差8㎝で勾配率2.20％に達する。部分的な発見であるため詳細

５号溝





５号溝A-A′
1　黒色土　砂質　ローム小塊を含む
2　黒褐色土　ローム小塊を含む　粘性締まりあり
3　黒褐色土　ローム小塊多量に含む　粘性締まりあり
4　黒褐色粘質土　ローム小塊少量含む　粘性締まり強い
5　暗褐色土　黄褐色小粒を含む
6　暗褐色土　ローム大塊を含む

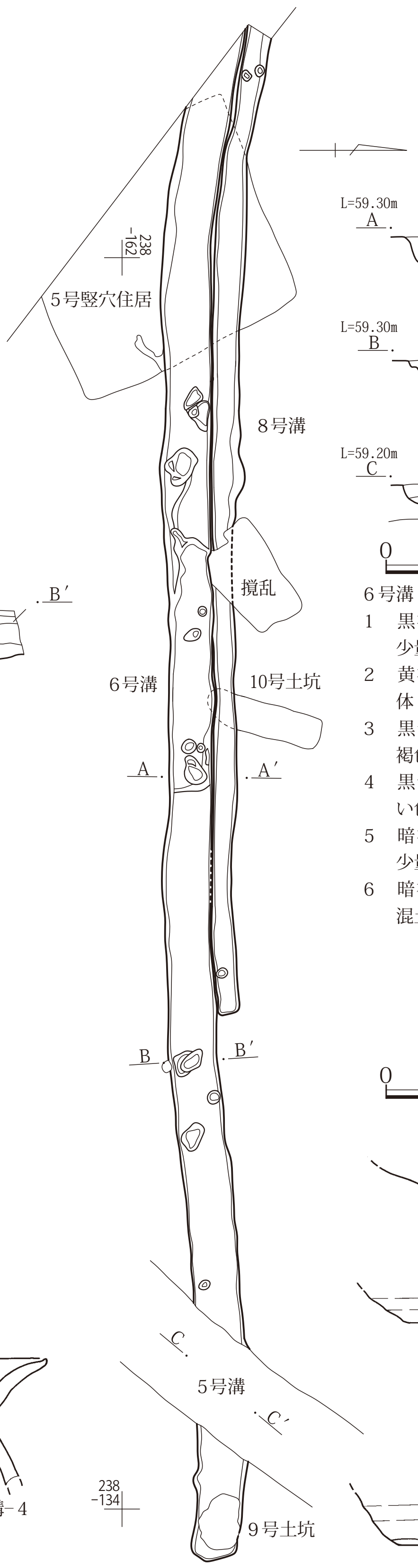


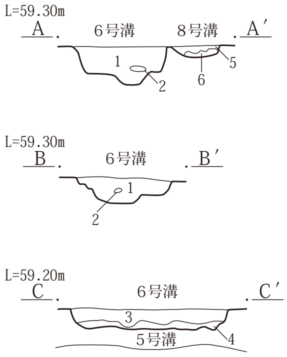
５号溝B-B′
1　黒色土　砂質　粘性締まりなし
2　黒色土　１層に近似　粘性なし
3　黒褐色土　１～３㎝大のローム塊を含む　粘性締まりあり
4　黒褐色土　１～５㎝大のローム塊多量に含む　粘性締まり強い

0　1：80　2ｍ

0　1：160　4ｍ

６・８号溝

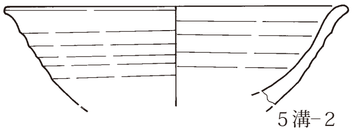


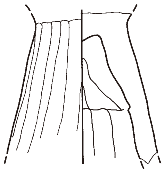


0　1：80　2ｍ

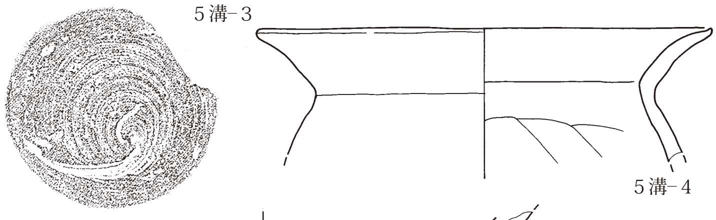
６号溝・８号溝
1　黒褐色土　黄褐色小粒少量含む
2　黄褐色塊　ローム塊主体　黒色土塊を含む
3　黒色土　砂質　斑状に褐色土塊を含む
4　黒色土　３層より明るい色調
5　暗褐色土　黄褐色小粒少量含む
6　暗褐色土と黄褐色土の混土

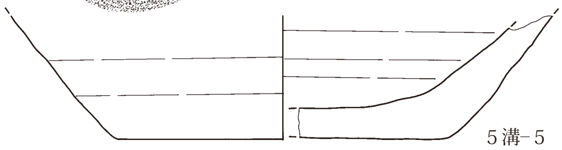
0　1：160　4ｍ


5溝-2

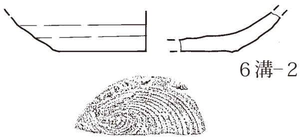

5溝-1

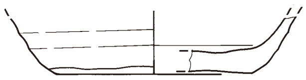
5溝-3


5溝-4


5溝-5

6溝-1

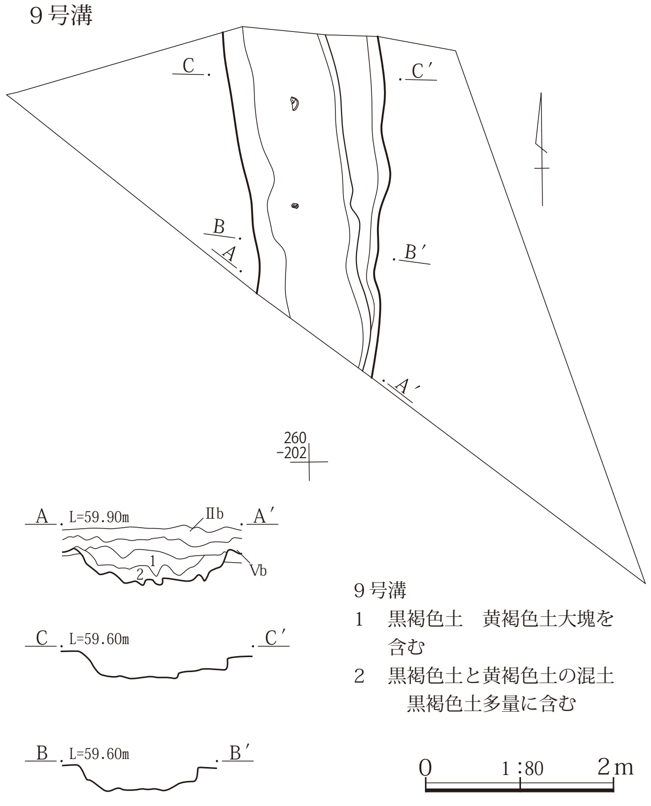

6溝-2


6溝-3

0　1：3　10㎝

第98図　１区５・６・８号溝と５・６号溝の出土遺物

９号溝



第99図　１区９号溝

は不分明であり溝全体を反映しての数値とは異なると考えられる。発見長3.64ｍ、上面幅1.20～1.64ｍ、深さ16～30㎝である。覆土は黄褐色塊を含む黒褐色土でⅤａ層に対比され、溝底面直上には黒褐色土と黄褐色土の混土が堆積していることから、埋没は人為に因ることが推定される。

溝の時期は、良好な出土遺物が得られなかったが、覆土の状態から古代の遺構であることは確実視される。

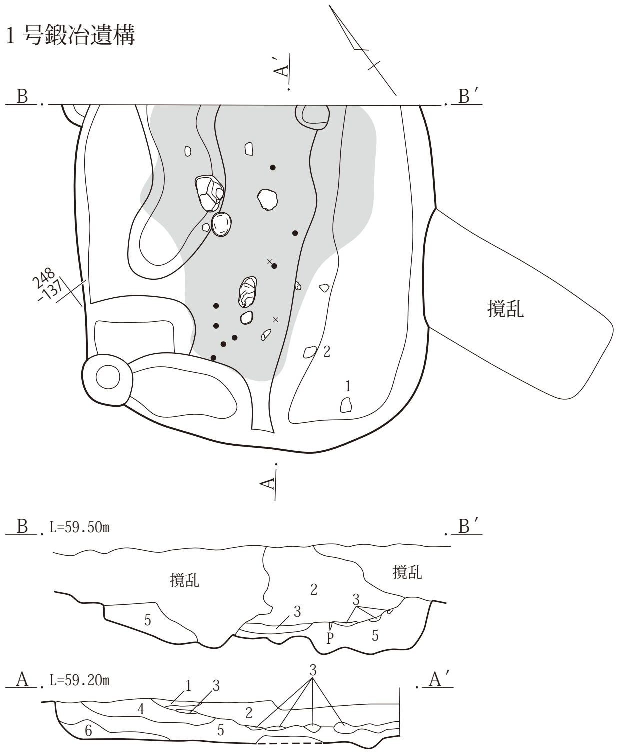
（７）鍛冶遺構

１区から検出された鍛冶遺構は１基である。調査区外となるため全体的な規模や形状は不明であるが、土器片のほか焼土塊とともに鉄滓が出土したことから鍛冶遺構とした。

１号鍛冶遺構（第100･101図　PL.14・35）

Ｘ＝246～248、Ｙ＝－134～137に位置する。調査区外となるため南半部のみの検出である。形状は隅丸長方形と推定される。確認できた北西から南東の長さ1.92ｍ、深さ16～31㎝である。主軸方向はＮ－37°－Ｅである。上位層に撹乱が入り、炭や焼土を多量に含む黒色土及びローム土を含む暗褐色土や焼土塊による人為的な埋没土と考えられる。底面から礫が出土する。南西部の埋没土から鞴羽口（第101図１・２）、鉄滓（第101図３）が出土する。非掲載遺物は土師器片536ｇ、須恵器片77ｇである。遺構確認面及び埋没土から多量の焼土粒・塊及び炭化物が出土し、鍛冶遺構の可能性がある。出土遺物から時期は古墳時代中期から後期と考えられる。

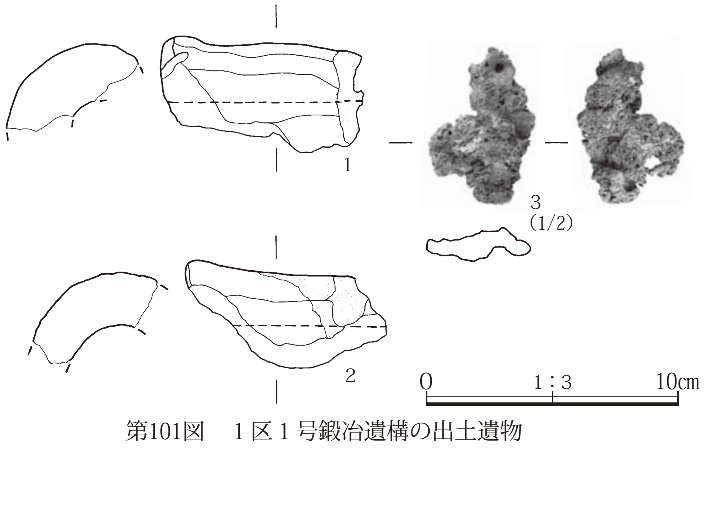
１号鍛冶遺構



１号鍛冶遺構
１　黒色土　炭混土層
２　黒色土　0.5～1.5㎝大の炭化物を含む　焼土小粒１％
３　黒色土と焼土の混土　部分的に層～塊状に認められる　やや締まる
４　黒色土　２層より黒色味少なくやや砂質　焼土小粒１％　やや締まる
５　２層に類似　粘性ややあり
６　暗褐色土　ローム土を含む　１～５層より黄色味あり　粘性あり締まりやや弱い

0　1：40　1ｍ

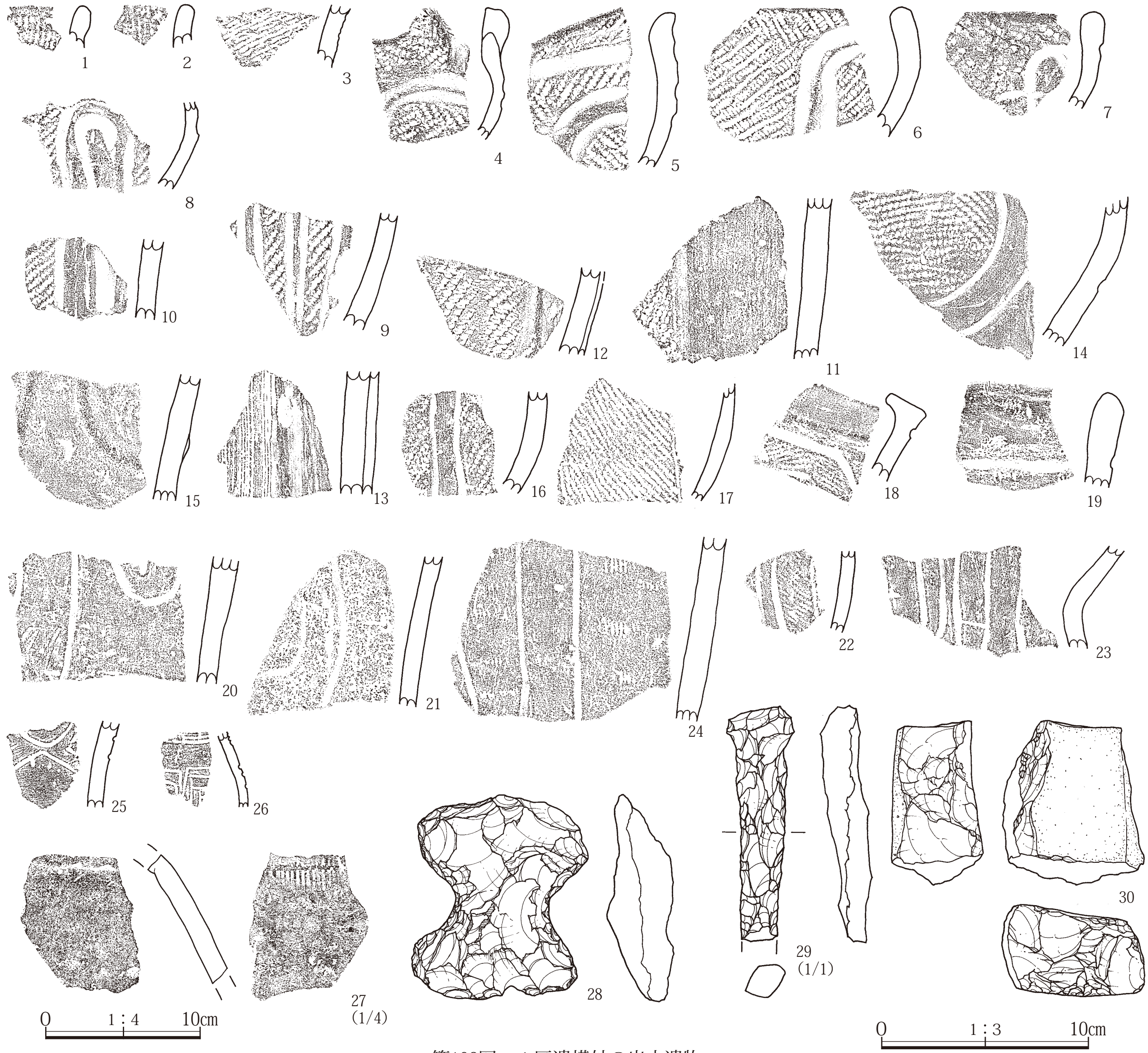
第100図　１区１号鍛冶遺構



第101図　１区１号鍛冶遺構の出土遺物

３　遺構外の遺物(第102図　PL.35)

１区からは、縄文時代から近世に至る遺物が出土し、遺構外遺物も多数出土している。時代別には、縄文時代の遺物は遺構確認面などから夏島式(第102図１～２)、黒浜式(第102図３)、加曽利Ｅ３式(第102図４～12)、加曽利Ｅ４式(第102図13～17)、称名寺式(第102図18～24)、堀之内２式(第102図25)、中期後半(第102図26)が出土する。１・２・４・12号竪穴住居、３・６号溝埋没土から出土した遺物は混入と判断し遺構外出土遺物とした。非掲載遺物を含めると土器は早期、前期、中期、後期の122点を数え57％が中期、40％が後期に属し中期から後期を主体とするが僅かであるが早期の撚糸文系土器も含まれる。１区では後期の竪穴住居や中期から後期の土坑及びピットが検出されることから周辺からも遺構の検出が想定される。石器は打製石斧(第102図28)、石錐(第102図29)、三角錐形石器(第102図30)が出土する。非掲載遺物は削器、石鏃、剝片が出土する。古墳時代から奈良・平安時代の遺物総重量は、土師器片2,234ｇ、須恵器片574ｇに上る。中世から近世の非掲載遺物は中世の甕(第102図27)のほか非掲載遺物として遺構確認面及び撹乱などから近世の国産磁器４点、国産施釉陶器５点、国産焼締陶器１点、近現代の十能瓦３点が出土している。



第102図　１区遺構外の出土遺物

第３節　２区の調査成果

２区はローム漸移層（基本土層第Ⅵ層）上面において遺構確認を行った。調査区は道路により北部、東部、西部の３カ所に分かれる。東・西部中央部分から北に向かって谷地形が形成されている。大間々扇状地扇端部の湧水を水源とする自然地形である。西部の北半部は谷地底部の湧水が著しかったため底部まで掘削していない。古墳時代の竪穴住居、奈良・平安時代の掘立柱建物、古墳時代から奈良平安時代の土坑、ピット、溝、古代の谷地が検出され、古墳時代から近世に至る遺物が出土した。調査区南端部で竪穴住居や掘立柱建物が検出され、中央部の谷地縁辺部に溝や土坑が集中して分布していた。谷地を利用していたことが考えられる。

１　古墳時代以降の遺構と遺物

検出された古墳時代から奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居１軒、掘立柱建物１棟、土坑４基、ピット11基、溝12条、谷地１カ所である。以下のとおり遺構ごとに記す。

（１）竪穴住居

２区から検出された竪穴住居は１軒である。調査区南端で検出にあるため北壁周辺のみ検出された。

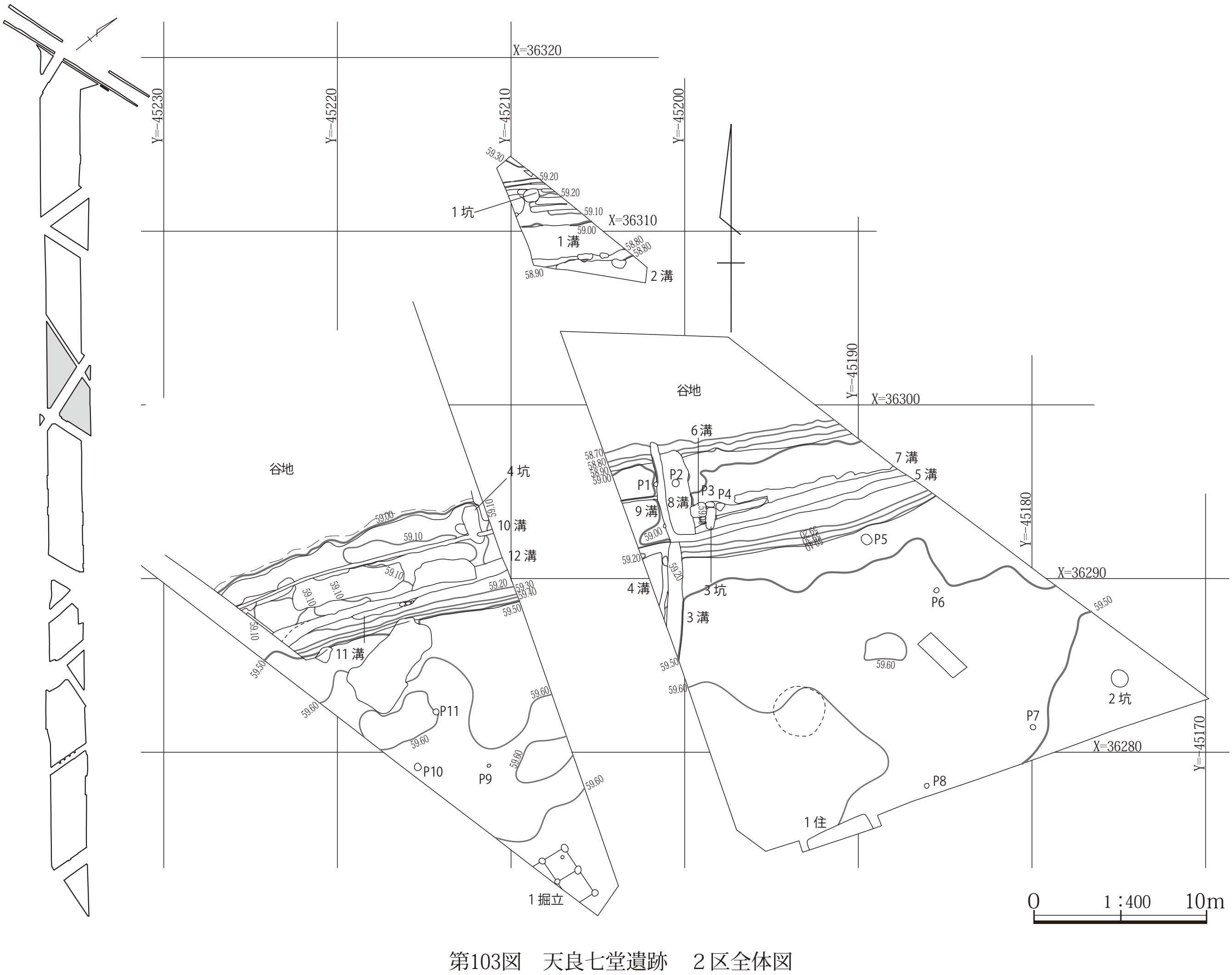
１号竪穴住居（第104図　PL.16）

位置　X＝274 ～ 276、Y＝－189 ～ 192

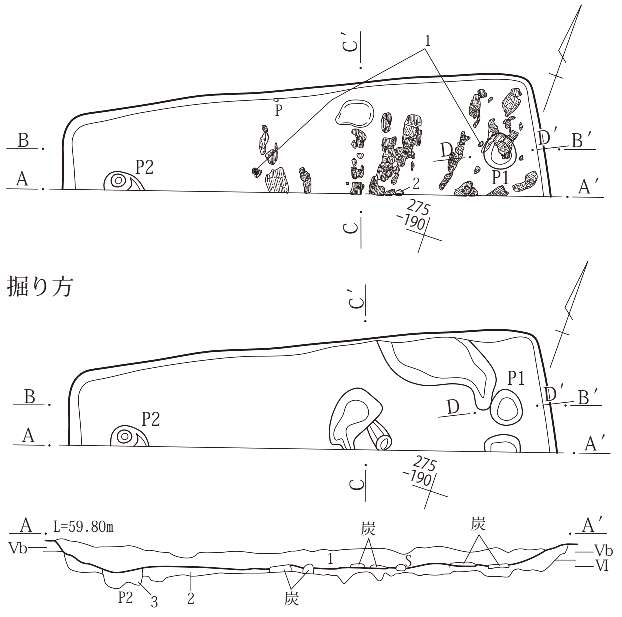
形状・規模　南部は調査区外となるため不明。確認できた北壁の東西長3.79m、壁高３～ 14㎝である。

重複　なし。

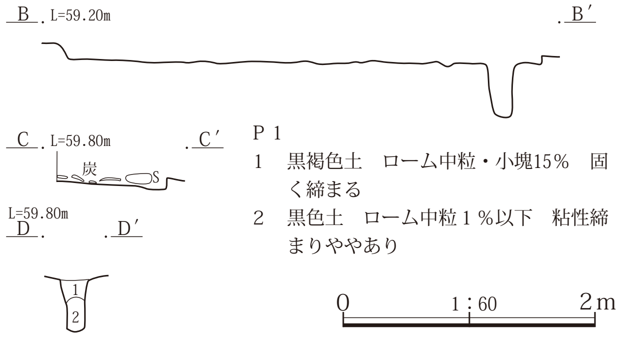
埋没土　埋没土は炭化物、焼土、ローム塊を多量に含む



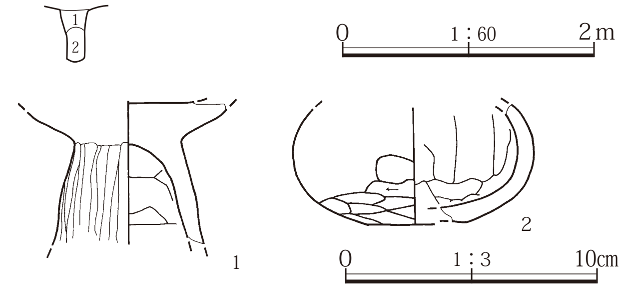
第103図　天良七堂遺跡　２区全体図



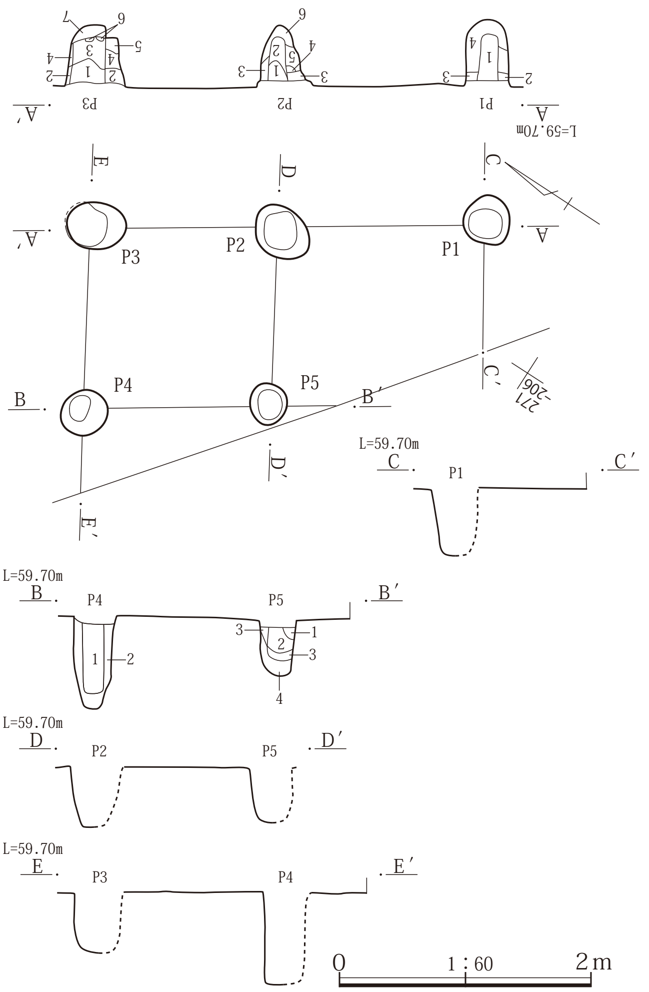
１　黒色土　炭化物　焼土を含む　小粒のローム塊を多く含む
２　黄褐色土　炭化物多量に含む　１～３㎝大のローム塊を含む
３　黒色土　ローム粒・塊多量に含む



Ｐ１
１　黒褐色土　ローム中粒・小塊15％　固く締まる
２　黒色土　ローム中粒１％以下　粘性締まりややあり



第104図　２区１号竪穴住居と出土遺物



第105図　２区１号掘立柱建物

Ｐ１
１　黒褐色土　黄褐色土中粒２％　粘性締まりややあり
２　黒褐色土　褐色土ハードローム大塊を含む
３　黒褐色土　やや締まる
４　黒色土　黄褐色粘質土中粒・大塊１％　粘性締まりあり

Ｐ２
１　黒褐色土　ローム小粒・小塊１％　粘性締まりややあり
２　黒褐色土　褐色粘質土中粒１％　粘性ありやや締まる
３　黒褐色土　ローム小粒・小塊１％
４　褐色粘質土と黒褐色粘質土の混土　固く締まる
５　３層に類似　粘性ややあり
６　５層に類似　褐色粘質土小塊１％

Ｐ３
１　黒褐色土　褐色粘質土小粒１％
２　褐色粘質土　黒褐色土を含む　固く締まる
３　黒褐色土　やや締る
４　黒褐色土　褐色粘質土を少量含む
５　２層に類似
６　褐色粘質土塊　黒褐色土を含む
７　褐色粘質土　黒褐色土を含む

Ｐ４
１　黒褐色土　にぶい黄褐色粘質土小粒１％以下　柱痕　やや締る
２　黒褐色土　にぶい黄褐色粘質土微量含む　固く締る

Ｐ５
１　黒褐色土と褐色土の混土　やや締る
２　黒褐色土　粘性ややあり
３　褐色粘質土　黒褐色土を少量含む　固く締まる
４　黒色土　粘性締まりあり

黒褐色土であり、人為的埋没土の可能性がある。

床面　壁際より中央部が２～３㎝低い。使用による硬化面は不明瞭であった。住居北東部床面直上から炭化材が多量に出土した。樹種はクヌギで、外側部分などであるが炭化しているため遺存状態は不良。掘り方は炭化物及びローム塊を多量に含む黄褐色土により床面を構築する。炉・竈・貯蔵穴は調査できた範囲の中では検出されなかった。

周溝　床面精査および掘り方調査では検出されなかった。

柱穴　床面精査で主柱穴と考えられるピット２基が検出

第 28 表　天良七堂遺跡２区１号掘立柱建物計測表

柱穴No.	規模（㎝）			形状	柱間の寸法（m）
	長径	短径	深さ		
Ｐ１	38	37	40	円形	P1-P2 1.65
Ｐ２	49	38	41	楕円形	P2-P3 1.49
Ｐ３	47	37	38	楕円形	P3-P4 1.45
Ｐ４	38	36	78	円形	P4-P5 1.49
Ｐ５	35	30	42	円形	P2-P5 1.49

された。Ｐ１は長径28㎝、短径25㎝、深さ34㎝である。黒色土とローム粒を含む黒褐色土により埋没し柱痕は認められない。Ｐ２は南半部が調査区外となり床面から掘り込まれている。確認できる直径は32㎝、深さ15㎝である。Ｐ１からＰ２の柱間は3.05ｍである。

掘り方　床面からローム面まで５～10㎝掘り込まれ、大小の窪みがみられるが床下施設は認められなかった。

遺物出土状態　床面直上から高杯(第104図１)、壺(第104図２)、非掲載遺物は土師器片33ｇが出土した。

所見　炭化材が多量に出土するため焼失住居の可能性がある。出土遺物から時期は５世紀代と考えられる。

(２)掘立柱建物

２区の掘立柱建物は１棟である。調査区西南端から検出された。１区北端部の掘立柱建物と隣接し関連が想定される。

１号掘立柱建物(第105図　PL.16)

位置　Ｘ＝271～274、Ｙ＝－205～208

重複　なし。

規模・形態　２区南端から見つかった建物で、建物北東部のみ記録することができた。Ｐ１・２・３を東辺として調査区西側に延びていく建物で東西２間かそれ以上の総柱建物と考えられる。柱間の計測値等は第28表のとおりであるが柱穴の規模は30～49㎝の円形及び楕円形で、柱痕は直径15～31㎝で、すべての柱穴から確認できた。東辺は3.14ｍ、柱間は東辺、北辺ともに5尺である。

出土遺物　なし。

所見　全体の規模は不明で、出土遺物がなかったことから時期は特定できなかった。

(３)土坑・ピット

２区から検出された土坑は４基、ピットは11基である。遺物出土や柱痕などの特徴が認められる土坑、ピットについて詳述する。すべての土坑及びピットは第30表(152・153頁)において記した。

１号土坑(第106図　PL.16)

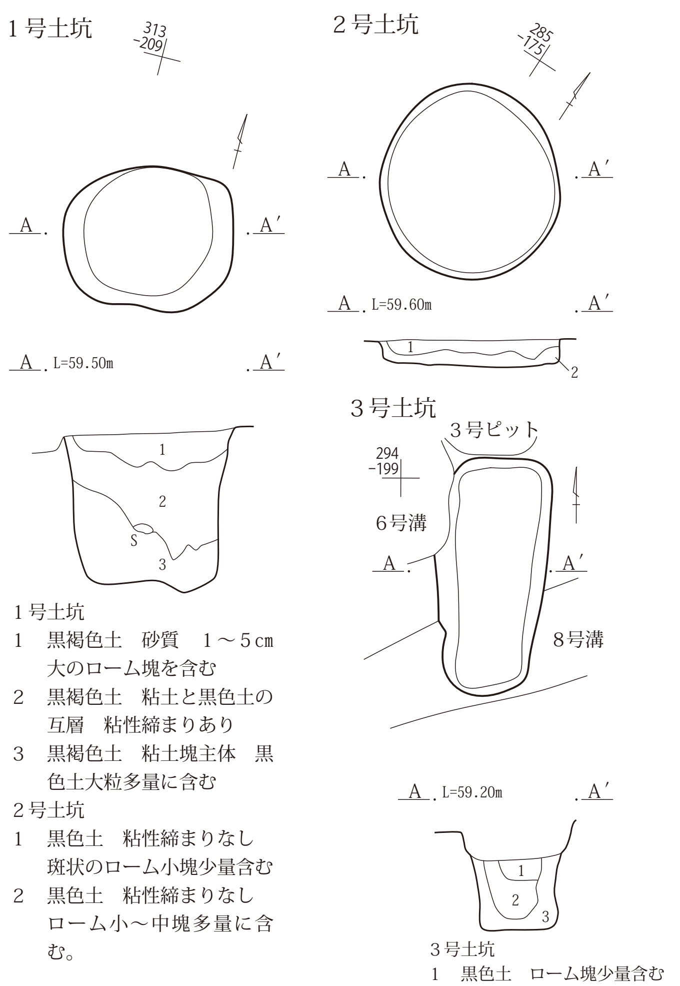
平面形状は円形である。埋没土は黒褐色土やローム塊を含む砂質の黒褐色土による人為的埋没土と考えられる。非掲載遺物は土師器片が出土する。断面形状は長方形を呈する。形状・規模から井戸の可能性も考えられる。時期は不明である。

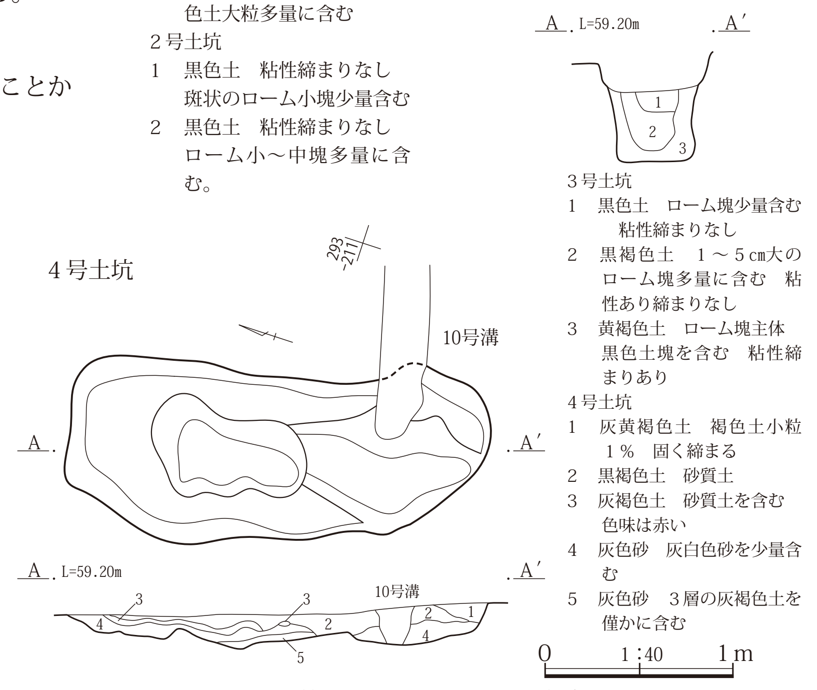
２号土坑(第106図　PL.16)

平面形状は円形。断面形状は浅い方形を呈する。埋没土は褐色土塊やローム塊を含む黒色土であり、人為的埋没土と考えられる。出土遺物はなく時期は不明である。

３号土坑(第106図)

形状は長方形を呈する。埋没土の確認状況から６・８号溝より３号土坑が古い。埋没土はローム塊を多量に含む黄褐色土や黒色土であり、人為的埋没土と考えられる。





第106図　２区１～４号土坑

出土遺物はなく時期は不明である。

４号土坑（第106図）

平面形状は不整長方形を呈し、断面形状は浅い方形を呈する。10号溝と重複しており、埋没土の確認状況から４号土坑が古い。埋没土はレンズ状に堆積しており自然埋没土と考えられる。出土遺物はなく時期は不明である。

１号ピット（第107図）

５号溝と重複し、埋没土の確認状況から１号ピットの方が古い。平面形状は円形、断面形状は台形を呈していたと推定される。出土遺物はなく時期は不明である。

３号ピット（第107図）

３号ピット埋没土を３号土坑が切っていた。平面形状は長円形、断面形は台形を呈する。底面は平坦で、埋没は自然堆積と考えられる。

４号ピット（第107図）

形状は不整円形、断面形状は浅い方形を呈する。埋没土はローム塊を含む黒褐色土と黒色土であり、人為的埋没土と考えられる。出土遺物はなく時期は不明である。

６号ピット（第107図）

平面形状は円形、断面形状は三角形を呈する。土層断面図１層は柱痕と考えられる。柱穴を想定できるが、掘立柱建物などを想定する他の柱穴は不明である。出土遺物はなく時期は不明である。

８号ピット（第107図）

平面形状は円形、断面形状は長方形を呈する。土層断面図１層は柱痕と考えられる。柱穴を想定できるが、掘立柱建物などを想定する他の柱穴は不明である。出土遺物はなく時期は不明である。

10号ピット（第107図）

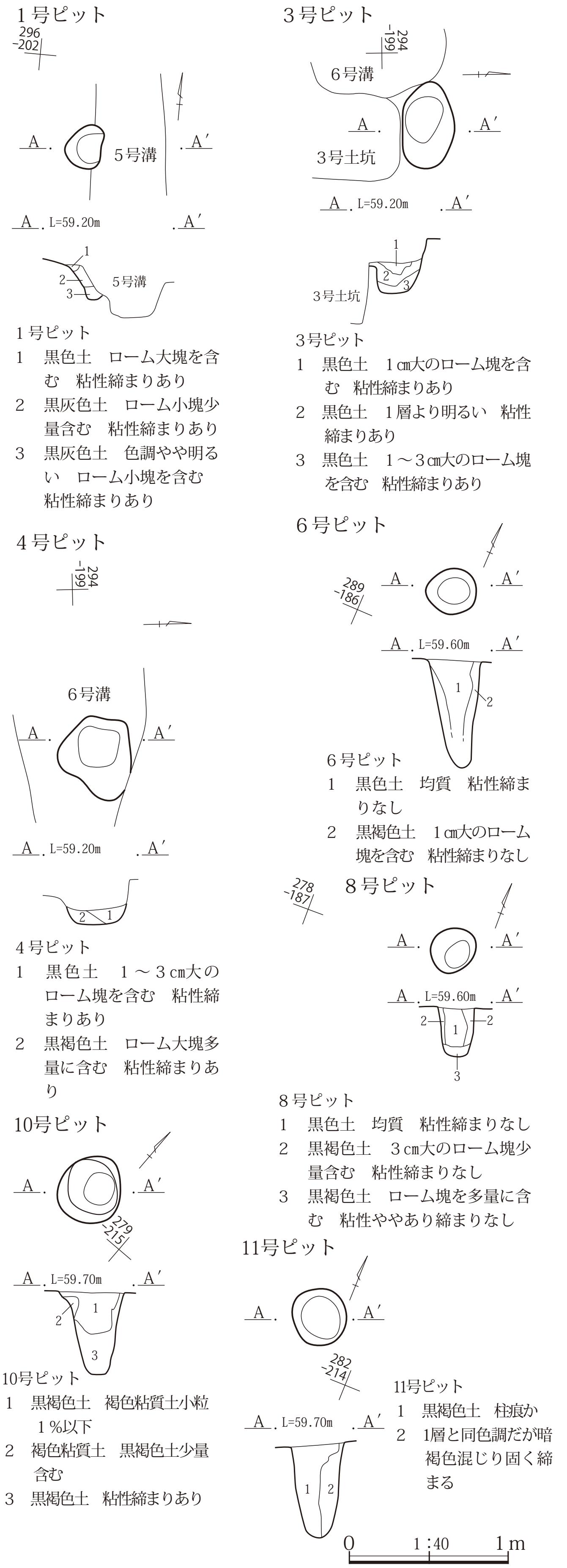
平面形状は円形、断面形状は三角形を呈する。断面形状から柱穴を想定できるが、掘立柱建物などを想定する他の柱穴は不明である。出土遺物はなく時期は不明である。

11号ピット（第107図）

平面形状は円形、断面形状は三角形を呈する。断面形状から柱穴を想定できるが、掘立柱建物などを想定する他の柱穴は不明である。出土遺物はなく時期は不明である。

（4）溝・谷地

２区から検出された溝は12条である。２区は調査区中央から北に向かって落ち込む谷地状の地形を形成している。調査時には落ち込み部の底面は湛水していた。溝は



第107図　２区１・３・４・６・８・10・11号ピット

この谷地の底面および南側の台地縁辺傾斜部から検出されており、谷地を人工的に開削して利用していたことが考えられる。以下に溝及び谷地について詳述する。

１号溝（第108図）

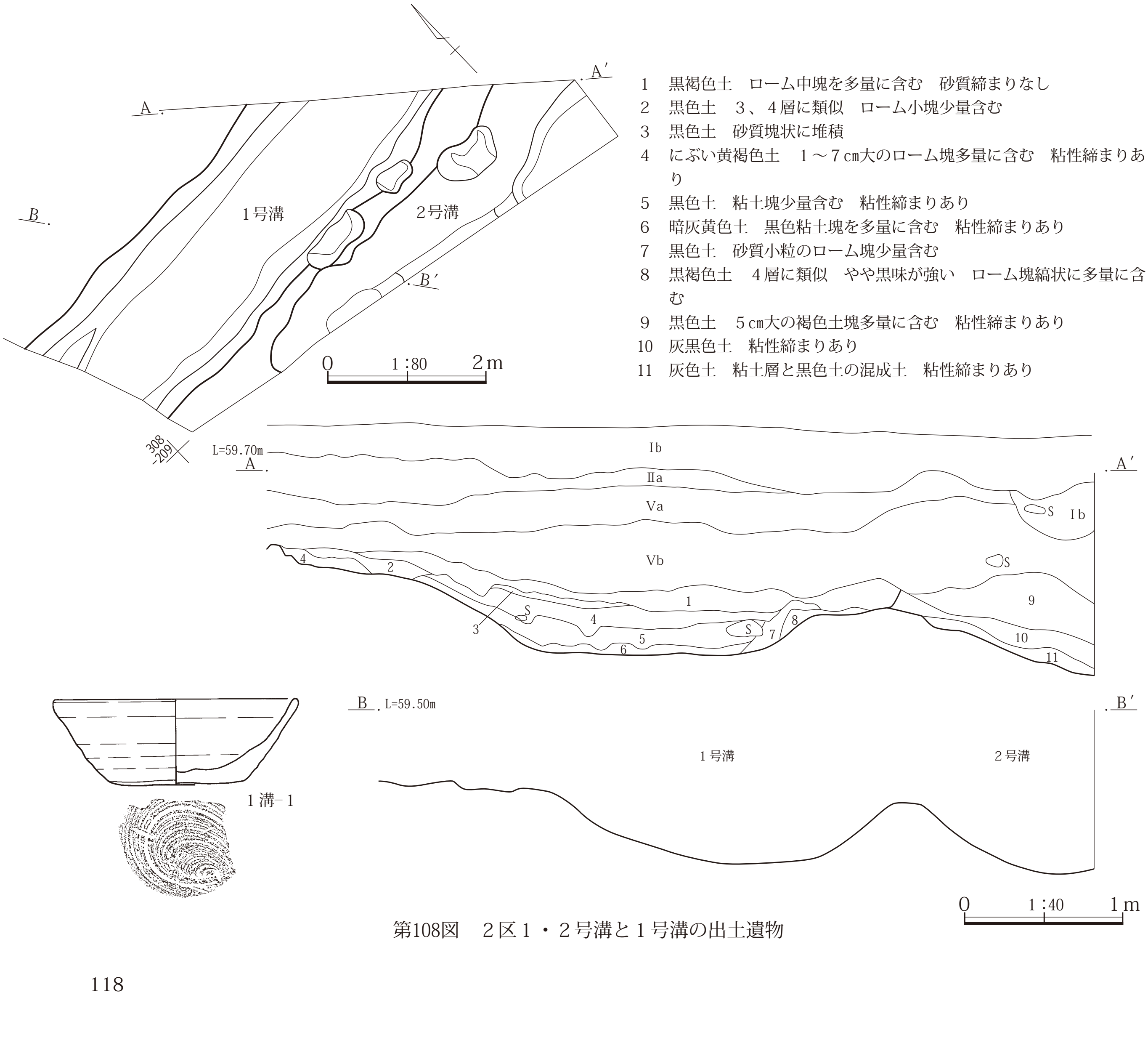
Ｘ＝308 ～ 310、Ｙ＝－204 ～ 209位置する。２号溝と重複しており、土層断面の観察から１号溝が新しい。１号溝は東西方向の溝で、底面の標高は西端58.66m、東端58.56m、比高10㎝であり、底面の傾斜はほとんどみられない。検出できた規模は、長さ4.60m、上端幅1.85 ～ 2.00m、深さ24 ～ 52㎝である。埋没土の上位層はローム塊を含む黒色土から黒褐色土、下位層は黒色土や黒褐色土による自然堆積と考えられる。底部に水流の痕跡は認められない。遺物は埋没土から杯（第108図１）、非掲載遺物は土師器片312ｇ、須恵器片721ｇが出土した。出土遺物や埋没土から時期は平安時代と考えられる。

２号溝（第108図　PL.16）

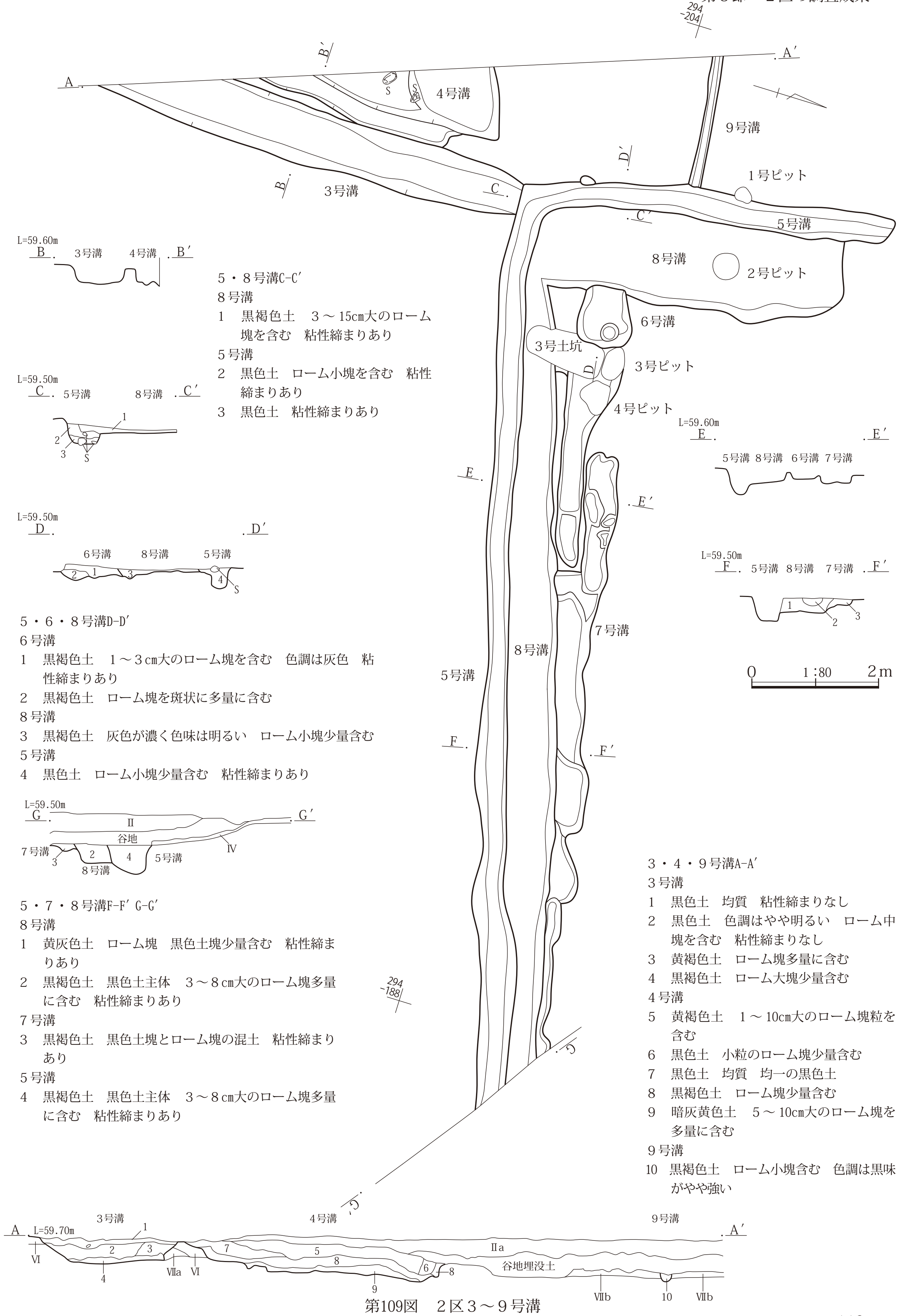
Ｘ＝307 ～ 308、Ｙ＝－202 ～ 207に位置する。２号溝埋没土が１号溝に切られる。東西方向の溝で、底面の標高は西端58.93m、東端58.26m、比高67㎝である。勾配は12.74％であり、底部に水流の痕跡が認められない。検出できた長さは5.26m、上端幅1.44m以上、深さ29 ～ 54㎝である。レンズ状の堆積が認められたことから自然埋没と考えられる。１号溝との重複関係から平安時代以前の溝と考えられる。

３号溝（第108図　PL.16）

Ｘ＝285 ～ 292、Ｙ＝－200 ～ 201に位置する。５号溝との新旧関係は不明。だが、5号溝屈曲部へ合流した可能性が高い。溝の方向は南北方向で、底面の標高は南端59.28m、北端59.15m、比高13㎝である。勾配は1.90％



第108図　２区１・２号溝と１号溝の出土遺物



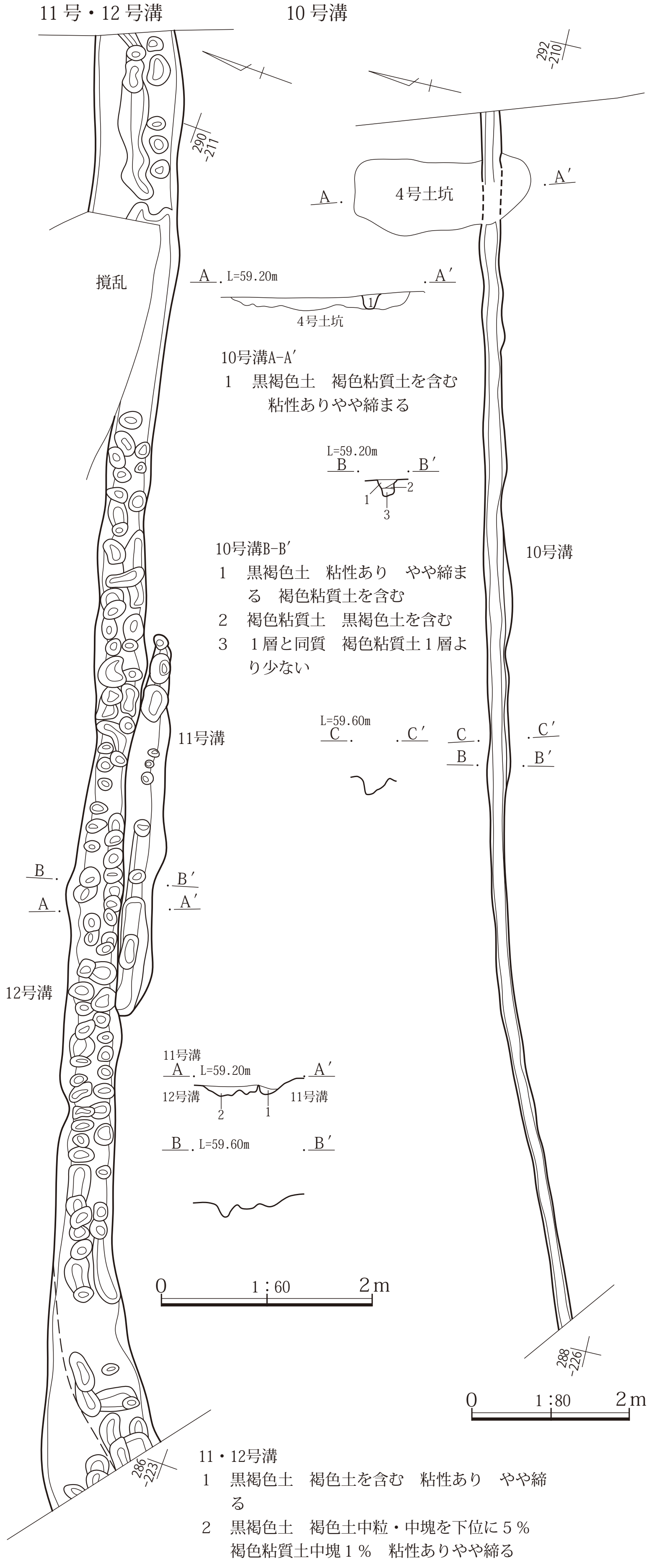
5・8号溝C-C′
8号溝
1　黒褐色土　3～15㎝大のローム塊を含む　粘性締まりあり
5号溝
2　黒色土　ローム小塊を含む　粘性締まりあり
3　黒色土　粘性締まりあり

5・6・8号溝D-D′
6号溝
1　黒褐色土　1～3㎝大のローム塊を含む　色調は灰色　粘性締まりあり
2　黒褐色土　ローム塊を斑状に多量に含む
8号溝
3　黒褐色土　灰色が濃く色味は明るい　ローム小塊少量含む
5号溝
4　黒色土　ローム小塊少量含む　粘性締まりあり

5・7・8号溝F-F′G-G′
8号溝
1　黄灰色土　ローム塊　黒色土塊少量含む　粘性締まりあり
2　黒褐色土　黒色土主体　3～8㎝大のローム塊多量に含む　粘性締まりあり
7号溝
3　黒褐色土　黒色土塊とローム塊の混土　粘性締まりあり
5号溝
4　黒褐色土　黒色土主体　3～8㎝大のローム塊多量に含む　粘性締まりあり

3・4・9号溝A-A′
3号溝
1　黒色土　均質　粘性締まりなし
2　黒色土　色調はやや明るい　ローム中塊を含む　粘性締まりなし
3　黄褐色土　ローム塊多量に含む
4　黒褐色土　ローム大塊少量含む
4号溝
5　黄褐色土　1～10㎝大のローム塊粒を含む
6　黒色土　小粒のローム塊少量含む
7　黒色土　均質　均一の黒色土
8　黒褐色土　ローム塊少量含む
9　暗灰黄色土　5～10㎝大のローム塊を多量に含む
9号溝
10　黒褐色土　ローム小塊含む　色調は黒味がやや強い

第109図　2区3～9号溝



第110図　２区10・11・12号溝

でありわずかに南から北に緩やかに傾斜していた。検出された長さは6.86m、上端幅0.50～0.92m、深さ22～31㎝である。埋没土に水流の痕跡は認められなかった。非掲載遺物は土師器小破片48ｇ、須恵器大破片39ｇが出土する。時期は不明である。

４号溝（第109図）

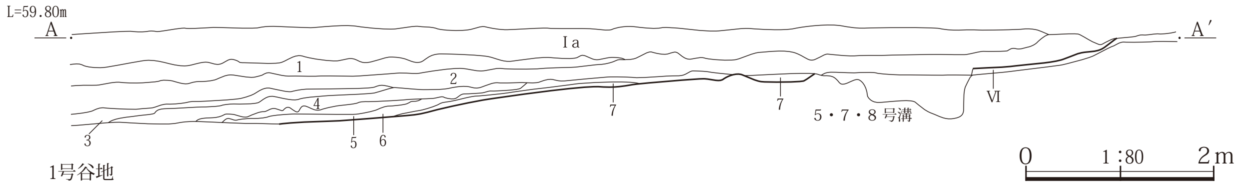
Ｘ＝287～291、Ｙ＝－200～202に位置する。１号谷地と重複し、埋没土の確認状況から４号溝が古い。南北方向の溝で、底面の標高は南端59.29m、北端59.16m、比高13㎝である。底面の勾配は4.29％で南から北に傾斜していた。検出できた長さは3.03m、上端幅0.36～1.16m、深さ12～26㎝である。埋没土はローム塊を含む黒褐色土から黄褐色土による自然埋没と考えられるが、水流の痕跡はなかった。出土遺物はなく、時期は不明である。

５号溝（第109図）

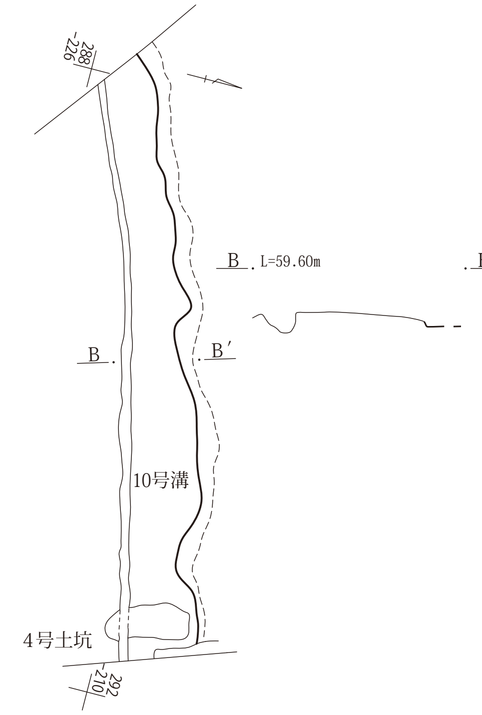
Ｘ＝292、Ｙ＝－186～201に位置する。５号溝埋没土が８号溝を切る。１号谷地より５号溝が古い。東西方向から西端で直角に北に向きを変え、北端で谷に直交して流れ込む。底面の標高は西端58.72m、東端58.66m、比高６㎝、北端の標高は58.64m、西端との比高８㎝であり、ほぼ平坦である。西端の標高がやや高く東端、北端が低いため区画溝と考えられる。検出できた長さは20.20m、上端幅32～60㎝、深さ30～44㎝である。埋没土はローム塊を含む黒色土で、自然堆積と考えられる。遺物の出土はなく、時期は不明である。８号溝の南側及び西側に隣接して、同走向であることから、8号溝の掘り直しと考えられる。

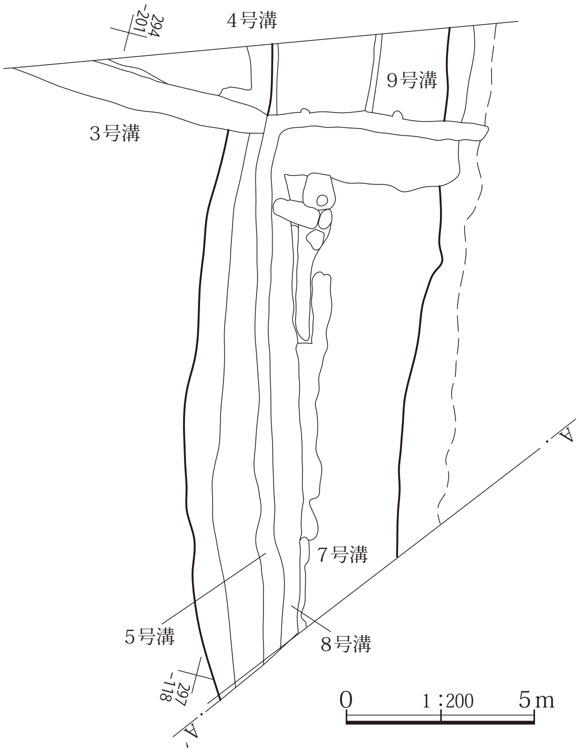
６号溝（第109図）

Ｘ＝293～294、Ｙ＝－195～199に位置する。６号溝埋没土が８号溝に切られる。東西方向の溝で、



1号谷地
1　灰色土　砂質　やや明るい灰色
2　灰色土　砂質　ローム塊を僅かに含む
3　灰色土　砂質　小粒のローム塊を含む
4　黒褐色土　2～3cm大のローム塊多量に含む
5　黒色土　砂質　谷地底部は砂層　北側はAs-B混土層
6　黒色土　ローム塊少量含む　粘性締まりあり
7　黒褐色土　ローム塊を多量に含む　粘性締まりあり





第111図　2区1号谷地

底面標高は東端59.01m、西端58.87m、比高14cmである。底面の勾配は3.15%であり東から西に傾斜していた。検出できた長さは4.44m、上端幅30～88cm、深さ10～14cmである。埋没土はローム塊が多く、人為的堆積と推定される。出土遺物はなく時期は不明である。本来、７号溝と同一だった可能性が高い。

７号溝(第109図)

Ｘ＝294～296、Ｙ＝－187～197に位置する。西側に平行する８号溝に切られる。東西方向の溝で、底面の標高は西端58.97m、東端58.93m、比高４cmである。底面はほぼ平坦で僅かに西から東に緩やかに傾斜していた。検出された長さは9.58m、上端幅10～84cm、深さ６～15cmである。埋没土は黒色土とローム塊の混成土を含む黒褐色土で、人為的埋没土の可能性がある。出土遺物はなく、時期は不明である。８号溝の前身であった可能性がある。

８号溝(第109図)

Ｘ＝292～297、Ｙ＝－187～201に位置する。８号溝埋没土が７号溝を切る。５号溝に切られている。東西方向の溝が直角に北に向きを屈曲する。底面の標高は西端58.91m、東端58.81m、比高10cm、北端の標高は58.81m、西端との比高10cmで、底面はほぼ平坦であった。西端の標高が高く東端、北端がわずかに低いため区画溝と考えられる。検出できた溝の長さは17.76m、上端幅0.40～1.48m、深さ10～27cmである。埋没土はローム塊を多量に含む黒褐色土で、人為的埋没土の可能性がある。出土遺物はなく、時期は不明である。５号溝の前身と考えられる。

９号溝(第109図　PL.16)

Ｘ＝294、Ｙ＝－201～203に位置する。５号溝(８号溝)に直交して合流する。東西方向の溝で、底面の標高は西端58.96m、東端58.93m、比高３cmである。底面はほぼ平坦であった。検出された長さは2.10m、上端幅15～20cm、深さ６cmである。埋没土はローム小塊を含む黒褐色土で、

自然堆積と考えられる。水流の痕跡は認められなかった。出土遺物はなく、時期は不明である。

10号溝（第110図）

Ｘ＝288 ～ 292、Ｙ＝－211 ～ 225に位置する。４号土坑埋没土を10号溝が切る。東西方向の溝で、底面の標高は西端58.92m、東端58.91m、比高１㎝である。東西に走る谷に沿って走向し、９号溝に連続すると思われる（第103図参照）。検出できた長さは15.50m、上端幅16 ～ 34㎝、深さ16 ～ 20㎝である。底面標高にほとんど高低差が認められないが、５号溝に合流する水路と考えられよう。ただし、埋土に水流の痕跡は認められなかった。出土遺物はなく、時期は不明である。

11号溝（第110図）

Ｘ＝287 ～ 288、Ｙ＝－215 ～ 219に位置する。12号溝と平行しており、どちらかが掘り直し溝と考えられる。東西走向の溝で、底面の標高は東端59.08m、西端59.04m、比高４㎝と、底面の傾斜はみられない。検出できた規模は、長さ3.62m、上面幅16 ～ 42㎝、深さ４～ 12㎝である。底面には、ピット状の掘削痕跡が認められた。褐色粘質土を含む黒褐色土で埋没しており、水流の影響を受けた可能性がある。埋没土が12号溝と類似しており時期が近い可能性があるが、出土遺物はなく時期は不明である。

12号溝（第110図）

Ｘ＝286 ～ 291、Ｙ＝－210 ～ 223に位置する。10号溝と2.5mの間隔で逆走しており、道路側溝とも考え得る。東西に走行する溝で、底面の標高は西端59.11m、東端59.03m、比高８㎝で、底面の傾斜はほとんどみられない。検出できた長さは14.00m、上端幅0.40 ～ 1.22m、深さ６～ 23㎝である。底面には、ピット状の２列の掘削痕跡が検出された。埋没土は11号溝埋没土に類似し、水流の影響で生成された堆積状況を示す。道路側溝ならば、推定東山道２ルートに挟まれて平行することになる。出土遺物はなく、時期は不明である。

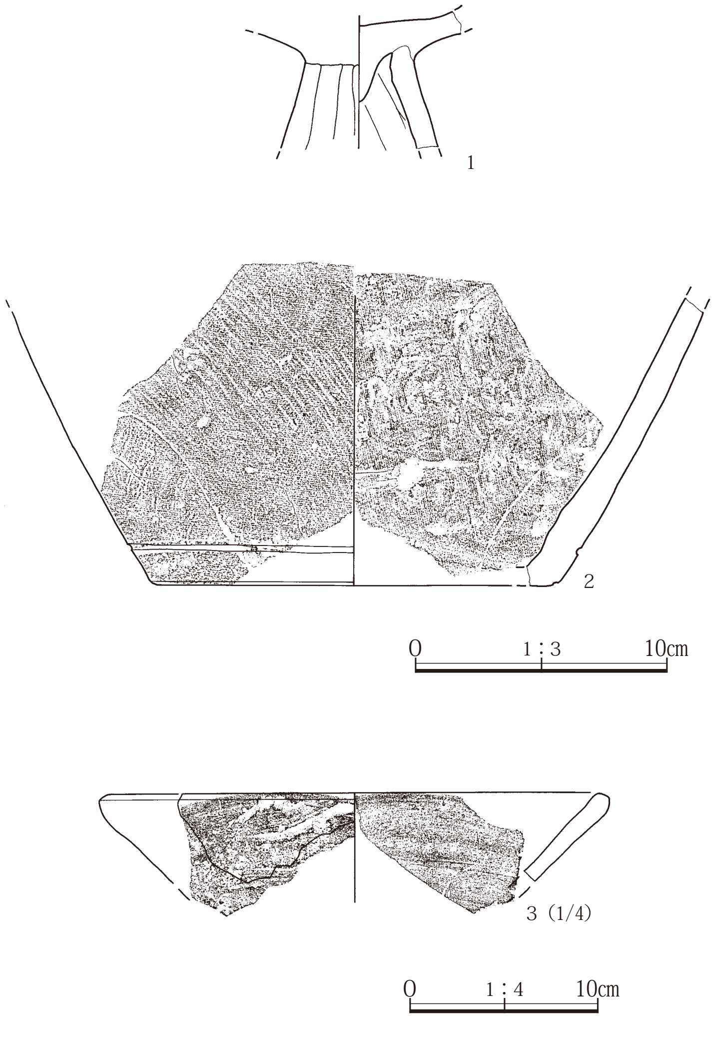
１号谷地（第111図）

Ｘ＝291 ～ 299、Ｙ＝－185 ～ 204に位置する。人工的な遺構ではないが、遺構のある古墳時代以降利用されてきたものと推定される。検出された１号谷地は北西から南東方向で、上端幅約25m、深さ１m以上である。埋没土の上層はローム塊を含む砂質の灰色土であり、下層にかけAs-Bを含む中世の土層で埋没する。この谷地は３区へも続き、大きく蛇行するように流れていた。東山道の牛堀・矢ノ原ルートと下新田ルートの間に平行して挟まることから、路線上の障害となったろう。

２　遺構外の遺物（第112図）

古墳時代から奈良・平安時代の遺物は、遺構確認面で出土しており、そのうち高杯（第112図１）、甕（第112図２）を図示した。非掲載遺物の総重量は、土師器片338ｇ、須恵器片646ｇである。石器は出土しなかった。

中世から近世の遺物は、遺構確認面から近世の国産施釉陶器９点、国産磁器３点、近現代の陶磁器７点、土器類３点が出土した。周辺に中世から近世の遺構の存在が想定される。ここでは13世紀の片口鉢（第112図３）を図示した。



第112図　２区遺構外の出土遺物

第４節　３区の調査成果

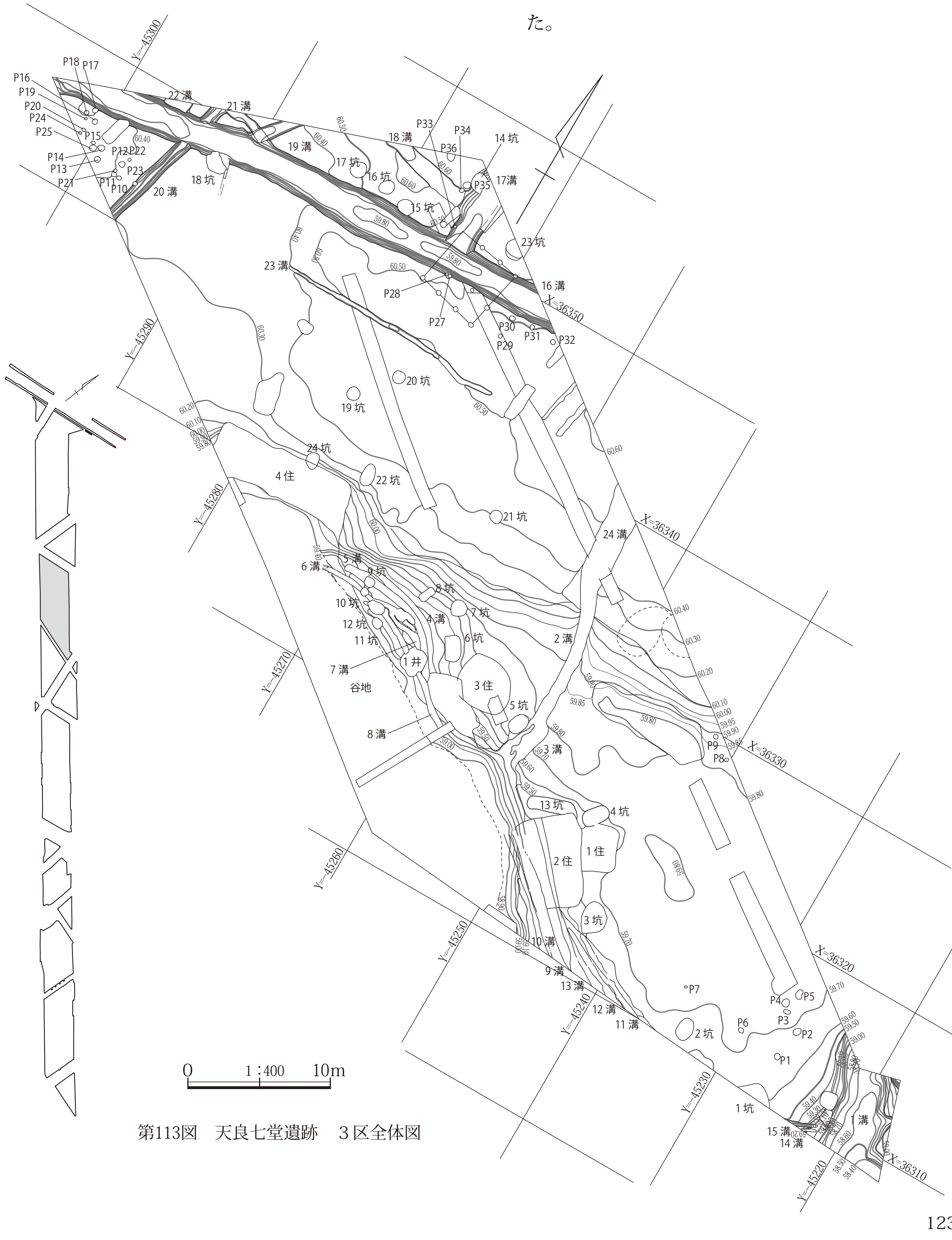
３区は、南西に谷を臨む緩い傾斜面で、古墳時代以降の遺構群が検出されている。

１　古墳時代以降の遺構と遺物

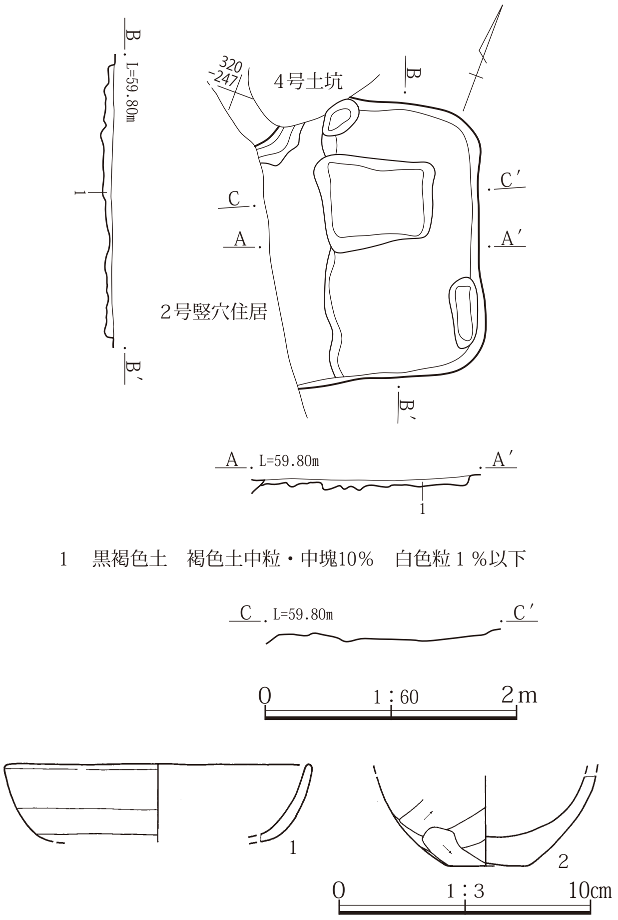
３区で検出された古墳時代から近世に至る遺構は、竪穴住居４軒、掘立柱建物１棟、土坑24基、ピット36基、井戸１基、溝24条、谷地１カ所である。以下のとおり遺構ごとに記す。

（1）竪穴住居

３区において検出された竪穴住居は４軒で、谷地北東縁辺部に分布する。調査区外及び重複遺構のため部分的な調査となった竪穴住居もあるが、時期は８世紀～９世紀である。竪穴住居は、発掘調査による番号順に掲載した。



第113図　天良七堂遺跡　３区全体図



第114図　３区１号竪穴住居と出土遺物

１号竪穴住居(第114図　PL.18)

位置　X＝317～320、Y＝－243～246

形状・規模　後世の削平及び重複遺構のため全体の形状や規模は不明。平面形状は方形あるいは長方形を想定できる。全体を調査できた東壁の長さは3.37m、壁高１～15㎝であった。

重複　１号竪穴住居西半部は２号竪穴住居に切られており、１号竪穴住居の方が古い。４号土坑とも重複し、１号竪穴住居が新しい。

埋没土　後世の削平のため残存状態は不良であった。

床面　床面は不明瞭であるが平坦である。掘り方は褐色土塊や白色粒を含む黒褐色土により床面を構築していた。

炉・竈・貯蔵穴・柱穴・周溝　床面精査及び掘り方調査で検出されなかった。

掘り方　床面からローム面まで約５～10㎝掘り込まれる。中央部やや北寄りに方形の掘り込みが認められるが床下施設は検出されなかった。

遺物出土状態　埋没土から杯(第114図１)、壺(第114図２)が出土した。ほかに非掲載遺物は土師器片27g、須恵器片５gが出土する。

所見　出土遺物から時期は９世紀前半と考えられる。

２号竪穴住居(第115図　PL.18)

位置　X＝313～320、Y＝－244～250

形状・規模　９号溝との重複のため全体の形状や規模は不明。平面形状は方形あるいは長方形を想定できる。全形を確認できた東壁の長さは6.50m、北壁の長さは4.15m、壁高１～17㎝である。

重複　２号竪穴住居が1号竪穴住居西壁を切り、９号溝が２号竪穴住居を切っている。13号溝が住居中央部で北西から南東にかけて貫通しているが、２号竪穴住居との新旧関係は不明である。

埋没土　東半部の埋没土は1号竪穴住居に類似する。ローム粒・塊及び白色粒を含む黒褐色土で埋没していたが、自然堆積か人為埋没かは不明である。

床面　後世の削平により残存状態は不良。３層上面が床面と想定され、東壁から中央部にかけて３～４㎝緩やかに低かった。掘り方はローム土と黒褐色土の混土により床面を構築し固く締まっていた。

炉・竈・貯蔵穴・周溝・柱穴　床面精査および掘り方調査を実施したが検出されなかった。

掘り方　床面からローム面まで約５㎝掘り込まれ、床下施設は検出されなかった。

遺物出土状態　埋没土から杯(第115図１)、甕(第115図２)が出土した。ほかに土師器片161ｇ、須恵器片14ｇが出土した。

所見　出土遺物から時期は９世紀後半と考えられる。

３号竪穴住居(第116図　PL.18)

位置　X＝323～326、Y＝－255～259

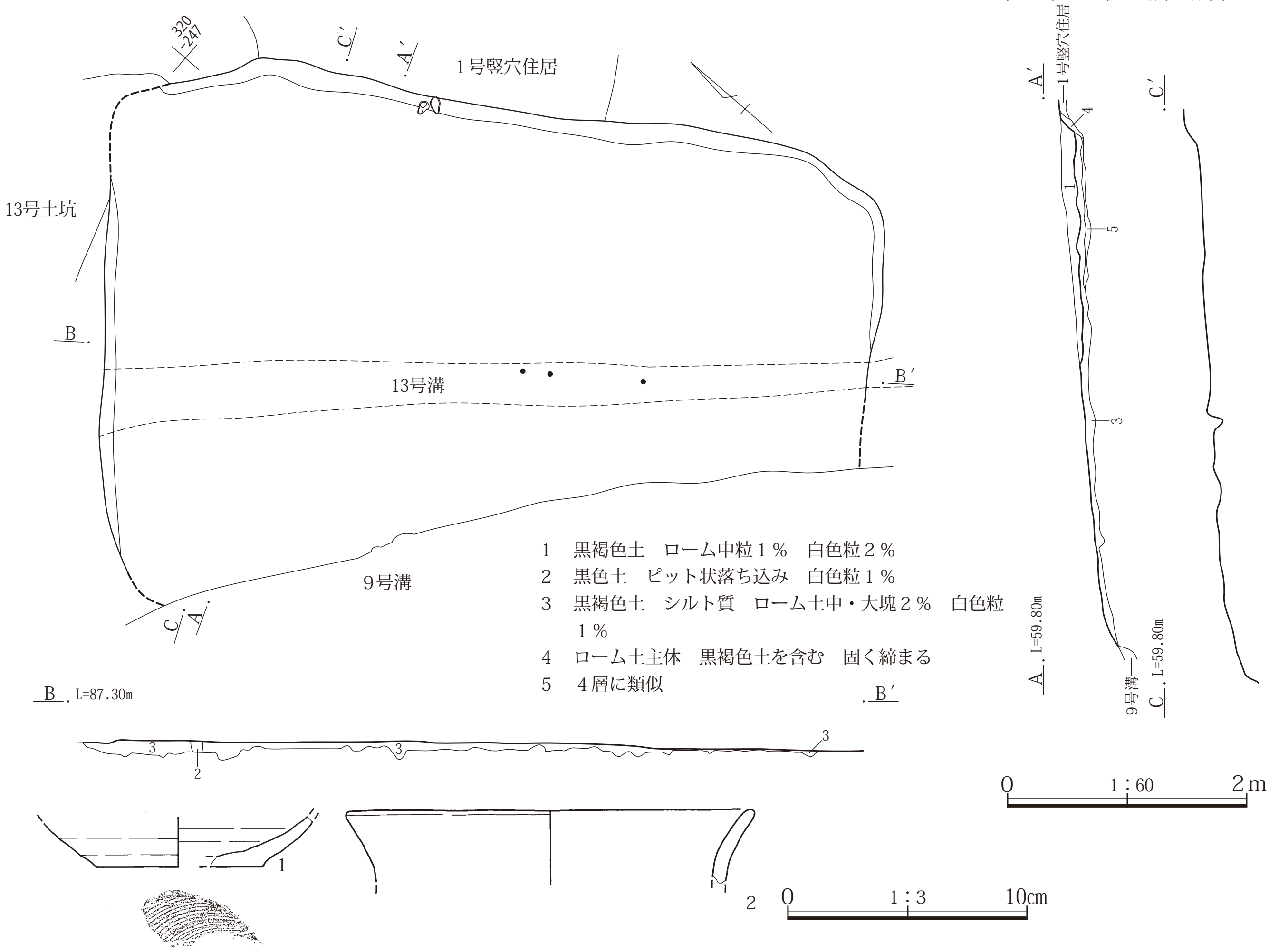
形状・規模　後世の削平により残存状態は不良。南西側は攪乱のため一部が失なわれていた。平面形状は不明といわざるを得ない。検出された規模は長軸長4.46m、短軸長3.56m、深さ１～８㎝、床面積は11.74㎡である。

主軸方向　N－51°－W

重複　なし。

埋没土　後世の削平により埋没状況は不明である。

床面　後世の削平のため床面は不明瞭であった。壁際から中央部周辺は３～５㎝低かった。掘り方は黒褐色土と



第115図　３区２号竪穴住居

褐色土の混土で床面を構築していた。

炉・竈・貯蔵穴・周溝　床面精査及び掘り方調査を実施したが検出されなかった。

柱穴　床面精査によりピット４基、掘り方調査により１基が検出された。いずれも楕円形で、規模(長径×短径×深さ(㎝))は、Ｐ１(22×15×21)、Ｐ２(23×15×16)、Ｐ３(25×22×27)、Ｐ４(30×16×16)、Ｐ５(24×22×８)である。埋没土はローム粒・塊を含む黒褐色土である。2.01ｍ離れるＰ１とＰ４は、形状からすれば柱穴の可能性があるが、住居形状が不明確なため確定できなかった。

床下の状態　南側に土坑状の落ち込みが認められるが床下施設は検出されなかった。

遺物出土状態　床面直上から杯(第116図１)が出土した。ほかに土師器片132ｇ、須恵器片28ｇが出土した。

所見　出土遺物から時期は８世紀前半と考えられる。

４号竪穴住居(第117・118図　PL.18)

位置　Ｘ＝328 ～ 332、Ｙ＝271 ～ 282に位置する。

形状・規模　谷部の後世の削平により南側は未検出であるが、方形と推定される。確認できた北壁の東西長は10.44ｍ、壁高７～ 47㎝である。

重複　24号土坑と重複し、新旧関係は不明。

埋没土　埋没土はローム塊を含む褐色土で、レンズ状の堆積が認められ自然堆積と考えられる。

床面　壁際より中央部周辺は約10㎝緩やかに低かった。

炉・竈・貯蔵穴・周溝・柱穴　床面精査および掘り方調査で検出されなかった。

遺物出土状態　埋没土から杯(第118図１)、杯蓋(第118図２)、甕(第118図３)が出土した。ほかに土師器片585ｇ、須恵器片75ｇが出土する。

所見　出土遺物から時期は８世紀後半と考えられる。

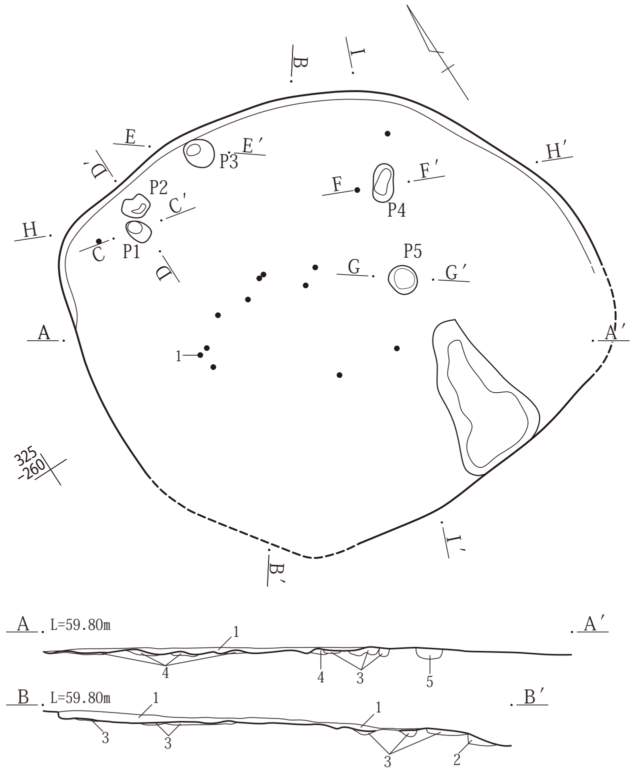
(２)掘立柱建物

３区から検出した掘立柱建物は１棟のみである。調査区北側に位置している。

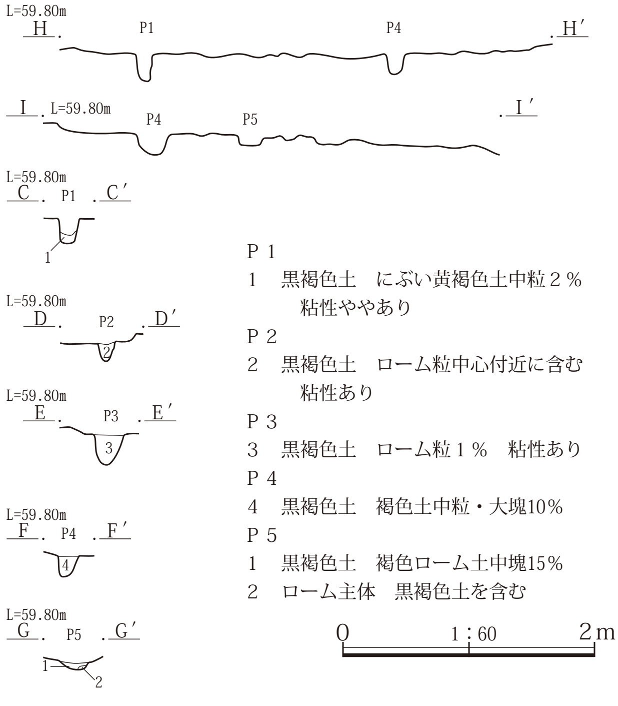
１号掘立柱建物(第119図　PL.18)

位置　Ｘ＝345 ～ 351、Ｙ＝－269 ～ 275

重複　柱穴Ｐ６が16号溝と、北西側で17号溝と重複し、

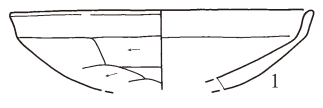


1　暗褐色土　10㎝大の黄褐色塊を含む　粘性やや弱く締まりあり
2　黒褐色土　粘性ややあり締まりあり
3　黒褐色土　締まりあり
4　褐色土　地山ローム土と黒褐色土の混土
5　黒褐色土　褐色土中粒・小塊２％



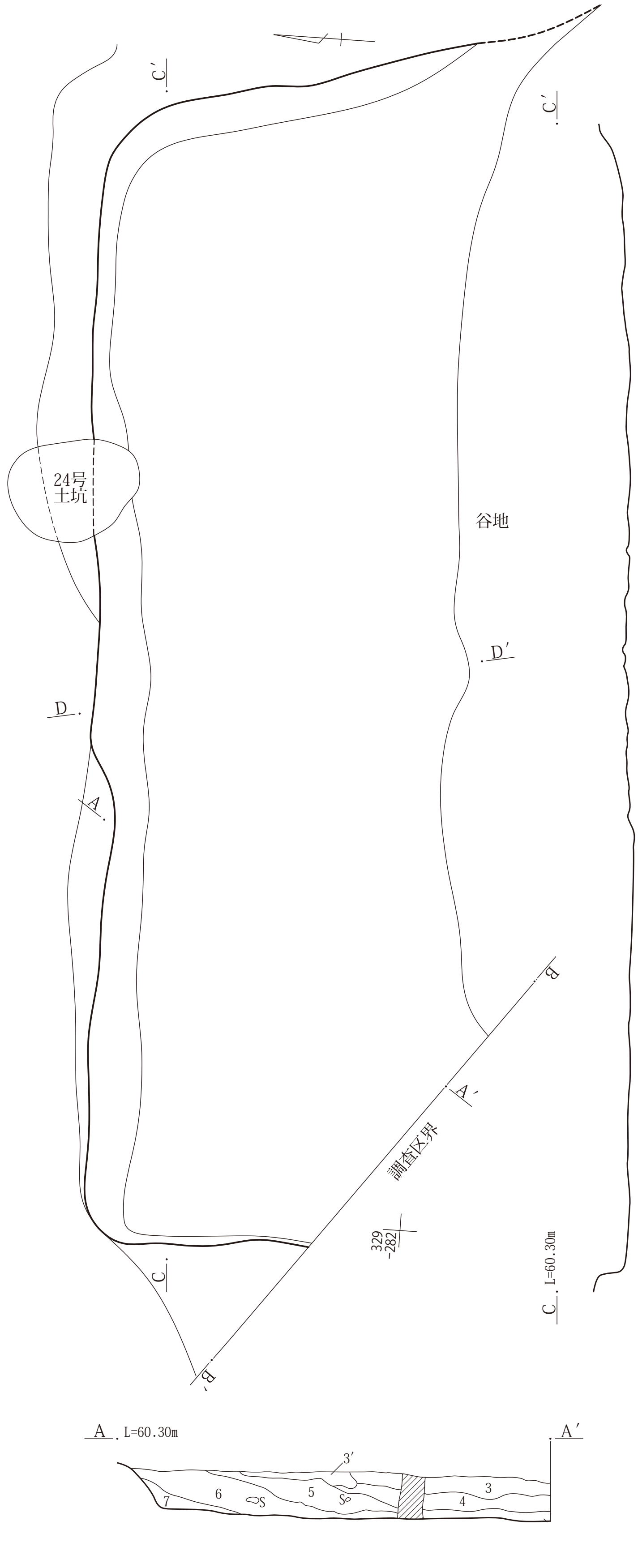
P１
1　黒褐色土　にぶい黄褐色土中粒２％
　　粘性ややあり
P２
2　黒褐色土　ローム粒中心付近に含む
　　粘性あり
P３
3　黒褐色土　ローム粒１％　粘性あり
P４
4　黒褐色土　褐色土中粒・大塊10％
P５
1　黒褐色土　褐色ローム土中塊15％
2　ローム主体　黒褐色土を含む

0　1：60　2ｍ



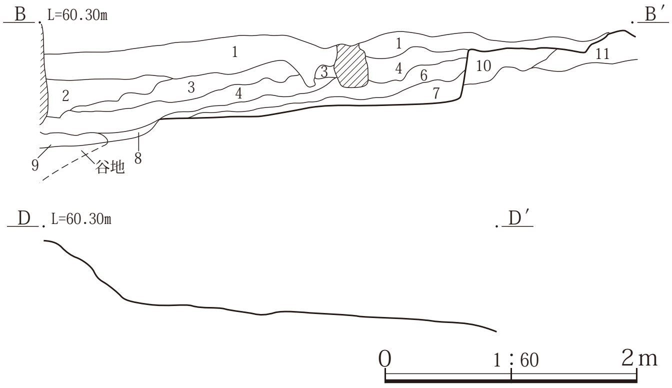
0　1：3　10㎝

第116図　３区３号竪穴住居と出土遺物

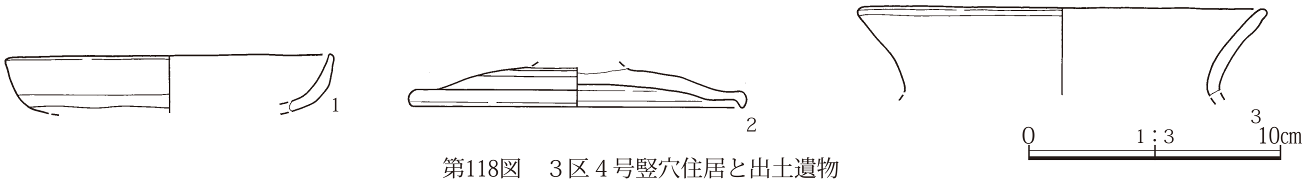


0　1：60　2ｍ

第117図　３区４号竪穴住居



1　黒褐色土　ローム小塊少量含む　焼けた礫を含み炭化物が散在
2　黒色土　１層と近似　３層のAs-Bを僅かに含む
3　黒色土　砂層でAs-B混土層　黒色土と混在する
4　黒色土　As-Bを含み砂質　粘性締まりともに強い
5　黒褐色土　明るい色調やや褐色がかる　粘性締まりあり
6　褐色土　ローム小塊を含む
7　褐色土　ローム小塊多量に含む　黒色土小塊を含む　炭化物僅かに含む
8　砂層　北側はローム塊を含む　川砂か　南側は粘土塊を含む
9　黒色砂質土　８層と混在しローム大塊を含む
10　黒褐色土　１層に類似　ローム塊多量に含む　色調は明るい
11　黒褐色土　２～10cm大のローム塊多量に含む



第118図　３区４号竪穴住居と出土遺物

新旧関係は不明である。

主軸方向　Ｎ－77°－Ｗ

規模・形態　南辺4.75m、東辺4.63mのいわゆる側柱建物である。16・17号溝との重複のため未検出の柱穴もあるが、東西３間、南北３間と推定される。柱穴の計測値等は第30表のとおりである。柱穴は32 ～ 38cmの円形及び楕円形で、直径11 ～ 22cmの柱痕がＰ８以外において確認できた。北辺と南辺の柱間は、ともに５尺である。東辺はＰ４～Ｐ５間が６尺、Ｐ５～Ｐ６間は10尺と長いので間に柱があった可能性が強い。

出土遺物　なし。

所見　時期の特定はできなかった。

(３)土坑・ピット

３区から検出した土坑は24基、ピットは36基である。遺物出土や平面形状に特徴が認められる土坑、ピットについて詳述する。すべての土坑及びピットは第30表(152・153頁)において記す。

４号土坑(第120図　PL.18)

1号竪穴住居よりも古い。形状は長楕円形を呈する。底面は平坦であり壁は中段まで垂直となり開口部にかけて斜めに立ち上がる。埋没土にはレンズ状の堆積が認められることから、自然埋没と考えられる。出土遺物は、掲載しなかったが、土師器片132ｇ、須恵器28ｇが出土した。重複関係から1号竪穴住居より古いが、時期を確定することはできなかった。

５号土坑(第120図)

３号溝と重複し３号溝が新しい。平面形状は長楕円形を呈する。下層は褐色粘質土塊を多く含み中層から上層はローム粒・塊を含む黒褐色土による自然堆積と考えられる。出土遺物は、掲載しなかったが土師器片14ｇである。時期は遺物からも確定することはできなかった。

６号土坑(第120図)

平面形状は、長楕円形を呈する。埋没土には、レンズ状堆積が観察できることから自然堆積と考えられる。出土遺物は、掲載しなかったが土師器片43ｇである。時期は遺物からも確定することはできなかった。

７号土坑(第120・121図　PL.18)

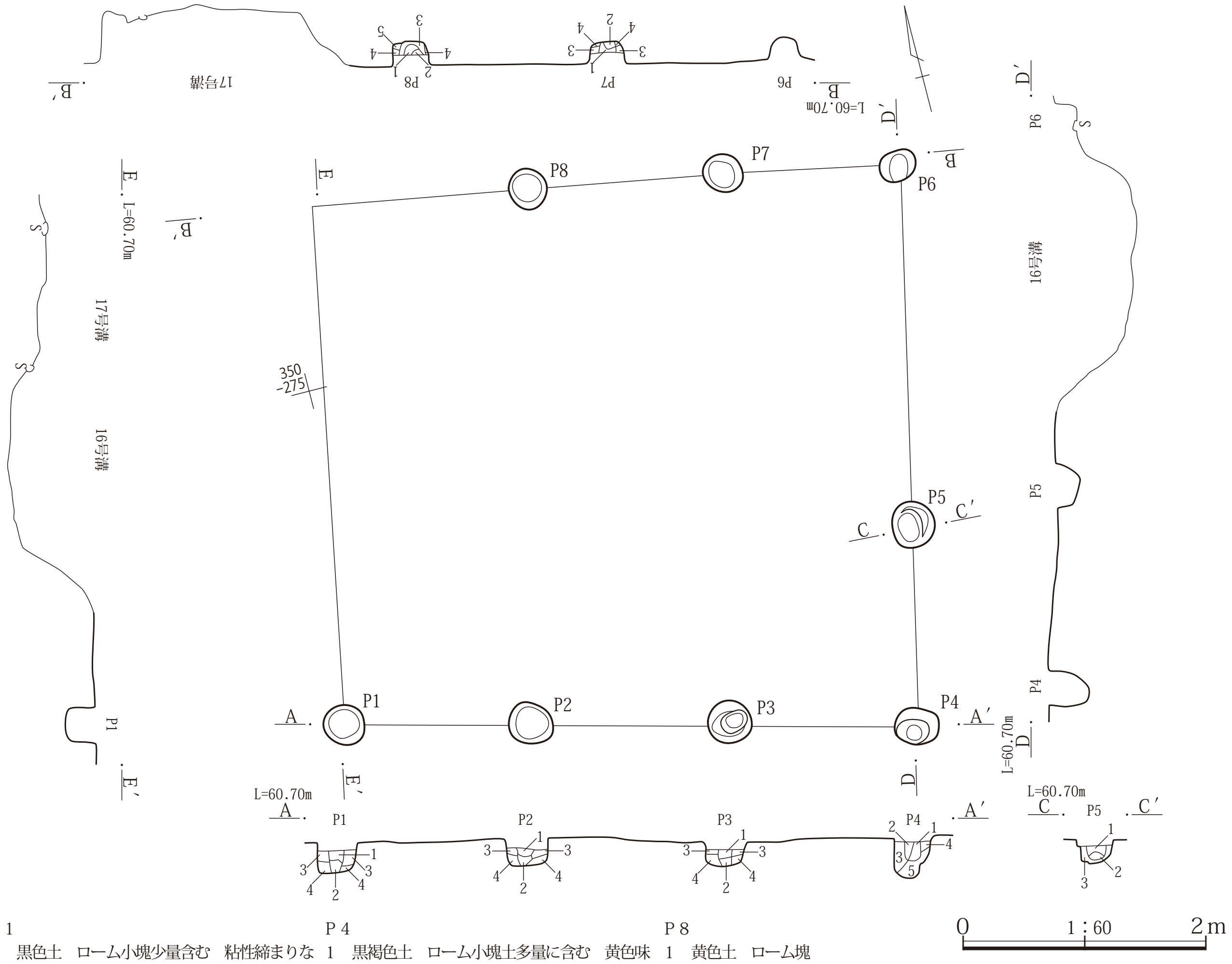
平面形状は円形を呈する。断面形状から井戸の可能性も考えられる。中央部にローム粒を含む帯状のにぶい黄褐色土が認められ、上下に明確に分層することができることから、人為的埋没の可能性が高い。埋没土中から台付甕(第121図７坑- １・２)が出土した他、土師器片77ｇが出土した。台付甕は古墳時代前期のものであるが、少量であり、遺構の時期を確定することはできず、時期不明である。

８号土坑(第121図)

平面形状は隅丸長方形を呈する。埋没土は､ローム粒・塊を含む黒褐色土がレンズ状堆積しており、自然堆積と考えられる。出土遺物はなく、時期不明である。

９号土坑(第121図　PL.18)

平面形状は円形で、断面形状は浅い方形を呈する。５号溝と重複し、新旧関係は不明である。ローム粒・塊を含む黒色砂質土主体で、堆積状況から人為的埋没と考えられる。遺物は埋没土中から中世の皿(第121図９土- １)



P１
1　黒色土　ローム小塊少量含む　粘性締まりなし
2　黄褐色土　ローム塊多量に含む　粘性締まりなし
3　黄褐色土　ローム塊主体　黒色土塊を含む
4　黒色土　均一　粘性あり

P２
1　黒色土　ローム塊少量含む　粘性締まりなし
2　黄褐色土　ローム塊と黒色土の混土
3　黒色土　ローム小塊を含む
4　黒褐色土　ローム大塊を含む

P３
1　黒色土　ローム塊少量含む　粘性締まりなし
2　黄褐色土　ローム塊と黒色土の混土
3　黄色土　ローム塊主体　黒色土塊僅かに含む
4　黒色土　ローム小塊少量含む

P４
1　黒褐色土　ローム小塊土多量に含む　黄色味が強い
2　黒褐色土　１層よりローム塊多量に含む　黄色味が強い
3　黒褐色土　ローム塊を斑状に含む
4　黄色土　ローム塊主体　黒色土塊少量含む
5　ローム塊と黒色土塊の混土

P５
1　黄褐色土　ローム塊多量に含む
2　褐色土　均一　ローム塊少量含む
3　黒褐色土　ローム塊を含む

P７
1　黒色土　ローム塊少量含む
2　黒褐色土　ローム塊多量に含む
3　黒褐色土　ローム塊を斑状に含む
4　黒色土　ローム塊なし

P８
1　黄色土　ローム塊
2　黒色土　粘性締まりなし
3　黒褐色土　ローム小塊を含む
4　黄色土　ローム塊
5　黒色土　ローム塊なし

第29表　天良七堂遺跡３区１号掘立柱建物計測表

柱穴No.	規模（cm）			形状	面積21.38㎡
	長径	短径	深さ		柱間の寸法（m）
P１	35	33	25	円形	P1-P2 1.55
P２	36	33	21	円形	P2-P3 1.64
P３	35	35	20	円形	P3-P4 1.56
P４	36	30	30	楕円形	P4-P5 1.67
P５	38	35	19	円形	P5-P6 2.96
P６	33	31	20	円形	P6-P7 1.45
P７	35	32	17	円形	P7-P8 1.60
P８	35	32	18	円形	

第119図　３区１号掘立柱建物

が出土した他、土師器片30ｇが出土している。時期は、出土遺物から中世以降と考えられる。

12号土坑（第121図）

平面形状は不整長円形で、断面形状は浅い方形を呈する。７・８号溝と重複し、埋没土の確認状況から12号土坑が新しい。灰黄褐色土粒・塊を含む黒褐色土で埋没しており、堆積状況から人為的埋没と考えられる。出土遺物は、掲載しなかったが埋没土中から土師器片８ｇ、須恵器片３ｇが出土した。時期は、埋没土の状況が９号土坑に類似しており、中世以降の可能性があるが、遺物からは確定することができなかった。

13号土坑（第121図）

２号竪穴住居と重複し13号土坑が新しいと考えられる。平面形状は不整長方形で、断面形状は浅い方形を呈する。褐色土粒・塊、白色粒を含む黒褐色土で埋没しており、堆積状況から人為的埋没と考えられる。出土遺物はなく、時期を確定することはできなかった。

14号土坑（第121図　PL.19）

平面形状は円形を呈する。17号溝と重複し新旧関係は不明。底面や壁面、埋没土に多量の礫が含まれ、人為的埋没と考えられる。出土遺物は、掲載しなかったが土師器片７ｇが出土した。時期を確定できるような遺物出土がなかったため、時期不明である。

15号土坑（第121図）

16号溝と重複し、検出状況から15号土坑が新しい。ローム塊を多量に含む黒褐色土で埋没しており、堆積状況から人為的埋没土と考えられる。出土遺物はなく、時期の確定はできなかった。

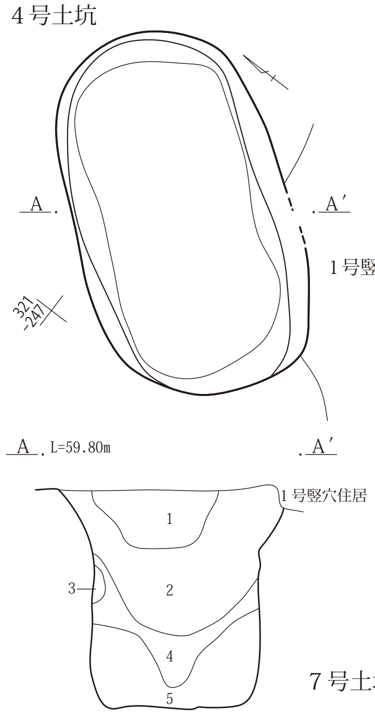
22号土坑（第121図）

平面形状は長円形で、断面形状は台形を呈する。埋没土は、ローム粒を含む黒色土と黒褐色土で、堆積状況から自然堆積と考えられる。遺物出土はなく、時期は不明である。

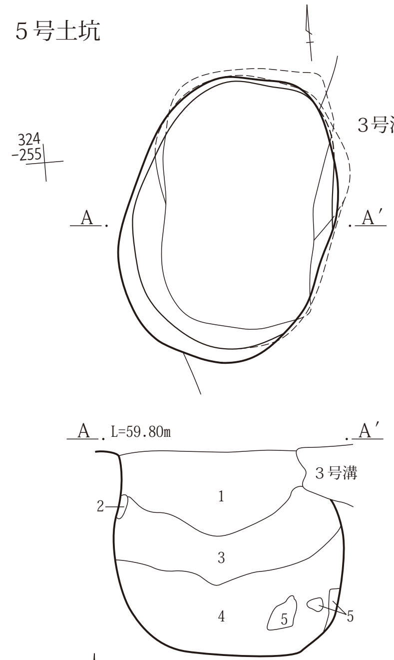
24号土坑（第121図）

平面形状は楕円形で、断面形状は台形を呈する。４号竪穴住居と重複し新旧関係は不明。埋没土は、小礫を含む黒褐色土及び褐色土と黒色土の混土で、堆積状況から

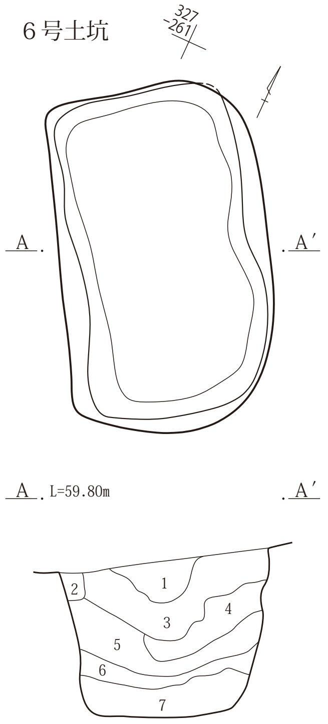
４号土坑



５号土坑

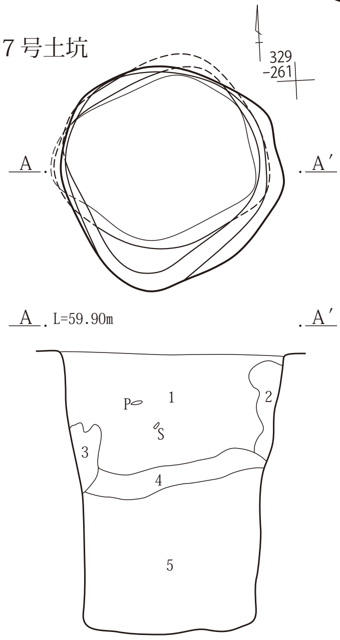


６号土坑



４号土坑
1　黒褐色土　白色粒１％以下
2　黒褐色土　１層と同質　黒味なし
3　灰黄褐色土　粘質土塊
4　黒褐色土　褐色土中粒・小塊２％　粘性あり
5　黒褐色土　４層の黒褐色土と褐色土の互層

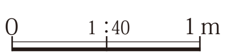
７号土坑



５号土坑
1　黒褐色土　白色～黄白色粒１％
2　褐色土　ローム塊
3　黒褐色土　ローム小粒・中塊を含む　粘性ややあり
4　黒褐色土と褐色粘質土の混土　褐色粘質土中粒・大塊５％　粘性強い
5　灰黄褐色土　粘質土塊

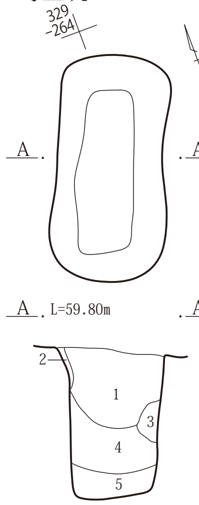
７号土坑
1　黒色砂質土　暗褐色土中粒・中塊１％　白色粒１％以下
2　暗褐色土と黒褐色砂質土の混土　ローム小粒・小塊３％
3　黒褐色砂質土　２層に類似
4　にぶい黄褐色土　ローム小粒・小塊２％
5　黒褐色砂質土　ローム小塊１％

６号土坑
1　黒褐色土　白色～黄白色粒１％以下
2　黒褐色砂質土
3　黒褐色土　白色～黄白色粒１％以下　粘性ややあり
4　黒褐色土　３層より黒色味少ない　粘性あり
5　４層と黒褐色粘質土の混土　粘性強く固く締まる
6　灰黄褐色土　鉄分沈着し赤褐色味あり　粘性強く固く締まる
7　黒褐色粘質土　粘性強く固く締まる



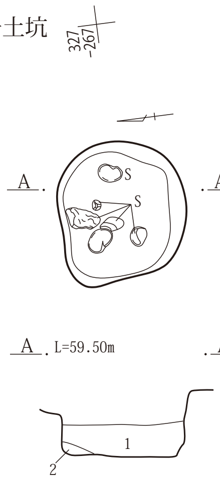
第120図　３区４～７号土坑

8号土坑



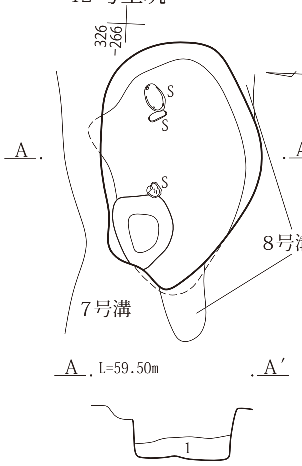
8号土坑
1　黒褐色土　褐色土小粒１％
2　黒褐色土　ローム小粒１％　粘性締まりややあり
3　黒褐色粘質土　ローム中粒10%　やや締まる
4　黒褐色土　ローム中粒・小塊下位に５％　粘性あり
5　４層と同質　ローム粒・塊１～２％

9号土坑



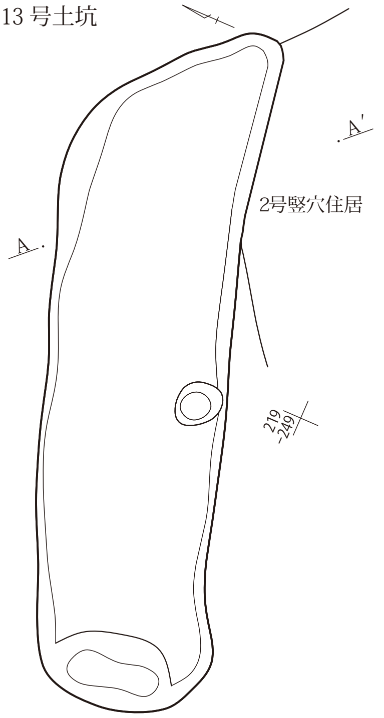
9号土坑
1　黒色砂質土　黄褐色土中粒・小塊１％　やや締まる
2　黒色砂質土　ローム中粒10%

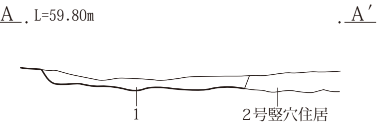
12号土坑



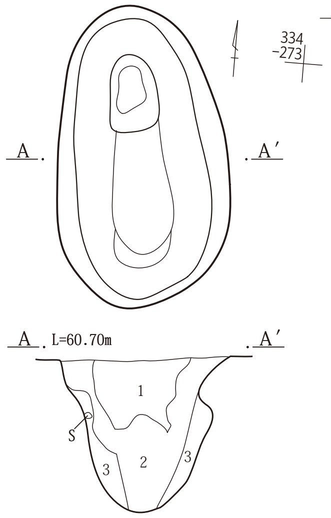
12号土坑
1　黒褐色土　やや砂質　灰黄褐色粘質土中粒・中塊20%
13号土坑
1　黒褐色土　褐色土中粒・小塊２％　白色粒１%以下

13号土坑

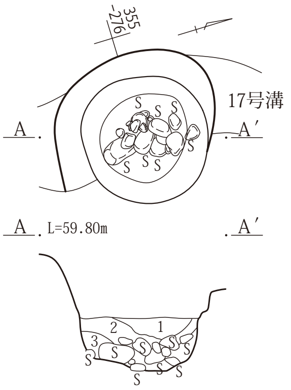




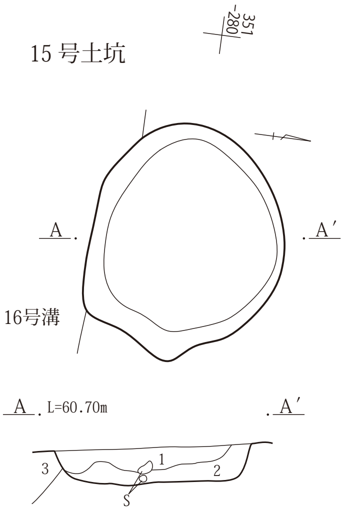
22号土坑



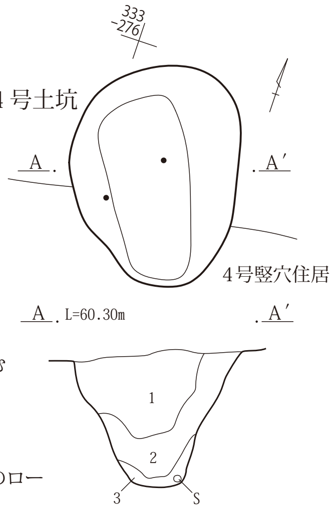
14号土坑



15号土坑



24号土坑

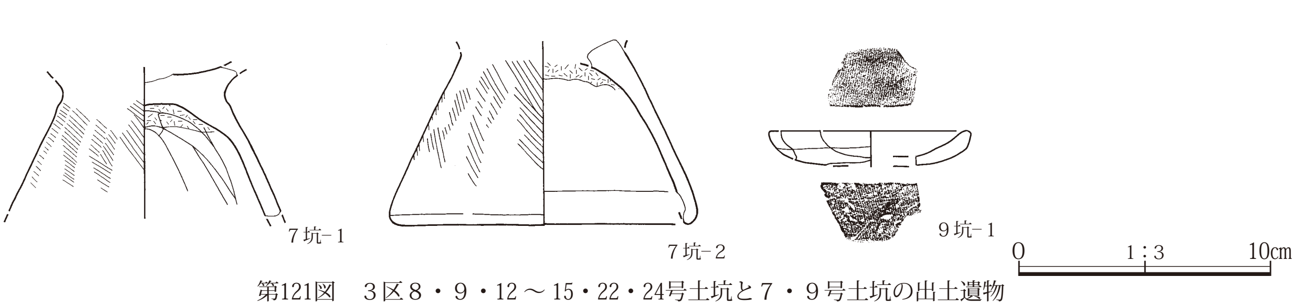


14号土坑
1　黒色土　ローム小塊少量含む
2　黒褐色土　２～５cm大のローム塊多量に含む
3　黒褐色土　２層より明るい色調　ローム塊を含む

15号土坑
1　黒褐色土　1cm大のローム塊多量に含む　粘性締まりなし
2　黒褐色土　１層よりローム塊多い　粘性締まりなし
3　褐色土　16号溝埋没土

22号土坑
1　黒色土　黒色土主体　褐色土塊を含む
2　黒褐色土　ローム小塊を含む
3　黒褐色土　２層よりも明るい色調
24号土坑
1　褐色土と黒色土の混土　２～５cm大のローム塊を含む
2　黒褐色土　小礫多量に含む
3　黒褐色土　砂質　小礫を含む　２層より明るい色調

0　1:40　1m



第121図　３区８・９・12～15・22・24号土坑と７・９号土坑の出土遺物

自然堆積と考えられる。出土遺物は、掲載しなかったが土師器片18ｇが出土した。時期は遺物からも確定することができなかった。

８号ピット（第122図）

平面形状は円形で、断面形状は台形を呈する。１層の黒褐色土は、柱痕の可能性がある。遺物の出土はなく、時期の確定はできなかった。

26号ピット（第122図）

27号ピットと重複し、検出状況から27号ピットが新しい。平面形状は円形で、断面形状は台形を呈する。１層は柱痕の可能性があり、ローム塊を含む黒褐色土で埋没していた。遺物の出土はなく、時期を確定することはできなかった。

27号ピット（第122図）

26号ピットと重複し、検出状況から27号ピットが新しい。平面形状は円形で、断面形状は台形を呈している。３層は柱痕の可能性がありローム塊を含む黒褐色土で埋没していた。遺物の出土はなく、時期の確定はできなかった。

28号ピット（第122図）

平面形状は円形で、断面形状は台形を呈する。１層は柱痕の可能性があり、ローム塊を含む黒褐色土や黄色土で埋没していた。遺物の出土はなく、時期の確定はできなかった。

29号ピット（第122図）

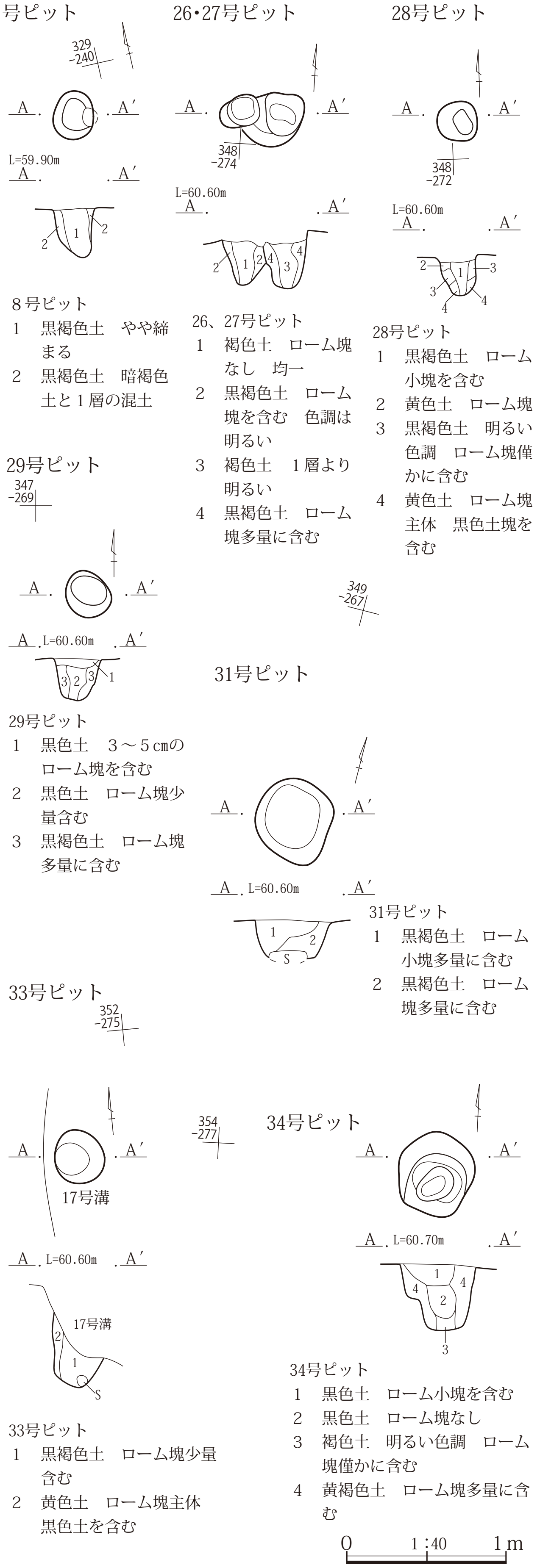
平面形状は円形で、断面形状は台形を呈する。２層は柱痕と見られ、ローム塊を多量に含む黒色土で埋没していた。遺物の出土はなく、時期を確定することはできなかった。

31号ピット（第122図）

平面形状は円形で、断面形状は浅い方形を呈する。ローム塊を多量に含む黒褐色土で埋没しており、人為的埋没と考えられる。埋没土中から砥石が１点（第123図31ピット１）出土し、笠松遺跡１区154号ピットから出土した砥石と接合した。出土した遺物は砥石だけであるため、時期を確定することはできなかった。

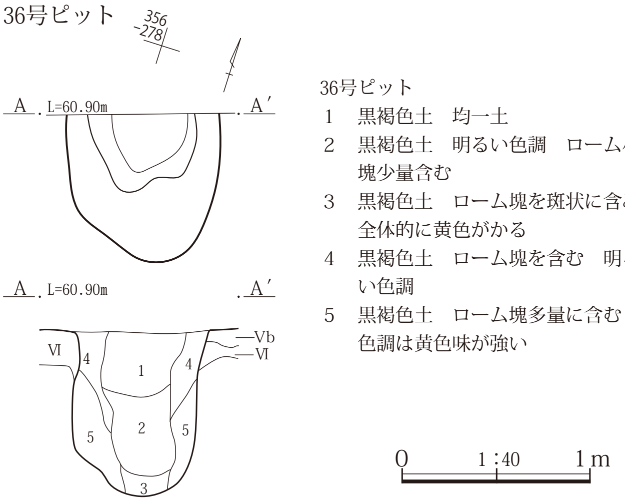
33号ピット（第122図）

17号溝と重複し、埋没土の確認状況から33号ピットが古い。平面形状は円形を呈する。ローム塊を多量に含む黄色土及び黒褐色土で埋没しており、断面観察から人為的埋没と考えられる。遺物の出土はなく、時期を確定す

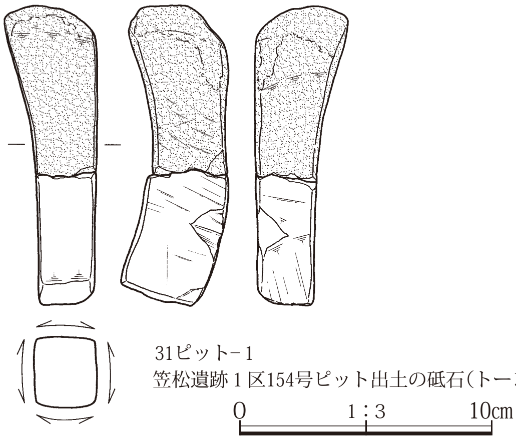


第122図　３区８・26～29・31・33・34号ピット

36号ピット



36号ピット
1　黒褐色土　均一土
2　黒褐色土　明るい色調　ローム小塊少量含む
3　黒褐色土　ローム塊を斑状に含み全体的に黄色がかる
4　黒褐色土　ローム塊を含む　明るい色調
5　黒褐色土　ローム塊多量に含む　色調は黄色味が強い



31ピット－1
笠松遺跡１区154号ピット出土の砥石(トーン)と接合

第123図　３区36号ピットと31号ピットの出土遺物

ることはできなかった。

34号ピット(第122図)

平面形状は円形で、断面形状は台形を呈する。１～３層の黒色土及び褐色土は柱痕の可能性があり、ローム塊を含む黄褐色土で埋没していた。遺物の出土はなく、時期を確定することはできなかった。

36号ピット(第125図)

平面形状は長円形で、断面形状は円筒形を呈する。１～３層の黒褐色土は柱痕とみられ、ローム塊を含む黒褐色土で埋没していた。遺物の出土はなく、時期を確定することはできなかった。

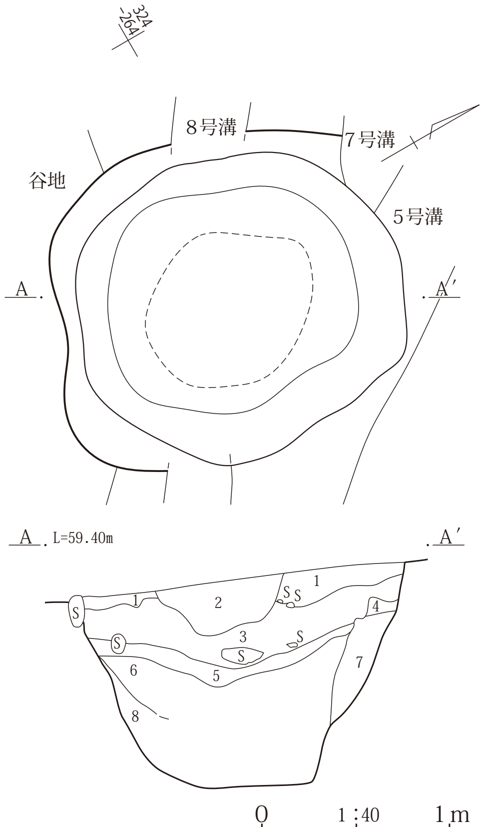
(４)井戸

１号井戸(第124図　PL.19･36)

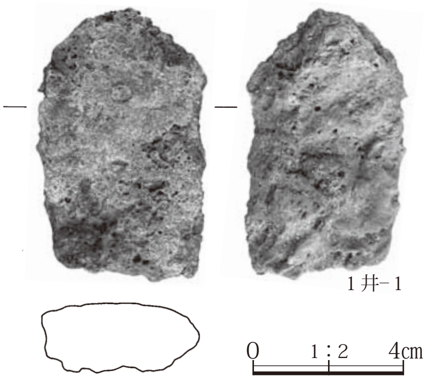
X＝322 ～ 324、Y＝－261 ～ 263に位置する。５・８号溝と重複し、１号井戸より５号溝が古く、８号溝が新しい。平面形状は不整円形で、規模は直径1.86mで、深さは湧水のため底面まで調査できなかったので不明である。壁面は開口部にかけて斜めに立ち上がる。上層には礫を含むやや砂質の黒褐色土や黒褐色粘質土などがレンズ状堆積しており自然堆積と考えられるが、下層の埋没状況は不明である。埋没土中から鉄滓(第124図１井－１)が出土した他、土師器片23ｇが出土した。出土遺物から時期を確定することはできなかった。

(５)溝・谷地

３区では溝24条及び谷地が検出された。出土遺物や埋没土の観察から、溝の時期は22条が奈良・平安時代、２



1　黒褐色土　やや砂質　褐色～黒褐色土小粒・小塊１％　焼土中粒　炭化物１％
2　黒褐色砂質土　ローム中粒・大塊１％　８号溝埋没土
3　黒褐色土と黄褐色砂質土の混土　ローム中粒・小塊１％
4．黒褐色土　ローム中粒・小塊２％　粘性あり
5　黒褐色粘質土　鉄分沈着あり　にぶい黄褐色土小１％　粘性強い
6　黒褐色土　やや砂質　にぶい黄褐色土小塊１％　粘性あり
7　黒褐色土　やや砂質　にぶい黄褐色土中粒・大塊を含む
8　黒褐色粘質土　灰黄褐色土小～大塊10％　粘性強い



第124図　３区１号井戸と出土遺物

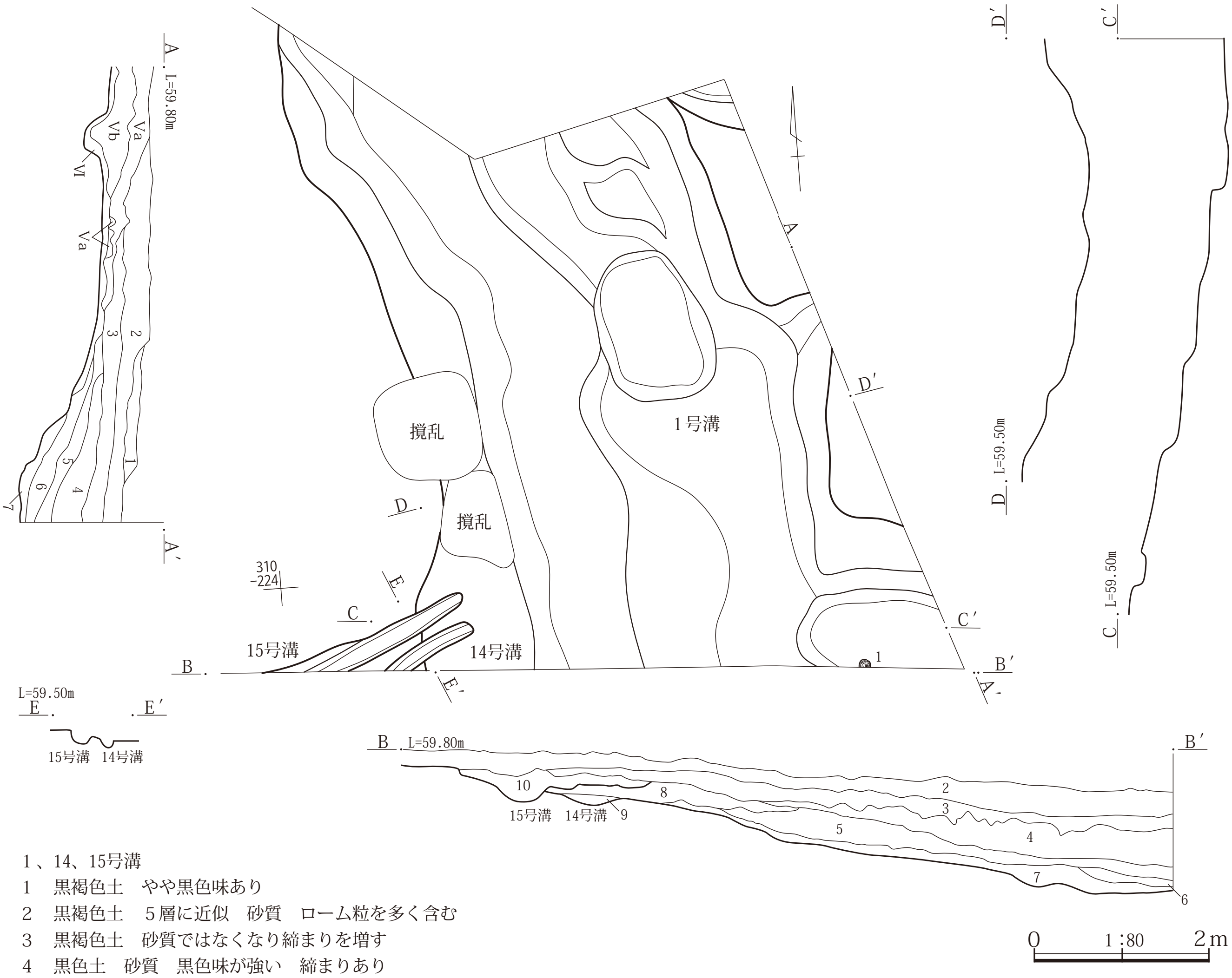
条が中世以降と考えられる。大規模な谷地が検出されたが、２区１号谷地と一連の谷地と考えられる。

１号溝（第125図　PL.19・36）

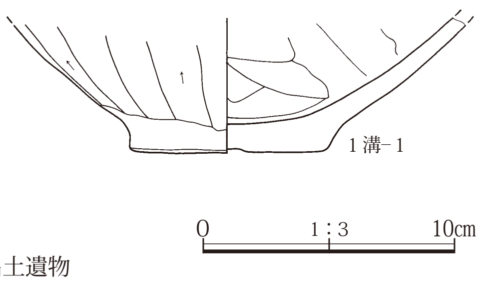
Ｘ＝308 ～ 316、Ｙ＝－216 ～ 225に位置する。14・15号溝と重複し、14号溝より新しく、15号溝より古いと考えられる。南北方向の溝で、底面の標高は北端58.65m、南端58.38m、比高27㎝で北から南に傾斜していた。埋没土下層は砂質土で水流の痕跡が認められることから、南側に送水するための水路の可能性が高い。あるいは南側谷に合流する支流か。検出できた規模は、長さ7.68m、上面幅3.92 ～ 5.80m、深さ0.12 ～ 1.07mである。埋没土は、ローム粒を含む黒色砂質土や黒褐色粘質土などであり、堆積状況から自然堆積と考えられる。遺物は、埋没土中から土師器の甕（第125図１溝‐１）が出土した他、土師器片353ｇが出土した。位置関係や埋没土の類似から、２区北側で検出した１号溝とは直交して連続する位置関係にある。時期は、出土遺物から６世紀ないし７世紀代以降と考えられる。

14号溝（第125図）

Ｘ＝309、Ｙ＝－221 ～ 222に位置する。１号溝に直交



１、14、15号溝
1　黒褐色土　やや黒色味あり
2　黒褐色土　５層に近似　砂質　ローム粒を多く含む
3　黒褐色土　砂質ではなくなり締まりを増す
4　黒色土　砂質　黒色味が強い　締まりあり
5　黒色土　砂多量　ローム小塊を含む　粘性締まりあり
6　黒褐色土　下部白色粘土を塊状に含む　やや明るい色調　粘性締まり強い
7　にぶい黄褐色土　下部白色粘土塊主体　黒色土塊を含む　粘性締まり強い
8　黒褐色土　７層と近似　ローム小塊少量含む
9　黒褐色土　ローム塊を含む　粘性あり　13層より黒味を増す
10　黒褐色土　黒褐色土主体　２～５㎝大のローム塊多量に含む　粘性あり



第125図　３区１・14・15号溝と１号溝の出土遺物

して合流する。断面観察及び埋没土の確認状況から14号溝が古いと考えられる。南西から北東方向の溝で、底面の標高は南西端59.13m、北東端59.11mと、底面はほぼ平坦である。検出できた長さは1.00m、上面幅26㎝、深さ７～13㎝である。ローム塊を含む黒褐色土で埋没しており、下層に水流の痕跡は認められないが、埋没状況は判然としない。時期は、１号溝より古い時期としか判断できない。

15号溝（第125図）

Ｘ＝309、Ｙ＝－221～224に位置する。1号溝と重複し、15号溝が新しい。南西から北東に走行し、底面の標高は南西端59.18m、北東端59.15mで、底面に傾斜は見られず、埋没土下層にも水流の痕跡は認められないことから、水路とは考えにくい。検出できた長さは2.40m、上面幅18～32㎝、深さ８～17㎝である。ローム大塊を多量に含む黒褐色土で埋没しており、埋没土の状況から人為的埋没の可能性が高い。出土遺物はなく、時期を確定することはできないが、１号溝との重複関係から７世紀代以降の可能性がある。

２号溝（第126・127図　PL.19）

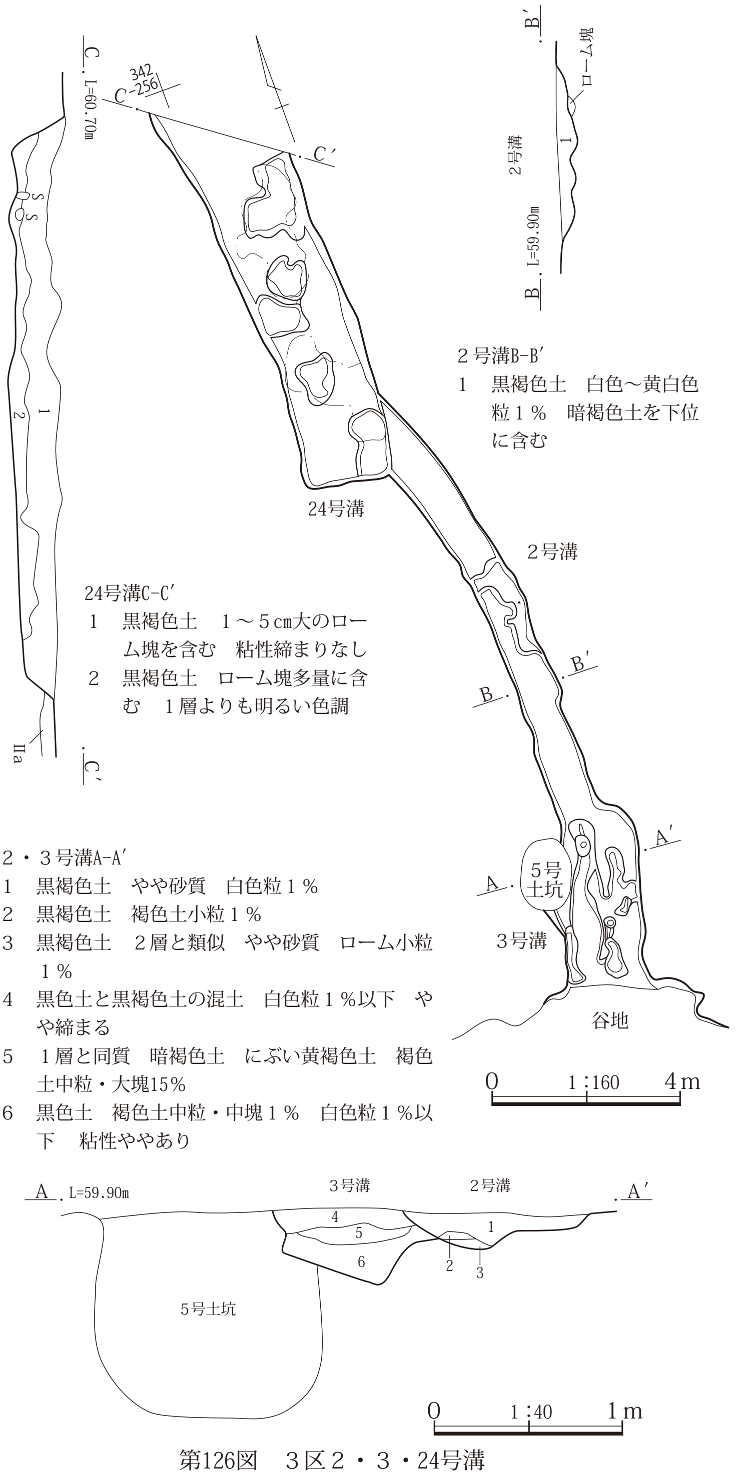
Ｘ＝323～334、Ｙ＝－251～245に位置する。南北走行で３・24号溝、１号谷地と重複する。３号溝、１号谷地より新しいが、24号溝との新旧関係は不明である。底面の標高は北端60.25m、南端59.48m、比高77㎝、6.42％の勾配で南に向かって傾斜しており、埋没土下層に水流の痕跡が認められることから、水路の可能性が高い。検出できた規模は、長さ12.00m、上端幅0.76～1.50m、深さ２～13㎝である。南端は、谷地に合流しており、谷地に水を導くための溝と考えられる。埋没土は黒褐色砂質土で自然堆積と考えられる。遺物は埋没土から杯（第127図２溝－１）、甕（第127図２溝－２）が出土した。２は４号溝出土遺物と接合した。ほかに土師器片378ｇ、須恵器片17ｇが出土した。出土遺物から溝の時期は７世紀と考えられる。

３号溝（第126図　PL.19）

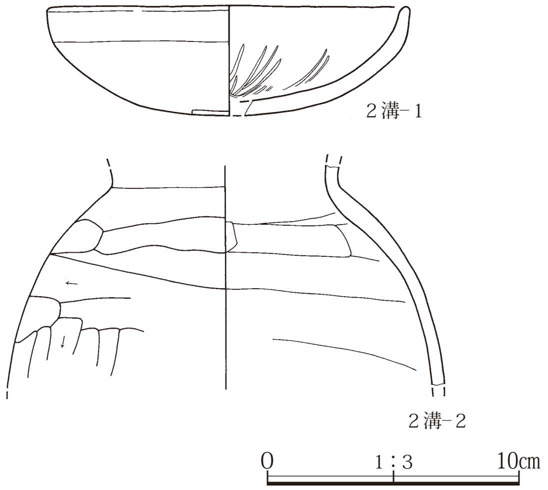
Ｘ＝320～324、Ｙ＝－251～255に位置する。３号溝が５号土坑埋没土を切り、３号溝埋没土を２号溝が切る。南北方向の溝で、底面の標高は北端59.50m、南端59.33m、比高17㎝である。勾配は4.80％であり北から南に傾斜していた。検出できた長さは3.54m、上端幅32～64㎝、深さ11～38㎝である。南端は谷地に合流しており、２号溝と同様に谷地に導水するための溝とも考えられるが、底部に水流の痕跡は認められなかった。埋没土はレンズ状の堆積が認められ自然堆積と考えられる。出土遺物はなく２号溝との重複関係から時期は７世紀以前と考えられる。

24号溝（第126図）

Ｘ＝332～340、Ｙ＝－251～256に位置する。２号溝と重複するが、新旧関係は不明である。南北方向の溝で、



第126図　３区２・３・24号溝



第127図　３区２号溝の出土遺物

底面の標高は北端60.35m、南端60.11m、比高0.24mである。勾配は3.13％であり、高低差は僅かであるが北から南に傾斜していた。検出できた長さは7.68m、上端幅2.10m、深さ0.10～0.23mである。底面は平坦であり壁は斜めに立ち上がる。埋没土はローム大塊を多量に含む黒褐色土で、人為的埋没土と考えられる。水流の痕跡は認められなかった。出土遺物はなく時期は不明である。

４号溝（第129図　PL.19）

Ｘ＝323～327、Ｙ＝－260～268に位置する。５号溝と重複し、４号溝埋没土を５号溝が切る。北西からやや屈折しながら南東に走行し、底面の標高は北西端59.36m、南東端59.29m、比高７㎝である。僅かに北西から南に傾斜していた。南部を攪乱により失っていた。検出できた溝の長さは8.70m、上端幅0.26～1.16m、深さ６～13㎝である。埋没土はローム粒・塊を僅かに含む黒褐色砂質土で、自然埋没土と考えられる。出土遺物はなく時期は不明である。

５号溝（第129図　PL.19）

Ｘ＝323～327、Ｙ＝－261～269に位置する。４号溝埋没土を５号溝が切り、５号溝埋没土を６号溝、１号井戸が切る。９号土坑、８号溝との新旧関係は不明である。北西から蛇行して南東に走向し、後述の６～８号溝とともに谷の左岸に沿って走る。底面の標高は北西端59.17m、南東端59.11m、比高６㎝である。検出できた長さは10.56m、上端幅46～74㎝、深さ４～26㎝である。底部には小ピット状の掘削痕が認められた。底部に水流の痕跡は認められなかった。出土遺物はなく時期は不明である。

６号溝（第129図　PL.19）

Ｘ＝325～326、Ｙ＝－263～270に位置する。５号溝埋没土を６号溝が切り、６号溝埋没土を７号溝が切る。５・６・７号溝の順に新しい。東西方向の溝で、底面の標高は西端59.13m、東端59.06m、比高７㎝である。高低差は僅かで西から東に傾斜していた。検出できた長さは8.00m、上端幅26～82㎝、深さ４～17㎝である。西端は谷地に合流しており傾斜からすると谷地から引水するための溝である可能性があるが、水流の痕跡は認められなかった。埋没土は５号溝に類似し、黄褐色土粒・塊を微量に含む黒褐色土であるが、自然堆積か人為埋没かは不明である。埋没土中から土師器片７ｇ、須恵器片４ｇが出土した。出土遺物はいずれも小破片で時期は確定できなかった。

７号溝（第129図　PL.19）

Ｘ＝322～323、Ｙ＝－262～265に位置する。７号溝が６号溝埋没土を切り、７号溝埋没土を８号溝が切り、底面の標高は西端59.16m、東端59.06m、比高10㎝である。勾配は2.78％であり底面は西から東に傾斜していた。検出できた長さは3.60m、上端幅24～58㎝、深さ９～17㎝である。埋没土は６号溝に類似し黄褐色土粒・塊を微量に含む暗褐色土で、自然堆積か人為埋没かは不明である。水流の痕跡は認められなかった。出土遺物はなく時期は不明である。

８号溝（第128・129図　PL.19・36）

Ｘ＝310～325、Ｙ＝－240～267に位置する。８号溝が７・９・10号溝、１号井戸埋没土を切る。中央部は削平のため不明瞭であるが、北西から南東方向の溝で、底面の標高は北西端59.16m、南東端59.09m、比高７㎝である。底面はほぼ平坦で北西から南東にわずかに傾斜していた。走行方向や規模及び埋没土が類似することから６号溝とは一連の溝であろう。検出できた長さは28.23m、上端幅20～56㎝、深さ３～29㎝である。埋没土は黒褐色及び暗褐色砂質土であり、自然堆積と考えられる。底面には水成堆積層があり水流の痕跡が認められたことから、用水路の可能性がある。南側の底部に掘削痕跡も認められた。埋没土から須恵器杯（第128図８溝－１・２）、中世の皿（第128図８溝－３・４）が出土した。ほかに土師器片128ｇや金属製品１点が出土した。出土遺物から時期は中世と考えられる。

９号溝（第129図　PL.19）

Ｘ＝310～316、Ｙ＝－242～249に位置する。９号溝埋没土を８号溝が切り、９号溝が13号溝埋没土を切る。埋没土の確認状況から２号竪穴住居より９号溝が新しい。北西から南東方向の溝で、後述の10～13号溝と平行して谷左岸に沿って走ることから４～８号溝と連続する可能性が高い。底面はほぼ平坦で僅かに北西から南東に傾斜していた。検出できた長さは8.90m、上面幅22～34㎝、深さ９～17㎝である。埋没土は黒褐色砂質土で、自然堆積と考えられる。水流の痕跡は認められなかった。埋没土から土師器片35ｇ、須恵器片19ｇが出土した。いずれも小破片で時期は不明である。

10号溝（第128・129図）

Ｘ＝310～315、Ｙ＝－244～249に位置する。８号溝と重複し、埋没土の確認状況から10号溝が古い。北西から南東方向の溝で、底面の標高は北西端59.14m、南東端59.14m、比高０㎝で傾斜はない。底面は4.84％の勾配で南東から北西に傾斜しており、検出できた長さは6.40m、上端幅20～48㎝、深さ３～14㎝である。埋没土は黒褐色砂質土で自然堆積と考えられる。埋没土から杯（第128図10溝－１・２）が出土した。ほかに土師器片207ｇ、須恵器片97ｇが出土した。出土した土器片は８世紀代のものである。８号溝との重複から時期は中世以前と考えられる。杯破片は混入と考えられる。

11号溝（第129図　PL.19）

Ｘ＝310～313、Ｙ＝－236～242に位置する。11号溝埋没土を12号溝が切る。北西から南東方向の溝で、底面の標高は北西端59.46m、南東端59.41m、比高５㎝である。底面はほぼ平坦で、僅かに北西から南東に傾斜していた。検出できた長さは7.18m、上端幅24～44㎝、深さ１～４㎝である。埋没土はローム粒・塊を僅かに含む黒色砂質土であり、自然堆積と考えられる。出土遺物はなく時期は不明である。

12号溝（第129図　PL.19）

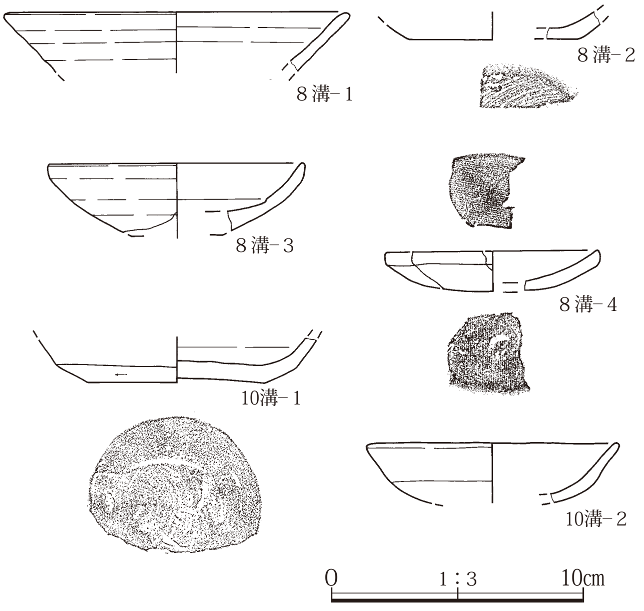
Ｘ＝310～313、Ｙ＝－237～243に位置する。12号溝が11号溝埋没土を切る。北西から南東方向の溝で、底面の標高は北西端59.39m、南東端59.36m、比高３㎝である。底面はほぼ平坦で僅かに北西から南東に傾斜していた。検出できた長さは6.80m、上端幅20～60㎝、深さ２～９㎝である。埋没土はローム中粒・塊を含むやや砂質の黒褐色土で自然堆積と考えられる。出土遺物はなく時期は不明である。

13号溝（第129図　PL.19）

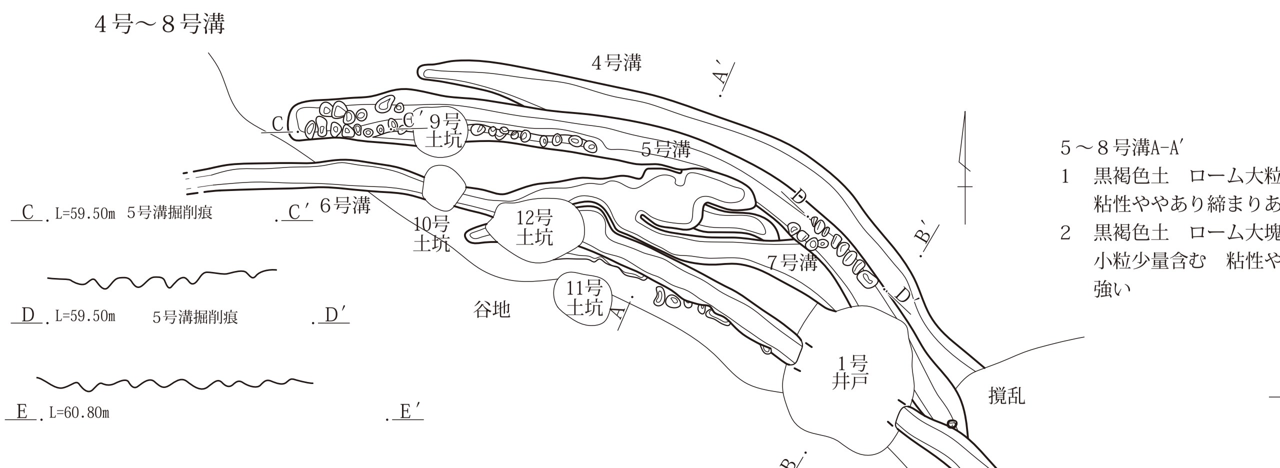
Ｘ＝310～313、Ｙ＝－240～245に位置する。13号溝埋没土を９号溝が切る。13号溝は２号竪穴住居を貫通しているが、新旧関係は不明である。北西から南東方向の溝で、底面の標高は北西端59.39m、南東端59.36m、比高３㎝である。底面はほぼ平坦であり、僅かに北西から南東に傾斜していた。検出できた長さは5.70m、上端幅30～80㎝、深さ２～６㎝である。埋没土は単層であるがローム塊は認められなかった。自然堆積と考えられる。出土遺物はなく時期は不明である。

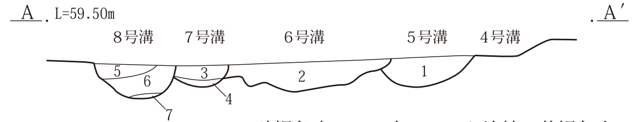
16号溝（第130・131図　PL.19・36）

Ｘ＝345～350、Ｙ＝－265～304に位置する。19号溝埋没土を切り、17・20・22号溝に切られる。17号溝は南下して直交し合流する。埋没土の確認状況から15号土坑が新しい。東西方向の溝で、底面の標高は東端59.86m、西端59.80m、比高６㎝である。底面はほぼ平坦で、僅かに東から西に傾斜していた。検出できた長さは39.36m、上端幅2.16～3.14m、深さ52～74㎝である。埋没土の上層にAs-Bが堆積、底部に小礫を多量に含む水成堆積層があり、流水の痕跡が認められたことから、用水路の可能性が高い。埋没土中から須恵器杯（第131図１～６）、皿（第131図７）、羽釜（第131図８）が出土した。ほかに土師器片132ｇ、須恵器片470ｇが出土した。遺物は

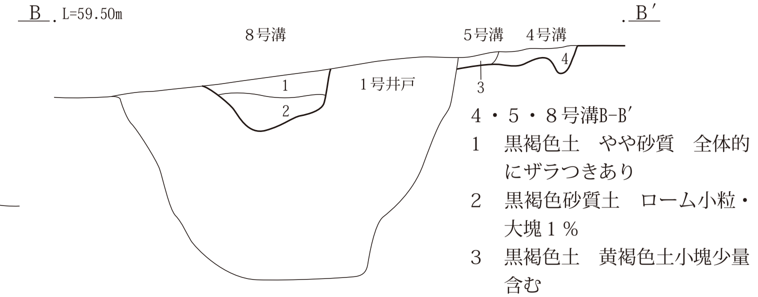


第128図　３区８・10号溝の出土遺物



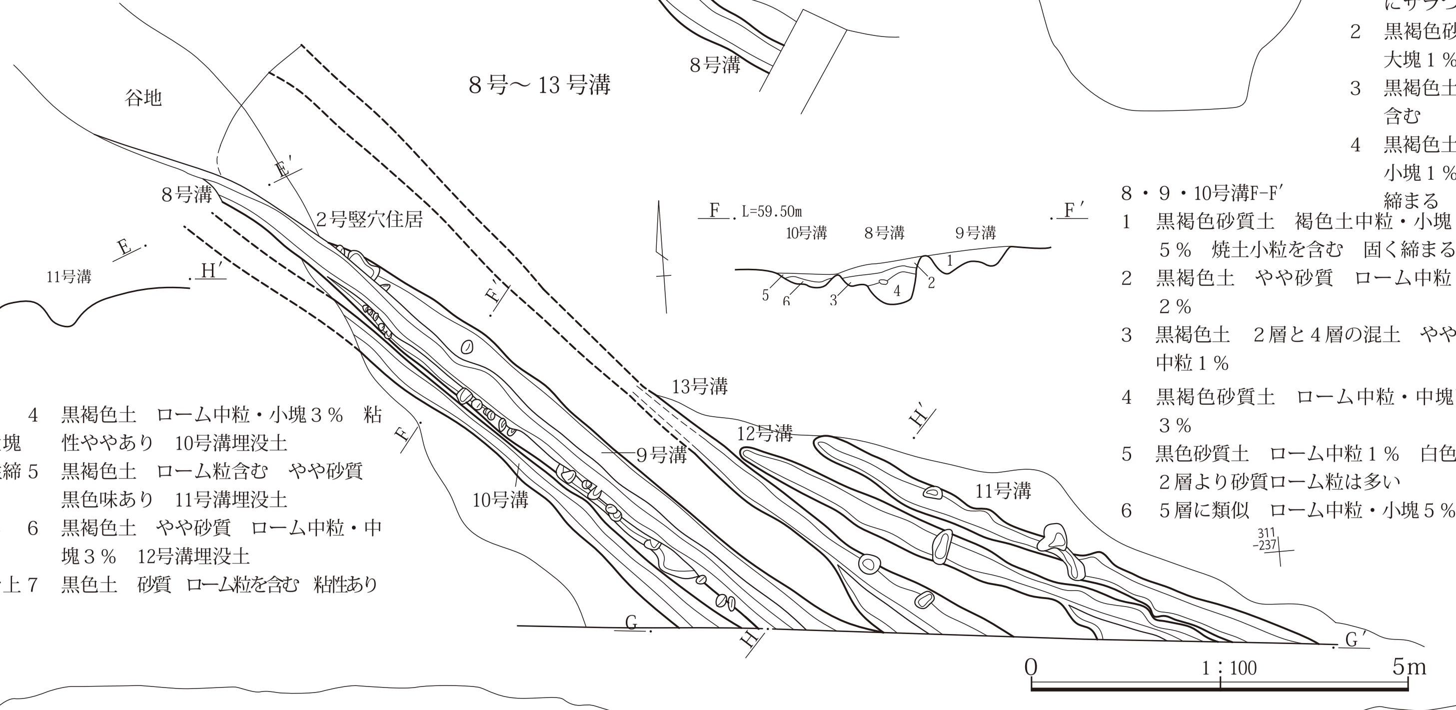


５～８号溝A-A′
1　黒褐色土　ローム大粒微量に含む　粘性ややあり締まりあり
2　黒褐色土　ローム大塊微量　ローム小粒少量含む　粘性ややあり締まり強い
3　暗褐色土　10㎝大のローム塊粒　黄褐色小粒微量に含む　粘性締まり強い
4　黒暗黄褐色粘質土　粘性強い
5　暗褐色土　粘性締まりあり
6　暗褐色砂質土　10㎝大のローム塊少量含む　砂粒堆積層
7　暗褐色粘質土　水性堆積層

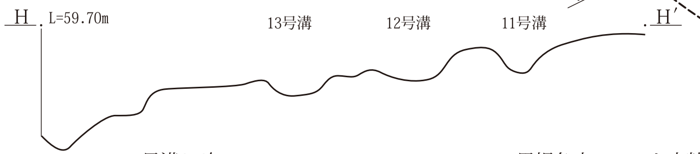


４・５・８号溝B-B′
1　黒褐色土　やや砂質　全体的にザラつきあり
2　黒褐色砂質土　ローム小粒・大塊１％
3　黒褐色土　黄褐色土小塊少量含む
4　黒褐色土　やや砂質　ローム小塊１％　白色粒１％　固く締まる

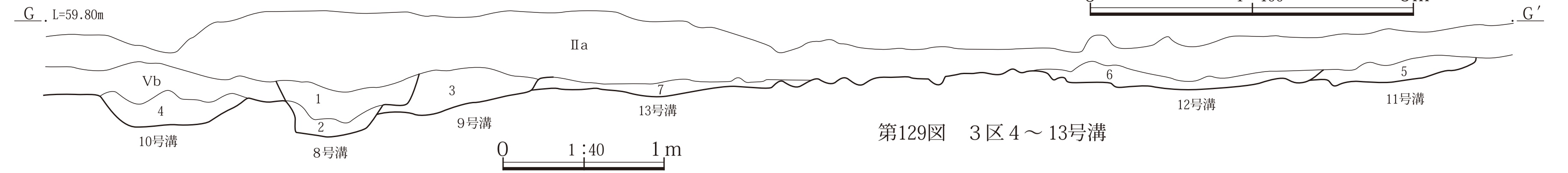
８・10号溝E-E′
1　黒褐色土　粘性ありやや締まる
2　黒褐色土　褐色土中粒・小塊２％　炭化物を含む　粘性ややあり
3　黒色砂質土　ローム中粒１％以下　やや締まる



８・９・10号溝F-F′
1　黒褐色砂質土　褐色土中粒・小塊２％　白色粒５％　焼土小粒を含む　固く締まる
2　黒褐色土　やや砂質　ローム中粒１％　白色粒２％
3　黒褐色土　２層と４層の混土　やや砂質　ローム中粒１％
4　黒褐色砂質土　ローム中粒・中塊下位に３％
5　黒色砂質土　ローム中粒１％　白色粒３％　２層より砂質ローム粒は多い
6　５層に類似　ローム中粒・小塊５％



８～13号溝G-G′
1　黒褐色土　緻密　褐色土小～大粒・大塊１％　白色軽石　炭化物１％以下　粘性締まりあり
2　黒褐色土　ローム中粒・大塊下位に５％　粘性ややあり　8号溝埋没土
3　黒褐色土　ローム中粒１％　白色軽石を上位に１％以下　９号溝埋没土
4　黒褐色土　ローム中粒・小塊３％　粘性ややあり　10号溝埋没土
5　黒褐色土　ローム粒含む　やや砂質　黒色味あり　11号溝埋没土
6　黒褐色土　やや砂質　ローム中粒・中塊３％　12号溝埋没土
7　黒色土　砂質　ローム粒を含む　粘性あり

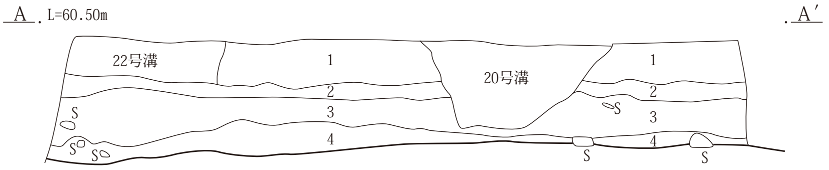


第129図　３区４～13号溝

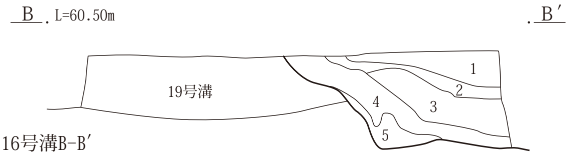
８世紀後半から10世紀のものであり、用水路として使用されたものと考えら、推定東山道駅路に並行する位置関係で注目される。

17号溝（第132図　PL.19）

Ｘ＝350～355、Ｙ＝－273～275に位置する。17号溝が16・18号溝埋没土を切る。14号土坑との新旧関係は不明。南北方向の溝であり、16号溝に合流し、また西から流れる18号溝が合流する。底面の標高は北端60.15m、南端60.05m、比高10㎝である。勾配は1.69％であり僅かに北から南に傾斜していた。検出できた長さは6.96m、上端幅1.94～2.14m、深さ42～48㎝である。埋没土は黒褐色砂質土や小礫、ローム塊を多量に含む。底面には礫が堆積しており、水流の痕跡が認められたことから、



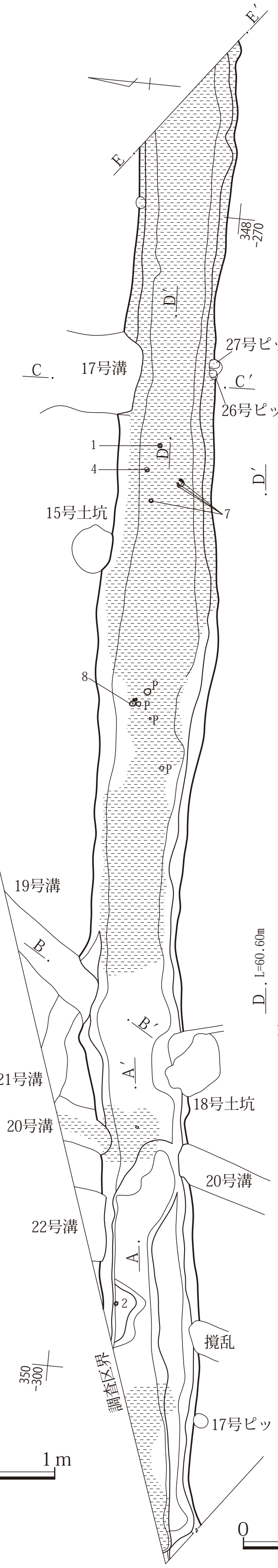
16号溝A-A′
1　黒褐色土　砂質　淡い色調　As-Bと思われる砂質土を含む
2　黄褐色土　黄色がかる砂質土　ローム塊を含む
3　黒色土　砂質　ローム塊を僅かに含む　粘性締まりなし
4　黒褐色土　ローム塊締まりあり　礫層の褐色砂質土塊を含む

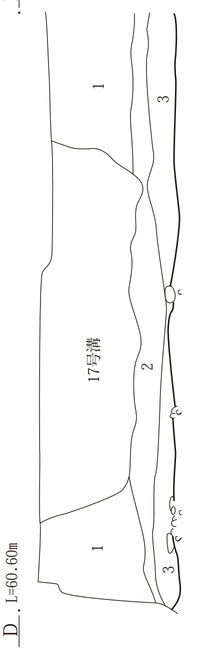


16号溝B-B′
1　黒褐色土　砂質
2　黒褐色土　１層に近似　ローム小塊を含む
3　黒褐色土　１、２層に近似　やや色調が暗い
4　灰黄褐色土　１～10cm大のローム塊多量に含む
5　にぶい黄褐色土　ローム塊主体　黒色土塊含む

16号溝C-C′
1　黒色土　ローム塊が主体
2　黒褐色土　黒色土主体　ローム塊少量　礫多量に含む　粘性締まりややあり

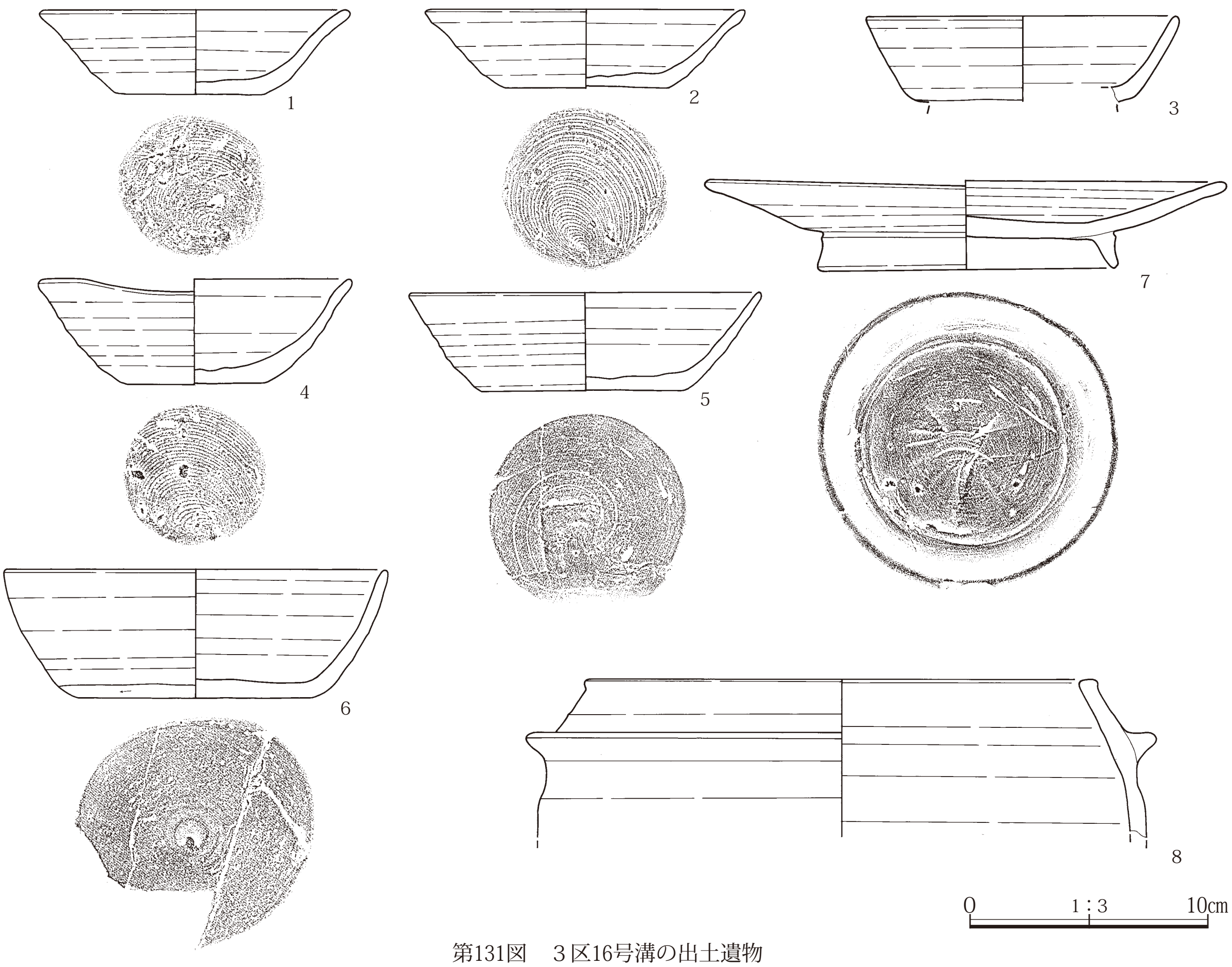
16号溝E-E′
1　黒褐色土　黒色土塊を含む　淡い色調　粘性締まりなし
2　黒褐色土　砂質　淡い色調
3　暗褐色土　ローム粒・塊を多量に含む
4　黒褐色土　１cm大のローム塊を少量含む　礫少量含む　締まりあり
5　黒褐色土　１cm大のローム塊　礫多量に含む　締まりあり





16号溝D-D′
1　黒褐色土　３層に類似　ローム小塊を含む
2　黒褐色土　１～３cm大のローム塊多量に含む
3　黒色土　砂質　礫多量に含む　礫層に含まれる砂質土を含む

第130図　３区16号溝



第131図　３区16号溝の出土遺物

用水路の可能性が高い。断面形状と埋土の類似から16号溝と縦横水路を形成したと考えられる。遺物は14世紀頃の片口鉢１皿（第132図17溝- １）や近世の焙烙２点が出土し、時期は近世と考えられる。

18号溝（第132図　PL.19）

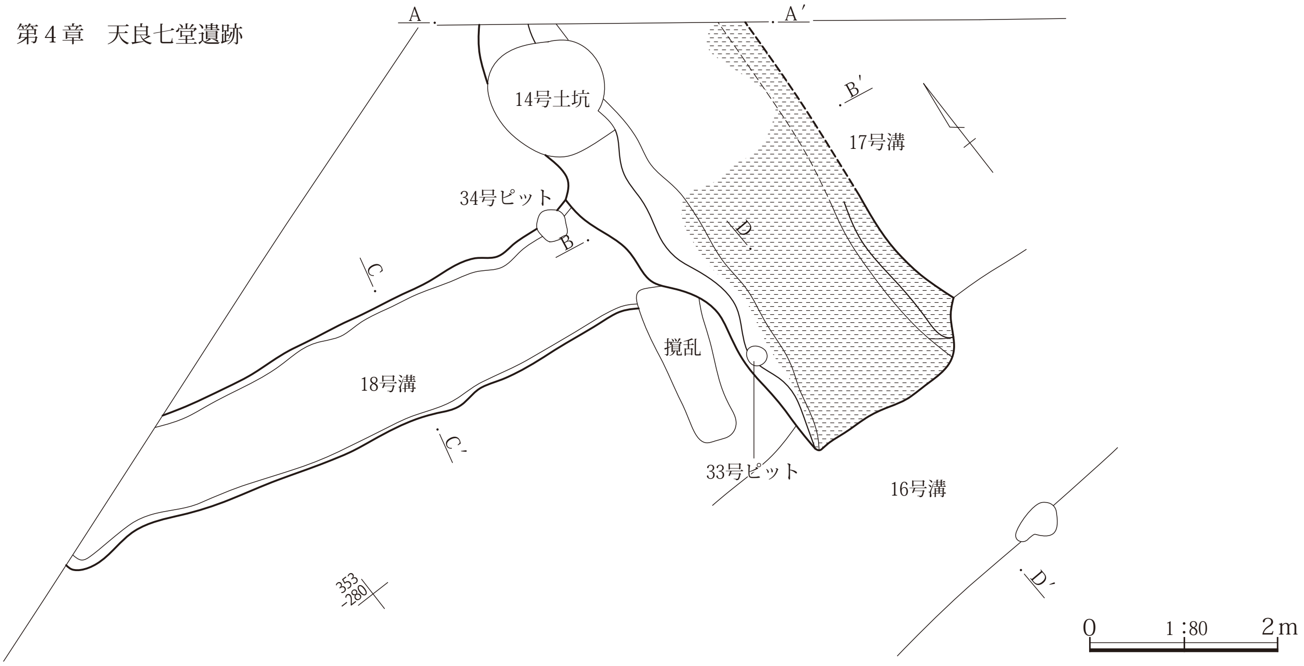
Ｘ＝352 ～ 354、Ｙ＝－275 ～ 282に位置する。土層観察では18号溝埋没土を17号溝が切るが、不明瞭である。34号ピットとの新旧関係は不明。東西走向の溝であり、東端で17号溝に合流する。底面の標高は南東端60.53m、北西端60.43m、比高10㎝である。勾配は1.46％で僅かに南東から北西に傾斜していた。検出できた長さは6.84m、上端幅1.10 ～ 1.30m、深さ５～ 18㎝である。埋没土はローム塊を多量に含む黄褐色土や黒褐色土で、人為的埋没土と考えられる。水流の痕跡は認められなかった。出土遺物はなく時期の詳細は不明である。17号溝とは同時存在の可能性もある。

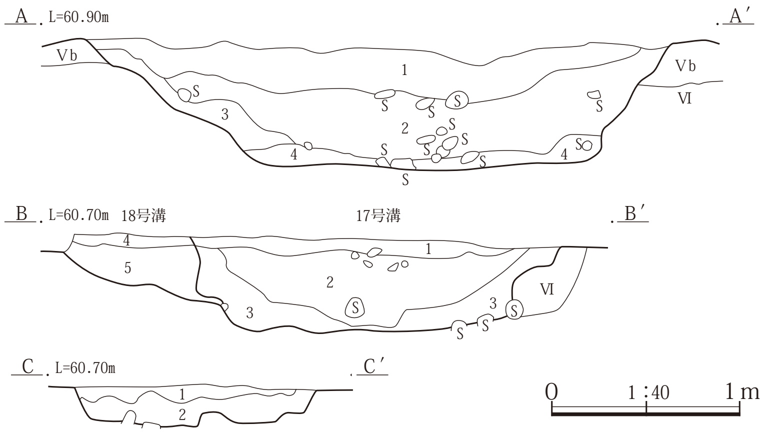
19号溝（第133図　PL.19）

Ｘ＝349 ～ 352、Ｙ＝－288 ～ 291に位置する。19号溝埋没土を16号溝が切る。北東から南西方向の溝で、底面の標高は北東端60.14m、南西端60.04m、比高10㎝である。底面は北東から南西に傾斜していた。検出できた長さは3.56m、上端幅0.90 ～ 1.12m、深さ23 ～ 28㎝である。埋没土はローム塊及び多量の礫を含む黒色土や黄褐色土であり、人為的埋没土と考えられる。水流の痕跡は認められなかった。出土遺物はなく時期は不明である。

20号溝（第133図　PL.19）

Ｘ＝340 ～ 350、Ｙ＝－293 ～ 296に位置する。16号溝埋没土を20号溝が切る。北東から南西方向の溝で、底面の標高は北東端60.03m、南西端59.92m、比高11㎝である。僅かに北東から南西に傾斜していた。検出できた長さは10.80m、上端幅0.80 ～ 1.80m、深さ40 ～ 45mである。埋没土は黒色砂質土やローム小塊を多量に含む黒色土であり、人為的埋没土の可能性が考えられる。水流の痕跡は認められなかった。出土遺物はなく時期は不明である。

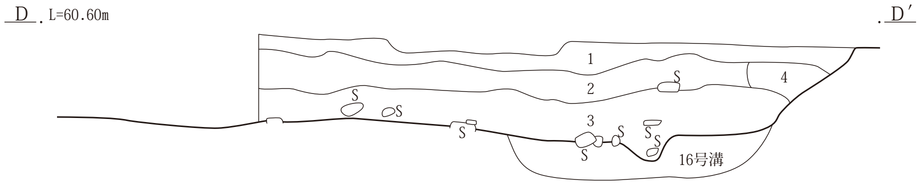




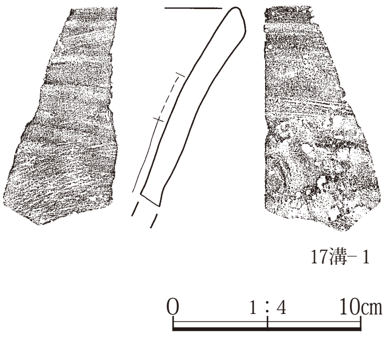
17号溝A-A′
1　黒色土　砂質　黒褐色土を含む　粘性締まりなし
2　黒褐色土　褐色土主体　ローム大塊を含む　粘性締まりなし
3　黄褐色土　２層より明るい　ローム塊多量に含む
4　黒褐色土　２層より明るく３層より暗い　ローム塊多量に含む

17・18号溝B-B′
1　黒褐色土　淡い色調の黒色土を含む
2　黒褐色土　ローム小塊少量含む
3　黄褐色土　１～５cm大のローム塊多量に含む
4　黒褐色土　ローム塊をやや多く含む
5　黄褐色土　ローム塊主体　黒褐色土塊を含む

18号溝C-C′
1　黒色土　ローム塊多量に含む　色調は淡い
2　黄色土　ローム塊主体　黒褐色土塊を含む



17号溝D-D′
1　黒褐色土　砂質　色調は明るい　粘性締りなし　3　黒褐色土　２層に近似　ローム小塊を僅かに含む
2　黒褐色土　１層に類似　さらに明るい色調　4　黄褐色土　ローム塊多量に含む


17溝－1

第132図　３区17・18号溝と17号溝の出土遺物

21号溝（第133図　PL.19）

Ｘ＝350、Ｙ＝－290 ～ 293に位置する。19号溝埋没土に21号溝埋没土が含まれないことから21号溝が古い。北西から南東方向の溝で、底面の標高は北西端60.13m、南東端60.18m、比高0.05ｍである。勾配は2.03％で高低差は僅かであるが南東から北西に傾斜していた。検出できた長さは2.46m、上端幅52 ～ 68㎝、深さ17 ～ 20㎝である。埋没土はローム大塊を多量に含む黄褐色土であり、人為的埋没土の可能性が考えられる。水流の痕跡は認められなかった。出土遺物はなく時期は不明である。

22号溝（第133図　PL.19）

Ｘ＝348 ～ 349、Ｙ＝－295 ～ 297に位置する。16号溝埋没土を22号溝が切る。南北方向の溝であり、底面の標高は北端60.23m、南端60.21m、比高２㎝である。勾配は2.38％で高低差は僅かであるが北から南に傾斜していた。検出できた長さは0.84m、上端幅1.80m、深さ10 ～ 20㎝である。埋没土はローム大塊を多量に含む黒褐色土であり、人為的埋没土の可能性が考えられる。水流の痕跡は認められな

かった。出土遺物はなく時期は不明である。

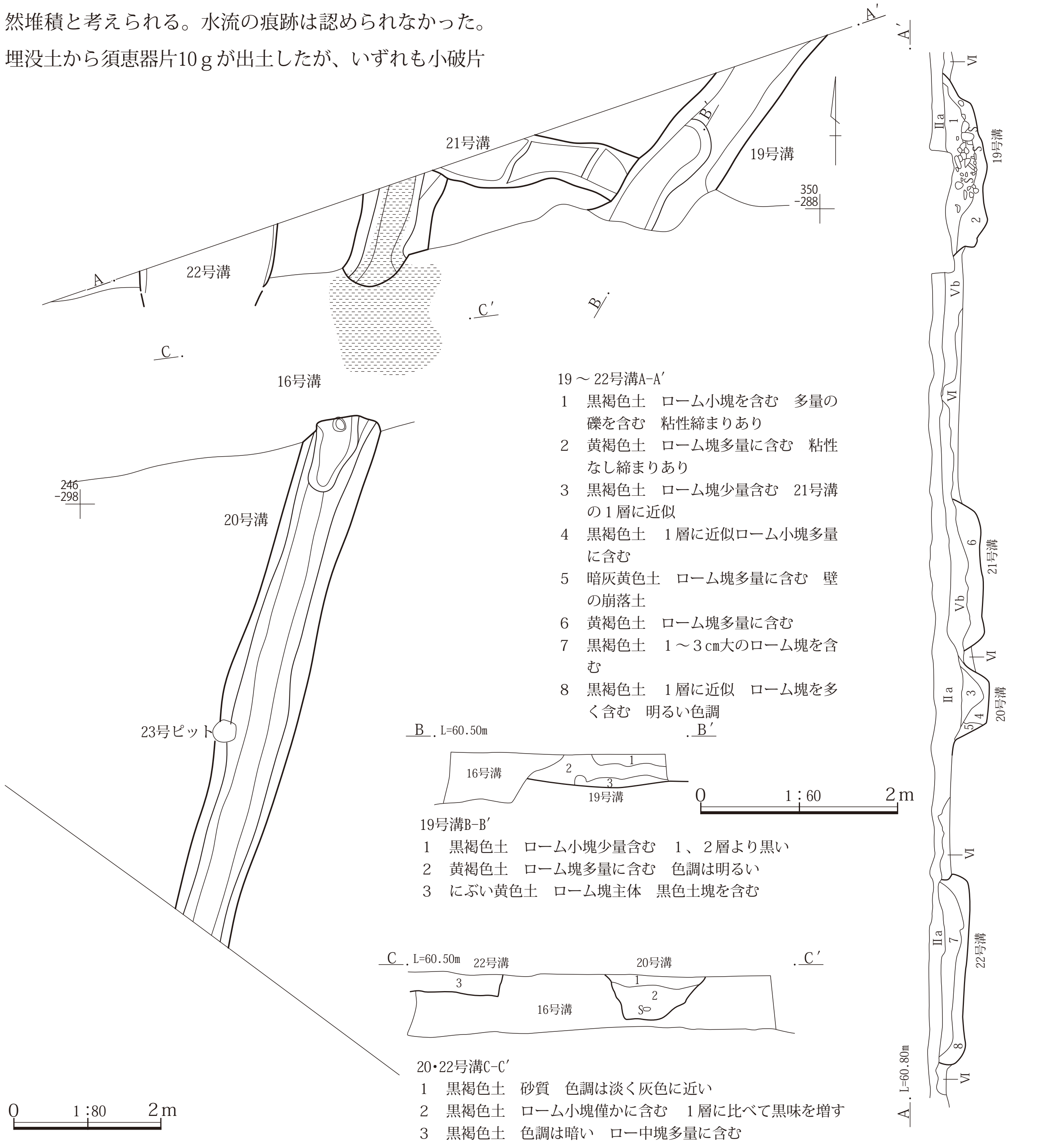
23号溝（第134図　PL.19）

Ｘ＝342 ～ 343、Ｙ＝－267 ～ 283に位置する。東西方向の溝で、底面の標高は東端60.49m、西端60.34m、比高15㎝である。底面はほぼ平坦で僅かに東から西に傾斜していた。検出できた長さは16.76m、上端幅20 ～ 44㎝、深さ４～ 25㎝である。埋没土はローム塊を含む黒褐色土や黒色土であり、レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。水流の痕跡は認められなかった。埋没土から須恵器片10ｇが出土したが、いずれも小破片であり、時期は特定できなかった。

１号谷地（第134図）

Ｘ＝310 ～ 321、Ｙ＝－246 ～ 258に位置する。扇状地端末部の湧水に伴う自然地形であり、３区から蛇行を繰り返し南下すると考えられる。２区及び上根遺跡５区の谷地は同一のものであろう。

３区では主軸方位Ｎ－48°－Ｗ、上端幅25m以上の谷地が長さ37mにわたって検出された。３区谷地北縁辺は、



第133図　３区19 ～ 22号溝

８世紀後半の４号住居を谷地埋没土が切り込んでいる。４号住居廃棄以降に谷地を拡げ開削して利用していたことが想定される。谷地と並行するように掘られた４〜８号溝も時期は不明であるが、谷を利用するために谷脇の台地縁辺に掘削された溝群であろう。

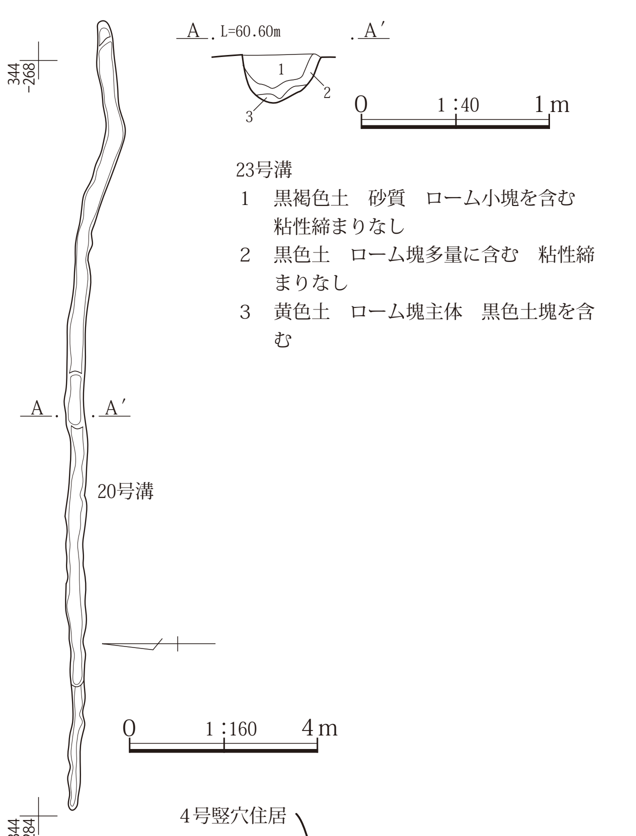
谷埋没土は上層がAs-Bを含む黒色砂質土、下層は砂層・灰黄褐色土・黒褐色砂質土である。２区や上根遺跡の谷地も埋没土上層にAs-B堆積層あるいはAs-B混土の堆積層が認められることから、As-B降下段階ではある程度の広さの谷地となっていたことが想定される。

２　遺構外の遺物(第135図　PL.36)

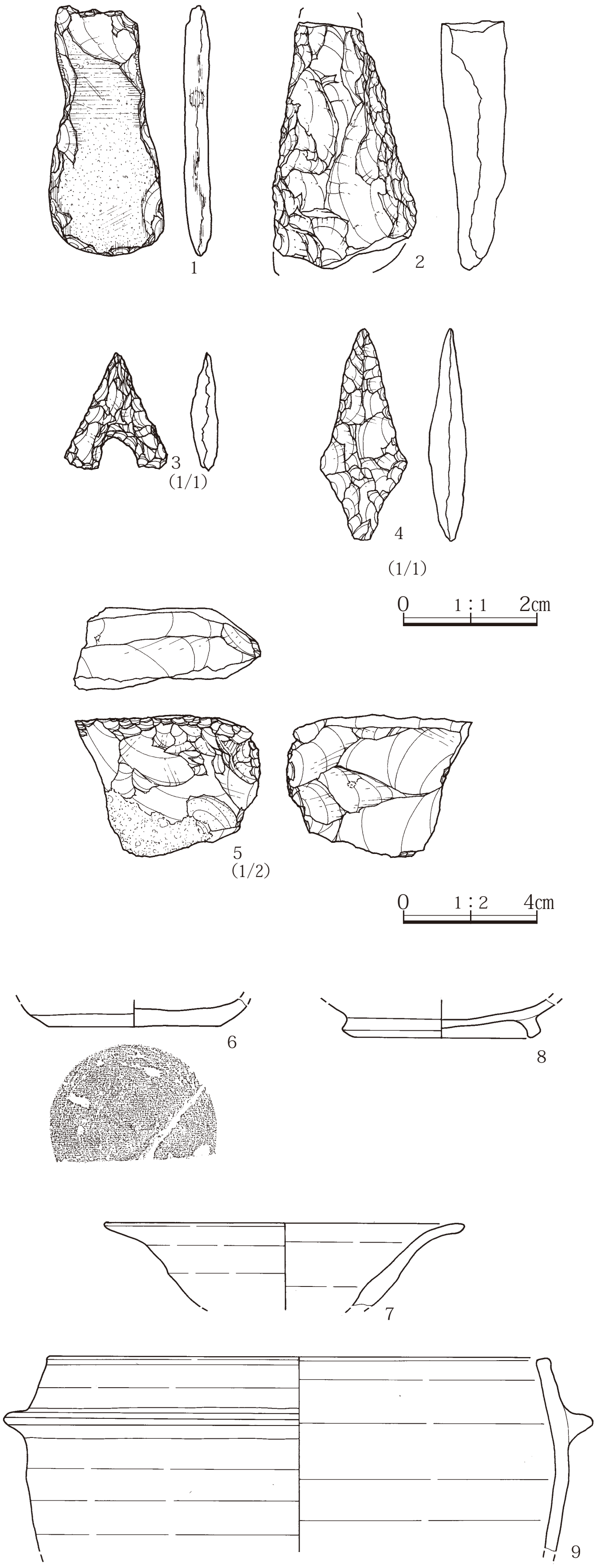
３区からは古墳時代から中近世に至る遺構が検出され、遺構外からも多数の遺物が出土した。縄文時代の遺構及び土器の出土はなかったが、打製石斧(第135図１・２)、石鏃(第135図３・４)、石核(第135図５)、非掲載遺物の剥片が出土したことから、周辺から縄文時代の遺構が検出される可能性がある。

３区では古墳時代から奈良・平安時代の遺構が主体として検出されたが、遺構に伴わない出土遺物も多かった。ここでは杯(第135図６)、椀(第135図７)、灰釉陶器椀(第135図８)、羽釜(第135図９)などを図示したが、掲載できなかった遺物の総重量は土師器片403ｇ、須恵器片197ｇであった。

中世から近世の遺物は、掲載することはできなかったが遺構確認面などから近世の瀬戸美濃灯火皿、国産磁器２点、国産施釉陶器４点、近現代の陶磁器７点、十能瓦２点、時期不明土器類１点が出土した。



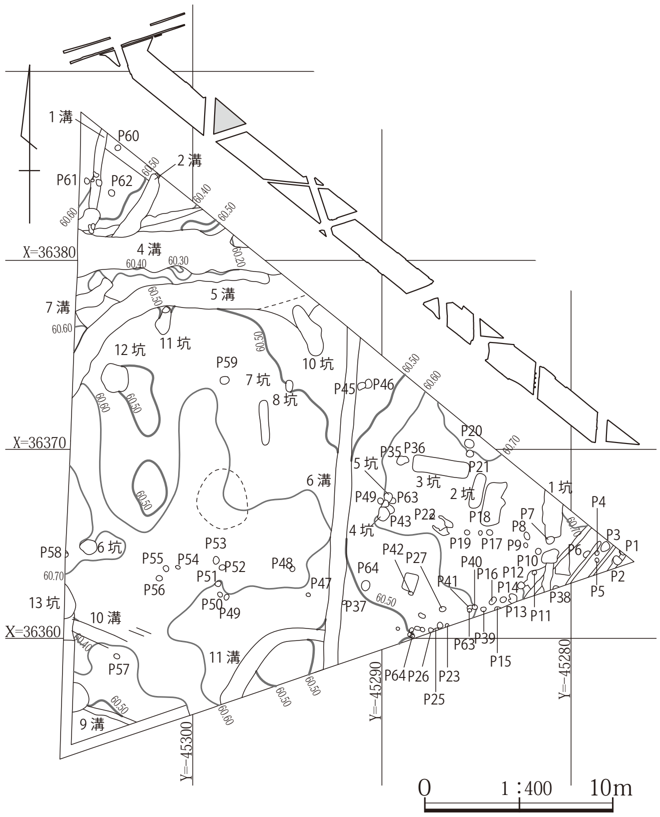
第134図　３区23号溝と１号谷地



第135図　３区遺構外の出土遺物

第５節　４区の調査成果

４区はローム漸移層（基本土層第Ⅵ層）において遺構確認を行った。調査区北部は重複する溝が検出され、南部はピットを中心に分布する。古代から近世に至る土坑、ピット、溝などの遺構や遺物が検出された。



第136図　天良七堂遺跡　４区全体図

１　古墳時代以降の遺構と遺物

古墳時代から中近世に帰属する遺構は、土坑13基、ピット65基、溝11条を数える。以下のとおり遺構ごとに記す。

（１）土坑・ピット

４区から検出された土坑は13基、ピット65基である。調査区南端部からピットの検出が多い。４区で検出された土坑、ピットは、すべての土坑及びピットは第30表（152・153頁）において概略を記す。ここでは、重複や遺物、柱痕など特徴的な土坑及びピットについて詳述する。

１号土坑（第137図）

遺構の三分の一程度は調査区外であるが、平面形状は長方形を呈するものとみられ、断面形状は椀状を呈する。中央部分に段が認められ２基の土坑が重複する可能性がある。埋没土は、ローム粒・塊を含む暗褐色土であり、

人為的埋没土と考えられる。出土遺物はなく時期は不明である。

４号土坑（第137図　PL.20）

９号土坑、43号ピットと重複する。９号土坑との新旧関係は不明であるが、43号ピットの埋没土を４号土坑が切る。平面形状は長円形を呈し、断面形状は台形を呈する。埋没土はローム粒・塊を多量に含む暗褐色土砂質土であり、人為的埋没土と考えられる。非掲載遺物は土師器片が出土する。時期は不明である。

５号土坑（第137図　PL.20）

９号土坑、65号ピットと重複するが、新旧関係は不明である。平面形状は円形を呈し、断面形状は台形を呈する。埋没土はローム粒・塊を含む暗褐色土であり、人為的埋没土と考えられる。出土遺物はなく時期は不明である。

７号土坑（第137図　PL.20）

平面形状は長方形を呈し、断面形状は台形を呈する。埋没土はローム塊を含む暗褐色土であり、人為的埋没土と考えられる。非掲載遺物は須恵器片17ｇが出土する。時期は不明である。

９号土坑（第138図　PL.20）

65号ピットを切り、４・５号土坑、43号ピットと重複するが新旧関係は不明である。平面形状は楕円形を呈し、断面形状は台形を呈する。埋没土はローム粒・塊を含む暗褐色砂質土であり、人為的埋没土と考えられる。出土遺物はなく時期は不明である。

10号土坑（第138図　PL.20）

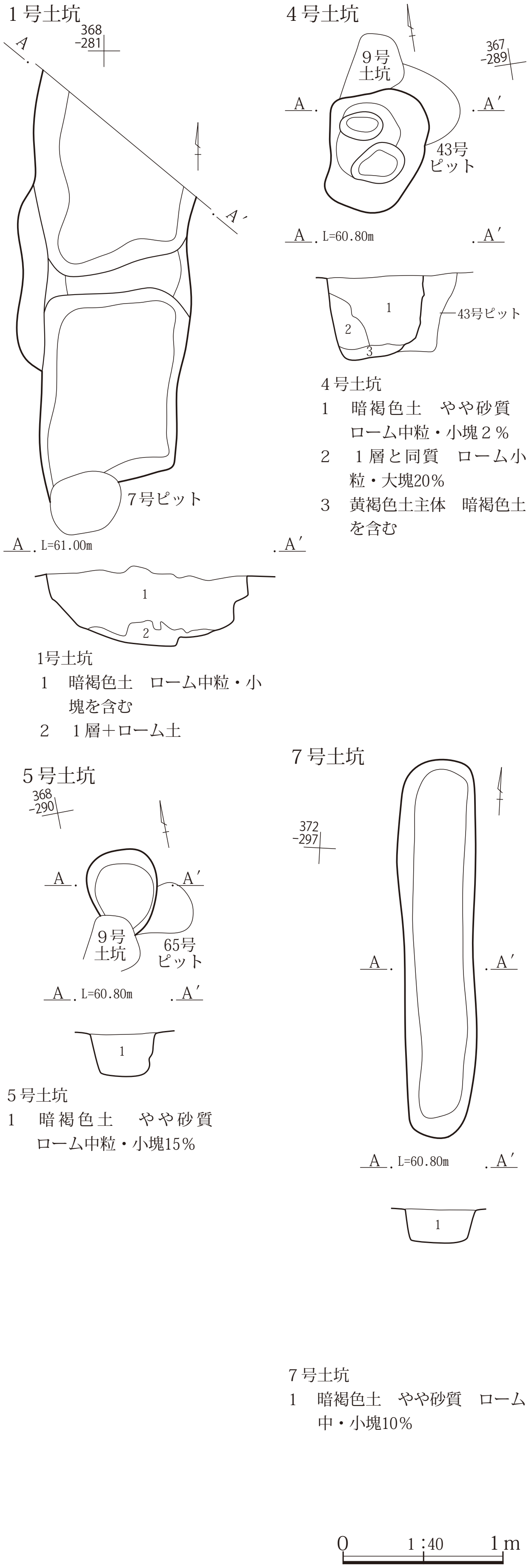
平面形状は不整長方形を呈し、断面形状は三角形を呈する。埋没土はローム粒・塊を少量含む暗褐色砂質土、暗褐色土とローム土の混土による人為的埋没と考えられる。出土遺物はなく、時期は不明である。

12号土坑（第138図　PL.20）

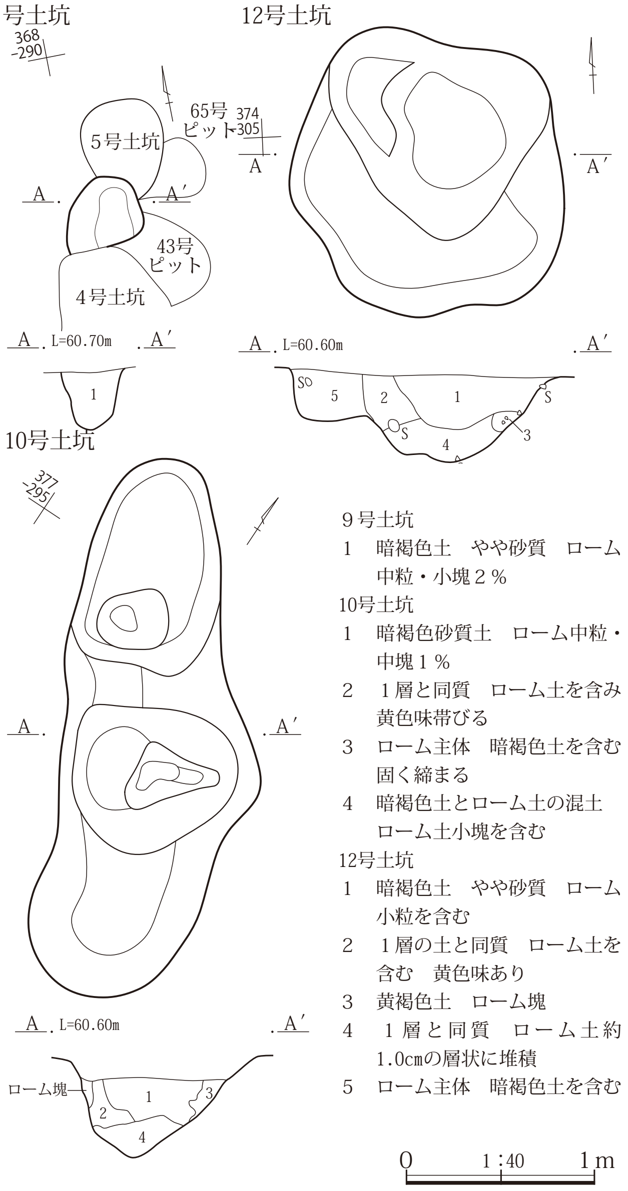
平面形状は不整円形を呈し、断面形状は段がついている。埋没土はローム粒を含む暗褐色砂質土及び黄褐色土、段の部分はローム主体土であり、人為的埋没土と考えられる。時期は不明である。

10号ピット（第139図）

平面形状は円形を呈し、断面形状は台形を呈する。土層断面観察から１・３層は柱抜き取り痕の可能性があり、ローム粒を含む黒色土から褐色土による人為的埋没土で



第137図　４区１・４・５・７号土坑



第138図　４区９・10・12号土坑

充填する。掘立柱建物などを想定する他の柱穴は不明である。出土遺物はなく時期は不明である。

20号ピット（第139図）

平面形状は円形を呈し、断面形状は三角形を呈する。土層断面観察から２層は柱抜き取り痕の可能性があり、ローム粒を含む暗褐色砂質土やロームと暗褐色土の混土などによる人為的埋没土で充填する。掘立柱建物などを想定する他の柱穴は不明である。出土遺物はなく時期不明である。

23号ピット（第139図）

平面形状は楕円形を呈するものと考えられ、断面形状は長方形を呈する。埋没土はローム粒を含む暗褐色砂質土及びロームと暗褐色土の混土などであり、人為的埋没土と考えられる。時期は不明である。

24号ピット（第139・140図）

平面形状は不整楕円形を呈し、断面形状は台形を呈する。埋没土はローム粒・塊を含む暗褐色砂質土であり、人為的埋没土と考えられる。埋没土から中世陶器甕（第140図１）が出土する。出土遺物から時期は中世以降と考えられる。

27号ピット（第139図）

平面形状は楕円形を呈し、断面形状は三角形を呈する。埋没土はローム粒を含む暗褐色砂質土及びロームと暗褐色土の混土であり、人為的埋没土と考えられる。時期は不明である。

29号ピット（第139図）

30号ピットと重複し、29号ピット埋没土を30号ピットが切る。平面形状は円形を呈する。埋没土はローム粒を含む暗褐色土砂質土であり、人為的埋没土と考えられる。時期は不明である。

30号ピット（第139図）

29号ピットと重複し、30号ピットが29号ピット埋没土を切る。平面形状は長円形を呈すると考えられ、断面形状は浅い方形を呈する。埋没土は29号ピットに類似し人為的埋没土と考えられる。非掲載遺物の土師器片は混入と考えられる。時期は不明である。

35号ピット（第139図）

36号ピットと重複し、35号ピットが36号ピット埋没土を切る。平面形状は不整楕円形を呈し、断面形状は長方形を呈する。埋没土はローム粒を多量に含む暗褐色砂質土であり、人為的埋没土と考えられる。出土遺物はなく時期は不明である。

36号ピット（第139図）

35号ピットと重複し、36号ピット埋没土を35号ピットが切る平面形状は長方形を呈するものと考えられ、断面形状は三角形を呈するものと考えられる。埋没土はローム土及び暗褐色土であり、人為的埋没土である。時期は不明である。

43号ピット（第139図）

４・９号土坑と重複し、43号ピット埋没土を４号土坑が切る。９号土坑との新旧関係は不明。平面形状・断面形状ともに不明。埋没土はローム粒を多量に含む暗褐色土砂質土であり、人為的埋没土と考えられる。出土遺物はなく時期は不明である。

44号ピット（第139図）

９号土坑と重複し、44号ピット埋没土を９号土坑が切る。平面形状は不整円形を呈するものと考えられる。断面形状は浅い方形を呈するものと考えられる。埋没土はローム粒を多量に含む暗褐色砂質土であり、人為的埋没土と考えられる。出土遺物はなく時期は不明である。

65号ピット（第140図）

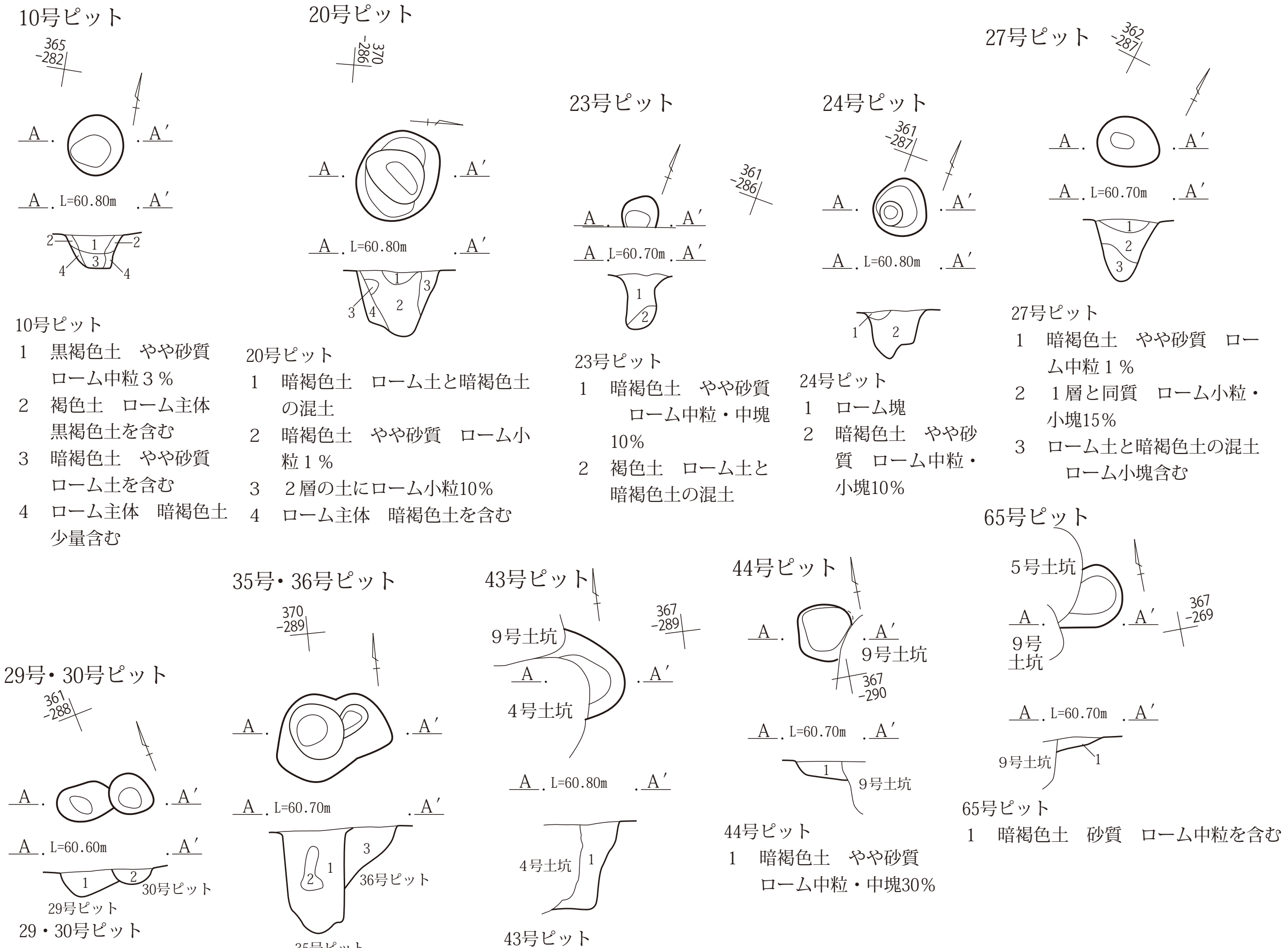
５・９号土坑と重複する。65号ピット埋没土を９号土坑が切る。５号土坑との新旧関係は不明である。平面形状は長円形を呈するものと考えられる。埋没土は、ローム粒を含む暗褐色砂質土であり、自然堆積か人為埋没かは不明。時期は不明である。

（２）溝

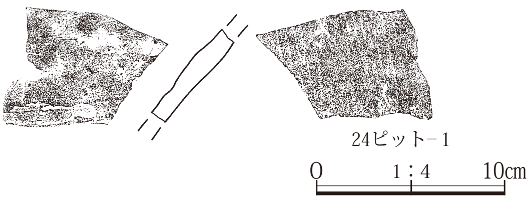
４区から検出された溝は11条である。調査区北端に溝が集中する。４・５・７・８号溝は東方へ給排水する中～近世の水路と考えられる。

１号溝（第141図　PL.21）

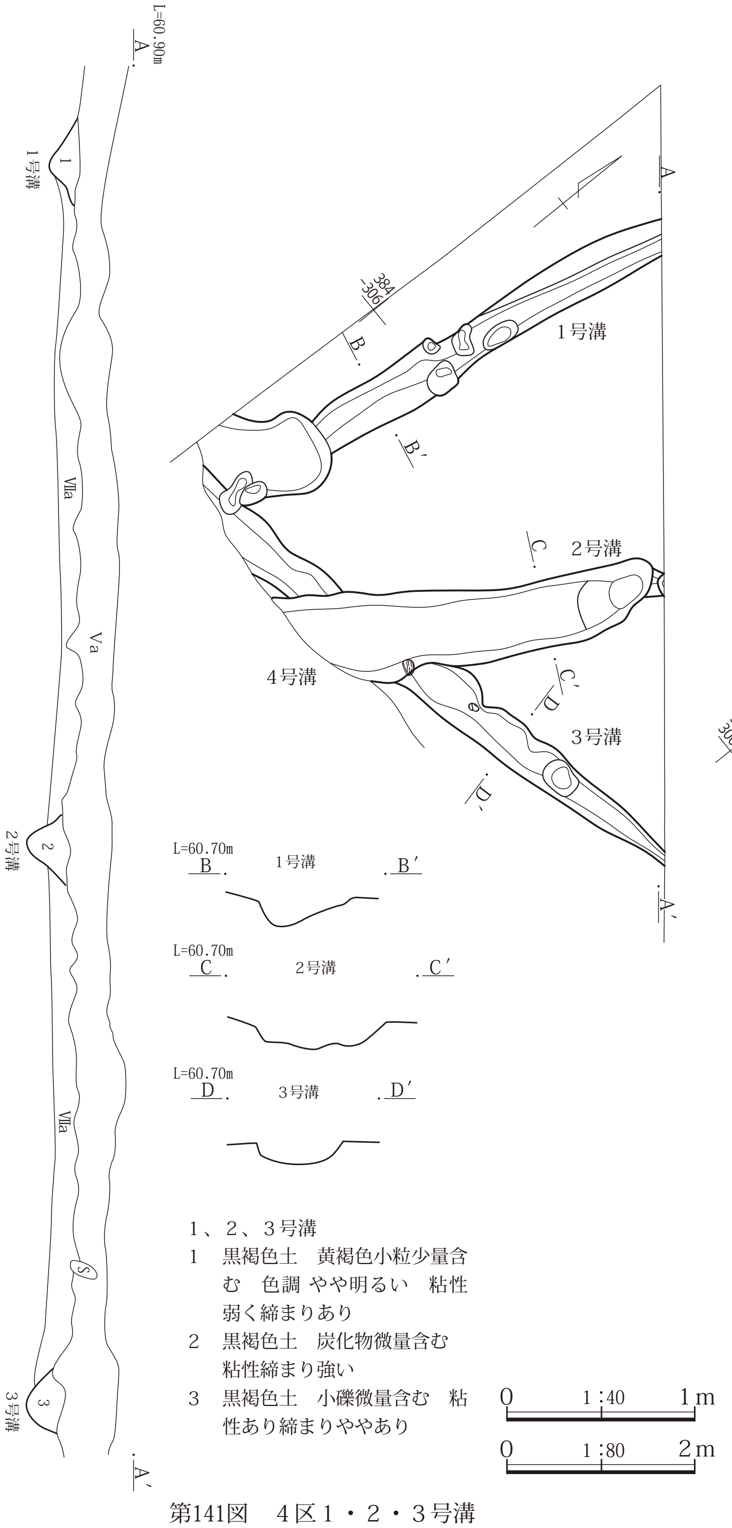
X＝381 ～ 387、Y＝－304 ～ 306に位置する。３・４号溝と重複するが、新旧関係は不明である。北から南に走行し、底面の標高は北端60.48m、南端60.38m、比高10㎝で､勾配は1.85％である。北から南に傾斜している。検出された長さは5.40m、上面幅40 ～ 80㎝、深さ５～ 13㎝である。埋没土は自然堆積と考えられる。水流の痕跡は認められない。非掲載遺物で石器の剥片、近世焙烙が出土する。時期は不明である。



第139図　４区10･20･23･24･27･29･30･35･36･43･44･65号ピット



第140図　４区24号ピットの出土遺物



第141図　4区１・２・３号溝

２号溝（第141図　PL.21）

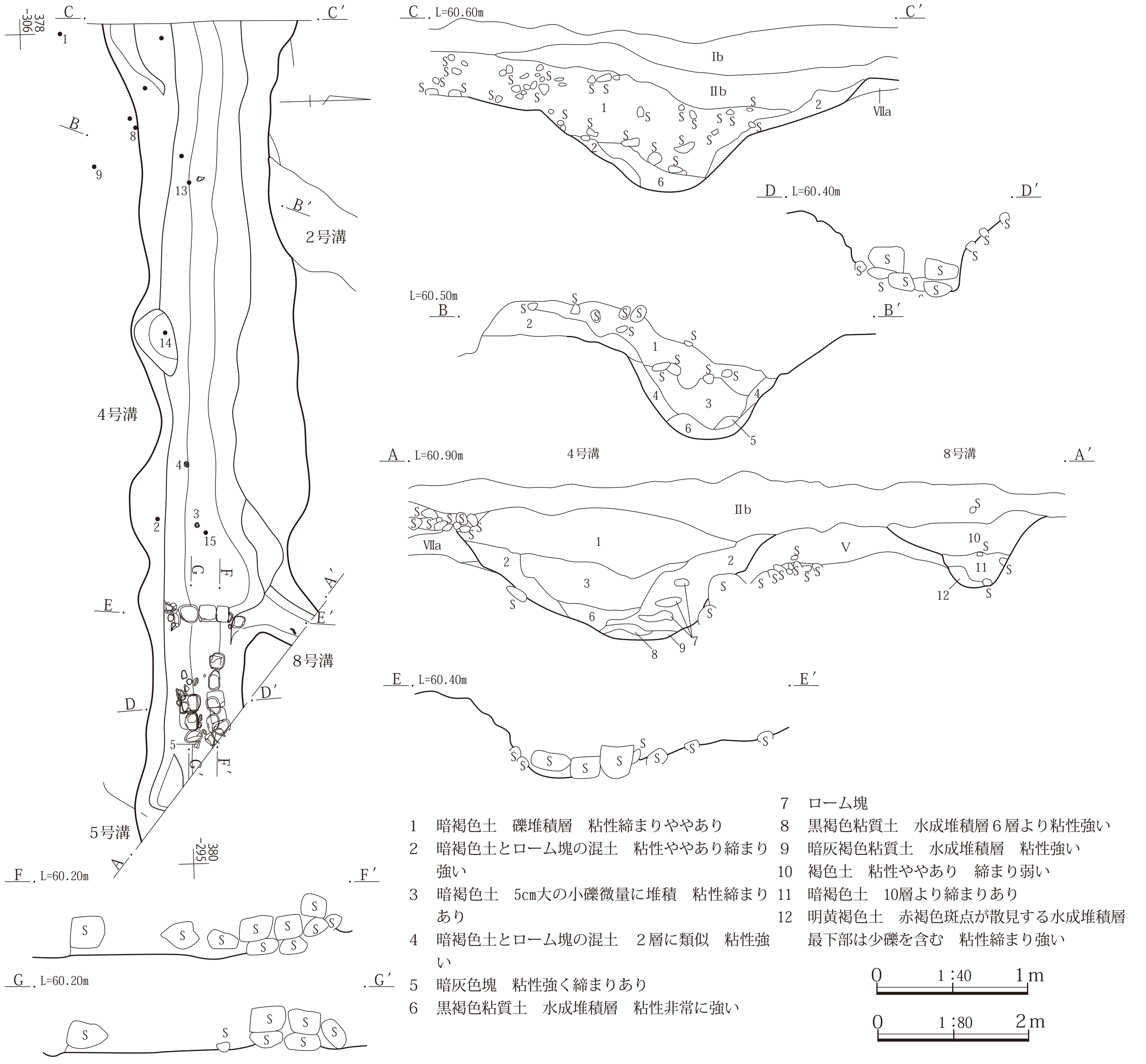
Ｘ＝381 ～ 384、Ｙ＝－301 ～ 304に位置する。３・４号溝と重複しているが、新旧関係は不明である。南西から北東に走行し、底面の標高は南西端60.38m、北東端60.32m、比高６㎝、勾配は1.52％である。南西から北東に傾斜している。検出された長さは3.94m、上面幅24 ～ 94㎝、深さ７～ 23㎝である。底面はやや凹凸が認められる。埋没土は炭化物を微量に含む黒褐色土であり、自然堆積と考えられる。水流の痕跡は認められない。出土遺物はなく、時期は不明である。

３号溝（第141図　PL.21・36）

Ｘ＝381 ～ 382、Ｙ＝－299 ～ 305に位置する。１・２・４号溝と重複するが、新旧関係は不明である。北東から南西に走行し、底面の標高は北東端60.36m、南西端60.33m、比高３㎝で、緩やかに傾斜している。検出された長さは6.00m、上面幅14 ～ 56㎝、深さ４～ 13㎝である。底面は平坦であり壁は斜めに立ち上がる。埋没土は小礫を含む均質の黒褐色土であり、自然堆積と考えられる。水流の痕跡は認められない。出土遺物はなく、時期は不明である。

４号溝（第142・143図　PL.21・36）

Ｘ＝379 ～ 381、Ｙ＝－293 ～ 306に位置する。１～３・５・７・８号溝と重複する。１～３号溝との新旧関係は不明だが、後述の堰を利用し４号溝から８号溝に水を流していた可能性が考えられる。土層観察より、５号溝は４号溝より新しく、７号溝は４号溝より古い。西から東に走行し、底面の標高は西端59.78m、東端59.70m、比高８㎝、西から東に緩やかに傾斜している。検出された長さは10.88m、上面幅1.22 ～ 2.34m、深さ53 ～ 68㎝である。底面から壁は緩やかに斜めに立ち上がる。上層は礫を多量に含む暗褐色土が厚く堆積していた。中位から下層は黒褐色土などによる水性堆積層となり水流の痕跡が認められる。遺物は古代の平瓦（第143図４溝-15）、内耳鍋や陶器など中世から近世の遺物（第143図４溝- １～ 14）が出土する。非掲載遺物は須恵器片129ｇのほか中世の国産陶器２点、鉢１点、近世の国産施釉陶器４点、焙烙・鍋21点が出土する。溝底面東寄りの位置から規則的に配列された１辺約20㎝の切石列が検出された。堰及び導水施設として利用したと考えられる。同位置においてさらに下層から川原石の石列が検出された。基礎としての調整もしくは二時期の使用が考えられる。出土遺物などから時期は16 ～ 17世紀と考えられる。



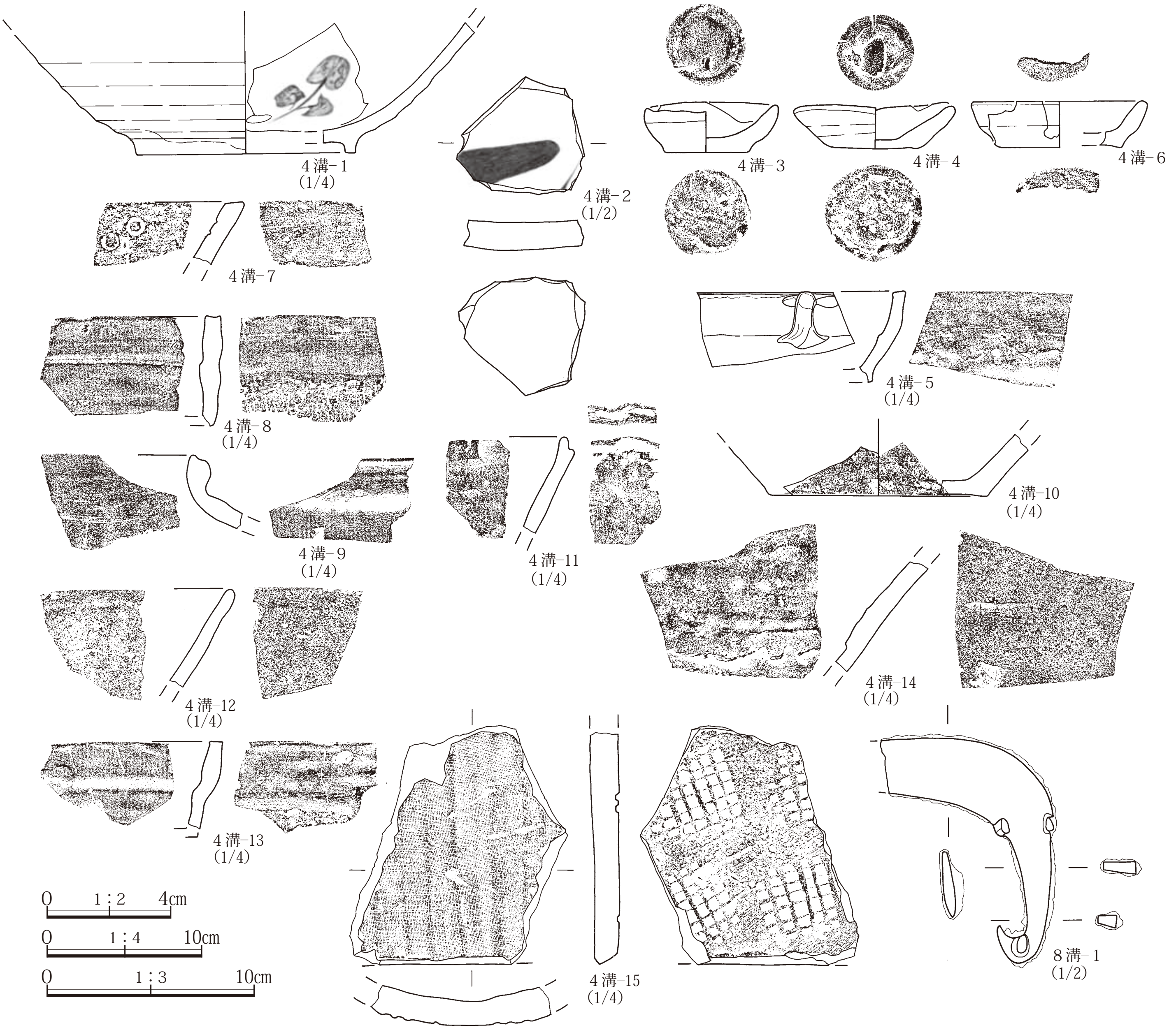
第142図　４区４・８号溝

８号溝（第142・143図　PL.36）

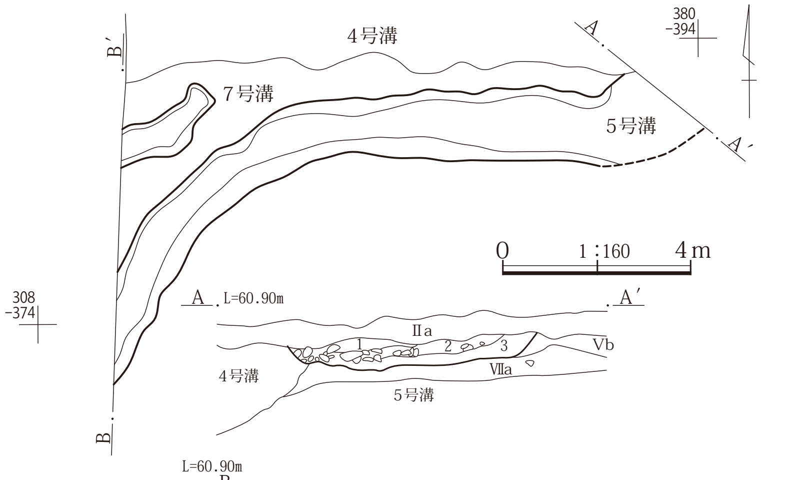
Ｘ＝380～381、Ｙ＝－297～298に位置する。４号溝と重複し、高低差を利用し４号溝に水を流したと考えられる。北東から南西に走行し、底面の標高は北東端60.05m、南西端60.02m、比高３㎝である。緩やかに傾斜している。検出された溝の長さは0.66m、上面幅0.58～1.00m、深さ17～19㎝である。壁は斜めに立ち上がる。埋没土は、礫を含む暗褐色土や黄褐色土であり水性堆積が認められる。遺物は埋没土から鉄器鎌１（第143図８溝－１）が出土する。時期詳細は不明であるが、４号溝と同時期と考えられる。

５号溝（第144図　PL.21）

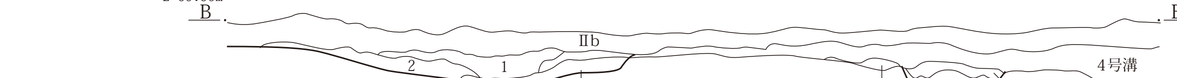
Ｘ＝372～379、Ｙ＝－294～306に位置する。４号溝と重複し５号溝が４号溝埋没土を切る。南西から北東に走行し、底面の標高は南西端60.43m、北東端60.26m、比高0.17mである。緩やかに傾斜しており、南西から北東に流れていたと想定される。検出された溝の長さは14.80m、上面幅1.04～1.58m、深さ11～23㎝である。底面から壁は斜めに立ち上がる。出土遺物はない。４号溝を切っており、４号溝を掘り直し、流路を変えた溝である可能性がある。



第143図　４区４・８号溝の出土遺物



５号溝A-A′
1　暗褐色土　礫多量に含む
2　暗褐色土　礫堆積層　締まり弱い
3　暗褐色土　礫堆積層下層部　粘性締まりあり
５・７号溝B-B′
1　褐色土　黄褐色小粒少量含む　粘性締まりややあり
2　褐色土　黄褐色土粒・塊多量に含む　締まり増す
3　褐色土と黄褐色土の混土　粘性締まり強い
4　褐色土　粘性締まりややあり
5　黄褐色土　４層より締まりあり



第144図　４区５・７号溝

７号溝（第144図）

Ｘ＝377 ～ 379 ～、Ｙ＝－304 ～ 306に位置する。４号溝埋没土の礫を多量に含む暗褐色土下層からの検出であり、４号溝より古いと考えられる。南西から北東に走行し、底面の標高は南西端60.33m、北東端60.23m、比高10㎝である。緩やかに傾斜しており、南西から北東に流れていたと想定される。検出された溝の長さは2.40m、上面幅50 ～ 86㎝、深さ５～ 20㎝である。底面は平坦であり壁は斜めに立ち上がる。埋没土は褐色土及び黄褐色土であり、自然堆積と考えられる。粘性の強い埋没土であり、水成堆積の可能性が考えられる。４号溝より古く、同じ機能を果たしていた溝とも考えられる。

６号溝（第144図　PL.21・36）

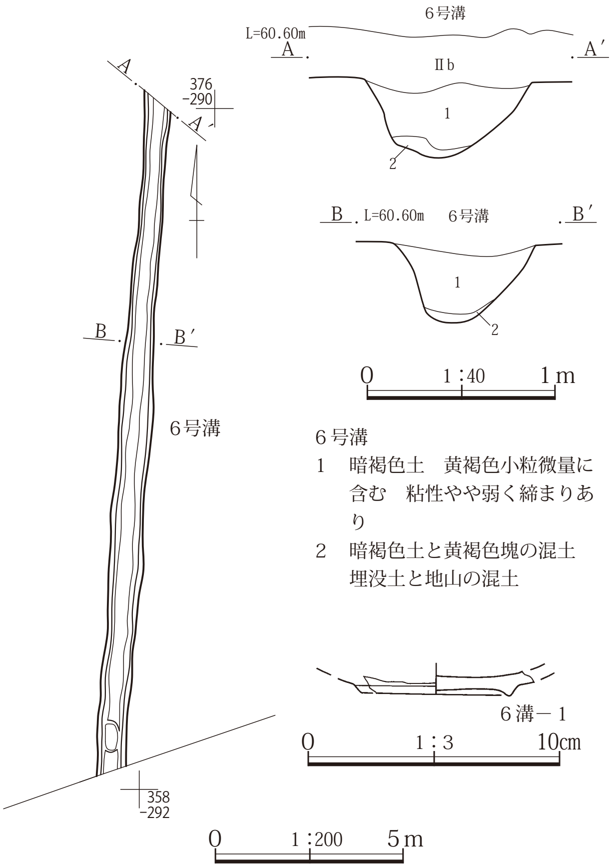
Ｘ＝358 ～ 376、Ｙ＝－291 ～ 293に位置する。11号溝と重複するが、新旧関係は不明である。北から南に走行し、底面の標高は北端60.09m、南端60.05m、比高４㎝である。緩やかに傾斜しており、北から南に流れていたと想定される。検出された溝の長さは18.22m、上面幅56 ～ 92㎝、深さ35 ～ 31㎝である。底面から壁は斜めに立ち上がる。埋没土は暗褐色土と黄褐色土の混土であり、人為的埋没と考えられ、水流の痕跡は認められない。16世紀の皿（第145図１）、非掲載遺物は土器９点、瓦１点が出土する。出土遺物から時期は中世から近世と考えられる。

９号溝（第146図　PL.21）

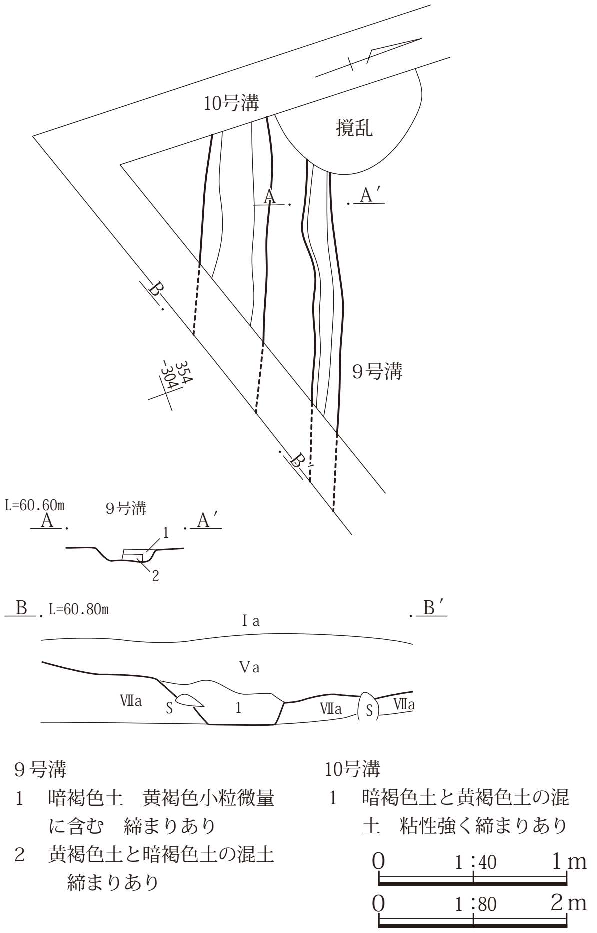
Ｘ＝355 ～ 356、Ｙ＝－303 ～ 305に位置する。北西から南東に走行し、底面の標高は北西端60.43m、南東端60.40m、比高３㎝である。緩やかに傾斜しており、北西から南東に流れていたと想定される。検出された長さは2.76m、上面幅26 ～ 34㎝、深さ４～ 10㎝である。底面は平坦であり壁は斜めに立ち上がる。埋没土は、暗褐色土と黄褐色土の混土であり、人為的埋没土と考えられる。出土遺物はなく時期は不明である。

10号溝（第146図　PL.21）

Ｘ＝354 ～ 355、Ｙ＝－304 ～ 306に位置する。南東から北西に走行し、底面の標高は南東端60.27m、北西端60.25m。検出された溝の長さは2.40m、上面幅58 ～ 70㎝、深さ18 ～ 25㎝である。底面は平坦であり壁は斜め



第145図　４区６号溝と出土遺物



第146図　４区９・10号溝

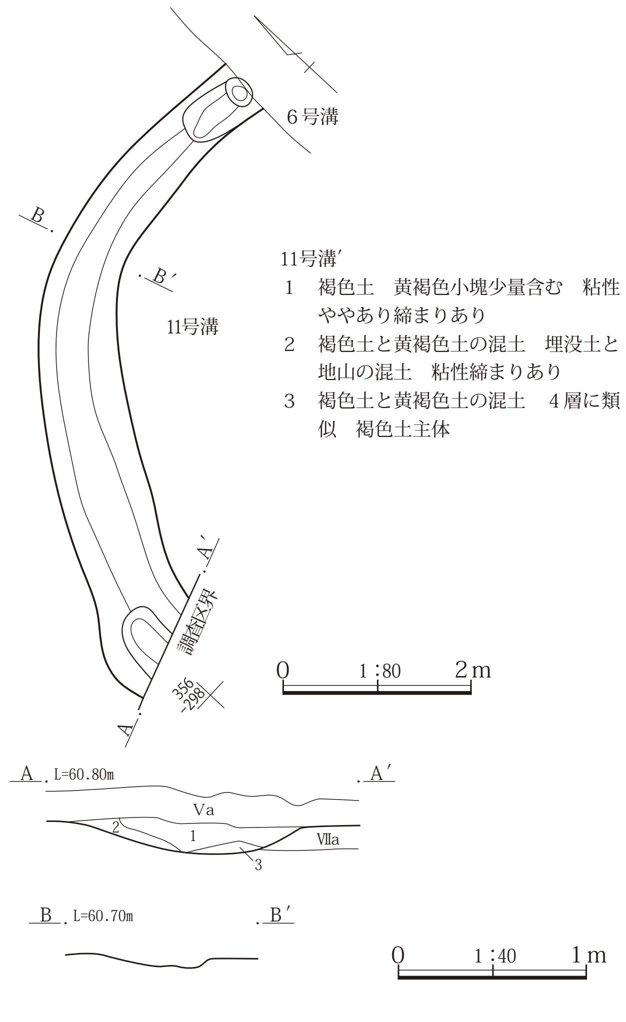
に立ち上がる。埋没土は暗褐色土と黄褐色土の混土であり、人為的埋没土と考えられる。出土遺物はなく、時期は不明である。

11号溝（第147図　PL.21）

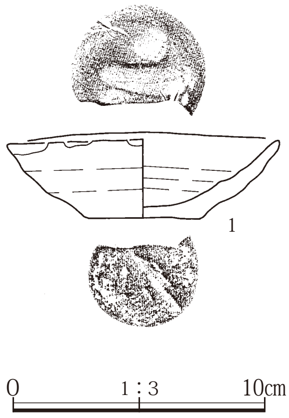
Ｘ＝356 ～ 360、Ｙ＝－293 ～ 298に位置する。６号溝と重複するが､新旧関係は不明。北東から南西に走行し、底面の標高は北東端60.45m、南西端60.45m、比高0㎝である。検出された溝の長さは7.16m、上面幅0.60 ～ 1.00m､深さ７～ 16㎝である。壁は緩やかに立ち上がる。埋没土は褐色土と黄褐色土の混土であり、人為的埋没土と考えられる。出土遺物はなく時期は不明である。

２　遺構外の遺物（第148図　PL.36）

４区からは古墳時代から近世に至る遺構や遺物が検出され、遺構外からも遺物が出土している。古墳時代から奈良・平安時代では、非掲載遺物の総重量は土師器片254ｇ、須恵器片106ｇに上る。４区は中世から近世の遺構外出土遺物が多い。石製品は非掲載であるが遺構確認面から砥石が出土する。土器は中世の皿（第148図１）が出土した。非掲載遺物は中世の焙烙１点、近世の国産磁器２点、国産施釉陶器９点、焙烙・鍋10点、皿４点、近現代では陶磁器３点、土器類31点、瓦２点が出土する。



第147図　４区11号溝



第148図　４区遺構外の出土遺物

第30表　天良七堂遺跡土坑・ピット計測表

土坑

区No	位置	形状	主軸方位	規模(m)長/短/深
1区1	207-119	不定形	N-6°-W	1.50/0.90/0.22
2	210-120	不定形	N-27°-W	2.00/0.89/0.18
3	214-123	不定形	-	3.72/1.16/0.21
4	214-126	円形	-	1.37/1.21/0.10
5	219-122	不定形	N-2°-W	(1.62) /1.20/0.08
6	232-124	長方形	N-11°-W	3.54/1.07/0.22
7	236-125	長方形	N-10°-W	3.25/0.97/0.14
8	237-123	隅丸方形	N-61°-E	0.83/0.78/0.13
9	239-133	不定形	N-5°-E	1.26/0.95/0.36
10	239-151	不定形	N-17°-E	2.65/0.75/0.12
11	229-110	不定形	-	(0.85) / (0.63) / (0.04)
12	248-143	楕円形	-	(1.15) /0.93/0.09
13	256-166	不定形	N-47°-E	1.35/1.05/0.22
14	254-154	不定形	N-56°-W	1.04/0.88/0.05
15	255-152	円形	-	1.00/0.93/0.18
16	260-151	-	-	1.49/ (0.58) /0.37
17	268-162	-	-	1.00/ (0.43) /0.20
18	264-174	隅丸方形	N-40°-W	2.13/1.32/0.25
19	263-161	楕円形	N-9°-E	2.13/1.85/0.23
20	261-162	円形	-	0.89/0.81/0.14
21	267-169	円形	-	0.73/0.72/0.17
22	267-175	円形	-	0.75/0.69/0.14
23	270-178	円形	-	0.72/0.61//0.17
24	357-178	円形	-	0.66/0.65/0.16
25	229-151	-	-	0.80/ (0.46) /0.34
26	227-148	不定形	-	1.85/ (1.28) /0.26
27	229-149	不定形	N-42°-E	1.40/0.80/0.26
28	230-150	不定形	N-45°-E	1.94/0.68/0.27
29	262-159	-	-	1.20/ (0.70) /0.10
30	263-166	不定形	N-34°-E	0.84/0.75/0.10
31	264-165	不定形	N-46°-W	1.22/0.73/0.20
32	224-145	-	-	(1.30) / (1.00) /0.17
2区1	311-208	円形	-	0.90/0.75/0.77
2	283-174	円形	-	1.04/0.95/0.14
3	292-198	長方形	-	1.26/0.59/0.53
4	292-211	不定形	N-18°-W	2.24/0.86/0.22
3区1	309-225	不定形	-	(1.90/ (1.50) /0.40
2	310-232	楕円形	N-7°-W	1.60/1.12/1.15
3	313-241	不定形	-	2.36/1.76/0.15
4	319-245	隅丸方形	N-38°-E	1.90/1.15/1.22
5	322-253	楕円形	N-27°-E	1.53/1.07/1.08
6	324-259	長方形	N-30°-W	1.84/1.12/0.75
7	327-261	不定形	-	1.20/1.18/1.48
8	327-263	長方形	N-20°-E	1.20/0.55/0.81
9	326-267	不定形	N-39°-E	0.82/0.72/0.35
10	325-267	円形	-	0.63/0.58/0.28
11	324-265	不定形	N-65°-W	0.80/0.65/0.37
12	325-266	不定形	N-87°-W	1.32/0.85/0.42
13	218-247	不定形	N-71°-E	3.60/0.96/0.08
14	354-274	円形	-	1.23/1.21/0.98
15	350-278	楕円形	-	1.27/1.02/0.24
16	351-280	楕円形	N-47°-E	1.12/0.94/0.21
17	351-282	円形	-	1.20/1.12/0.18
18	346-291	不定形	N-56°-W	1.70/1.08/0.66
19	337-275	円形	-	0.94/0.91/0.13
20	339-272	円形	-	0.89/0.88/0.16
21	334-262	円形	N-32°-W	0.90/0.85/0.13
22	332-273	楕円形	N-7°-W	1.59/0.92/0.80
23	351-270	不定形	-	(1.45) / (1.00) /0.27
24	331-275	楕円形	N-28°-W	1.16/0.88/0.70
25	314-218	不定形	-	-/-/1.07
4区1	365-280	不定形	-	(2.67) /1.05/0.26
2	366-284	不定形	N-12°-E	1.88/0.63/0.10
3	368-285	長方形	N-85°-W	3.00/0.87/0.07
4	366-289	不定形	-	0.74/0.62/0.52
5	367-289	楕円形	-	0.53/0.44/0.29
6	364-305	不定形	-	0.92/0.80/0.08
7	370-296	不定形	N-3°-W	2.35/0.36/0.24
8	373-294	楕円形	-	0.62/0.38/0.10
9	366-289	不定形	-	0.40/ (0.36) /0.30
10	374-293	不定形	N-27°-W	2.88/0.98/0.72
11	376-301	不定形	-	1.50/0.79/0.48
12	373-303	不定形	N-32°-W	1.64/1.46/0.44
13	359-306		-	(1.86) / (0.60) / (0.31)

ピット

区No	位置	形状	主軸方位	規模(m)長/短/深
1区1	217-098	円形	-	0.30/0.30/0.23
2	217-102	不定形	-	0.46/0.40/0.10
3	217-103	円形	-	0.27/0.26/0.10
4	215-104	円形	-	0.38/0.28/0.17

区No	位置	形状	主軸方位	規模(m)長/短/深
5	216-104	円形	N-62°-W	0.29/0.26/0.21
6	216-105	円形	N-58°-W	0.28/0.25/0.11
7	216-106	楕円形	N-19°-E	0.48/0.31/0.22
8	215-107	楕円形	N-32°-E	0.38/0.32/0.48
9	214-108	楕円形	N-84°-W	0.30/0.20/0.13
10	213-107	楕円形	N-31°-W	0.40/0.35/0.45
11	212-106	円形	-	0.30/0.23/0.15
12	213-108	円形	-	0.35/0.29/0.35
13	214-113	円形	-	0.34/0.30/0.28
14	212-115	円形	-	0.22/0.20/0.35
15	210-114	楕円形	N-6°-E	0.52/0.39/0.16
16	210-113	楕円形	N-62°-E	0.33/0.25/0.16
17	210-113	円形	-	0.26/0.24/0.23
18	210-114	円形	-	0.36/0.33/0.18
19	209-114	楕円形	N-34°-W	0.40/0.31/0.16
20	214-213	楕円形	N-28°-W	0.35/0.31/0.54
21	220-119	不定形	N-54°-W	0.23/0.20/0.13
22	218-112	円形	-	0.40/0.38/0.36
23	218-112	円形	-	0.32/0.30/0.17
24	219-111	楕円形	N-74°-W	0.44/0.34/0.28
25	220-112	円形	-	0.34/0.31/0.21
26	219-113	円形	-	0.32/0.28/0.20
27	221-114	楕円形	N-42°-E	0.40/0.27/0.21
28	222-112	円形	-	0.28/0.27/0.12
29	222-113	円形	-	0.50/0.42/0.28
30	211-128	-	N-39°-E	0.23/(0.10)/0.15
31	212-128	円形	-	0.35/0.32/0.41
32	218-125	円形	-	0.37/0.33/0.39
33	216-125	楕円形	N-90°	0.53/0.40/0.36
34	214-126	円形	-	0.43/0.39/0.51
35	213-128	円形	-	0.42/0.38/0.27
36	214-130	円形	-	0.38/0.36/0.29
37	216-127	楕円形	-	0.46/0.40/0.56
38	214-128	円形	-	0.27/0.24/0.16
39	216-132	円形	-	0.37/0.34/0.42
40	215-127	円形	-	0.34/0.33/0.26
41	216-125	楕円形	-	0.34/0.25/0.31
42	223-136	楕円形	N-29°-W	0.33/0.24/0.26
43	221-139	円形	-	0.30/0.26/0.14
44	221-139	円形	-	0.30/0.30/0.27
45	213-104	円形	-	0.47/0.43/0.19
46	225-139	円形	-	0.55/0.50/0.16
47	220-129	円形	-	0.27/0.27/0.34
48	215-129	楕円形	N-77°-W	0.27/0.20/0.14
49	225-131	円形	-	0.22/0.22/0.32
50	225-136	円形	-	0.35/0.31/0.11
51	227-131	円形	-	0.33/0.32/0.21
52	229-129	楕円形	N-15°-W	0.37/0.30/0.24
53	215-129	円形	-	0.30/0.27/0.18
54	216-134	不定形	-	0.32/0.24/0.26
55	217-134	円形	-	0.32/0.25/0.14
56	236-126	円形	-	0.49/0.45/0.16
57	235-127	円形	-	0.39/0.37/0.53
58	217-134	不定形	N-32°-E	0.43/0.28/0.20
60	238-134	円形	-	0.30/0.25/0.21
61	236-135	円形	-	0.32/0.29/0.25
62	235-138	円形	-	0.27/0.26/0.13
63	235-139	円形	-	0.28/0.25/0.17
64	231-141	円形	-	0.28/0.27/0.43
65	233-148	円形	-	0.38/0.35/0.35
66	234-150	不定形	N-73°-W	0.28/0.24/0.32
67	232-151	円形	-	0.25/0.25/0.15
68	238-144	不定形	N-77°-W	0.29/0.23/0.19
69	220-129	不定形	N-88°-W	0.27/0.23/0.26
70	222-130	円形	-	0.26/0.25/0.12
71	220-136	楕円形	N-12°-W	0.28/0.21/0.22
72	219-100	円形	-	0.20/0.19/0.36
73	217-099	不定形	-	0.25/0.22/0.14
74	215-099	-	-	0.22/(0.12)/0.10
75	218-105	円形	-	0.25/0.24/0.24
76	216-106	円形	-	0.32/0.29/0.27
77	218-108	円形	-	0.23/0.19/0.11
78	216-108	楕円形	N-23°-E	0.30/0.27/0.24
79	214-108	円形	-	0.23/0.20/0.21
80	214-107	楕円形	N-86°-W	0.39/0.35/0.25
81	212-107	楕円形	-	0.39/0.32/0.19
82	212-108	円形	-	0.30/0.27/0.40
83	213-109	円形	-	0.28/0.28/0.43
84	215-109	円形	-	0.32/0.29/0.43
85	218-110	楕円形	N-33°-W	0.33/0.20/0.16
86	217-111	楕円形	-	0.32/0.23/0.19

区No	位置	形状	主軸方位	規模(m)長/短/深
87	218-113	円形	-	0.27/0.24/0.10
88	213-111	楕円形	N-30°-E	0.33/0.25/0.15
89	211-111	円形	-	0.35/0.35/0.17
90	212-113	楕円形	-	0.35/0.27/0.11
91	213-114	楕円形	N-72°-W	0.33/0.29/0.17
92	216-115	円形	-	0.25/0.23/0.33
93	213-117	楕円形	-	0.50/0.38/0.26
94	215-118	円形	-	0.32/0.32/0.30
95	216-118	楕円形	N-78°-E	0.42/0.39/0.16
96	219-120	楕円形	N-25°-W	0.44/0.35/0.18
97	228-125	円形	-	0.26/0.21/0.15
98	229-124	円形	-	0.36/0.31/0.25
99	215-116	円形	-	0.21/0.19/0.19
100	217-117	楕円形	N-56°-W	0.22/0.18/0.24
101	222-120	楕円形	N-83°-W	0.29/0.25/0.14
102	226-122	円形	-	0.24/0.21/0.13
103	235-123	円形	-	0.20/0.16/0.12
104	221-105	円形	-	0.25/0.23/0.27
105	220-129	方形	N-88°-W	0.28/(0.20)/0.29
106	223-143	-	-	0.45/(0.23)/0.52
107	246-146	楕円形	N-28°-E	0.29/0.25/0.67
108	245-148	円形	-	0.34/0.33/0.45
109	245-149	円形	-	0.28/0.28/0.20
110	240-150	円形	-	0.33/0.27/0.34
111	243-152	円形	-	0.33/0.30/0.39
112	245-152	円形	-	0.30/0.25/0.35
113	245-153	円形	-	0.22/0.21/0.24
114	246-155	円形	-	0.25/0.25/0.21
115	249-176	-	-	0.28/(0.17)/0.33
116	252-176	円形	-	0.30/0.26/0.36
117	253-179	不定形	N-84°-E	0.60/0.31/0.43
118	256-179	円形	-	0.34/0.31/0.39
119	263-191	円形	-	0.30/0.30/0.23
120	270-187	-	-	0.38/(0.25)/0.59
121	266-176	不定形	N-45°-E	0.50/0.34/0.33
122	266-171	円形	-	0.30/0.28/0.22
123	268-172	楕円形	N-59°-W	0.43/0.36/0.31
124	269-172	不定形	N-44°-W	0.45/0.30/0.35
125	267-175	円形	-	0.30/0.29/0.24
126	269-176	円形	-	0.35/0.31/0.27
127	271-176	円形	-	0.33/0.29/0.33
128	271-174	楕円形	N-65°-W	0.40/0.31/0.44
129	273-173	円形	-	0.30/0.29/0.28
130	271-172	楕円形	N-56°-W	0.30/0.26/0.24
131	269-170	円形	-	0.31/0.30/0.21
132	265-165	楕円形	N-48°-W	0.48/0.35/0.25
2区1	295-201	不定形	N-23°-E	0.28/0.26/0.19
2	295-200	円形	-	0.43/0.42/0.16
3	294-199	楕円形	N-81°-W	0.60/0.33/0.37
4	293-197	不定形	N-69°-E	0.60/0.48/0.20
5	291-189	不定形	N-35°-W	0.64/0.53/0.15
6	289-185	円形	-	0.32/0.29/0.69
7	281-179	円形	-	0.33/0.30/0.18
8	277-185	円形	-	0.30/0.27/0.32
9	279-211	不定形	N-61°-E	0.22/0.18/0.24
10	278-215	円形	-	0.44/0.40/0.51
11	282-214	円形	-	0.36/0.33/0.58
3区1	312-226	円形	-	0.46/0.42/0.34
2	314-226	不定形	N-34°-E	0.59/0.45/0.22
3	315-227	楕円形	N-76°-E	0.50/0.30/0.41
4	315-227	不定形	-	0.58/0.53/0.39
5	316-227	不定形	N-26°-W	0.67/0.42/0.34
6	212-229	円形	-	0.38/0.35/0.20
7	313-234	楕円形	N-76°-E	0.22/0.15/0.18
8	328-240	円形	-	0.30/0.25/0.38
9	379-241	円形	-	0.35/0.31/0.18
10	342-297	円形	-	0.34/0.27/0.32
11	342-287	不定形	N-72°-E	0.38/0.32/0.21
12	343-227	不定形	N-80°-E	0.43/0.41/0.25
13	342-299	不定形	N-78°-W	0.42/0.41/0.39
14	343-299	不定形	N-79°-E	0.50/0.42/0.34
15	343-289	不定形	N-69°-E	0.30/0.22/0.12
16	345-300	円形	-	0.41/0.37/0.41
17	346-300	円形	-	0.38/0.35/0.33
18	345-301	円形	-	0.32/0.30/0.20
19	345-301	円形	-	0.19/0.19/0.07
20	344-300	円形	-	0.28/0.23/0.32
21	342-297	不定形	N-15°-E	0.25/0.25/0.23
22	344-297	円形	-	0.24/0.22/0.30
23	342-295	円形	-	0.40/0.40/0.39
24	343-301	円形	-	0.25/0.20/0.38
25	343-299	円形	-	0.50/0.43/0.34
26	348-274	円形	-	0.25/0.20/0.38
27	348-273	不定形	-	0.33/0.24/0.34

区No	位置	形状	主軸方位	規模(m)長/短/深
28	348-371	円形	-	0.25/0.25/0.27
29	346-268	円形	-	0.30/0.27/0.27
30	347-268	円形	-	0.41/0.35/0.20
31	347-266	不定形	-	0.33/0.31/0.16
32	347-265	円形	-	0.37/0.35/0.19
33	351-275	円形	-	0.22/0.20/0.11
34	353-275	不定形	-	0.36/0.32/0.26
35	354-275	不定形	N-59°-E	0.52/0.46/0.33
36	355-277	不定形	N-25°-W	(0.53)/0.54/0.48
4区1	365-277	不定形	N-49°-W	0.31/(0.11)/0.42
2	363-277	不定形	N-45°-W	0.48/0.40/0.42
3	364-277	楕円形	N-44°-W	0.56/0.43/0.34
4	364-278	楕円形	-	0.27/0.22/0.27
5	364-278	円形	-	0.25/0.22/0.24
6	364-278	不定形	N-37°-E	0.42/0.23/0.44
7	365-280	不定形	N-42°-E	0.47/0.40/0.44
8	365-282	不定形	N-17°-W	0.43/0.28/0.39
9	364-282	円形	-	0.27/0.23/0.20
10	364-281	円形	-	0.34/0.31/0.22
11	363-281	円形	-	0.25/0.23/0.36
12	362-282	不定形	-	0.40/0.38/0.19
13	361-282	不定形	-	(0.50)/(0.47)/0.14
14	361-283	円形	-	0.35/0.30/0.20
15	361-283	不定形	-	0.35/(0.15)/0.29
16	361-283	不定形	N-35°-E	0.46/0.27/0.28
17	365-284	円形	-	0.32/0.32/0.28
18	365-284	楕円形	-	0.25/0.20/0.15
19	365-285	円形	-	0.29/0.27/0.25
20	370-285	楕円形	N-63°-W	0.53/0.44/0.38
21	369-285	円形	-	0.41/0.37/0.58
22	366-287	円形	-	0.24/0.23/0.28
23	360-286	不定形	-	(0.18)/0.18/0.21
24	360-286	楕円形	-	0.33/0.31/0.28
25	360-286	不定形	-	0.35/(0.13)/0.47
26	360-286	不定形	-	(0.24)/0.23/0.20
27	361-286	円形	-	0.35/0.28/0.35
28	361-287	不定形	N-62°-W	0.39/0.21/0.20
29	361-287	円形	-	0.26/0.23/0.13
30	360-287	円形	-	0.30/0.21/0.18
31	360-288	楕円形	N-45°-E	0.28/0.22/0.24
32	361-288	楕円形	N-13°-E	0.22/0.18/0.14
33	360-289	円形	-	0.20/0.18/0.16
34	362-290	円形	-	0.54/0.46/0.31
35	369-288	不定形	-	0.50/0.42/0.62
36	369-288	不定形	N-25°-W	(0.35)/(0.23)/0.47
37	361-291	楕円形	N-57°-E	0.26/0.20/0.12
38	362-280	-	-	0.35/0.15/0.26
39	361-284	円形	-	0.30/0.25/0.22
40	361-284	円形	-	0.30/0.25/0.24
41	361-285	不定形	N-51°-E	0.33/0.24/0.28
42	362-288	長方形	N-68°-W	0.24/0.18/0.20
43	366-289	-	-	(0.52)/(0.20)/0.48
44	367-289	円形	-	0.33/0.30/0.12
45	373-290	不定形	N-45°-E	0.48/0.34/0.32
46	373-290	不定形	-	0.50/0.35/0.34
47	362-293	楕円形	N-60°-W	0.25/0.19/0.22
48	363-294	円形	-	0.29/0.27/0.28
49	362-298	楕円形	N-17°-E	0.33/0.25/0.27
50	362-298	楕円形	N-57°-W	0.30/0.23/0.22
51	362-298	円形	-	0.30/0.29/0.23
52	363-298	円形	-	0.35/0.29/0.32
53	363-298	楕円形	-	0.40/0.33/0.16
54	363-300	楕円形	N-68°-W	0.26/0.18/0.15
55	363-301	楕円形	N-36°-W	0.32/0.27/0.35
56	363-301	円形	-	0.33/0.30/0.30
57	358-303	円形	-	0.33/0.26/.021
58	364-306	-	-	0.36/0.16/0.13
59	373-298	楕円形	-	0.49/0.39/0.36
60	385-303	円形	-	0.33/0.30/0.34
61	384-305	楕円形	N-22°-W	0.35/0.27/0.31
62	383-304	楕円形	N-26°-W	0.38/0.33/0.40
63	361-285	円形	-	0.23/0.19/0.31
64	360-288	円形	-	0.22/0.19/0.23
65	367-289	不定形	N-82°-E	(0.40)/(0.35)/0.23

第５章　上根遺跡

第１節　上根遺跡の概要

上根遺跡は、平成22年度に１～４区、23年度に５・６区の発掘調査が実施された。上根遺跡は本報告書における笠松遺跡及び天良七堂遺跡の南東側に位置する。平成22・23年度の発掘調査では、１区から６区において古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居、中世から近世の竪穴状遺構・掘立柱建物・橋、縄文時代から近世の土坑・土坑群・ピット・井戸・溝、谷地などの遺構や遺物が検出された。３区では遺構調査終了後に旧石器時代の試掘調査を行ったが遺構の検出及び石器の出土はみられなかった。１・２区は大間々扇状地扇端部の低地となり、遺構数は少ないが溝、土坑、竪穴状遺構が検出された。３区北側は低地から微高地への転換地点であり、３区以北は遺構数が増加し、竪穴住居、掘立柱建物、溝などの遺構が検出されている。

第２節　１区の調査成果

１区は南東端に位置する。表土から遺構確認面まで約30㎝であり、表土下は圃場整備後の水田耕土となっている。調査区域に周知の遺跡である東山道駅路牛堀矢ノ原ルートが想定されるため、確認面をAs-Bを混入する基本土層第Ⅲ層の上面を１面、基本土層第Ⅲ層下面を２面として発掘調査を実施した。

１　古代以降の遺構と遺物

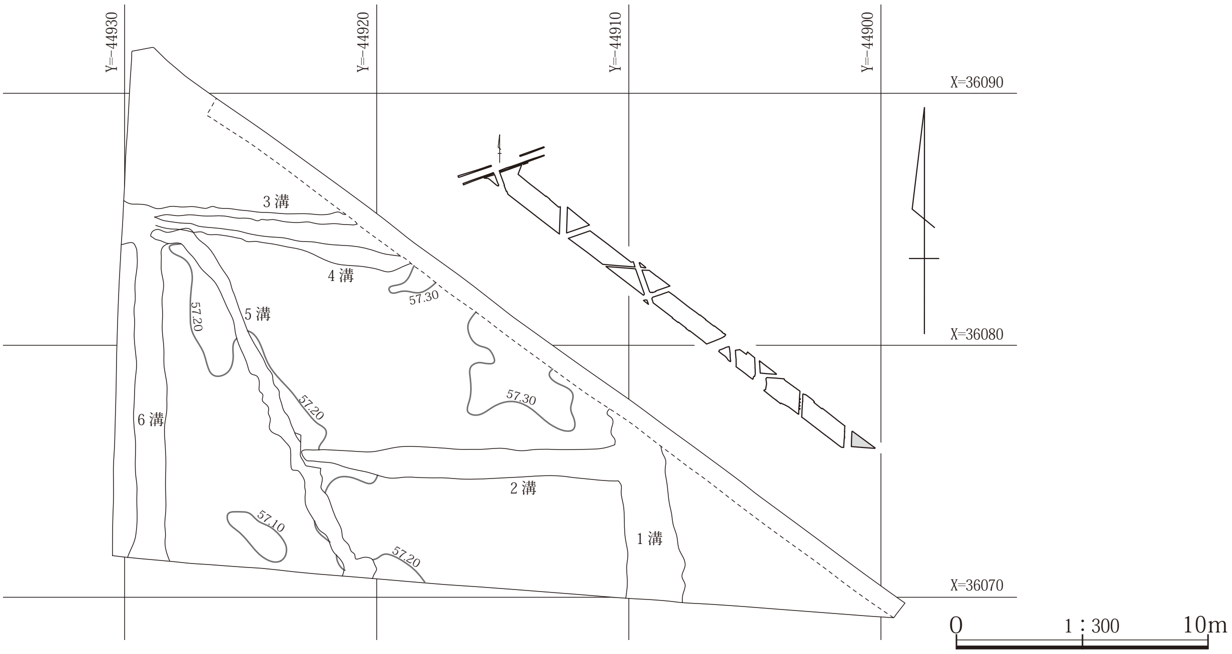
古代以降の遺構・遺物が検出されている。検出された遺構は溝である。

(１)溝

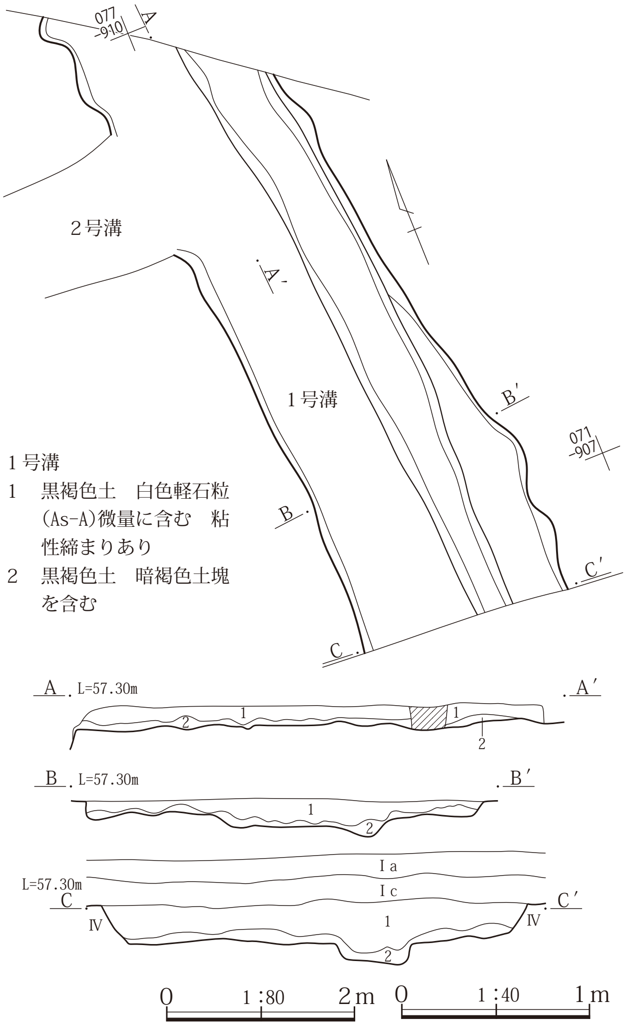
１区から検出された溝は６条である。出土遺物や遺構検出状況及び埋没土の観察から時期は古代および近世と考えられる。南北及び東西に走行する１・２・６号溝は近世に、３～５号溝は古代に帰属する溝と考えられる。

１号溝(第150図　PL.22)

X＝070～077、Y＝－906～910に位置する。１号溝と２号溝に切り合いはなく同時期と考えられる。北から南に走行し、底面の標高は北端57.10m、南端57.00m、比高10㎝であり、僅かであるが南に向かって傾斜している。検出された規模は、長さ6.87m、上面幅1.75～2.32m、深さ８～16㎝である。底面中央部は幅約40㎝、深さ約５㎝掘り込まれているが埋没土に切り合いはない。埋没はAs-Aを微量に含む黒褐色土による自然埋没と考えられ、底部に水流の痕跡は認められない。非掲載遺物は、埋没土中から土師器小破片20ｇ、須恵器大破片20ｇが出土しているが、周辺からの流れ込みと考えられる。時期



第149図　上根遺跡　１区全体図



第150図　１区１号溝

は、埋没土から近世以降と考えられる。

２号溝（第151図　PL.22）

Ｘ＝075 ～ 077、Ｙ＝－910 ～ 922に位置する。５号溝と重複し、埋没土の確認状況から２号溝が新しい。１・２号溝埋没土に切り合いはなく、１号溝の東側に延長されないことから同時期と考えられる。西から東に走行し、底面の標高は西端57.17m、東端57.10m、比高７㎝であり、傾斜はほとんど認められない。検出した規模は、長さ12.63m、上面幅0.43 ～ 1.43m、深さ１～ 14㎝である。埋没土は、１号溝と同質でAs-Aを微量に含む黒褐色土などによる自然埋没と考えられ、下層に水流の痕跡は認められない。非掲載遺物は、埋没土から土師器小破片５ｇ、須恵器大破片５ｇが出土しているが、周辺からの流れ込みと考えられる。時期は、埋没土から近世以降と考えられる。

３号溝（第151図　PL.22）

Ｘ＝084 ～ 085、Ｙ＝－920 ～ 929に位置する。４・６号溝と重複しており、４・６号溝によって切られている。東から西に走行し、底面の標高は東端57.22m、西端57.15m、比高７㎝であり、底面の傾斜はほとんど認められない。検出した規模は、長さ9.28m、上面幅28 ～ 47m、深さ３～ 10㎝であり、上根遺跡２区にまでは延長されていない。埋没土にAs-Bを含まず、自然埋没と考えられ、下層に水流の痕跡は認められない。非掲載遺物は埋没土中から須恵器大破片10ｇが出土した。時期は、埋没土の状況から古代以前(As-B降下以前)と考えられる。

４号溝（第151図　PL.22）

Ｘ＝083 ～ 084、Ｙ＝－918 ～ 928に位置する。３・５・６号溝と重複し、３号溝を切り、５・６号溝に切られている。東から西に走行し、底面の標高は東端57.17m、西端57.14m、底面は平坦で傾斜はほとんど認められず、下層に水流の痕跡も見られないことから区画溝と考えられる。検出した規模は、長さ10.46m、上面幅22 ～ 78m、深さ３～ 14㎝であり、上根遺跡２区にまでは延長されていない。埋没土にAs-Bを含まず、堆積状況から自然埋没と考えられる。出土遺物はないが、埋没土中にAs-Bが含まれないことから、時期は古代以前(As-B降下以前)と考えられる。

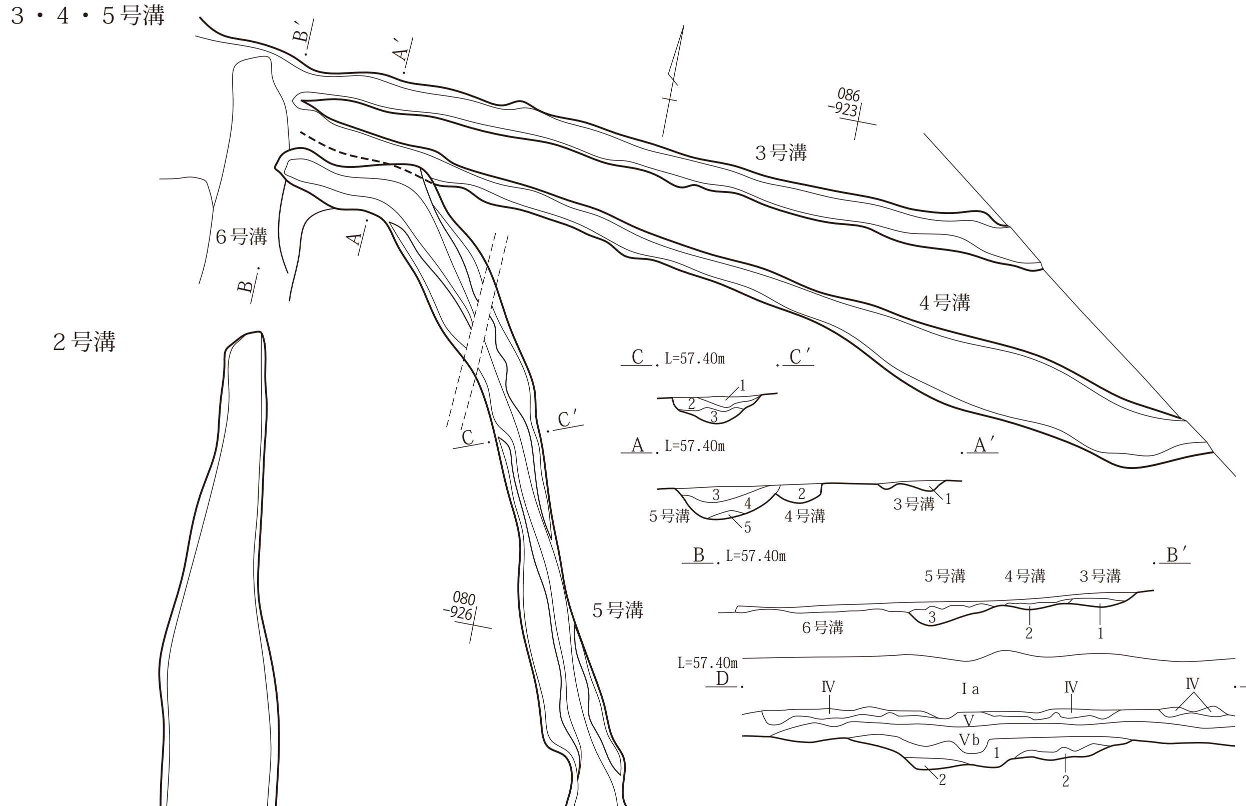
５号溝（第151図　PL.22・37）

Ｘ＝073 ～ 084、Ｙ＝－922 ～ 928に位置する。４・６号溝と重複し、４号溝を切り、６号溝に切られている。北西から南東に走行し、底面の標高は、北西端57.07m、南東端57.02m、比高５㎝あり、底面の傾斜はほとんど認められない。検出した規模は、長さ16.00m、上面幅35 ～ 90㎝、深さ５～ 20㎝である。埋没土中にはAs-Bを含まず、堆積状況から自然埋没と考えられ、下層には水流の痕跡は認められない。非掲載遺物は、須恵器小破片５ｇである。時期は、埋没土中にAs-Bを含まないことから、古代以前(As-B降下以前)と考えられる。

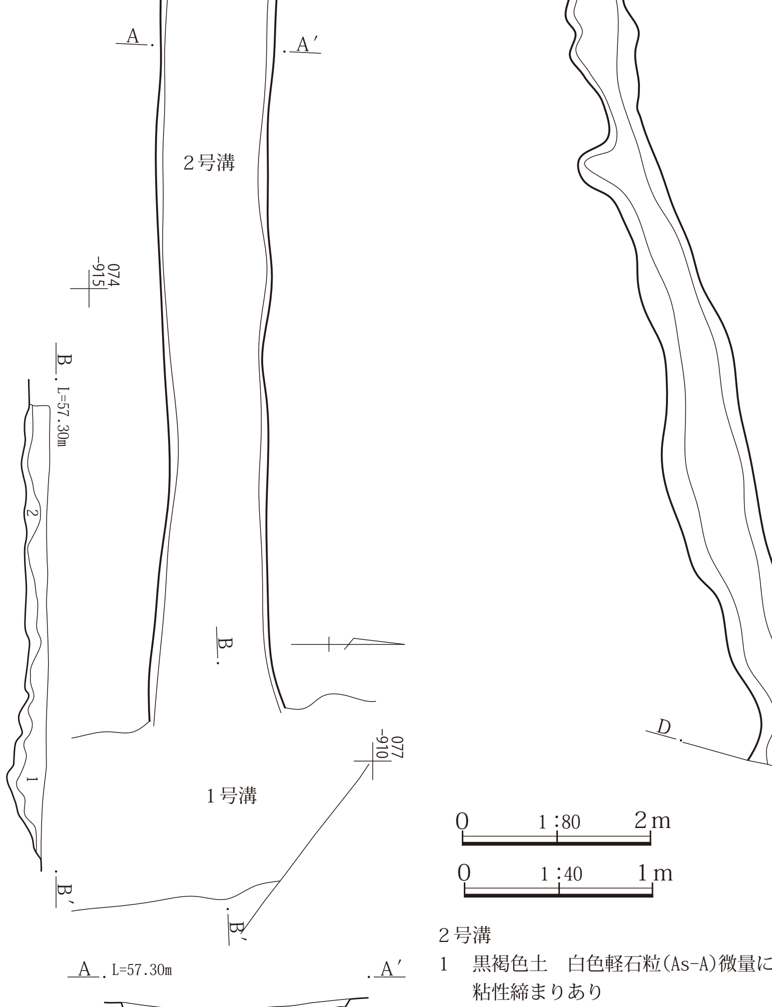
６号溝（第152図）

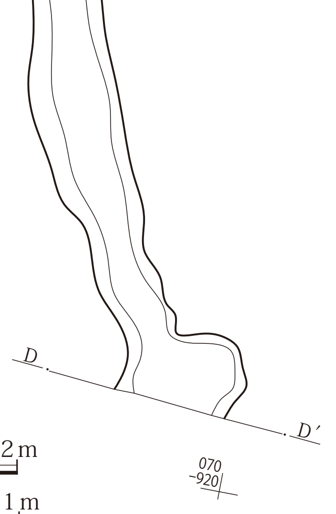
Ｘ＝071 ～ 085、Ｙ＝－928 ～ 929に位置する。３・４・５号溝と重複しており、６号溝が新しい。西から東に走行し、南へ向きを変えている。底面の標高は、西端57.15m、東端57.17m、北端57.17m、南端57.07m、であり、北側が高く西側及び南側が低く、下層に水流の痕跡も認められないことから区画溝と考えられる。検出した規模は、長さ13.95m、上面幅0.40 ～ 1.70m、深さ0.03

3・4・5号溝

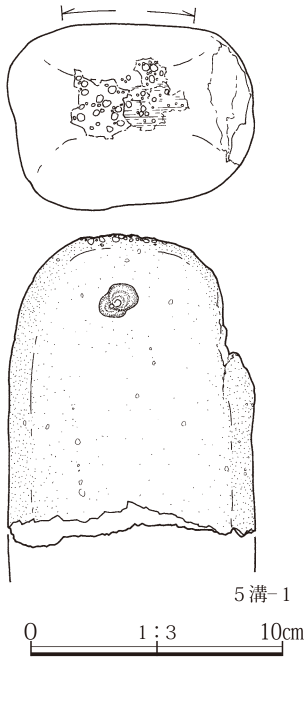


2号溝





3・4・5号溝A-A′ B-B′
1　黒褐色土　黄褐色土粒微量に含む　粘性締まりあり
2　黒褐色土　10㎝大の黄褐色塊含む　粘性強く締まりあり
3　黒褐色土　ややザラつきあり　粘性締まりややあり
4　黒褐色土　粘性締まりあり
5　灰黄褐色土　締まり強い
5号溝C-C′
1　黒褐色土　粘性ややあり締まりあり
2　黒褐色土　粘性締まりあり
3　灰黄褐色土　粘性締まり強い
5号溝D-D′
1　暗褐色土　粘性締まりあり
2　暗褐色土　5㎝大の黄褐色塊を含む　粘性締まりあり



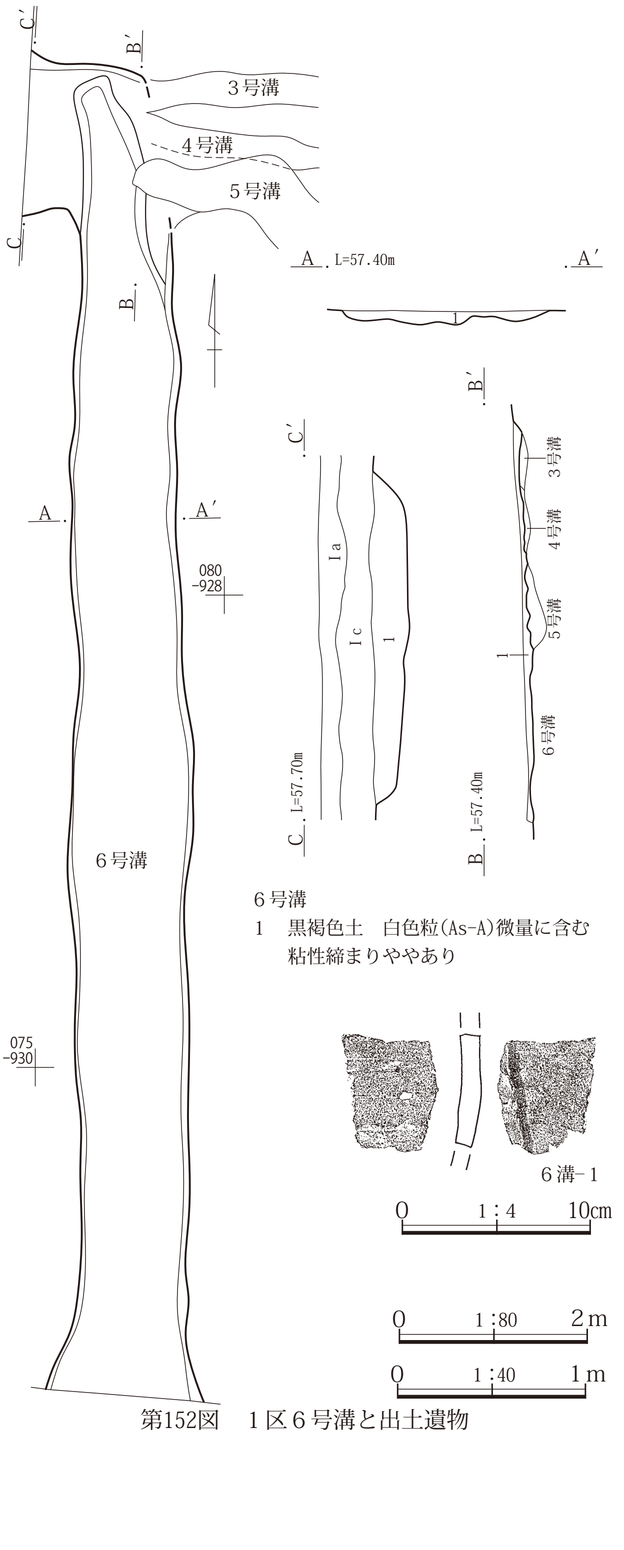
2号溝
1　黒褐色土　白色軽石粒(As-A)微量に含む
　粘性締まりあり
2　黒褐色土　暗褐色土塊を含む

第151図　1区2～5号溝と5号溝の出土遺物

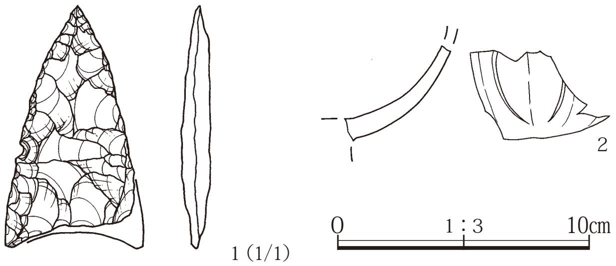
～0.09ｍである。埋没はAs-Aを微量に含む黒褐色土による自然埋没と考えられ、下層にも水流の痕跡はない。埋没土から(第152図１)が出土した他、非掲載遺物として須恵器小破片５ｇが出土しているが、周辺からの流れ込みと考えられる。時期は、埋没土中のAs-Aの存在から近世以降(As-A降下以降)と考えられる。

２　遺構外の遺物(第153図　PL.37)

１区からは６条の溝が検出されているが、遺構外出土遺物は少ない。縄文時代の土器はなく、遺構確認面２面のAs-B混土層下から石鏃(第153図１)が出土した他、非掲載遺物であるが削器、石核、加工痕ある剥片が出土している。剥片の総重量は、黒色安山岩5.3ｇ、黒色頁岩17.1ｇ、黒曜石1.0ｇホルンフェルス43.8ｇ、チャート20.2ｇである。古墳時代から奈良・平安時代の土師器及び須恵器の非掲載遺物の総重量は、土師器大破片920ｇ、須恵器大破片400ｇ、須恵器小破片355ｇに上り、中世の碗(第153図２)、近世の国産磁器２点、施釉陶器７点、焙烙２点などが出土した。



第152図　１区６号溝と出土遺物



第153図　１区遺構外の出土遺物

第３節　２区の調査成果

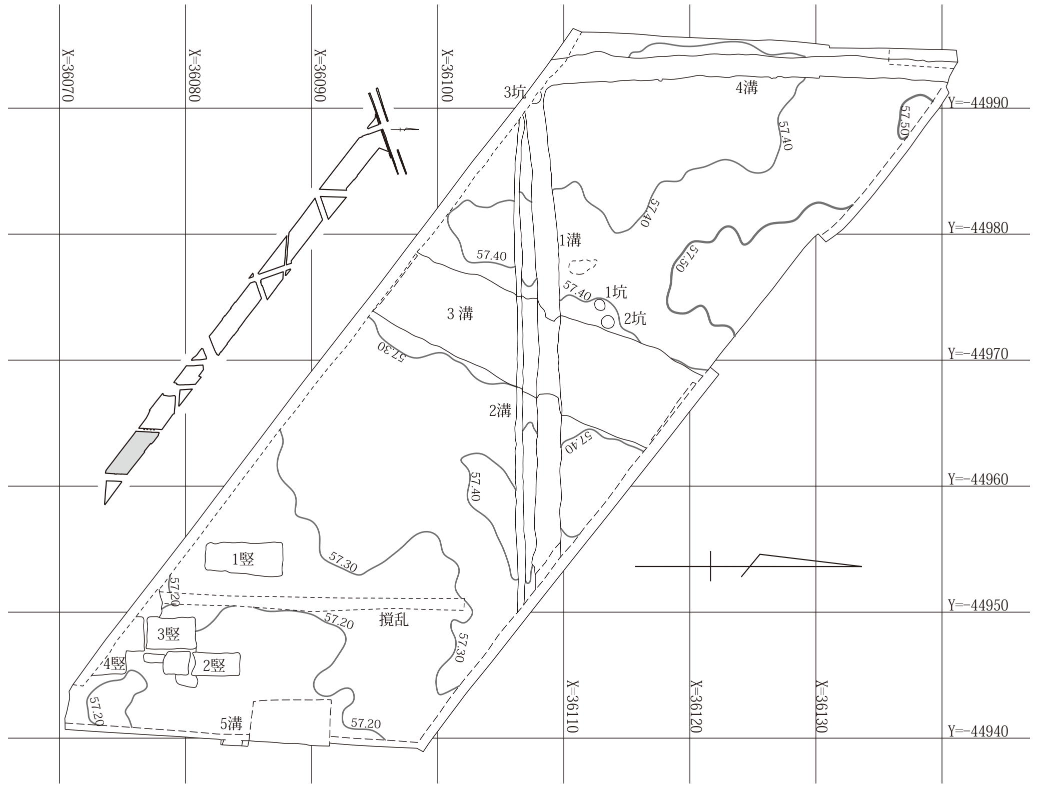
２区は表土から遺構確認面まで約50㎝であり、表土の下は圃場整備後の水田耕土となっている。１区と同様に調査区域に周知の遺跡である東山道駅路(牛堀・矢ノ原ルート)が想定されていたため慎重に発掘調査を実施した。重機による表土掘削により水田耕作土下にAs-B混土層が認められず、遺構確認を行ったが検出されないことから、さらに重機で掘り下げて遺構確認を行った。２区から検出された遺構は、竪穴状遺構４基、土坑２基、溝５条である。２区は撹乱及び現代の暗渠が広範囲に認められた。縄文時代の遺物が出土したが、遺構の構築時期と異なると判断し遺構外出土遺物として扱った。

１　古代から近世の遺構と遺物

古代から近世に帰属する遺構及び遺物が検出された。遺構は中世から近世の竪穴状遺構・土坑、古代及び中近世の溝である。

(１)竪穴状遺構

２区から検出された竪穴状遺構は４基であり、調査区南部に集中している。埋没は人為的な埋没土であり、形状及び主軸方位が類似している。遺物出土はあったが、炉や竈などの内部施設や柱穴などが検出されないため竪穴状遺構とした。



第154図　上根遺跡　２区全体図

0　1：600　20m

１号竪穴状遺構（第155図　PL.23）

Ｘ＝081 ～ 087、Ｙ＝－951 ～ 954に位置する。平面は長方形で南側は段差を設けた浅い方形の掘り込みが認められる。規模は長軸6.16m、短軸2.70m、深さ20 ～ 37㎝、長軸の方位は南北で、東西に触れはない。重複する遺構はなく、黄褐色土大塊及び黒褐色土の混土による人為的埋没である。内部施設は検出されていない。遺物は、埋没土中から板状の石製品（第155図１竪‑１）が出土した。非掲載遺物であるが、土師器大破片55ｇ、近世の灰釉陶器や焙烙が出土した。時期は、出土遺物及び埋没土の状況から中世以降と考えられる。

２号竪穴状遺構（第155図　PL.23）

Ｘ＝076 ～ 084、Ｙ＝－944 ～ 946に位置する。平面は長方形で、西側及び南側に土坑状の掘り込みが認められるが、一連の竪穴状遺構とした。規模は長軸7.64m、短軸2.84m、深さ２～ 65㎝、長軸の方位は南北で、東西への振れはみられない。３号竪穴状遺構に切られており、灰色土塊及び黄褐色土塊を多量に含む黒褐色土による人為的埋没である。内部施設は、２号竪穴状遺構と同様に検出されていない。非掲載遺物であるが、埋没土中から土師器大破片40ｇが出土したが、混入と判断した。埋没土は３号竪穴状遺構と類似し、時期は中近世以降と考えられる。

３号竪穴状遺構（第155図　PL.23）

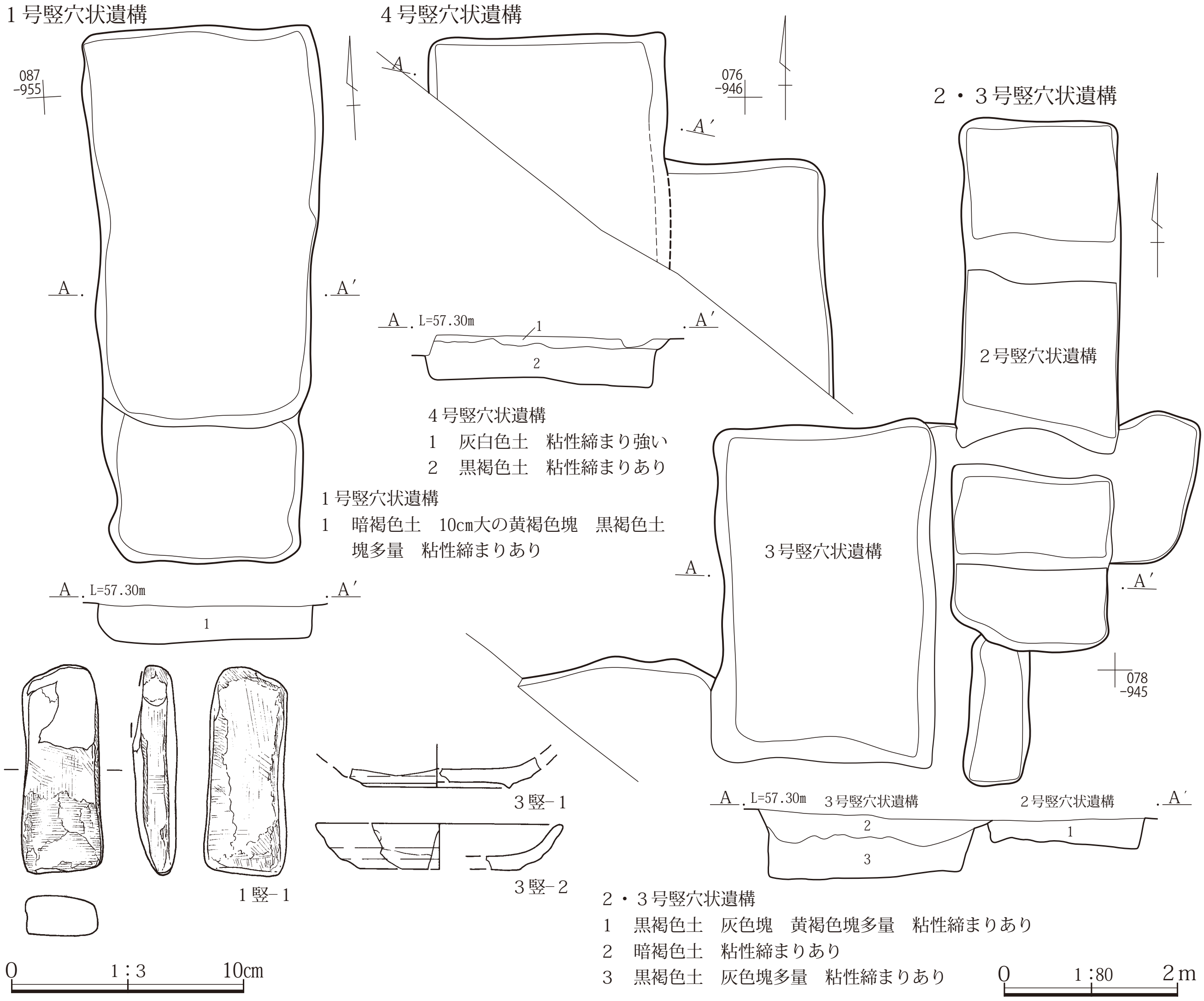
Ｘ＝076 ～ 080、Ｙ＝－947 ～ 951に位置する。平面は長方形で、規模は長軸3.80m、短軸2.42m、深さ50 ～ 75㎝である。南西側に長さ25㎝、深さ15㎝の掘り込みが認められるため一連の竪穴状遺構とした。長軸の方向は、南北で東西方向への振れはない。２号竪穴状遺構と重複しており、３号竪穴状遺構が新しい。灰色土塊を多量に含む黒褐色土及び暗褐色土による人為的埋没と考えらえる。内部施設は、１・２号竪穴状遺構と同様に検出されていない。遺物は、埋没土中から17世紀代の皿（第155図３竪‑１）、陶器皿（第155図３竪‑２）が出土した他、非掲載遺物であるが土師器大破片60ｇ、板碑片、近世の中国陶器、焙烙、皿が出土している。時期は、出土遺物から時期は17世紀以降と考えられる。

４号竪穴状遺構（第155図　PL.23）

Ｘ＝072 ～ 076、Ｙ＝－945 ～ 949に位置する。大半が調査区外となるため深さが11 ～ 55mであること以外に規模及び形状は不明であり、重複する遺構はない。灰白色土及び黒褐色土による人為的埋没と考えられ、他の竪穴状遺構と同様に内部施設は検出されていない。非掲載遺物であるが、埋没土中から土師器大破片85ｇ、土師器小破片25ｇが出土しているが、混入と判断した。時期は、３号竪穴状遺構埋没土と類似しており、中世以降の可能性が高い。

（２）土坑・ピット

２区から検出された土坑は２基である。時期は中近世で



第155図　２区１～４号竪穴状遺構と１・３号竪穴状遺構の出土遺物

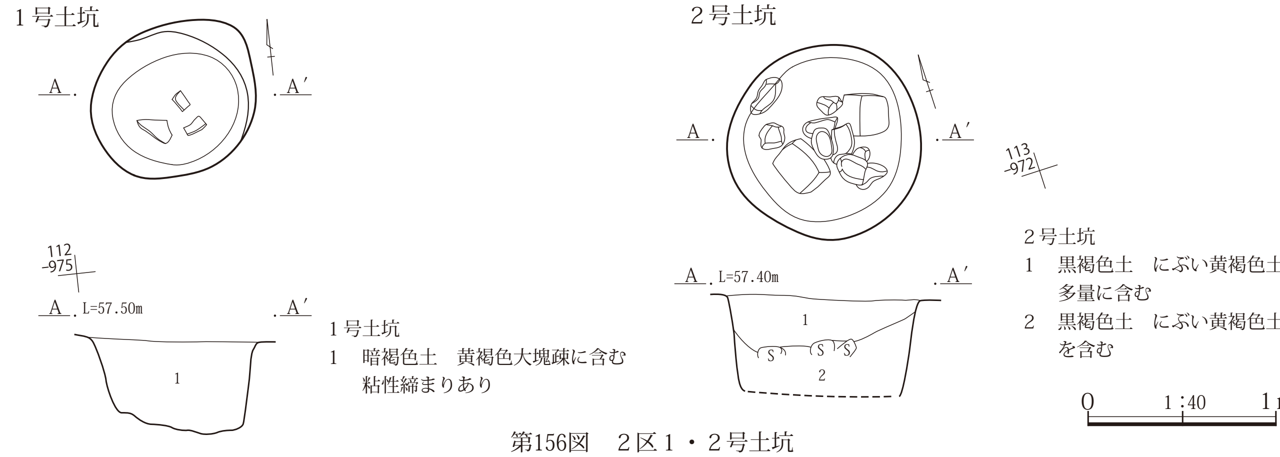
あり、１・２号土坑は調査区中央部に隣接して検出された。

１号土坑（第156・157図　PL.23・37）

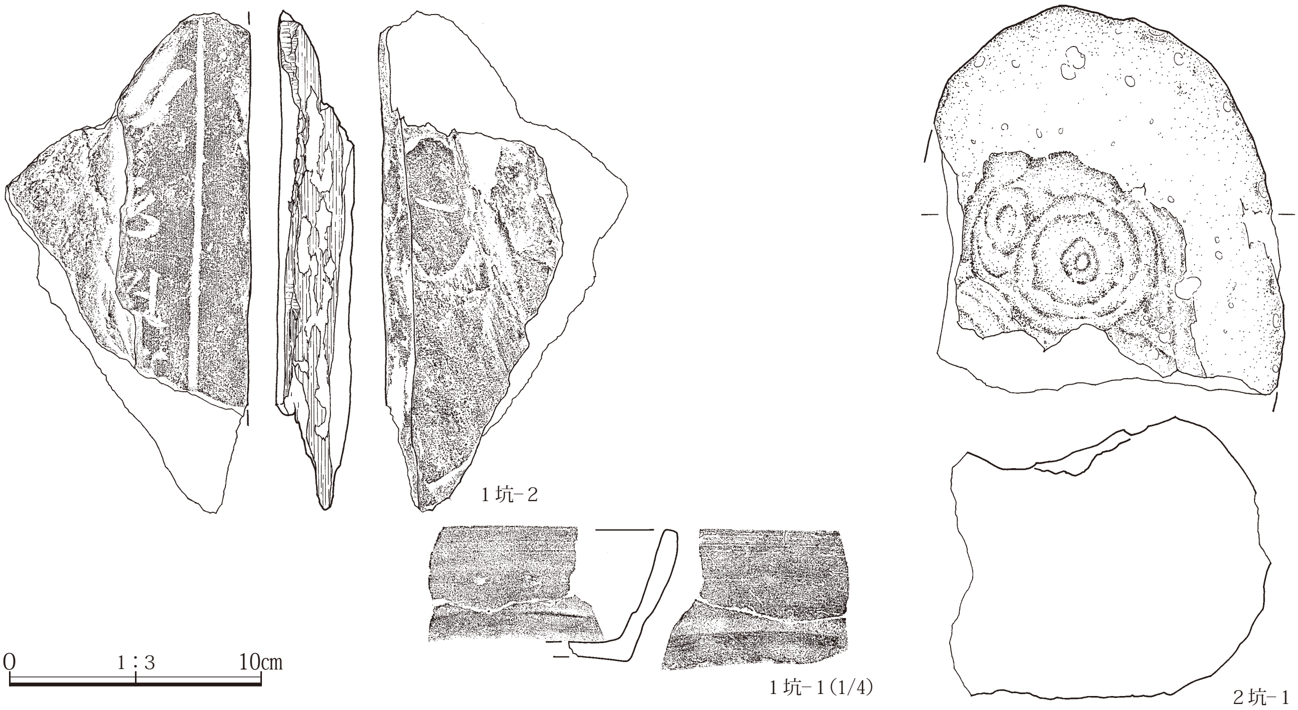
底面は、ほぼ平坦であり壁は垂直に立ち上がる。黄褐色土塊を多量に含む暗褐色土による人為的埋没である。埋没土中から16～17世紀代の焙烙（第157図１坑‐１）と、板碑（第157図１坑‐２）が出土した。時期は、出土遺物から16～17世紀代以降と考えられる。

２号土坑（第156・157図　PL.23・37）

底面は、平坦であり壁は垂直に立ち上がる。にぶい黄褐色土塊を多量に含む黒褐色土による人為的埋没である。遺物は、五輪塔や石製品（第157図２坑‐１）が出土した。時期は、出土遺物から中世以降と考えられる。



第156図　２区１・２号土坑



第157図　２区１・２号土坑の出土遺物

（３）溝

２区から検出された溝は、５条であり出土遺物や遺構検出状況及び埋没土の観察などから３号溝は古代、それ以外は中世以降と考えられる。１・４号溝は調査区西側で直角に交わり同時期の溝と考えられ、５号溝は調査区東側壁面から検出された東西に走行する溝である。

１号溝（第158・159図　PL.23・37）

X＝107 ～ 109、Y＝－953 ～ 993に位置する。３号溝と重複しており、１号溝が新しい。４号溝と重複はないが、位置関係から同時期と考えられる。西から東に走行し、底面の標高は西端57.16m、東端56.32m、比高84㎝であり、勾配は2.07％である。調査区境界の西端から方向を北に変え４号溝と合流している。４号溝は北側に従い標高が高くなることから区画溝の可能性がある。検出した規模は、長さ40.50m以上、上面幅1.44 ～ 2.02m、深さ13 ～ 63㎝である。埋没は、黒褐色土塊、白色軽石及び黄褐色粒を含む暗褐色土による自然埋没と考えられる。溝底部から16 ～ 17世紀代の焙烙(第158図１溝-１～３)が出土し、埋没土中からは中世の片口鉢(第158図１溝-４～６)、皿(第158図１溝-７～９)が出土した。石製品では五輪塔(第158図１溝-11・12、第159図１溝-10・13)、碑と思われる石製品(第159図１溝-14)などが出土した。非掲載遺物ではあるが土師器大破片70ｇ、須恵器大破片360ｇ、中世の鉢、皿などが出土した。時期は、出土遺物や埋没土から16 ～ 17世紀代以降と考えられる。

２号溝（第158・159図　PL.23・38）

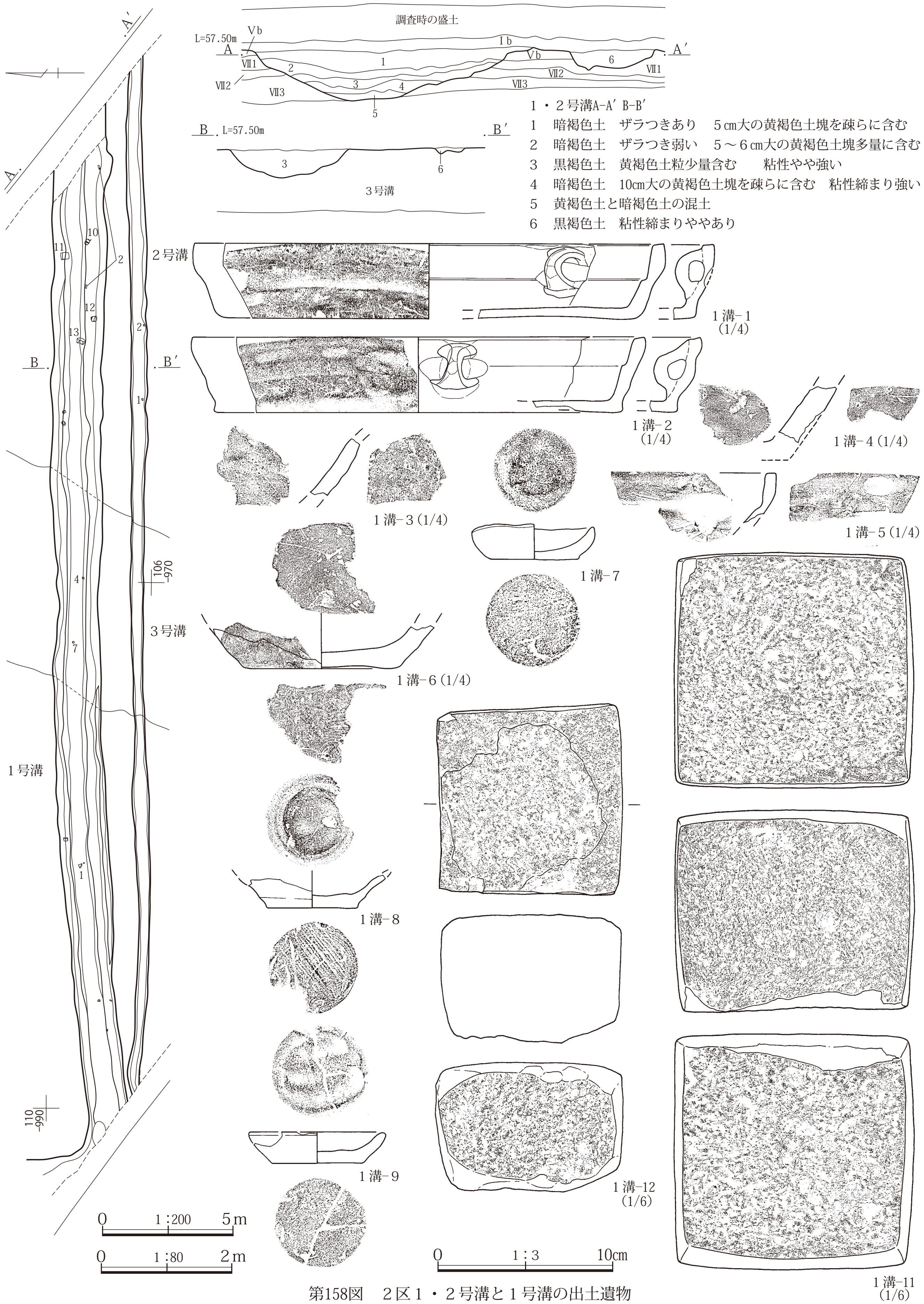
X＝106、Y＝－950 ～ 989に位置する。３号溝と重複しており、３号溝を切っている。東から西に走行し、底面の標高は東端57.30m、西端57.18m、比高12㎝であり、底面の傾斜はほとんど認められないで。検出した規模は、長さ39.50m、上面幅32 ～ 68㎝、深さ18 ～ 20㎝である。黄褐色土粒・塊を含む暗褐色土及び黒褐色土の自然埋没と考えられ、下層にも水流の痕跡は認められない。埋没土中から18世紀代の碗(第159図２溝- １・２)と銭貨(第159図２溝- ３)が出土しており、時期は出土遺物から18世紀代以降と考えられる。

３号溝（第160図　PL.23)

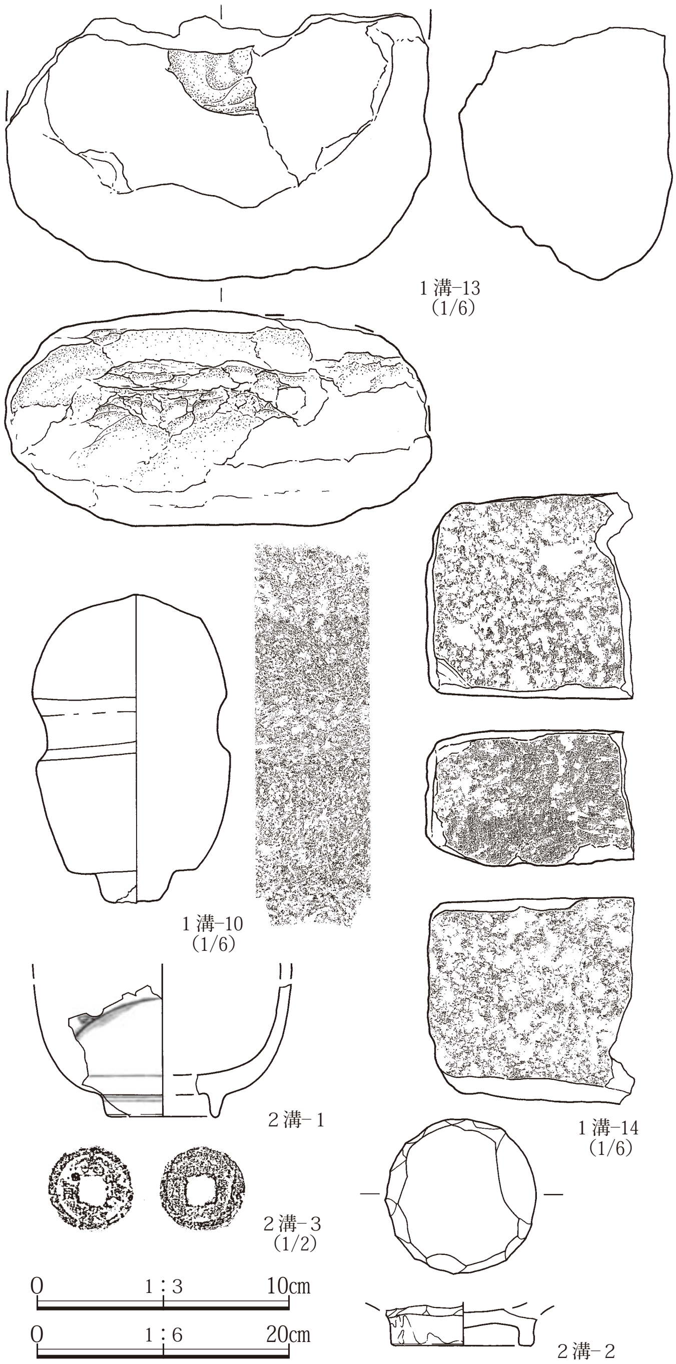
X＝094 ～ 120、Y＝－973 ～ 968に位置する。１・２号溝と重複しており、３号溝が古い。北東から南西に走行し、底面の標高は北東端56.36m、南西端56.31m、比高５㎝であり、底面の傾斜はほとんど認められない。検出した規模は、長さ24.30m、上面幅5.94 ～ 7.74m、深さ0.99 ～ 2.00mである。埋没土は、底部付近に洪水起源と考えられる黒色土が堆積していた他、中層にHr-FAを含む暗灰褐色土が縞状に堆積しており、自然埋没と考えられる。埋没土中からは、土師器高杯(第160図１)が出土した他、非掲載遺物であるが土師器大破片40ｇが出土した。３号溝として扱ったが、埋没土の状況から古代に埋没した自然流路を検出した可能性が高い。

４号溝（第161図　PL.23・38）

X＝110 ～ 140、Y＝－990 ～ 992に位置する。４号溝と１号溝では埋没土に違いは認められず、同時期の一連



第158図　２区１・２号溝と１号溝の出土遺物

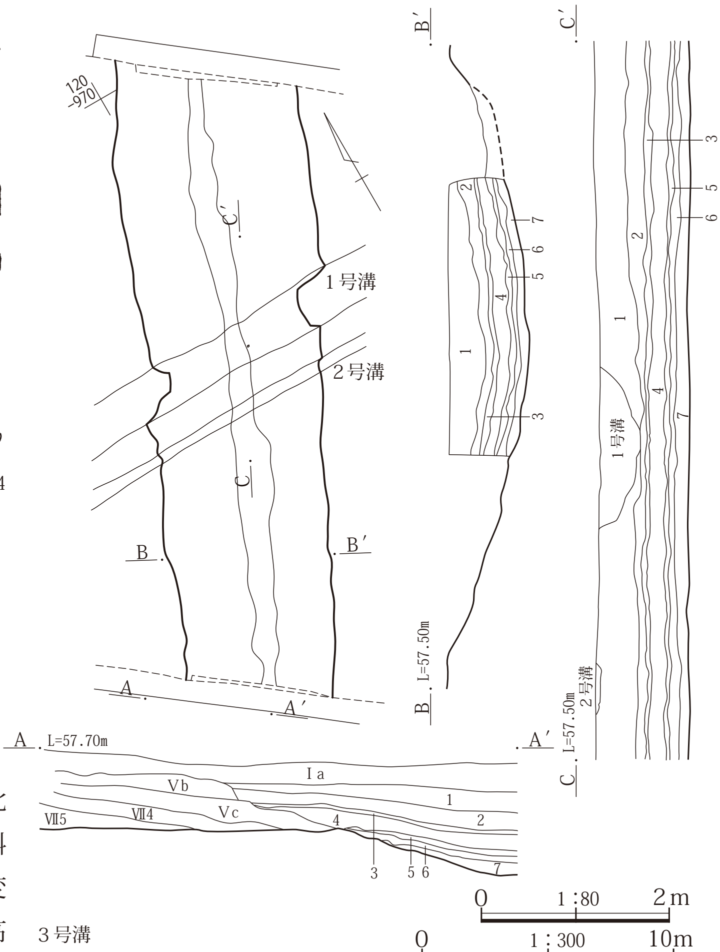


第159図　２区１・２号溝の出土遺物

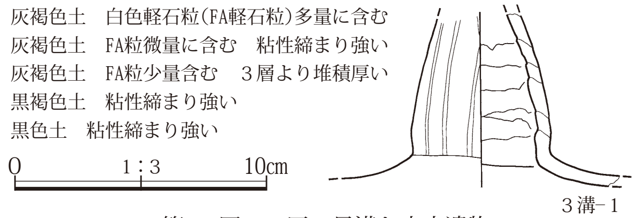
の溝と考えられる。北から南に走行し、底面の標高は北端57.19m、南端56.99m、比高20cmであり、底面の傾斜はごく弱い。１号溝が調査区境界の西端で北に向きを変え４号溝と合流している。４号溝は北側に従い標高が高くなっており、水流の痕跡も認められないことから区画溝と考えられる。検出した規模は、長さ32.54m、上面幅1.50～2.42m、深さ23～47cmである。埋没は、黒褐色土塊、白色軽石、黄褐色粒を含む暗褐色土による自然埋没と考えられる。遺物は埋没中から中世の鉢、擂鉢、内耳鍋、甕(第161図１～４)、中世から近世の板碑片、砥石、石鉢、宝塔(第161図５～８)が出土した。非掲載遺物であるが土師器大破片85ｇ、須恵器大破片25ｇが出土しているが、周辺からの流れ込みと考えられる。他に中世から近世と考えられる土器が出土している。時期は、出土遺物及び埋没土から1号溝と同時期の16～17世紀以降と考えられる。

５号溝(第162図　PL.23)

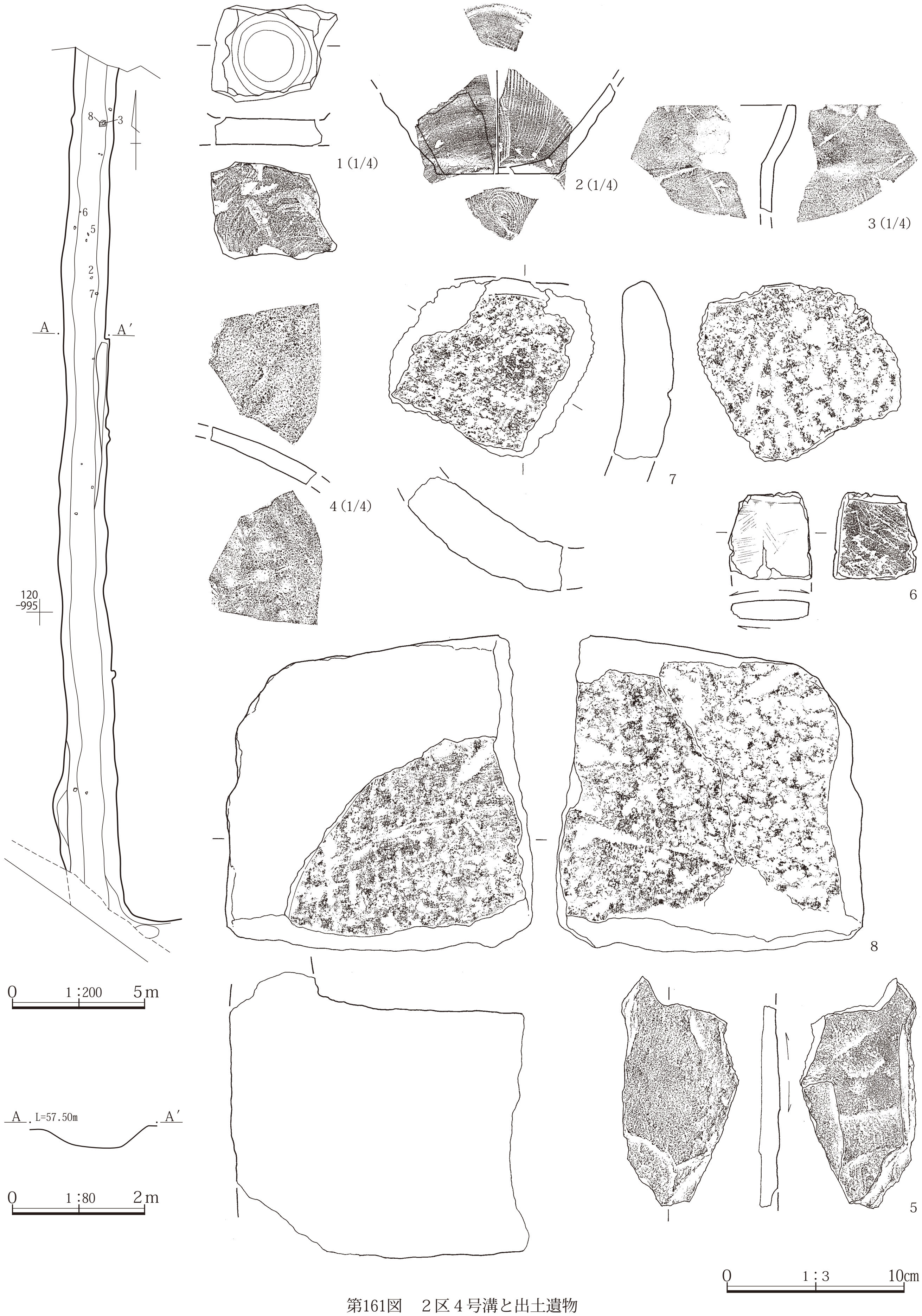
Ｘ＝082～084、Ｙ＝－939～に位置する。東から西に走行し、底面の標高は東端57.17m、西端57.12m、比高は５cmであり、際立った底面の傾斜は認められない。検出された規模は、長さ0.54m、上面幅1.56m、深さ19cmであり、上根遺跡1区にまでは延長されていない。As-Bを含む暗灰褐色土による自然埋没と考えられ、下層にも水流の痕跡はない。出土遺物はないが、埋没土の状況から、時期は中世以降(As-B降下以降)と考えられる。



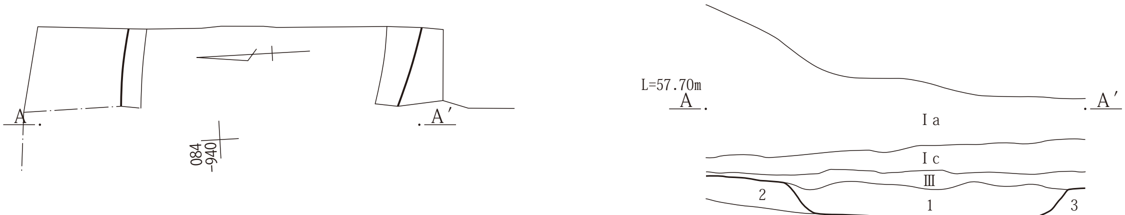
３号溝
1　黒褐色土　粘性締まり強い
2　暗褐色土　褐色小粒疎に含む　粘性締まり強い
3　灰褐色土　白色軽石粒(FA軽石粒)多量に含む
4　灰褐色土　FA粒微量に含む　粘性締まり強い
5　灰褐色土　FA粒少量含む　３層より堆積厚い
6　黒褐色土　粘性締まり強い
7　黒色土　粘性締まり強い



第160図　２区３号溝と出土遺物



第161図　２区４号溝と出土遺物



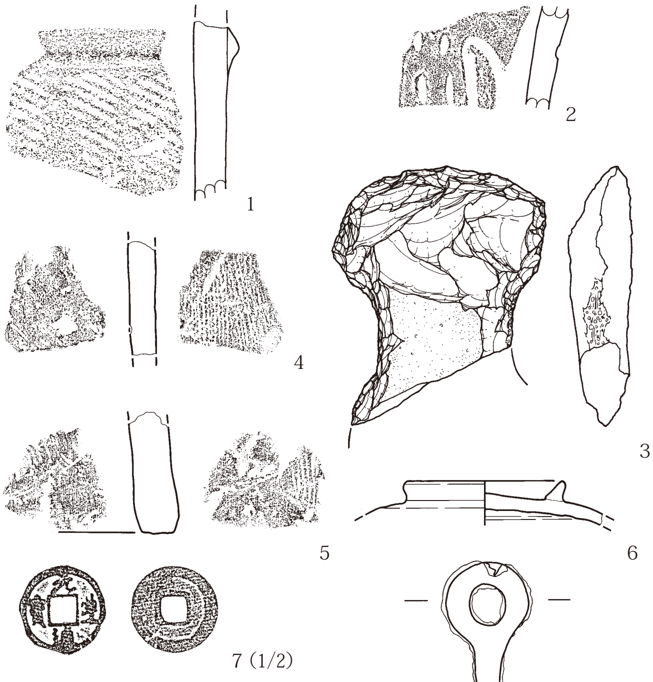
５号溝
1　灰褐色土　As-Bの混入あり　色味やや暗く全体的にザラつきあり　粘性あり締まりややあり
2　暗褐色土　粘性あり　締まり強い　色調やや暗い
3　暗灰色土　粘性強く締まりあり　水分を多量に含む　暗褐色土塊を含む

0　1：40　1ｍ

第162図　２区５号溝

２　遺構外の遺物(第163図　PL.38)

２区では遺構に伴う遺物のほかに遺構外の遺物が出土している。縄文時代の遺物では、加曽利Ｅ４式、称名寺式(第163図１・２)など中期から後期の土器片が出土している。非掲載遺物では、称名寺式１点、後期後葉３点の他、１号溝の埋没土中から打製石斧(第163図３)が出土した。剥片の総重量は、黒色頁石44.0ｇ、ホルンフェルス23.0ｇである。古墳時代から奈良・平安時代の遺物は、埴輪破片と須恵器坏蓋(第163図４～６)であり、非掲載遺物の総重量は土師器大破片430ｇ、須恵器大破片130ｇである。中世から近世の遺物では、銭貨(第163図７)、釣手金具(第163図８)の他、中世の中国陶器、国産陶器、近世の国産磁器、国産施釉陶器、近現代陶磁器などが出土している。



第163図　２区遺構外の出土遺物

第４節　３区の調査成果

３区の調査区北西部はローム漸移層(基本土層第Ⅵ面)を遺構確認面とし、調査区南東部から南側の１・２区にかけて谷地形となるため表土下の黒褐色土(基本土層第Ⅱb層)を遺構確認面とした。３区から検出された遺構は、古墳時代の竪穴住居、奈良・平安時代から近世の土坑、ピット、井戸、溝の他、中世から近世の掘立柱建物・橋である。調査区中央部から出土した縄文時代の土器と石器のうち、遺構の構築時期と明らかに異なる場合は混入と判断し遺構外出土遺物として扱った。

１　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は土坑だけであるが、３区では遺構を伴わないものの早期から後期までの遺物が出土している。

(1)土坑

３区から検出された土坑は２基であり、調査区北側で隣接して検出されている。時期は縄文時代後期である。

６号土坑(第165図　PL.23・38)

埋没は、堆積状況から自然埋没と考えられる。埋没土中から称名寺式深鉢の胴部片(第165図６坑- １)が出土している。時期は、出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

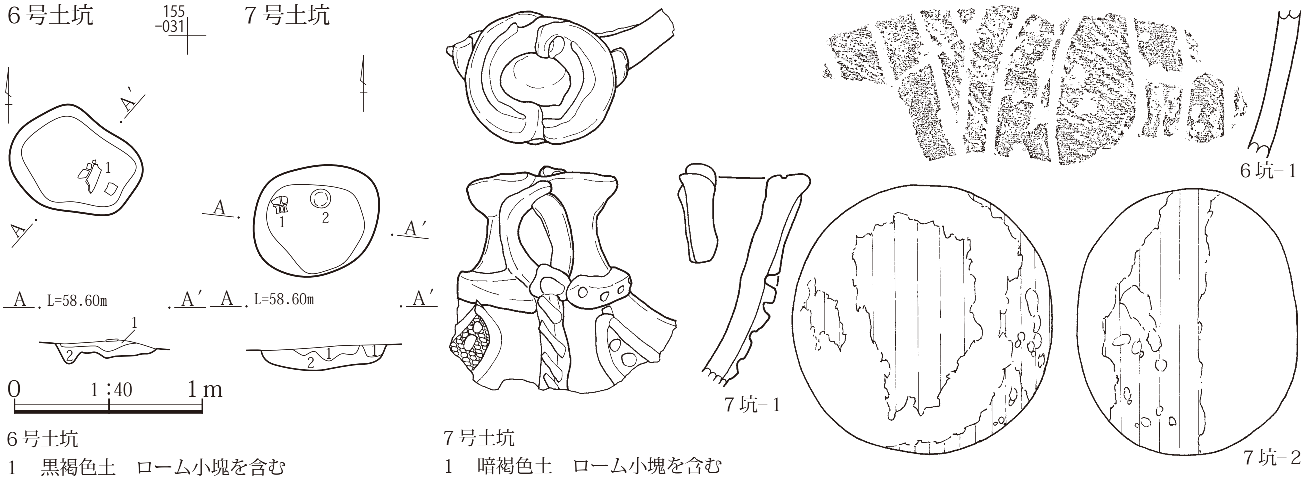
７号土坑(第165図　PL.23・38)

埋没は、ローム塊を含む褐色土及び暗褐色土による自然埋没と考えられる。埋没土中から称名寺式深鉢の口縁突起(第165図７坑- １)の他、磨石(第165図７坑- ２)が出土している。非掲載遺物であるが土師器大破片10ｇが出土しているが、混入と考えられる。時期は、出土遺物と埋没土から縄文時代後期初頭と考えられる。

２　古墳時代以降の遺構と遺物

古墳時代から近世に帰属する竪穴状遺構、土坑、溝が検出されている。

第164図　上根遺跡　３区全体図



６号土坑
１　黒褐色土　ローム小塊を含む
２　黄褐色土　ローム塊主体　黒褐色土を含む

７号土坑
１　暗褐色土　ローム小塊を含む
２　褐色土　ローム粒・塊を含む

0　1：3　10cm

第165図　３区６・７号土坑と出土遺物

（１）　**竪穴住居**

３区において検出された竪穴住居は３軒である。竪穴住居は、調査区際で検出されたために全体が明らかにできなかったものや、重複のため失われた部分があり、部分的な調査である。時期は、３軒ともに古墳時代である。

１号竪穴住居(第166・167図　PL.24・38)

位置　X＝141 ～ 143、Y＝－036 ～ 043

形状・規模　調査区外にかかり、一部は重複で失われているため判然としないが、方形となる可能性が高い。検出された北壁の長さ5.50m、壁高４～ 15㎝である。

主軸方向　N－60°－E

重複　4・6号溝に切られており、１号竪穴住居が古い。

埋没土　後世の削平により残存状態は不良で、埋没経過は判断できなかった。

床面　使用による硬化面は不明瞭である。掘り方はローム塊を多量に含む黒褐色土で床面を構築している。

炉　中央部よりやや北側から検出された。残存状態は不良であり、焼土粒を含む不定形の範囲を炉と判断した。規模は、長径34㎝、短径29㎝である。

貯蔵穴　床面精査では不明瞭であったが、掘り方調査において南東隅から検出した。６号溝との重複で南半部を削平されていた。平面は不定形で、規模は東西45㎝、南北残存長37㎝、深さは32㎝である。

周溝　掘り方調査においても検出できなかった。

柱穴　掘り方調査でピットが３基検出された。対角線上に位置していることから主柱穴と考えられる。規模は、Ｐ１(径25㎝、深さ45㎝、円形)、Ｐ２(径33㎝、深さ54㎝、円形)、Ｐ３(径25㎝、深さ60㎝、円形)である。柱穴の間隔は、Ｐ１・Ｐ２間は2.95m、Ｐ２・Ｐ３間は3.12mで、南北間がやや長い。

掘り方　中央部を方形に残し、壁面から1.10 ～ 1.40mの幅で周回するように約10㎝掘り込まれている。

遺物出土状態　床面直上から土師器高杯(第167図３・４)、坩(第167図５)、甕(第167図７・９)が、埋没土中からは高杯、甕が出土した他、非掲載遺物は土師器大破片2,360ｇが出土した。

所見　時期は、出土遺物から古墳時代の５世紀前半～中葉と考えられる。

２号竪穴住居(第168図　PL.24)

位置　X＝140 ～ 142、Y＝－022 ～ 026

形状・規模　攪乱及び重複のため判然としないが、方形になる可能性が高い。検出した北西壁長は4.33m、壁高２～ 17㎝である。

主軸方向　N－35°－E

重複　５・7・９号溝と重複し、７号溝より新しく、５・９号溝より古い。

埋没土　ローム塊を含む暗褐色土による自然埋没と考えられる。

床面　北壁際より南壁際が４～８㎝低く、ローム塊と黒褐色土で床面を構築している。

炉　平面は楕円形で、規模は長径85㎝、短径40㎝、深さ９㎝であり、使用面に焼土塊が認められる。掘り方があり、ローム塊を多量に含む暗褐色土で埋没していた。

貯蔵穴　掘り方調査でも検出されなかった。

周溝　幅13 ～ 30㎝、深さ２～ 10㎝の周溝が構築されていた。

柱穴　床面精査では不明瞭であったが、掘り方調査で２基の主柱穴を検出した。規模は、Ｐ１(径33㎝、深さ33㎝、円形)、Ｐ２(径25㎝、深さ38㎝、円形)である。壁面からほぼ等距離に位置し、柱穴間は2.24mである。

掘り方　ローム面に約10㎝掘り込まれており、溝状の窪みが検出された。

遺物出土状態　床面の南西隅及び北側周溝から遺物が出土した。非掲載遺物は土師器大破片430ｇである。

所見　時期は、出土遺物から５世紀代と考えられる。

３号竪穴住居(第169図　PL.25・39)

位置　X＝159 ～ 161、Y＝－023 ～ 028

形状・規模　調査区外にかかるため全体形は不明であるが、方形である可能性が高い。検出した規模は、南壁長4.65m、壁高２～９㎝である。

主軸方向　N－67°－E

重複　３・８号溝と重複し、埋没土の確認状況から３号竪穴住居が古い。

埋没土　後世の削平により埋没土の状況は不明である。

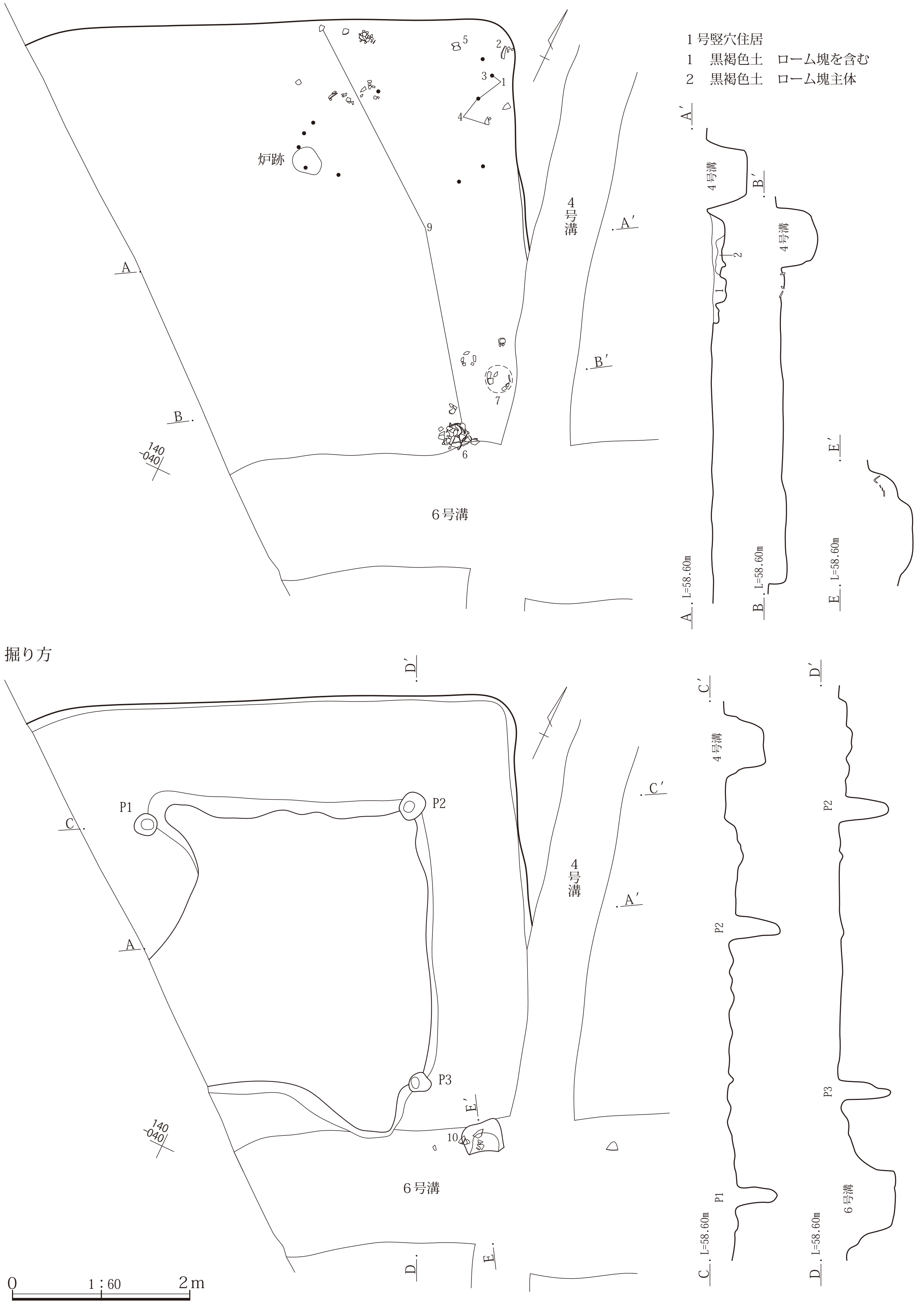
床面　削平により床面は判然としない。

炉・竈　検出されなかった。

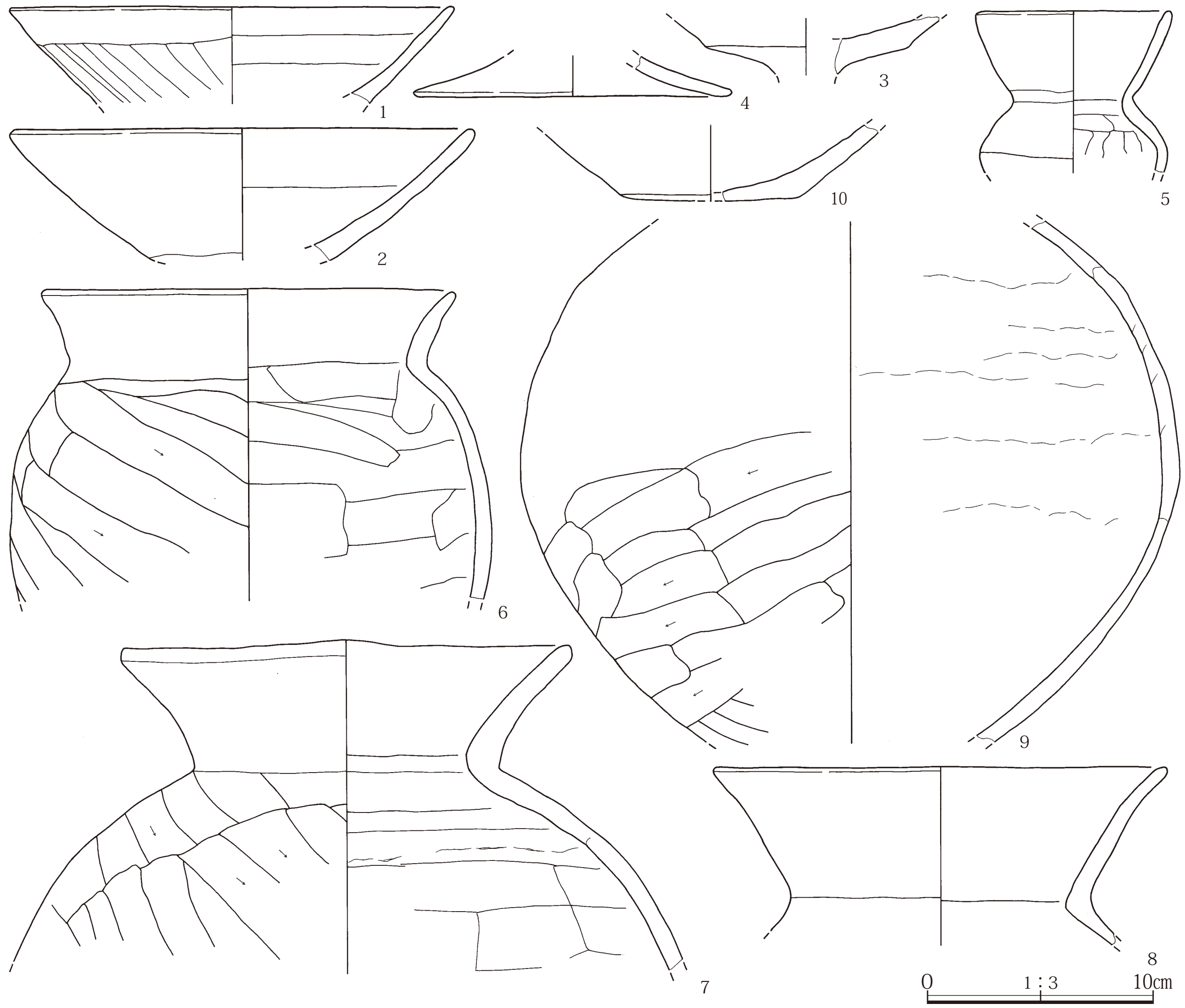
貯蔵穴　南西隅から検出された。平面は長方形で、規模は長径70㎝、短径44㎝、深さ26㎝である。ローム小塊を含む黒褐色土による自然埋没と考えられる。

周溝　掘り方調査で西壁、南壁及び東壁の一部に幅９～ 29㎝、深さ１～５㎝の周溝が検出された。

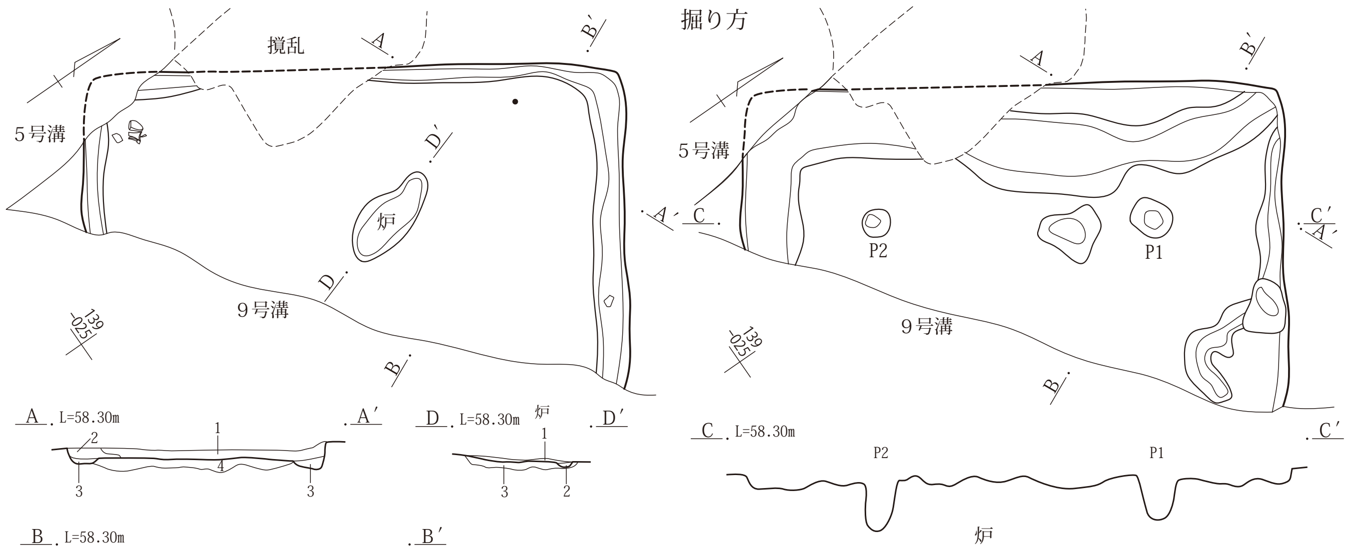
柱穴　４基のピットを対角線上に検出し、柱穴と判断した。規模は、Ｐ１(径30㎝、深さ23㎝、円形)、Ｐ２(長径52㎝、短径38㎝、深さ30㎝、楕円形)、Ｐ３(径25㎝、

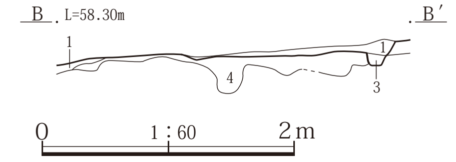


第166図　３区１号竪穴住居



第167図　３区１号竪穴住居の出土遺物

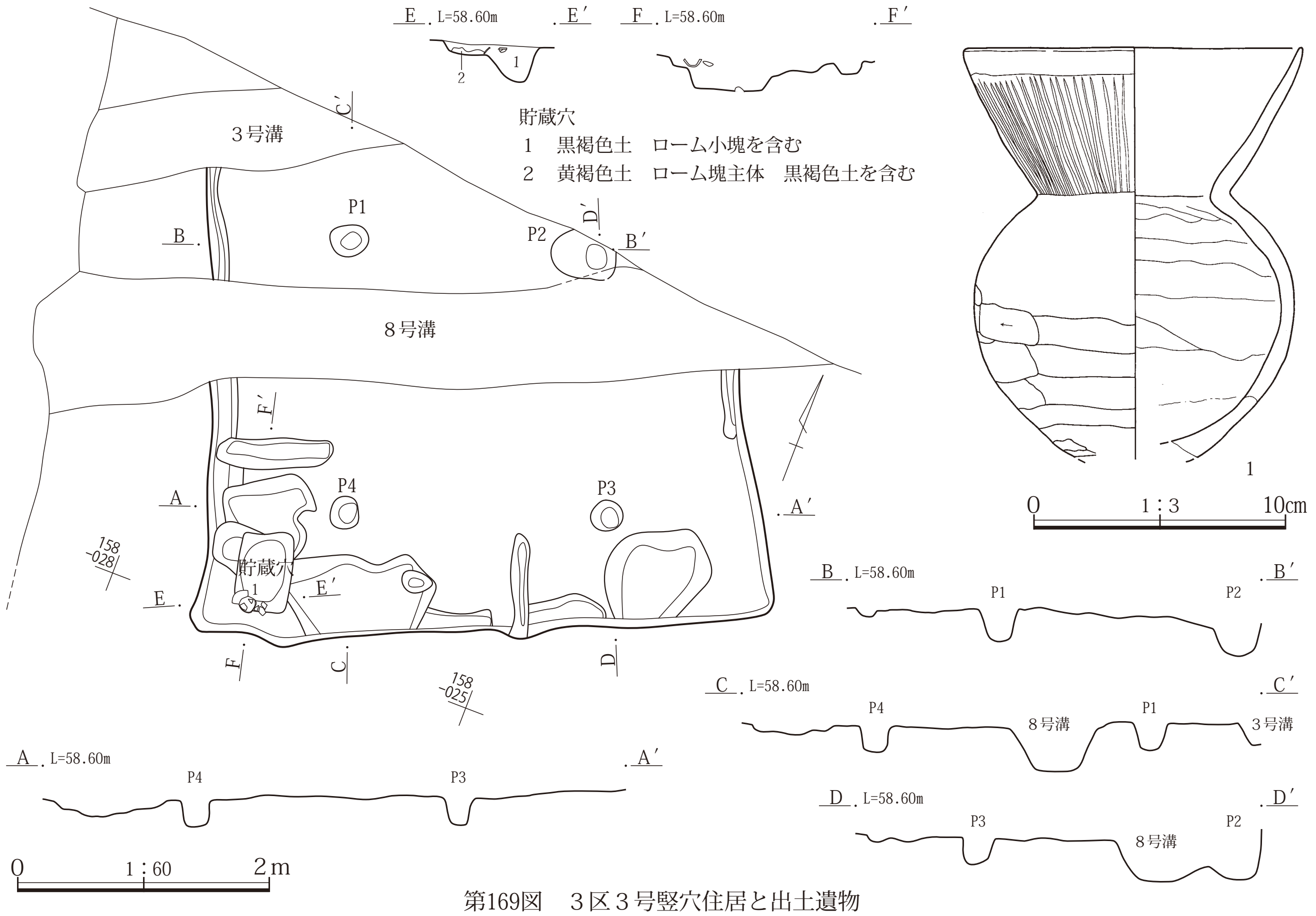




1　暗褐色土　ローム小塊を含む
2　暗褐色土　ローム塊多量に含む
3　暗褐色土　ローム塊多量　焼土粒少量含む　周溝
4　黒褐色土　ローム塊多量に含む

炉
1　暗褐色土　焼土粒　炭化物を含む
　ローム塊少量含む
2　焼土　暗褐色土を含む
3　暗褐色土　ローム塊多量に含む

第168図　３区２号竪穴住居



第169図　３区３号竪穴住居と出土遺物

深さ19㎝、円形)、Ｐ４(径25㎝、深さ22㎝、円形)である。柱間は、Ｐ１・Ｐ２間は1.95m、Ｐ２・Ｐ３間は2.05m、Ｐ３・Ｐ４間は2.10m、Ｐ１・Ｐ４間は2.20であり、南北間がやや長い。

掘り方　南西コーナー部を仕切るように、南北85㎝、幅11～15㎝、深さ７～９㎝の間仕切り状の溝が検出された。

遺物出土状態　貯蔵穴から坩(第169図１)が出土した。

所見　時期は、出土遺物から古墳時代５世紀前半と考えられる。

(２)掘立柱建物・橋

３区から検出された掘立柱建物は１棟である。他に３・８号溝内に直行して並ぶピット列が検出され、検出位置から溝に架けられた橋の橋脚と判断した。検出されたピットのうち掘立柱建物及び橋の柱穴はピット番号を変更した。(第１表参照)

１号掘立柱建物(第170図)

位置　X＝151～154、Y＝－031～034

重複　なし。

主軸方向　N－77°－W

規模・形態　桁行２間、梁行１間の、東西棟となる側柱建物である。桁行3.60m、梁行2.10mである。柱間の寸法は第31表のとおりであるが、柱穴の規模は22～44㎝の円形及び楕円形である。柱間は桁行６尺、梁行７尺である。

出土遺物　なし。

所見　時期は、掘立建物の規模や形状から、中世以降と考えられる。

１号橋(第171図)

位置　X＝154～157、Y＝－036～038

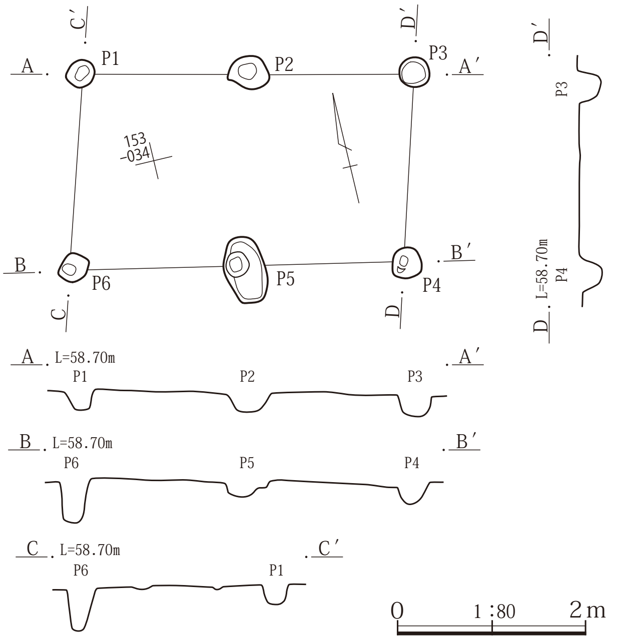
重複　３、８号溝内で検出されており、重複ではなく同時期と判断した。

主軸方向　N－14°－W

規模・形態　橋脚間の寸法は、第32表のとおりであるが、柱穴掘り方は26.0～40.4㎝の円形及び不定形である。長さは、北側1.30m、南側1.00m、東側2.30m、西側2.50mと一定しない。

出土遺物　なし。

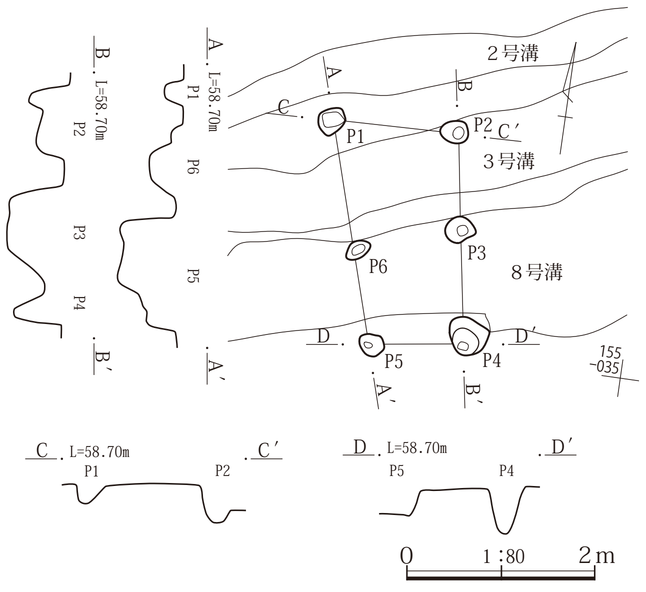
所見　３・８号溝内に直交してピットが並んで検出されたことから、溝に架けられた橋の橋脚と判断した。時期は、３・８号溝に想定した中世以降と考えられる。



第170図　３区１号掘立柱建物

第31表　上根遺跡３区１号掘立柱建物計測表

柱穴NO.	規　模(cm)			形状	面積7.15㎡
	長径	短径	深さ		柱間の寸法(m)
P 1	30	28	20	円形	P1-P2 1.75
P 2	44	35	22	楕円形	P2-P3 1.78
P 3	32	32	23	円形	P3-P4 1.98
P 4	32	32	22	円形	P4-P5 1.80
P 5	26	26	14	円形	P5-P6 1.76
P 6	30	28	46	円形	P6-P1 2.08



第171図　３区１号橋

第32表　上根遺跡３区１号橋計測表

柱穴NO.	規　模(cm)			形状	
	長径	短径	深さ		柱間の寸法(m)
P 1	30	24	26	円形	P1-P2 1.34
P 2	30	24	40	円形	P2-P3 1.04
P 3	32	26	58	円形	P3-P4 1.20
P 4	40	31	52	楕円形	P4-P5 1.02
P 5	26	23	30	円形	P5-P6 1.00
P 6	28	18	50	楕円形	P6-P7 1.40

(３)土坑・ピット

３区から検出された土坑は、５基、ピットは36基である。遺構に伴う遺物が少なく、詳細な時期判定をすることができないため、埋没土の状況をもとにして時期を判断した。以下は遺物が伴うもの、形状や埋没土に一定の特徴が認められるものについて取り上げる。埋没状況について、人為的と判断したものについては記述した。各遺構の形状や計測値については、第34表を参照されたい。

１号土坑(第172図　PL25)

６号溝と重複しており、１号土坑が新しい。底面は、平坦であり壁は斜めに立ち上がる。出土遺物はなく時期を確定することはできなかった。

２号土坑(第172図)

３号土坑・６号溝と重複し、２号土坑が新しい。埋没土は、ローム塊を多量に含み、堆積状況から人為的埋没と考えられる。出土遺物はなく時期を確定することはできなかった。

３号土坑(第172図)

２号土坑・６号溝と重複し、２号土坑よりも古く、６号溝よりは新しい。埋没土は、多量のローム塊を含むもので、人為的埋没と考えられる。出土遺物はなく時期を確定することはできなかった。

４号土坑(第172図)

６号溝と重複し、遺構の確認状況から４号土坑が古い。埋没は、堆積状況から人為的埋没と考えられる。時期は、６号溝との重複関係から時期は古代の可能性がある。

５号土坑(第172図)

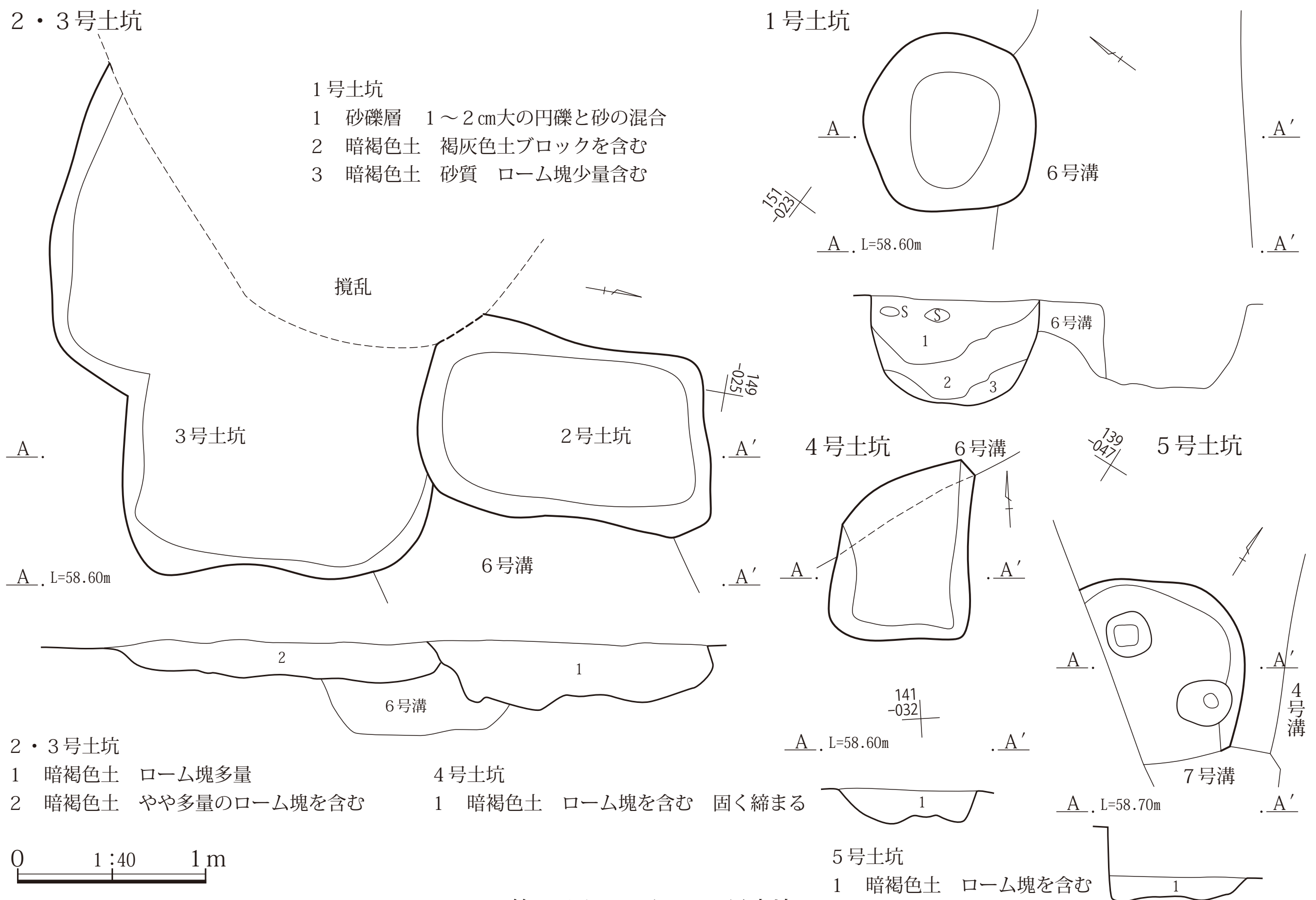
７号溝と重複し、埋没土の確認状況から５号土坑が古い。埋没は、人為的埋没土と考えられ、時期は７号溝との重複から古代以前の可能性がある。

(４)井戸

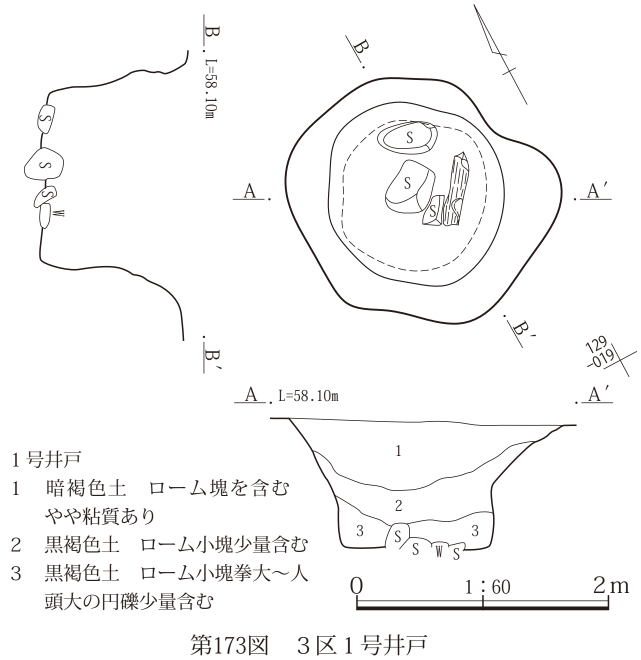
３区において検出された井戸は１基だけである。南部に位置し、周辺に溝以外の遺構の検出はない。

１号井戸(第173図　PL.25)

Ｘ＝129、Ｙ＝－018に位置する。平面は不整円形で、規模は長径2.13m、短径1.92m、深さは1.30mである。底面は平坦であり壁面は底部から約50㎝垂直に立ち上がった後、開口部にかけて斜めに立ち上がる。底部からは、多量の自然礫と木材が出土しているが、木材に加工痕は認められず、自然木と考えられる。ローム塊を含む暗褐色土と黒褐色土が互層になり堆積していることから、人為的埋没と考えられる。アグリ部は検出されてい



第172図　３区１～５号土坑



第173図　３区１号井戸

ないが、確認面から約1.00m下の層が湧水層と考えられる。出土遺物がなく明確な時期を確定することができなかった。

(５)溝

３区から検出された溝は、12条である。中央部から北側に分布しており、時期は古墳時代から近世までの幅がある。

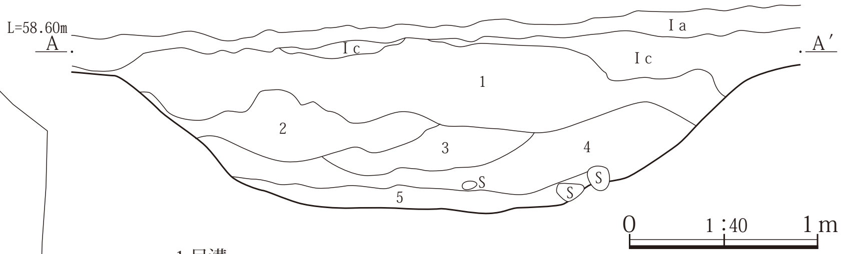
１号溝(第174図　PL.25)

Ｘ＝160～162、Ｙ＝－032～043に位置する。北東から南西に走行し、底面の標高は北東端57.92m、南西端57.69m、比高23㎝であり、底面の傾斜はほとんど認められない。検出された規模は、長さ11.70m、上面幅3.04～3.36m、深さ65～82㎝である。ローム塊及び礫を含む褐灰色砂質土によるレンズ状の堆積が認められることから、自然埋没と判断した。非掲載遺物は土師器大破片460ｇ、土師器小破片40g、須恵器小破片540ｇである。時期は、出土遺物から古代以前と考えられる。

２号溝(第175図　PL.25)

Ｘ＝155～161、Ｙ＝－030～142に位置する。２号溝が３号溝より新しく、５号溝より古い。北東から南西に走行し、底面の標高は北東端58.29m、南西端58.24m、比高５㎝と底面の傾斜はなく、水流の痕跡も認められないことから区画溝の可能性がある。検出した規模は、長さ13.76m、上面幅22～60㎝、深さ10～26㎝である。埋没は、自然か人為的埋没か判断できなかった。時期は、埋没土中から17世紀代の皿(第175図２溝１)が出土していることから、17世紀以降である。

第174図　３区１号溝



１号溝
1　暗褐色土　ローム小塊少量含む
2　暗褐色土　砂質　褐灰色土を含む
3　褐灰色土　砂質　ローム塊少量含む
4　褐灰色土　砂質　ローム小塊を微量に含む
5　褐灰色土　砂質　ローム小塊　拳大の円礫を含む

３号溝（第174図　PL.25）

Ｘ＝155～162、Ｙ＝－027～042に位置する。２・５・８号溝、１号橋、３号竪穴住居と重複しており、検出状況などから３号竪穴住居より新しく、２・５号溝より古く、８号溝、１号橋とは同時期と判断した。北東から南西に走行し、底面の標高は北東端58.23m、南西端58.12m、比高11㎝と、底面の傾斜はほとんど認められない。検出した規模は、長さ17.16m、上面幅0.42～0.82m、深さ４～41㎝である。土層の堆積状況から人為的埋没と考えられ、下層にも水流の痕跡は認められない。埋没土中から常滑の甕の破片（第175図３溝１～３）が出土した他、非掲載遺物であるが土師器大破片900ｇ、土師器小破片20ｇ須恵器大破片80ｇが出土した。時期は、出土遺物から中世以降と考えられる。

４号溝（第175図　PL.25）

Ｘ＝136～154、Ｙ＝－034～037に位置する。１号竪穴住居、６・７・８・11号溝、28・35号ピットと重複し、遺構検出状況から、１号竪穴住居・６・７号溝より新しく、８・11号溝、28・35号ピットより古いと考えられる。北西から南東に走行し、底面の標高は北西端58.02m、南東端57.96m、比高６㎝であり、底面の傾斜はほとんど認められない。検出した規模は、長さ18.50m、上面幅0.54～1.60m、深さ22～44㎝である。埋没は、土層堆積状況から自然埋没と判断され、下層にも水流の痕跡は認められない。非掲載遺物であるが土師器大破片350ｇ、須恵器大破片290ｇが出土しており、基本土層第Ⅴ層に類似する土で埋没していることから、古代以前に遡る遺構と考えられる。

５号溝（第176図　PL.25）

Ｘ＝128～162、Ｙ＝－025～031に位置する。２号竪穴住居、２・３・６～10号溝、22・23・24・25号ピットと重複し、遺構検出状況などから、２号竪穴住居、２・３・６～９号溝より新しく、10号溝、22・23・24・25号ピットより古いと考えられる。北から南に走行し、底面の標高は北端57.95m、南端57.30m、比高65㎝であり、わずかに底面の傾斜が認められる。検出した規模は、長さ34.00m、上面幅0.96～1.60m、深さ24～69㎝である。ローム塊、礫を含む暗褐色土のレンズ状堆積が観察できることから、自然埋没の可能性が高い。埋没土中から椀、甕（第176図５溝－１・２）が出土した他、非掲載遺物である土師器大破片190ｇが出土した。２号溝との重複から時期は17世紀以降と考えられる。

６号溝（第176図　PL.25・39）

Ｘ＝139～155、Ｙ＝－013～038に位置する。４・５号溝、１・２・３・４号土坑と重複し、検出状況などから１・２・３号土坑、４・５号溝よりは古く、４号土坑より新しい。北東から南西に走行し、底面の標高は北東端57.97m、南西端57.80m、比高17㎝で、底面の傾斜はほとんど認められない。検出された規模は、長さ30.00m、上面幅1.12～1.18m、深さ33～57㎝である。埋没

土下層は、暗褐色土や褐灰色砂質土でローム塊を含み、中層の暗褐色土中にはHr-FAが含まれ、土層の堆積状況から自然埋没と考えられる。遺物は埋没土から土師器高杯、須恵器杯、灰釉陶器の長頸壺、(第176図６溝- １～４)が出土した他、非掲載遺物ではあるが土師器大破片2,100ｇ、土師器小破片50ｇ、須恵器大破片95ｇ、須恵器小破片40ｇが出土した。時期は、出土遺物などから平安時代以降と考えられる。

７号溝(第176図　PL.25)

Ｘ＝137 ～ 152、Ｙ＝－012 ～ 035に位置する。２号竪穴住居、５号土坑、４号溝と重複しており、検出状況などから２号竪穴住居、４号溝よりも古く、５号土坑よりは新しいと考えられる。北東から南西に走行し、底面の標高は北東端58.22m、南西端58.10m、比高12㎝であり、底面の傾斜はほとんど認められない。検出した規模は、長さ26.28m、上面幅40 ～ 90㎝、深さ１～ 23㎝である。埋没は土層断面観察から自然埋没と考えられ、下層にも水流の痕跡は認められない。遺物は、土師器高杯の脚部が１点(第176図７溝- １)出土した他、非掲載遺物の土師器大破片500ｇ、土師器小破片片10ｇ、須恵器大破片175ｇが出土した。時期は、出土遺物が少なく確定しにくいが、４号溝との重複関係から古代以前に遡るものと思われる。

８号溝(第175図　PL.25)

Ｘ＝153 ～ 161、Ｙ＝－023 ～ 042に位置する。３号竪穴住居、３・４・５号溝、１号橋と重複しており、検出状況などから４・５号溝、３号竪穴住居より新しく、３号溝、１号橋とは同時期と考えられる。北東から南西に走行し、底面の標高は北東端58.08m、南西端57.80m、比高28㎝であり、底面の傾斜がわずかに認められる。検出した規模は、長さ20.78m、上面幅0.68 ～ 1.44m、深さ18 ～ 62㎝である。土層堆積状況から自然埋没と考えられ、時期は、３号溝との関係から中世以降と考えられる。

９号溝(第177図　PL.25)

Ｘ＝137 ～ 150、Ｙ＝－006 ～ 035に位置する。９号溝が２号竪穴住居、５・10・11号溝と重複しており、検出状況などから２号竪穴住居より新しいことは確実であるが、５・10・11号溝との新旧関係を確認することはできなかった。北東から南西に走行し、底面の標高は北東端58.03m、南西端57.37m、比高66㎝と、北東に向かい傾斜が認められ、下層に水流の痕跡が見られることから水路の可能性が高い。検出した規模は、長さ29.38m、上面幅2.96 ～ 5.48m、深さ５～ 66㎝であり、褐灰色砂質土を主体とした自然埋没と考えられる。遺物出土がないため時期を確定することができないが、10号溝との関連が想定されることから、中世以降のものと判断した。

10号溝(第177図　PL.25・39)

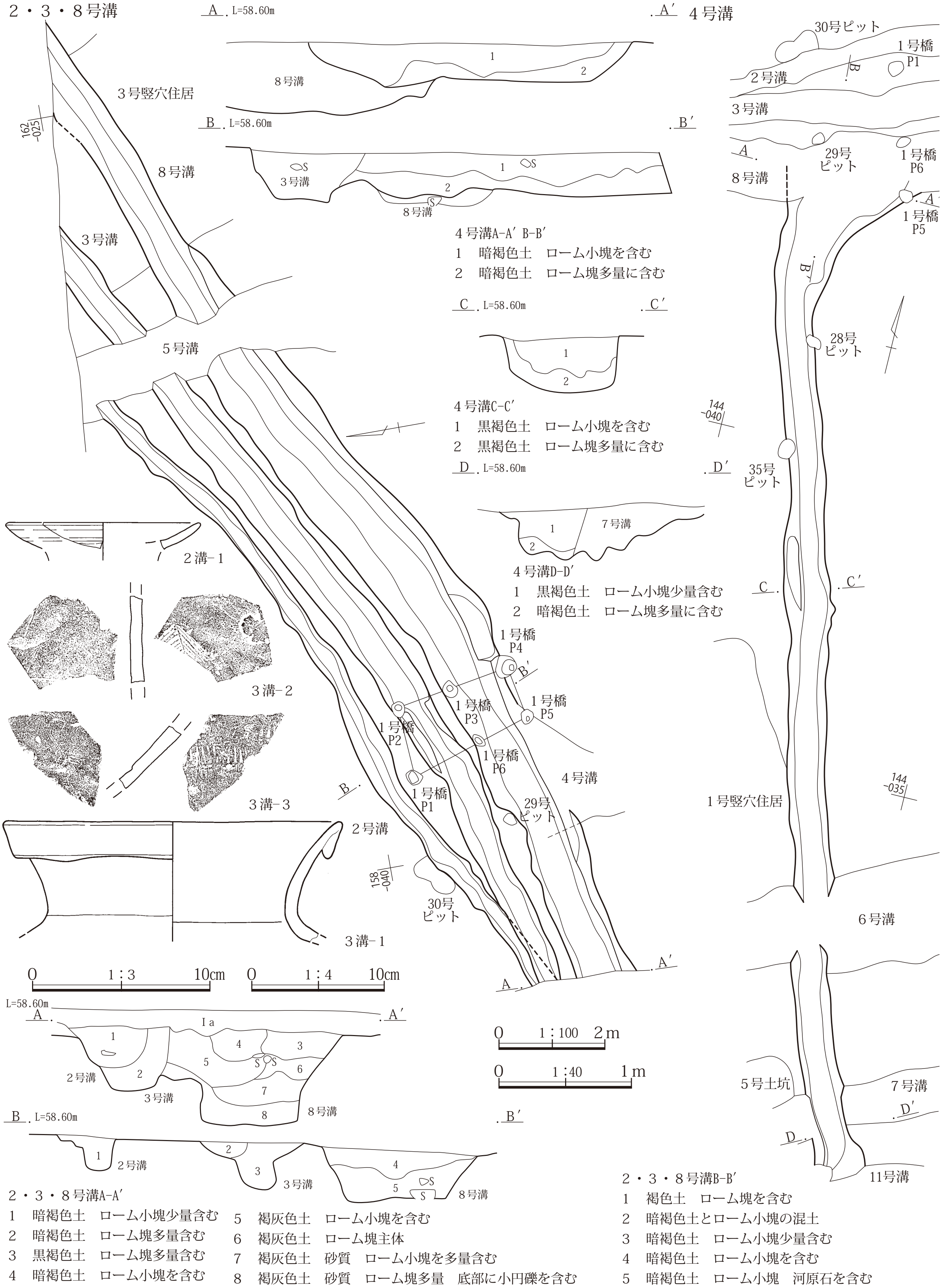
Ｘ＝131 ～ 144、Ｙ＝－013 ～ 027に位置する。５・12号溝と重複しており、遺構確認状況などから５号溝より新しく、12号溝との新旧関係は不明。９号溝とは並走し、北側で合流するが底部に高低差はなく、埋没土にも際立った差が認められなかったことから、同時期の可能性が高い。北東から南西に走行し、底面の標高は北東端58.03m、南西端57.81m、比高22㎝である。底面の傾斜はわずかであるが、埋没土は小礫を含む褐灰色土で水流の影響を受けていると判断されることから、９号溝と同様に水路であった可能性が高い。検出した規模は、長さ20.02m、上面幅0.72 ～ 1.75m、深さ８～ 35㎝である。遺物は須恵器杯、双耳坏の他、中世の在地系片口鉢(第177図10溝- １～４)が出土した。非掲載遺物では土師器大破片190ｇ、須恵器大破片65ｇが出土している。時期は、５号溝との重複から17世紀後半以降と考えられる。

11号溝(第177図　PL.25・39)

Ｘ＝136 ～ 137、Ｙ＝－028 ～ 034に位置する。４・９号溝と重複する。4号溝より新しく、９号溝とは重複部分での違いがみとめられないことから同時期の可能性が高い。西から東に走行し、底面の標高は西端57.65m、東端57.46m、比高19㎝で、東に向かって傾斜が認められ、埋没土は９号溝に類似する水流の影響を受けたものと判断されることから水路の可能性がある。検出した規模は、長さ7.00m、上面幅2.10 ～ 2.20m、深さ25 ～ 67㎝である。出土遺物はなく直接に時期を確定することはできないが、９号溝との類似性から時期は中世以降の所産と考えられる。

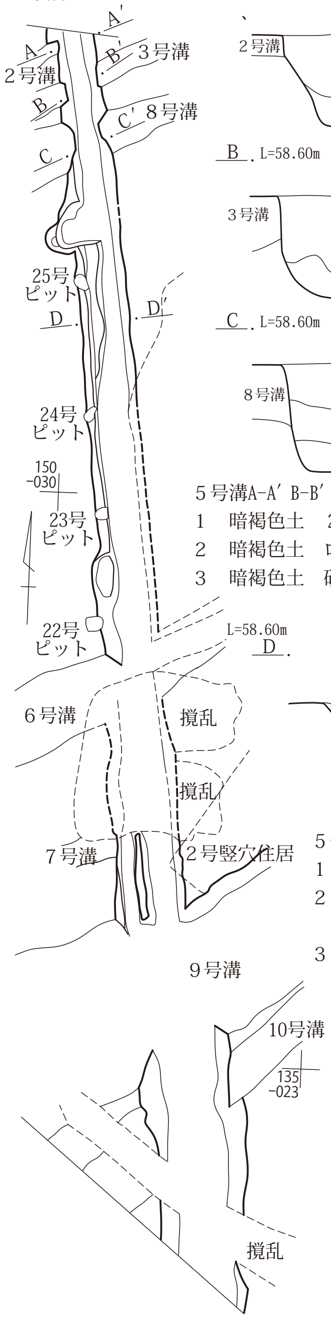
12号溝(第177図　PL.25)

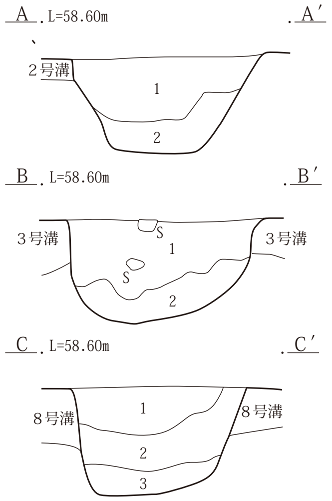
Ｘ＝130 ～ 140、Ｙ＝－017 ～ 020に位置する。10号溝と重複し、新旧関係は不明。北東から南西に走行し南に折れており、底面の標高は北東端58.04m、南西端58.01m、南端の標高は57.95mとほぼ平坦である。検出した規模は、長さ12.01m、上面幅0.90 ～ 1.00m、深さ２～ 14㎝である。埋没土は、ローム小塊を含む黒褐色土と黄褐色土であり、下層にも水流の痕跡は認められない。非掲載遺物は土師器片が出土している。埋没土は、基本土層第Ⅴ層が主体であることから、古代以前の所産と考えられる。



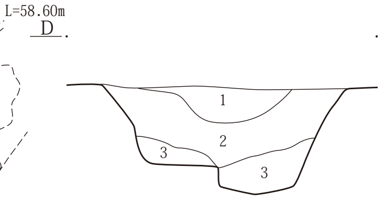
第175図　３区２・３・４・８号溝と２・３号溝の出土遺物

５号溝



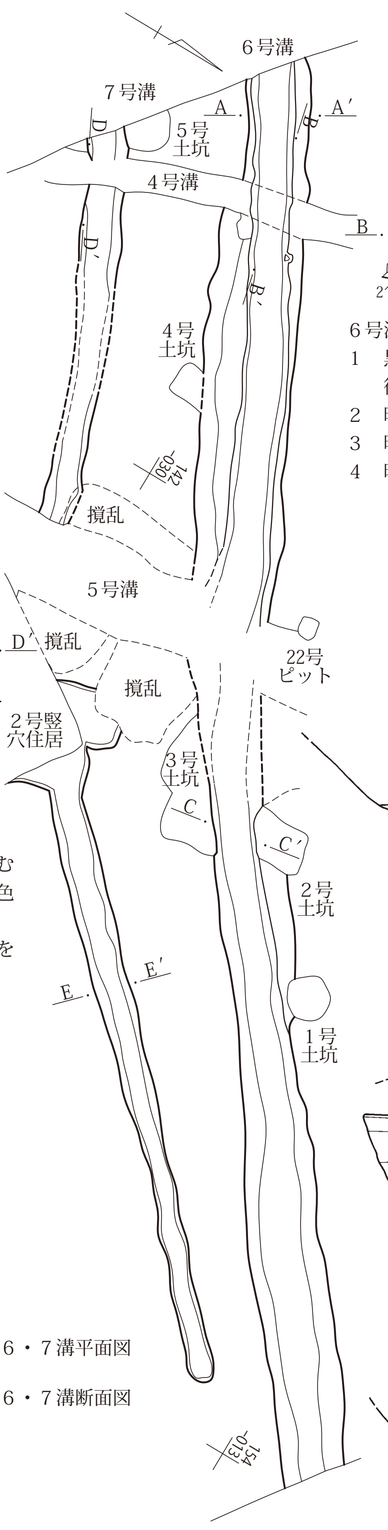


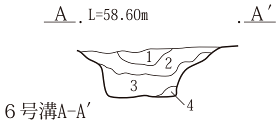
５号溝A-A′ B-B′ C-C′
1　暗褐色土　２～３㎝大の円礫多量に含む
2　暗褐色土　ローム塊少量含む
3　暗褐色土　砂質　ローム塊少量含む



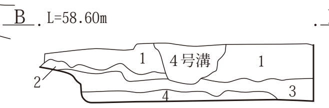
５号溝D-D′
1　灰褐色土　ローム小塊少量含む
2　暗褐色土　ローム小塊　灰褐色土を含む
3　暗褐色土　砂質　ローム小塊をやや多量に含む

６・７号溝

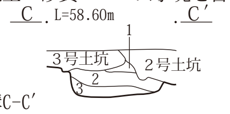




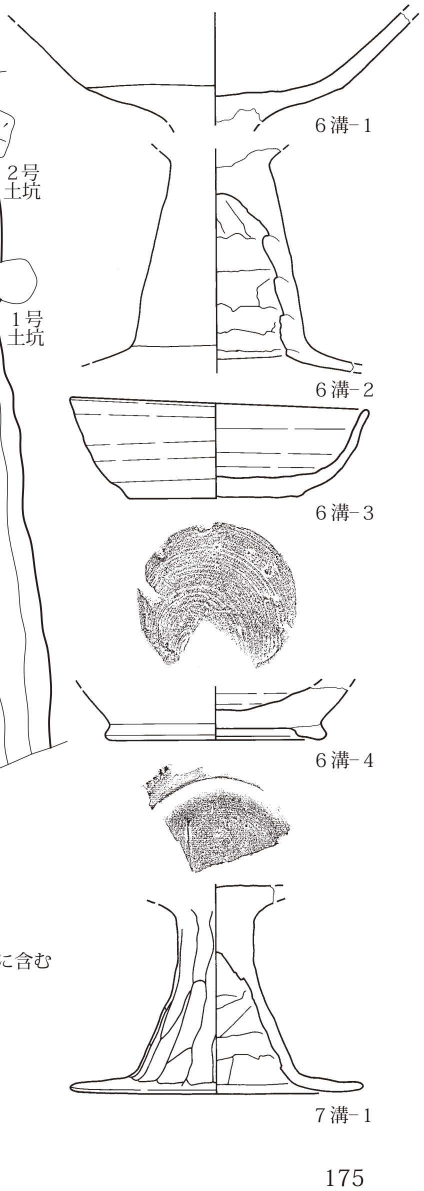
６号溝A-A′
1　黒褐色土　ローム小塊少量含む
2　暗褐色土　ローム小塊を含む
3　灰褐色土　ローム塊を含む
4　ローム塊



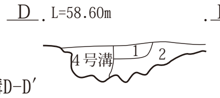
６号溝B-B′
1　黒褐色土　ローム小塊少量　焼土粒を微量に含む
2　暗褐色土　褐灰色土(FAか)を含む
3　暗褐色土　ローム塊多量に含む
4　暗褐色土　砂質　ローム小塊を含む



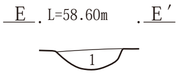
６号溝C-C′
1　灰褐色土　ローム小塊少量含む
2　褐灰色土　ローム小塊　黒褐色土小塊少量含む
3　褐灰色土　砂質　ローム塊を含む



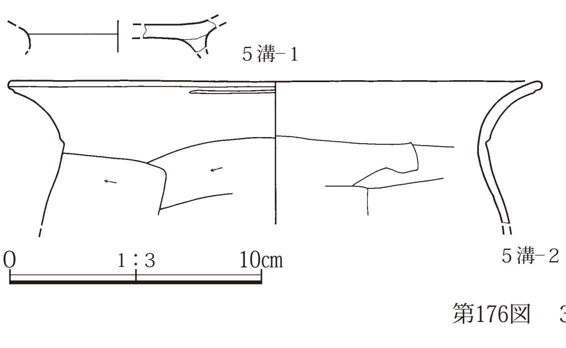
0　1：200　5m　5溝平面図
0　1：40　1m　5溝断面図
0　1：160　4m　6・7溝平面図
0　1：80　2m　6・7溝断面図



７号溝D-D′
1　暗褐色土　ローム小塊少量含む
2　暗褐色土　ローム小塊をやや多量に含む

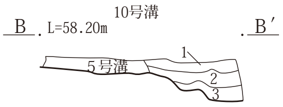


７号溝E-E′
1　暗褐色土　ローム塊を含む

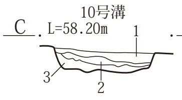


0　1：3　10㎝

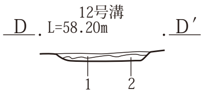
第176図　３区５・６・７号溝と出土遺物



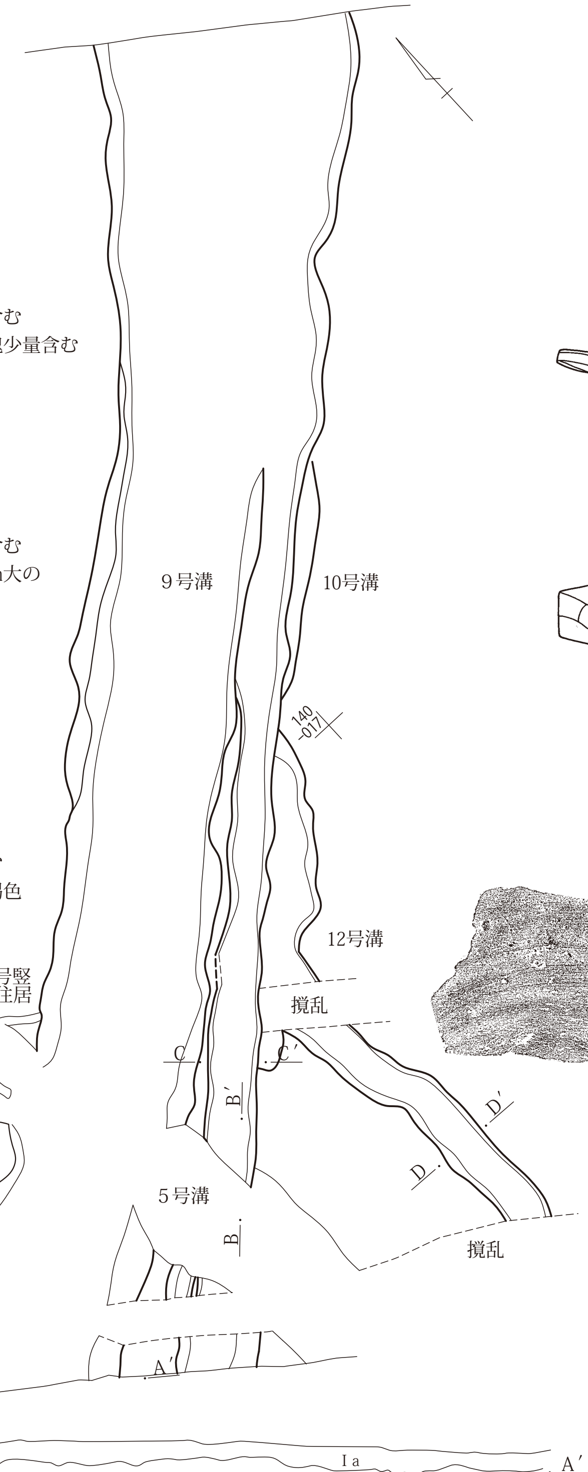
10号溝B-B′
1　暗褐色土　ローム塊を含む
2　暗褐色土　ローム小塊少量含む
3　褐灰色土　砂質　ローム小塊少量含む

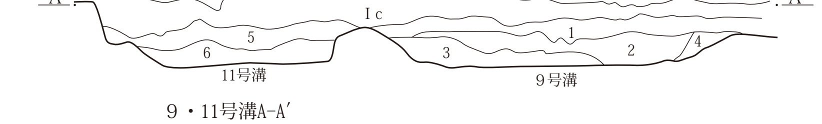


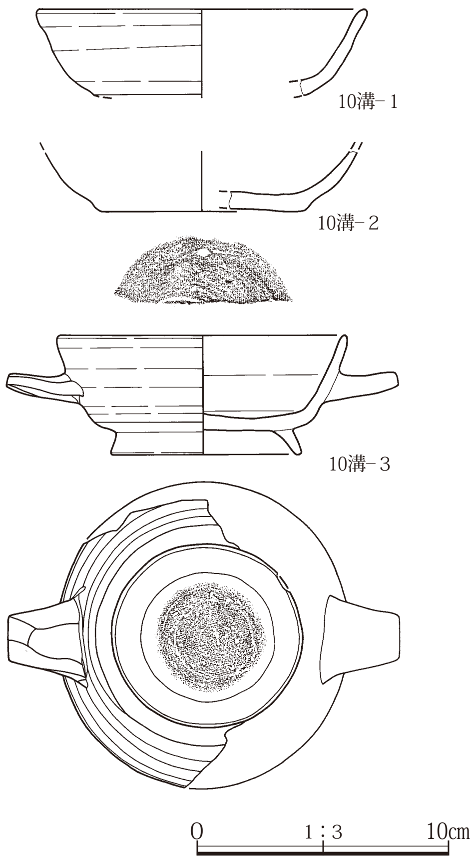
10号溝C-C′
1　褐灰色土　ローム小塊少量含む
2　褐灰色土　砂質土　２～３㎝大の礫を含む
3　褐灰色土　ローム塊を含む

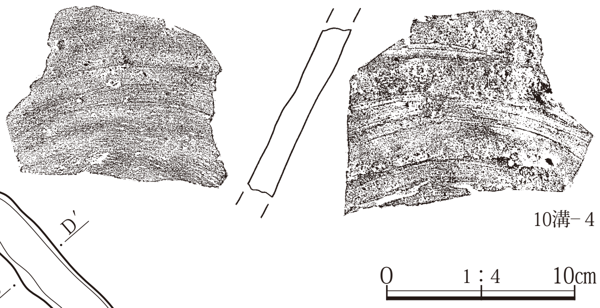


12号溝D-D′
1　黒褐色土　ローム小塊を含む
2　黄褐色土　ローム主体　黒褐色土塊を含む









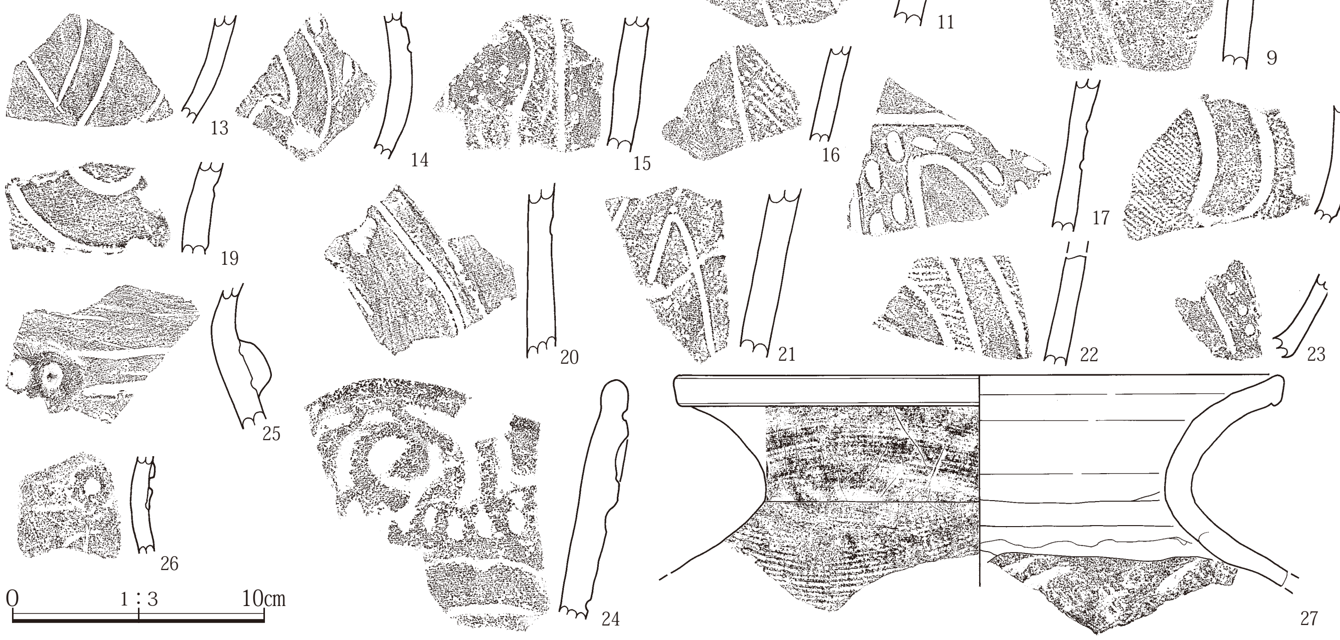
9・11号溝A-A′
1　褐灰色土　ローム小塊少量含む
2　褐灰色土　砂質　鉄分の沈着が見られる
3　褐灰色土　砂質　５層より砂が多い
4　褐灰色土　砂質　ローム塊を含む
5　褐灰色土　砂質　鉄分の沈着がやや見られる
6　褐灰色土　砂質　ローム小塊を微量に含む

0　1：160　4ｍ
0　1：80　2ｍ

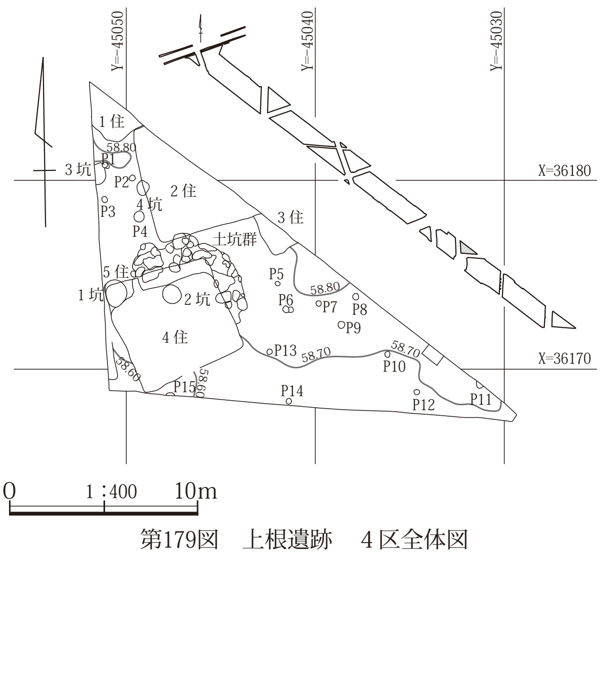
第177図　３区９～12号溝と10号溝の出土遺物

３　遺構外の遺物（第177図　PL.39）

３区では縄文時代から中近世の遺構が検出されているが、これらの遺構に伴わない遺物が多数出土している。縄文時代の遺物では、撚糸文系、鵜ヶ島台式、加曽利Ｅ４式、称名寺式、堀之内１式土器（第178図１～26）が代表的なものであり、非掲載遺物を含めると早期から後期まで120点の土器片が出土しているが、その95％が後期に属するものである。石器は、撥型及び分銅型の打製石斧や加工痕ある剥片が出土している。古墳時代以降の遺物では、須恵器甕の破片（第178図27）が出土しており、非掲載遺物の総重量は、土師器大破片1,650ｇ、土師器小破片20ｇ、須恵器大破片580ｇ、須恵器小破片20g、瓦50ｇであり、中世以降の遺物出土はない。



第178図　３区遺構外の出土遺物



第179図　上根遺跡　４区全体図

第５節　４区の調査成果

４区は表土耕作土から根攪乱が著しい。重機で約40㎝掘削しローム漸移層（基本土層第Ⅵ層）において遺構確認を行った。縄文時代から近世に至る遺構や遺物が検出され、遺構別には重複した状態の竪穴住居・土坑・土坑群及びピットである。出土遺物については縄文時代の土器及び石器のうち遺構の構築時期と明らかに異なる場合は混入によるものと判断し遺構外出土遺物として扱った。

１　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は土坑であり、以下のとおり概略を記す。４区では早期から後期に至る遺物が出土し、１～６

区のうち土器片及び石器の出土が最も多く、周辺から土坑以外の遺構の検出が想定される。

（１）土坑

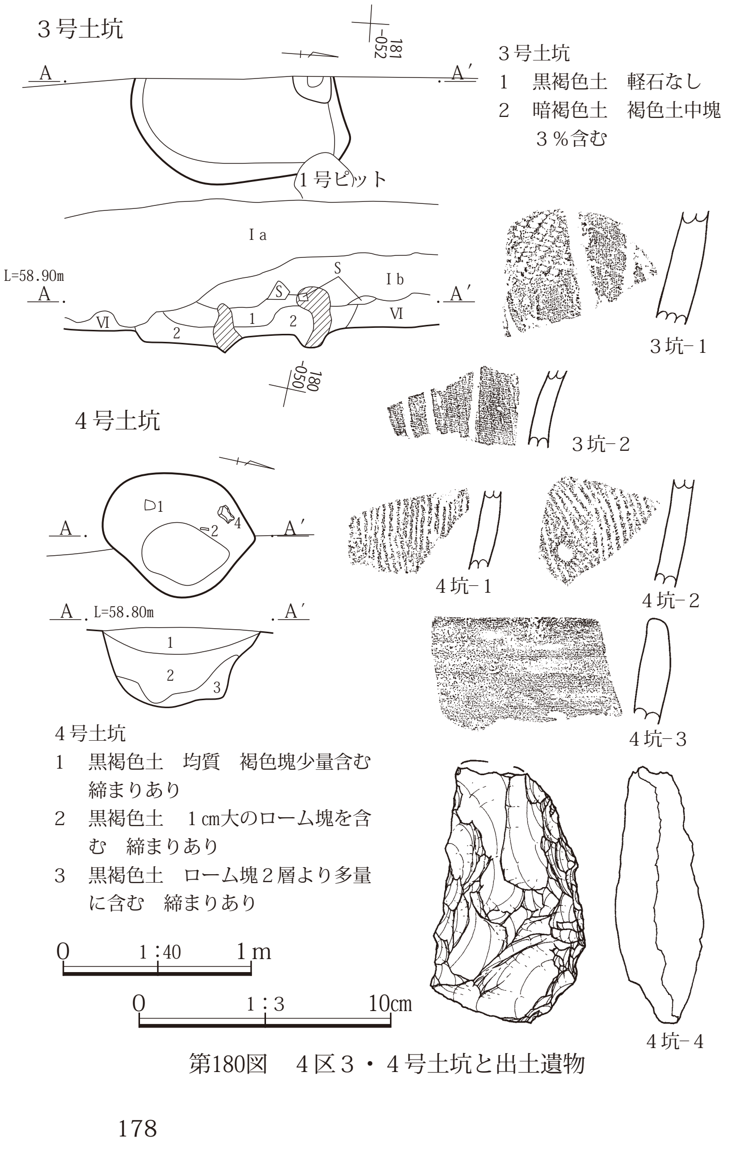
４区から検出された縄文時代の土坑は２基である。調査区北側から検出され、時期は縄文時代後期である。

３号土坑（第180図　PL.39）

１号ピットと重複し、埋没土の確認状況から３号土坑が古い。黒褐色土及び暗褐色土による自然堆積と考えられる。埋没土から称名寺式（第180図３土１・２）が出土し、時期は縄文時代後期と考えられる。

４号土坑（第180図　PL.26・39）

２号竪穴住居と重複し埋没土の確認状況から４号土坑が古い。ローム塊を含む黒褐色土による自然堆積と考えられる。埋没土から撚糸文系、称名寺式（第180図１～３）、打製石斧（第180図４）が出土する。非掲載遺物は土師器小破片70ｇであり混入と考えられる。出土遺物から時期は縄文時代後期と考えられる。



第180図　４区３・４号土坑と出土遺物

２　古墳時代以降の遺構と遺物

古墳時代以降の遺構及び遺物が検出された。遺構は竪穴住居・土坑・溝である。

（１）竪穴住居

４区から検出された竪穴住居は５軒である。低地から微高地へ地形が変わる調査区中央部から北部にかけて竪穴住居が検出されている。調査区外及び重複のため部分的な調査となった竪穴住居もあるが、時期は古墳時代前期から後期である。４・５号竪穴住居掘り方調査段階で重複する土坑群が検出され、明確に分離できないため４・５号竪穴住居とともに掲載した。

１号竪穴住居（第181図　PL.26・39）

位置　X＝182 ～ 185、Y＝－049 ～ 051

形状・規模　調査区外となるため南西部のみの検出であり不明。確認できる壁高は４～ 16㎝である。

重複　１号竪穴住居埋没土を２号竪穴住居が切る。

埋没土　ローム粒・小塊、炭化物を少量含む暗褐色土による自然堆積か人為か不明。

床面　床面はほぼ平坦である。使用による硬化面は不明瞭である。掘り方はローム塊を多量に含む人為的埋没土で床面を構築する。

炉・竈・柱穴・周溝　床面精査、掘り方調査で検出できなかった。

他の施設　床面精査により２基の土坑が検出された。１号土坑は調査区外となるため確認できる開口部の長さ64㎝、深さ32㎝である。ローム塊を多量に含む人為的埋没土である。２号土坑は南東隅より検出され上面は円形で、規模は長径69㎝、短径54㎝、深さ40㎝である。埋没は自然堆積か人為か不明。貯蔵穴の可能性がある。

掘り方　中央部を残し壁面から50 ～ 120㎝の幅で１～５㎝掘り込まれている。床下施設は検出されない。

遺物出土状態　壁際の床面から潰れた坩や小型甕、甕（第181図１～４）が出土する。非掲載遺物は土師器大破片1,750ｇが出土する。

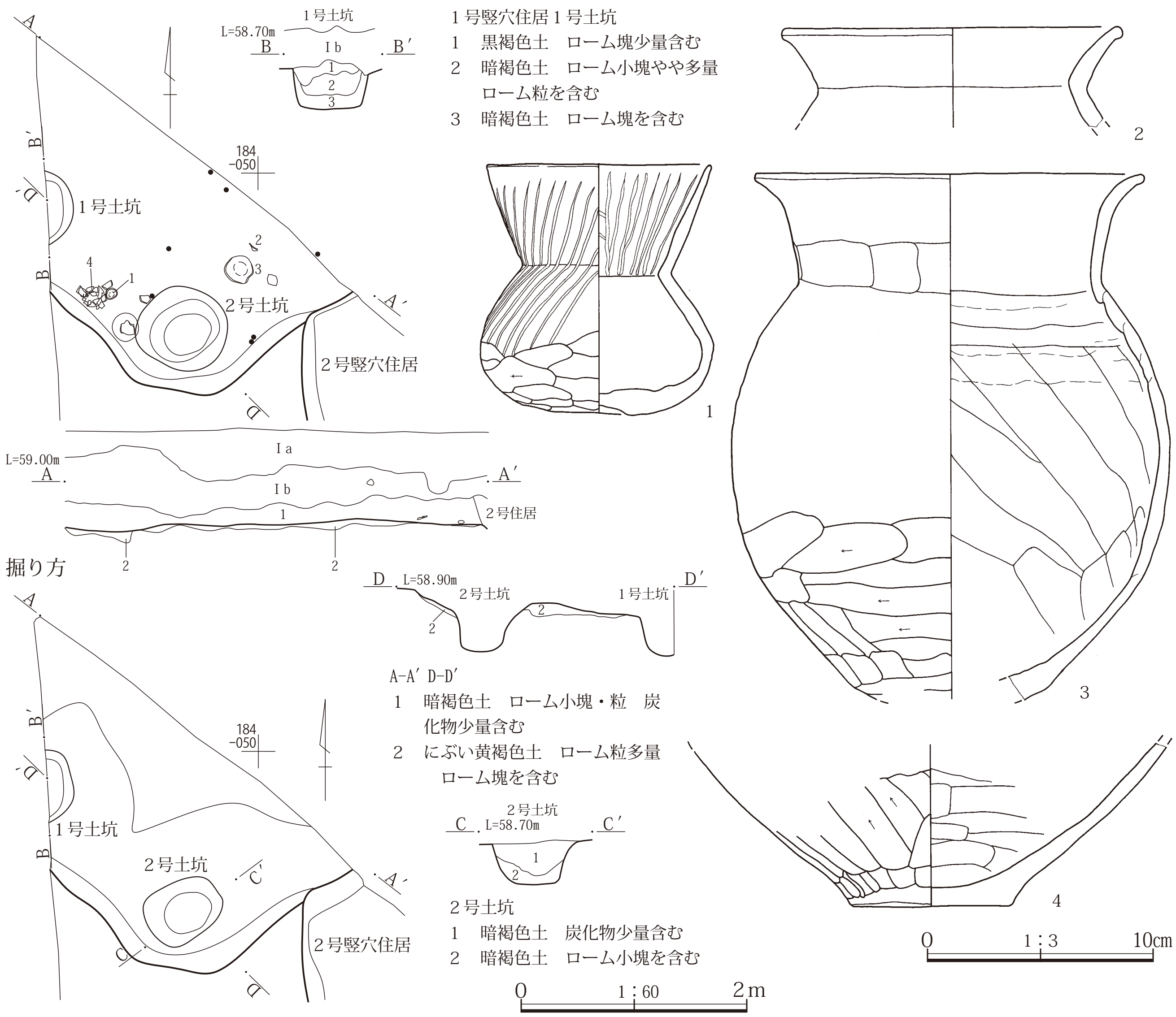
所見　時期は古墳時代５世紀前半と考えられる。

２号竪穴住居（第182・183図　PL.26・27・40）

位置　X＝178 ～ 182、Y＝－043 ～ 049

形状・規模　北東側が調査区外となるため不明。確認できる西壁の長さ6.27ｍ、壁高14 ～ 30㎝である。

主軸方向　Ｎ－16°－Ｗ



第181図　４区１号竪穴住居と出土遺物

重複　１・３号竪穴住居埋没土を２号竪穴住居が切り、遺埋没土の確認状況から４号土坑、４・５号竪穴住居土坑群より２号竪穴住居が古い。

埋没土　床面はローム粒・塊を含むにぶい黄褐色土により埋没し、上層は焼土塊及び炭化物を含む黒褐色土及び暗褐色土により自然堆積か人為か不明。

床面　床面レベル差はなく平坦である。使用による硬化面は不明瞭である。掘り方は黒褐色土と褐灰色土の混土及び黄褐色土による人為的埋没土で床面を構築する。

炉・竈　床面精査、掘り方調査で検出できなかった。

貯蔵穴　床面精査で北西隅より検出される。平面は不定形で、規模は長径1.25m、短径85㎝、深さ63㎝である。下層に炭化物が含まれ、埋没はローム塊を含む暗褐色土による自然堆積と考えられる。

周溝　掘り方調査から西壁、南壁際に幅15～35㎝、深さ２～９㎝の掘り込みが認められる。

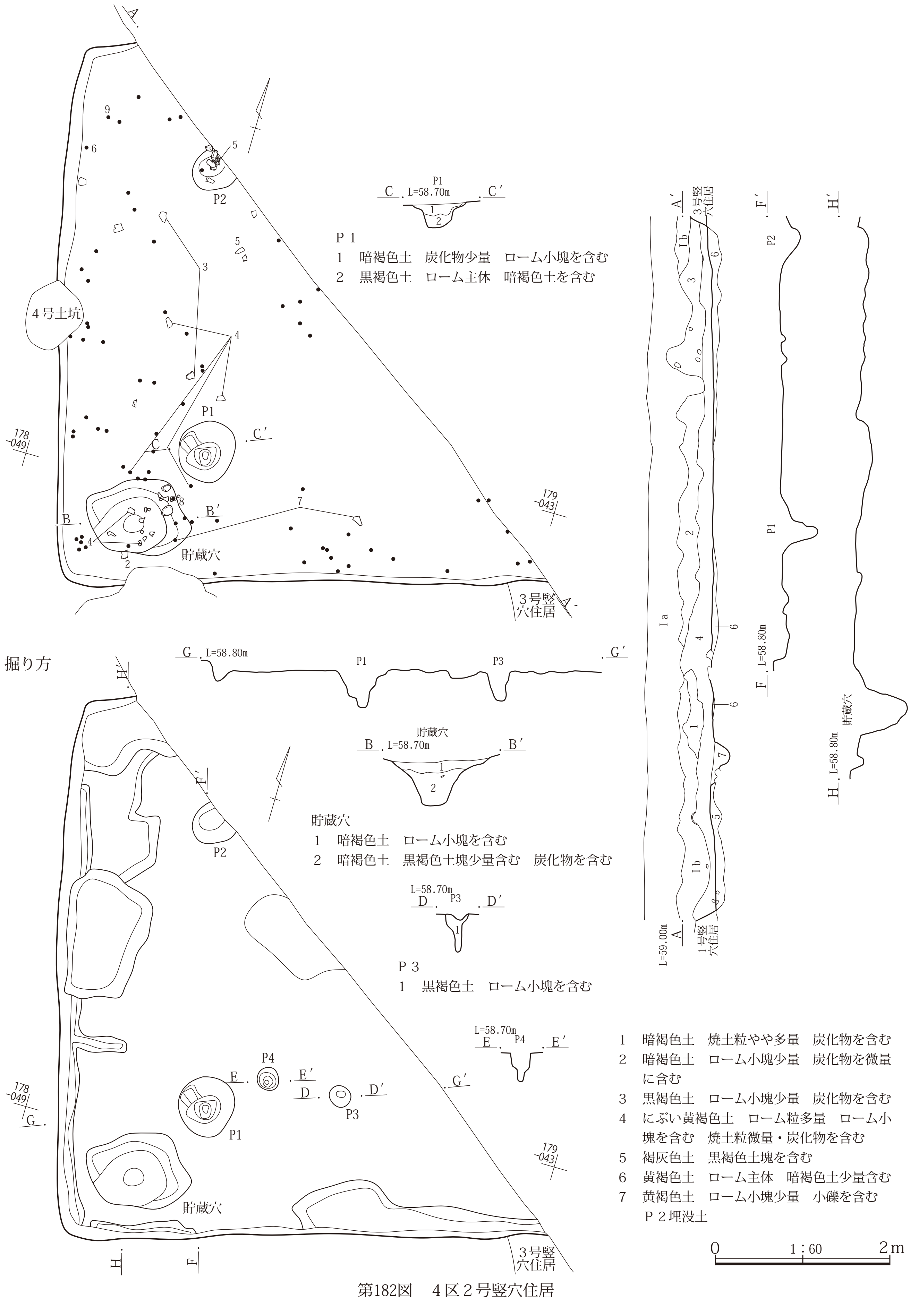
柱穴　主柱穴は西側から２基検出される。Ｐ１は長径69㎝、短径65㎝、深さ41㎝、Ｐ２は確認できる開口部の長さ0.46m、深さ22㎝である。柱間は3.35mである。

他の施設　掘り方調査から２基のピットが検出された。規模(長径×短径×深さ(㎝))は、Ｐ３(25×23×32)、Ｐ４(27×25×44)である。

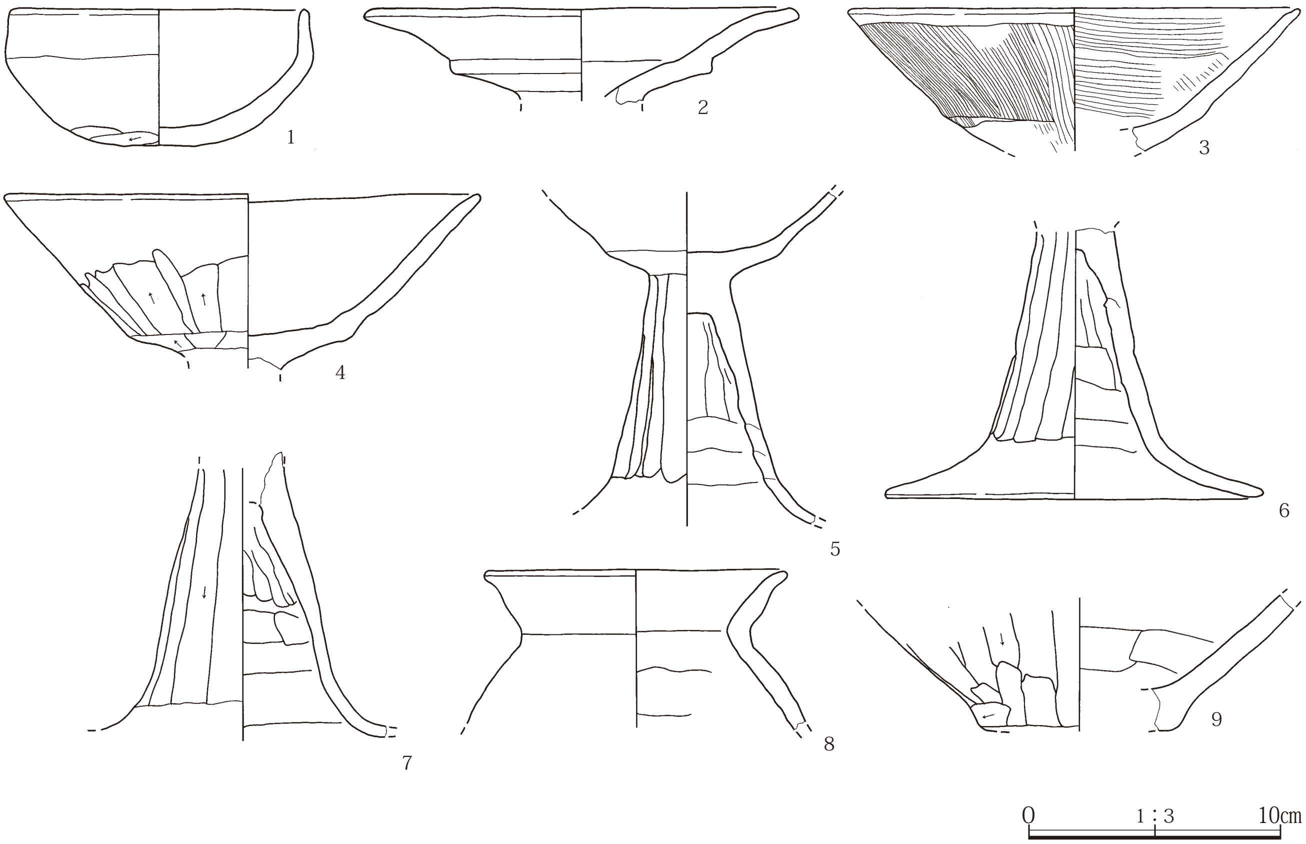
掘り方　中央部を残し壁面から約0.5～1mの幅で周回するよう約５㎝掘り込まれている。

遺物出土状態　床面直上から椀、高杯、甕(第183図１～９)が出土する。非掲載遺物は土師器大破片3,910ｇ、土師器小破片20ｇ、須恵器大破片40ｇ、須恵器小破片20ｇである。

所見　時期は古墳時代５世紀中頃と考えられる。



第182図　４区２号竪穴住居



第183図　４区２号竪穴住居の出土遺物

３号竪穴住居(第184図　PL.26・27)

位置　X＝176～178、Y＝－041～043

形状・規模　調査区外となるため不明。確認できる壁高は２～７㎝である。

重複　２号竪穴住居が３号竪穴住居埋没土を切る。

埋没土　多量のローム小塊、炭化物、焼土粒を含む人為的埋没土と考えられる。

床面　使用による硬化面は不明瞭である。掘り方はローム塊と暗褐色土による人為的埋没土で床面を構築する。

炉・竈・貯蔵穴・柱穴　床面精査、掘り方調査で検出できなかった。

周溝　南西壁際及び南東壁際の一部で幅20～30㎝、深さ２～11㎝の溝状の掘り込みが認められ周溝の可能性がある。

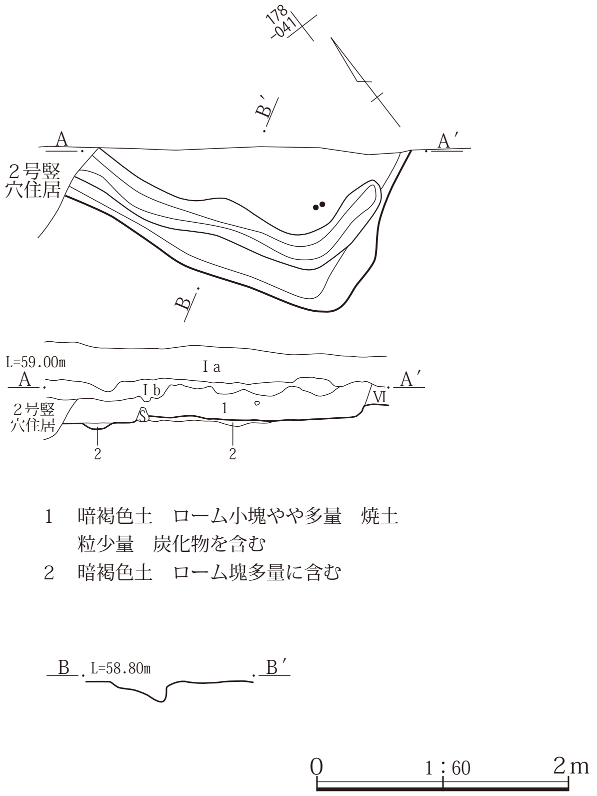
掘り方　掘り方調査により床下施設は検出されない。

遺物出土状態　非掲載遺物であるが土師器大破片130ｇ、須恵器小破片20ｇが出土する。

所見　出土遺物から時期は古墳時代と考えられる。

４号竪穴住居(第185～189図　PL.27・40・41)

位置　X＝171～172、Y＝－043～050



第184図　４区３号竪穴住居

形状・規模　形状は長方形で、規模は長軸長5.85m、短軸長5.00m、壁高２～23㎝である。床面積は28.34㎡である。**主軸方向**　Ｎ－25°－Ｗ

重複　４号竪穴住居が５号竪穴住居、土坑群埋没土を切り、４号竪穴住居埋没土を２号土坑、17号ピットが切る。

埋没土　床面から壁際にかけて三角堆積が認められ自然堆積と考えられる。

床面　凹凸が認められ残存状態は不良。東壁際より西壁際が約10㎝低く、中央部より竈焚口周辺が約１～３㎝低い。使用による硬化面は不明瞭である。掘り方はローム塊を多量に含む黒褐色土及び暗褐色土による人為的埋没土で床面を構築する。

竈　北壁中央部からやや西寄りに付設される。残存部から焚口幅46㎝、左袖37㎝、煙道1.24ｍであり北壁より外に伸びる。左側の袖石が原位置で残存する

貯蔵穴・周溝　床面精査、掘り方調査で検出できなかった。

柱穴　対角線上に位置するＰ７・８・９・11は主柱穴と考えられ、規模(長径×短径×深さ(㎝))は、Ｐ７(31×20×23)、Ｐ８(59×38×32)、Ｐ９(58×35×30)Ｐ11（26×18×26)である。柱間は、Ｐ７からＰ８は3.10m、Ｐ８からＰ９は2.05m、Ｐ９からＰ11は3.10m、Ｐ７からＰ11は1.95mである。

他の施設　床面精査からピットが７基検出された。規模(長径×短径×深さ(㎝))は、Ｐ１(48×38×10)、Ｐ２(57×52×18)、Ｐ３(50×44×12)、Ｐ４(65×47×18)、Ｐ５(68×64×31)、Ｐ６(72×43×32)、Ｐ10（68×63×33)である。

掘り方　ローム面を土坑状に掘り込む。５号竪穴住居北側の土坑群と重複し、明確に分離できない状態である。

遺物出土状態　埋没土及び掘り方から坏、小型甕、甕、短頸壺(第186～189図１～25)、竈使用面から鉢(第187図10)、非掲載遺物は土師器大破片8,400ｇが出土し、床面から出土した遺物と掘り方調査から出土した遺物が接合されることから、４号竪穴住居構築時の埋土に伴う混入か、後世の攪乱によるものと考えられる。

所見　時期は古墳時代６世紀後半から７世紀前半と考えられる。

５号竪穴住居(第186・185・189図　PL.28)

位置　Ｘ＝172～175、Ｙ＝－045～051

形状・規模　４号竪穴住居、土坑群との重複のため不明。確認できる北壁の長さ5.73m、壁高10～13㎝である。

主軸方向　Ｎ－25°－Ｗ

重複　５号竪穴住居埋没土を４号竪穴住居が切る。土坑群埋没土に５号竪穴住居埋没土が認められ土坑群より５号竪穴住居が新しい。埋没土の確認状況から５号竪穴住居より１号土坑が新しい。

埋没土　土坑群との重複及び後世の攪乱のため埋没土は不明瞭である。黒褐色土を含む褐色土の17・18層がやや硬化し床面構築土の可能性がある。

床面　北壁両隅の一部が僅かに残存し遺物の出土状況から床面とした。使用による硬化面は不明瞭である。

竈・貯蔵穴・柱穴・周溝　床面精査、掘り方調査で検出できなかった。

掘り方の状態　土坑群埋没土と竪穴住居掘り方との明確な区別はできない。

遺物出土状態　北東隅の埋没土から甕(第189図５住１)、非掲載遺物は土師器大破片1,010ｇ、土師器小片295ｇが出土する。

所見　出土遺物から４号竪穴住居と時期差はなく古墳時代６世紀後半から７世紀前半と考えられる。

土坑群(第189図)

位置　土坑群はＸ＝168～177、Ｙ＝－043～049

形状・規模　土坑及びピット状の掘り込みが４・５号竪穴住居北側から検出され、土坑を個別に分離することができないため土坑群とした。４・５号竪穴住居との重複のため全体の規模は不明。

重複　土坑群埋没土を４・５号竪穴住居が切る。

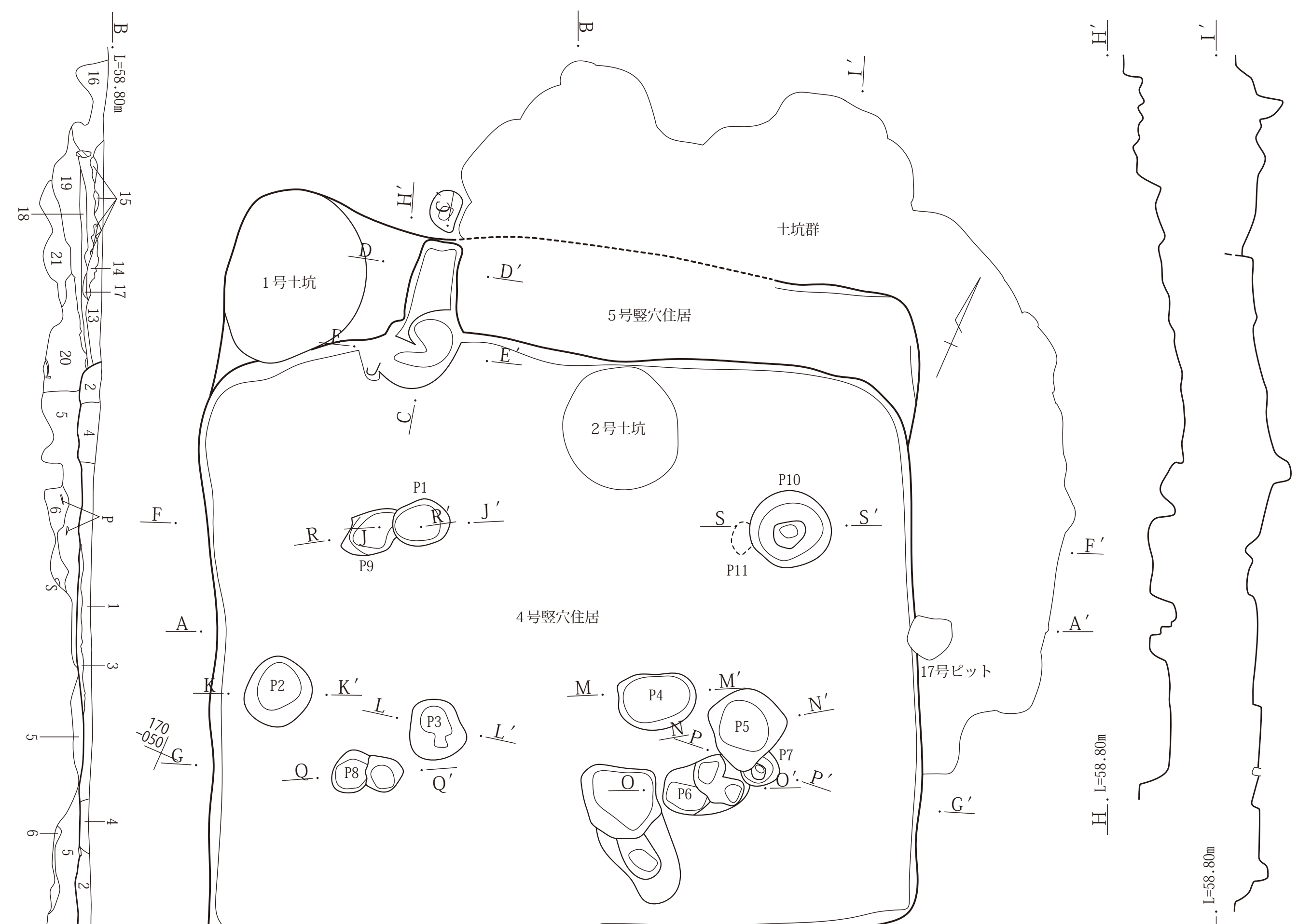
埋没土　ローム塊を含む黒褐色土から褐色土による人為的埋没土と考えられる。４・５号竪穴住居掘り方調査で底面から土坑状の掘り込みが認められ土坑群が４号竪穴住居南部まで広がる可能性がある。

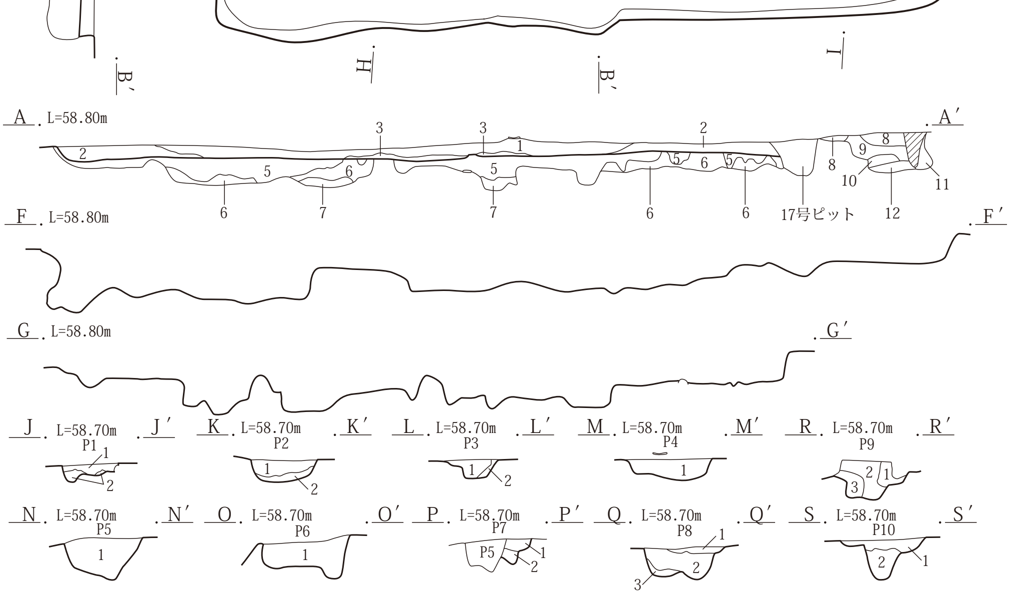
遺物出土状態　非掲載遺物は土師器大破片1,030ｇ、須恵器小破片10ｇが出土する。４・５号竪穴住居から出土した遺物との時期差はない。

所見　出土遺物から時期は古墳時代中期から後期と考えられる。

(２)土坑・ピット

４区から検出された土坑は４基､ピットは17基である。遺構に伴う出土遺物が少なく詳細な時期判定をすることができないため埋没土と基本土層を対比させて時期を判





A-A′・B-B′
1　灰褐色土　色調は暗い　ローム小塊少量　炭化物を含む
2　暗褐色土　ローム塊多量に含む
3　暗褐色土　ローム塊を含む　上面は固く締る
4　黒褐色土　ローム小塊微量に含む
5　暗褐色土　ローム小塊多量　焼土粒少量含む
6　ローム塊主体　暗褐色土塊を含む
7　黒褐色土　ローム小塊を含む
8　暗褐色土　褐色土小粒１％含む
9　黒褐色土　ローム土　炭化物を含む
10　黒褐色土　ローム中粒５％含む　締まりやや弱い
11　黒褐色土　上位にローム土を含む
12　にぶい黄褐色土　黒褐色土を含む　粘性あり　やや締る
13　黒褐色土　褐色土中粒・大塊５％　白色粒５％以下含む
14　黒褐色土　ローム土を含む　白色粒１％以下含む
15　褐色土　固く締る
16　黒褐色土　ローム土を含む　黄色味帯びる
17　褐色土　黒褐色土を含む　やや締る
18　黒褐色土　ローム土を含む　５号竪穴住居構築土か
19　にぶい黄褐色土　暗褐色土少量含む　粘性あり　やや締る
20　黒褐色土　褐色土大塊10％含む
21　黒褐色土　ローム中粒・小塊１％含む　締まりやや弱い

Ｐ１
1　暗褐色土　ローム小塊少量　焼土粒微量に含む
2　暗褐色土　ローム小塊を含む

Ｐ２
1　暗褐色土　ローム粒少量含む
2　黄褐色土　ローム粒多量に含む

Ｐ３
1　暗褐色土　ローム小塊を含む
2　黄褐色土　ローム塊主体　暗褐色土を含む

Ｐ４
1　暗褐色土　ローム小塊を含む

４号竪穴住居Ｐ５
1　暗褐色土　ローム小塊多量　焼土粒少量含む

Ｐ６
1　暗褐色土　ローム塊　焼土粒を含む

Ｐ７
1　黄褐色土　ローム小塊　少量含む
2　灰黄褐色土　ローム大塊を多量含む

Ｐ８
1　黒褐色土　ローム小塊多量に含む
2　黒褐色土　ローム小塊を含む
3　黒褐色土　ローム塊主体

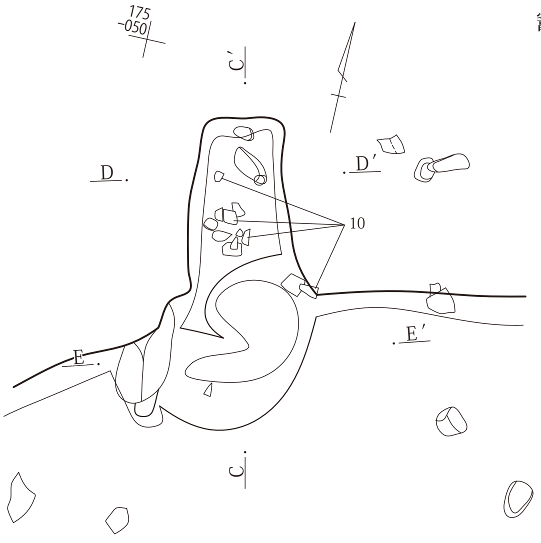
Ｐ９
1　暗褐色土　ローム小塊少量含む
2　暗褐色土　ローム小塊多量に含む
3　黒褐色土　ローム小塊を含む

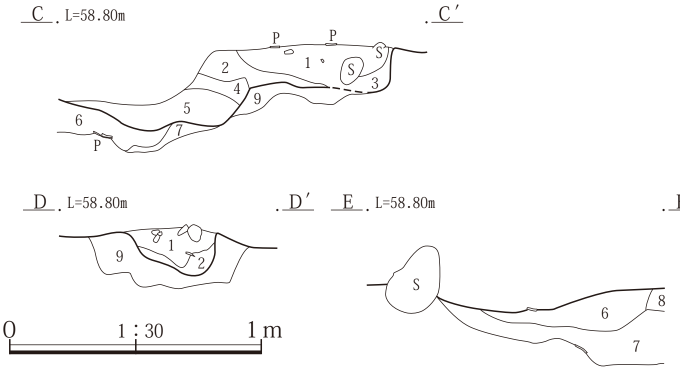
Ｐ10
1　暗褐色土　ローム小塊少量含む
2　黒褐色土　ローム塊主体

0　1：60　2ｍ

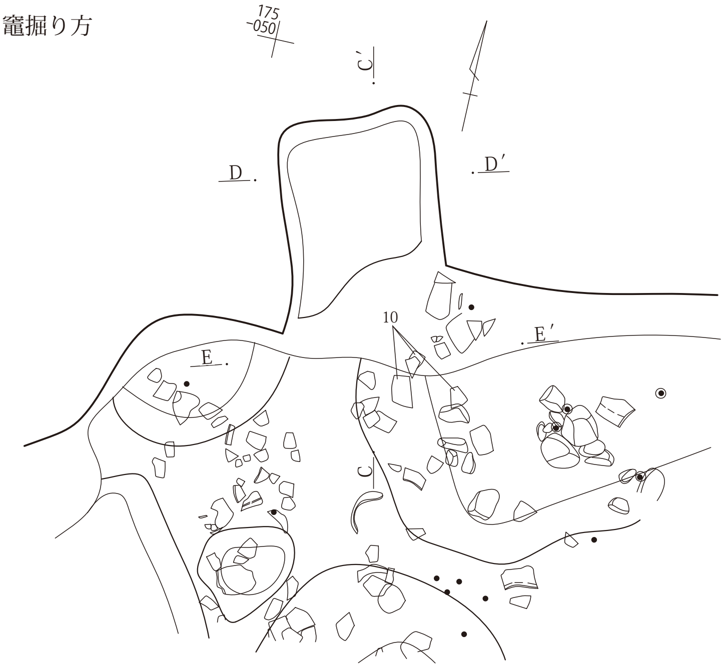
第185図　４区４・５号竪穴住居

竈



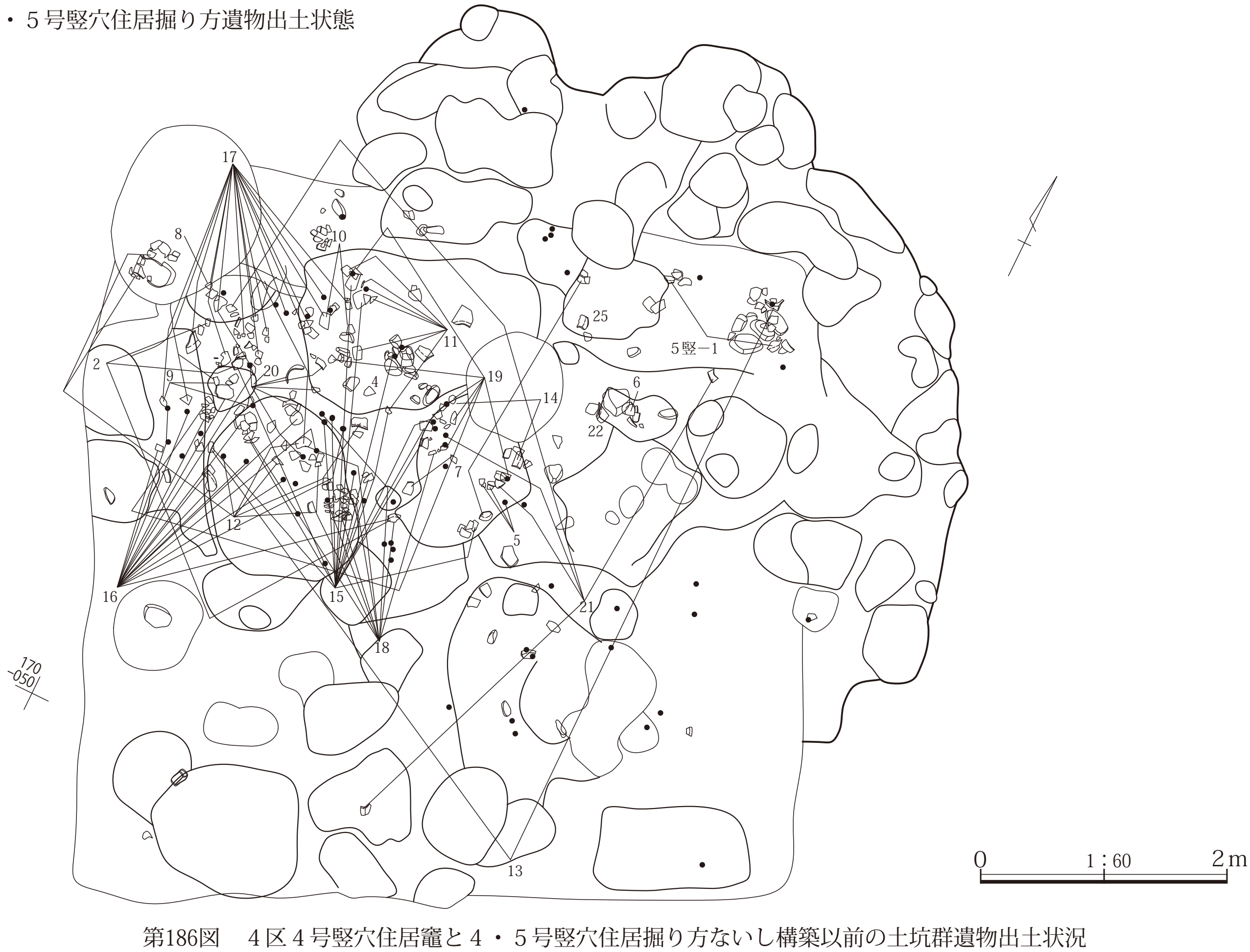


竈掘り方

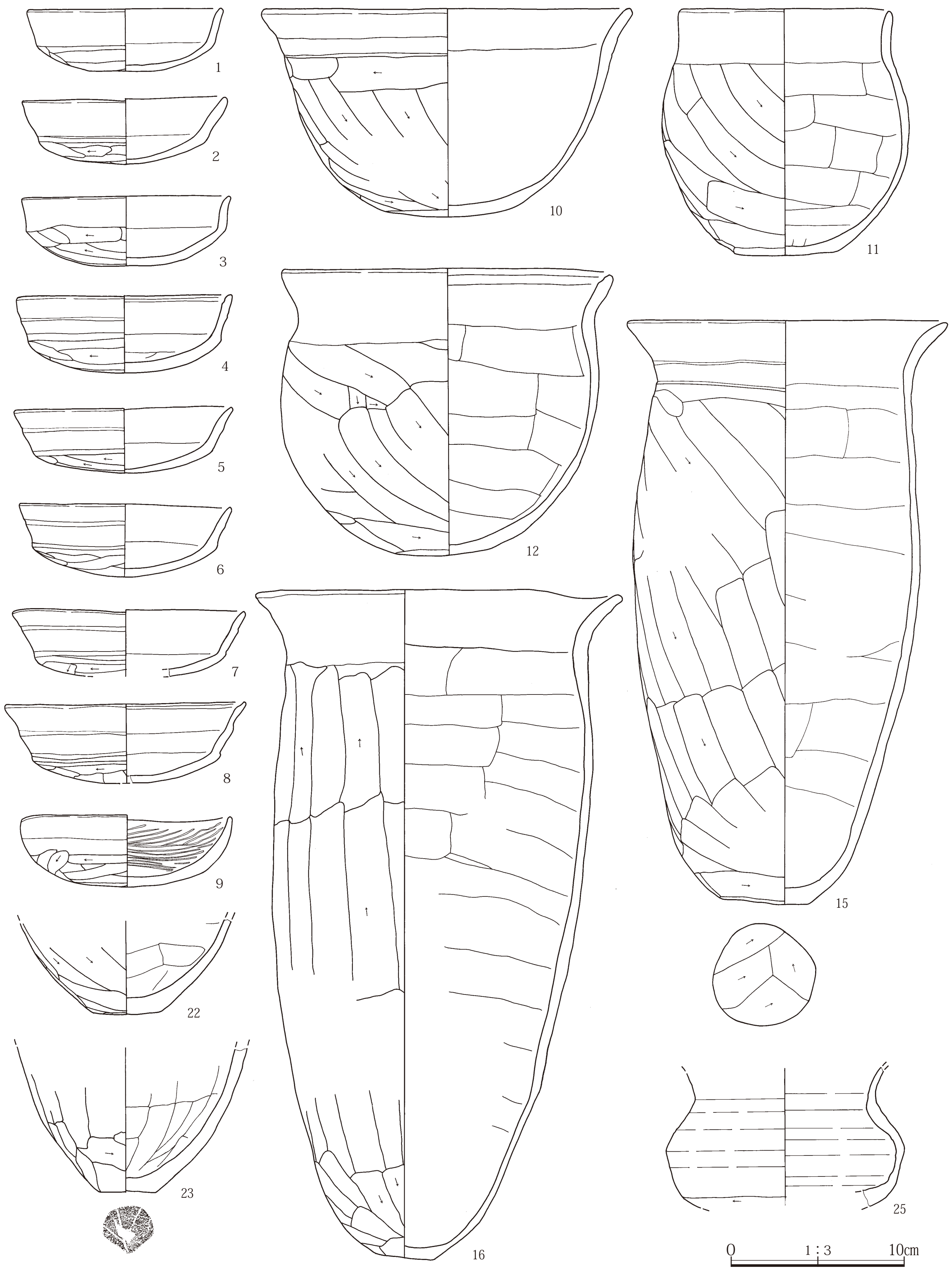


1　暗褐色土　焼土粒多量に含む
2　暗褐色土　ローム粒・塊多量に含む　袖または天井の崩れか
3　暗褐色土　ローム塊を含む
4　暗褐色土　焼土粒・塊を含む
5　暗褐色土　ローム小塊少量　炭化物多量　焼土粒を含む
6　暗褐色土　ローム小塊　焼土粒少量　炭化物を含む
7　暗褐色土　ローム塊多量　焼土粒少量含む
8　暗褐色土　ローム塊多量に含む
9　暗褐色土　ローム塊主体

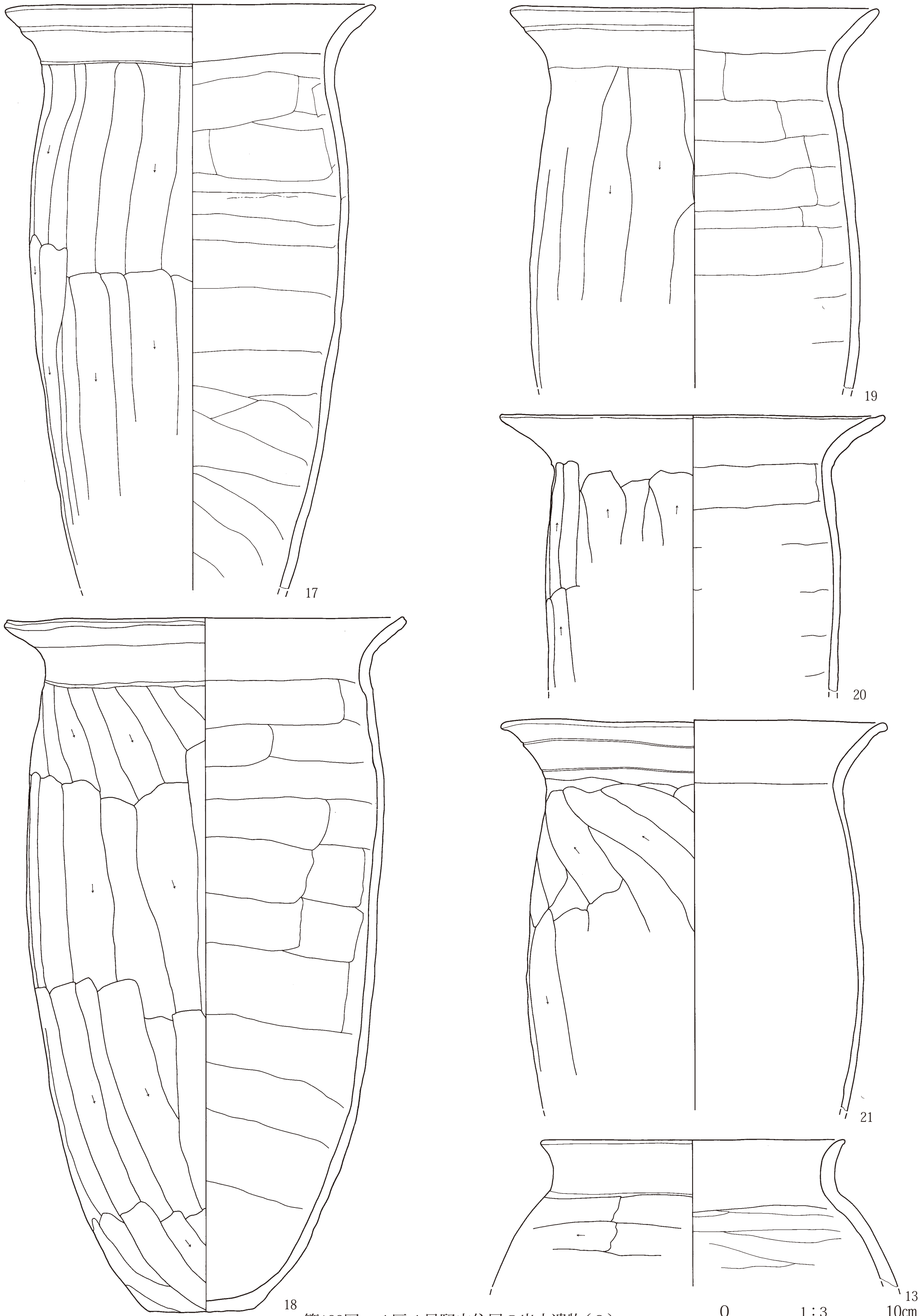
４・５号竪穴住居掘り方遺物出土状態



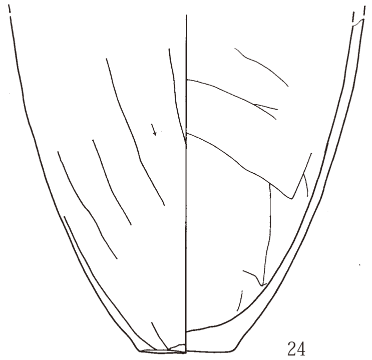
第186図　４区４号竪穴住居竈と４・５号竪穴住居掘り方ないし構築以前の土坑群遺物出土状況



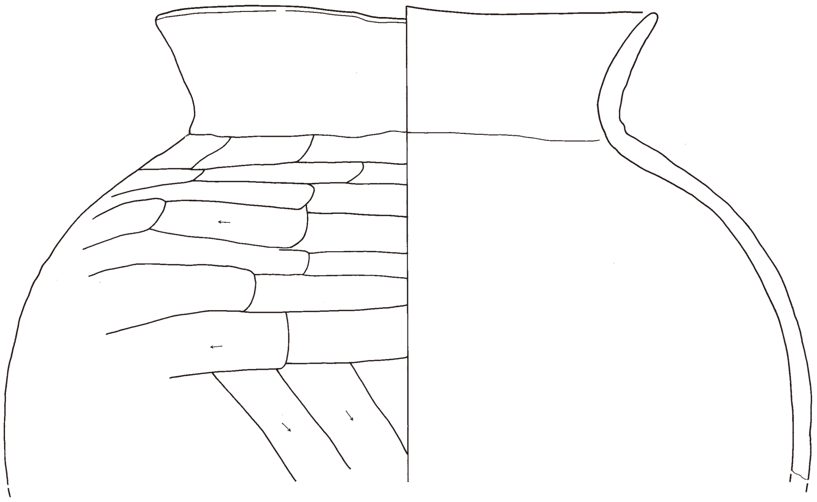
第187図　４区４号竪穴住居の出土遺物（１）



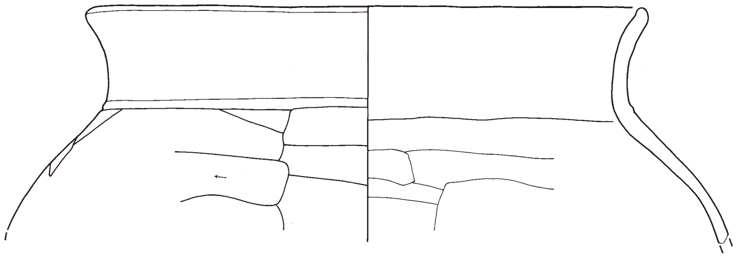
第188図　４区４号竪穴住居の出土遺物（２）



24



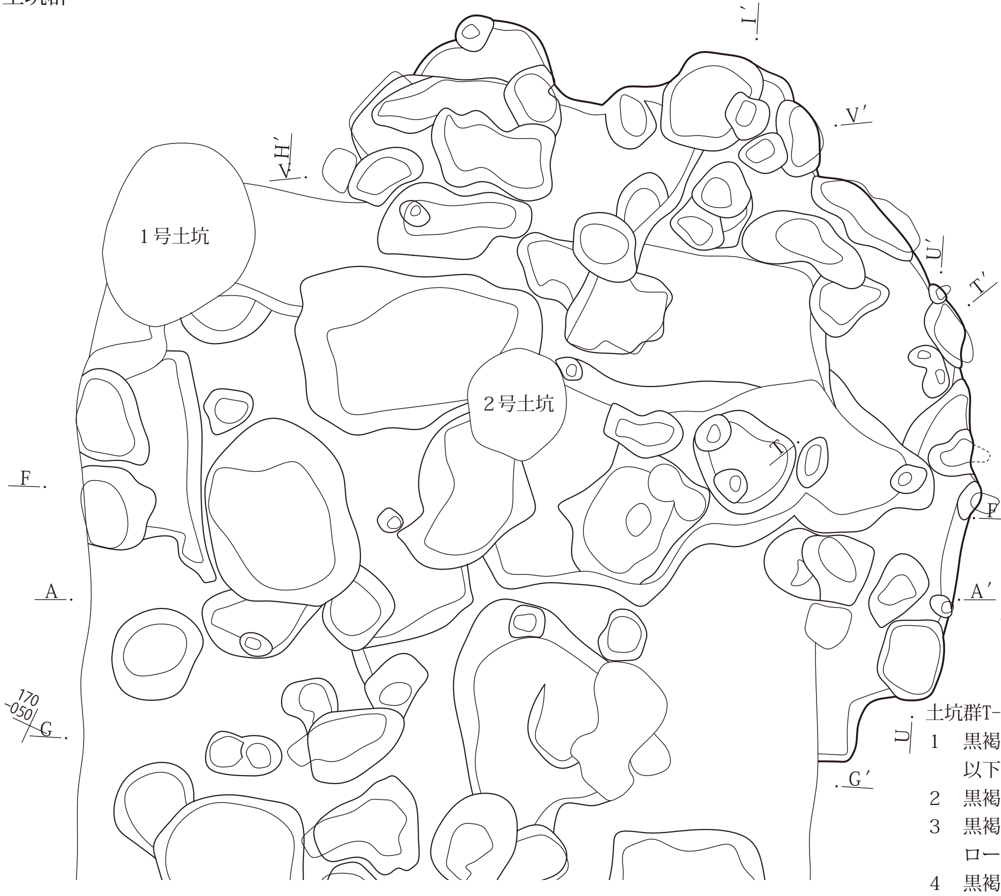
14

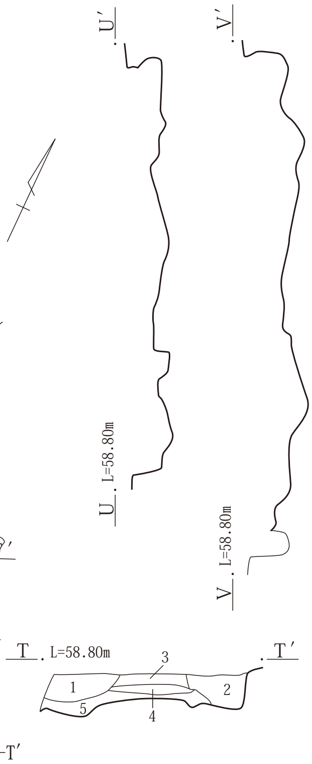


５住−１

0　1：3　10cm

４・５号竪穴住居掘り方
土坑群

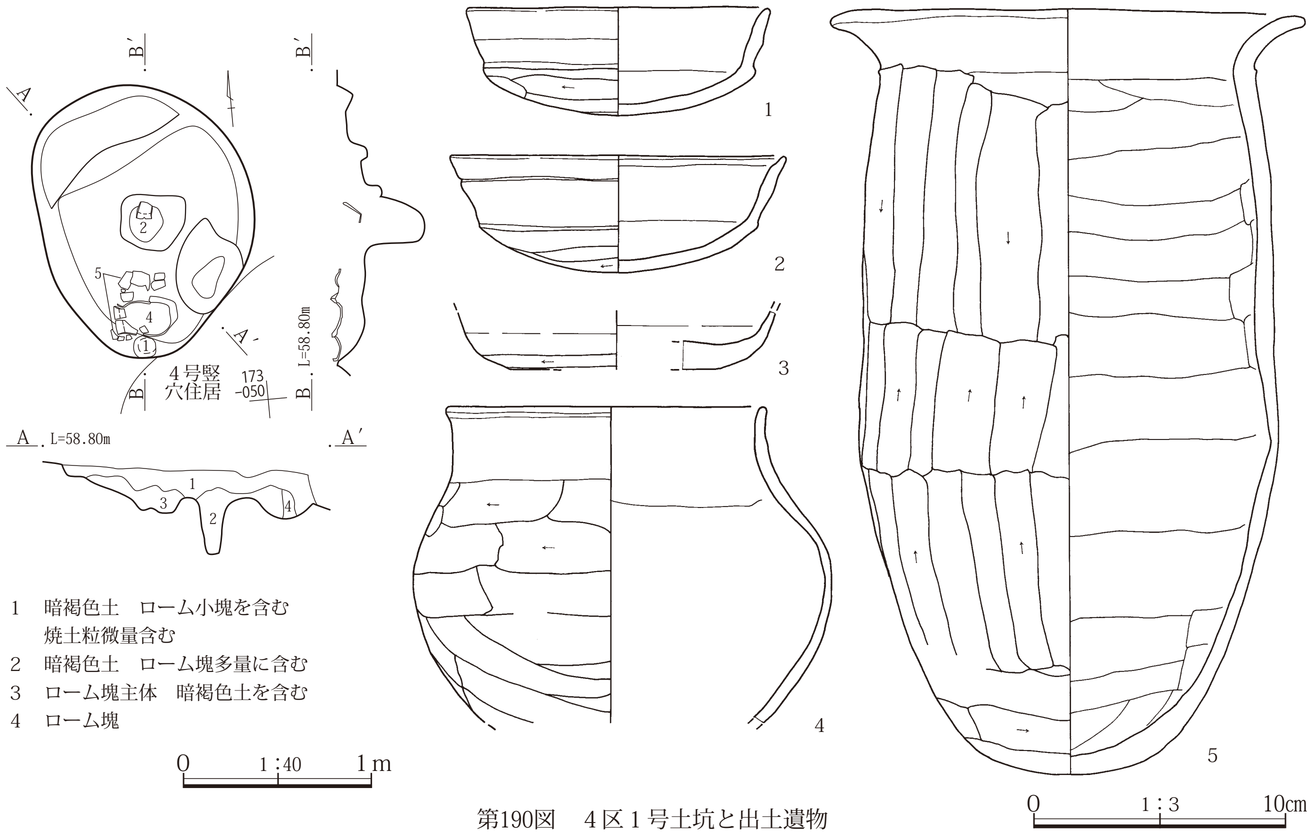




土坑群T−T′
1　黒褐色土　褐色土中粒１％　白色粒１％以下含む
2　黒褐色土　ローム中粒・大塊５％含む
3　黒褐色土　１、２層より暗色味少ない　ローム中粒・小塊１％　白色粒１％含む
4　黒褐色土　　ローム大塊１％含む　やや固く締る
5　灰黄色土　ローム主体　黒褐色土を含む　やや締る

0　1：60　2m

第189図　４区４・５号竪穴住居の出土遺物と４・５号竪穴住居掘り方ないし構築以前の土坑群



第190図　４区１号土坑と出土遺物

定したが記述がないものは時期不明とした。以下は遺物が伴うもの、形状や埋没土に一定の特徴が認められるもについて取り上げる。埋没状況については文中に記し、記述がないものについては自然埋没土と考える。すべてのピットは第34表(201頁)において記す。

１号土坑(第190図　PL.28)

底面に小ピット状の掘り込みが認められる。埋没土はローム塊を多量に含む暗褐色土であり、上層に含む焼土粒は隣接する竪穴住居竈からの混入であり、人為的埋没土と考えられる。出土遺物は埋没土から杯、甕(第190図１～５)である。非掲載遺物は土師器大破片395ｇ、土師器小破片90ｇが出土する。遺構検出状況や埋没土から時期は７世紀前半と考えられる。

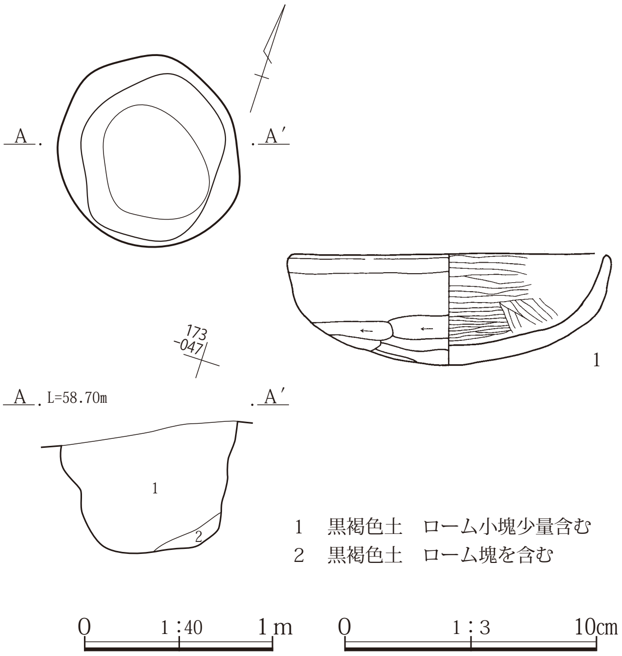
２号土坑(第191図　PL.28)

ローム塊を含む黒褐色土による人為的埋没土である。埋没土から坏(第191図１)、土師器片195ｇが出土する。出土遺物から時期は古墳時代後期と考えられる。

15号ピット(第192図　PL.42)

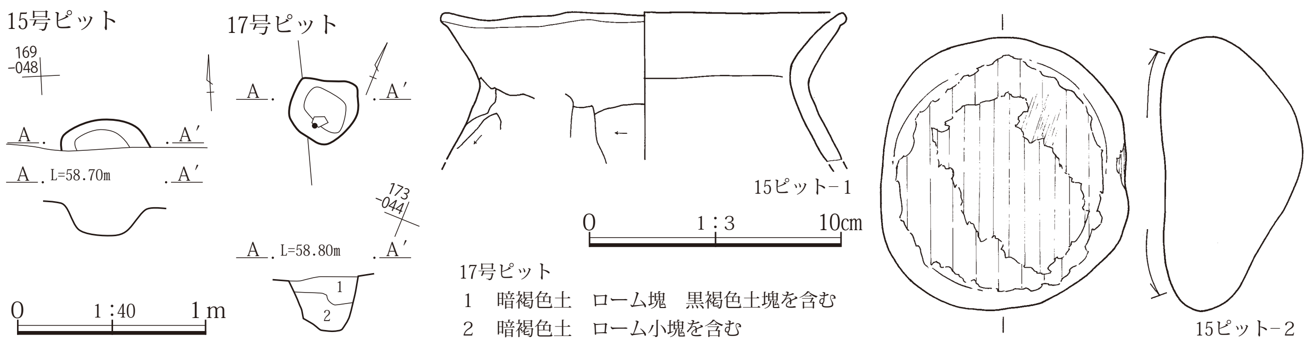
遺物は埋没土から甕、砥石(第192図15ピット- １・２)、土師器大破片215gが出土する。出土遺物から時期は古墳時代後期と考えられる。

17号ピット(第192図)



第191図　４区２号土坑と出土遺物

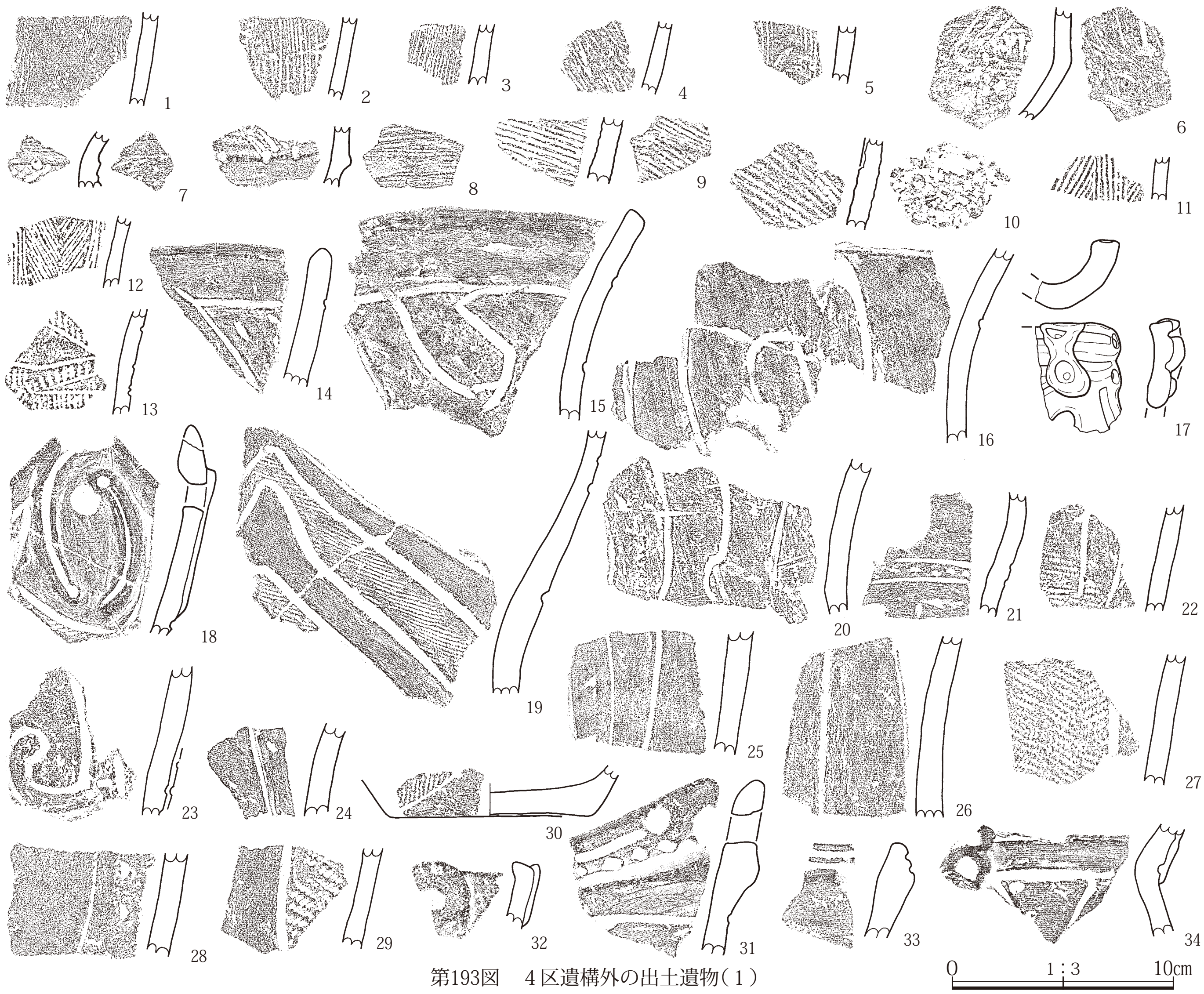
４号竪穴住居と重複し17号ピットが４号竪穴住居埋没土を切る。ローム塊を含む黒褐色土及び暗褐色土による自然埋没と考えらえる。出土遺物から時期は６世紀後半から７世紀前半以降と考えられる。



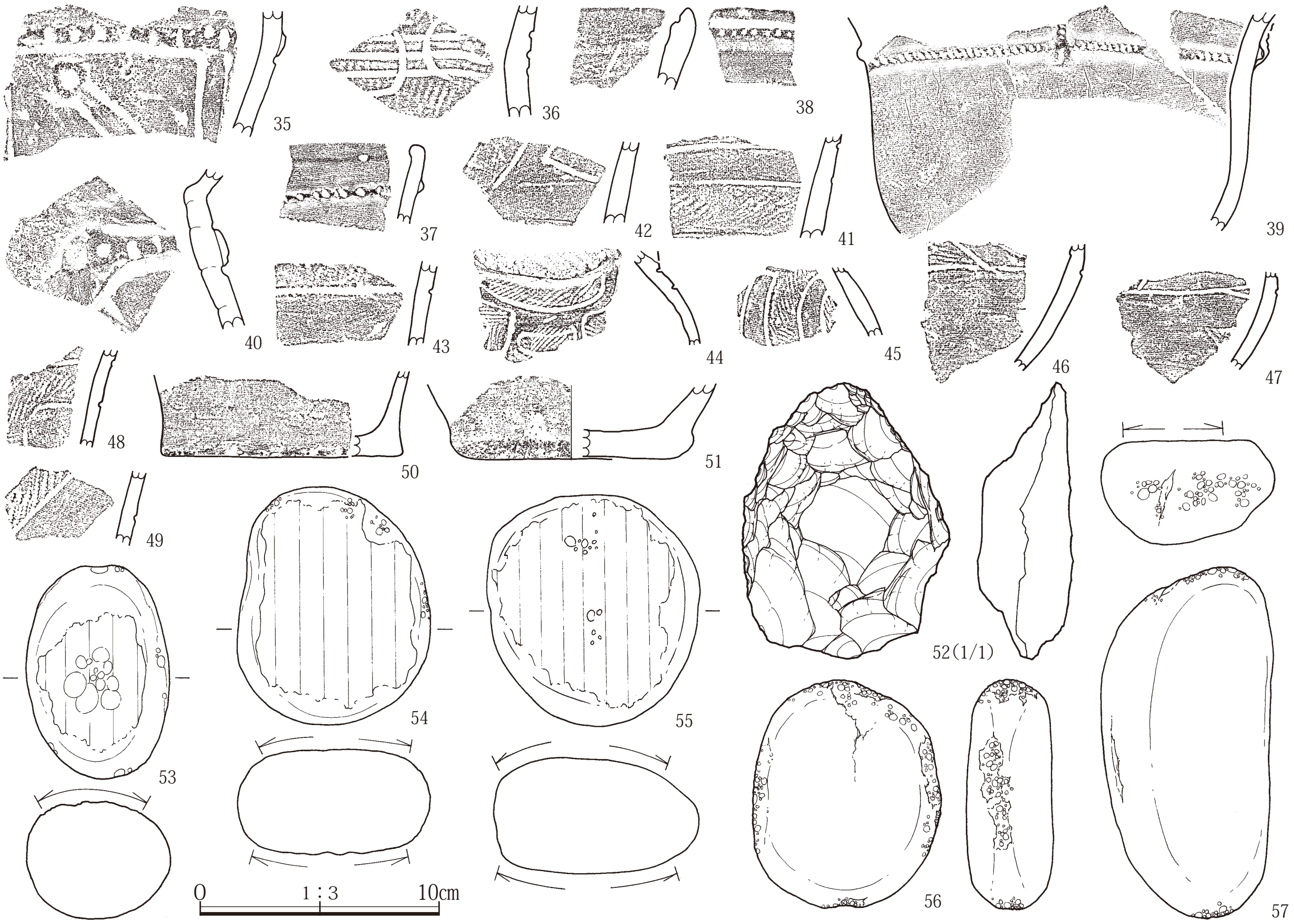
第192図　４区15・17号ピットと15号ピットの出土遺物

３　遺構外の遺物（第193・194図　PL.42・43）

４区の遺構外出土遺物は、時代別には縄文時代の土器は撚糸文系、野島式、鵜ヶ島台式、条痕文系、諸磯ｃ式、興津式、称名寺式、堀之内１式、堀之内２式、後期前葉（第193・194図１～51）である。非掲載遺物を含めると土器は早期、前期、後期の239点を数え94％が後期に属する。石器は包含層から石鏃、凹石、磨石、敲石（第194図52～57）、剥片の総重量はホルンフェルス355.9ｇ、黒曜石6.0ｇ、チャート110ｇ、黒色頁岩95.6ｇ、珪質頁岩21.8ｇ、細粒輝石安山岩38.0ｇ、粗粒輝石安山岩12.7ｇである。古墳時代から奈良、平安時代の非掲載遺物は土師器大破片1,590ｇ、土師器小破片10g、須恵器大破片片140ｇが出土している。



第193図　４区遺構外の出土遺物（１）



第194図　４区遺構外の出土遺物（２）

第６節　５区の調査成果

５区東半部は、中世以降の時期に削平されており、現表土を約40㎝掘削すると地山となる。そのため基本土層第Ⅰb層の下層において遺構確認を行っている。５区西半部は、谷地であり地山までは1.7ｍであり、表土から80㎝ほど掘り下げた時点で湧水が認められた。５区で検出した遺構は、古墳時代の竪穴住居、中世から近世の掘立柱建物・土坑・ピット・井戸・溝である。

１　古墳時代以降の遺構と遺物

検出した遺構は、竪穴住居１軒、掘立柱建物１棟、土坑15基、ピット33基、井戸２基、溝３条である。

（１）竪穴住居

竪穴住居は、調査区南側で検出した１軒である。後世の削平を受けているため、遺構の残存状態は不良である。

１号竪穴住居（第196図　PL.29）

位置　Ｘ＝175 〜 177、Ｙ＝−060 〜 064

形状・規模　形状は、方形で規模は東西2.74ｍ、南北2.62ｍ、壁高は10 〜 19㎝であり、床面積は6.91㎡である。

重複　10号土坑と重複。本遺構が古い。

主軸方向　Ｎ－82°－Ｅ

埋没土　黄褐色土を含む灰黄褐色土主体で埋没しているが、自然か人為的埋没かは不明である。

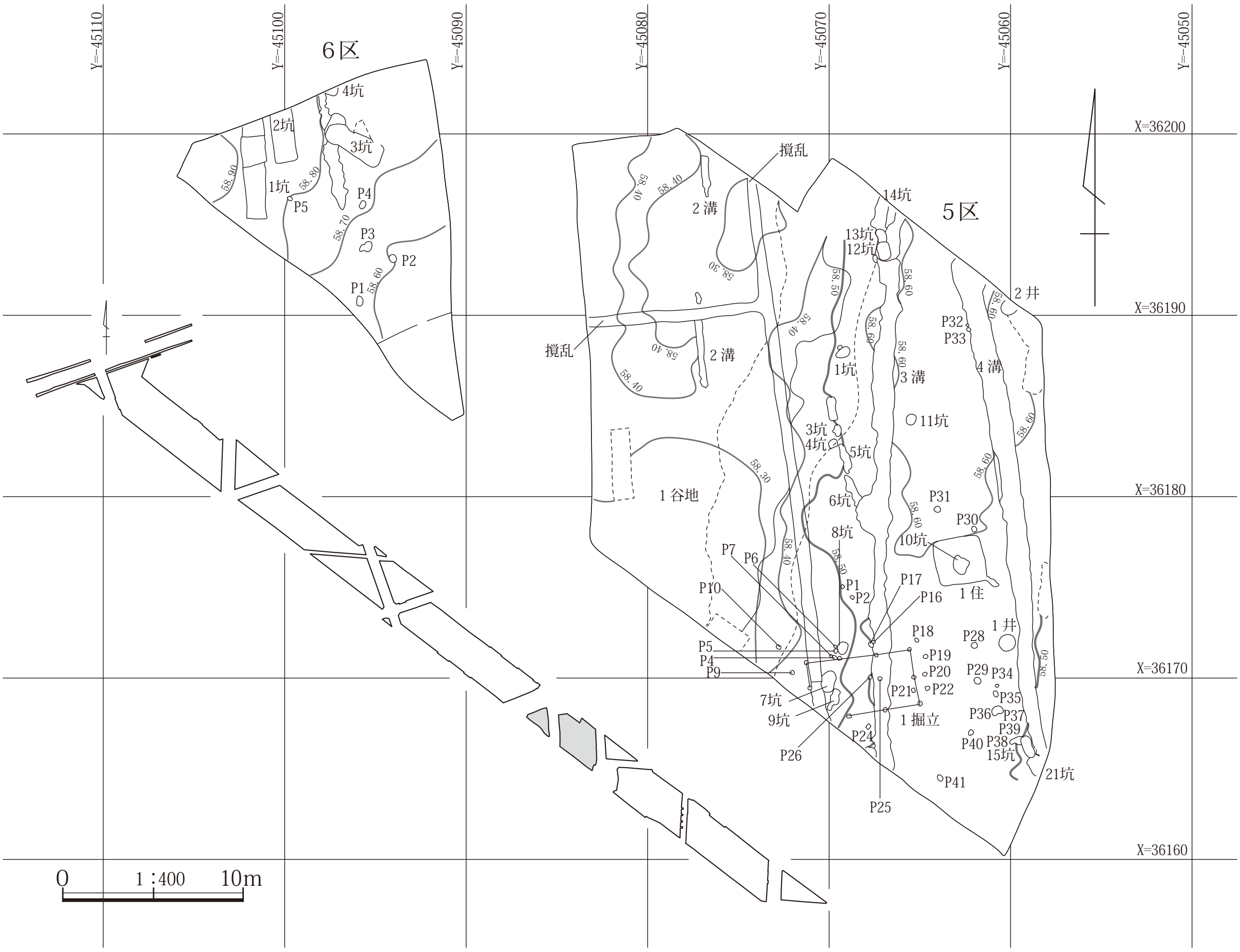
床面　平坦であり、使用による硬化面は不明瞭である。

竈　住居西壁の南東コーナー部に付設されている。規模は、両袖幅87㎝、右袖長40㎝、左袖長35㎝、焚口幅64㎝、煙道長140㎝である。燃焼部は、屋内側に張り出している。使用面に焼土粒及び灰が残存し、焚口周辺に浅い掘り方が認められる。

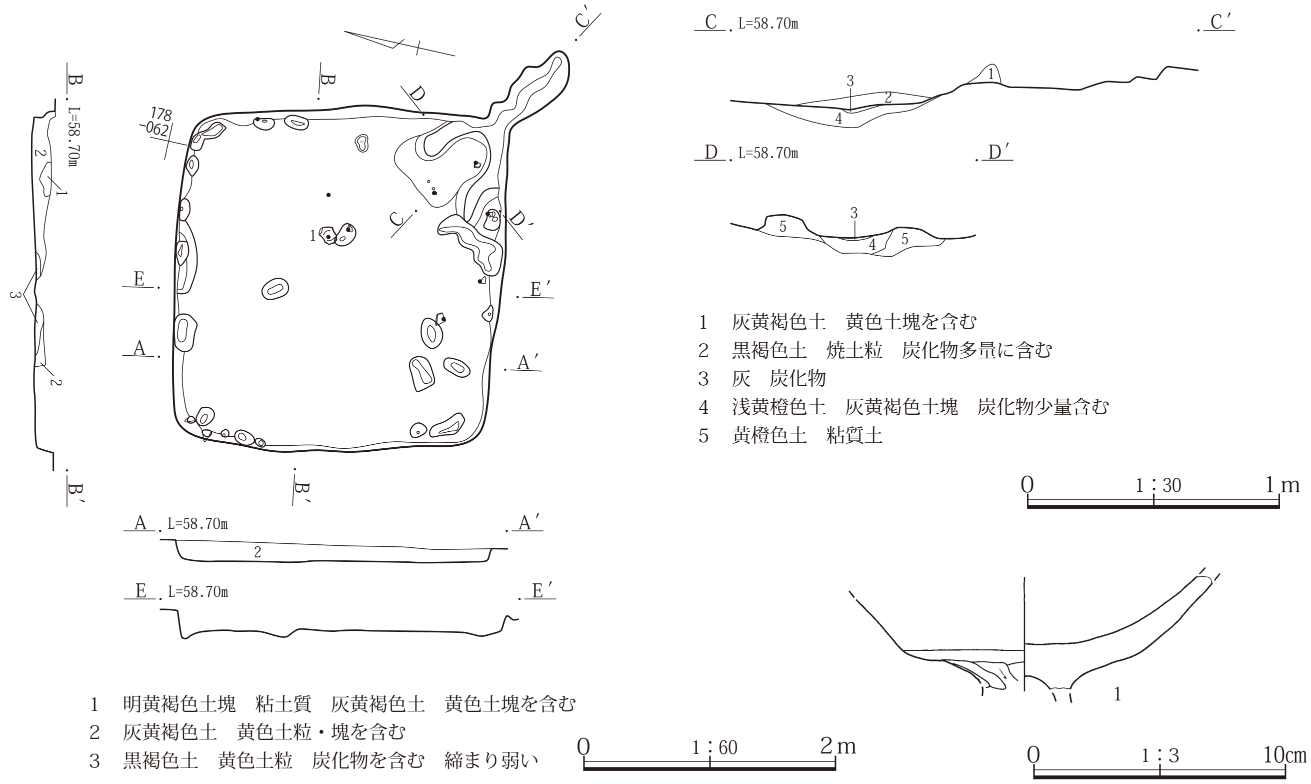
貯蔵穴・周溝・柱穴　床面精査でも検出できなかった。

遺物出土状態　埋没土から土師器高杯が１点（第196図１）出土した他、非掲載遺物であるが土師器大破片150ｇ、須恵器大破片10ｇが出土している。

所見　時期は、竈の設置位置には違和感があるが、出土遺物から５世紀後半と考えられる。



第195図　上根遺跡　５・６区全体図



第196図　５区１号竪穴住居と出土遺物

（2）掘立柱建物

５区では１棟の掘立柱建物を検出した。周辺からピット・井戸・溝などを検出しており、関連が想定される。

１号掘立柱建物（第197図　PL.29）

位置　X＝167 ～ 171、Y＝－064 ～ 071

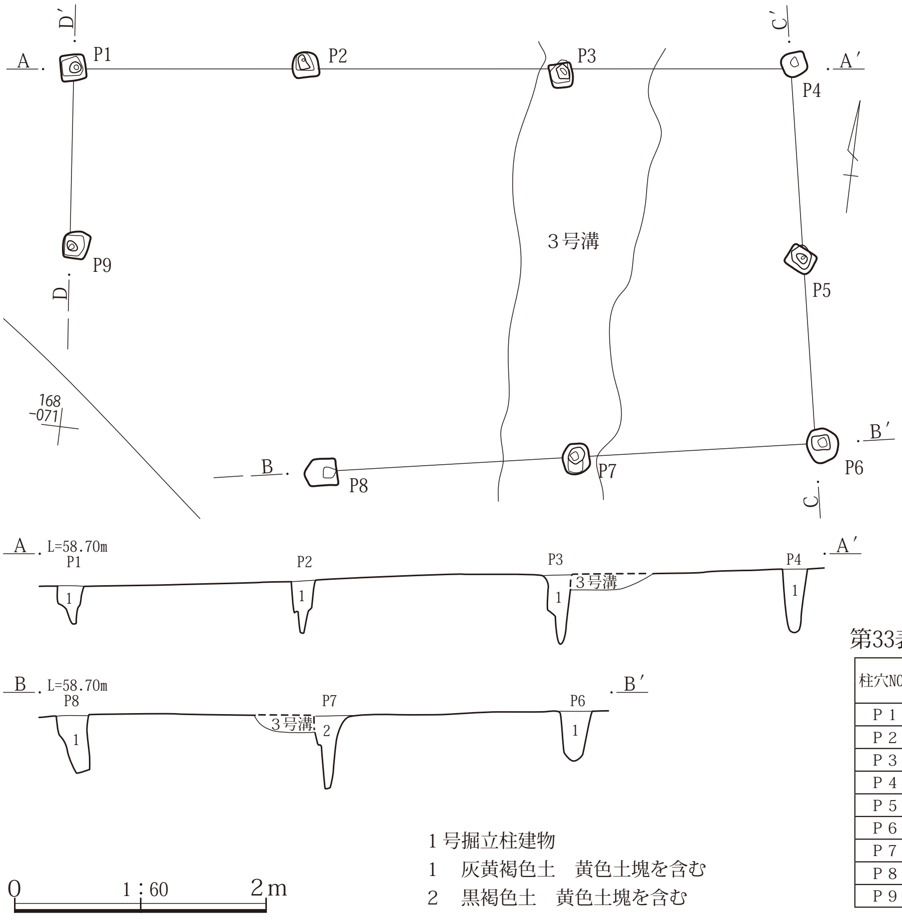
重複　３号溝と重複し埋没土の確認状況から１号掘立柱建物が新しい。

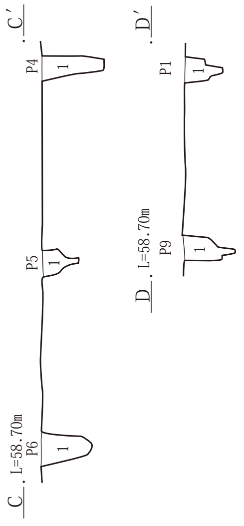
主軸方向　N－84°－E

規模・形態　南西隅の柱穴は調査区外であるため未検出であるが、桁行３間、梁行２間の東西棟の側柱建物と考えられ、桁行5.73m、梁行2.99mである。柱穴の規模は30 ～ 20㎝の円形や楕円形で、柱痕は確認できなかった。柱間寸法は、第33表のとおりであるが、桁行は６尺＋７尺＋約６尺、梁行は５尺で、桁行の中間がやや開いている。

出土遺物　なし。

所見　時期は、建物規模などから中世以降と考えられる。





第33表　上根遺跡５区１号掘立柱建物計測表

柱穴NO.	規模(cm)			形状	柱間の寸法(m)
	長径	短径	深さ		
P 1	30	24	30	円形	P1-P2 1.86
P 2	25	24	40	円形	P2-P3 2.02
P 3	25	26	58	円形	P3-P4 1.85
P 4	20	36	52	楕円形	P4-P5 1.53
P 5	26	23	30	円形	P5-P6 1.46
P 6	28	18	50	楕円形	P6-P7 1.92
P 7	25	22	55	円形	P7-P8 2.04
P 8	25	20	45	不定形	－
P 9	25	20	40	不定形	P9-P1 1.40

第197図　５区１号掘立柱建物

（3）土坑・ピット

５区で検出した土坑は16基、ピットは33基である。遺構に伴う遺物出土が少なく、詳細な時期確定をすることができないため、埋没土の状況をもとに判断したが記述がないものは時期不明とした。以下には、遺物が伴うものや、形状などに特徴があるもについて取り上げた。埋没状況について判断のできたものについては、本文中に記載した。ピットは計測値などについて第34表に記載した。

２号土坑（第198図）

土層断面観察で埋没状況は判断できなかった。埋没土中から古墳時代の土師器片が出土しており、時期は古墳時代以降と考えられる。

３号土坑（第195図）

土層観察で埋没状況は判断できなかった。埋没土中から古墳時代の土師器片が出土していることから、時期は古墳時代以降の可能性が高い。

５号土坑（第198図）

埋没土は、黄褐色土塊や白色軽石を含む黒褐色土主体であるが、埋没状況についての判断はできなかった。埋没土中から土師器片と須恵器片が出土しており、時期は古代以降と考えられる。

６号土坑（第199図）

３号溝と重複し、埋没土の確認状況から６号土坑が古い。埋没土は、黄褐色土塊や白色軽石を含む黒褐色土を主体としているが、埋没状況は判断できなかった。埋没土中から土師器片と須恵器片が出土しており、時期は古代以降と考えられる。

７号土坑（第199図）

にぶい黄褐色土塊を含む黒褐色土で埋没しており、堆積状況から人為的埋没と考えられる。埋没土中から土師器片と須恵器片が出土しており、時期は古代以降と考えられる。

８号土坑（第199図）

黄色土塊を含む黒褐色土で埋没しているが、埋没状況は判断できなかった。埋没土中から土師器片が出土しており、時期は古墳時代以降と考えられる。

９号土坑（第199図）

黄褐色土塊や白色軽石を含む黒褐色土で埋没しており、土層断面観察から自然埋没と判断した。埋没土中から土師器片が出土しており、時期は古墳時代以降と考えられる。

10号土坑（第199図　PL.29）

１号竪穴住居中央部から検出され、検出状況から10号土坑が新しい。底部付近に焼土粒・塊及び炭化材が残存していたが、被熱は認められなかった。灰黄褐色土で埋没しており、土層の状況から人為的埋没と考えられる。埋没土中から６世紀代の土師器坏が出土しており、時期は古墳時代後期以降と考えられる。

12号土坑（第199図　PL.29）

３号溝、13号土坑と重複しており、両遺構よりも12号土坑が新しい。埋没土中から土師器と須恵器片が出土しており、時期は出土遺物から古代以降と考えられる。

13号土坑（第199図）

３号溝、12号土坑と重複しており、検出状況などから３号溝より新しく、12号溝より古いと考えられる。埋没土中から土師器片が出土しており、時期は出土遺物から古代以降と考えられる。

14号土坑（第199図）

３号溝と重複しており、埋没土の確認状況から３号溝が新しい。埋没土中から土師器片が出土しており、時期は出土遺物から古墳時代以降と考えられる。

15号土坑（第199図）

21号土坑、39号ピットと重複し、確認状況から15号土坑が新しい。遺物は、９世紀代の平瓦片（第199図15坑−１）が出土しており、時期は出土遺物から９世紀代以降と考えられる。

21号土坑（第199図　PL.30）

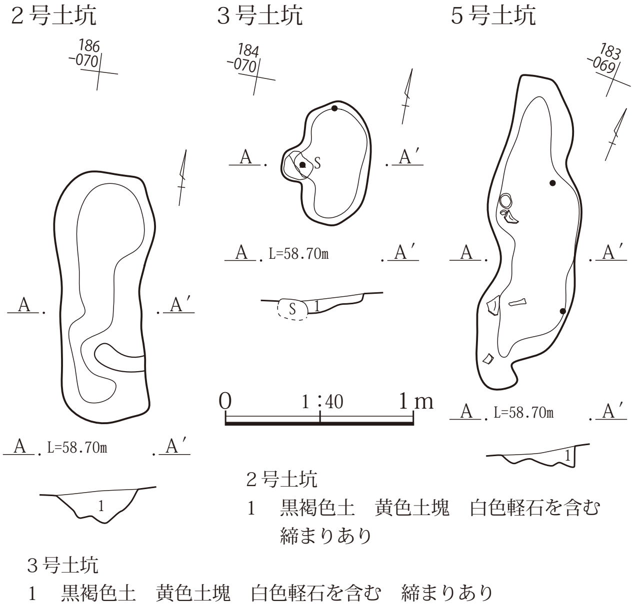
４号溝、15号土坑と重複しており、検出状況から４号溝、15号土坑が新しい。黄色土塊を多量に含む灰黄褐色土で埋没しており、堆積状況から人為的埋没と考えられる。埋没土中から８世紀代の須恵器片が出土しており、時期は出土遺物から８世紀代以降と考えられる。

30号ピット（第199図）

黄色土塊と灰黄褐色土の混土で埋没しており、柱痕が認められることから、柱穴と見られるが対応する柱穴は不明である。出土遺物がなく、時期の確定はできなかった。

39号ピット（第199図）

15号土坑、38号ピットと重複し、埋没土の確認状況から15号土坑より古く、38号ピットとの新旧関係は不明である。出土遺物はないが、15号土坑との重複関係から古代以前の可能性がある。

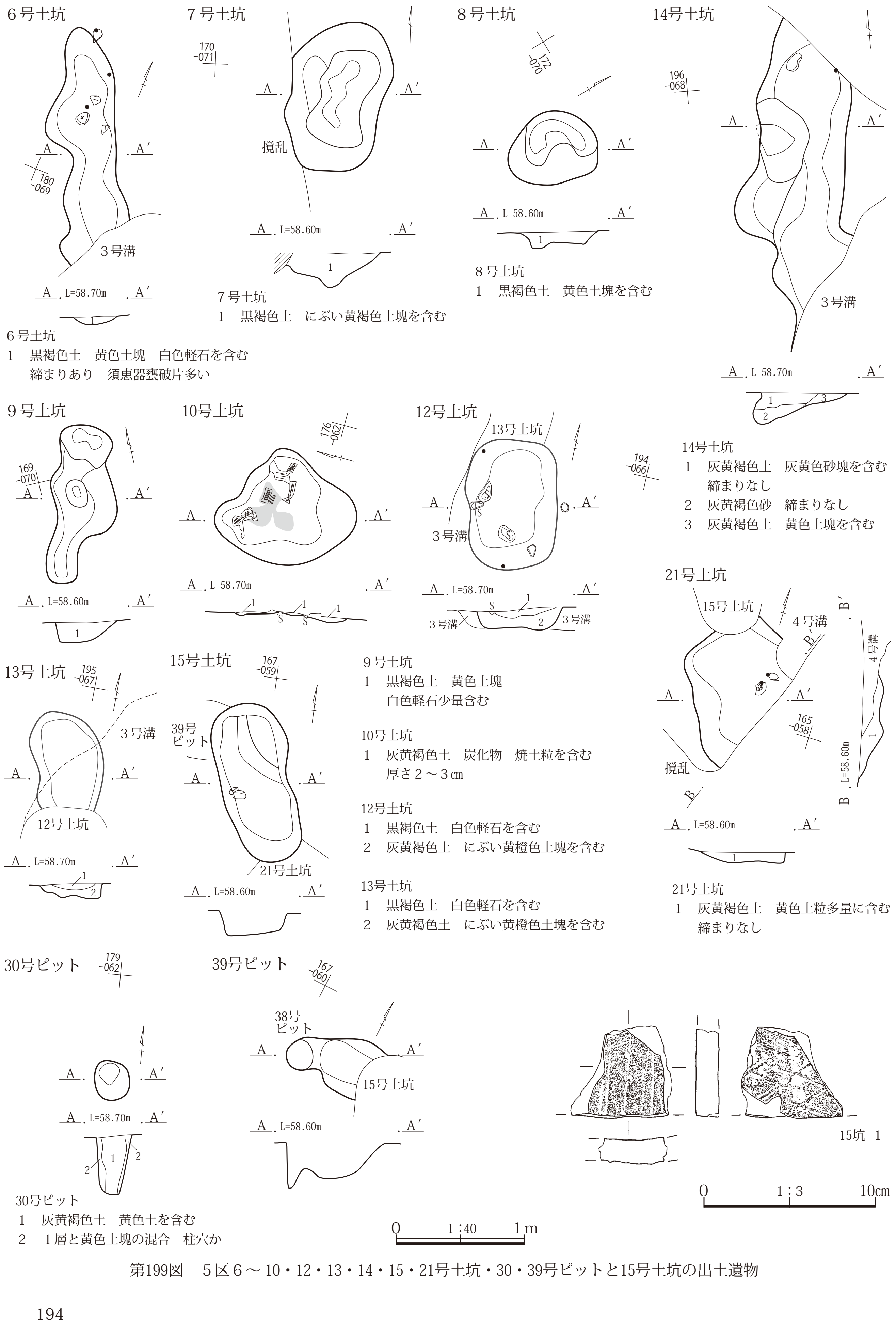


２号土坑
1　黒褐色土　黄色土塊　白色軽石を含む　締まりあり

３号土坑
1　黒褐色土　黄色土塊　白色軽石を含む　締まりあり

５号土坑
1　黒褐色土　黄色土塊　白色軽石を含む　締まりあり

第198図　５区２・３・５号土坑



第199図　５区６～10・12・13・14・15・21号土坑・30・39号ピットと15号土坑の出土遺物

（4）井戸

５区で検出した井戸は２基である。16号土坑を１号井戸、19号土坑を２号井戸に名称変更した。

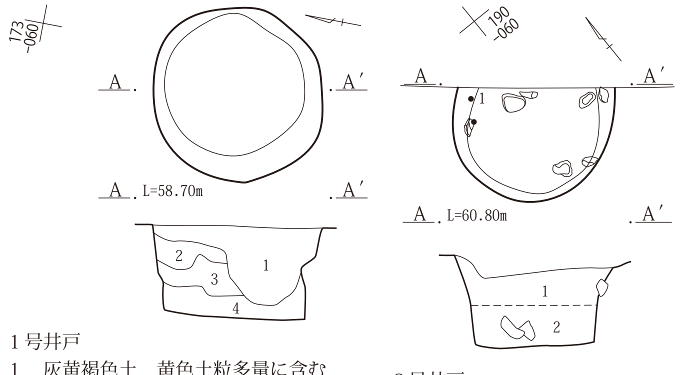
１号井戸（第200図）

X＝171、Y＝－059に位置し、重複する遺構はない。平面は円形で、規模は径0.93m、深さ51㎝である。底面から開口部にかけて壁はほぼ垂直に立ち上がっており、確認面から49㎝ほど下の層からの湧水が見られた。灰黄褐色土と黄褐色土塊の混土で埋没しており、堆積状況から人為的埋没と考えられる。非掲載遺物は土師器大破片片10ｇ、須恵器大破片110ｇが出土しており、出土遺物から時期は古代以降と考えられる。

２号井戸（第200図　PL.29）

X＝198、Y＝－059～060に位置する。重複する遺構はない。北側が調査区外となるため2/3ほどの検出であるが、平面は円形と考えられる。規模は、径83㎝、深さ50㎝である。確認面から49㎝ほど下の層からの湧水が認められた。小礫及び黄色土塊を含む灰黄褐色土で埋没しており、堆積状況から人為的埋没と考えられる。埋没土中から14世紀代の在地系片口鉢（第200図２井戸－１）が出土した他、非掲載遺物の土師器大破片65ｇが出土しているが混入であろう。時期は、出土遺物から中世以降と考えられる。

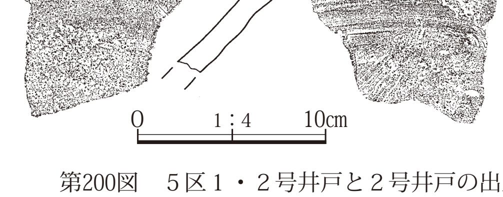
１号井戸　　２号井戸



１号井戸
1　灰黄褐色土　黄色土粒多量に含む
　締まりなし
2　１層と黄色土大塊の混土
3　灰黄褐色土
4　灰黄褐色土と黄色土塊の混合　締まりなし

２号井戸
1　灰黄褐色土　黄色土塊を含む
2　灰黄褐色土

0　1：40　1ｍ



２井－１

第200図　５区１・２号井戸と２号井戸の出土遺物

（5）溝・谷地

５区で検出した溝は３条である。１号溝は現代の排水溝と判断したため取り上げなかった。調査区西側から谷地が検出され、周辺の地形や規模から５区北側の天良七堂遺跡２・３区から検出された谷地へ連続するものと考えられる。

２号溝（第201図）

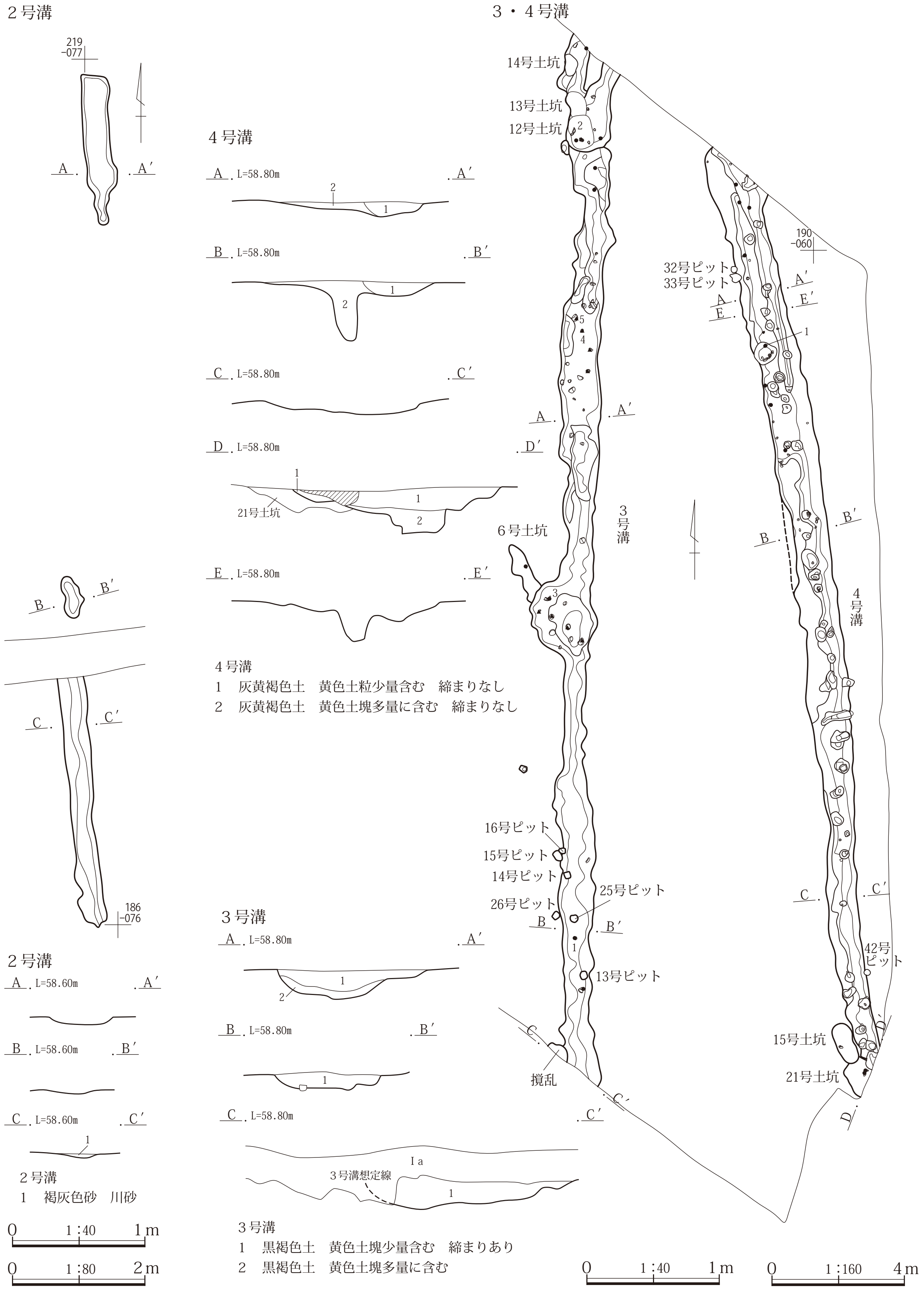
X＝186～198、Y＝－076～077に位置する。重複する遺構はない。南から北にほぼ一直線に走行し、底面の標高は南側58.38m、北側58.35mであり、底面はほぼ平坦である。検出した規模は、長さ12.80m、上面幅14～45㎝、深さ１～５㎝である。後世の削平で中央部の一部を遺失している。褐灰色砂で埋没しており、下層に水流の痕跡が認められることから、水路の可能性が高い。出土遺物がなく時期を確定することができないが、埋没土の様相から近世以降の可能性が高い。

３号溝（第201・202図　PL.30・43）

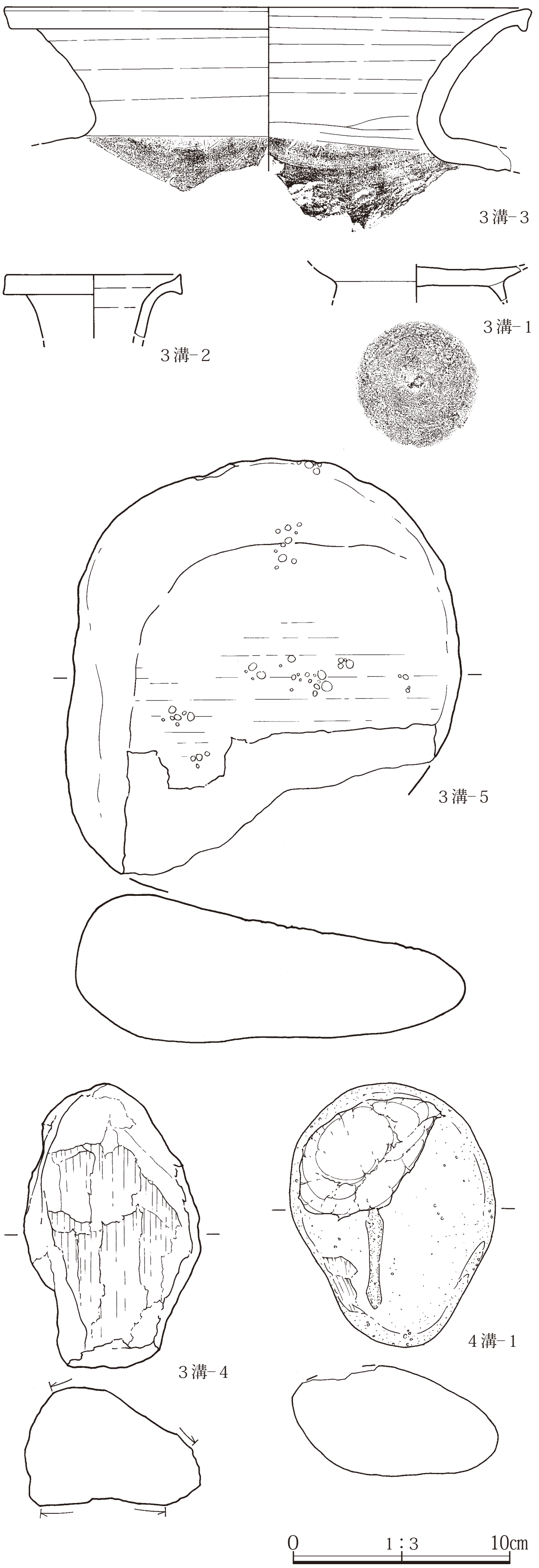
X＝165～196、Y＝－065～068に位置する。６・12・13・14号土坑、及び１号掘立柱建物と重複しており、埋没土の確認状況から、12・13号土坑、１号掘立柱建物より古く６・14号土坑より新しい。北から南に走行し、底面の標高は北端58.51m、南端58.35m、比高16㎝で、底面の傾斜はほとんど認められない。検出した規模は、長さ31.50m、上面幅0.48～2.00m、深さ７～23㎝である。黄色土塊を含む黒褐色土で埋没していたが、水流の痕跡は下層においても認められず、埋没状況の判断はできなかった。底面付近から須恵器杯・瓶・甕など（第202図３溝１～５）が出土している他、非掲載遺物では土師器大破片470ｇ、須恵器大破片520ｇが出土した。時期は、出土遺物から古代以降と考えられる。

４号溝（第201・202図　PL.30・43）

X＝165～193、Y＝－058～063に位置している。21号土坑、32・33号ピットと重複し、21号土坑より新しく、32・33号ピットより古いと考えられる。北西から緩やかに曲がり南に走行しており、底面標高は北西端58.56m、南端58.30m、比高26㎝で、底面にわずかに傾斜が認められるが、下層にも水流の痕跡は見られないことから区画溝の可能性が高い。検出した規模は、長さ27.40m、上面幅0.58～1.60m、深さ７～18㎝である。底面にピット状の窪みが多数認められる特徴があり、北端部の東壁寄りに長さ7.00m、幅約50㎝の掘り直しの痕跡がある。



第201図　5区2・3・4号溝



第202図　５区３・４号溝出土遺物

黄色土塊を含む灰褐色土で埋没しており、埋没状況は判断できなかった。自然堆積か人為か不明。底面付近から砥石と思われる円礫(第202図４溝- １)が出土した他、非掲載遺物であるが土師器大破片220ｇ、土師器小破片10ｇ、須恵器大破片510g、須恵器小破片10g、が出土しているが、遺物から時期を確定することはできなかった。

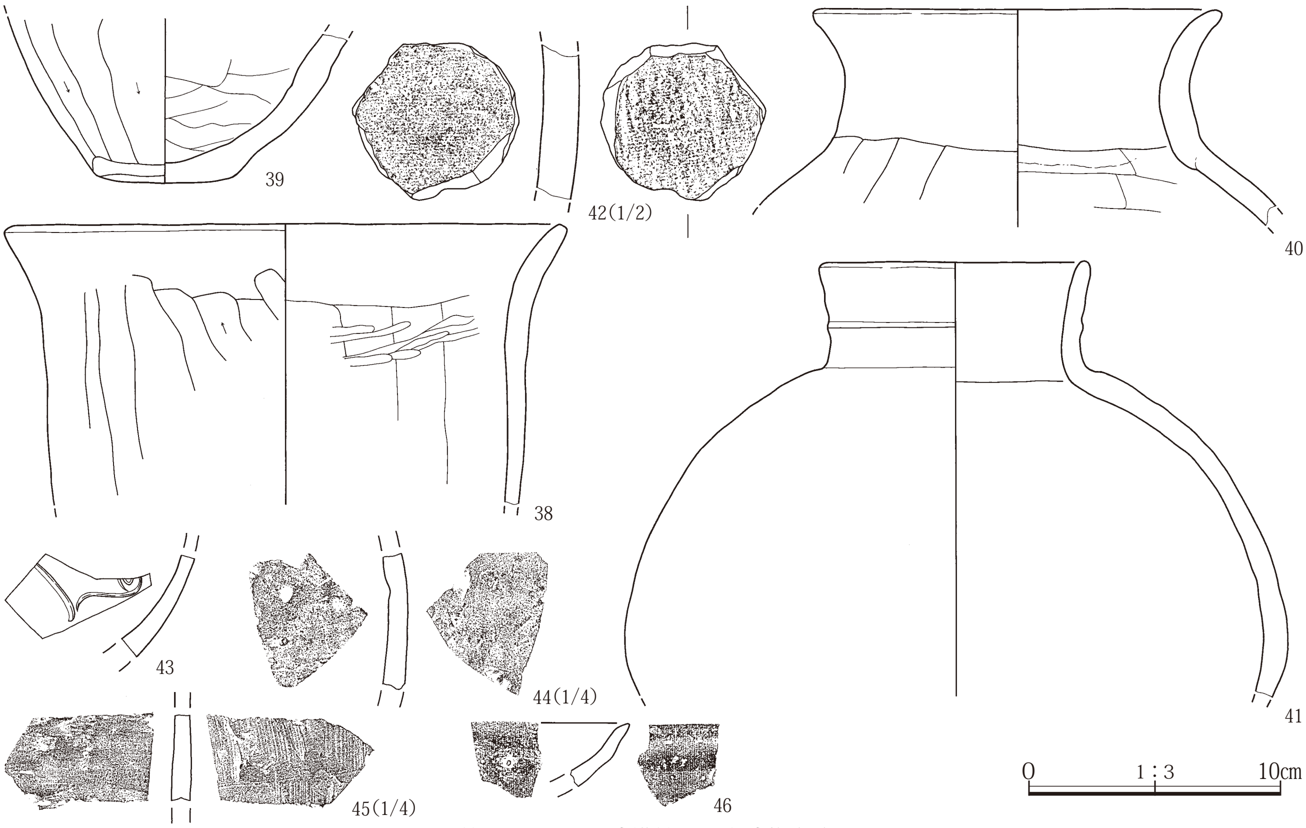
１号谷地(第195図　PL.30)

X＝170 〜 180、Y＝−070 〜 080に位置している。４・12・13号土坑、２・３号溝と重複し、埋没土の確認状況から１号谷地が古い。検出した規模は、長さ27.00m、幅14.80mであり、1.70mほど掘り下げると地山となる。表土下80cmほどで湧水があり、底面まで掘り下げることはできなかった。表土下に堆積していた土層は、黄色土塊を含む黒褐色土であり、下層にAs-B混土層が認められ、西側に向かいAs-Bが厚く堆積していることから、自然埋没と考えられる。遺物は古墳時代後期の土師器大破片2,815g、土師器小片570g、須恵器大破片220ｇ、須恵器小破片60ｇが出土している。北側に位置する天良七堂遺跡２区及び３区から蛇行して南下する谷地が検出されており、１号谷地に繋がると考えられ、古代には谷として存在していたものと考えられる。

２　遺構外の遺物(第203・204図　PL.43・44)

５区でも遺構に伴わない遺物が多数出土した。縄文時代の遺物では、撚糸文系、鵜ヶ島台式、条痕文系、諸磯ｂ式、興津式、加曽利Ｅ４式、称名寺式、堀之内１式などの土器片をはじめ、土製円盤(第203図27)が出土した。非掲載遺物を含めると早期から後期の土器は639点で、96％が後期に属するものであった。石器は、打製石斧、石錐、石核、凹石、多孔石(第203図28 〜 32)が出土しており、剥片の総重量は黒色安山岩37.1ｇ、黒色頁岩117.0ｇ、チャート116.6ｇ、ホルンフェルス10.6ｇ、珪質頁岩116.9ｇである。以上のように縄文時代の遺物出土が多く、周辺に縄文時代の遺構が存在している可能性が高い。古墳時代から古代の遺物では、土師器杯、高杯、坩、甑、甕、壺、(第203・204図33 〜 42)などが出土しており、非掲載遺物では土師器大破片2,090ｇ、土師器小破片65ｇ、須恵器大破片865ｇ、須恵器小破片75ｇが出土している。中世以降の遺物では、12世紀代の青磁碗(第204図43)、中世の陶器甕か壺(第204図44・45)、平碗(第204図46)が出土している。

第203図　５区遺構外出土遺物（１）



第204図　５区遺構外の出土遺物（２）

第７節　６区の調査成果

６区は客土及び旧表土を約60㎝掘削して基本土層Ⅶa層を遺構確認面とした。６区から検出された遺構は、土坑、ピット、溝である。出土遺物については遺構の構築時期と明らかに異なる場合は混入と判断し遺構外出土遺物として扱った。

１　中近世の遺構と遺物

中世～近世に帰属する遺構及び遺物が検出された。遺構は、土坑４基、ピット５基、溝１条である。

（１）土坑・ピット

６区から検出された近世の土坑は４基、ピットは５基である。遺物の出土など特徴が認められるピットを取り上げて考察を行い、すべてのピットは第34表（201頁）に記す。

１号土坑（第205図　PL.30）

黄褐色土塊を含む黒褐色土による人為的な埋没である。遺物は土師器片が出土し混入と考えられる。埋没土から時期は中近世と考えられる。

２号土坑（第205図　PL.30）

１号土坑に類似し黄褐色土塊を含む黒褐色土による人為的な埋没である。非掲載遺物は土師器片、須恵器片が出土し混入と考えられる。埋没土から時期は中近世と考えられる。

３号土坑（第205図　PL.30）

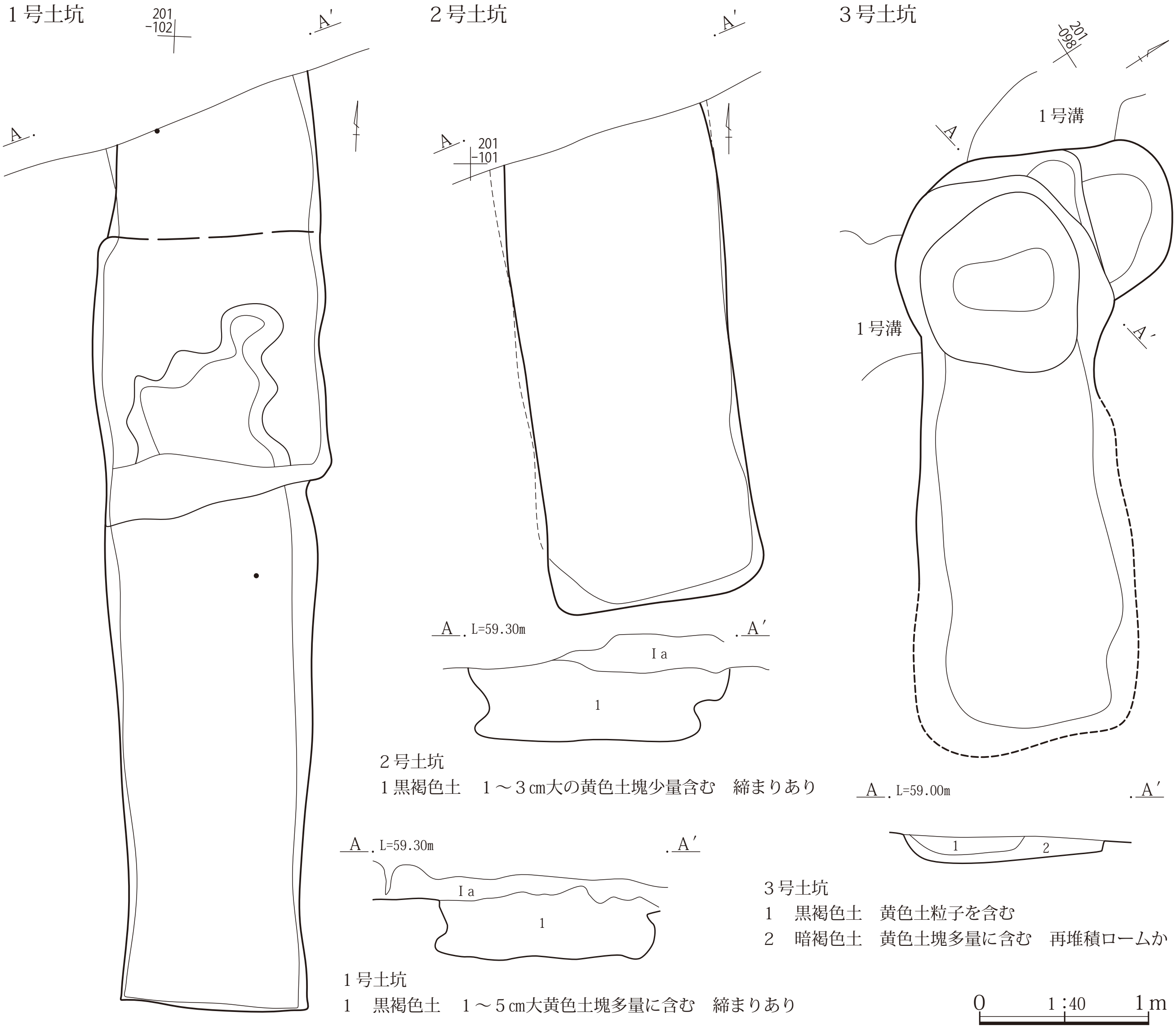
黄色土粒を含む黒褐色土及び黄色土塊を含む暗褐色土による人為的な埋没土と考えられる。非掲載遺物は土師器片が出土し混入と考えられる。埋没土から時期は中近世と考えられる。

（２）溝

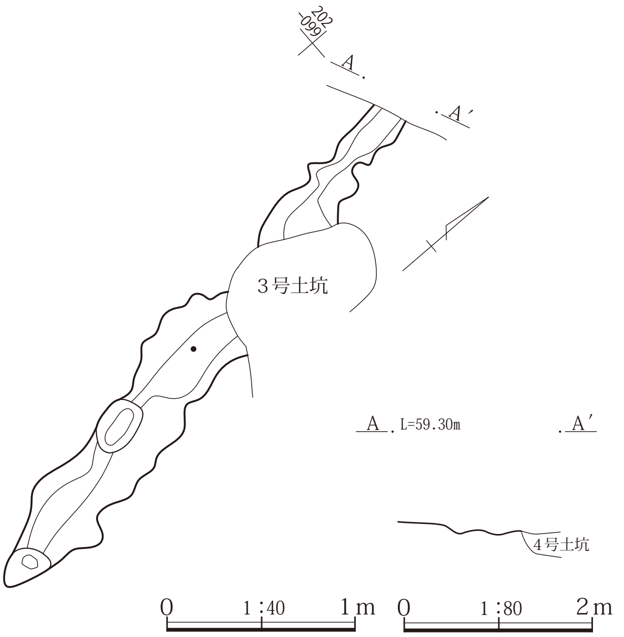
６区から検出された溝は１条である。調査区外となるため一部のみの検出である。

１号溝（第206図　PL.30）

Ｘ＝195 ～ 202、Ｙ＝－096 ～ 098に位置する。３号土坑と重複し埋没土の確認状況から１号溝が３号土坑より古い。北から南に走行し、底面の標高は北端58.75ｍ、南端58.62ｍ、比高13㎝、勾配は2.03％である。北側が調査区外となるため確認できる長さ6.40ｍ、上面幅24 ～ 84㎝、深さ２～ 12㎝である。自然埋没と考えられる。非掲載遺物の土師器片、埴輪破片は混入と考えられる。埋没土から時期は中近世と考えられる。



第205図　６区１・２・３号土坑



第206図　６区１号溝

２　遺構外の遺物

６区では非掲載の出土遺物が非常に少ない。時代別には、縄文時代中期の土器が１点出土する。古墳時代から奈良、平安時代の遺構確認面から出土した非掲載遺物は土師器大破片15ｇ、土師器小破片５ｇのみである。中世から近世の出土遺物はない。

第34表　上根遺跡土坑・ピット計測表

土坑

区No	位置	形状	主軸方位	規模(m)長/短/深
２区１	113-974	円形	-	0.95/0.82/0.46
2	113-973	円形	-	1.04/1.03/0.48
３区１	150-022	円形	-	0.94/0.92/0.55
2	147-024	長方形	-	(1.54) /0.93/0.20
3	145-024	不定形	-	(1.90) / (1.63) /0.36
4	141-032	長方形	N-3°-E	(0.93) /0.75/0.18
5	138-035	不定形	N-26°-W	(1.00) / (0.75) /0.12
6	154-031	楕円形	N-56°-W	0.68/0.53/0.11
7	153-030	円形	-	0.71/0.60/0.12
４区１	173-050	楕円形	-	1.45/1.13/0.45
2	173-047	円形	-	1.00/0.95/0.88
3	180-051	楕円形	N-9°-W	1.10/ (0.55) /0.09
4	179-049	円形	-	0.72/0.64/0.42
５区１	187-068	不定形	N-59°-E	0.73/0.64/0.41
2	184-069	不定形	N-7°-W	1.32/0.43/0.17
3	183-069	不定形	-	0.66/0.47/0.11
4	182-069	不定形	N-55°-W	0.53/0.43/0.13
5	181-068	不定形	N-14°-W	1.67/0.49/0.15
6	179-068	不定形	N-29°-W	(1.80) /0.54/0.15
7	169-068	不定形	N-15°-E	1.20/0.82/0.29
8	171-068	不定形	-	0.69/0.56/0.20
9	168-069	不定形	N-23°-E	1.25/0.48/0.23
10	175-062	不定形	N-15°-W	1.10/0.91/0.08
11	183-065	楕円形	N-24°-E	0.62/0.53/0.16
12	193-066	隅丸方形	N-11°-W	1.02/0.70/0.16
13	194-066	不定形	N-17°-W	(0.80) /0.49/0.14
14	194-066	不定形	-	(2.22) /0.70/0.30
15	165-058	不定形	N-21°-W	1.26/0.53/0.20
21	164-058	不定形	-	(1.00) / (0.95) /0.16
６区１	195-101	不定形	-	5.52/1.35/0.21
2	198-099	長方形	N-6°-W	2.78/1.30/0.20
3	198-094	不定形	N-57°-W	3.53/1.64/0.96
4	202-097	不定形	-	0.75/0.35/0.14

ピット

区No	位置	形状	主軸方位	規模(m)長/短/深
３区１	153-040	円形	-	0.22/0.20/0.37
2	150-037	円形	-	0.30/0.30/0.21
3	151-036	楕円形	N-11°-E	0.32/0.27/0.36
4	151-035	楕円形	N-29°-E	0.34/0.28/0.43
5	152-035	楕円形	N-46°-E	0.30/0.27/0.46
6	152-035	円形	-	0.34/0.29/0.46
7	152-034	円形	-	0.32/0.28/0.43
8	153-034	円形	-	0.30/0.28/0.33
9	154-034	円形	-	0.30/0.28/0.20
10	154-034	円形	-	0.28/0.26/0.14
11	154-033	円形	-	0.42/0.39/0.15
12	153-032	円形	-	0.43/0.35/0.22
13	153-031	円形	-	0.29/0.27/0.32
14	153-031	円形	-	0.32/0.32/0.24
15	151-031	円形	-	0.33/0.32/0.22
16	150-032	円形	-	0.27/0.24/0.18
17	149-034	楕円形	N-70°-W	0.33/0.20/0.44
18	148-035	円形	-	0.43/0.35/0.26
19	148-034	楕円形	N-11°-W	0.45/0.33/0.50
20	145-033	楕円形	N-46°-E	0.47/0.33/0.39
21	145-032	円形	-	0.35/0.33/0.14
22	146-029	楕円形	N-81°-E	0.46/0.38/0.30
23	149-028	円形	-	0.34/0.32/0.41
24	152-029	楕円形	N-31°-E	0.45/0.27/0.33
25	155-029	円形	-	0.46/0.33/0.20
26	157-031	円形	-	0.37/0.36/0.23
27	155-037	楕円形	-	0.27/0.24/0.12
28	151-038	楕円形	N-70°-W	0.31/0.20/0.44
29	155-039	楕円形	N-37°-E	0.25/0.20/-
30	157-040	楕円形	N-55°-E	0.50/0.36/0.29
31	157-038	円形	-	0.30/0.24/0.26
32	155-037	楕円形	N-47°-E	0.28/0.18/0.50
33	156-036	円形	-	0.32/0.26/0.58
34	157-038	円形	-	0.30/0.24/0.40
35	150-038	楕円形	-	0.38/0.29/0.44
36	157-019	円形	-	0.37/0.30/0.18
４区１	180-050	不定形	N-46°-W	0.39/0.32/0.32
2	179-049	円形	-	0.32/0.29/0.26
3	178-051	円形	-	0.33/0.28/0.43
4	177-049	円形	-	0.60/0.54/0.38
5	174-041	円形	-	0.25/0.24/0.17
6	173-041	円形	-	0.56/0.37/0.57
7	173-039	円形	-	0.29/0.28/0.15
8	173-037	円形	-	0.35/0.32/0.28
9	172-038	円形	-	0.38/0.35/0.33
10	170-036	不定形	-	0.32/0.27/0.31
11	169-031	不定形	-	0.43/(0.33)/0.31
12	168-034	円形	-	0.29/0.27/0.27
13	170-042	円形	-	0.31/0.28/0.24
14	168-041	円形	-	0.31/0.29/0.32
15	168-047	-	-	-/-/0.37
16	175-049	楕円形	-	0.32/0.23/0.27
17	173-044	不定形	N-22°-E	0.37/0.36/-
５区１	174-069	不定形	-	0.25/0.22/0.12
4	170-069	不定形	N-31°-W	0.23/0.22/0.29
7	171-069	不定形	N-36°-W	0.19/0.16/0.19
9	170-071	不定形	-	0.26/0.24/0.25
25	169-067	不定形	-	0.23/0.22/0.43
28	171-061	円形	-	0.34/0.33/0.56
29	169-061	円形	-	0.40/0.37/0.11
30	179-061	円形	-	0.22/0.17/0.47
31	179-063	円形	-	0.42/0.33/0.07
35	168-060	楕円形	N-31°-W	0.35/0.25/0.22
36	168-060	不定形	N-84°-E	(0.60)/0.45/0.09
37	168-060	不定形	N-84°-E	(0.60)/0.45/0.09
38	166-999	不定形	N-31°-W	(0.25)/(0.21)/0.37
39	166-999	不定形	-	(0.70)/0.47/0.31
６区１	190-095	不定形	N-6°-E	0.52/0.34/0.12
2	192-093	不定形	N-25°-W	0.45/0.39/0.12
3	193-095	不定形	N-66°-E	0.73/0.50/0.16
4	195-095	不定形	N-21°-E	0.46/0.32/0.07
5	196-099	不定形	N-53°-W	0.30/0.21/0.12

第６章　発掘調査の成果とまとめ

第１節 天良七堂・笠松遺跡出土の酸化焔焼成による須恵器について

天良七堂・笠松遺跡は太田市北西部の太田市新田小金井町に所在し、古代新田郡衙の政庁、正倉群が検出されている天良七堂遺跡の西、古代東山道駅路駅家と推定される太田市入谷遺跡の東に位置し、古墳時代から奈良・平安時代の集落が検出されているが、大型の掘立柱建物など複数の掘立柱建物や基壇状遺構が含まれており、郡衙に関連する遺跡と推定される。

発掘調査では土師器・須恵器等の土器を中心に多くの遺物が出土しているが、その中の須恵器に普遍的にみることができるものとは異なった酸化焔焼成の一群が存在する。一般に須恵器は還元焔焼成によって青灰色に焼き上げられる土器である。これが古代上野国域では９世紀第４四半期頃から酸化焔焼成によるものが供給され始め、10世紀代にはほぼすべてが酸化焔焼成となり、それまで存在していなかった煮沸具の羽釜が出現するなど変貌し、11世紀中ごろには消滅してしまう。

天良七堂・笠松遺跡から出土した酸化焔焼成による須恵器の一群は明らかに９世紀第４四半期以後に出現する酸化焔焼成による須恵器とは様相が異なる。この酸化焔焼成による土器の一群はロクロを使用した成形によるもので硬質に焼き上げられていること、同時期の須恵器と同様な形態をみることが可能なものである。また、この一群の中には、土師器的な技法要素が強いヘラ磨きによる整形や暗文が施されているものも存在している。

現在、県内で確認されている９世紀後半以前の酸化焔焼成による須恵器は焼成段階で還元ができず酸化焔になってしまったものや太田市境ケ谷戸遺跡、甘楽町白倉下原・天引向原遺跡、前橋市下東西・清水上遺跡から出土した暗文が施されたごく一部のものに限定されている。

そうした中で、今回発掘調査が実施され、報告書が刊行される太田市天良七堂・笠松遺跡からは８世紀から９世紀前半代を中心とする酸化焔焼成による土器が若干ではあるがまとまって出土した。これらの須恵器については後述のように一般的な須恵器とは異なる様相が看取される。こうしたことから天良七堂・笠松遺跡から出土した酸化焔焼成による須恵器も天良七堂・笠松遺跡の性格を考える上で重要な土器群とみられることからここに若干の検討を行うことにした。

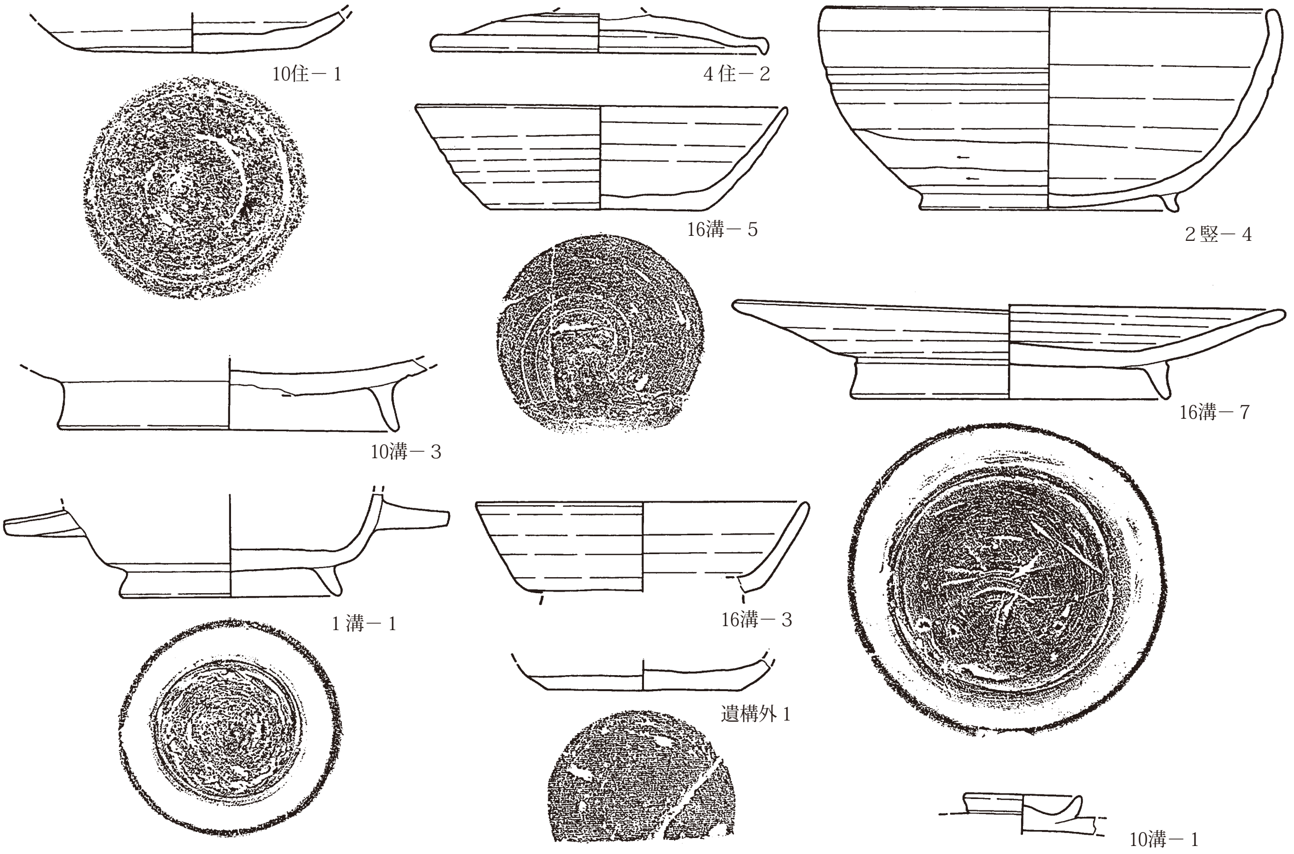
天良七堂・笠松遺跡出土の酸化焔焼成による須恵器

酸化焔による須恵器は天良七堂遺跡１区10号竪穴住居から１の無台杯、１区２号竪穴状遺構から４の大型有台椀、３区４号竪穴住居から２の杯蓋、３区16号溝から３の有台杯、７の大型有台盤、笠松遺跡１区１号溝から１の双耳杯、１区10号溝から１の杯蓋、３の有台盤、天良七堂遺跡３区遺構外から１の無台杯など図示できたもので９点が確認できる。これらの酸化焔焼成による須恵器は胎土も緻密で焼成も前述に記したように硬質に焼き上げられている。その形態も天良七堂遺跡１区２号竪穴状遺構４、３区16号溝７、笠松遺跡１区10号溝３のような大型品や天良七堂遺跡３区16号溝３のように高台の貼付位置が群馬的特徴ではなく畿内などでみられる一般的な形態[注1]を示す有台杯、笠松遺跡１区１号溝１の双耳杯[注2]など特殊な形態を示すものなど一般の集落ではみることのできない形態のものが存在している。また、遺跡内から出土している還元焔焼成による須恵器と比較しても胎土には夾雑物が少なく緻密で焼成も硬質である。こうしたことはこれらの酸化焔焼成による須恵器が単に焼成時に窯を完全に閉塞できずに酸化焔焼成となったのではなく、意図的に酸化焔焼成による焼成が行われたとみられる。

以上の酸化焔焼成による須恵器については全体の形態がわかるものだけではなく、底部片など一部部位しか残

第35表　酸化焔焼成による須恵器の出土遺構と年代

	出土遺構	遺物No.	器種	土器の年代	遺構の年代
天良七堂遺跡	1区10号竪穴住居	1	無台杯	8世紀前半	8世紀前半
	3区4号竪穴住居	2	杯蓋	8世紀後半	8世紀第4四半期
	1区2号竪穴状遺構	4	有台椀	8世紀前半	8世紀第1四半期
	3区16号溝	3	有台杯	8世紀前半	8世紀～9世紀
	〃	5	無台杯	8世紀後半	〃
	〃	7	大型有台盤	8世紀後半	〃
	C区遺構外	1	無台杯	8世紀代	
笠松遺跡	1区1号溝	1	双耳杯	8世紀後半	8世紀代
	1区10号溝	1	杯蓋	8世紀後半	8世紀～9世紀
	〃	3	大型有台盤	8世紀後半	8世紀～9世紀



第207図　天良七堂・笠松遺跡出土の酸化焔焼成による須恵器(S=1/3)

存していない個体もある。そのため、個々の個体だけではその年代の把握が困難なものもあるが、共伴する他の土器からの遺構の存続年代などをみると概ね８世紀前半から９世紀前半代に比定することができる。

なお、個々の年代観や出土遺構の存続年代については第38表のとおりである。

酸化焔焼成による須恵器の出土例

周辺遺跡での天良七堂・笠松遺跡出土の酸化焔焼成による須恵器と同様なものをみると境ケ谷戸遺跡、大道東遺跡、楽前遺跡でみることができる。また、県内に目を向けると前橋市下東西清水上遺跡、藤岡市上大塚南原遺跡、甘楽町下白倉下原・天引向原遺跡で出土例を見ることができる。

境ケ谷戸遺跡[注３]は天良七堂・笠松遺跡から西へ約２㎞に位置している。発掘調査は約900㎡ほどの限られた範囲ではあるが、８世紀から９世紀の竪穴住居14軒、掘方１ｍほどの大型の柱穴をもつ掘立柱建物５棟、８世紀代とみられる区画溝など集落と官衙的な遺構群を重複して検出している。出土遺物には唐三彩陶枕や須恵器塔状摘み蓋、獣足火舎、円面硯、外面口縁部に螺旋状暗文が施された酸化焔焼成須恵器など特殊な遺物がある。また、須恵器でも杯蓋は摘みが群馬県でみられる環状摘みではなく擬宝珠状摘みが貼付され、有台杯も群馬県内でみられる高台の貼付位置ではなく底部周縁よりやや内側に貼付される畿内を始め多くの地域でみられる形態のものである。

酸化焔焼成による須恵器は２号住居跡から杯・杯蓋(境ケ谷戸遺跡報告書第７図69・70、72 ～ 74、以下挿図番号と遺物番号のみとする)、14号住居跡から杯蓋・杯・椀(第11図26 ～ 30)、９号住居跡から杯(第20図５・６・８)、10号住居跡から椀(第20図16)、１号溝から椀(第32図１溝－５)などが出土している。

２号住居跡は共伴する土器から８世紀第４四半期から９世紀初頭に比定され、酸化焔焼成による須恵器は杯２点と杯蓋３点が出土している。69・70の杯は口縁部から体部までの破片で内面に斜格子状暗文が施されている。72 ～ 74の杯は73が小片のため多くは不明であるが、72は擬宝珠状の摘みが貼付され、72・74とも内外面にヘラ磨きが施されている。

14号住居跡は共伴する土器から８世紀第４四半期から

９世紀初頭に比定され､酸化焔焼成による須恵器は杯蓋･杯・椀など６点が出土している。29の杯蓋は摘み片のごく小片であるが摘みの形状は擬宝珠状を呈し内面にはヘラ磨きが施されている。30の杯は底部片であるが高台が貼付され、内面に螺旋状暗文が施されている。26 ～ 28の椀は口縁部から体部にかけての破片である。３点とも内面に格子状暗文が施され、27・28は外面に螺旋状暗文が施されている。

９号住居跡は共伴する土器から８世紀第４四半期に比定され、酸化焔焼成による須恵器は杯３点が出土している。５は底部片で高台が貼付され、内面はヘラ磨きが施されている。６は底部から体部下位片で、底部は回転糸切り無調整、内面は底部に螺旋状暗文、体部に格子状暗文が施されている。８は口縁部片で内面に格子状暗文が施されている。

10号住居跡は８世紀第３四半期に比定され、酸化焔焼成による須恵器は杯が１点出土している。16は底部片で高台が貼付され内外面に螺旋状暗文が施されている。

１号溝は出土している遺物には８世紀～９世紀代の土師器や須恵器や中世陶磁器が出土しており、竪穴住居との重複も最も新しいことから中世の区画溝とみられる。酸化焔焼成による須恵器は椀が１点出土している。５は14号住居から出土している27・28と同様に外面に螺旋状暗文が施されていることから、本来は重複関係にある14号竪穴住居に属するものとみられる。

なお、境ケ谷戸遺跡から出土した酸化焔焼成による須恵器については報告書中では酸化焔焼成による色調のためか土師器に区分されている。

大道東遺跡[注４]は天良七堂・笠松遺跡とは金山丘陵を挟んで東へ約4.5㎞に位置している。発掘調査では６世紀から９世紀にかけての竪穴住居群や掘立柱建物群を中心とした集落と７世紀後半から８世紀前半代に存続していたと想定される東山道駅路が検出されている。

酸化焔焼成による須恵器は85号竪穴住居から有台杯(338図936)が1点出土している。

85号竪穴住居は７世紀前半代に比定されるが、936の酸化焔焼成による須恵器は床面より21㎝の高さから出土であることやこの土器自体は８世紀前半代に位置付けられることから後の混入とみられる。

楽前遺跡[注５]は大道東遺跡の東に隣接して位置する。発掘調査では大道東遺跡と同様に６世紀代から９世紀代にかけて竪穴住居群、掘立柱建物群が検出されている。出土遺物には山田郡や新田郡の郡名が書かれた墨書土器が出土しており、山田郡衙に関連する遺跡と想定されている。

酸化焔焼成による須恵器は４区１号溝から大型の高盤(147図38)が１点出土している。

４区１号溝は若干の蛇行がみられることや底面に砂粒が堆積していることなどから水路とみられる溝で８世紀前半から９世紀前半にかけての土器が出土しており、８世紀前半の開削とみられる。38は脚部が欠落しているが高盤の身部である。ロクロ整形で底部はヘラ磨きが施されている。この土器自体は７世紀末～８世紀前半代に位置付けられる。

下東西清水上遺跡[注６]は群馬県の中央部、前橋市青梨子町に位置し、利根川中流域右岸の前橋台地上に立地している。発掘調査では８世紀から10世紀代にかけての竪穴住居群を主体とした集落が検出されている。遺跡地は国府域の北側で、南側２㎞に白鳳期に創建された山王廃寺、東側の現利根川寄りには総社古墳群などが存在することから古代上野国の中枢地域である。また、東側に隣接する下東西遺跡では豪族居宅とみられる遺構群が見つかっていることから下東西清水上遺跡も単なる農業集落として形成されただけの集落ではないと想定される。

酸化焔焼成による須恵器は43・44号竪穴住居から有台杯(第69図１)、遺構外から杯蓋(第283図165H40G－２以下遺構外１と記す)、有台杯(第283図170Ｈ30Ｇ－９、以下の記述では遺構外２と記す)、有台杯(第283図170Ｈ30Ｇ-12、以下の記述では遺構外３と記す)、杯(第289図194・195Ｈ33-１、以下の記述では遺構外４と記す)、有台杯(第290図３区一括２、以下の記述では遺構外５と記す)の６点が出土している。

43・44号竪穴住居はわずかに重複する竪穴住居で調査所見では43号竪穴住居の方が新しいとされている｡43号･44号竪穴住居１は埋没土中からの出土のためどちらに所属するか明確ではない。高台が貼付され、内面口縁部に放射状暗文が施されている。43号竪穴住居からはほとんど遺物が出土していないが43号、44号竪穴住居とも８世紀第３四半期に比定され、43号・44号竪穴住居１も同様な時期に比定される。

遺構外１は杯蓋で口縁端部が折り曲げられ、摘みは擬宝珠状のものが貼付されている。なお、遺構外１はにぶい黄褐色を呈しており、還元焔焼成に至らなかった可能性もあるが摘みが擬宝珠を呈していることから酸化焔焼成による須恵器と判断した。２は高台が貼付され、内面体部に格子状暗文、底部に螺旋状暗文が施されている。遺構外３は高台が貼付され、底部は回転糸切りである。遺構外４は口縁部から体部片で内面に格子状暗文が施されている。遺構外５は高台が貼付され、底部はヘラナデ調整、外面口縁部に２段の螺旋状暗文、内面は底部と口縁部に螺旋状暗文が施されている。それぞれの土器自体の年代は遺構外１、２、４、５が８世紀後半、遺構外３は９世紀前半代に比定される。

上大塚南原遺跡[注7]は群馬県の南部、藤岡市上大塚に位置し、鮎川右岸の藤岡台地上に立地する。発掘調査では８世紀後半代から９世紀にかけての竪穴住居を主体とする集落遺跡が検出されている。

酸化焔焼成による須恵器は２号竪穴住居から双耳杯(第23図11)が出土している。

２号竪穴住居は出土遺物から８世紀第３四半期から第４四半期に比定される。11は双耳杯の底部から口縁部にかけての破片で、高台が削り出されている。この土器自体は８世紀第３四半期に比定される。

白倉下原・天引向原遺跡[注8]は群馬県の西南部、甘楽郡甘楽町に位置し、鏑川右岸の河岸段丘上に立地している。発掘調査では旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の集落が検出されている。奈良・平安時代では竪穴住居群だけでなく「福天寺」と呼称されていたと推定される村落寺院が検出されている。出土遺物には鋸や鉄鐸をはじめ寺院名や郷名と記したとみられる墨書土器がみられる。

酸化焔焼成による須恵器は谷頭の湧水地を人為的に削平した水場から有台杯(235図谷53)が１点と無台杯(235図谷46 ～ 52)が７点の計８点が出土している。

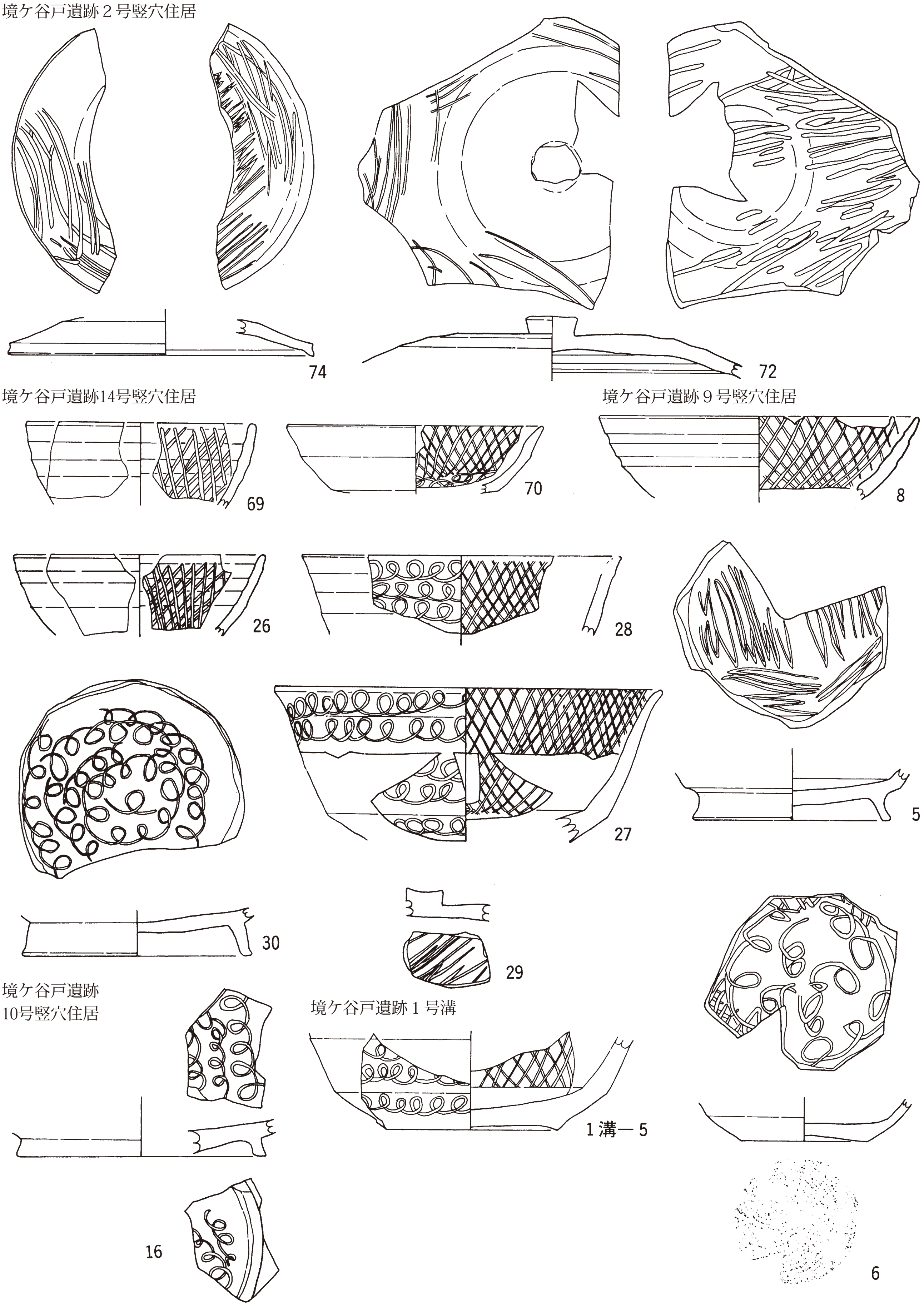
水場は縄文時代から９世紀にかけて地点をずらしながら継続的に利用されていたとみられる。なお、水場は縄文時代から平安時代にかけての土器が５千点以上出土しているが、７世紀から９世紀にかけての土器等が圧倒的に多く出土している。出土した土器は杯などの食膳具が最も多く墨書土器も多くみられる。次いで多いのが横瓶や壷などの須恵器貯蔵具で土師器甕は胴部が球状を呈するものは出土しているが、煮沸用のものは見られない。こうした状況から出土した土器群は廃棄よりは水辺の祭祀に利用されたものとみることができる。谷53は高台が貼付され、底部は回転糸切り後ほぼ全面ヘラ削り調整されている。外面口縁部には２段の螺旋状暗文、内面は底部に螺旋状、口縁部に２段の放射状暗文が施されている。この土器自体は８世紀第２四半期から第３四半期に比定される。谷48は底部片、谷52はやや器高の高い椀状であるが、ともに底部は手持ちヘラ削りが施されている。谷46・49 ～ 51は器形が箱形に近く、底部は回転糸切り無調整である。谷47は体部と底部周辺はヘラ削りで内面に細かい放射状暗文が施されており一見すると土師器のように見えるが、ロクロ整形で底部中央に回転糸切り痕が残ることから須恵器とした。谷47は８世紀第２四半期、谷48と谷52は８世紀後半代、谷46・49 ～ 51は８世紀第４四半期から９世紀初頭に比定される。

古代上野国地域で出土した酸化焔焼成による須恵器は境ケ谷戸遺跡や下東西清水上遺跡、白倉下原遺跡のようなヘラ磨きや暗文が施された土師器の整形技法を取り入れた個体のほうが多く見ることができ、笠松遺跡のような須恵器だけの要素で整形されたもののほうが少ない。しかし、これは土師器の整形技法を取り入れた個体は他の土器とは異なった様相を呈しているため目に留まりやすい。これに対して土師器の整形技法を取り入れていない酸化焔焼成による須恵器は報告書の中では単に須恵器として、または土師器として認識されているものもあり、全体の把握が難しいため一概に割合を示しているとは思われない。

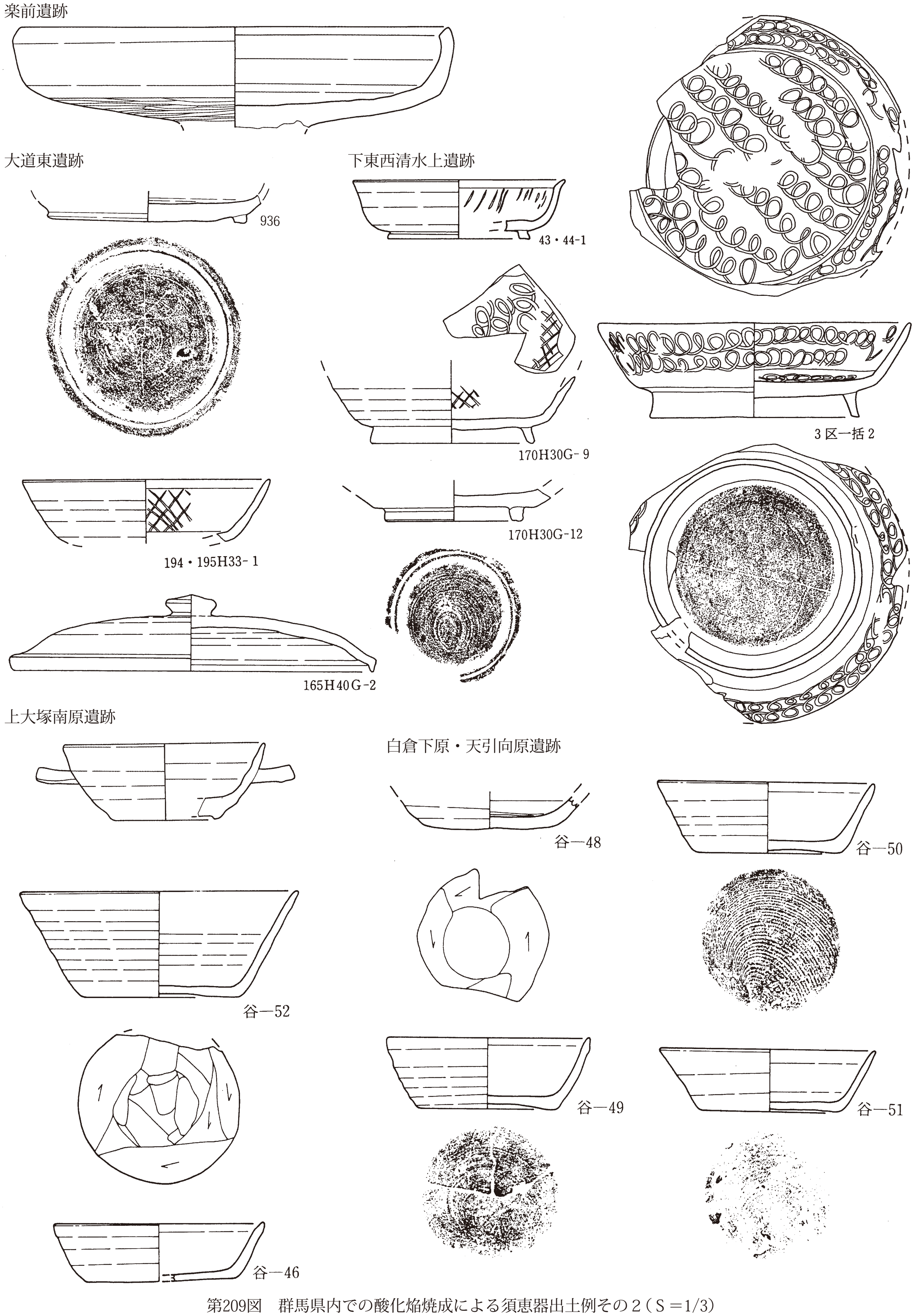
なお、出土した酸化焔焼成による須恵器は夾雑物が少ない点や硬質に焼き上げられている点など共通した点がみられるが、天良七堂・笠松遺跡出土の個体と上大塚南原遺跡や白倉下原遺跡、下東西清水上遺跡出土の個体では胎土が異なることから各地域で生産が行われたと考えられる。

酸化焔焼成による須恵器出現の背景

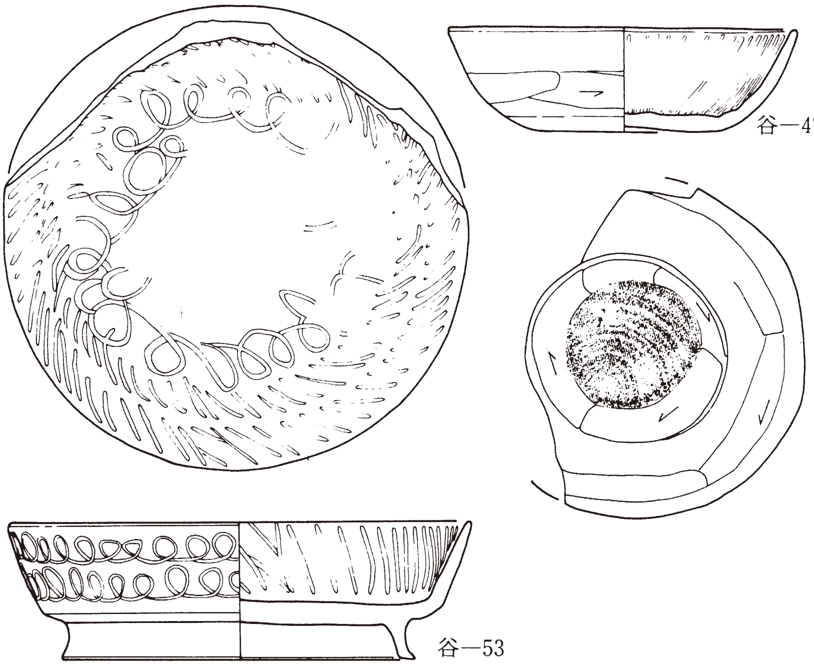
酸化焔焼成による須恵器は酸化焔焼成によって土師器のように赤褐色に焼き上げられたものであるが、基本的に蓋を伴う有台杯や須恵器にみられる器形である。宮都での土師器杯は古代上野国地域や東国でみられる蓋が伴



第208図　群馬県内での酸化焔焼成による須恵器出土例その１（Ｓ＝1/3）



第209図　群馬県内での酸化焔焼成による須恵器出土例その２（S＝1/3）



第210図　群馬県内での酸化焔焼成による須恵器出土例その３（Ｓ＝1/3）

わない無台の形態と蓋付き有台杯の両形態が存在し、須恵器との互換性[注９]がみられる。これに対して古代上野国地域では土師器にこの蓋を有する有台杯の形態が導入されることなく欠落している。酸化焔焼成による須恵器では蓋の摘み形状や杯の高台貼付位置が上野国の特徴的なものではなく、宮都などで一般に見ることのできるものに近い。こうした点から酸化焔焼成による須恵器は古代上野国地域の土師器に欠落した蓋を伴う有台杯の補完のためや宮都的な形態を強く意識した形状は宮都の土器に対する憧れ的な象徴とみることができる。

また、酸化焔焼成による須恵器が出土した遺跡は郡衙や有力豪族の存在やそれに近い人物が存在したことが窺え、このことは当然、当人なり周囲の人物が宮都へ出向いており、宮都で使用されていた土器に触れていた可能性があり、宮都的な土器に強く影響を受けたことが窺える。この点は桜岡氏[注10]によってすでに「搬入品では充足されなかった宮都的土器セットに執着する階層の存在を窺うことができるもの」と指摘されているが、「轆轤成形の暗文土器」だけでなく酸化焔焼成による須恵器全般についても使用するとみられる階層においては宮都での食膳具形態に近づけようとして在地の土師器の器形に欠落した蓋を伴う有台杯や暗文を施した有台杯の生産を須恵器工人に発注したとみることができる。しかし、現在出土している数量を見ると決して多いものではない。この限定的ともいえる出土状況から広い階層で使用を目的としたとは考えられず、ごく一部での使用に限定されていたとみられる。このことは出土している遺跡が天良七堂・笠松遺跡や境ケ谷戸遺跡など新田新田郡衙や東山道新田駅家に関わる遺跡、大道東遺跡、楽前遺跡などの山田郡衙に関わる遺跡、下東西清水上遺跡など富豪層に関わる遺跡[注11]から出土していることからも裏付けることができる。また、笠松遺跡にふり返ると出土した遺構は竪穴住居や竪穴遺構、溝など郡衙とは直接に関係する遺構ではない。しかし、基壇建物や掘立柱建物が検出されていることから館、厨、曹司など郡衙に関する遺構が近くに存在する可能性も窺え、こうした施設での饗宴・給食のために使用されていた食膳具とみることができる。

今回、天良七堂・笠松遺跡から出土した酸化焔焼成による須恵器は９点とわずかな量であるが、土器全体の中ではかなり特徴的な土器である。こうした土器はまだ出土例もわずかで点的な把握しかできないが、こうした点と点を結んでいくことによって古代上野国の様相解明の一助になると考える。

注

注１　杯蓋の摘みが環状を呈することや有台杯での高台が底部周縁に貼付されるなど特徴、神谷佳明1997「律令制成立期の須恵器の系譜―群馬県―」『東国の須恵器―関東地方における歴史時代須恵器の系譜―』古代生産史研究会

注２　神谷佳明2010「双耳杯について―東日本における分布・変遷、用途についての検討―」『研究紀要』28（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

注３　小宮俊久1994「境ケ谷戸・原宿・上野井Ⅱ遺跡」新田町教育委員会

注４　新井仁他2010「大道東遺跡（２）」、2010「大道東遺跡（３）」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

注５　高島英之2009「楽前遺跡（１）」2010「楽前遺跡（２）」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団、酸化焔焼成による須恵器の図は筆者が加筆。

注６　麻生敏隆他1998「下東西清水上遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

注７　石守晃2007「上大塚南原遺跡・鮎川藤ノ木遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団、酸化焔焼成による須恵器の図は筆者が加筆。

注８　「白倉下原遺跡・天引向原遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

注９　西弘海1986「土器様式の成立とその背景」『土器様式の成立とその背景』真揚社

注10　桜岡正信1998「轆轤成形による暗文土器」『下東西清水上遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

注11　上大塚南原遺跡の性格については今後の検討を待ちたい。白倉下原・天引向原遺跡の水場では大量な食膳具の出土から律令期に水辺の祭祀が行われたとみられる。

第２節　笠松遺跡、天良七堂遺跡、上根遺跡における発掘調査の成果と課題

１　縄文時代の遺構と遺物

天良七堂遺跡１区では後期初頭の称名寺式期の竪穴住居が１軒のみ検出された。天良七堂遺跡１区、上根遺跡３・４区では土坑10基、ピット５基が検出されている。天良七堂遺跡１区18・19・20号土坑の加曽利Ｅ式期以外はすべて称名寺式期に帰属するものと考えられる。

遺構外の出土土器は、天良七堂遺跡１区や上根遺跡３～５区の大間々扇状地扇端微高地部分に集中する。南方に行くほど出土土器が希薄になる傾向が認められ、天良七堂遺跡４区や笠松遺跡１・２区、上根遺跡１区では皆無となる。時期別では撚糸文系、野島・鵜ヶ島台式の条痕文系、黒浜式、諸磯ｂ・ｃ式、興津式、加曽利Ｅ３・Ｅ４式、称名寺式、堀之内１・２式が確認できた。称名寺式は上根遺跡３～５区で最も多く350点以上を数え、他の時期は数点から数十点ほどとなる。天良七堂遺跡１区では加曽利Ｅ３・Ｅ４式の土器の出土が多くなり、周囲に集落が展開していたことが想定できる。称名寺式期に至ると南側の扇端部まで集落の領域が広がっていたことが遺構の分布や出土土器の状況から読み取れる。

出土した石器は土器と同様の出土分布傾向が認められる。遺構外の出土石器は、笠松遺跡では磨石や加工痕ある剥片、天良七堂遺跡では打製石斧、石鏃、石錐、三角錐形石器などが出土している。上根遺跡では剥片系石器及び礫石器が出土し、打製石斧は短冊形・分銅型・撥型が出土し早期から前期初頭、中・後期の特徴を備えている。

遺跡は大間々扇状地扇端部の湧水点が分布する地域に位置し、縄文時代早期から湧水との関係を保ちつつ継続的に人々の生活が営まれていたことがうかがえる。

２　古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、天良七堂遺跡１区・２区及び上根遺跡３～５区を中心に分布している。遺跡地内でも谷地に挟まれた微高地上である。竪穴住居は５世紀前半に出現し７世紀まで集落が営まれ、８世紀代に継続していた。各時期の軒数は５世紀代９軒、６世紀から７世紀前半代12軒である。立地条件や集落の規模から、扇端部以南に展開する低地域を利用した稲作農耕集落と想定される。

出土遺物で須恵器や金属器、石製品の少ないのが特徴で、石製模造品は天良七堂遺跡８号竪穴住居から剣形が1点出土しているだけである。周辺遺跡では成塚住宅団地遺跡から初期須恵器把手付椀が出土し、太田金山古窯跡群の操業後は、大道東遺跡など大量に出土している遺跡は例外として、太田市周辺の遺跡にも須恵器の供給が行われている。こうした状況にも関わらず本遺跡からの須恵器や金属器、石製品の出土がわずかしかないことから、これらの品の帰属が地域の首長層の管理下にあったことが窺われる。

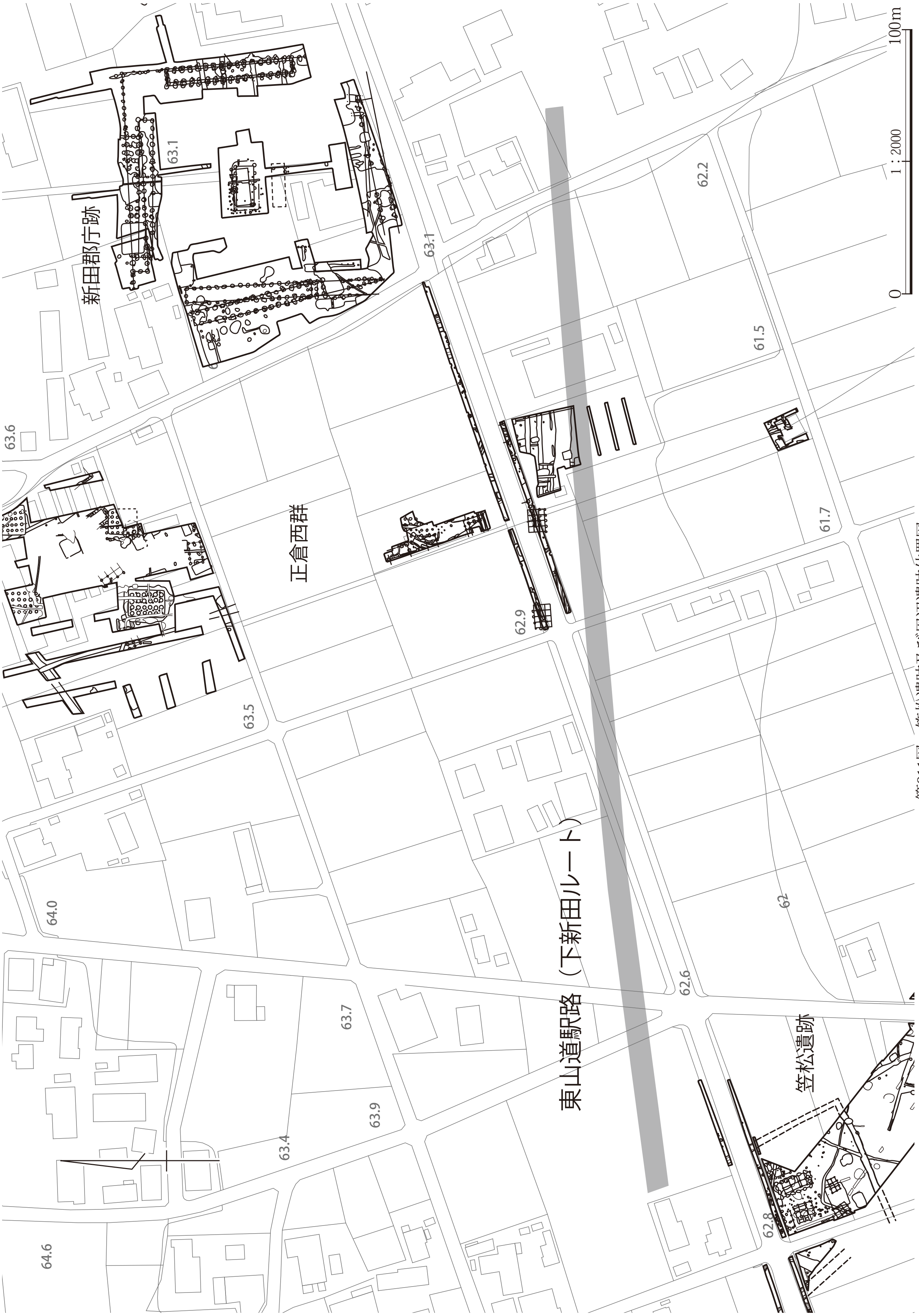
この地域では弥生時代の遺跡は少ないが、古墳時代には成塚住宅団地遺跡のように４世紀～７世紀の竪穴住居1000軒余りで構成されている集落が存在しており、金山丘陵北西の丘陵突端には前期の前方後方墳である寺山古墳が存在している。こうした周辺遺跡の状況から、前橋市南部～伊勢崎市の平野部にみられる東海地方の影響を受けた勢力による平野部の開発が行われたのと同様な開発が行われたと想定される。本遺跡に限ればこうした古墳時代前期の開発の後、大間々扇状地扇端部への進出が５世紀代に開始されたとみてよい。

３　奈良・平安時代の遺構と遺物

奈良・平安時代は注目される遺構が多数検出された。当該時期の遺構も笠松遺跡から上根遺跡まで広範囲に分布する傾向にある。

奈良・平安時代の遺構として特に注目されるのは、笠松遺跡１区北側の建物群であろう。ここでは狭い範囲に基壇状遺構１基、掘立柱建物11棟以上が集中し、その周囲に溝がめぐっていると推定され、新田郡衙である天良七堂遺跡との位置関係からも（第211図）、何らかの官衙的施設であったと考えられるからである。

まず、これらの建物群を囲う施設として、10号溝がある。これは１号基壇状遺構の約10m南にある上面幅が最大2.70mの溝で、北東部でやや北に湾曲するものの、その他の部分では１号基壇状遺構の主軸方位と平行する走行方向で直線的に延びている。この溝の南側には建物が見られないので、これが建物群の南限であると思われる。溝の断面形状は逆台形で、最上層近くにAs-Bが堆積して



第211図　笠松遺跡及び周辺遺跡位置図

「この地図の作成にあたっては、太田市長の了承を得て、同市発行の2,500分の1の地形図を使用し複製したものである。」

いる。出土遺物は８世紀後半～９世紀第３四半期頃のものであり、溝の機能していた時期の一端が判明する。

同様な形状・規模・土層の溝は１区北トレンチでも確認されている。この溝と先述の10号溝北東端とは、直線距離で約35m離れ、しかも走行方向がほぼ直交しているが、断面形状や最上層にAs-Bが堆積していることなどの特徴がよく似ているので、調査時には10号溝北東部が調査区外で大きく曲がり、１区北トレンチの溝につながるものと考えて、同じ「10号溝」と名付けて調査した。このトレンチの北側隣接地では、平成４年に太田市（旧新田町）教育委員会の調査で延長部と思われる溝（新田町教育委員会『天良七堂遺跡・笠松遺跡』1999で１号溝として報告されている）が既に見つかっており、この部分ではほぼ直線的に延びていることが確認されているが、その西側には掘立柱建物が見られるものの、東側では遺構が見つかっていないので、それも根拠のひとつとして、10号溝が北に曲がり、それが建物群の東限となっていると判断したい。

西限は、やはり形状・土層のよく似た溝が、平成５年度に太田市（旧新田町）教育委員会によって調査されている。これは前掲の報告書で２号溝と名付けられているもので、上面幅が4.3mと幅広いが、断面形状やAs-Bを上層に含む特徴が似ているので、10号溝と関連する可能性が強いものと考えられ、これを西限と判断したい。ただし、この溝の西側に建物群が延びていないことはまだ明確に確認されているわけではないし、東限溝と考えた10号溝とは走向が平行していないため、この溝の南東側延長部が10号溝の西側とそのまま接続すると、第211図にみるように、全体として台形の区画となってしまう。現状ではこの溝を西限溝と考えるには、このような疑問点もあることを認めなければならない。なお、本書で報告する笠松遺跡２区では、西端部でこの溝が見つかるはずであったが、時期の新しい遺構で破壊されていると理解され、確認できなかった。

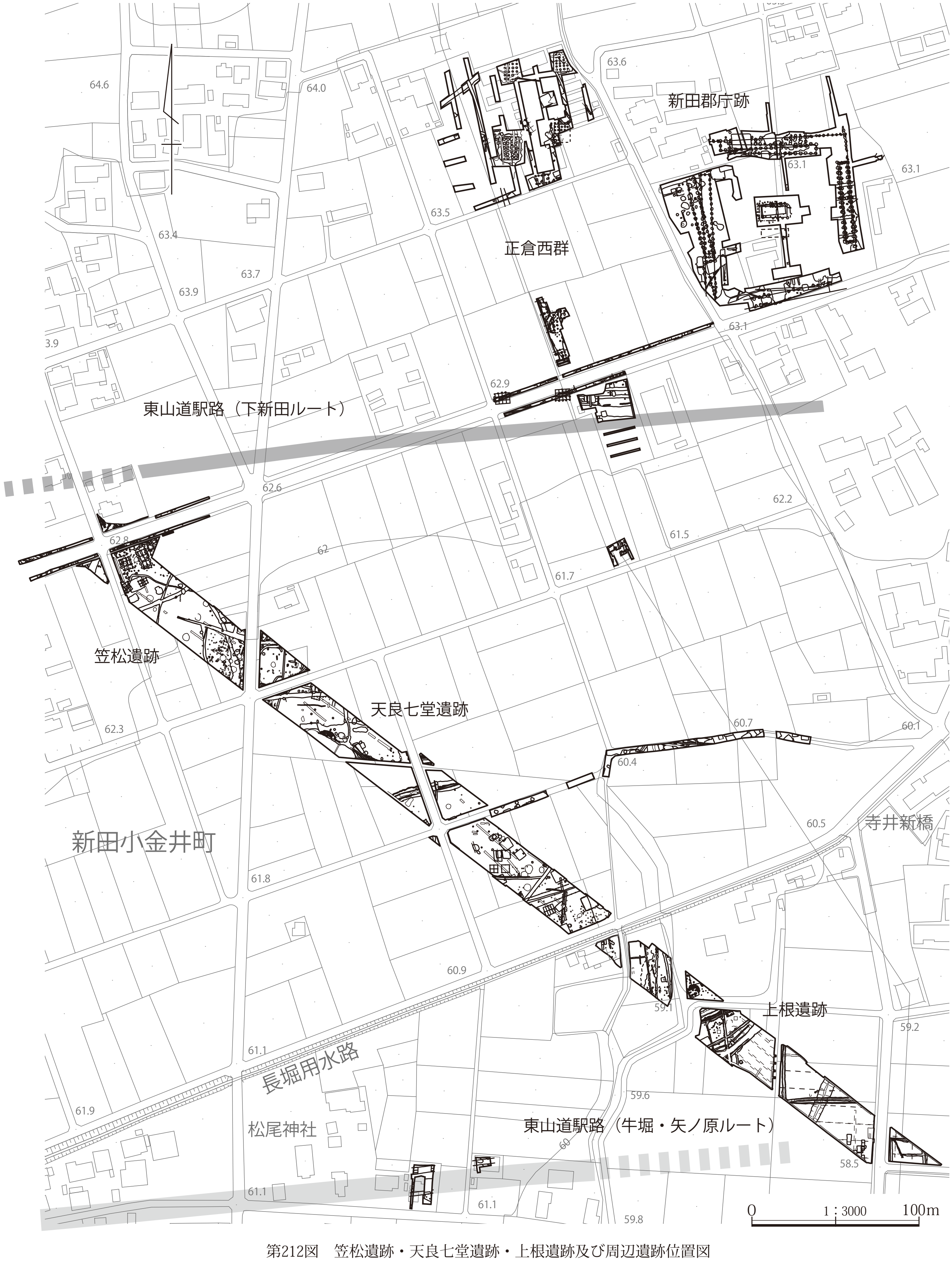
北限は今回の調査では調査区外となるが、第211図に見るように、北側には推定東山道駅路の下新田ルートが通過していることが分かっており、この道路が北限となる可能性が考えられる。この部分は今後太田大間々線の建設工事が北に延長されるに従い、発掘調査が行われる予定であるので、西辺溝の北延長部も含めて、その際に解明されることが期待される。

以上の溝・道路で建物群が区画されているとすると、この区画の規模は、溝内側で計測して、東辺約75m、南辺約45m、西辺約95m、北辺約70mとなり、かなり歪んだ形となる。

この区画の中に建物群があるが、これらの建物群には数時期の変遷があったと思われるものの重複関係にない建物が多く、遺物の出土も少ないため、明確な変遷案を示すのは困難である。しかし直接の重複関係から、大別して２グループに分けることは可能である。すなわち、より古い建物群は、１号基壇状遺構、１号・２号・４号・５号・９号・11号掘立柱建物で、それらの建物を切って作られている、３号・６号・７号・８号・12号掘立柱建物はより新しい建物群ということになる。しかも、より古い建物群のうち、北東部にある１号・４号・５号掘立柱建物の３棟は、主軸方位がほぼ同一ではあるものの、あまりに近接しているので同時存在とは思えず、さらに１号掘立柱建物は１回の建て替えが確認されているので、この３棟だけで少なくとも４時期の変遷が想定できる。その１号掘立柱建物が６号・７号に切られていると推定されるため、さらに１～２時期の変遷が追加される可能性があり、全体としてこれらの建物群には４～６時期の変遷があったと考えられる。

これらの建物のうち、より新しい５棟の建物がすべて総柱建物であることは注意すべきであろう。それを重視すれば、総柱建物がより新しい傾向にあると判断することが可能であると考えられるからである。総柱建物でないのは１号掘立柱建物と１号基壇状遺構だけなので、これがもっとも古い時期のものであることになる。残念なことに１号基壇状遺構は残りが悪く、建物の基壇だとしても、どのような建物になるかは不明であるが、この２つの遺構は主軸方位がほぼ直交し、Ｌ字型の位置関係からみても同時存在である可能性が高い。さらに、南限と推定される10号溝の方向とも近く、ある程度の規則的な配置をなしているとみることができる。また１号掘立柱建物の柱掘り方はいずれも方形で、他の掘立柱建物のそれに比べて規模が大きく、この点からもこの建物がより古いものであると推定することができる。

以上、わずかな根拠からの推定であるが、溝と推定東山道駅路下新田ルートとに囲まれた不整な四角形の区画



第212図　笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡及び周辺遺跡位置図

「この地図の作成にあたっては、太田市長の了承を得て、同市発行の2,500分の1の地形図を使用し複製したものである。」

の中に、まず１号掘立柱建物という大型の建物と、それとＬ字型に直交する方向の１号基壇状遺構が作られ、１号掘立柱建物は少なくとも１回の建て替えが行われた後、多くの総柱建物が２～４時期にわたって建てられ続けたという変遷結果だと考えられる。

これらの建物群の時期も､遺物が少なく確定できない。しかし、１号掘立柱建物の柱痕からは８世紀末～９世紀の須恵器が出土し、10号溝からは８世紀後半～９世紀後半にかけての土器が出土しているので、建物群の初現は８世紀代に遡る可能性がある。１号基壇状遺構からは遺物が出土しないが、本書では１号粘土採掘坑を関連する遺構として報告した。そこからは８世紀の遺物が出土しているので、年代的には矛盾がないことになるが、掲載した遺物は８世紀前半にまで遡るものであり、その点ではやや古くなるものである｡廃絶時期は確定できないが、南・東・西の区画溝の上層にはAs-Bが堆積しており、12世紀初頭にはほぼ埋没していたことが判明している。

最後にこの建物群の性格・役割であるが、それを確定するのは非常に難しい。その建物群の特徴としては、①周囲を溝・道路で囲まれた区画をなしていること、②基壇状遺構、大型の掘立柱建物が最初の建物と考えられ、それはＬ字型に配されていること、③その後区画内には総柱建物が作られるようになること、④北に通過する道路は東山道駅路と推定されていること、などがあげられる。さらに本遺跡の位置が新田郡衙(太田市教育委員会調査の天良七堂遺跡)の西側にあり、その西限付近からはわずか200m程度しか離れていないことは重要である。その間は遺構の少ない地域となっているので、本遺跡は郡衙と一体の施設とはなっておらず、さらに周囲を区画されていることから、ある程度独立した役割をもった施設と考えられるが、新田郡衙とは当然深く関連していると考えるのが自然だからである。新田郡衙は７世紀後半に作られ、廃絶年代は９世紀末～ 10世紀以前と考えられており(太田市教育委員会『天良七堂遺跡２』2010)、本遺跡はその存続期間の中で機能した施設であろう。

郡衙の施設としては『上野国交替実録帳』その他の史料により、郡庁、正倉、厨家、館などがあることが分かっており、そのうち郡庁と正倉は先述の新田郡衙の遺跡内で既に確認されている。その他郡衙内には実務を行った建物が数多く配置されているはずであるし、駅路との関連も含めた周辺の施設としては新田駅家、また、宗教施設として寺院なども存在したはずである。本遺跡からは宗教的な遺物が出土していないし、寺院遺跡としては東側に７世紀後半創建の寺井廃寺があるので、宗教施設とはまず考えられない。また、土器などの出土が少ないので、人の食生活に関わる場所、すなわち厨家や館とも考えにくい。新田駅家である可能性は、北側を駅路が通過していることから、それを全く排除することはできないが、現状で見つかっている遺構のみでは軽々に結びつけることはできない。ただし、今回調査した施設がその一部である可能性は残るため、それは今後の調査での検証が必要である。以上、現状ではどのような施設であるのか、確定することは困難である。前述の特徴②③のように、存続期間の途中で建物の種類が変化しており、それに伴って施設の性格も変化していると考えられる。それをどのように理解すべきなのか、また、北側の推定東山道駅路とはどのように関連しているのか、さらに北側にはどのような建物があるのかが、本遺跡の性格を考える上で重要となる。今後、さらに北側で予定されている発掘調査の結果を踏まえ、再検討したいと考えている。

上根遺跡では、群馬県教育委員会文化財保護課による試掘・確認調査の結果、溝の疑いのある落ち込みが確認され、１・２区から約200m西側の上根遺跡(旧新田町教育委員会の調査)と約300m東側の久保畑遺跡(太田市教育委員の調査)から東山道駅路牛堀・矢ノ原ルートの側溝の一部が確認されている。このため、発掘調査では第212図のとおり１区及び２区が東山道駅路牛堀・矢ノ原ルートの通過地点と想定された。

１区では６条の溝が検出され、そのうち１・２・６号溝は近世と考えられる。古代の可能性がある溝は３・４・５号溝の３条で、これらは埋没土にAs-Bが含まれないことからAs-B降下(1108年)以前に構築されたと考えられる。３・４号溝は東西方向に走行し、発掘調査では西側の２区で確認することができなかった。このため西側には延長されない溝の可能性がある。５号溝は３・４号溝とは異なり北西から南東に走行する溝である。

２区では５条の溝が検出された。１・２・４号溝は近世、５号溝は中世以降の溝と考えられる。３号溝は古墳時代中～後期に埋没したと想定され、奈良・平安時代の可能性がある溝を検出することができなかった。

このように古代にまで遡り、牛堀・矢ノ原ルートに関連する可能性のある溝は１区３～５号溝である。しかし、これらの３条とも牛堀・矢ノ原ルートのN−83°−Eという走行方向とは異なっている。まず、５号溝は北西から南東に走行するので大きく異なる。３・４号溝は東西方向ではあるものの３号溝はN−89°−W、４号溝はN−81°−Wという走行方向で、やはり牛堀・矢ノ原ルートとは合致しない。しかも、それらが側溝だとした場合には平行して存在するはずのもう一方の側溝が見つかっていないので、道路側溝であるかどうかも確定できない。これらのことから３・４号溝も牛堀・矢ノ原ルートに関連するものではないと思われ、今回の調査では牛堀・矢ノ原ルートの延長部を確認することができなかった。

１区及び２区の現表土下層の地形は、大間々扇状地扇端部の低地となっている。東山道駅路牛堀・矢ノ原ルートはこの低地部を通過すると想定されている。埼玉県吉見町西吉見条里Ⅱ遺跡では、東山道駅路武蔵路の可能性がある古代の道路が確認されている。低湿地を通過する古代の道路として注目され、地盤改良や砂利整地などによる造成が行われている。このような事例からも低地部に東山道駅路を通過させる場合に何らかの造成が行われた可能性が高い。発掘調査では盛土などの痕跡は認められず、東山道駅路牛堀・矢ノ原ルートに関連する道路跡や側溝を確認することができなかったが、後世の削平等により検出できなかった可能性もある。

４　中近世の遺構と遺物

笠松遺跡では、１区南側を中心に中近世の遺構が分布するが、遺物の出土量は少なく、年代比定する資料に欠ける。１区南側には、中世土器を出土した８・11・13号土坑を含む土坑群とピット群の集中が見られる。掘立柱建物は２棟を認定したが、ピットの数量からほかに数棟の建物の存在が想定できる。区画溝としては２・３号溝が想定されるが、江戸時代に埋没したと考えられることから、中世以前に遡る可能性も考えうる。２区１号溝は、流水痕跡を持つ比較的大規模な溝である。江戸時代に埋没したと想定されるが、開削時期や性格について限定できる痕跡は認められなかった。

天良七堂遺跡では、４区を中心に中世から近世の遺構を主体とすることが判明した。用水遺構と見られる４区４号溝や直線的な区画溝と思われる４区６号溝は、いずれも近世のものと認定された。また、ピット群の存在から掘立柱建物を含む建物群の存在も想定される。

上根遺跡でも同様で、中世～近世の遺構で代表される。

２区では15～17世紀にかけての遺物が多く出土している。１号溝では在地系土器が比較的多く、16～17世紀のまとまった資料であり、馬見岡凝灰岩製火輪を含む五輪塔類も含めて、周辺での生活跡と墓域が想定される。

５　今後の課題について

笠松遺跡、天良七堂遺跡、上根遺跡は、新田郡衙に関連する重要な遺跡に隣接しており、当該時期はもとより古くは縄文時代に遡り、新しくは近世の遺構群の存在を明らかにすることができた。

特に、笠松遺跡１区での区画溝に囲まれた掘立柱建物群及び基壇状遺構など重要な遺構を検出することができた。これらは、隣接する新田郡衙及び東山道駅路下新田ルートに関連する施設の可能性が高いと考えられる。具体的な機能についての解釈は、景観復元を元にした全体像の検討作業を待つ必要があろう。新田郡衙及び東山道駅路下新田ルートなど周辺遺跡の発掘調査の成果の公表も予定されているので、さらに検討を加えていきたい。また、上根遺跡では未検出となった東山道駅路牛堀・矢ノ原ルートの通過地点についても今後の周辺遺跡の発掘調査と照合し検討していきたいと考える。

参考文献
新田町教育委員会『天良七堂遺跡・笠松遺跡』1999
新田町教育委員会『新田町内遺跡Ⅱ』2000
新田町教育委員会『新田町内遺跡Ⅵ』2004
新田町教育委員会『天良七堂遺跡Ⅱ』2004
太田市教育委員会『天良七堂遺跡』2008
太田市教育委員会『天良七堂遺跡２』2010
太田市教育委員会『太田市内遺跡５』2010
太田市教育委員会『新田郡衙と東山道駅路予稿集』2011
埼玉考古学会『坂東の古代官衙と人々の交流』2002

第36表 笠松遺跡出土遺物観察表

1区遺構	No.	挿図・PL番号	種類・器種	出土位置	残存率	計測値(cm、g)	胎土/焼成/色調または石材	成形・整形の特徴・型式(縄文)
1号竪穴住居	1	第8図 PL.31	土師器 杯	床直	完形	口10.0 高3.2 稜10.2	細/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜径下)から底部は手持ちヘラ削り。
	2	第8図 PL.31	土師器 杯	埋没土	完形	口11.0 高3.7 稜10.8	細/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜径下)から底部は手持ちヘラ削り。
	3	第8図 PL.31	土師器 杯	床直	1/3	口11.4 高3.8 稜11.0	細/良好/にぶい赤褐	口縁部横ナデ、体部(稜径下)から底部は手持ちヘラ削り。
	4	第8図 PL.31	土師器 杯	埋没土	2/3	口12.2 高4.3 稜10.1	細/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜径下)から底部は手持ちヘラ削り。
	5	第8図	土師器 杯	埋没土	口縁～体部	口11.2 稜10.0	細/良好/にぶい赤褐	口縁部横ナデ、体部(稜径下)から底部は手持ちヘラ削り。
4号竪穴住居	1	第10図	須恵器 杯蓋	埋没土	摘み～天井部片	摘5.4	細/還元焔/灰白	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付、天井部は回転ヘラ削り。
	2	第10図 PL.31	須恵器 甕	埋没土	口縁部～胴部片	口43.2 胴55.8	細/還元焔/灰	口縁部はロクロ整形、胴部は叩き痕がほとんどナデ消されている。内面は口縁部下半にヘラナデ、胴部は下半にアテ具痕が残るが、上半はナデ消されている。
	3	第10図 PL.31	鉄器釘か	埋没土	両端欠損	長(7.5)幅(0.5)厚0.7重(13.9)	楔か。錆化が進んでいる。	
	4	第10図 PL.31	鉄器鎌	埋没土	完形	長(6.0)幅(3.7)厚0.2重12.8	小型品、錆化が進んでいる。	
1号掘立柱建物	1	第12図	須恵器 瓶	ピット埋没土	口縁部小片	口12.2	細/還元焔/暗灰	ロクロ整形、回転方向不明。
1号粘土採掘坑	1	第37図	土師器 杯	埋没土	2/5	口12.7 高3.4	細/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。
	2	第37図	土師器 杯	埋没土	1/5	口20.0 高3.1 稜16.6	細/良好/橙	口縁部横ナデ、底部(稜径下)は手持ちヘラ削り。
	3	第37図	瓦 平瓦	埋没土	破片	厚2.3	灰黄	凸面の一方に直線的な撫でが認められ、端部付近と考えられる。凹面には顕著な模骨痕があり、布痕が残る。凸面には格子状の叩き目。古代。
	4	第37図	磨石	埋没土		長(9.9)幅(5.3)厚5.0重326.0	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗、側縁に敲打痕。
8号土坑	1	第33図	常滑陶器 甕か	埋没土	破片		灰黄	内面調整やや粗く、凹凸が多い。内縁下半の器表は平滑となる。外面上半は自然釉が班状にかかる。甕の二次使用か。中世。
11号土坑	1	第33図 PL.31	在地系土器 皿	埋没土	1/3	口(7.8)底(5.8)高(1.5～1.9)	にぶい橙	口縁部が歪み、平面形は楕円形を呈する。底部右回転糸切無調整。
	2	第33図 PL.31	在地系土器か羽釜	埋没土	1/7	口(30.0)	にぶい黄橙	鍔下面から体部外面の器表は煤の付着により、暗灰色から黒色。鍔から口縁部内面は横撫で。内面口縁部以下は刷毛目。外面鍔下部は貼り付け時の横ナデによりやや窪む。体部外面は撫でで、刷毛目が1部に認められる。鍔上部11cm間隔に直径0.7cmの小穴を外面側からあける。小孔は2箇所残存し、内面側は突き出た粘土を周囲に撫でつける。中世か。
13号土坑	1	第33図	在地系土器 皿	埋没土	1/7	口(8.6) 底(5.0) 高1.8	にぶい黄橙	底部回転糸切無調整。体部は開き、口縁部は内湾する。底部内面と体部の境は不明瞭。
154号ピット	1	第36図	砥石	埋没土		長6.9 幅3.6 厚3.8 重123.3	砥沢石	四面使用。隣接遺跡(天良七堂遺跡・31号pit)出土の砥石接合関係から、中央付近で破損後も背面側使用面を継続使用することが、隣接遺跡(天良七堂遺跡・31号pit)出土の砥石接合関係から判明している。
1号井戸	1	第41図	須恵器 杯	埋没土	底部片	底6.0	細/酸化焔/橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
2号粘土採掘抗	1	第38図	須恵器 甕	埋没土	胴部片		細/還元焔/灰白	外面は平行叩き痕が残る。内面は破片下位にアテ具痕が残るが、大半はロクロ痕でナデ消されている。
3号粘土採掘抗	1	第39図	在地系土器 皿	埋没土	口縁部1/2欠	口(7.4) 底4.8 高1.2～1.6	にぶい黄橙	体部から口縁ぶ内面は直線的に開く。外面中位は轆轤目部分が盛り上がる。底部右回転糸切無調整。中世か。
	2	第39図 PL.31	在地系土器 皿	埋没土	底部	底(5.0)	灰褐・にぶい橙	底部右回転糸切無調整で、圧痕が認められる。底部内面の器表は剥離。
	3	第39図	須恵器 甕	埋没土	頸部～胴部		細・白粒/還元焔/灰	頸部ナデ、胴部は平行叩き痕が残る。内面頸部がナデ、胴部は同心円状アテ具痕が残る。
1号溝	1	第48図 PL.31	須恵器 双耳杯	埋没土	底部～体部	底10.0 台8.4	細/酸化焔/にぶい赤褐	ロクロ整形、回転右回り。高台と把手は貼付、底部ヘア削り。
	2	第48図	須恵器 甕	埋没土	胴部片		細/還元焔/灰オリーブ	外面は平行叩き、内面は同心円状アテ具痕が残る。
	3	第48図	須恵器 甕	底面	胴部片		細・角/還元焔/暗灰	外面は平行叩き、内面は同心円状アテ具痕が残る。
	4	第48図	須恵器 甕	埋没土	口縁部片		細/やや酸化焔きみ/灰黄	口縁部はロクロ整形、外面は小凸帯で3段に区画、区画内に波状文が巡る。内面はヘラナデ。
	5	第48図	常滑陶器 甕	埋没土	破片		灰	内面は撫で、指頭圧痕状の窪み廻る。外面は縦方向の刷毛目状の撫で。中世。
2号溝	1	第48図	瀬戸・美濃陶器 腰錆碗	埋没土	底部	底4.4	灰白	内面は細かい貫入の入る灰釉、外面は高台端部を除き鉄釉。江戸時代。
3号溝	1	第48図	肥前陶器 瓶	埋没土	1/3	口(8.2)	にぶい黄橙	高台内は抉り込む。外面は白土刷毛塗りの後、透明釉。外面は高台端部のみ無釉。内面は無釉。江戸時代。
4号溝	1	第48図	常滑陶器 甕か	埋没土	体部片		褐灰	器壁薄い。焼き締まりやや弱い。中世。
10号溝	1	第48図	須恵器 杯蓋	埋没土	摘み	摘4.6	細・褐粒/酸化焔/にぶい赤褐	ロクロ整形、回転右回りか。摘みは貼付。
	2	第48図	須恵器 盤	埋没土	底部片	底12.3 台12.2	細・白粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ヘラナデ。
	3	第48図	須恵器 盤	埋没土	底部片	底13.0 台13.0	細・褐粒/酸化焔/にぶい赤褐	ロクロ整形、回転右回りか。高台は貼付、底部は回転ヘラナデ。
	4	第48図 PL.31	須恵器 杯	底面	ほぼ関係	口12.9 高4.3 底6.7	細・角/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
	5	第48図	須恵器 杯	埋没土	底部～体部	底6.2	細・白粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
	6	第49図	須恵器 甕	底面	口縁～頸部	口18.8	細・角/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回りか。
	7	第48図 PL.31	須恵器 甕	埋没土	口縁部片	口20.2	細・白粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。
	8	第49図	須恵器 甕	埋没土	口縁～胴部	口422.8	細・白粒/還元焔/灰	口縁部はロクロ整形、回転右回り。胴部は外面に平行叩き痕、内面に同心円状アテ具痕が残る。
	9	第49図	須恵器 甕	埋没土	口縁～胴部		細/還元焔・黒班/灰	口縁部から胴部はロクロ整形、回転右回り。外面胴部と内面口縁部に降灰が付着。
	10	第49図	須恵器 甕	埋没土	口縁部片		細砂粒/還元焔/灰	口縁部はロクロ整形。胴部とは頸部で接合。
	11	第49図	埴輪 馬形	埋没土	一部片		細/良好/橙	馬齢は貼付されたものが剥落。表面はナデ。
遺構外出土遺物	1	第50図 PL.31	有茎尖頭器	370-335ｸﾞﾘｯﾄﾞ		長4.7 幅2.3 厚0.6 重2.8	細/還元焔/灰 黒色頁岩	口縁部はロクロ整形。胴部とは頸部で接合。
	2	第50図	在地系土器 皿	表土	1/4	口(6.8)	にぶい橙	底部回転糸切無調整。底部外面に圧痕残る。底部内面に指撫で。中世以降。
	3	第50図	常滑陶器 甕	表土	口縁部片		灰	口縁部は受け口状。頸部外面以下と口縁部上面に自然釉がかかる。13世紀第2四半期。
2区遺構	No.	挿図・PL番号	種類 器種	出土位置	残存率	計測値(cm、g)	胎土/焼成/色調または石材	成形・整形の特徴・型式(縄文)
1号溝	1	第53図	在地系土器 皿	底面	1/4	口(9.2)底(6.2)高1.8	橙	口縁部は歪み、平面形は楕円形状を呈するか。底部回転糸切り無調整。底部内縁周縁は丸みを持つが、体部との境はやや明瞭。江戸時代か。
	2	第53図	在地系土器 焙烙	埋没土	口縁部片		黒	断面は黒色、器表付近は灰白色、器表は黒色。中位内外面に接合痕残る。口縁端部上面は平坦であるが、内外端部は丸みを持つ。外面下位は、砂圧痕状の型肌が残る。江戸時代。

第37表 天良七堂遺跡出土遺物観察表

1区遺構	No.	挿図・PL番号	種類・器種	出土位置	残存率	計測値(cm、g)	胎土/焼成/色調または石材	成形・整形の特徴・型式(縄文)
1号竪穴住居	1	第59図 PL.32	土師器 高杯	貯底から3cm	杯身部小片	稜11.0	細/良好/橙	口縁部は放射状ヘラ磨き。内面は底部から口縁部に斜放射状ヘラ磨き。
	2	第59図 PL.32	土師器 高杯	床直	脚部片	脚16.1	細/良好/にぶい黄橙	脚部はヘラ削り、裾部は横ナデ。内面脚部はナデ。
	3	第59図 PL.32	土師器 高杯	床直	脚部中位～裾部	脚17.6	細/良好/明赤褐	内面に輪積み痕が残る。脚部はナデ、裾部は横ナデ、脚部下位から裾部にヘラ磨き。内面脚部はヘラナデ。
	4	第59図 PL.32	土師器 坩	床直	口縁部～ 1/3欠損	口10.5 高8.5	細・ガラス質粒/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、頸部下はナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
2号竪穴住居	1	第63図 PL.32	土師器 高杯	床直	杯身部～脚部上半	口17.5 稜9.6	細・粗粒・角/良好/橙	内面脚部に輪積み痕が残る。杯身部と脚部は接合か。杯身部口縁部は横ナデ、底部(稜径下)はナデ、脚部はヘラ削り。内面脚部はナデ。
	2	第63図 PL.32	土師器 高杯	床直	杯身部片	口19.3 稜9.6	細・ガラス質粒・褐粒/良好/橙	杯身部口縁部は横ナデ後放射状ヘラ磨き、底部(稜径下)は上半がナデ、下半はヘラ削り。内面は口縁部に斜放射状ヘラ磨き。
	3	第63図 PL.32	土師器 坩	床直	底部～胴部下半欠損	口14.0 胴13.5	細・褐粒/良好/明黄褐	口縁部上半は横ナデ、下半はヘラナデ、胴部はヘラ削り。内面は口縁部が横ナデ、頸部下に指頭痕が残る、胴部はヘラナデ。
	4	第63図 PL.32	土師器 小型甕	掘方、埋土	ほぼ完形	口10.0 高10.4 胴11.6	細/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
3号竪穴住居	1	第65図 PL.33	土師器 高杯	貯底から5cm	口縁部、脚部一部欠損	口17.9 高15.8 稜9.6 脚14.0	細/良好/明赤褐	杯身部口縁部は横ナデ、脚部はヘラナデ、裾部は横ナデ、内面は杯身部底部と脚部がヘラナデ。
	2	第65図 PL.32	土師器 高杯	貯底から5cm	杯身部片	口18.8 稜9.2	細・粗粒・褐粒/良好/浅黄橙	杯身部は脚部と接合。外面は口縁部から底部上半まで横ナデ、下半はナデ、内面は底部から口縁部下半にヘラナデ。
	3	第65図 PL.33	土師器 高杯	貯底から5cm	杯身底部～脚部	脚径13.3	細・褐粒/良好/橙	杯身部と底部は接合。脚部はヘラ磨き、裾部は横ナデ、内面脚部はナデ。
	4	第65図 PL.33	土師器 高杯	貯埋没土	脚部	脚径13.5	細・角・褐粒/良好/明赤褐	内面脚部に輪積み痕が残る。脚部はヘラ削り、裾部に放射状ヘラ磨き。内面は上半がナデ、下半がヘラナデ。
	5	第65図 PL.33	土師器 高杯	貯底から5cm	脚部	脚径14.0	細/良好/明赤褐	内面脚部に輪積み痕が残る。脚部はナデ、裾部はヘラナデか。内面は脚部がヘラナデ、裾部は横ナデ。
	6	第65図 PL.33	土師器 坩	貯埋没土	口縁部片		細・角/良好/明黄褐	口縁部は横ナデか、内外面とも器面磨滅のため不鮮明。
	7	第65図 PL.33	土師器 甕	貯底から5cm	胴部一部欠損	口17.7 高28.1 底7.4 胴25.4	細/良好/にぶい黄褐	口縁部は横ナデ、胴部は上位・中位がナデ、胴部下位と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
	8	第65図 PL.32	土師器 小型甕	貯底から6cm	4/5	口9.7 高10.1 底4.3 胴12.4	細・粗粒・褐粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部は上位・中位がナデ、下位と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
	9	第65図 PL.32	土師器 甕	貯底から6cm	口縁部～胴部片	口14.9	細/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部は上位がナデ、中位はヘラナデ。
	10	第65図 PL.33	土師器 甕	床直	口縁部～頸部部	口15.6	細・角/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、内面胴部はヘラナデ。
	11	第65図 PL.33	砥石	貯底から12cm		長15.3 幅9.5 厚(5.0) 重960.4	切り砥石、砥沢石	四面使用。細粒石材を用いた仕上げ砥。裏面側に縦位・斜位の刃ならし傷。両端の小口部は磨き整形。

4号竪穴住居	1	第67図	土師器 杯	P9埋没土	1/4	口10.8 稜9.9	細・粗粒/良好/橙	杯身部は口縁部横ナデ、底部(稜径下)は上半がナデ、下半はヘラ削り。
	2	第67図 PL.33	土師器 高杯	P9底から3cm	1/2	口13.4	細/良好/にぶい黄橙	底部と胴部下半はヘラ削り、上半はナデ。内面はヘラナデか。
5号竪穴住居	1	第69図 PL.33	土師器 高杯	竈使用面	杯身部	口19.3 稜9.2	細・粗粒/良好/橙	杯身部は口縁部横ナデ、底部(稜径下)は上半がナデ、下半はヘラ削り。
	2	第69図 PL.33	土師器 壺	貯底から26cm	底部～胴部・頸部	胴14.0	細/良好/にぶい黄橙	底部と胴部下半はヘラ削り、上半はナデ。内面はヘラナデか。
	3	第68図	土師器 鉢	床直	口縁部～体部片		細/良好/橙	口縁部は折り返しか。口縁部横ナデ、体部は絵h5削り。
	4	第69図 PL.33	土師器 小型甕	床直	1/2	口12. 高9.9 胴12.5	細/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り後ナデ、底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
	5	第69図 PL.34	土師器 甕	埋没土	ほぼ完形	口14.5 高15.7 底5.4 胴16.7	細/良好/にぶい黄褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り後上位にナデ、底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
	6	第69図 PL.33	土師器 甕	床直	口縁部～胴部片	口16.4 胴23.9	細・粗粒・チャート/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
	7	第69図	土師器 甕	床直	口縁部～胴部片	口17.5	細/良好/橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はナデ。内面胴部はヘラナデ。
	8	第69図	土師器 甕	床直	口縁部～胴部片	口18.6	細/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部はナデ。内面胴部はヘラナデ。
	9	第69図	土師器 甕	貯底から34cm	口縁部～胴部片	口19.4	細/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部はナデ。内面胴部はヘラナデ。
	10	第69図	土師器 壺	竈掘り方	口縁部片	口20.1	細/良好/橙	器面は一部摩滅のため不鮮明。口縁部は内外面に放射状ヘラ磨き。
7号竪穴住居	1	第55図	縄文土器 深鉢	床直	口縁部破片		細・白色粒・黒色粒/ふつう/橙	口縁下に１条の沈線をめぐらし、以下、帯状沈線によるモチーフを描き、列点を充填施文する。称名寺式
	2	第55図	縄文土器 深鉢	埋没土	口縁部破片		粗・チャート細礫・白色粒/良好/橙	帯状沈線による懸垂文ないしＪ字文を施す。称名寺式
	3	第55図	縄文土器 深鉢	埋没土	胴部破片		粗・白色粒・黒色粒/ふつう/にぶい橙	帯状沈線によるモチーフを描き、列点を充填施文する。称名寺式
	4	第55図	縄文土器 深鉢	床直	胴部破片		細・白色粒・黒色粒/ふつう/橙	帯状沈線によるモチーフを描き、櫛歯状工具による刺突を充填施文する。称名寺式
	5	第55図	縄文土器 深鉢	床直	胴部破片		粗・白色粒・石英/良好/橙	帯状沈線によるモチーフを描き、ＲＬを充填施文する。称名寺式
	6	第55図	縄文土器 深鉢	床直	胴部破片		粗・白色粒・黒色粒、石英/良好/橙	横位隆帯、隆帯による懸垂文を施し、縦位条線を充填施文する。加曾利E４式
8号竪穴住居	1	第72図	土師器 杯	床直	口縁部～体部片	口15.8 稜14.6	細/良好/橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。
	2	第72図 PL.34	土師器 甕	床直	ほぼ完形	口17.7 高28.1 底7.4 胴23.3	細/良好/にぶい黄褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り後上半にナデ、底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
	3	第72図	土師器 甕	床直	底部～胴部片	底6.0	細/良好/橙	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
	4	第72図	土師器 甕	P5底から10cm	底部～胴部片		細/良好/にぶい橙	底部はヘラ削り、胴部はナデ。内面はヘラナデ。
	5	第72図	石製品	床直		長5.2 幅2.3 厚0.8 重11.2	剣形模造品、滑石	模造品としては形態的にも鎬の位置も対称性に欠け、未研磨部分も多く、雑な作り。基部側は基部全体の粗い研磨→孔の穿孔(径1.5㎜、片側穿孔)の順で製作が進み、身は基部研磨後手持ち回転研摩して製作。
9号竪穴住居	1	第74図 PL.34	須恵器 杯	床直	3/4	口12.9 高3.5 底5.9	細・粗粒・角/還元焔/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
	2	第74図 PL.34	須恵器 杯	床直	1/3	口13.1 高4.0 底6.7	細・粗粒・角/還元焔/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
	3	第74図	土師器 甕	床直	口縁部～胴部片	口10.8	細/良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
	4	第74図 PL.34	土師器 甕	床直	口縁部～胴部片	口10.8 胴14.4	細/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
	5	第74図 PL.34	土師器 甕	床直	口縁部～胴部片	口19.2	細/良好/にぶい赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
	6	第74図	土師器 甕	床直	口縁部～胴部片	口19.8 胴21.3	細/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
	7	第74図 PL.34	土師器 甕	床直	口縁部～胴部片	口19.4 胴22.0	細/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
	8	第74図	土師器 台付甕	床直	口縁部～胴部片	口12.2 胴12.2	細/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
10号竪穴住居	1	第76図	須恵器 杯	竈使用面	底部	底8.5	細/酸化焔/にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転ヘラ削り。
	2	第76図	須恵器 杯	竈使用面	1/5	口部径13.8 高3.4 底8.0	細/還元焔/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラ削り。8C.中葉
	3	第76図	須恵器 杯	床直	口縁部片	口15.4 底13.4	細/還元焔/灰黄	ロクロ整形、回転方向不明。高台は貼付。
11号竪穴住居	1	第77図	土師器 甕	埋没土	口縁部～胴部片	口12.3	細/良好/明赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
	2	第77図 PL.34	石製品	床直		長6.0 幅5.6 厚3.3 重51.0	楕円礫、軽石	背面側に研磨面が広がる。研磨面中央は浅く窪む。石製品としての性格は不明。8C.Ⅲ
12号竪穴住居	1	第79図	土師器 杯	１号土坑	口縁部～体部片	口11.4	細/良好/浅黄橙	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り、器面磨滅のため単位不鮮明。
	2	第79図	土師器 高杯	床直	杯身部口縁部～底部片	口16.6 稜10.8	細/良好/にぶい黄橙	杯身部は口縁部から底部(稜径下)にかけて横ナデ。内面はヘラ磨き、摩滅のため単位不明。
	3	第79図 PL.34	土師器 高杯	床直	杯身部底部～脚部	脚径11.0	細・褐粒/良好/にぶい黄橙	杯身部底部から脚部はナデ、裾部は横ナデ。内面脚部はヘラ削り。
	4	第79図	土師器 高杯	床直	杯身部～脚部片	稜11.0	細/良好/にぶい黄橙	杯身部は口縁部から底部(稜径下)上半にかけて横ナデ、下半はナデ。
	5	第79図	土師器 甕	床直	口縁部片	口22.8	細/酸化焔/橙	口縁部はロクロ整形、回転方向不明。
13号竪穴住居	1	第80図 PL.34	土師器 鉢	竈使用面	口縁部～体部中位	口10.8	細/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り、器面剥離のため単位不明。内面は体部にヘラ磨き。
	2	第80図	土師器 小型甕	竈使用面	底部～胴部下位片	底3.9	細・角・石英/良好/明赤褐	底部はヘラ磨き、胴部は器面剥落のため不鮮明。内面はヘラナデか。
	3	第80図	土師器 甕	埋没土	底部～胴部下位片	底6.0	細/良好/橙	愛知部はヘラ削り、胴部はヘラ削り後ナデ。内面は底部から胴部にヘラナデ。
1号竪穴状遺構	1	第81図	土師器 高杯	埋没土	脚部片		細/良好/黄褐	脚部は外面がヘラ削り後ヘラ磨き、内面は上半がナデ、下半はヘラナデ。
	2	第81図 PL.34	土師器 坩	床直	1/4	口8.8 高8.2 胴9.9	細/良好/にぶい黄褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部上位はナデ、中位から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
	3	第81図	土師器 鉢	埋没土	口縁部下半～体部片		細/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。内面体部はヘラナデ。
	4	第81図 PL.35	土師器 鉢	埋没土	口縁部～体部片	口18.3	細/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ。内面は体部にヘラナデ。
	5	第81図	土師器 甕	埋没土	底部～胴部下半		細/良好/にぶい黄橙	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
	6	第81図 PL.34	土師器 甕	床直	底部～胴部下位片	底5.7	細/良好/にぶい黄橙	底部はヘラ削り、胴部ヘラ削り後ヘラ磨き、一部器面磨滅のため不鮮明。内面は底部から胴部にヘラナデ。
2号竪穴状遺構	1	第83図	土師器 杯	埋没土	口縁部～底部片	口13.0	細/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。
	2	第83図 PL.35	土師器 杯	埋没土	2/5	口20.6 高径4.9 稜18.9	細/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜径下)から底部は手持ちヘラ削り、器面磨滅のため単位不明。
	3	第83図	須恵器 長頸壷	床直	胴部	底8.6 胴19.2	細・粗亜流/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回りか。高台が貼付であるが剥落、胴部下位は平行叩き痕が残る、中位は回転ヘラ削り。
	4	第83図 PL.35	須恵器 盤	埋没土	口縁部～底部片	口23.8 底21.0	細/還元焔/灰オリーブ	ロクロ整形、回転右回り。口縁部下位から底部は回転ヘラ削り。
	5	第83図 PL.35	須恵器 鉢	埋没土	2/3	口17.6 高7.9 底11.0 台9.8	細/酸化焔/浅黄橙	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部と体部下位は回転ヘラ削り。7C.Ⅳ
3号竪穴状遺構	1	第85図	土師器 杯	埋没土	口縁部～底部片	口10.0 底2.7	細/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。8C.前半
	2	第85図 PL.35	土師器 杯	埋没土	口縁部～底部片	口17.6 稜15.2	細/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜径下)から底部は手持ちヘラ削り。
	3	第85図 PL.35	土師器 甕	床直	底部～胴部下位片	底7.9	細・褐粒/良好/橙	底部と胴部はヘラ削り､器面磨滅のため単位不鮮明。内面はヘラナデ。8C.前半
1号掘立柱建物	1	第86図 PL.35	木製品 杭状か	底面		長13.7 幅4.1 厚3.3		年輪20年以上。カヤ材丸木を使用。摩滅が著しく細かい加工は不明。
1号鍛冶遺構	1	第101図 PL.35	土製品 鞴羽口	埋没土	1/5		細・褐粒/良好/にぶい黄褐	先端部側は還元化している。側面と基部はナデ。
	2	第101図 PL.35	土製品 鞴羽口	埋没土	1/6		細・粗粒/良好/明黄褐	先端部側は還元化している。側面と基部はナデ。
	3	第101図 PL.35	鉄滓	埋没土	ほぼ完形	長4.2 幅2.7 厚0.7 重8.3		小形の鍛冶滓。薄手下半は粘土質溶解物主体。上面は鉄部が残存し、銹化している。
3号土坑	1	第93図 PL.35	土師器 高杯	底面	脚部上半片		細/良好/橙	脚部は外面がヘラ磨き、内面は上位がナデ、中位はヘラ削り。
7号土坑	1	第93図 PL.35	土師器 杯	底面	1/2	口11.8 高4.7 稜11.2	細・チャート/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜径下)から底部は手持ちヘラ削り。
11号土坑	1	第58図 PL.32	縄文土器 深鉢	埋没土	底部破片		粗・チャート細礫・黒色粒/ふつう/にぶい黄橙	底径11.0cm。帯状沈線により銛先状モチーフなどを描くが、沈線の下端は多くが開放される。モチーフ外にLRを充填施文する。称名寺式
19号土坑	1	第58図	縄文土器 深鉢	底面	口縁部破片		粗・黒色粒/ふつう/にぶい橙	波状口縁。口縁に沿って隆帯をめぐらし、波頂部を肥厚させる。沈線による玉抱き文を施し、LRを充填施文する。加曽利E4式
	2	第58図	縄文土器 深鉢	底面	胴部破片		粗・チャート/ふつう/にぶい橙	沈線によるU字状モチーフを描き、LRを充填施文する。加曽利E4式
	3	第58図	縄文土器 深鉢	底面	胴部破片		粗・白色粒/ふつう/にぶい橙	隆帯によるU字状モチーフを施し、RLを充填施文する。加曽利E4式
29号土坑	1	第93図	須恵器 椀	埋没土	底部～体部下半片	底 10.0 台8.0	細/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部回転ヘラ削り。
80号ピット	1	第58図	縄文土器 深鉢	埋没土	胴部破片		粗/橙/ふつう	帯状沈線によるモチーフを描く。称名寺式
110号ピット	1	第95図	土師器 高杯	埋没土	杯身底部～脚部片		細/良好/明赤褐	杯身底部はナデ、脚部はヘラ磨き。内面脚部はヘラナデ。
5号溝	1	第98図	土師器 高杯	埋没土	脚部上半片		細/良好/橙	脚部は外面がヘラ削り、内面はナデ。内面は黒色化している。
	2	第98図	須恵器 椀	埋没土	口縁部片	口13.1	細/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。
	3	第98図	須恵器 杯	埋没土	底部	底8.4	細・白粒/還元焔/暗灰	ロクロ整形、回転左回り。底部は回転糸切り後周囲と体部に回転ヘラ削り。
	4	第98図	土師器 甕	埋没土	口縁部～胴部上位片	口17.8	細/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
	5	第98図	須恵器 甕	埋没土	底部～胴部下位片	底13.0	細/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラ削りか、器面磨滅のため不鮮明。
6号溝	1	第98図	土師器 高杯	埋没土	杯身部底部		細/やや軟質/橙	内外面とも器面磨滅のため不鮮明。
	2	第98図	須恵器 杯	埋没土	脚部～体部下半片	底6.8	細/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
	3	第98図	須恵器 杯	埋没土	脚部～体部下半片	底7.7	細/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転ヘラ削り。

遺構外出土遺物	1	第102図	縄文土器 深鉢	表土	口縁部破片		粗・チャート/良好/橙	口唇部が若干肥厚。撚糸文を縦位施文するが、原体不明。夏島式
	2	第102図	縄文土器 深鉢	6溝	口縁部破片		粗・石英/良好/明赤褐	撚糸文Rを縦位施文する。夏島式
	3	第102図	縄文土器 深鉢	表土	胴部破片		細・チャート細礫・白色粒・繊維/ふつう/橙	無節Lrを横位施文する。黒浜式
	4	第102図	縄文土器 深鉢	3溝	口縁部破片		粗・白色粒・黒色粒・石英/ふつう/橙	口縁に突起を付す。2条沈線による逆U字状モチーフを描き、RLを充填施文する。加曽利E3式
	5	第102図	縄文土器 深鉢	3溝	口縁部破片		細砂、白色粒/橙/良好	波状口縁。口縁下に横位1条、2条沈線による逆U字状モチーフを描き、LRを充填施文する。加曽利E3式
	6	第102図	縄文土器 深鉢	表土	口縁部破片		細・白色粒・石英/良好/橙	2条沈線による逆U字状モチーフを描き、異条RLを充填施文する。加曽利E3式
	7	第102図	縄文土器 深鉢	表土	口縁部破片		粗・細礫・白色粒・黒色粒・石英/良好/にぶい橙	沈線による逆U字状モチーフを描き、RLを充填施文する。加曽利E3式
	8	第102図	縄文土器 深鉢	4住	胴部破片		細・チャート・白色粒/良好/橙	沈線による逆U字状モチーフ、ワラビ手状懸垂文を描き、RLを充填施文する。加曽利E3式
	9	第102図	縄文土器 深鉢	2住	胴部破片		細・白色粒・黒色粒/良好/橙	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。加曽利E3式
	10	第102図	縄文土器 深鉢	表土	胴部破片		細・石英/良好/明赤褐	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。加曽利E3式
	11	第102図	縄文土器 深鉢	2土坑	胴部破片		粗、チャート、黒色粒/にぶい橙/ふつう	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。加曽利E3式
	12	第102図	縄文土器 深鉢	表土	胴部破片		細・黒色粒・石英/良好/明赤褐	隆帯による懸垂文を施し、複節RLLを縦位充填施文する。加曽利E3式
	13	第102図	縄文土器 深鉢	3溝	胴部破片		粗・白色粒・黒色粒・石英/良好/にぶい橙	隆帯による懸垂文を施し、縦位条線を充填施文する。7住No.1と同一個体。加曽利E4式
	14	第102図	縄文土器 深鉢	表採	胴部破片		細・白色粒/ふつう/にぶい黄褐	2条沈線によるU字状モチーフを描き、LRを充填施文する。加曽利E4式
	15	第102図	縄文土器 深鉢	12住	胴部破片		粗・白色粒・黒色粒/良好/橙	隆帯によるU字状モチーフを施し、RLを充填施文する。加曽利E4式
	16	第102図	縄文土器 深鉢	3溝	胴部破片		粗・白色粒・黒色粒/良好/明赤褐	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。加曽利E4式
	17	第102図	縄文土器 深鉢	表採	胴部破片		粗・チャート・黒色粒/ふつう/にぶい黄橙	沈線による懸垂文を施し、LRを縦位充填施文する。加曽利E4式
	18	第102図	縄文土器 深鉢	1住ピット	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ふつう/にぶい黄橙	口縁が内折。帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。称名寺式
	19	第102図	縄文土器 深鉢	1住掘方	口縁部破片		細、白色粒、黒色粒/ふつう/橙	横位沈線、櫛歯状工具による刺突を施す。7住No.4と同一個体。称名寺式
	20	第102図	縄文土器 深鉢	1住14	胴部破片		細・白色粒・黒色粒/ふつう/橙	帯状沈線によるモチーフを描き、列点を充填施文する。称名寺式
	21	第102図	縄文土器 深鉢	表土	胴部破片		粗・細礫・白色粒、黒色粒/ふつう/浅黄	帯状沈線によるモチーフを描き、列点を充填施文する。称名寺式
	22	第102図	縄文土器 深鉢	3溝	胴部破片		粗・チャート・黒色粒/ふつう/にぶい橙	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。称名寺式
	23	第102図	縄文土器 深鉢	表土	胴部破片		粗・黒色粒/ふつう/明赤褐	帯状沈線によるモチーフを描く。称名寺式
	24	第102図	縄文土器 深鉢	表土	胴部破片			No.19と同一個体。称名寺式
	25	第102図	縄文土器 深鉢	表土	胴部破片		粗、黒色粒/良好/赤褐	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。堀之内2式
	26	第102図	弥生土器 台付甕	表土	胴部破片		細、黒色粒/ふつう/にぶい橙	頸部に右回りの3連止め廉状文をめぐらし、肩部に沈線による重四角形状モチーフを描く。中期後半
	27	第102図	常滑陶器 甕	1区	体部片		灰	胎土がやや粗く、焼き締まりがやや弱い。外面に叩き目。内面の撫では丁寧。中世。
	28	第102図 PL.35	打製石斧	表土		長9.7 幅8.4 厚3.2 重189.4	分銅型、細粒輝石安山岩	完成状態。裏面側上端の刃部側には薄い大きな剥離面があり、この剥離面を切る小剥離痕がある。下端刃部の摩耗は明らかであるが、上端側剥離は使用中の破損というより再生過程で生じた可能性を想定しておきたい。
	29	第102図 PL.35	石錐	ローム漸移層		長(3.8) 幅1.1 厚0.8 重2.2	チャート	先端部分を欠損するため完成品か未製品か不明。加工状態は粗く、側縁は捩れる。小さな摘み部が付く。
	30	第102図 PL.35	三角錐形石器	1住		長(7.9) 幅6.8 厚4.4 重334.0	柱状礫、ホルンフェルス	左辺側を加工して「握り部」を作出。底面部は周辺礫面から加撃しているが、中央付近の稜が高く残り、製作を放棄したものと捉えた。
2区遺構	No.	挿図・PL番号	種類・器種	出土位置	残存率	計測値(cm、g)	胎土/焼成/色調または石材	成形・整形の特徴・型式(縄文)
1号竪穴住居	1	第104図	土師器 高杯	床直	杯身部底部～脚部片		細/良好/赤褐	底部はナデ、脚部はヘラ磨き。内面脚部はヘラナデ。
	2	第104図	土師器 壺	床直	底部～胴部片	底4.0 胴9.4	細/良好/明赤褐	底部から胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
1号溝	1	第108図	須恵器 杯	埋没土	1/3	口11.2 高4.0 底6.3	細・粗粒・角/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
遺構外出土遺物	1	第112図	土師器 高杯	表採	杯身部底部～脚部片		細/良好/橙	杯身部はホゾ状差し込みで脚部と接合。脚部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデ。
	2	第112図	須恵器 甕	表採	胴部下位片	底1.4	細・長石/還元焔/灰白	外面は平行叩き痕をほとんどナデ消している、最下位に1段のヘラ削り。内面もアテ具痕をナデ消している。
	3	第112図	在地系土器 片口鉢	2区	1/7	口(26.0)	灰白	断面から器表まで灰白色であるが、口縁端部内面から口縁部外面下3.5cm程の間のみ帯状に暗灰色を呈する。器壁は薄く、端部も薄い玉縁状を呈する。13世紀か。
3区遺構	No.	挿図・PL番号	種類・器種	出土位置	残存率	計測値(cm、g)	胎土/焼成/色調または石材	成形・整形の特徴・型式(縄文)
1号竪穴住居	1	第114図	土師器 杯	埋没土	口縁部～底部小片	口11.8	細/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。
	2	第114図	土師器 壺	埋没土	底部～胴部下位片	底3.2	細/良好/灰褐	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
2号竪穴住居	1	第115図	須恵器 杯	埋没土	底部～体部下位片	底7.0	細/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
	2	第115図	土師器 甕	埋没土	口縁部片	口16.6	細/良好/にぶい赤褐	口縁部は内外面とも横ナデ。
3号竪穴住居	1	第116図	土師器 杯	床直		口11.7 稜11.4	細/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜径下)から底部は手持ちヘラ削り。
4号竪穴住居	1	第118図	土師器 杯	埋没土	口縁部～底部片	口12.8 底11.2	細/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。
	2	第118図	須恵器 杯蓋	埋没土	1/2	口13.0	細・褐粒/酸化焔/明赤褐	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付が剥落、天井部中ほどは回転ヘラ削り。
	3	第118図	土師器 甕	埋没土	口縁部片	口15.8	細/良好/明黄褐	口縁部は内外面とも横ナデ。
7号土坑	1	第121図	土師器 台付甕	埋没土			細/良好/明黄褐	脚部にはハケ目(6本)が残る.内面はナデ。内面底部に砂粒の多い粘土が貼付。
	2	第121図	土師器 台付甕	埋没土		脚径11.4	細/良好/にぶい黄橙	脚部にはハケ目(6本)が残る.内面はナデ。内面底部に砂粒の多い粘土が貼付。
3区9号土坑	1	第121図	在地系土器 皿	埋没土	1/8	(8.0)	にぶい橙	他の土器皿と胎土が明らかに異なる。口縁部のみ丁寧な横撫でにより内湾させる。底部外面は撫でで器表に型肌状の微細な窪みが残る。底部内面は撫で。器高は低く、底部と体部との境は不明。器表はやや摩滅。中世。
31号ピット	1	第123図 PL.36	砥石	埋没土		長5.1 幅2.3 厚4.2 重74.8	切り砥石、砥沢石	四面使用。裏面側左辺がV字状に切り込まれる。中央付近で破損した砥石が隣接遺跡(笠松遺跡1区154号ピット)出土の砥石と接合。
1号井戸	1	第124図 PL.36	椀型鍛冶	埋没土	1/3	長7.2 幅4.3 厚1.8 重100.3		上半欠損。鉄質はやや密。下面の一部1炉床土が付着している。上面左の突起は羽口の顎部の容損。
1号溝	1	第125図 PL.36	土師器 甕	埋没土		底7.7	細・褐粒/良好/橙	底部はヘラ削り、周囲はナデ、胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
2号溝	1	第127図	土師器 杯	埋没土	1/4	口14.0 高4.3	細・褐粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から口縁部に斜放射状ヘラ磨き。
	2	第127図	土師器 甕	2、4溝埋没土	頸部～胴部上位片		細/良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
8号溝	1	第128図	須恵器 杯	埋没土	口縁部小片	口13.2	細/還元焔/灰	ロクロ整形、回転方向不明。
	2	第128図	須恵器 杯	埋没土	底部小片	底6.6	細/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転糸切り無調整。
	3	第128図 PL.36	龍泉窯系 青磁皿	埋没土	1/4	口(10.0)	灰白	底部内面周縁の釉下に低い段差。外面口縁部下は回転篦削り。口縁部は内湾する。残存部に文様は認められない。底部付近の器壁は厚い。13世紀。
	4	第128図 PL.36	搬入系土器 皿	埋没土	1/8	口(8.4)	にぶい黄橙	他の土器皿と胎土が明らかに異なる。口縁部のみ丁寧な横撫でにより内湾させる。底部外面は撫でで器表に型肌状の微細な窪みが残る。底部内面は撫で。器高は低く、底部と体部との境は不明。中世。
10号溝	1	第128図	須恵器 杯	埋没土	底部～体部下位片	底6.9	細/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後回転ヘラ削り、体部下位も回転ヘラ削り。
	2	第128図	須恵器 杯	埋没土	口縁部～体部片	口9.7	細/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削りか、器面磨滅のため不鮮明。
16号溝	1	第131図 PL.36	須恵器 杯	埋没土	口縁部一部欠損	口12.6 高3.6 底6.3		
	2	第131図 PL.36	須恵器 杯	埋没土	口縁部1/3欠損	口13.0 高3.3 底6.9		
	3	第131図	須恵器 杯	埋没土	口縁部片	口12.7 底9.2		
	4	第131図 PL.36	須恵器 杯	埋没土	3/4	口13.0 高3.4 底6.1		
	5	第131図 PL.36	須恵器 杯	埋没土	1/3	口14.4 高4.1 底8.2		
	6	第131図 PL.36	須恵器 杯	埋没土	1/3	口15.7 高5.4 底9.8		

16号溝	7	第131図 PL.36	須恵器 皿	埋没土	口縁部1/4欠損	口21.3 高3.9 底12.2 台12.2		
	8	第136図	須恵器 羽釜	埋没土	口縁部～胴部片	口21.0 鍔26.3		
17号溝	1	第132図	在地系土器 片口鉢	埋没土	口縁部から体部片		灰・灰白	断面は灰白色、器表は灰白から暗灰色。口縁部は幅広めに横撫で。口縁部下で外反する。口縁端部は丸みを帯びた玉縁状をなす。体部内面下半は使用により摩滅し、平滑となる。14世紀中頃。
遺構外出土遺物	1	第135図 PL.36	打製石斧	16溝		長11.1 幅5.0 厚1.2 重87.1	短冊型、細粒輝石安山岩	完成状態。刃部摩耗・捲縛痕あり。刃部再生が明らかで、再生後も使用され、刃部摩耗が生じている。
	2	第135図 PL.36	打製石斧	表土		長(10.9) 幅6.4 厚2.9 重192.9	短冊型、黒色頁岩	完成状態。側縁は直線的に開き気味で、撥状に近い。破損して刃部形状は不明だが、裏面刃部側に摩耗痕がある。石斧頭部を破損。
	3	第135図 PL.36	石鏃	2溝		長1.7 幅1.5 厚0.4 重0.65	凹基無茎鏃、チャート	完成状態。U字状に大きく基部を抉る。鍬形鏃。
	4	第135図 PL.36	石鏃	22土		長3.1 幅1.5 厚0.5 重1.54	有茎鏃、黒色頁岩	完成状態。側縁は直線的だが「返し部」付近で「ハ」字状に大きく開く。茎は太く大きい。
	5	第135図 PL.36	石核	16溝埋没土		長4.2 幅5.5 厚2.5 重58.8	分割礫？、黒曜石	下面側から縦長剥片を剥離したのち、上端側から小型剥片を剥離。裏面側は礫面を除去するための剥離が連続する。
	6	第135図	須恵器 杯	埋没土	底部片	底7.6	細・褐粒/酸化焔/明赤褐	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラら削り。
	7	第135図	須恵器 椀	埋没土	口縁部片？	口15.7	細/酸化焔/にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回りか。
	8	第135図	灰釉陶器 椀	埋没土	底部片	底8.4 台7.8	微砂粒・水簸/還元焔/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ヘラナデ。光ケ丘1号窯式期。
	9	第135図	須恵器 羽釜	埋没土	口縁部～胴部片	口22.2 鍔26.2	細・粗粒・角/酸化焔/灰黄褐	ロクロ整形、回転右回りか。鍔は貼付。
4区遺構	№.	挿図・PL番号	種類・器種	出土位置	残存率	計測値(cm、g)	胎土/焼成/色調または石材	成形・整形の特徴・型式(縄文)
24号ピット	1	第140図	常滑陶器 甕	埋没土	破片		灰色	器表は褐色。火膨れが認められる。中世。
4号溝	1	第143図 PL.36	瀬戸・美濃陶器 鉄絵鉢	埋没土	1/8	(14.0)	浅黄	内面に鉄絵。内面から高台外面付近に長石釉か。底部内面に目痕。江戸時代。
	2	第143図 PL.36	瀬戸・美濃陶器 円盤状陶製品(鉢)	埋没土	完形	口3.8 底3.6 高0.9	灰黄	鉄絵鉢の体部片周囲を細かく打ち欠いて円盤状にする。江戸時代。二次加工。
	3	第143図 PL.36	在地系土器 皿	底面	口縁部1/4欠	口(6.3) 底4.0 高1.9～2.3	にぶい橙	器壁は厚く、器高低い。体部内面は直線的に開くが、外面上半は内湾するように膨らむ。底部内面に指撫で。底部内面に圧痕。底部切り離し技法不明。中世。
	4	第143図 PL.36	在地系土器 皿	埋没土	口縁部1/3欠	口7.6 底4.4 高2.2	黒	器表と割れ口は黒色。轆轤整形で回転方向不明。底部内面と体部の境は不明瞭。底部内面の1部に油煙付着。底部内面に指撫で。底部外面に切り離し痕は認められない。
	5	第143図	在地系土器 焙烙	埋没土	口縁部片		黄灰	断面は黒色から暗灰色、器表付近は黄灰色、器表は灰色から暗灰色。内面中位に明瞭な段差。口縁端部外面は明瞭な稜をなし、端部は平坦。端部内面は小さく突き出す。16世紀後半～17世紀。
	6	第143図	在地系土器 皿	埋没土	口縁部1部、底部1/4	口(8.4) 底(6.4) 高2.2	黒色	器壁はやや厚く、体部はゆるく内湾する。
	7	第143図 PL.36	在地系土器	底面	口縁部片		浅黄橙	断面は黒色、器表付近から器表は浅黄橙色。口縁部横撫で。内面の器表は摩滅。内面に竹管状の円文が3箇所に認められる。中世～近世。
	8	第143図	在地系土器 焙烙	埋没土	口縁部片		にぶい黄橙	外面器表のみ黒褐色。器壁やや厚く、器高もやや高い。口縁端部上面は窪み、内外の端部は尖り気味に丸みをもつ。外面下半は皺状亀裂の型肌痕残る。16世紀後半～17世紀前半か。
	9	第143図	在地系土器 壺	埋没土	口縁部		灰色	還元炎焼成で焼き締まり、陶器に近い焼き上がり。頸部は短く、口縁部は玉縁状をなす口縁端部上端は上方に小さくつまみ上げる。中世。
	10	第143図	常滑陶器 壺	埋没土	底部片	底(14.0)	灰黄	底部内面に自然釉かかる。内面調整は粗い。中世。
	11	第143図	常滑陶器 片口鉢	埋没土	口縁部片		灰	片口部片。口縁端部外面をつまみ上げ、外面に段差をつける。片口鉢Ⅱ類。13世紀後半。
	12	第143図	常滑陶器 片口鉢	埋没土	口縁部片		にぶい橙	口縁部は回転横撫で。口縁は次第に薄くなり、端部は丸い。片口鉢Ⅱ類。13世紀。
	13	第143図	在地系土器 焙烙	埋没土	口縁部片		にぶい橙	内面中位に明瞭な段を有する。段上に内耳貼り付け時の窪みが残る。外面下位に皺状の型肌痕残る。16世紀後半～17世紀。
	14	第143図	常滑陶器 甕	埋没土	肩部片		灰	外面に自然釉が細かく斑状にかかる。内面に指頭圧痕廻る。中世。
	15	第143図	瓦 平瓦	埋没土	破片	厚1.7	赤灰	凹面に模骨痕と布圧痕。凸面は撫での後、格子状叩き目。古代。
6号溝	1	第145図 PL.36	瀬戸・美濃陶器 皿	埋没土	1/5	底(5.8)	灰白	内外面に灰釉。貫入が入る。高台は低く、断面三角形。16世紀。大窯。
8号溝	1	第143図 PL.36	鎌	埋没土	刃部1/2欠損	長(7.4) 幅2.0 厚0.4 重(24.4)		柄への留め具が残る
遺構外出土遺物	1	第148図 PL.36	在地系土器 皿	埋没土	口縁部1部、口縁部以下1/2	口(10.2) 底4.4 高3.1～3.5	橙	底部小さく、体部下位は外反し、体部中位以上は内湾する。底部内面に強い指撫で。底部外面に圧痕。底部切り離し技法不明。中世。

第38表 上根遺跡出土遺物観察表

1区遺構	№.	挿図・PL番号	種類・器種	出土位置	残存率	計測値(cm、g)	胎土/焼成/色調または石材	成形・整形の特徴・型式(縄文)
5号溝	1	第151図 PL.37	敲石	埋没土		長(12.1) 幅9.4 厚7.2 重1410.0	棒状礫、粗粒輝石安山岩	小口部先端に打痕、背面・先端側に断面ロート状を呈す小孔1を穿つ。小口部打痕は風化の新旧があり、縄文期石器が再利用された可能性がある。このほか、裏面側には摩耗痕が広がる。
6号溝	1	第152図	常滑陶器 甕か壺	底面から1cm	体部片		灰	外面の器表は黒褐色、内面の器表はにぶい赤褐色。外面に自然釉が1条流れる。中世。
遺構外出土遺物	1	第153図 PL.37	石鏃	1区2面		長3.2 幅1.7 厚0.4 重1.9	凹基無茎鏃、チャート	完成状態？薄手で、石鏃としての完成度も高い。浅く基部を抉るタイプの石鏃。使用状態で基部側を欠損する例は少なく、欠損理由は判断が難しい。
	2	第153図 PL.37	龍泉窯系青磁碗	表土	体部片		灰	外面は鎬蓮弁文。釉は1部白濁し、焼成不良。13世紀。
2区遺構	№.	挿図・PL番号	種類・器種	出土位置	残存率	計測値(cm、g)	胎土/焼成/色調または石材	成形・整形の特徴・型式(縄文)
1号竪穴状遺構	1	第155図 PL.37	石製品？	埋没土		長8.9 幅3.4 厚1.9 重94.1	河床礫(板状)、黒色頁岩	背面側中央より下端・裏面側端部に研摩痕があり、磨製石斧様の研摩に似る。この研磨痕に覆われたところ以外の礫面には粗い線条痕が多方向にある。礫形状・石材・研磨という属性は礫石斧の構成要素だが、刃部作出がなく断定できない。
3号竪穴状遺構	1	第155図	瀬戸・美濃陶器 丸皿	埋没土	1/4		白	志野丸皿。内外面に長石釉。高台脇小さく削り込む。17世紀。
	2	第155図	製作地不詳陶器 皿	埋没土	1/9	口(10.5) 底(7.4) 高高1.9	灰	内面から外面中位に灰釉。外面の口縁部以下は回転箆削り。底部外面は回転箆削りか。無高台。時期不詳。
1号土坑	1	第157図	在地系土器 焙烙	埋没土	破片		橙	断面中央は黄灰色、器表付近は橙色、内面の器表はにぶい赤褐色、外面の器表は黒褐色。体部外面下端から底部外面の器表は灰褐色。口縁端部上面は平坦。内面下位に明瞭な段差。底部外面は砂圧痕状の型肌。16世紀～17世紀。
	2	第157図 PL.37	板碑	底面から15cm		長19.7 幅9.7 厚1.6 重568.7	緑色片岩	碑面は丁寧な研磨が施され、枠線と三尊種子右脇侍の連座の一部、および光明真言の冒頭三文字(オン・ア・ボ)の一部が残る。碑面の磨滅は少なく、いずれも明瞭な掘り込みを残す。厚さ1.1cmを測る大型板碑の破片。主尊・紀念名は不明。板碑は転用され、側面は斜めに面取り整形したのち、二次研摩する。
2号土坑	1	第157図 PL.37	石製品	埋没土		高(15.3) 幅(13.7) 厚11.0重1607.7	楕円礫、二ッ岳軽石地輪、粗粒輝石安山岩	径6cm・深さ1.4cmの孔を穿つ。孔内面は未整形。孔は礫中央より明らかに上端側に偏っており、これとは別の孔が穿たれていた可能性がある。
	2	PL.37	五輪塔	底面から4cm		高17.2 幅21.2 厚22.0 重16700.0		それぞれ側面は未整形部分を残し、雑な作り。上面・下面とも礫面を四隅に残す。下面側にはノミ状工具による整形は見られない。
	3	PL.37	五輪塔	埋没土		高20.2 幅23.8 厚23.4 重19550.0	地輪、粗粒輝石安山岩	下面を除く各面をノミ状工具により整形後、粗磨き。下面は礫面を未加工の状態で用いる。
1号溝	1	第158図 PL.37	在地系土器 焙烙	埋没土	口縁部1/7、底部1/4	口(35.8) 底(32.0) 高高5.7	褐灰	断面中央は黒色、器表付近は灰白色、底部の断面は橙色。口縁部から体部外面の器表は黒褐色で上半に煤付着。体部外面下位から底部外面の器表はにぶい橙色。内耳は体部内面に貼り付け、内耳下部付近に5mmの段差を廻らす。内面段差付近の外面側は強い撫でにより凹線状に窪み、上部は肥厚する。口縁端部上面は平坦。16世紀～17世紀。
	2	第158図 PL.37	在地系土器 焙烙	底面から3cm	1/4	口(34.4) 底(31.0) 高高5.7	暗灰	器壁の厚い部分の断面中央は暗灰色、断面は灰白色、内面の器表は暗灰色、外面の器表は黒褐色で体部下端以下は灰白色。外面の1部に煤付着。口縁部端部上面は平坦で内傾し、端部内面は僅かに内側に突き出る。内面中位付近に明瞭な段差。16世紀～17世紀。
	3	第158図	在地系土器 焙烙	底面から2cm	口縁部片		灰	断面中央は黒色、断面中央付近は灰白色、器表付近は橙色、器表は黒褐色。口縁端部は平坦。内耳下部は体部に貼り付ける。16世紀～17世紀。
	4	第158図	在地系土器 片口鉢	埋没土	体部下位片		灰	還元炎でやや焼き締まる。内面は使用による摩滅で平滑となる。中世。
	5	第158図	在地系土器 片口鉢	埋没土	片口部片		灰	還元炎でやや焼き締まる。片口下部から体部上位片であろう。中世。

1号溝	6	第158図	在地系土器 片口鉢	埋没土	1/6	底(12.0)	灰白	還元気味の焼成であるが、焼き締まりはない。底部回転糸切り無調整であるが、摩滅により不鮮明。底部外面周縁から体部内面下位は使用による摩滅でやや窪む。中世。
	7	第158図 PL.37	在地系土器 皿	底面から2cm	完形	口(6.9) 底5.1 高高1.7～2.0	灰白、黒	内外面の器表は摩滅が著しく、調整痕や切り離し痕は不明。器高は低く、外面中位は強く内湾する。内面の底部と体部境は不明瞭。口縁端部の1部に油煙残存する。中世以降。
	8	第158図 PL.37	在地系土器 皿	埋没土	底部	底5.1	にぶい橙	体部外反して開く。底部左回転糸切り後、直線状の圧痕多く付く。底部内面に指撫で。中世。
	9	第158図	在地系土器 皿	埋没土	口縁部欠	口(7.6) 底5.2 高高1.8	橙	器表の摩滅により底部の糸切り痕不明瞭。底部内面は強い指撫で痕により窪む。中世。
	10	第159図	五輪塔	底面から1cm		高24.7 幅15.6 厚15.1 重7850.0	空風輪、粗粒輝石安山岩	最大径が括れ部に接する部分にある。風輪部正面は平坦に敲打・磨き整形されているが、両側面および頭頂部には粗い工具痕を残す。
	11	第158図 PL.37	五輪塔	埋没土		高27.3 幅26.7 厚23.1 重32460.0	地輪、粗粒輝石安山岩	側縁は磨き整形。上面の加工は粗く、四隅に礫面を残す。下面は窪み、粗加工仕上げ。
	12	第158図 PL.37	五輪塔	底面		高14.7 幅21.2 厚21.6 重12300.0	地輪、粗粒輝石安山岩	側面は磨き整形。上面は礫面を四隅に残し、下面は礫中央部を粗割したのみで、製作上の省力化を計る。
	13	第159図 PL.37	五輪塔	埋没土		高(16.8) 幅(20.1) 厚33.6重 9900.0	火輪、馬見岡凝灰岩	側面観は台形状を呈し、上面を孔を穿こうとした痕跡を有する。上面・底面の一部に幅2cm前後の平ノミ状工具痕を、側面に平ノミ状・丸ノミ状工具痕を残す。整形状態は粗く、未製品である可能性が高い。
	14	第159図 PL.37	石製品	埋没土		高10.8 幅16.5 厚16.5 重3734.8	磚？粗粒輝石安山岩	上面左下の隅は若干傾斜するよう整形、これに段整形が伴う。下面は四隅に礫面が残り、製作の省力化が明らか。側面は砥石様の平滑面となっており、転用・使用した可能性が残る。
2号溝	1	第159図	肥前陶器 陶胎染付碗	底面	1/4	底(4.2)	灰	外面に染付。高台外面に2重圏線。高台端部を除き透明釉。18世紀前半～中頃。
	2	第159図 PL.38	瀬戸・美濃陶器 碗	埋没土	底部	底5.6	灰白	内面から高台内に飴釉。高台外面と高台内は部分的に無釉、高台端部は無釉。高台脇は細かい敲打により円形に整形した可能性がある。円盤状に二次加工か。江戸時代。
	3	第159図 PL.38	銭貨 渡来銭	埋没土	完形	径2.3 厚0.1 孔0.7 重1.5		残存状態不良のため判読不能
3号溝	1	第160図	土師器 高杯	埋没土	脚部片		細/良好/にぶい橙	内面に粘土紐巻き上げ痕が残る。脚部は縦位のヘラ磨き、裾部は横ナデ。内面脚部はヘラナデ。
4号溝	1	第160図	在地系土器 片口鉢	底面から1cm	底部		灰	器表は暗灰色。器壁厚く、焼成は還元炎。底部内面は使用により器表が摩滅する。底部回転糸切り無調整。中世。
	2	第160図	瀬戸・美濃陶器 すり鉢	埋没土	1/8	底(9.2)	灰白	底部右回転糸切無調整。全面に錆釉を薄くかける。内面は底部と体部境を除き使用により摩滅する。時期不詳。
	3	第160図	在地系土器 内耳鍋	底面から1cm	口縁部片		黒	断面中央は暗灰色、断面から器表付近は灰白色、器表は黒色。口縁部は下端で外方に屈曲した後、内湾する。端部は丸みを帯びる。口縁部内面下端は稜をなす。内耳は口縁部に貼り付ける。15世紀後半。
	4	第160図	常滑陶器 甕	埋没土	破片		灰	内面の器表は暗赤褐色。外面は自然釉の剥がれや白濁が多い。肩部片か。中世
	5	第160図 PL.38	板碑片	底面から18cm		長(12.8) 幅(6.6) 厚1.6 重13.61	雲母石英片岩	裏面側に平鑿状工具による横位整形痕が残る。背面側は剥落して不明。
	6	第160図 PL.38	砥石	底面から22cm		長(4.9) 幅(4.6) 厚1.2 重43.7	切り砥、石砥沢石	表裏面を使用面とする。裏面側に粗い条痕が斜行するほか、左側縁・下端坑口に刃ならし傷がある。上端側を欠損する。
	7	第160図 PL.38	石鉢	底面から14cm		重313.3	粗粒輝石安山岩	内面は丁寧な磨き整形、外面はノミ状工具による整形痕を残す。上端中央が丸味を帯びており、口縁部と認定しておいたが、内面右辺側の破断面に並行して高まりがあり、判断が難しい。
	8	第160図 PL.38	宝塔	底面から3cm		高(17.2) 幅(17.7) 厚16.1 重 4400.0	基礎部、馬見岡凝灰岩	上面に円形の凹み部があることから、上部に円形の塔身が乗る。幅2cm前後の平ノミ状工具による整形痕が側面から底面にあり、丁寧な研磨整形は行われていない。上面は磨滅しているが、上面から破断面にかけて黒ずんでおり、破損後に被熱・磨滅したものだろう。
遺構外出土遺物	1	第163図 PL.38	縄文土器 深鉢	4溝	胴部破片		粗・チャート/ふつう/明赤褐	帯状沈線によるモチーフを描き、列点を充填施文する。称名寺式
	2	第163図 PL.38	縄文土器 深鉢	3溝	胴部破片		粗・チャート・白色粒・黒色粒/ふつう/にぶい橙	横位隆帯をめぐらし、隆帯下にLRを縦位充填施文する。加曽利E4式
	3	第163図 PL.38	打製石斧	埋没土		長(10.2) 幅8.4、厚2.5 重199.4	分銅型、ホルンフェルス	完成状態。側縁を弱く弧状に抉るタイプで、装着部は潰れており、使用状態にあることを示している。器体刃部側を欠損する。
	4	第163図	埴輪 形象か	1号溝埋没土	小片・部位不明		細砂粒/良好/橙	外面はハケ目、器面磨滅のため単位不明。内面はナデ。
	5	第163図	埴輪 円筒か	4号溝埋没土	基部片		細砂粒/良好/にぶい橙	外面はハケ目、器面磨滅のため単位不明。内面はナデ。
	6	第163図	須恵器 杯蓋	1号溝底面から3cm	摘み～天井部片	摘6.4	細砂粒・角閃石/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付。
	7	第163図 PL.38	銭貨 渡来銭	2区	完形	径2.3 厚0.1 孔0.7 重2.2		「元豊通寶」
	8	第163図 PL.38	鉄製品 釣手金具	2区	一部片	長(4.1) 幅2.1 厚1.0 重(14.9)		錆化が進んでいる。

3区遺構	№.	挿図・PL番号	種類・器種	出土位置	残存率	計測値(cm、g)	胎土/焼成/色調または石材	成形・整形の特徴・型式(縄文)
1号竪穴住居	1	第167図	土師器 高杯	床直	杯身部口縁部片	口19.4	細/良好/にぶい黄橙	口縁部は外面上半が横ナデ、下半は縦位のヘラナデ、内面は下半に横位のヘラナデ。
	2	第167図	土師器 高杯	床直	杯身部口縁部片	口20.2	細・褐色粒/良好/明赤褐	口縁部は外面が横ナデ、内面は下半にヘラ磨きか、器面磨滅のため単位不明。
	3	第167図	土師器 高杯	埋没土	杯身部底部片	稜9.0	細・褐色粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、底部(稜径下)はヘラ削り、器面磨滅のため単位不明。
	4	第167図	土師器 高杯	床直	脚部裾部片	脚径13.6	細/良好/にぶい黄橙	脚部裾部は内外面とも横ナデ。
	5	第167図	土師器 坩	床直	口縁部～胴部片	口9.0 胴8.2	細・褐色粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はナデ。内面胴部はナデ。
	6	第167図 PL.38	土師器 甕	床直	口縁部～胴部上半	口17.8 胴21.0	細・角・褐色粒/良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
	7	第167図 PL.38	土師器 甕	埋没土	口縁部～胴部上位片	口19.5	細・褐色粒/良好/にぶい橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
	8	第167図	土師器 甕	埋没土	口縁部～頸部片	口19.8	細・粗粒・褐色粒/良好/橙	口縁部は横ナデか、胴部は内外面とも器面磨滅のため不鮮明。
	9	第167図	土師器 甕	床直	胴部片	胴29.0	細・褐色粒/良好/赤褐	内面に輪積み痕が残る。胴部は上半がナデ、下半はヘラ削り。内面はヘラナデか、器面磨滅のため単位不明。
	10	第167図	土師器 甕	貯穴埋没土	底部～胴部下位片	底8.0	細・粗粒・角/良好/明赤褐	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
3号竪穴住居	1	第169図 PL.39	土師器 坩	埋没土	口縁部～胴部下位片	口13.2 胴12.6	細/良好/灰褐	口唇部は横ナデ、頸部から口縁部は放射状ヘラ磨き、胴部は上半がナデ、下半はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
6号土坑	1	第165図 PL.38	縄文土器 深鉢	埋没土	胴部破片		粗砂、チャート、白色粒、石英/ふつう/にぶい黄橙	帯状沈線によるモチーフを描き、無節Lrを充填施文する。称名寺式
7号土坑	1	第165図 PL.38	縄文土器 深鉢	埋没土	口縁部破片		粗砂、チャート、黒色粒、石英/ふつう/黒褐	波頂部の環状突起。波頂部下にレンズ状、横位の隆帯を貼付し、鎖状隆帯を垂下させる。帯状沈線によるモチーフを描き、LR、列点を充填施文。波頂部にも窩文、沈線を施す。称名寺式
	2	第165図 PL.38	磨石	底面		長10.6 幅10.3 厚8.8 重1014.9	球形礫、粗粒輝石安山岩、丸石？	背面側が弱く摩耗するほか、端部に打痕がある。裏面側には使用に伴う積極的痕跡は見られない。
2号溝	1	第175図	美濃陶器 皿	埋没土	1/8	口(10.4)	灰白	体部やや内湾。外面の口縁部以下は回転箆削り。内面から高台脇に灰釉を薄くかける。17世紀。
3号溝	1	第175図	土師器 甕	埋没土	口縁部～頸部片	口18.4	細・粗粒・チャート/良好/橙	口縁部は折り返し。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削りか、残存部が少なく単位不明。
	2	第175図	常滑陶器 甕	埋没土	体部片		灰白	外面の器表は暗赤褐色。内面に自然釉が薄くかかり、体部下位片と考えられる。外面に叩き目。粘土紐部分に叩き目を廻らす古い段階の甕であろう。12世紀～13世紀か。
	3	第175図	常滑陶器 甕	埋没土	体部片		灰色	内面の器表は灰褐色、外面の器表は褐灰色。外面に方形の叩き目。中世。
5号溝	1	第176図	須恵器 椀	埋没土	底部片	底6.9	細/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ナデ。
	2	第176図	土師器 甕	埋没土	口縁部～胴部上位片	口20.7	細/良好/にぶい赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
6号溝	1	第176図	土師器 高杯	埋没土	杯身部片	稜10.4	細/良好/明赤褐	杯身部は口縁部が横ナデ、底部(稜下)はヘラ削りか、器面磨滅のため単位不明。
	2	第176図	土師器 高杯	埋没土	脚部片		細/良好/明赤褐	内面に粘土紐巻き上げ痕が残る。脚部はナデ、裾部は横ナデ。内面脚部はヘラナデ。
	3	第176図 PL.39	須恵器 杯蓋	埋没土	3/5	口11.6 高4.0 底6.9	細/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。口縁部に歪がみられる。
	4	第176図	灰釉陶器 長頸壷	6、10溝 埋没土	底部片	底8.3 台8.4	細/還元焔/灰白	ロクロ整形､回転右回り｡高台は貼付､底部はナデ｡内面底部に降灰が付着｡
7号溝	1	第176図	土師器 高杯	埋没土	脚部片	脚径11.4	細・褐色粒/良好/にぶい橙	脚部はヘラ削り、裾部は横ナデ。内面はヘラナデ。
10号溝	1	第177図	須恵器 杯	埋没土	口縁部～体部片	口12.7 底8.5	細/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整か。
	2	第177図	須恵器 杯	埋没土	底部～体部片	底8.0	細・角/還元焔/灰白	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転糸切り後周囲を回転ヘラ削り。
	3	第177図 PL.39	須恵器 双耳杯	表採 埋没土	1/2	口11.2 高4.7 底8.0 台7.5	細・角/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台と把手は貼付、底部は回転ナデ。把手は長さ3.0cm、幅3.3cm。

10号溝	4	第177図	在地系土器 片口鉢	埋没土	体部片		灰	断面は灰色、器表は褐灰色。還元炎焼成で焼き締まりはない。内面の下半は使用により、器表の1部が摩滅し平滑となる。中世。
遺構外出土遺物	1	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	3溝	胴部破片		細砂・チャート・石英/良好/橙	撚糸文Rを縦位施文する。撚糸文系
	2	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	1溝	胴部破片		細砂・黒色粒/良好/橙	撚糸文Rを縦位施文する。撚糸文系
	3	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	1溝	胴部破片		細砂・チャート・繊維/ふつう/赤褐	細沈線により区画、区画内に沈線を充填施文する。区画沈線上に刺突を施す。鵜ヶ島台式
	4	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	6溝	口縁部破片		細砂・黒色粒/ふつう/浅黄橙	波状口縁。隆帯をめぐらして口縁部無文帯を区画、隆帯下にRLを充填施文する。加曽利E4式
	5	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	10溝	胴部破片		粗・白色粒・黒色粒/良好/浅黄	横位隆帯をめぐらし、隆帯下にLRを縦位充填施文する。加曽利E4式
	6	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	P1埋没土	口縁部破片		粗・チャート・黒色粒/ふつう/にぶい黄橙	弧状沈線、列点を施す。称名寺式
	7	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	ローム確認面	口縁部破片		細砂・チャート/ふつう/にぶい黄橙	横位沈線を施す。称名寺式
	8	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	6溝	口縁部破片		細砂・黒色粒/良好/橙	波頂部の把手。円孔、沈線を施す。称名寺式
	9	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	7溝	口縁部破片		粗、チャート細礫、黒色粒/良好/橙	波状口縁の波頂部。帯状沈線によるモチーフを描く。口縁内面を肥厚させ、波頂部下に刺突を施す。称名寺式
	10	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	1溝	口縁部破片		粗・チャート・黒色粒/良好/にぶい橙	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。称名寺式
	11	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	3溝	胴部破片		粗・黒色粒/ふつう/黒褐	帯状沈線によるモチーフを描き、列点を充填施文する。称名寺式
	12	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	5溝	胴部破片		粗・チャート・石英・黒色粒/良好/橙	帯状沈線によるモチーフを描き、列点を充填施文する。称名寺式
	13	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	表土	胴部破片		細・白色粒・黒色粒/ふつう/浅黄橙	帯状沈線によるモチーフを描き、列点を充填施文する。称名寺式
	14	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	5溝	胴部破片		細・チャート・黒色粒/良好/橙	帯状沈線によるモチーフを描く。称名寺式
	15	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	1住	胴部破片		粗・白色粒・黒色粒・石英/ふつう/にぶい黄橙	帯状沈線によるJ字文を描き、列点を充填施文する。称名寺式
	16	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	2住	胴部破片		粗・黒色粒/ふつう/浅黄	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。称名寺式
	17	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	表土	胴部破片		粗・チャート中礫・白色粒/ふつう/にぶい黄橙	斜位、弧状の沈線を施す。称名寺式
	18	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	10溝	胴部破片		粗・黒色粒/ふつう/橙	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。称名寺式
	19	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	6溝	胴部破片		細/ふつう/にぶい橙	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。称名寺式
	20	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	3溝	胴部破片		粗・チャート細礫・黒色粒/ふつう/明赤褐	帯状沈線によるモチーフを描く。称名寺式
	21	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	表土	胴部破片		粗・黒色粒/ふつう/にぶい褐	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。称名寺式
	22	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	1住	胴部破片		粗・チャート/ふつう/にぶい褐	帯状沈線によるモチーフを描く。称名寺式
	23	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	1住	底部破片		粗・白色粒・黒色粒/良好/赤褐	縦位帯状沈線を施し、列点を充填施文する。称名寺式
	24	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	表土	口縁部破片		粗・白色粒/ふつう/明黄褐	緩い波状口縁。列点をめぐらして口縁部文様帯を区画、波頂部下に沈線によるワラビ手文、左右に弧線文を配す。文様帯下に横位沈線を施す。堀之内1式
	25	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	4溝	胴部破片		細・黒色粒/ふつう/にぶい黄褐	くの字状に外屈。屈曲部下に2条の沈線をめぐらし、8の字貼付文を付す。堀之内1式
	26	第178図 PL.39	縄文土器 深鉢	1溝	胴部破片		粗・黒色粒/ふつう/にぶい黄褐	屈曲部に横位沈線をめぐらし、円形刺突を施した貼付文を付す。堀之内1式
	27	第178図 PL.39	須恵器 甕	表土	口縁部～胴部上位片	口23.6	細/還元焔/灰	口縁部はロクロ整形。口縁部は縦位のカキ目後横ナデ、胴部は外面に格子状叩き痕、内面にアテ具痕が残る。
4区遺構	No.	挿図・PL番号	種類・器種	出土位置	残存率	計測値(cm、g)	胎土/焼成/色調または石材	成形・整形の特徴・型式(縄文)
1号竪穴住居	1	第181図 PL.39	土師器 坩	床直	口縁部1/2欠損	口9.7 高11.1 底3.2 胴10.1	細・粗粒・角・ガラス質粒/良好/にぶい赤褐	胴部上半から口縁部は斜放射状ヘラ磨き、胴部下半は手持ちヘラ削り、底部はナデ。内面は口縁部に放射状状ヘラ磨き、胴部はナデか。
	2	第181図	土師器 小型甕	床直	口縁部～胴部上位片	口14.5	細/良好/黒葛	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削りか。内面胴部はヘラナデか。
	3	第181図 PL.39	土師器 甕	床直	口縁部～胴部下位片	口16.8 胴19.3	細・角/良好/にぶい赤褐	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は上半が横ナデ、下半はヘアナデ、胴部はヘラ削り後上半はナデ。灰面胴部はヘラナデ。
	4	第181図	土師器 甕	床直	底部～胴部下位	底7.0	細・粗粒・角・良好/にぶい赤褐	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
2号竪穴住居	1	第183図 PL.40	土師器 椀	掘方	3/5	口11.4 高5.4 底5.8 最大径12.0	細・粗粒・角/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部とその周囲は手持ちヘラ削り。
	2	第183図	土師器 高杯	床直	杯身部1/4	口16.3 稜10.2	細・褐色粒/良好/にぶい橙	杯身部は口縁部が横ナデ、底部(稜下)がヘラ削り後ナデ。
	3	第183図	土師器 高杯	床直	杯身部1/4	口17.6 稜10.0	細/良好/灰黄褐	杯身部口唇部は横ナデ、口縁部と底部(稜下)は縦位のハケ目(5本)、内面は横位のハケ目。
	4	第183図 PL.40	土師器 高杯	床直	杯身部1/2	口18.4 稜8.7	細・粗粒・角/良好/にぶい橙	杯身部口縁部は上半が横ナデ、下半と底部(稜下)はヘラ削り。
	5	第183図	土師器 高杯	床直	杯身部下半～脚部	稜6.6	細/良好/灰黄褐	内面脚部に粘土紐巻き上げ痕が残る。杯身部口縁部は横ナデ、底部(稜下)がナデ、脚部はヘラ削り。内面は脚部上半がナデ、下半がヘラナデ。
	6	第183図	土師器 高杯	床直	脚部片	脚径14.6	細・褐色粒/良好/にぶい橙	脚部はヘラ削り、裾部は横ナデ。内面脚部は上位がナデ、中・下位はヘラナデ。
	7	第183図	土師器 高杯	床直	脚部片		細・褐色粒/良好/明赤褐	脚部はヘラ削り、裾部は横ナデ。内面脚部は上半がナデ、下半はヘラナデ。羽口へ転用された可能性が窺える
	8	第183図	土師器 甕	床直	口縁部～胴部片	口11.6	細・角/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はナデ。内面胴部はヘラナデ。
	9	第183図	土師器 甕	床直	底部～胴部片	底8.0	細/良好/にぶい赤褐	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
4号竪穴住居	1	第187図 PL.40	土師器 杯	埋没土	3/4	口11.0 高3.5 稜10.3	細/やや軟質/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。
	2	第187図 PL.40	土師器 杯	床直	5/6	口11.5 高3.7 稜9.3	細・角/良好/明赤褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。
	3	第187図	土師器 杯	床直	1/3	口11.8 高3.9 稜11.5	細/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。
	4	第187図 PL.40	土師器 杯	埋没土	口縁部1/2欠損	口12.2 高4.4 稜11.0	細/良好/にぶい黄褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内面底部はヘラナデ。有段口縁部杯、内面口唇部凹線が1条巡る。
	5	第187図 PL.40	土師器 杯	床直	3/4	口12.4 高3.7 稜10.2	細/良好・燻/にぶい赤褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。有段口縁部杯
	6	第187図 PL.40	土師器 杯	床直	ほぼ完形	口12.0 高4.2 稜10.6	細・長石/良好・燻/灰黄褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。口縁部中位に凹線が1条巡る。
	7	第187図 PL.40	土師器 杯	床直	3/5	口13.2 稜10.9	細・角/良好/灰黄褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。口縁部中位に凹線が2条巡る。
	8	第187図	土師器 杯	床直	1/3	口13.7 高4.5 稜10.8	細/良好・燻/褐灰	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。有段口縁部杯
	9	第187図 PL.40	土師器 杯	埋没土	3/4	口11.9 高4.1	細・角/良好/にぶい黄褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。内面は体部から口縁部にヘラ磨き。
	10	第186図 PL.41	土師器 鉢	竈使用面	体部1/4欠損	口20.8 高11.9	細/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部はヘラナデ、器面磨滅のため単位不明。
	11	第187図 PL.41	土師器 小型甕	床直	口縁部・体部一部欠	口11.8 高14.1 底5.9	細/良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
	12	第187図 PL.40	土師器 小型甕	床直	3/5	口18.6 高16.4 底6.1	細/良好/にぶい赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
	13	第188図	土師器 甕	土坑群埋没土	口縁部～胴部上位片	口16.7	細・角/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
	14	第189図 PL.41	土師器 甕	竈使用面	口縁部～胴部上半片	口19.6 胴31.5	細・角/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ、器面磨滅のため単位不明。
	15	第188図 PL.40	土師器 甕	床直	3/5	口18.0 高33.5 底6.0	細・粗粒・角/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
	16	第188図 PL.41	土師器 甕	床直	3/4	口20.8 高38.4 底3.3	細/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
	17	第188図 PL.40	土師器 甕	床直	口縁部～胴部下位	口20.3	細・角/良好/にぶい橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
	18	第188図 PL.41	土師器 甕	掘方	4/5	口22.1 高38.8 底5.8	細・粗粒・角/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
	19	第188図	土師器 甕	床直	口縁部～胴部中位	口20.2 胴18.4	細多・角/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
	20	第188図	土師器 甕	埋没土	口縁部～胴部上半	口21.2 胴16.4	細多・角/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
	21	第188図	土師器 甕	埋没土、土坑群埋没土	口縁部～胴部中位	口21.2 胴18.7	細・粗粒・角/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ、器面磨滅のため単位不明。
	22	第187図	土師器 甕	床直	底部～胴部下位	底3.8	細/良好/にぶい黄橙	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
	23	第187図	土師器 甕	床直	底部～胴部下位	底3.1	細・角/良好/にぶい黄橙	底部は木葉痕が残る、胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
	24	第189図	土師器 甕	埋没土	底部～胴部下位	底3.7	細/良好/にぶい黄橙	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。

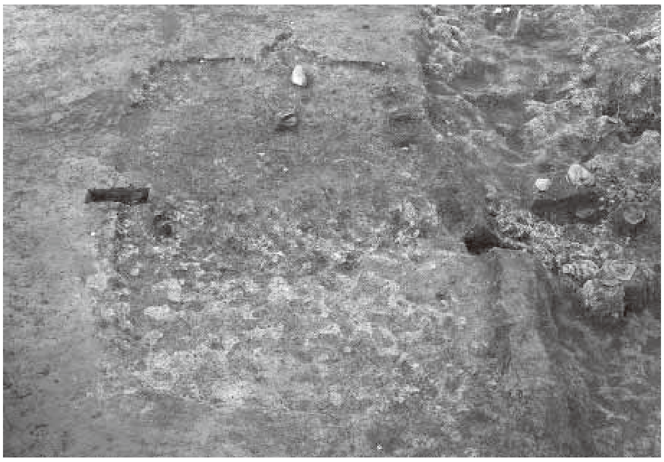
4号竪穴住居	25	第187図	須恵器 短頸壷	床直	口縁部～底部片	胴13.4	細・角/還元焔/灰	ロクロ整形､回転右回りか。底部は回転ヘラら削り。口縁部は打ち欠きか。
5号竪穴住居	1	第189図	土師器 甕	埋没土	口縁部～胴部上位片	口21.8	細/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
1号土坑	1	第190図 PL.42	土師器 杯	埋没土	口縁部1/4欠損	口11.9 高4.2 稜10.6	細/良好・燻/にぶい赤褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内面口唇部は器面磨滅。
	2	第190図 PL.42	土師器 杯	埋没土		口13.0 高4.6 稜11.0	細/良好・燻/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。口縁部中位に凹線が1条巡る。
	3	第190図	須恵器 杯	埋没土	底部～体部片	底8.0	細・角/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回りか、底部から体部下位は回転ヘラ削り。
	4	第190図 PL.42	土師器 小型甕	底面から7cm	口縁部～胴部下位片	口12.4 胴16.5	細多/良好/赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデか、器面磨滅のため単位不明。
	5	第190図 PL.42	土師器 甕	埋没土	3/4	口18.6 高30.2 底6.0	細・粗粒・角/良好/明赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
2号土坑	1	第191図	土師器 杯	埋没土	1/3	口12.4 高4.3	細/良好/明赤褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き。
3号土坑	1	第180図 PL.39	縄文土器 深鉢	埋没土	胴部破片		粗・チャート・白色粒・黒色粒・石英/ふつう/橙	帯状沈線によるモチーフを描き、RLを充填施文する。称名寺式
	2	第180図 PL.39	縄文土器 深鉢	埋没土	胴部破片		粗・チャート・石英/良好/暗赤渇	帯状沈線によるモチーフを描く。称名寺式
4号土坑	1	第180図 PL.39	縄文土器 深鉢	埋没土	胴部破片		細砂・黒色粒/良好/橙	撚糸文Rを縦位施文する。撚糸文系
	2	第180図 PL.39	縄文土器 深鉢	埋没土	胴部破片		細砂・黒色粒/良好/橙	撚糸文Rを縦位、斜位施文する。撚糸文系
	3	第180図 PL.39	縄文土器 深鉢	埋没土	口縁部破片		粗・チャート・白色粒/ふつう/にぶい黄橙	口縁の無文部。称名寺式
	4	第180図 PL.39	打製石斧？	埋没土		長(10.0) 幅10.3 厚3.5 重190.1	短冊型？ホルンフェルス	未製品。背面側右側縁および左側縁側表裏面に階段状剥離が並ぶ。加工状態は粗く、石斧未製品と判断した。
15号ピット	1	第192図	土師器 甕	埋没土	口縁部～胴部上位片	口15.8	細/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
	2	第192図 PL.42	砥石	埋没土		長10.8 幅9.9 厚5.5 重742.8	楕円礫、粗粒輝石安山岩	背面側中央付近に光沢面が形成されているほか、これに接して刃ならし傷が斜行する。
遺構外出土遺物	1	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	4住	胴部破片		粗・黒色粒/良好/赤褐	撚糸文Rを縦位施文する。撚糸文系
	2	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	ローム漸移層	胴部破片		粗・片岩/良好/橙	絡条体条痕を縦位施文する。撚糸文系
	3	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	表土	胴部破片		粗・細礫/良好/明黄褐	撚糸文Rを縦位施文する。撚糸文系
	4	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	ローム漸移層	胴部破片		粗・チャート・黒色粒・石英/良好/橙	撚糸文Rを斜位施文する。撚糸文系
	5	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	3住	胴部破片		粗・細礫・黒色粒/良好/橙	撚糸文Rを縦位施文する。撚糸文系
	6	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	4住	胴部破片		粗・チャート細礫・繊維/ふつう/橙	くの字状に内屈。屈曲部上位に文様帯を配置、縦位、斜位の沈線を施す。地文、文様帯下に横位の条痕。野島式
	7	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	4住	胴部破片		細・繊維/ふつう/明赤褐	胴部文様帯上端の部位。微隆起線により区画、区画内に沈線を充填施文する。微隆起線上に円形刺突を施す。内面横位の条痕。鵜ヶ島台式
	8	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	表土	胴部破片		粗・チャート・黒色粒・繊維/良好/橙	口縁部文様帯下端の部位。細沈線により区画、区画内に沈線を充填施文する。交点に刺突を施す。内面横位の条痕。鵜ヶ島台式
	9	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	2住	胴部破片		粗・繊維/良好/明赤褐	斜位の条痕を施す。内面剥離により不明。条痕文系
	10	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	ローム漸移層	胴部破片		細砂・石英・繊維/ふつう/橙	内外面斜位の条痕を施す。条痕文系
	11	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	4住	胴部破片		粗・黒色粒/良好/橙	縦位、斜位の集合沈線を施す。諸磯c式
	12	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	5住	胴部破片		細・チャート/ふつう/にぶい黄橙	集合沈線によるレンズ状文を描き、矢羽根状集合沈線を充填施文する。諸磯c式
	13	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	4住	胴部破片		細・黒色粒・石英/良好/にぶい橙	帯状沈線による菱形状モチーフを描き、沈線間に貝殻腹縁文を充填施文する。興津式
	14	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	4住	口縁部破片		粗・チャート/ふつう/にぶい黄橙	帯状沈線によるモチーフを描き、列点を充填施文する。称名寺式
	15	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	ローム漸移層	口縁部破片		粗・チャート中礫・石英/ふつう/にぶい黄橙	帯状沈線によるモチーフを描く。称名寺式
	16	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	4住	口縁部破片		粗・チャート細礫/ふつう/明黄褐	帯状沈線によるモチーフを描く。称名寺式
	17	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	4住	口縁部破片		粗・チャート細礫/ふつう/橙	波頂部の突起。半環状を呈し、中央に8の字貼付文を付し、その下に円孔を穿つ。左右には沈線、窩文を施す。右側面上部にも窩文を施す。称名寺式
	18	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	表土	口縁部破片		粗・白色粒・黒色粒/ふつう/にぶい黄橙	波状口縁。波頂部下に窩文連繋文を施した対弧状の隆帯を貼付し、円孔を穿つ。以下、帯状沈線によるモチーフを描く。称名寺式
	19	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	表土	胴部破片		粗・黒色粒/ふつう/黒褐	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。称名寺式
	20	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	5住	胴部破片		細・細礫・白色粒/ふつう/にぶい黄橙	帯状沈線によるモチーフを描く。称名寺式
	21	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	2住	胴部破片		細・白色粒・黒色粒/ふつう/にぶい黄橙	横位帯状沈線を施し、列点を充填施文する。称名寺式
	22	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	4住	胴部破片		粗・チャート細礫/良好/橙	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。称名寺式
	23	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	4住	胴部破片		粗・チャート細礫・白色粒/ふつう/浅黄橙	刻みを付した隆帯を垂下させ、帯状沈線によるJ字文を描く。称名寺式
	24	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	土坑群	胴部破片		粗・チャート/良好/赤褐	縦位帯状沈線を施し、列点を充填施文する。称名寺式
	25	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	4住	胴部破片		粗・チャート細礫・黒色粒/ふつう7/黒褐	帯状沈線によるモチーフを描く。称名寺式
	26	第193図 PL.42	縄文土器 深鉢	3住	胴部破片		粗・白色粒・黒色粒/ふつう/橙	帯状沈線によるモチーフを描く。称名寺式
	27	第193図 PL.43	縄文土器 深鉢	4住	胴部破片		粗・チャート細礫・白色粒/ふつう/明赤褐	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。称名寺式
	28	第193図 PL.43	縄文土器 深鉢	4住	胴部破片		粗・チャート細礫・黒色粒/ふつう/にぶい黄橙	帯状沈線によるモチーフを描き、列点を充填施文する。称名寺式
	29	第193図 PL.43	縄文土器 深鉢	4住	胴部破片		細・白色粒・黒色粒/ふつう/にぶい黄橙	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。称名寺式
	30	第193図 PL.43	縄文土器 深鉢	4住	底部破片		粗・チャート・黒色粒/ふつう/にぶい黄橙	推定底径9.0cm。帯状沈線による弧状モチーフを描き､LRを充填施文する。称名寺式
	31	第193図 PL.43	縄文土器 深鉢	4住	口縁部片		粗・白色粒・黒色粒/ふつう/橙	波状口縁。段を作出して口縁部文様帯を区画、刺突を挟んだ沈線を施す。波頂部下に円孔を穿ち、さらに脇に窩文を施す。胴部には沈線によるモチーフを施す。堀之内1式
	32	第193図 PL.43	縄文土器 深鉢	4住	口縁部片		粗・チャート・白色粒・黒色粒/ふつう/橙	口縁内面が張り出す。口縁部に環状貼付文を付す。堀之内1式
	33	第193図 PL.43	縄文土器 深鉢	表土	口縁部片		粗・白色粒・黒色粒/良好/明赤褐	口縁外面を肥厚させて段を作出、口縁部に2条の沈線をめぐらす。堀之内1式
	34	第193図 PL.43	縄文土器 深鉢	2土坑	胴部破片		粗・チャート細礫・白色粒・石英ふつう/にぶい橙	くの字状に外屈。横位、逆三角形状の沈線を施し、8の字貼付文を付す。堀之内1式
	35	第194図 PL.43	縄文土器 深鉢	4住	胴部破片		粗・チャート細礫/ふつう/にぶい黄橙	くの字状に外屈。横位、垂下する隆帯を施し、沈線を沿わせる。堀之内1式
	36	第194図 PL.43	縄文土器 深鉢	4住	胴部破片		粗・チャート細礫・石英/ふつう/にぶい黄橙	刻みを付した隆帯をめぐらし、沈線によるモチーフを描く。刺突を施した貼付文を付す。堀之内1式
	37	第194図 PL.43	縄文土器 深鉢	表土	胴部破片		細・黒色粒/良好/橙	緩く外反する器形。くびれ部に横位3条、弧状の沈線を施す。地文にLR横位施文。堀之内1式
	38	第194図 PL.43	縄文土器 深鉢	粘土坑	口縁部破片		細砂・白色粒・黒色粒・石英/ふつう/浅黄橙	口縁下に刻みを付した隆線をめぐらす。堀之内2式
	39	第194図 PL.43	縄文土器 深鉢	4住	口縁部破片		細・白色粒/ふつう/橙	残存部外面は無文。口縁内面に刺突を挟んだ2条の沈線をめぐらす。堀之内2式
	40	第194図 PL.43	縄文土器 深鉢	2住	胴部破片		粗・チャート細礫・黒色粒・石英/ふつう/明赤褐	胴下位が膨らみ、口縁に向かって緩く外反する器形。くびれ部に刻みを付した隆線をめぐらし、垂下する隆線と連結する。堀之内2式
	41	第194図 PL.43	縄文土器 深鉢	4住	胴部破片		粗・白色粒・黒色粒/ふつう/にぶい黄橙	横位帯状沈線を施し、LRを充填施文する。堀之内2式
	42	第194図 PL.43	縄文土器 深鉢	4住	胴部破片		細砂・白色粒・黒色粒・石英/ふつう/浅黄橙	帯状沈線によるモチーフを描く。堀之内2式
	43	第194図 PL.43	縄文土器 深鉢	土坑群	胴部破片		細・黒色粒・石英/良好/浅黄橙	横位、斜位の沈線を施し、LRを充填施文する。堀之内2式
	44	第194図 PL.43	縄文土器 注口土器	土坑群	胴部破片		粗・チャート/良好/橙	帯状沈線による幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。堀之内2式
	45	第194図 PL.43	縄文土器 注口土器	4住	胴部破片			No.44と同一個体。堀之内2式
	46	第194図 PL.43	縄文土器注口土器	4住	胴部破片			No.44と同一個体。堀之内2式

構外出土遺物	47	第194図 PL.43	縄文土器 深鉢	4住	胴部破片			No.44と同一個体。堀之内2式
	48	第194図 PL.43	縄文土器 深鉢	2住	胴部破片		粗・チャート・黒色粒・石英/ふつ/にぶい黄橙	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。堀之内2式
	49	第194図 PL.43	縄文土器 深鉢	表土	胴部破片		細砂・白色粒・黒色粒・石英/ふつう/にぶい黄橙	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。堀之内2式
	50	第194図 PL.43	縄文土器 深鉢	5住	底部破片		粗・チャート細礫・白色粒・黒色粒・石英/ふつう/橙	推定底径10.0cm。残存部は無文。堀之内2式
	51	第194図 PL.43	縄文土器 深鉢	土坑群	底部破片		粗・チャート中礫・白色粒/良好/明赤褐	推定底径8.6cm。残存部は無文。後期前葉
	52	第194図 PL.43	石鏃？	4住埋没土		長3.8 幅2.9 厚1.4 重13.6	幅広剥片、チャート	裏面側が薄く、背面側が厚く剥離され、三角形状の石器形状を作出している。加工は粗い。
	53	第194図 PL.43	凹石	3住掘り方		長8.9 幅6.0 厚4.9 重358.1	楕円礫、粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗・集合打痕がある。断面は右辺側が厚く、この部分も磨石として機能している。
	54	第194図 PL.43	磨石	5住埋没土		長9.9 幅8.1 厚4.3 重543.1	楕円礫、粗粒輝石安山岩	表裏面が摩耗するほか、右側縁に打痕がある。
	55	第194図 PL.43	磨石	2住埋没土		長9.7 幅8.9 厚4.9 重618.3	偏平楕円礫	表裏面とも摩耗。小口部・側縁の打痕は見られない。
	56	第194図 PL.43	敲石	2埋没土		長9.5 幅7.8 厚3.5 重404.8	偏平楕円礫、溶結凝灰岩	表裏面とも摩耗するほか、小口部・左側縁に敲打痕がある。被熱してヒビ割れている。
	57	第194図 PL.43	敲石	2住埋没土		長14.6 幅7.2 厚4.3 重69.32	棒状礫、溶結凝灰岩	上下両端の小口部に打痕。
5区遺構	No.	挿図・PL番号	種類・器種	出土位置	残存率	計測値(cm、g)	胎土/焼成/色調または石材	成形・整形の特徴・型式(縄文)
1号竪穴住居	1	第196図	土師器 高杯	床面から10cm	杯身部片	稜9.3	細・褐色粒/良好/橙	杯身部は口縁部が横ナデ、底部(稜下)はヘラ削り。
15号土坑	1	第199図	平瓦	埋没土	破片		灰	表面に模骨痕。裏面に格子叩き。9世紀か。秋間か。
2号井戸	1	第200図	在地系土器 片口鉢	埋没土	1/8		灰	口縁部は灰色、体部の断面から内面の器表は灰白色。口縁部内面の器表は褐灰色。片口部残る。口縁部は丸みを帯びた玉縁状をなす。還元炎焼成で弱く焼き締まる。14世紀。
3号溝	1	第202図	須恵器 杯	底面から5cm	底部	底7.7	細/酸化焔/橙	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ヘラナデ。
	2	第202図	須恵器 瓶	埋没土	口縁部片	口8.0	細/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回りか。
	3	第202図 PL.43	須恵器 甕	底面から4cm	口縁部～胴部上位片	口23.8	細・粗粒・角/還元焔/灰	口縁部はロクロ整形。胴部は外面がナデ、内面にアテ具痕が残る。
	4	第202図 PL.43	石製品？	底面		長13.0 幅8.0 厚5.4 重286.0		表裏面とも粗く面取り整形されているが、整形面に斉一性に欠け、その製作意図については明らかでない。
	5	第202図 PL.43	台石	底面から7cm		長20.0 幅17.0 厚6.8 重2370.7	楕円礫、粗粒輝石安山岩	表裏面に敲打痕を伴う摩耗面がある。
4号溝	1	第202図 PL.43	砥石？	底面から8cm		長12.2 幅9.6 厚5.0 重606.7	楕円礫、粗粒輝石安山岩	背面側に浅いU字状の溝(幅4mm)があるほか、左辺側に面取り様の整形がある。金属器によるものだろうが、詳細は不明。
遺構外出土遺物	1	第203図 PL.43	縄文土器 深鉢	1住	胴部破片		細・黒色粒/良好/橙	撚糸文Rを縦位施文する。撚糸文系
	2	第203図 PL.43	縄文土器 深鉢	14土坑	胴部破片		粗・黒色粒/良好/にぶい黄橙	絡条体条痕を縦位施文する。撚糸文系
	3	第203図 PL.43	縄文土器 深鉢	1住	胴部破片		粗・繊維ふつう/にぶい橙	文様帯下端の部位でくの字状に内屈する。屈曲部に微隆起線をめぐらして区画、区画内に斜位の沈線を充填施文する。微隆起線上に円形刺突を施す。文様帯下、内面条痕施文。鵜ヶ島台式
	4	第203図 PL.43	縄文土器 深鉢	台地斜面	胴部破片		細・繊維/良好/にぶい橙	内外面に条痕を施す。条痕文系
	5	第203図 PL.43	縄文土器 深鉢	3溝	胴部破片		粗・黒色粒/良好/径赤褐	横位集合沈線を施す。諸磯b式
	6	第203図 PL.43	縄文土器 深鉢	台地斜面	胴部破片		細/良好/橙	貝殻腹縁文を密接施文し、帯状沈線で区画する。興津式
	7	第203図 PL.43	縄文土器 深鉢	台地斜面	胴部破片			No.8と同一個体。興津式
	8	第203図 PL.43	縄文土器 深鉢	台地斜面	口縁部破片		粗・チャート・白色粒/ふつう/浅黄橙	隆帯をめぐらして口縁部無文帯を区画、隆帯下にLRを充填施文する。加曽利E4式
	9	第203図 PL.43	縄文土器 深鉢	表土	口縁部破片		粗・白色粒・黒色粒・石英/ふつう/にぶい黄褐	隆帯をめぐらして口縁部無文帯を区画、以下、隆帯を垂下させ、LRを充填施文する。加曽利E4式
	10	第203図 PL.43	縄文土器 深鉢	確認面	胴部破片		粗・チャート/ふつう/橙	隆帯によるU字状モチーフを施し、LRを縦位充填施文する。加曽利E4式
	11	第203図 PL.43	縄文土器 深鉢	4溝	口縁部破片		粗・黒色粒・石英/良好/橙	波状口縁。波頂部に環状の隆帯を貼付し垂下、口縁に沿って貼付した隆帯との間に円形刺突を充填施文する。環状隆帯にLRを充填施文し、中央を穿孔する。称名寺式
	12	第203図 PL.44	縄文土器 深鉢	台地斜面	口縁部破片		粗・白色粒・黒色粒/ふつう/にぶい黄橙	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。称名寺式
	13	第203図 PL.44	縄文土器 深鉢	台地斜面	口縁部破片		粗・白色粒・黒色粒/ふつう/にぶい黄橙	横位沈線を施し、LRを充填施文する。称名寺式
	14	第203図 PL.44	縄文土器 深鉢	確認面	口縁部破片		粗・白色粒・黒色粒/ふつう/にぶい橙	波状口縁で口縁がくの字状に内折する。波底部から鎖状隆帯を左右に下ろして屈曲部にめぐらす。隆帯に沿ってワラビ手沈線を施し、波底部に刺突を施した貼付文を付す。称名寺式
	15	第203図 PL.44	縄文土器 深鉢	台地斜面	口縁部破片		粗･チャート細礫･白色粒･黒色粒･石英/ふつう/にぶい橙	波状口縁で波頂部から鎖状隆帯を垂下、帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。称名寺式
	16	第203図 PL.44	縄文土器 深鉢	3溝	胴部破片		粗・白色粒・黒色粒・石英/ふつう/浅黄橙	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。称名寺式
	17	第203図 PL.44	縄文土器 深鉢	台地斜面	胴部破片		粗/良好/浅黄橙	帯状沈線による逆J字状モチーフを描き、LRを充填施文する。称名寺式
	18	第203図 PL.44	縄文土器 深鉢	台地斜面	胴部破片		細砂・石英/良好/橙	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。称名寺式
	19	第203図 PL.44	縄文土器 深鉢	表土	胴部破片		粗・白色粒・黒色粒/ふつう/明赤褐	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。称名寺式
	20	第203図 PL.44	縄文土器 深鉢	台地斜面	胴部破片		粗・白色粒・黒色粒・石英/ふつう/橙	帯状沈線によるモチーフを描き、LR、列点を充填施文する。称名寺式
	21	第203図 PL.44	縄文土器 深鉢	3溝	胴部破片		粗・白色粒/ふつう/浅黄橙	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。称名寺式
	22	第203図 PL.44	縄文土器 深鉢	表土	胴部破片		粗・白色粒・黒色粒・石英/ふつう/浅黄橙	帯状沈線によるモチーフを描き、LR、列点を充填施文する。称名寺式
	23	第203図 PL.44	縄文土器 深鉢	台地斜面	胴部破片		粗･チャート細礫･白色粒･黒色粒･石英/ふつう/にぶい褐	帯状沈線によるモチーフを描き、列点を充填施文する。称名寺式
	24	第203図 PL.44	縄文土器 深鉢	確認面	口縁部破片		粗・白色粒・黒色粒・石英/ふつう/にぶい赤褐	沈線により三角形状モチーフを描く。口唇部に刻みを付す。堀之内1式
	25	第203図 PL.44	縄文土器 深鉢	台地斜面	胴部破片		粗・チャート・白色粒・黒色粒/ふつう/にぶい赤褐	縦位条線を施す。堀之内1式
	26	第203図 PL.44	縄文土器 深鉢	確認面	胴部破片		粗ふつう/浅黄橙	縦位の集合沈線を施す。堀之内1式
	27	第203図 PL.44	土製円盤	台地斜面	完形		細・黒色粒ふつう/にぶい橙	深鉢の胴部片を転用。外縁下部、表面上下の縁辺がよく磨られている。
	28	第203図 PL.44	打製石斧	確認面		長(11.5)　幅(8.1)　厚(2.2) 重186.0	分銅型、粗粒輝石安山岩	完成状態？風化が激しく、刃部摩耗・捲縛痕等は不明。刃部側を調査時に破損する。
	29	第203図 PL.44	石錐(ドリル)	確認面		長(2.6)　幅1.2　厚0.8	黒曜石	未製品？先端部を欠損するため刃部摩耗は不明だが、残存する剥離面は新鮮で、完成直前の破損か。
	30	第203図 PL.44	石核	4溝		長2.6　幅8.0　厚4.1 重80.6	板状剥片、チャート	上面の礫面を打面として、表裏面・左辺側で小型剥片を剥離する。
	31	第203図 PL.44	凹石	4溝埋没土		長10.0　幅8.5　厚6.9 重741.2	楕円礫、粗粒輝石安山岩	表裏面が摩耗するほか、背面側にロート状の孔1・集合打痕、上下両端の敲打痕がある。
	32	第203図 PL.44	多孔石	3土		長15.3　幅13.9　厚5.7 重1411.4	楕円礫、粗粒輝石安山岩	背面側中央よりやや右側に偏る、最も礫厚の厚い部分にロート状の孔1を穿つ。このほか、礫面には風化摩耗した敲打痕がある。
	33	第203図	土師器 杯	埋没土	口縁部～底部片	口12.0 稜径11.7	細砂粒・褐色粒/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)はナデ、底部は手持ちヘラ削り。
	34	第203図	土師器 杯	埋没土	口縁部～底部片	口13.0 稜径11.8	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)はナデ、底部は手持ちヘラ削り。
	35	第203図	土師器 高杯	埋没土	杯身下位片		細砂粒・角閃石/良好/橙	杯身部底部はナデ、脚部はヘラ削り。
	36	第203図	須恵器 高杯	埋没土	口縁部片	口15.8	細/還元焔/灰	ロクロ整形、回転方向不明。口縁部下に小凸帯が巡る。
	37	第203図 PL.44	土師器 坩	埋没土	口縁部1/4欠損	口9.0 高7.6 胴8.6	細砂粒・褐色粒/良好/にぶい黄橙	口縁部から胴部上位はハケ目(5本)、胴部中位から底部は手持ちヘラ削り。内面は口縁部がハケ目、底部から胴部はヘラナデ。
	38	第204図	土師器 甑	埋没土	口縁部～胴部上位片	口21.6	細砂粒・褐色粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ後一部にヘラ磨き。
	39	第204図	土師器 甕	埋没土	底部～胴部下位	底5.3	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/にぶい赤褐	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
	40	第204図 PL.44	土師器 甕	埋没土	口縁部～胴部上位片	口15.6	細砂粒/良好/黄灰	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
	41	第204図 PL.44	土師器 壺	埋没土	口縁部～胴部中位片	口10.2 胴26.0	細砂粒・粗砂粒・褐色粒灰黄褐	口縁部は横ナデ、胴部は内外面とも器面磨滅のため不鮮明。
	42	第204図 PL.44	須恵器 甕	埋没土	胴部小片(転用)	縦3.2×横4.4　厚1.0	細/還元焔/暗灰	胴部片を打ち欠いて円形に調整。外面は叩き痕が確認できる。
	43	第204図	龍泉窯系青磁碗	表土	体部下位片		灰	横田・森田分類Ⅰ-4-a類。2本一単位の片彫り沈線で体部内面を区切り、その間に飛雲文を片彫りする。内外面の釉に擦れ目立つ。12世紀。
	44	第204図	常滑陶器甕か壺	確認面	体部片		灰	外面の器表は明赤褐色。中世。
	45	第204図	常滑陶器甕か壺	確認面	体部片		灰	内外面の器表は褐灰色。外面の器表は縦位刷毛目状の撫で。中世。
	46	第204図	古瀬戸平碗か		口縁部片		灰白	口縁端部は小さく外反し、端部は尖る。内外面に灰釉。古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期(15世紀)。

写 真 図 版

1　１区北側全景（南西から）

2　１区南側全景（東から）

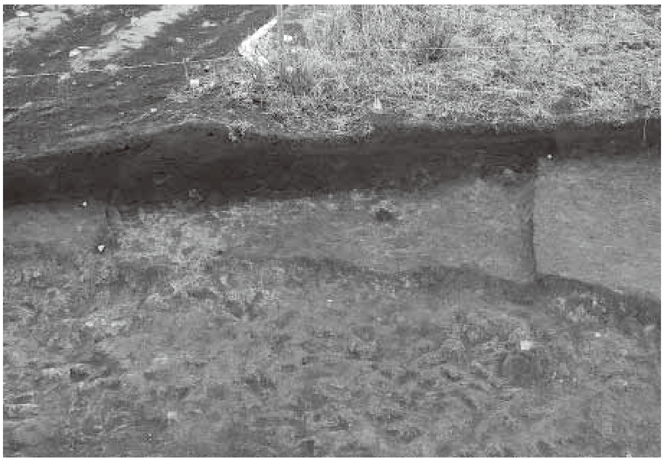


1　1区1号竪穴住居全景(西から)

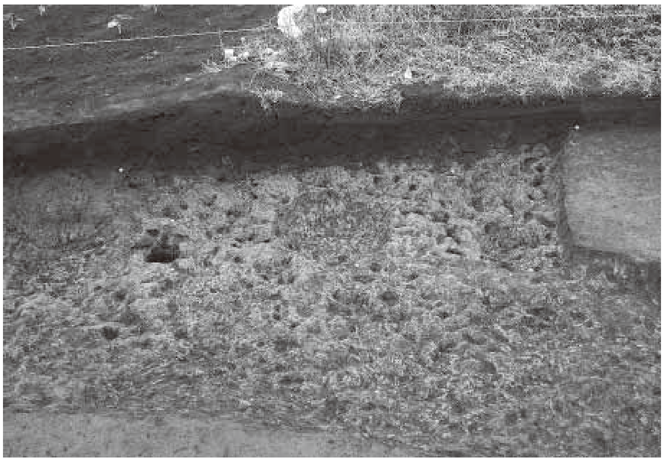
2　1区1号竪穴住居遺物出土状態(南から)

3　1区1号竪穴住居貯蔵穴遺物出土状態(西から)

4　1区1号竪穴住居掘り方全景(南西から)



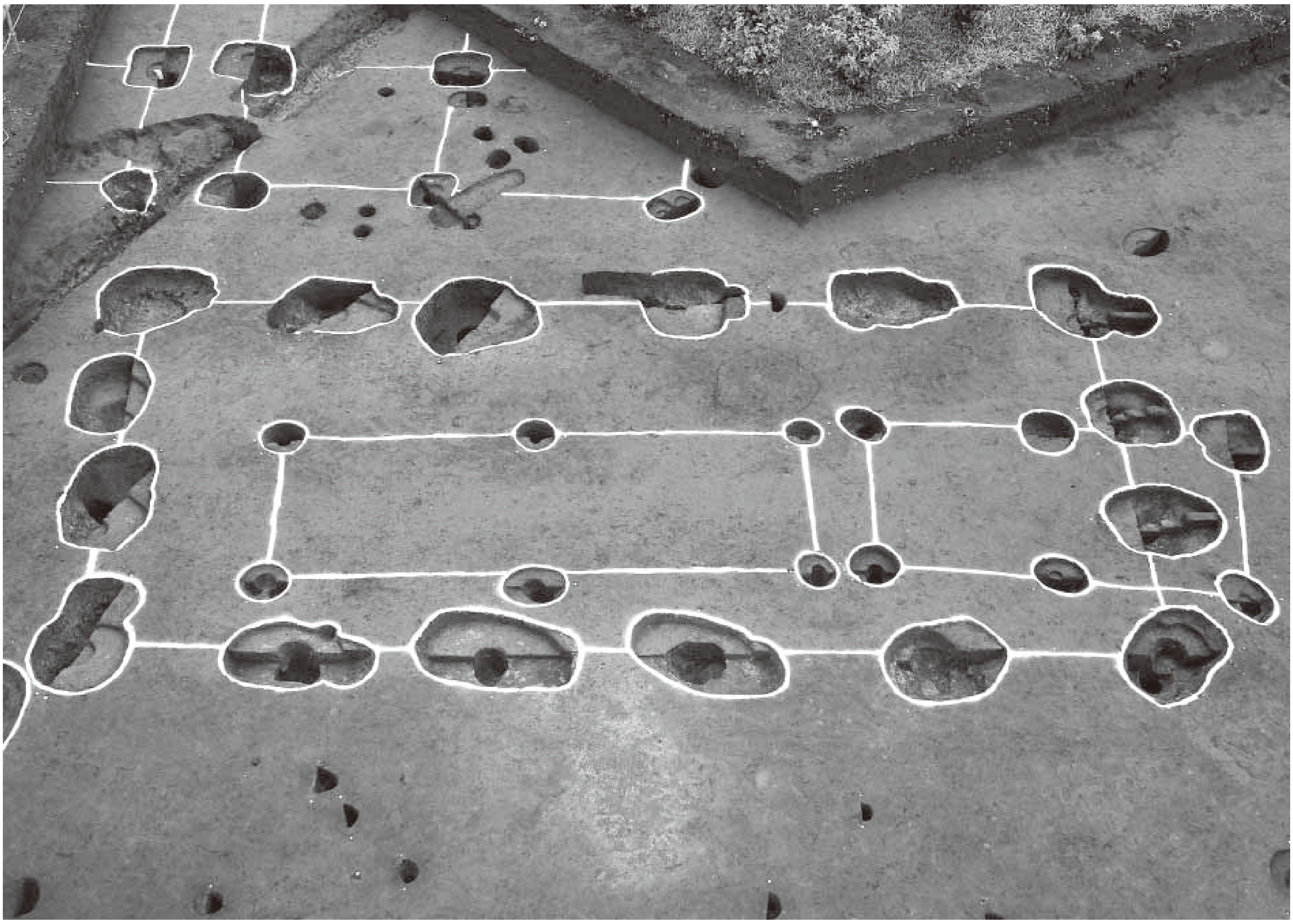
5　1区2号竪穴住居全景(南から)



6　1区2号竪穴住居掘り方全景(南から)

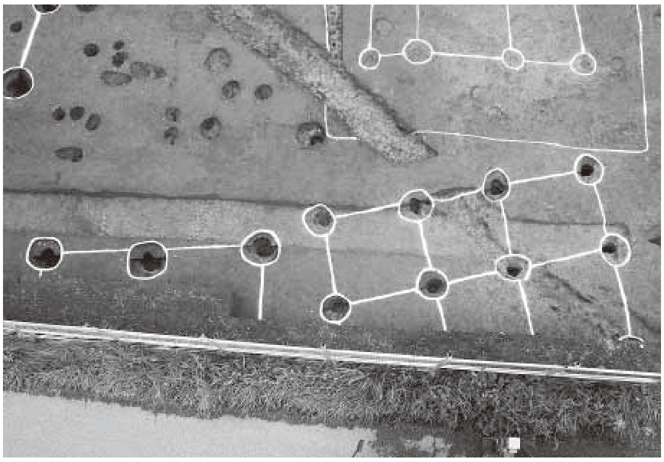
7　1区4号竪穴住居遺物出土状態(西から)

8　1区4号竪穴住居竈遺物出土状態(西から)

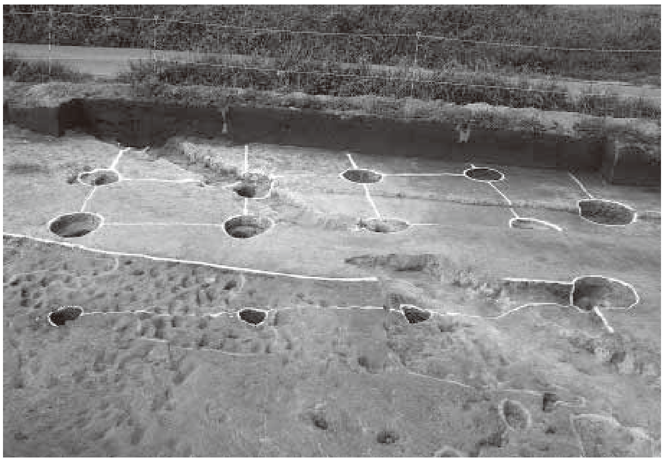


1　１区１号掘立柱建物全景（西から）

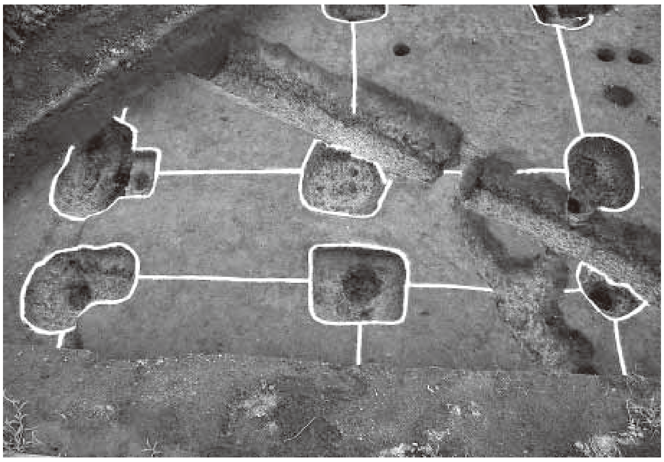
2　１区１号掘立柱建物柱穴検出状況（南から）



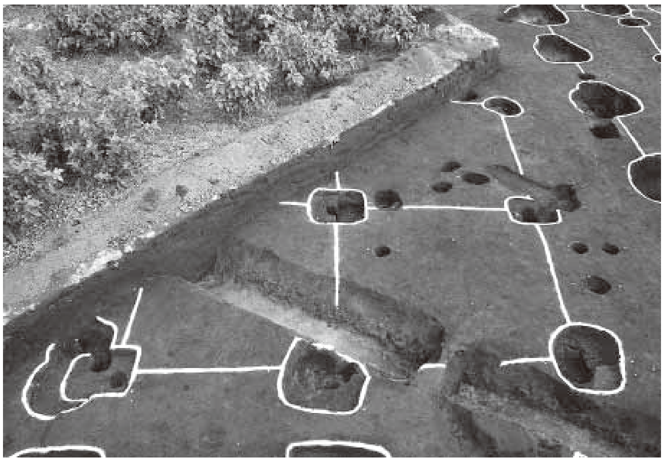
3　１区２・３号掘立柱建物全景（西から）



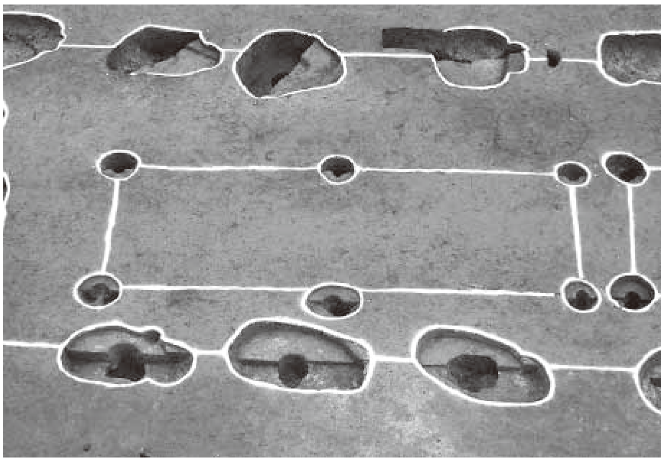
4　１区３号掘立柱建物全景（東から）



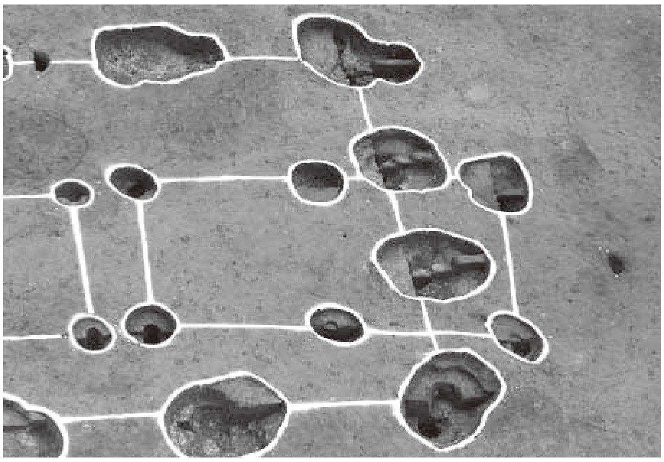
5　１区４号掘立柱建物全景（北から）



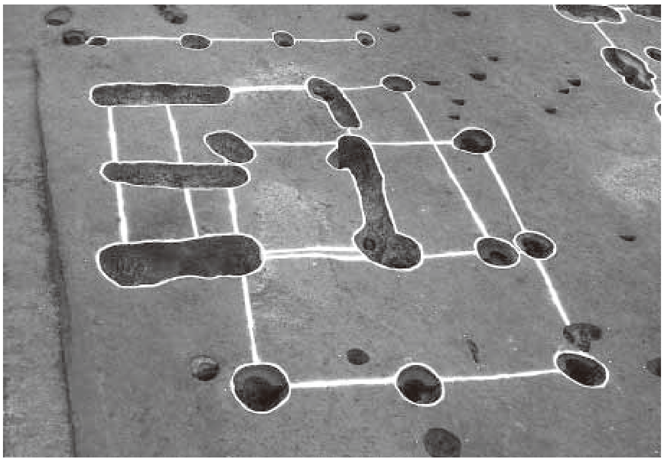
1　１区５号掘立柱建物全景(西から)



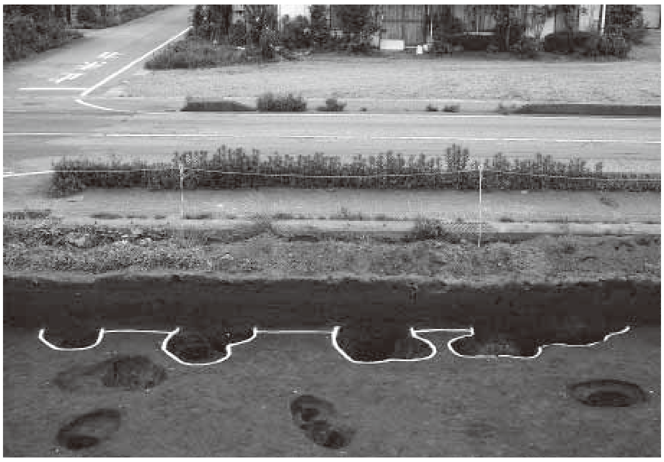
2　１区６号掘立柱建物全景(西から)



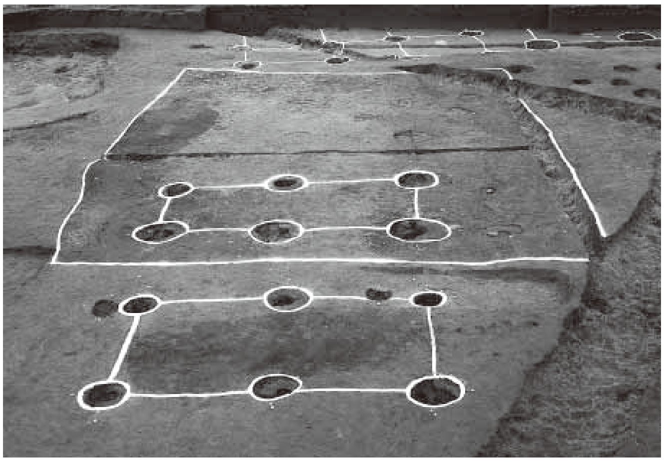
3　１区７号掘立柱建物全景(西から)



4　１区８・９号掘立柱建物と１号柵列全景(南から)



5　１区11号掘立柱建物全景(南から)

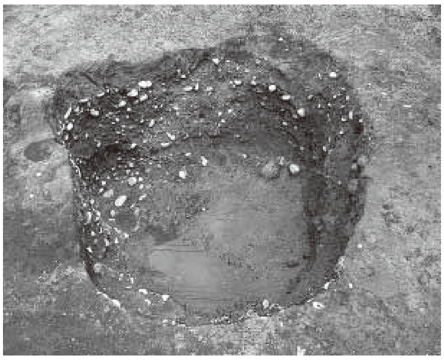


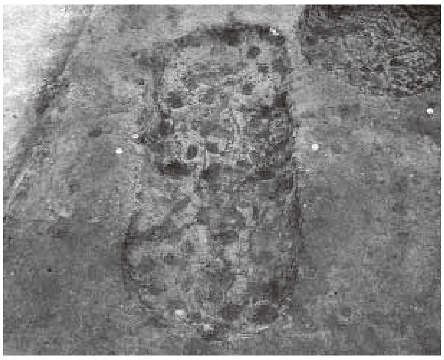
6　１区12号掘立柱建物と１号基壇状遺構全景(東から)

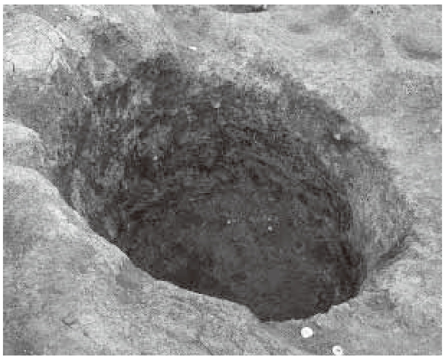
7　１区１号柵列全景(南から)

8　１区１号基壇状遺構全景(南から)

1　１区１号基壇状遺構掘り方全景(南から)


2　１区11号土坑全景(西から)

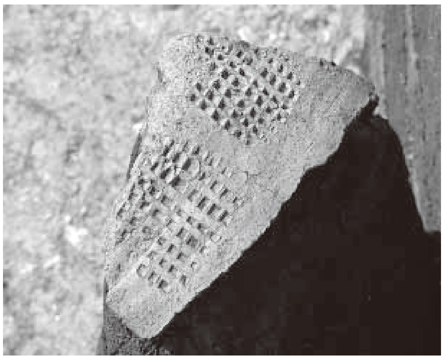

3　１区12号土坑全景(東から)


4　１区18号土坑全景(東から)

5　１区154号ピット遺物出土状態(南から)

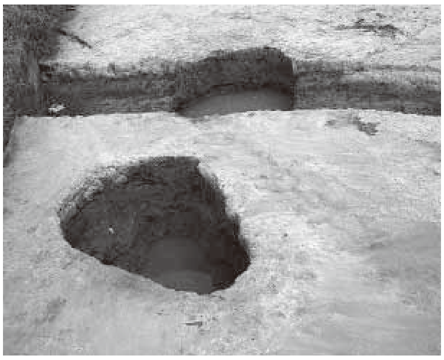
6　１区１号粘土採掘坑全景(西から)

7　１区１号粘土採掘坑遺物出土状態(東から)

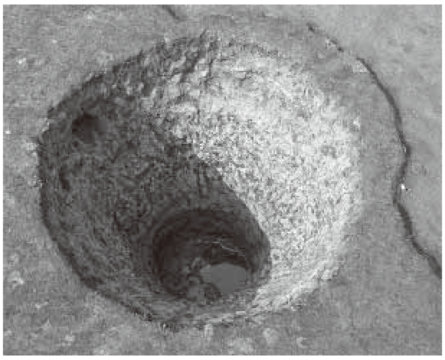

8　１区１号粘土採掘坑遺物出土状態(南から)

9　１区２号粘土採掘坑全景(東から)

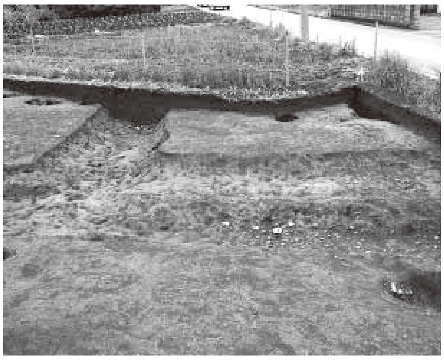
10　１区３号粘土採掘坑全景(南から)


11　１区３・５号粘土採掘坑全景(北から)

12　１区４号粘土採掘坑全景(西から)


13　１区１号井戸全景(南東から)

14　１区１号溝遺物出土状態(南東から)


15　１区２号溝全景(南から)

1　１区２～５号溝全景（西から）

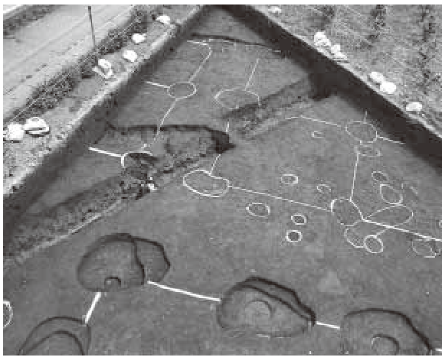
2　１区６号溝全景（南から）

3　１区７号溝全景（北から）

4　１区８号溝全景（南から）

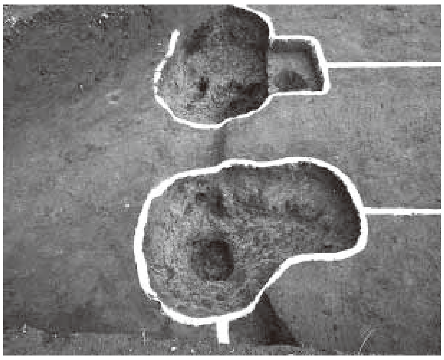
5　１区９号溝全景（南西から）

6　１区10号溝遺物出土状態（西から）

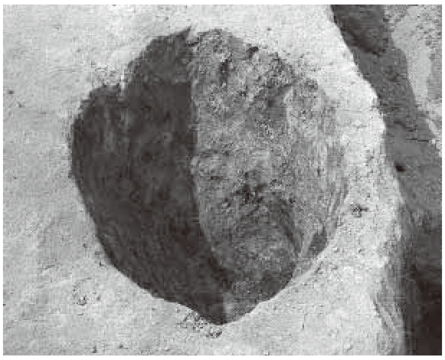


7　１区13～15号溝全景（西から）

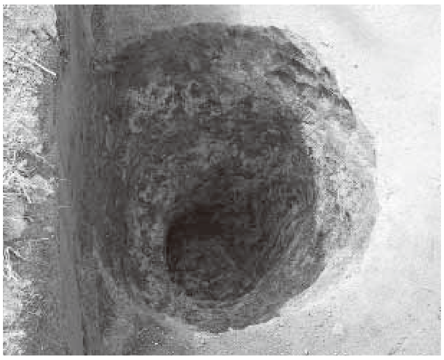
8　１区14号溝全景（西から）



9　１区15号溝全景（北から）



10　２区１号土坑全景（南から）



11　２区５号土坑全景（南東から）

12　２区６号土坑全景（西から）

13　２区１号溝全景（北西から）

14　２区１号溝全景（南から）

15　２区２・３号溝全景（北から）

1　1区全景（南東から）

2　1区全景（東から）

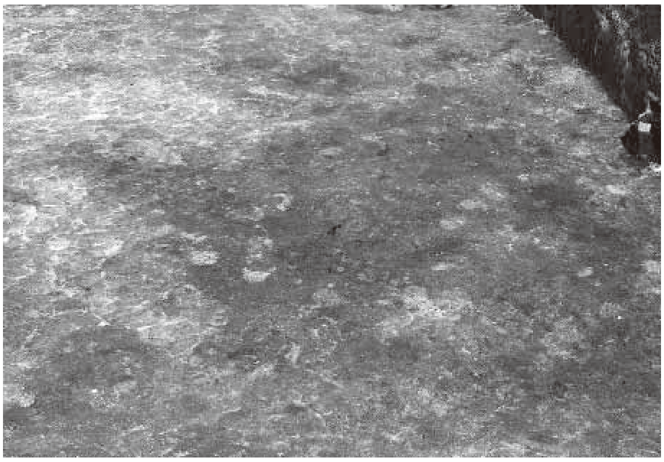
1　1区7号竪穴住居全景(東から)

2　1区11号土坑遺物出土状態(西から)

3　1区18号土坑全景(南から)

4　1区19号土坑全景(東から)

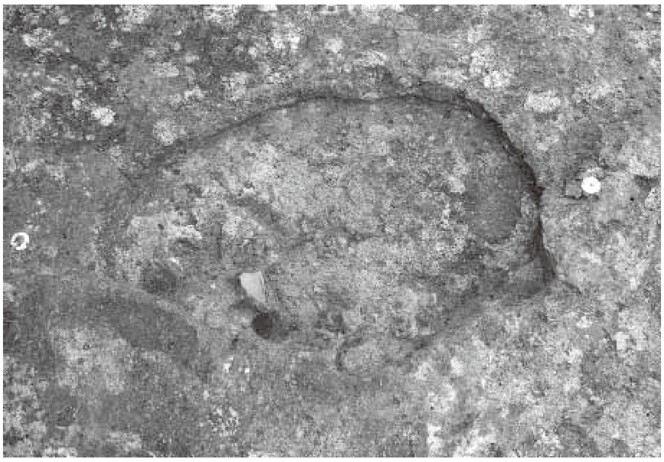
5　1区1号竪穴住居全景(西から)


6　1区1号竪穴住居炉全景(南から)

7　1区1号竪穴住居貯蔵穴遺物出土状態(南から)

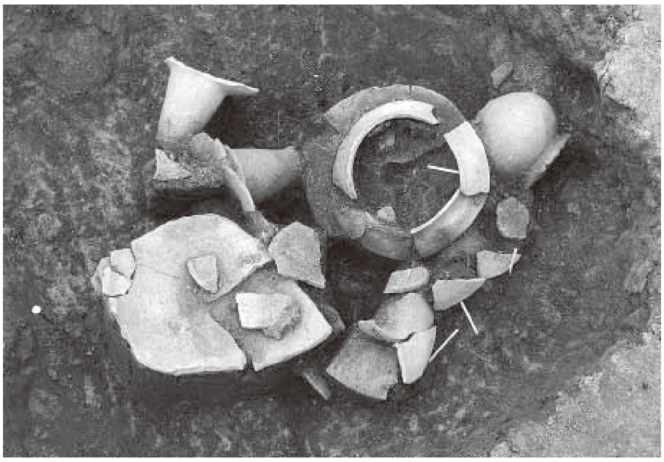
8　1区1号竪穴住居掘り方全景(西から)

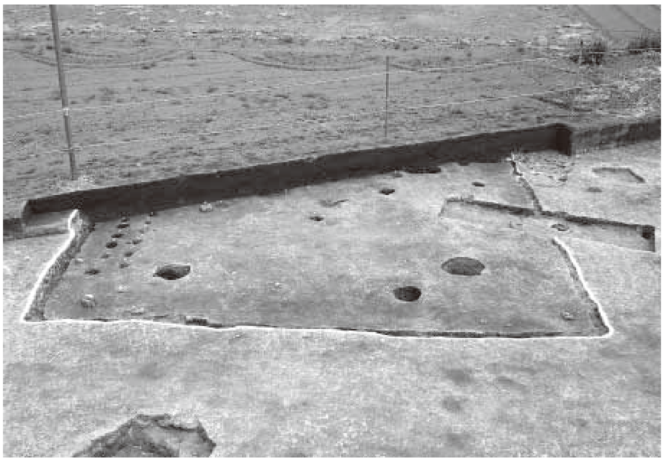
1　1区２号竪穴住居全景(北から)

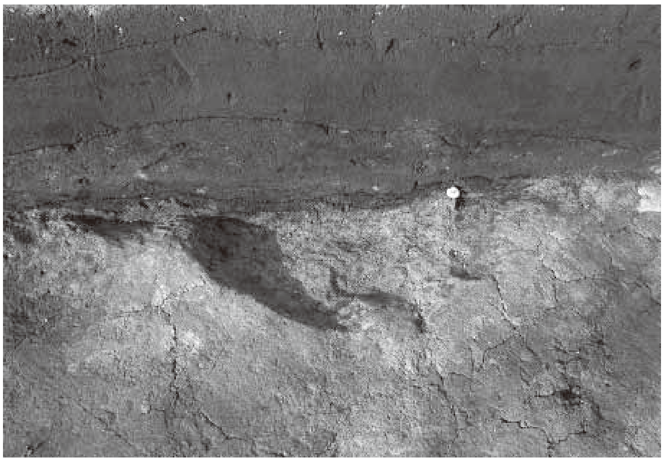

2　1区２号竪穴住居炉全景(南から)

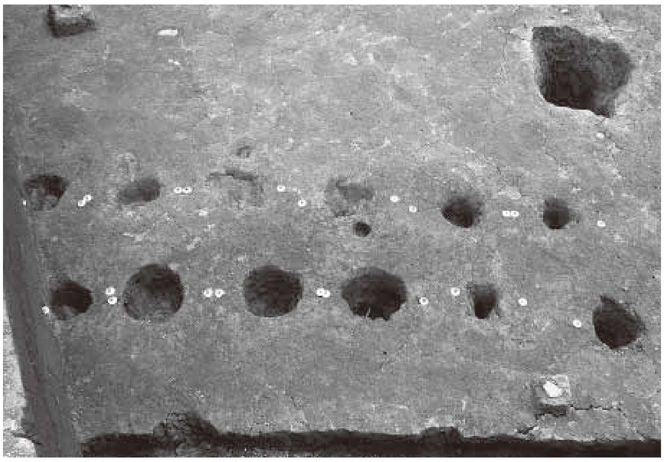
3　1区２号竪穴住居掘り方全景(北から)

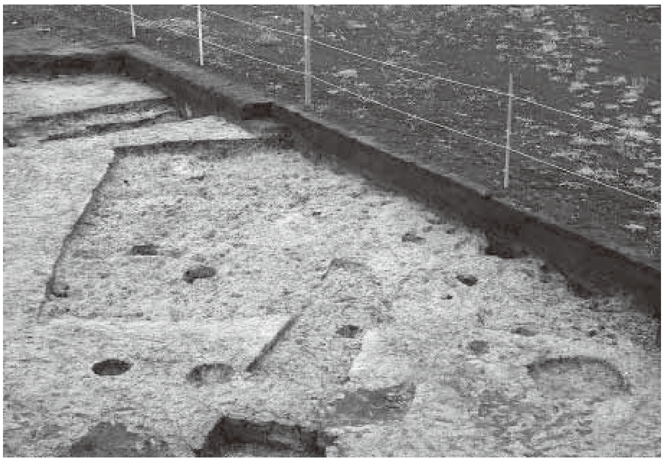
4　1区３号竪穴住居全景(東から)


5　1区３号竪穴住居貯蔵穴遺物出土状態(東から)


6　1区４号竪穴住居全景(西から)


7　1区４号竪穴住居炉断面(西から)


8　1区４号竪穴住居ピット列全景(北から)



1　１区４号竪穴住居掘り方全景（南から）

2　１区５号竪穴住居全景（北西から）

3　１区５号竪穴住居竈全景（北東から）

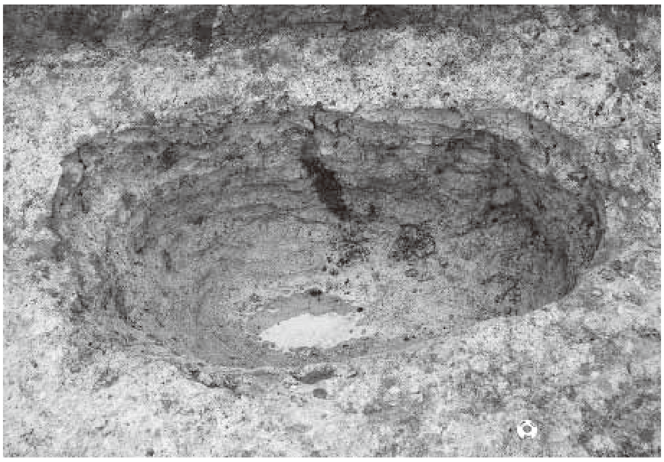
4　１区５号竪穴住居１号貯蔵穴全景（北西から）

5　１区５号竪穴住居２号貯蔵穴全景（北西から）

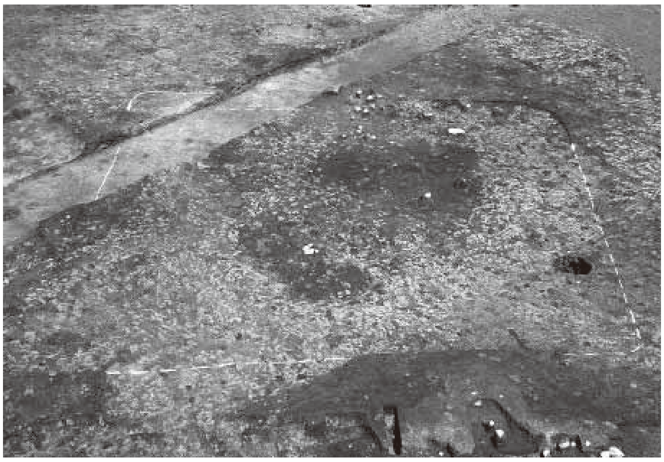
6　１区６号竪穴住居全景（北西から）

7　１区８号竪穴住居掘り方全景（南東から）

8　１区８号竪穴住居竈全景（西から）

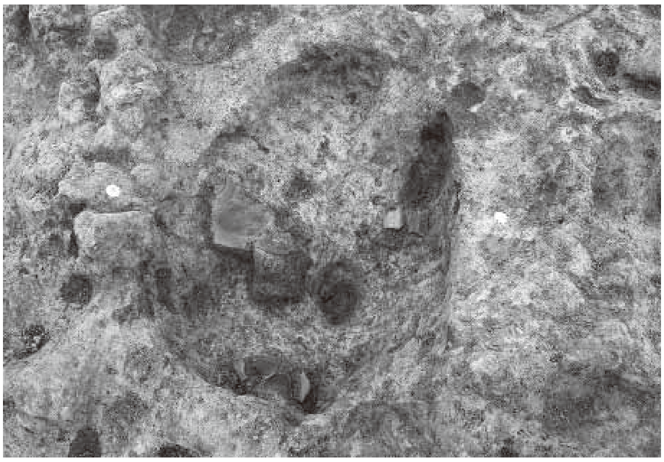


1　1区8号竪穴住居1号床下土坑全景(西から)

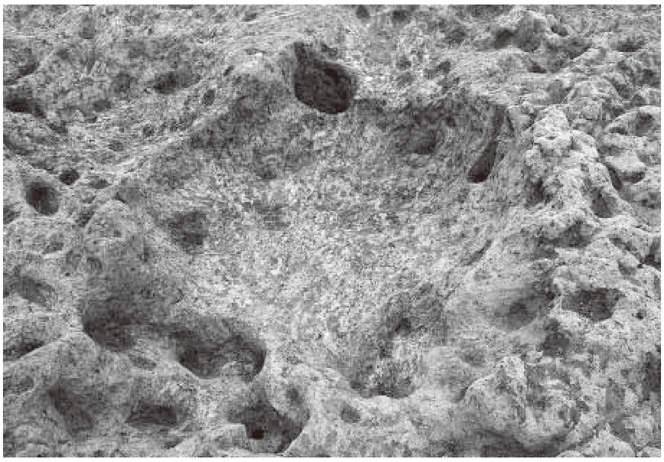


2　1区9号竪穴住居全景(西から)

3　1区9号竪穴住居竈全景(西から)



4　1区9号竪穴住居貯蔵穴全景(北西から)

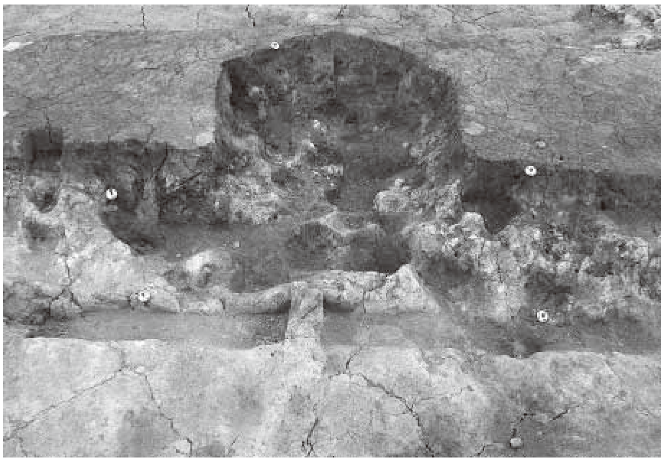


5　1区9号竪穴住居1号床下土坑全景(北西から)

6　1区9号竪穴住居掘り方全景(西から)

7　1区10号竪穴住居全景(西から)

8　1区10号竪穴住居竈全景(西から)

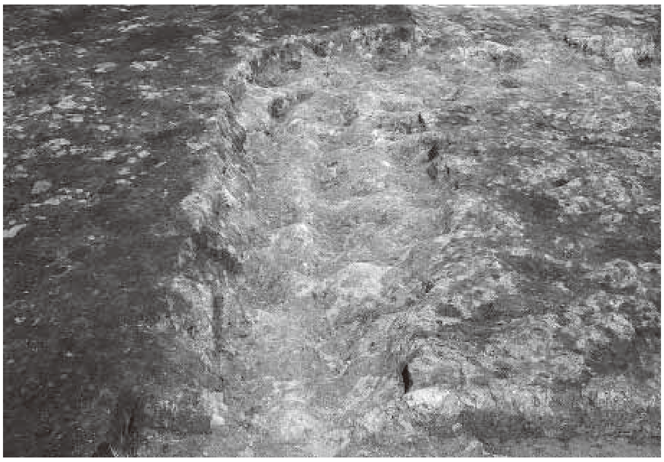


1　１区10号竪穴住居竈掘り方全景(西から)

2　１区11号竪穴住居全景(北西から)

3　１区11号竪穴住居竈全景(南西から)

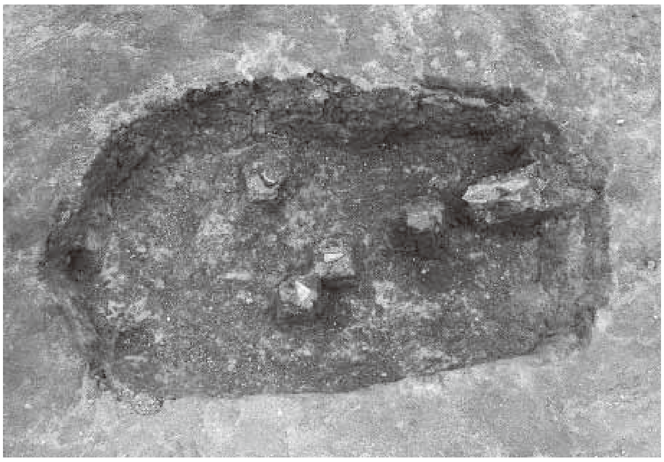
4　１区11号竪穴住居１号土坑全景(西から)



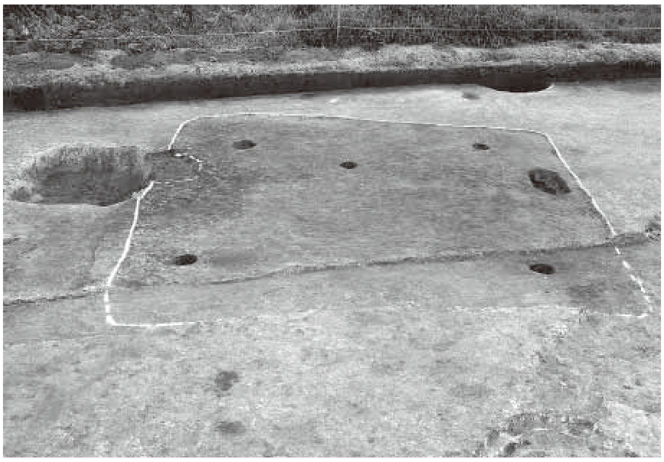
5　１区11号竪穴住居掘り方掘削痕(西から)

6　１区11号竪穴住居掘り方全景(西から)

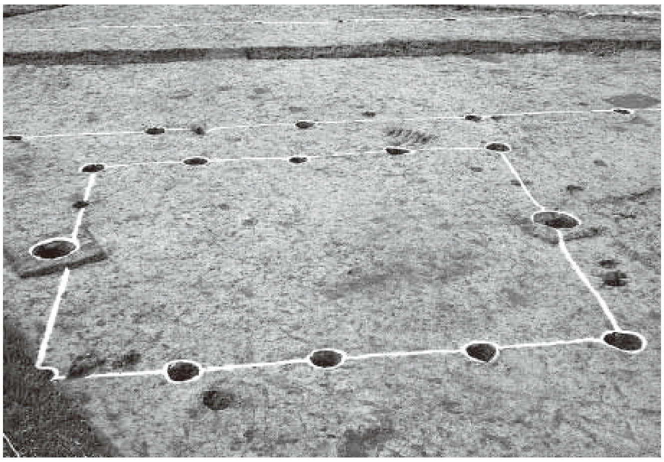
7　１区12号竪穴住居遺物出土状態(北から)

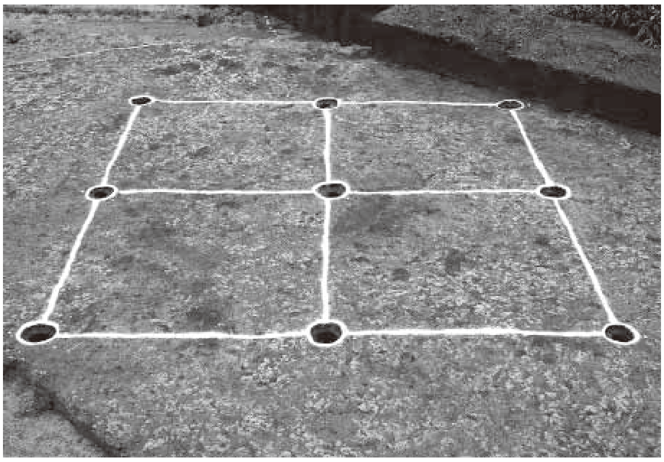


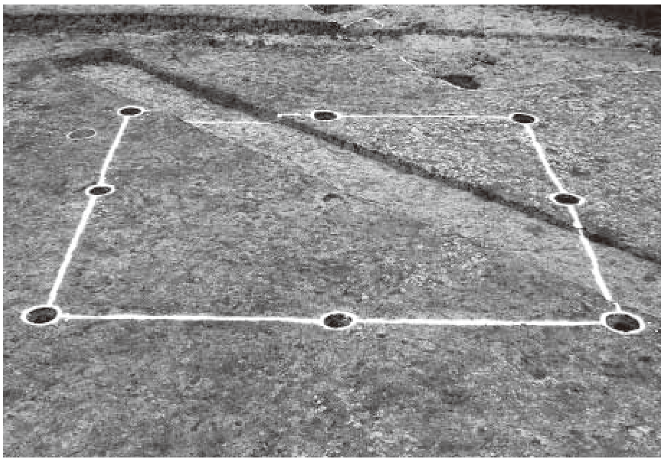
8　１区12号竪穴住居１号土坑全景(南から)

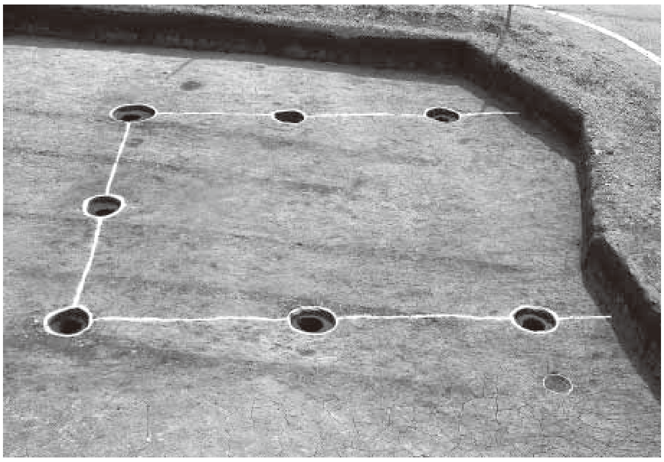

1　1区12号竪穴住居全景（南西から）

2　1区13号竪穴住居竈全景（北から）


3　1区1号掘立柱建物全景（南から）

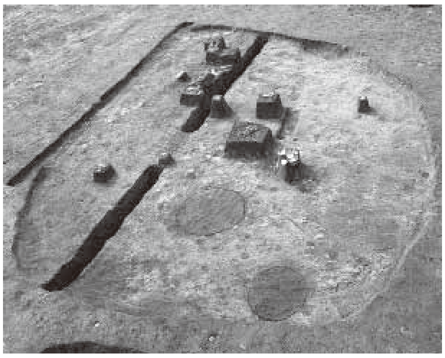

4　1区2号掘立柱建物全景（北から）

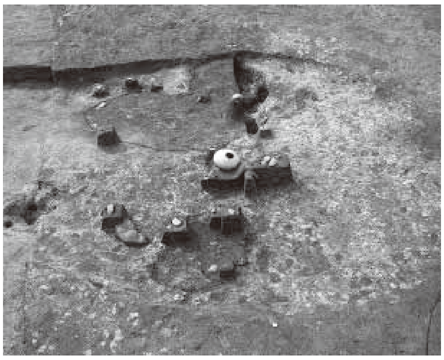

5　1区3号掘立柱建物全景（北から）


6　1区4号掘立柱建物全景（東から）

7　1区1・2号柵列全景（西から）

8　1区3号柵列全景（北から）

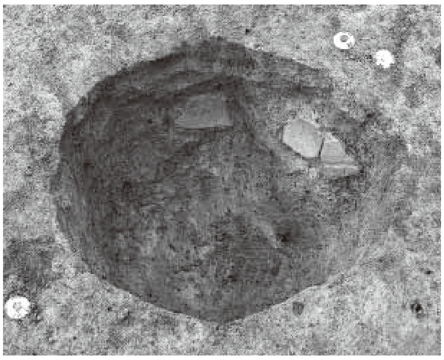

1　1区1号竪穴状遺構遺物出土状態(南東から)


2　1区2号竪穴状遺構遺物出土状態(南から)

3　1区3号竪穴状遺構全景(東から)

4　1区3号土坑全景(南から)

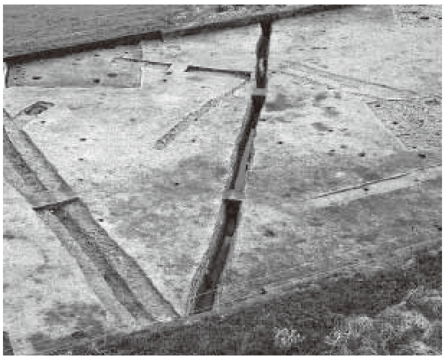
5　1区9号土坑全景(西から)


6　1区80号ピット遺物出土状態(南から)

7　1区110号ピット遺物出土状態(北から)

8　1区1・2号溝全景(南から)

9　1区3号溝、1号掘立柱建物、1・2号柵列全景(西から)


10　1区4・5号溝全景(西から)

11　1区6号溝全景(南東から)

12　1区7号溝全景(南西から)

13　1区8号溝全景(南東から)

14　1区9号溝全景(北から)

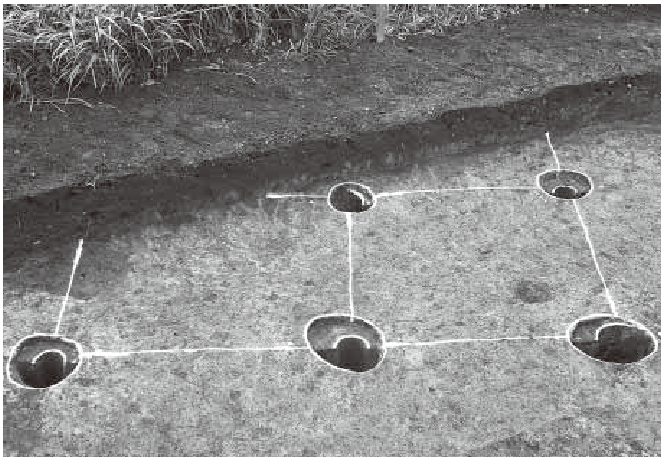
15　1区鍛冶遺構遺物出土状態(南西から)

1　２区調査区西全景（南東から）

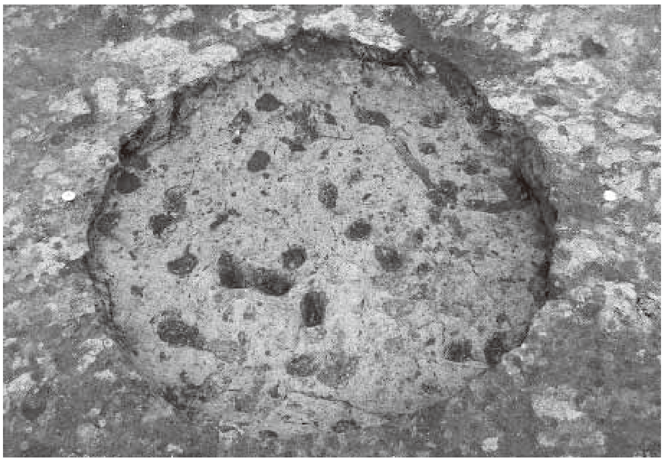
2　２区調査区東全景（北東から）

1　２区１号竪穴住居遺物出土状態（北から）

2　２区１号竪穴住居全景（東から）


3　２区１号掘立柱建物全景（東から）

4　２区１号土坑全景（南から）


5　２区２号土坑全景（南から）

6　２区３・４号溝全景（東から）

7　２区９号溝全景（西から）

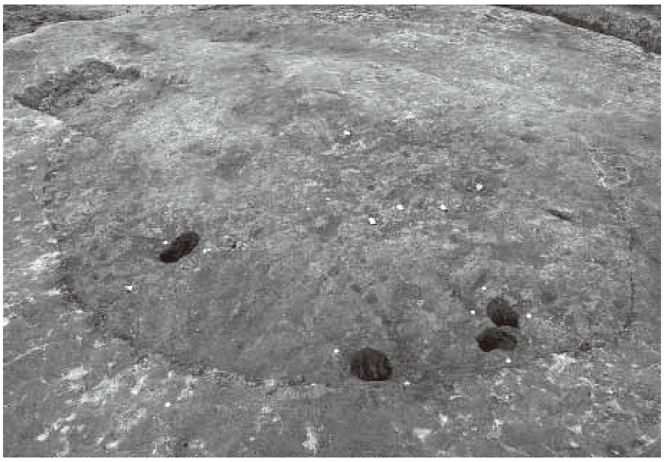
8　２区調査区北側全景（北西から）

1　３区調査区全景（北西から）　右側のくぼみは谷地

2　３区調査区全景（北から）

1　３区１・２号竪穴住居全景(北から)

2　３区３号竪穴住居全景(北から)



3　３区３号竪穴住居ピット検出状況(北から)

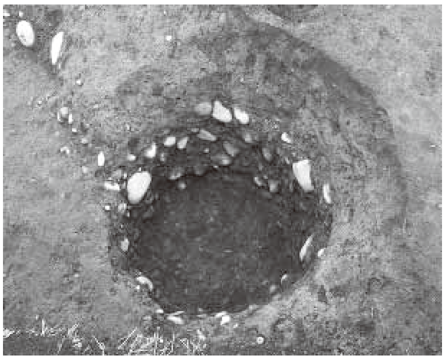
4　３区４号竪穴住居全景(東から)

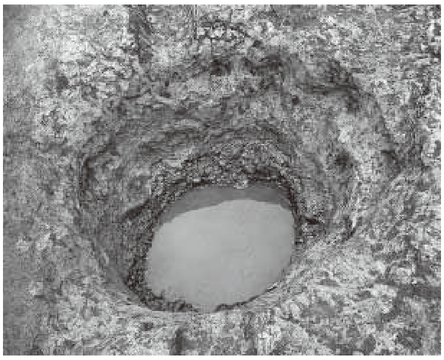
5　３区１号掘立柱建物全景(南から)

6　３区４号土坑全景(南西から)

7　３区７号土坑全景(南から)

8　３区９号土坑全景(西から)


1　３区14号土坑全景（南から）


2　３区１号井戸全景（南東から）

3　３区１号溝全景（南から）

4　３区２号溝全景（北東から）

5　３区３号溝全景（北から）

6　３区４～８号溝全景（西から）

7　３区８・９号溝全景（南東から）

8　３区11 ～ 13号溝全景（南東から）

9　３区14・15号溝全景（南から）

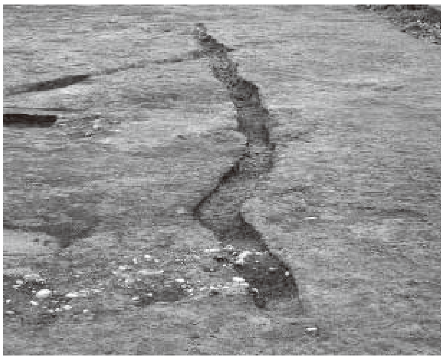
10　３区16号溝遺物出土状態（東から）

11　３区17号溝全景（南から）

12　３区18号溝全景（東から）

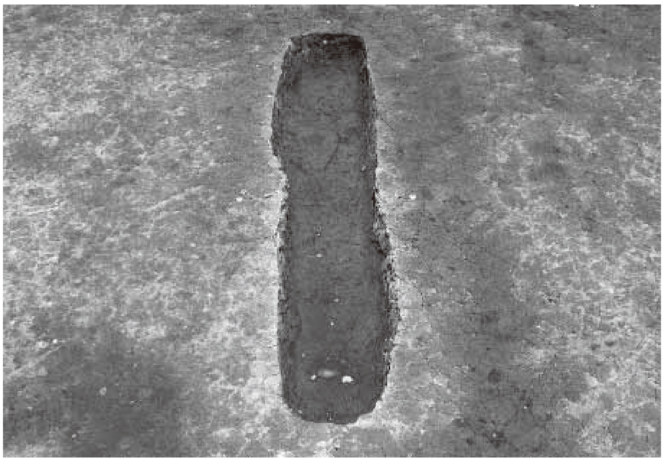
13　３区19号溝全景（南から）

14　３区19 ～ 22号溝全景（南から）


15　３区23号溝全景（南から）

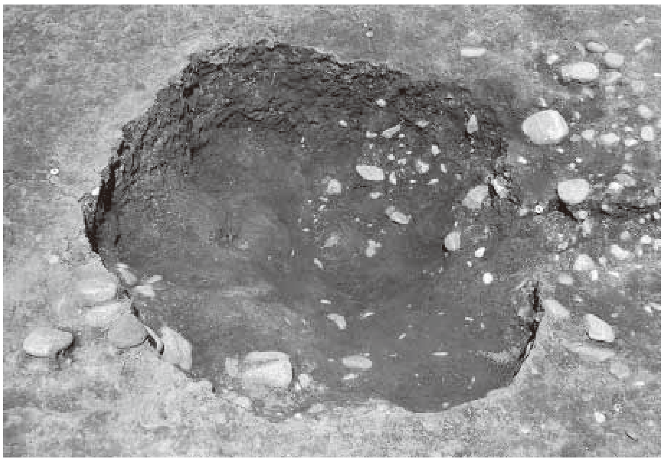
1　4区調査区全景(南から)

2　4区4・5・9号土坑全景(南から)



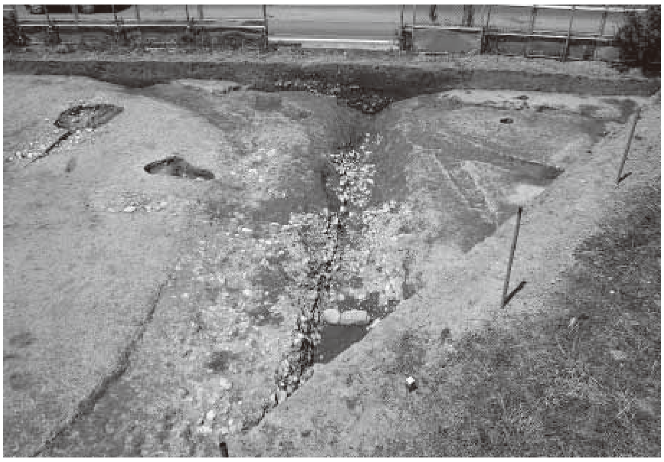
3　4区7号土坑全景(南から)

4　4区10号土坑全景(南東から)



5　4区12号土坑全景(南から)

1　4区1・2・3号溝全景(南西から)

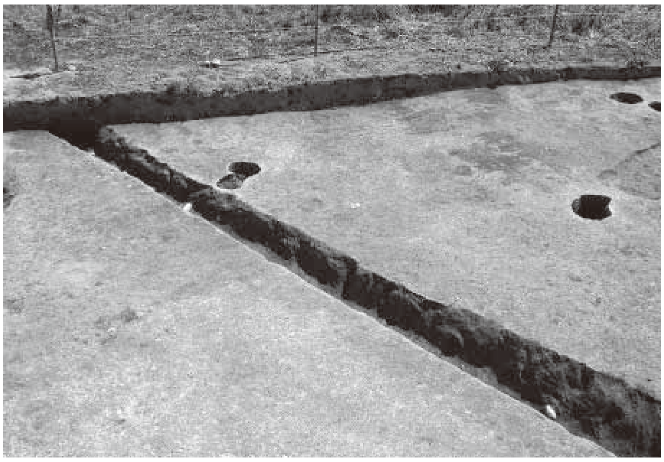


2　4区4・5号溝全景(東から)

3　4区4・5号溝全景(南から)

4　4区4号溝堰状遺構出土状態(東から)

5　4区4号溝堰状遺構出土状態(南から)



6　4区6号溝全景(南西から)

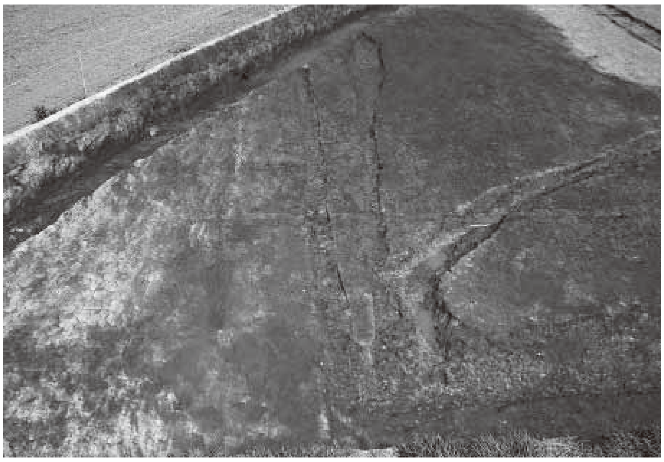
7　4区9・10号溝全景(南東から)

8　4区11号溝全景(東から)

1　1区調査区全景（北西から）

2　1区1号溝全景（南から）

3　1区2号溝全景（西から）



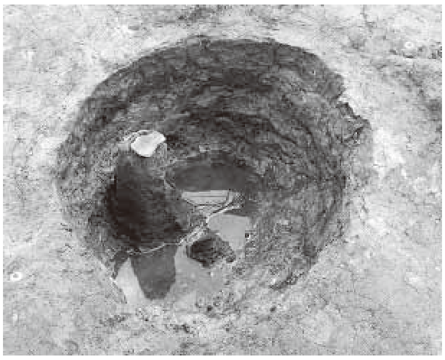
4　1区3・4号溝全景（西から）

5　1区5号溝全景（南から）

1　２区調査区全景(東から)

2　２区１号竪穴状遺構全景(南から)

3　２区２～４号竪穴状遺構全景(南から)



4　２区１号土坑全景(北から)

5　２区２号土坑全景(北から)

6　２区１・２号溝全景(東から)

7　２区３号溝全景(南から)

8　２区４号溝全景(南から)

9　２区５溝断面(西から)

10　２区東壁断面(西から)

11　３区６号土坑全景(北から)

12　３区７号土坑全景(北から)

1　３区１号竪穴住居全景遺物出土状態(北東から)

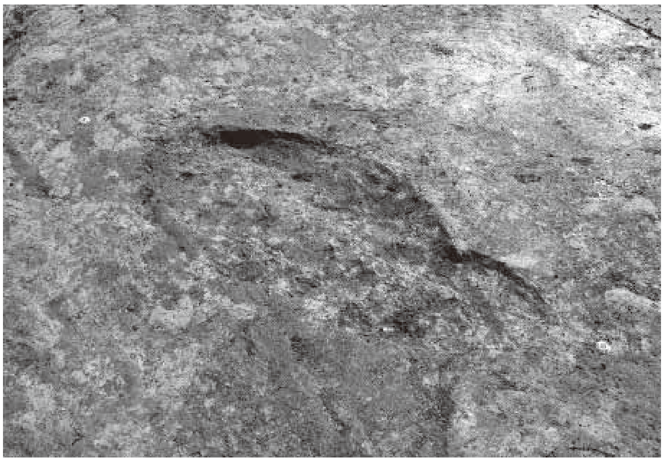
2　３区１号竪穴住居炉全景(東から)

3　３区１号竪穴住居貯蔵穴遺物出土状態(南東から)

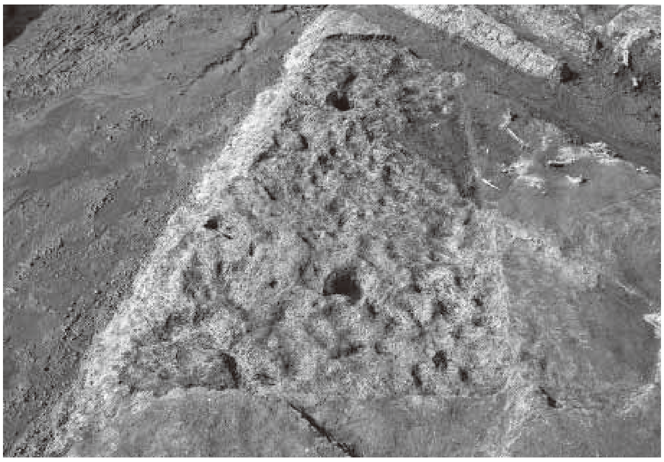
4　３区１号竪穴住居遺物出土状態(東から)

5　３区１号竪穴住居掘り方全景(北東から)

6　３区２号竪穴住居全景(北から)

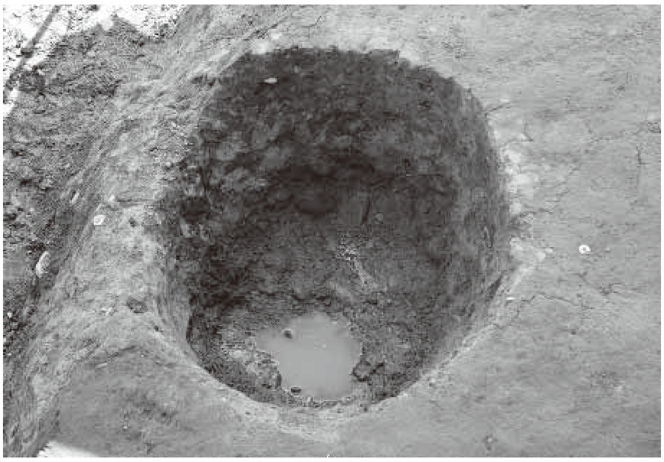


7　３区２号竪穴住居炉全景(東から)



8　３区２号竪穴住居掘り方全景(北から)

1　３区３号竪穴住居全景(南から)


2　３区１号土坑全景(北から)

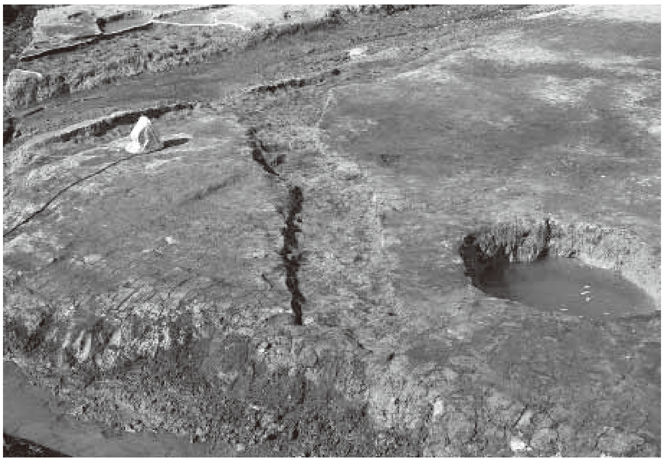
3　３区１号井戸全景(北から)

4　３区１～４・８号溝全景(東から)

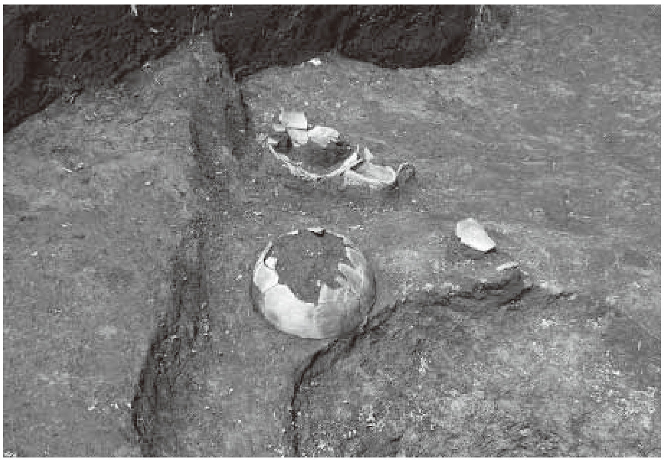
5　３区５号溝全景(南から)

6　３区６・７・９号溝全景(北東から)

7　３区７・９～11号溝全景(南から)


8　３区12号溝全景(南から)

1　4区4号土坑全景(東から)


2　4区1号竪穴住居遺物出土状態(南から)

3　4区1号竪穴住居全景(南から)

4　4区1〜3号竪穴住居遺物出土状態(南から)

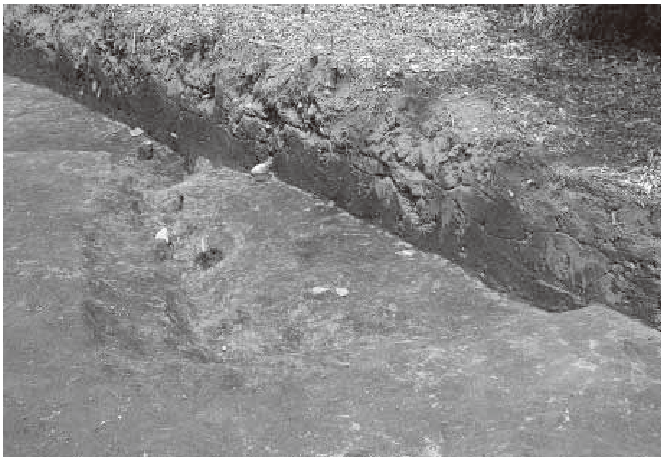
5　4区1号竪穴住居床下土坑断面(東から)

6　4区1〜3号竪穴住居掘り方全景(南から)

7　4区2号竪穴住居遺物出土状態(南から)

8　4区2号竪穴住居全景(南から)

1　4区２号竪穴住居貯蔵穴遺物出土状態(南から)


2　4区３号竪穴住居遺物出土状態(南から)

3　4区４号竪穴住居遺物出土状態(南から)

4　4区４号竪穴住居竈遺物出土状態(南から)

5　4区４号竪穴住居掘り方と遺物出土状態(南から)

6　4区４号竪穴住居掘り方と遺物出土状態(南から)

7　4区４号竪穴住居竈掘り方全景(南から)

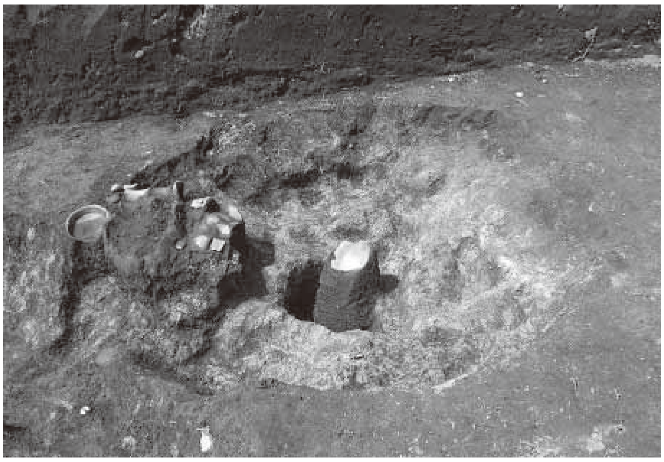
8　4区４号竪穴住居掘り方全景(南から)

1　４区５号竪穴住居遺物出土状態（東から）

2　４区５号竪穴住居と土坑群遺物出土状態（南から）

3　４区５号竪穴住居と土坑群遺物出土状態（東から）

4　４区５号竪穴住居と土坑群遺物出土状態（西から）

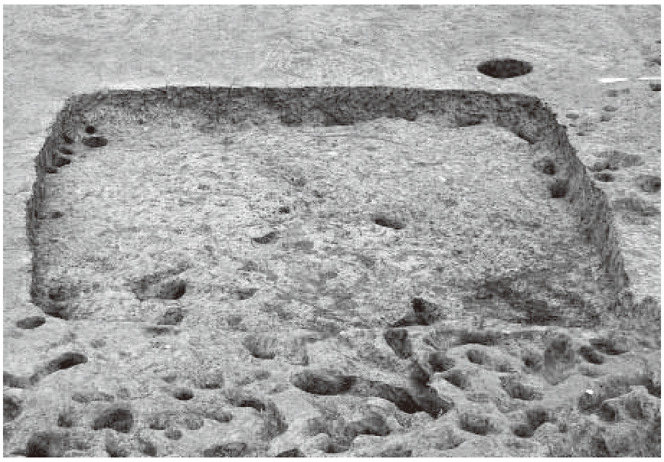


5　４区１号土坑全景（東から）

6　４区２号土坑全景（南から）

7　４区旧石器時代調査坑断面（東から）

8　４区調査区全景と旧石器時代の調査状況（東から）



1　5区1号竪穴住居全景(南から)

2　5区1号竪穴住居竈全景(北西から)

3　5区1号竪穴住居竈掘り方全景(北西から)

4　5区1号竪穴住居遺物出土状態(西から)

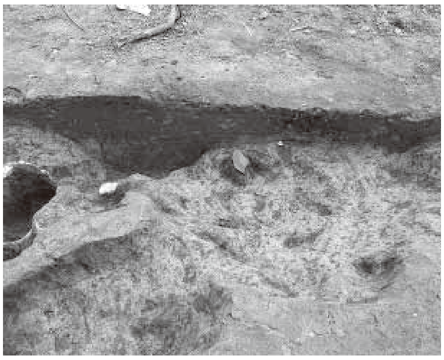
5　5区1号掘立柱建物全景(東から)

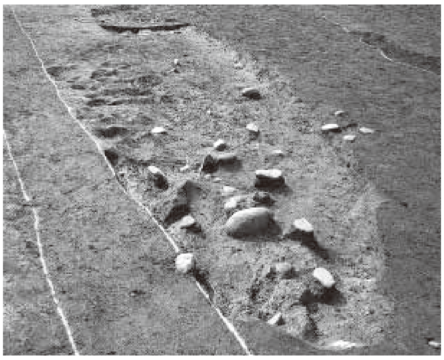
6　5区10号土坑全景(南から)

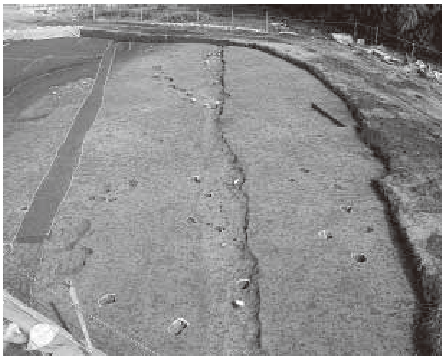
7　5区12号土坑全景(北から)

8　5区2号井戸全景(南西から)

1　５区調査区全景・１号谷地全景（北西から）


2　５区21号土坑遺物出土状態（北から）


3　５区遺物出土状態（北から）


4　５区３号溝全景（南から）

5　５区３号溝北側全景（南から）

6　５区３・４号溝全景（北から）

7　６区調査区全景（南から）

8　６区1・2・3号土坑と１号溝全景（西から）

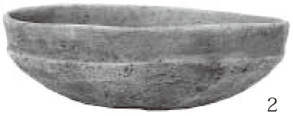
9　６区３号土坑全景（北西から）

10　６区１号溝全景（南西から）

11　５・６区調査区全景（北西から）

12　上根遺跡６区から北側の周辺風景（南から）

1


2

3

4

1区1号竪穴住居出土遺物

2（1/6）

3（1/2）

4（1/2）

1区4号竪穴住居出土遺物

1

2（1/4）

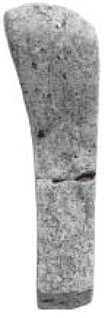
1区11号土坑出土遺物

2

1区3号粘土採掘坑出土遺物

1

1区1号溝出土遺物


1

1区154号ピット出土遺物

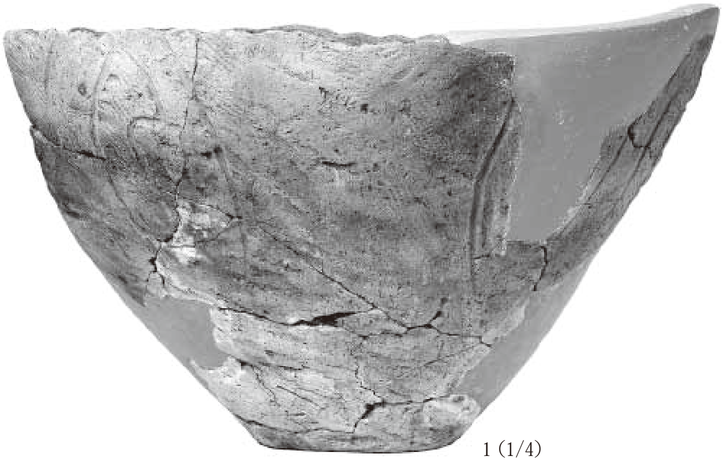
7

4

1区10号溝出土遺物

1（1/1）

1区遺構外の出土遺物


1（1/4）

1区11号土坑出土遺物

2

1

4

3

1区1号竪穴住居出土遺物

1

3

4

2

1区2号竪穴住居出土遺物

2

8

9

1区3号竪穴住居出土遺物（1）

7

10

6

1

3

4

5

11

1区３号竪穴住居出土遺物（２）

2

1区４号竪穴住居出土遺物

2

6

1

4

1区５号竪穴住居出土遺物（１）

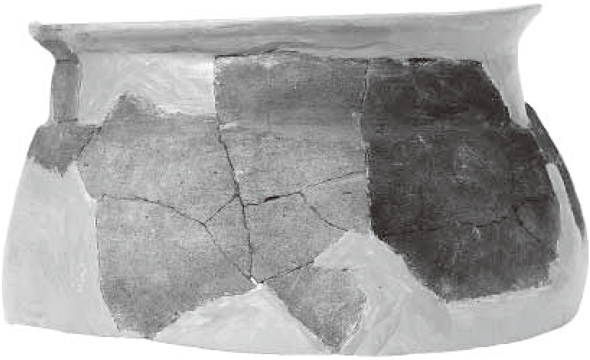
5

1区5号竪穴住居出土遺物（2）

4

1

2


5

7

1区9号竪穴住居出土遺物

2

5（1/2）

1区8号竪穴住居出土遺物

2（1/2）

1区11号竪穴住居出土遺物

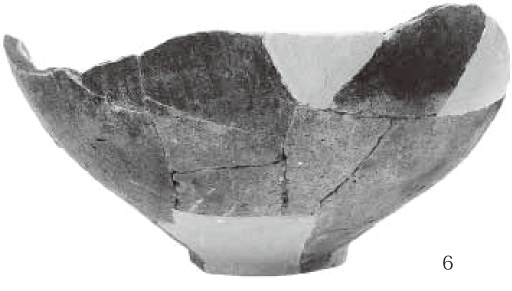
3

1区12号竪穴住居出土遺物

1

1区13号竪穴住居出土遺物

2


6

1区1号竪穴状遺構出土遺物（1）

4

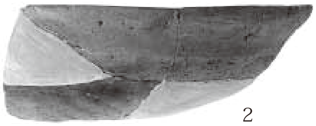
1区1号竪穴状遺構出土遺物（2）

2

5

3

1区2号竪穴状遺構出土遺物



2

3

1区3号竪穴状遺構出土遺物

1

1区1号掘立柱
建物出土遺物

1

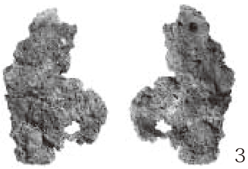
1区3号土坑出土遺物

1

1区7号土坑出土遺物

1

2



3（1/2）

1区1号鍛冶遺構出土遺物

28

29（1/1）

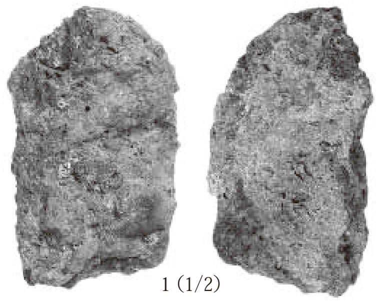
30

1区遺構外の出土遺物

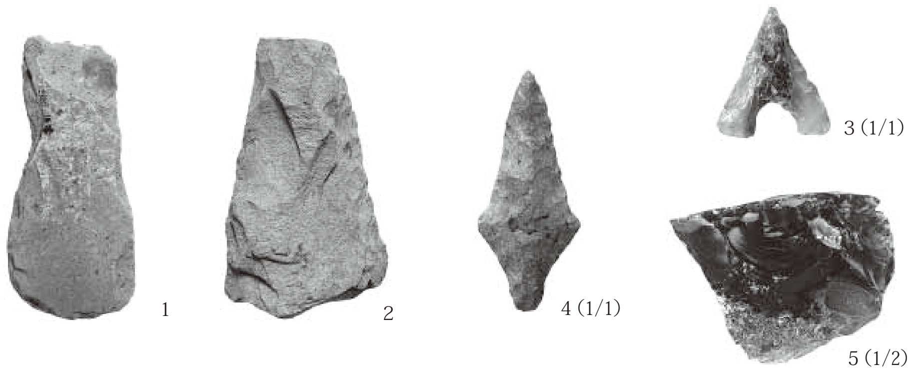
３区１号溝出土遺物

３区８号溝出土遺物

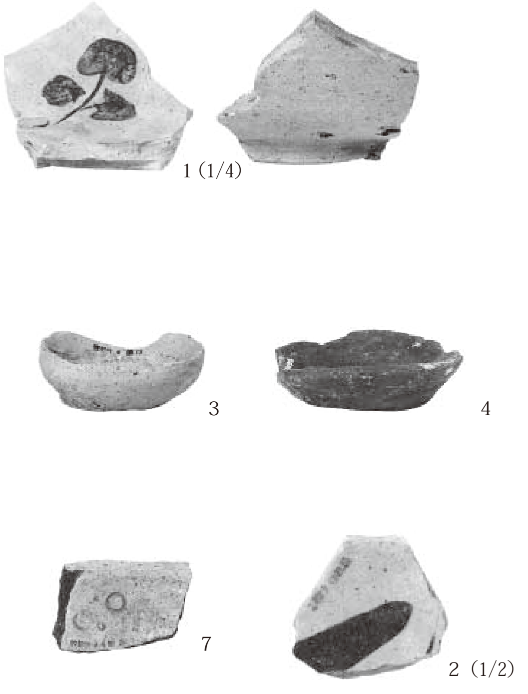
３区16号溝出土遺物



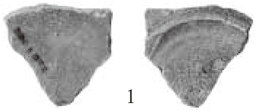
３区１号井戸出土遺物



３区遺構外の出土遺物



４区４号溝出土遺物



４区６号溝出土遺物

４区８号溝出土遺物

４区遺構外の出土遺物

1

1区5号溝出土遺物

1

2区1号竪穴状遺構出土遺物

1

2 (1/6)

3 (1/6)

1 (1/1)

2

1区遺構外の出土遺物

2

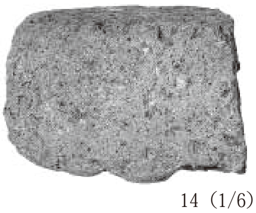
2区1号土坑出土遺物

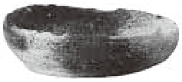
10 (1/6)

2区2号土坑出土遺物

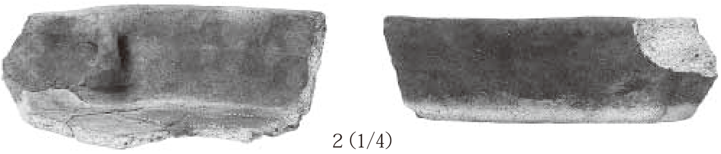
13 (1/6)

11 (1/6)

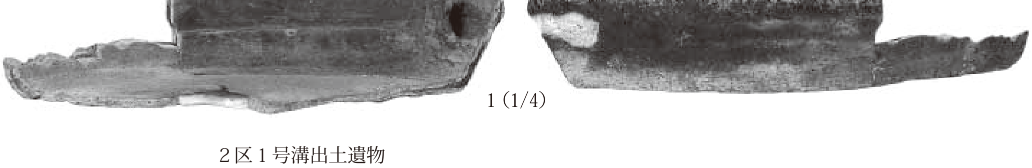

14 (1/6)


7

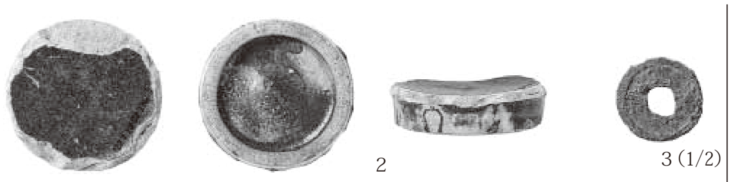
8


2 (1/4)

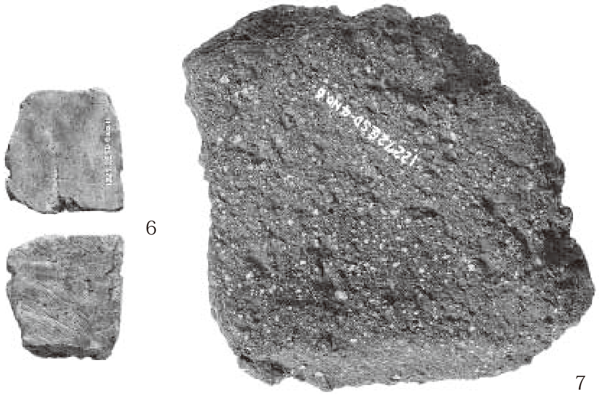
12

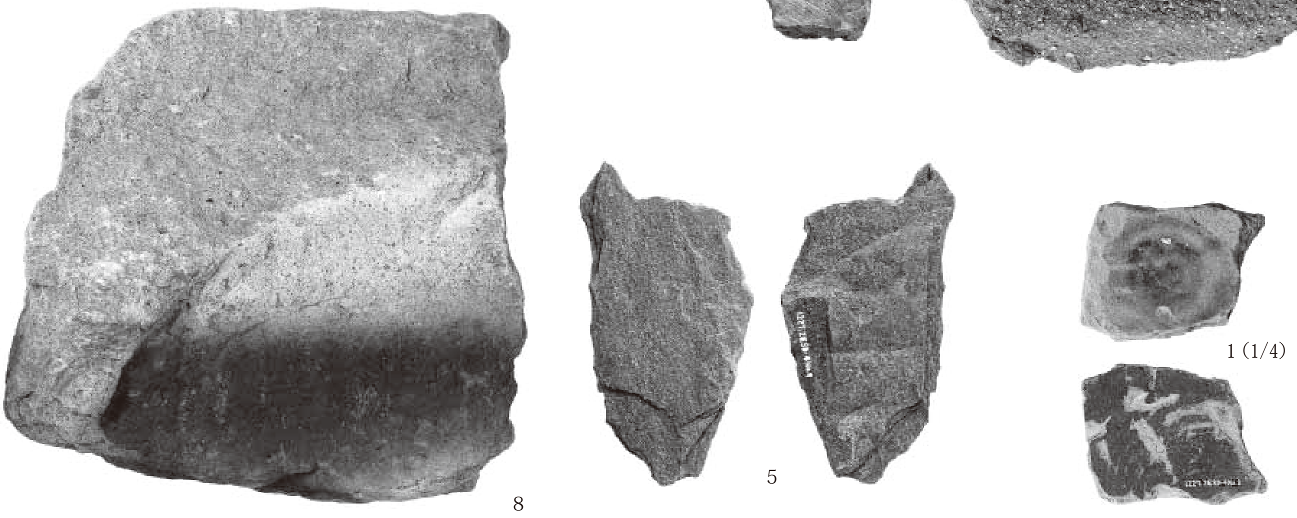

1 (1/4)

2区1号溝出土遺物



2区2号溝出土遺物

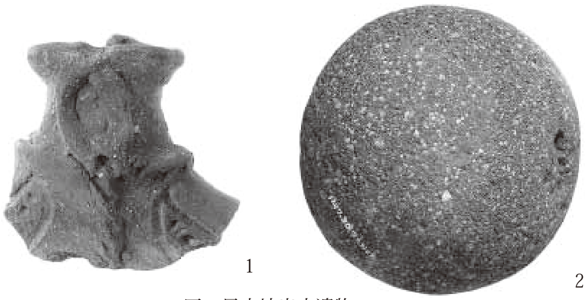




2区4号溝出土遺物

2区遺構外の出土遺物

3区6号土坑出土遺物



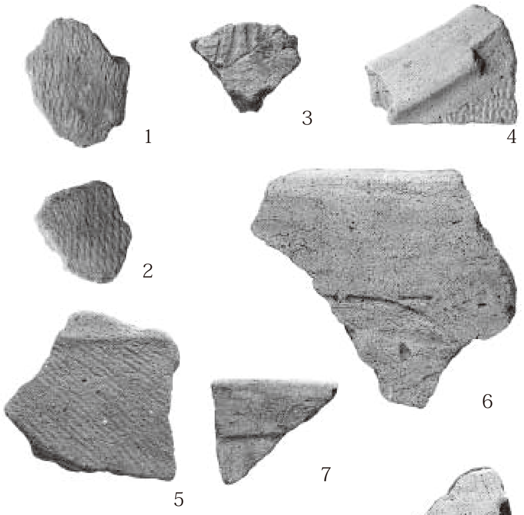
3区7号土坑出土遺物

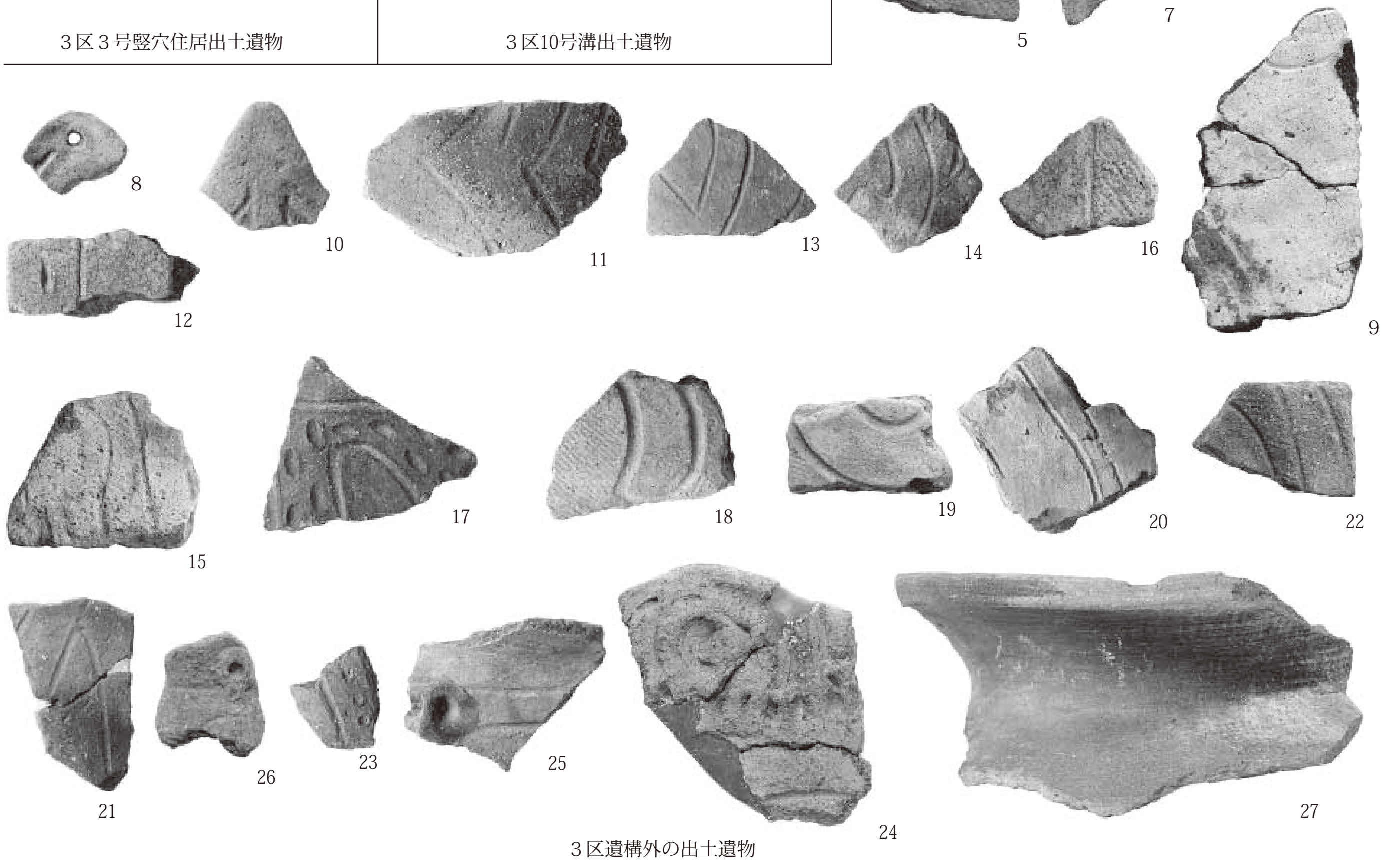
3区1号竪穴住居出土遺物

3区3号竪穴住居出土遺物

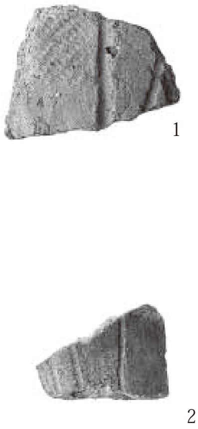
3区6号溝出土遺物

3区10号溝出土遺物





3区遺構外の出土遺物



4区3号土坑出土遺物

4区4号土坑出土遺物

4区1号竪穴住居出土遺物

1

4

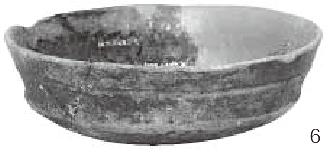
4区2号竪穴住居出土遺物

1

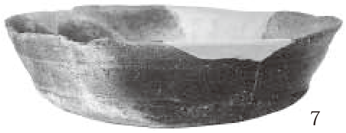
2

4

5


6

12


7

9

17

15

4区4号竪穴住居出土遺物（1）

14

10

11

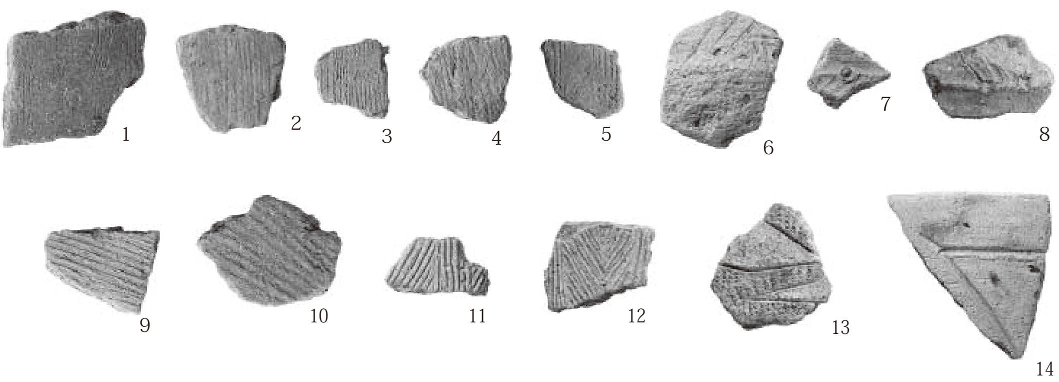
16

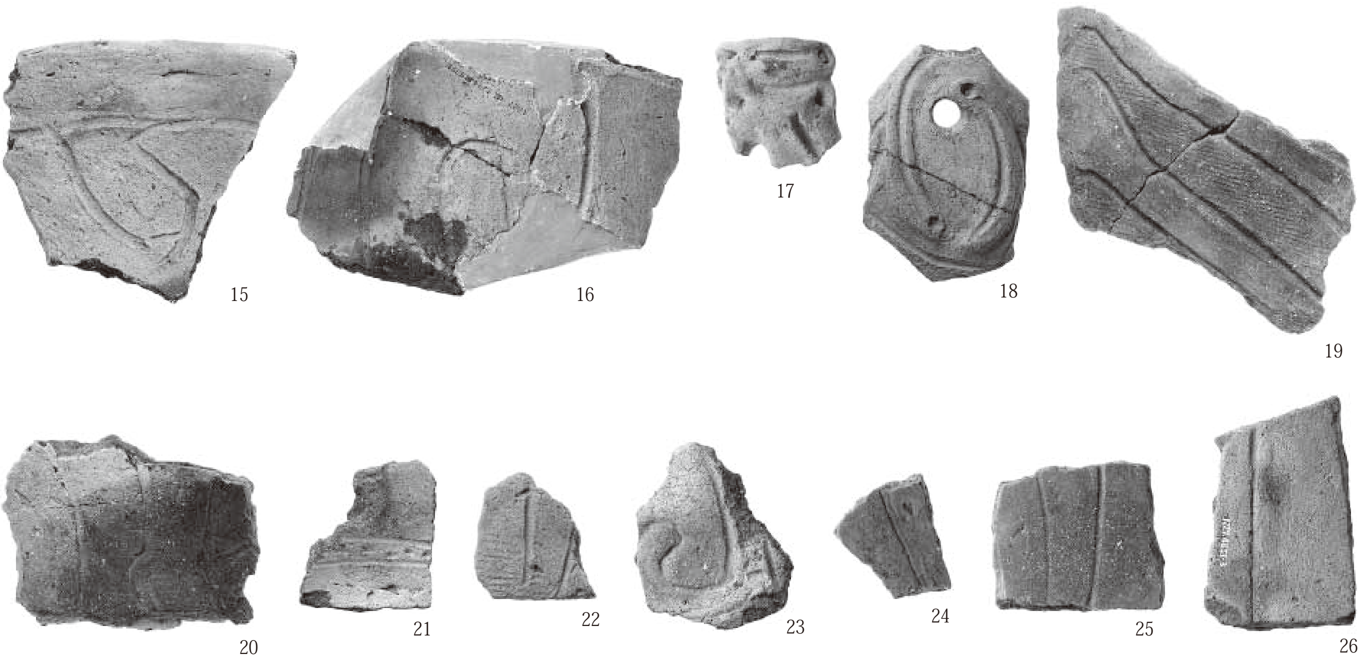
18

4区4号竪穴住居出土遺物（2）

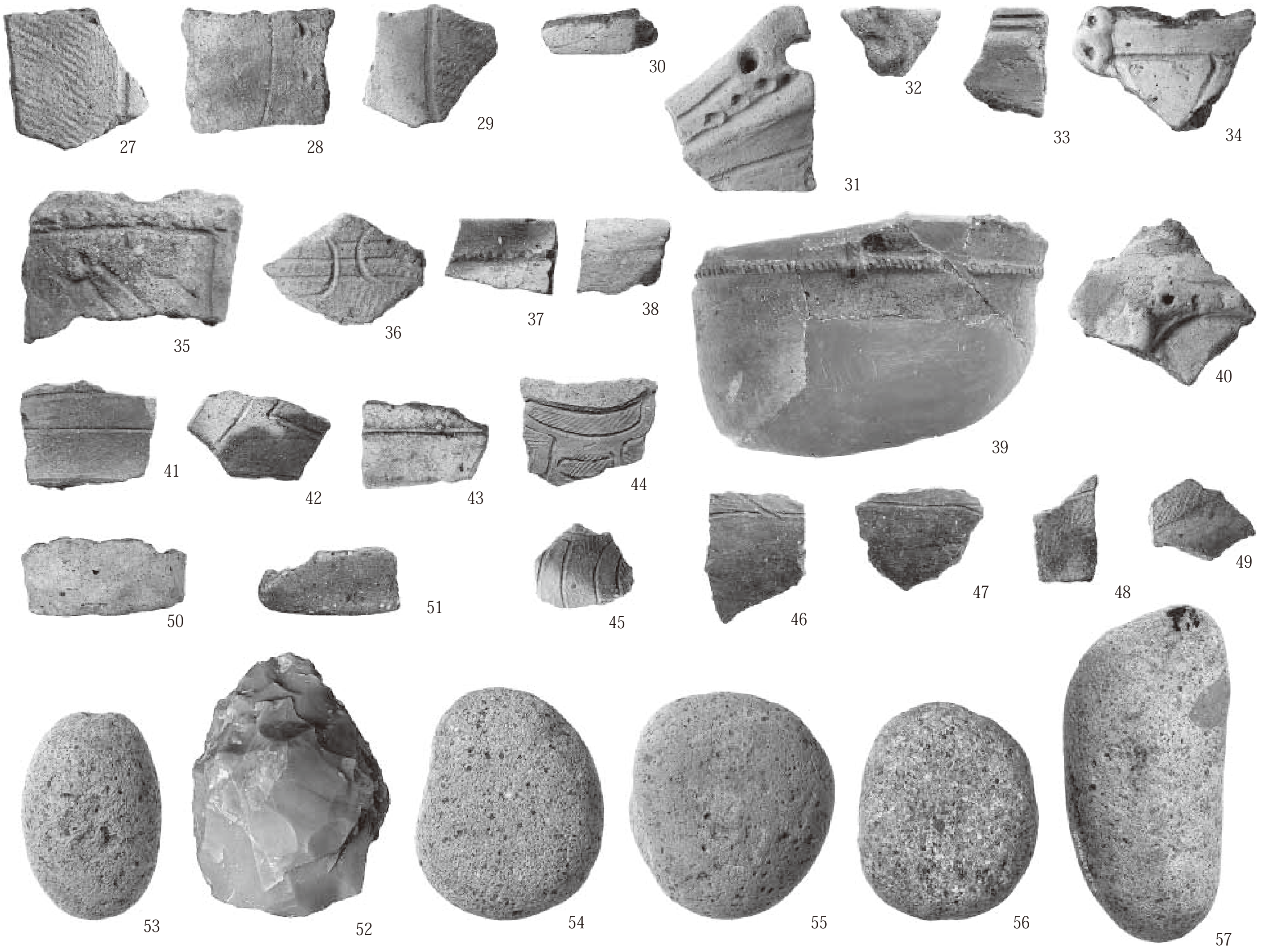
4区1号土坑出土遺物

4区15号ピット出土遺物





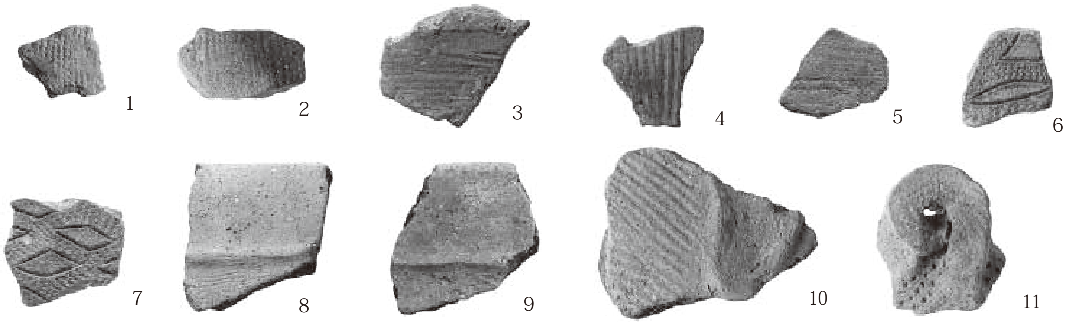
4区遺構外の出土遺物（1）



4区遺構外の出土遺物（２）

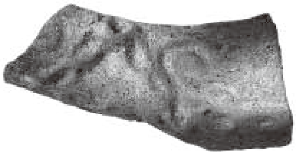
5区３号溝出土遺物

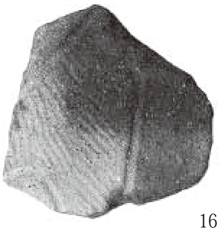
5区４号溝出土遺物



5区遺構外の出土遺物（１）

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

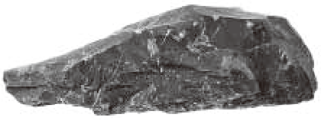
25

26

40

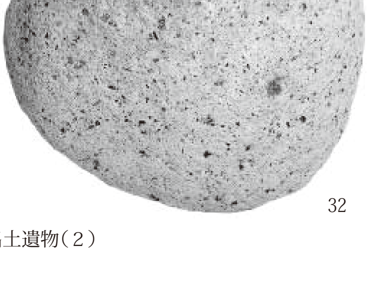
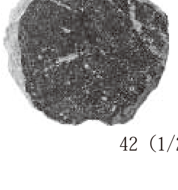
37

27

29（1/1）

30（1/2）

31

28

41

32

42（1/2）

５区遺構外の出土遺物（２）

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	かさまついせき・てんらしちどういせき・かみねいせき
書　名	笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡
副 書 名	(主)太田大間々線関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	542
編 著 者 名	長谷川博幸/宮下 寛
編 集 機 関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発 行 機 関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	2012316
作成法人ID	21005
郵 便 番 号	377-8555
電 話 番 号	0279-52-2511
住　所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	かさまついせき
遺 跡 名	笠松遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしにったこがねいまち
遺 跡 所 在 地	群馬県太田市新田小金井町
市町村コード	10205
遺 跡 番 号	N0030
北緯(日本測地系)	361925
東経(日本測地系)	1391952
北緯(世界測地系)	361937
東経(世界測地系)	1391941
調 査 期 間	20090401-20090731
調 査 面 積	2962
調 査 原 因	道路建設
種　別	集落
主 な 時 代	縄文/古墳/奈良・平安/中近世
遺 跡 概 要	縄文-石器/古墳-竪穴住居２-石器/奈良-竪穴住居１+土坑１+粘土採掘坑１+溝/平安-土坑２+粘土採掘坑１+井戸１/奈良・平安-掘立柱建物４+基壇状遺構１+土坑１+ピット+粘土採掘坑１+溝１/古代-粘土採掘坑２+溝１-土器+瓦+石製品+鉄器/中近世-掘立柱建物2+土坑４+ピット＋溝８-土器+陶磁器/不明-掘立柱建物７+柵列２+土坑21+ピット+溝６
特 記 事 項	区画溝に囲まれた掘立柱建物群、基壇状遺構の調査
要　約	古墳時代から奈良時代の竪穴住居を３軒検出した。溝で区画された掘立柱建物11棟、基壇状遺構１基、粘土採掘坑５基などが検出された。掘立柱建物群は東山道駅路や新田郡衙と関連すると考えられる。
遺跡名ふりがな	てんらしちどういせき
遺 跡 名	天良七堂遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしにったこがねいまち
遺 跡 所 在 地	群馬県太田市新田小金井町
市町村コード	10205
遺 跡 番 号	T0122
北緯(日本測地系)	361944
東経(日本測地系)	1391934
北緯(世界測地系)	361933
東経(世界測地系)	1391946
調 査 期 間	20090401-20090731
調 査 面 積	6164
調 査 原 因	道路建設
種　別	集落
主 な 時 代	縄文/古墳/奈良・平安/中近世
遺 跡 概 要	縄文-竪穴住居１+土坑６＋ピット-土器+石器/古墳-竪穴住居10＋竪穴状遺構２＋土坑２＋溝６＋鍛冶遺構１-土器+石器＋鉄滓/奈良-竪穴住居３+竪穴状遺構１+土坑１/平安-竪穴住居４+土坑１+溝７/奈良・平安-溝１/古代-溝１+谷地１-土器+瓦+石製品+鉄器+鉄滓/中近世-土坑２+ピット＋溝８-土器+陶磁器+石製品/不明-掘立柱建物７+柵列３+土坑62+溝33+井戸１
特 記 事 項	古墳時代中期から平安時代の集落、中世以降の堰の調査。
要　約	縄文時代後期初頭の竪穴住居１軒と中期から後期の土坑が検出された。古墳時代は５世紀から７世紀の竪穴住居等が広範囲に分布し、奈良・平安時代は竪穴住居、掘立柱建物などを検出した。中近世は13世紀以降の遺物を伴う区画溝などが検出された。
遺跡名ふりがな	かみねいせき
遺　跡　名	上根遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしてらいまち
遺 跡 所 在 地	群馬県太田市寺井町
市町村コード	10205
遺 跡 番 号	N0034
北緯(日本測地系)	361917
東経(日本測地系)	1392006
北緯(世界測地系)	361929
東経(世界測地系)	1391955
調 査 期 間	20100701-2010930/20111001-20111031
調 査 面 積	5204
調 査 原 因	道路建設
種　別	集落
主 な 時 代	縄文/古墳/奈良・平安/中近世
遺 跡 概 要	縄文-土坑４-土器+石器/古墳-竪穴住居８＋土坑９＋ピット-土器+石器/奈良・平安-土坑２＋ピット＋溝１+井戸1/古代-竪穴住居１+土坑６+ピット+溝９+井戸１+谷地１-土器/中近世-竪穴状遺構4+土坑５＋ピット＋溝15+掘立柱建物２+橋1＋井戸２-土器+陶磁器+石製品+銭貨+鉄製品/不明-土坑７+ピット+溝１
特 記 事 項	５世紀から７世紀の集落、五輪塔類が出土した中世以降の溝の調査。
要　約	縄文時代後期の土坑、古墳時代は５世紀から７世紀の竪穴住居等が北部の微高地上を中心に検出された。南部の低地から古代の溝を検出した。中近世は掘立柱建物や井戸、馬見岡凝灰岩製火輪を含む五輪塔が出土する土坑や溝が検出された。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第542集

笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡

（主）太田大間々線関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24年(2012)年３月９日　印刷
平成24年(2012)年３月16日　発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
電話(0279)52-2511(代表)
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷／松本印刷工業株式会社